貴人聖域法と紳士諸氏の一幕

valota666

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
貴人聖域法と紳士諸氏の一幕

【Ｎコード】
Ｎ９２３０Ｓ

【作者名】
ｖａｌｏｔａ６６６

【あらすじ】
娼館帰りのの紳士諸氏は財布を狙おうとした孤児を拾った。
さすがにヌイタ後でオイタを致そうと言う訳でもないのだが、仕込んでおけばいろいろ役に立つかなと・・・・・・・・（一部話が違います
基本下品で法律的にというより社会的にだめな登場人物ばかりではありませんが作者は違いますと確認願います。
本当、違うんです・・・・・・・　信じてください（土下座

面と向かって言われたら・・・・・・・
悔しさのあまり酒を飲んでしまいます。
悔しくなくても呑みますけど。

紳士諸氏　夜の街に（前書き）

この話をお読みになられる皆々様方よしなに願います。
この話には下品、残虐、差別表現が使われる予定ですので苦手な方はまわれ右にて他の作者様の作品でお楽しみいただけますようお願い申し上げます。

尚、私は直接打ち込んでおりますので気の向くまま筆の向くままで誤字脱字君が気にする我はせず　の方向でまいりますのでご了承くださいませ。

では、一時の娯楽になれることを願いまして開幕開幕!!

紳士諸氏　夜の街に

金銀錦　つらつら飾り　堪えぬ灯　ゆらゆら踊る
窓辺に侍る　唱姫舞姫　今宵は誰の腕(かいな)で魅せる

乱稚気騒ぎの職人衆は　肩組みながら
初陣飾る少年に　一番槍の名誉を与え
百戦錬磨の宿将相手に　一騎討ち
死屍累々と屍晒し　自身も組討希望する

さぁ、兄弟と杯かわし　今宵は誰と語らうか・・・・・・・・

矢張り町の歓楽街はいいねぇ・・・・・・・・
王宮の酒食(ただめし)もいいけど、肩肘張らずに飲み交わしたり悪酔いしそうな仕事の話をしないで済むのが一番だ。自分で色々回ってみてお気に入りの店を探すのも意外と楽しめる。
友人達と面白い所の情報交換したり連れ立ったりしてみると普段見えないものが見えてきたり、思わぬ人脈(のみともだち)を得たりする。馬鹿話や喧嘩も娯楽としては良いものだ。
さて、今宵はどこで飲んでいくかねぇ……
気が向いたら娼婦の一人か二人でも買ってしっぽりとお楽しみなんて言うのも悪くない、先月は黒髪の東国娘だったし先週か褐色肌の南方娘、今日はどの娘にしようかな……　魔国出身の猫耳娘とか見習いを経て初客取(おぼこちらし)りする子を請けるのも悪くないな・・・・・・

「さぁて、今日はどこにしようかね、兄弟?」

「兄弟言うな！」

「まぁ、そう言わずに護衛官殿。私と貴殿は同じ赤髪姉妹を楽しんだ仲ではないか、云わば兄弟！！同じ穴の狢ではないかね。」

「・・・・・・・・・・あまり兄弟兄弟言っているとどこからか王妹殿下（ヤオイ姫）の耳に入って妄想（ネタ）の餌食にされてしまうぞ。」

「確かにあの方の情報収集力は侮れないからな、趣味限定だけど……悪かった自重する。」

先日、誘われた茶会で聞かされた紅薔薇騎士隊の恋愛事情（ホモネタ）を思い出してげんなりした。彼らも茶会だの舞踏会だの酒会だの参加できるのだし、そこで娘さんの一人や二人捕まえておけばいいのにどうして男同士でなんて・・・・・・・　それは良いけど王妹殿下（ヤオイ姫）に燃料投下するなよ！！　宰相閣下が嘆いていたぞ。

「法務官に護衛官、げんなりする気持ちもわかるが口には出すなよ。一応不敬だ」

「だな、どうして不敬罪なんて制定したんだろうな・・・・・・過去の自分に止めろと声を大にして忠告したい気がする。」

「いや、あの法律自体は悪くない。あれが制定されたおかげで、不敬発言即処刑（ぶれいうち）が無くなって絨毯の染みが落ちないと号泣していた洗濯女から感謝されていたなぁ。」

「洗濯女限定か財務官？　他にも敬語を間違えた職工組合の組合長とかから色々感謝と共にお礼の品（ワイロ）が届いているのを知っておるぞ。」

「あれはワイロではない、そこを勘違いしてもらっては困るぞ護衛官！！ちゃんと職工の組合の方から御国の為に役立ててくださいと渡された物だし、国庫にも計上している。なぁ、法務官。」

「そうそう、護衛官。不敬罪制定に貢献したと一陛下から下賜された金貨（きふきん）で今日の支払いをするつもりなのだが貴殿は自腹でよいかね？」

「ま、まて・・・・・・・　それとは話が別だろう!!」
「高潔な護衛官殿、貴殿はワイロを使って飲み食いするのは騎士道精神から許せないとおっしゃられるのですから今宵は我ら二人で楽しみましょうかね（邪笑」
「そうですな法務官殿、汚濁に塗れた私達官僚は組合（わい）から搾取した金（ろ）で楽しみましょうか（邪笑」
「こら、そうやっているつもりなら貴殿の彼女にばらすぞ法務官!!」
「ふっ！私には彼女なんていない！　何故ならば先日『わたくし、魔国大使の古妖精卿（アールヴ）がいいの』と振られたからさ（血涙」
「・・・・・・・・・・なんか悪いことを聞いたな、今宵は飲もうぞ！　ただし法務官貴殿の金で（ここ重要！）呑んで呑んで心の消毒をしようではないか!!」
「はいはい、二人とも生臭い話や国家機密を路上でばらしてないで店に行くよ!!」
「貴殿が一番生臭くしている気がするが・・・・・・・・・」

こうして、私達は夜の街に呑まれていくのであった・・・・・・・・・

紳士諸氏　夜の街に（後書き）

よく考えたら、登場人物の名前考えていない。

まぁ、いいか

紳士諸氏　初陣に立ち会う（前書き）

まぁ、馬鹿な話です。
あらすじ、紳士諸氏は酒場に向かいました。

紳士諸氏　初陣に立ち会う

さて、適当に入ったがよいがどこも混んでいて相席するしかないみたいですな。
給仕の女性も私達のような貴族を相席させてよいものかどうか迷っているし、かといって楽しんでいる客のどれを追い出して席をつくるかなんて言うのもかわいそうと思っているのだろう・・・・・・・・・悩んでいるようである。

そんな雰囲気で周りの客も居心地悪そうにしている。
ちょいと可哀想になって他の店に行く旨を言おうとした時

「おぅい！　財務官様に法務官様に護衛の騎士様じゃねぇか！　こっちがすぐ開くからこっち来ないかい！！」

あれは王宮に絨毯を納めている職工の親方じゃないか、他にも何人か職人達がいて皆赤い顔をしてめいめいに騒いでいる。
給仕の女性も貴族様を無碍にしないで済んだとホッとしている様子、私達は職人達の席に向かい空いている椅子を引き寄せて座る。

「旦那方、いつもうちの絨毯を御贔屓にして頂き有難う御座います。今宵のこの一杯だけは我らの感謝としてお受け取りください。」

そんな何かやっていたかね？
「いえいえ、財務官様はうちの絨毯を御註文して頂いてますし、法務官様は先日北限国境伯家と支払いでもめた時口利きして頂きましたお礼でございます。」
「某は？」
「騎士様は……　まぁ、うちの絨毯の注文して頂く大元というこ

とで・・・・・・・・・・・・」
「親方、大元って？」
「そりゃぁ、まぁ・・・・・・・」

そりゃ、気持ちよく飲食しているときに人体を一刀両断して血みどろの内臓でんでろりんな話なんかしたくないよなぁ……　その話は置いといて・・・・・・・・・・・・
「親方、この御方が絨毯に染みつけまくっている護衛官様ですかぁ？」
「そうそう、この御方がいるお陰で俺達に大口の注文が来るんだぞ！ちゃんと感謝しろよ！！」
「「はい！親方！！　護衛官様いつもいつもありがとうございますっ！！」」
「まてぃ！！　その注文の陰にどんだけ・・・・・・・こっちが費用捻出に苦労していると思っているんだ！」
「そういう問題じゃないだろう！財務官！！　どんだけ人死に出せばいいんだとかそっちが問題だろう！！」

「まぁまぁ、酒が来ましたし乾杯いたしましょうか。」
「そうだな、ここはこの出会いと皆の健康を祝して乾杯といたそうか。」
「ですなぁ、騎士様の言う通りかんぺぇすべぇ！！」

なんか出来上がっているのがいるけど・・・・・・・・・・・・

「「「　乾杯っ！！　」」」

「処で給仕（ごふじん）の女性、この酒場にいる者達に一杯ずつ振る舞って国王陛下の健康を祝したいのだが頼まれてくれるか？」
「はいよ、貴族の旦那！」

ひのふのみ……だいたい２０人弱か、少々痛いが貴族たるもの奢られてばかりというのは良くないしな、それこそ返杯と言って返そうとするとこの親方の性格からして機嫌損ねるから名目だけでもつけとかないとな・・・・・・・・・・・・・・・

ついでに貴族が同席していると恐縮している連中にも楽しんでもらわんと・・・・・・

民草の楽しみは我ら貴族の喜びだしな（建前）

「陛下をだしにしてないか？法務官？」

「まさか、そんなことはないですよ。私は陛下から下賜（褒賞）された金貨を下々に還元して喜びを分かち合いたいだけですよ。」

「そうか？」

陛下の健康を乾杯した後、客たちも銘々に礼を云って酒場の喧騒は戻って行った。

料理が届くまでの間、職人衆の料理をつまみに杯を交わしている。

その分こっちもいろいろ注文しているからそれを摘まんでもらえば良いか。

そんなこんなしているうちにこっちの料理も届き、職人衆に料理を進めながら楽しく歓談する。

「そういや、親方達はどうしてここに？」

「そりゃぁ、王宮の仕事も一息ついたし、小僧っ子が見習いから職人になった祝いも兼ねて一杯やろうって話よ。」

「ほうほう、少年後でお前の作品を見させてもらうぞ！」

「はいっ！」

緊張の余り赤青真白と色々な変化を見せる少年、初々しくと面白いなぁ・・・・・・（笑）

「・・・・・・・・その後にお楽しみってやつはどうなんだい？（ニヤニヤ」

「俺や職人頭みたいな年寄り連中はともかく若いのは」

「そんなこと言って親方が朝帰りしておかみさんに平謝りしていたのは先週だったじゃないかい？」

「おれは三日前だって聞いていたぞ。」

「ば、ばか！そんな下世話な話を貴族様の前でするんじゃない！！」

「どこの店のどんな子だったのかな？親方のお相手は」

「東の花街のモガモガ・・・・・・・」

「そ、そんなことはどうでもいいじゃないですか！！　馬鹿どもがばらすんじゃない！！」

ごつん！！と見事な音をたてて親方の拳固が暴露（ばかもん）した若職人どもに振り落とされる。頭を抱えて痛いと文句を言う若職人どもに笑う周囲。

どうせ、親方も行くんだろうなとニヤニヤしていると震えている少年が一人。

「少年、酒が過ぎているんじゃないか？」

「は、はい！！　だ、大丈夫です！！」

「なぁに、少年はこれからの初陣に武者ぶるいしているんでさぁ！！」

復活した若職人（ばかもん）の一人が説明してくる。

「初陣かあれは某が１７の時、西域の小領主同士の揉め事で・・・・

・・・・・・」

「護衛官、その初陣は違う!!　何でも血と臓物の話に持って行くんじゃない!!」

「初陣ねぇ……（ニヤニヤ」

「財務官様、判るでしょう?こう緊張してドッキドキで・・・・・・・・」

「うむ、緊張は判るぞ少年!　でも女性というものは良いものだぞ!」

「財務官様、おからかいが過ぎますよ!!べ、別にそんなんじゃ・・・・・・・」

「あんまり飲みすぎるなよ、初めての時は緊張して立たなくなることもあるが結構飲みすぎてというのが原因の場合もあるからな。」

「な、なにを・・・・・・・」

赤面してる赤面してる・・・・・・・・・・・・

いい酒の肴だなぁ・・・・・・・

あんまりからかい過ぎても可哀想だしこの位にしてやるのも情けというものか（邪笑

給仕の女性を呼んで、さらに店の皆に一杯ずつ酒を振舞うとするか、そうだなぁ・・・少年の初陣を祝ってとでもするか（ニヤニヤ

「あんまり少年を弄るんじゃないよ!!」

注文を受けつつ釘をさすのを忘れない給仕の女性、でも民草の幸を祝うのも貴族の喜び（建前）

出来上がった客達に酒が振る舞われ乾杯の音頭をとる!!

「さぁ、酒場の衆!この一杯は我がこの少年の職人になった祝いとして振る舞う!!　さぁ、皆の者少年の腕と今夜の初陣に乾杯!!」

「「「「「　乾杯！！　」」」」」

酔っ払いどもは少年という最高の肴を得てさらに盛り上がる盛り上がる！！
いらん忠告やら武勇伝、あの店のどの娘が良いとか云々

我ら貴族連中もちょいと隅で彼らに紛れつつ民草の楽しげなる姿を肴に杯を酌み交わす。
ちなみに給仕の女性に怒られたのはお約束（苦笑）

そんなこんなしているうちに職人達が花街に向かうようだ、店を出ようとする。
行く店を聞いてみると中の下というか下の上位の店、彼らの行きつけらしい。
ちょいと少年に対して祝ってやるかな、勿論少年を弄るためじゃないよ（白々しく

「馬鹿野郎！！　お前ら王宮御用達だろう！！　ちゃんと上質を知るのも職人の学のうちだ！！　半端な店で初陣を学ばせるんじゃない！！」

ノリで若職人（ばかもん）の一人を軽く殴りながら（若職人はノリで思い切り吹っ飛ばされたふりをする）

「これからこの少年への祝いとして上質という経験を送ろう！！東花街の性愛神殿に出陣するぞ！！」

「「おおっ！！」」

「ああ、そうそう、君たちは自腹で行ってね。少年の分くらい足せばいけるでしょう（笑）」
皆落胆してずっこけた・・・・・・・・・・
あたりまえだ、全員分は流石に面倒見切れるか!!
って、言うか財務官に護衛官お前らも便乗するのではない!!

さて出陣しようとする我々の前に酒場の主人が一杯の飲み物を乗った盆を手に我々の前に跪く。
「私より初陣を飾る少年への贐でございます。」

杯に注がれた飲み物は年月を経て香味を増した果実酒に各種の香草、薬草を混ぜた逸品!!
精力剤としても良いが、その真価はその香り!!
飲んだ後の口臭とか体臭を抑える極上の薬酒!!

まず、町場の酒場ではお目にかかることはなく価格自体も銀貨数枚と店からの好意で出すには過ぎた逸品!!
酒場の主人の心意気を見た!!
私は思わず親指を立ててにやりとすると酒場の主人はにやりと返す。

「い、いいんですか?」
「主人の心意気だ、素直に受け取りなさい。」
「はい、ありがとうございます!!」

職人達のいいなぁとか俺達の時はとか言う声の聞こえる中、少年は一息に杯を干す。
盃を返した少年は一歩前に出る決意に満ちた表情になる。
いい顔だ!!　これならばこの一戦良き戦果を挙げられよう!!

護衛官は抜剣して
「各々方、いざ出陣!!　我らが少年の初陣を見事飾り立てようぞ!!」

酔っているなぁ・・・・・いろいろな意味で（笑）
それに乗って鬨の声を挙げる職人達、酒場の中では万歳の連呼が・・・・・・・

あっ、厨房の中で酒場の主人が給仕女にお盆で殴られてる・・・・・・・・・・・
見なかったことにしよう・・・・・・・・・・・

心付け込みで多めに金を払った私も彼らに合流し、王国精鋭部隊の出陣行進もかくやという勇ましさで少年の初陣につき従うのであった。

あと、護衛官街中でのむやみやたらな抜剣は一応駄目なんだからな……

紳士諸氏　初陣に立ち会う（後書き）

直接打ちの気の向くママは結構時間がかかったり誤字脱字が多いなぁ・・・・・

下書きする気力もないけど。

紳士諸氏　朝帰り（前書き）

あらすじ、少年は初陣を果たし大人へと駆け上がります。

紳士諸氏　朝帰り

酒場で飲んだ後、出来上がった酔っ払い達と給仕の女性に殴られている酒場の主人を置いて我等貴族官僚、絨毯職人連合部隊は性愛神殿神官戦士団と交戦!!

血と汗と涙やらその他諸々の混じった大激戦を行い、少年の初陣は無事果たされた・・・・・

職人達も錬度の高い歴戦の兵を相手にして自らの未熟を知り、少年は初陣を美しき女神官の胸を借りて（色々な意味で）討ち果たすまでは行かなかったが十分な戦果を挙げた。

己が未熟を知り更に高みに臨もうとする職人達はこの一戦で成長するだろう。

何の成長かは知ったことではないが・・・・・

職人の一人は若衆相手に交戦していたが見なかったことにしよう。

好みはそれぞれだしな・・・・・・・・・　せめて王妹殿下にばれないようにして貰えれば・・・・・・

ばれるとこっちまで被害が及ぶ・・・・・・・・・・・・・・

そんなこんなで夜も明けて太陽が黄色い等と騒ぐ職人達と共に朝の市場をふらつくのであった。

「さて、朝飯何にするかな?」

「ふーむ、今から王城の食堂行くにも面倒だし（いるのばれたら仕

事押し付けられる）」

「市場で適当に済ませるか、色々良い匂いさせているし」

「貴族の旦那、あんたらも市場で食べるんかねぇ・・・・・」

「ああ、別にいつも贅沢なものばかり食うわけでもないしな。それに貴族は従軍義務あるから携帯行軍食（まずいめし）で済ませる訓練も付けているぞ。」

「携帯（あれ）行軍食ですませるんですかい？わしらも食べたくないのに！！」

確かにあれはおいしくないからなぁ・・・・・・　好んで食べるもんでもないだろう。

それに市場は朝早い労働者や旅人等の為の飯屋や屋台もあるから今日はそれにするか・・・・・・・

薄焼き麺麭に肉やら野菜を挟んだものと大麦の重湯で朝食を済ませる私に、牛骨のスープにゆでた雑穀を加えている財務官、乳酪をたっぷり乗っけて焼き色をつけた麺麭粥と出し殻の肉塊を葉大蒜と塩と魚醤で味付けながら迎え酒として林檎酒を飲む護衛官。

職人衆もそれぞれに雑穀粥だの牛骨スープだのお腹にたまるものを頼んでいるが酒を頼むのは一人もいない。

護衛官お前食い過ぎだ！！

それに朝酒なんて・・・・・・・・・・

ある程度満腹したところで、今日も仕事があるという財務官と別れ絨毯職人の工房へと向かう。

少年の作品を見てみる約束をしたのもあるし、親方にどうせなら工房で茶の一服でもと招待されたので休日で特にやることのない私は護衛官と連れ立っていくことにしたのである。

親方としては商談の振りをして我々を招待し朝帰りの追及を逃れようとしているのだろうな・・・・・
どうせ、若職人達から話が流れておかみに怒られるのだろうけどそこまでは責任持てない。

歩くこと四半時ほど工房についた我々を出迎えたのが角を隠そうともしないおかみやら女衆の一群、我々をだしにして逃げたくなる気持ちは判る。
でもな、朝も遅くに香のにおいを漂わせて如何にも遊んできましたという風情で帰れば言い逃れはできないと思うのだが・・・・・・・・

客として来た我ら二人と少年は工房の応接部分で作品を見て雑談しているが親方達は女衆に奥に連れて行かれて怒られている。すまん、貴族とは言え我々にはあれを止める力もない・・・・・・
若干少年も引いていたが次は自分の番と覚悟を決めているのだろう、哀れな・・・

少年に被害が及ばないよう（無理だが）いくつかの商品を予約した後、我等二人は逃げるように工房を後にした。

今日は実家に帰るか、寮に帰るか迷うところだなと二人で笑っているといきなり飛び出してきた子供が護衛官にぶつかる！
そのままかけ逃げようとする子供の襟首を捕まえる。
護衛官はいきなりのことで対応できなかったが子供を見て、腰の袋

が子供の手にあるのを確認してスリに遭ったことに気がついたらしい・・・・・・・・

さて、どうするかな（邪笑

紳士諸氏　朝帰り（後書き）

朝帰りはするなら連絡しておこうという話でしょうか（笑）
正座に土下座で済めば御の字、いろいろ買わされる約束なんかさせられた日には涙が出てきます。

登場人物の名前どうするべかな？

貴人聖域法と孤児（前書き）

あらすじ　職人達を見捨てたらスリを捕まえた。

貴人聖域法と孤児

護衛官にスリを働いていた子供を捕まえた。己の置かれた現状を理解するにつれ護衛官は子供に対して怒りを露わにする。
怒る気持ちは理解できなくはないが武人ならばスリくらい捕まえろとは言わんが隙を見せないで襲われないようにしてほしい・・・・・・

捕まえた子供を見る、年齢は十に満たないくらいか？　薄汚れた黒髪の餓鬼でたぶん男だろう。
栄養状態はあまりよくないらしく手足が細い・・・・・・・・
裏で大人が手を引いているスリか？　となると大人を捕まえないと意味がないだろうな・・・・・・・・

兎も角、護衛官の馬鹿をなだめないとか
「この餓鬼！！某のモノを狙ったからにはそれなりの覚悟ができているんだろうな！！」
「おぅ！逃げられなかったんは残念だけどカマでも何でも掘るなり、ころすなりしやがれ！！」
「ならば望み通り殺してやろうが、一思いに死ねると思うなよ！」
「なんだったらこの護衛の騎士様はご主人様に手を煩わせてスリを捕まえるまで気が付かなかったマヌケ野郎だって死ぬまで喚いてやる！この見せ掛け野郎！！」

嗚呼、煩い・・・・・・・
口汚く罵り合う護衛官（バカとガキ）と子供に頭が痛くなってくる。
護衛官、貴殿は仮にも王室の守護者だろう・・・・・もう少し頭を使ってしゃべってくれ・・・・

だんだんと人が集まってきたし少し黙らせるか。

「少し黙ってくれないかな？　この案件は王室法務官の私が預かる。王室護衛官殿、貴殿の失態を報告せねばなるまい。そして子供、この事件は王室役職に連なる者に対するものとして応対する。最悪反逆罪として類縁の者も処罰の対象になる覚悟なされよ！！」

「「えっ！！」」

「少なくとも王室護衛官たる貴殿はたかが子供に油断なんて失態は十分処罰の対象だぞ！」

「ちょ、まて！！某と貴様は友人だろう！同門の兄弟分を見捨てるというのか？」

「断腸の思いだが仕方あるまい。私は法と王室に剣を預けているのだから・・・・・・・　勿論、兄弟弟子の貴殿を売る羽目となる私もそれなりの誠意を見せねばなるまい、剣の師に対して利き腕の腱を切るくらいで許して貰えれば良いが・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そして、子供！我等の身分を分って事に及んだのだろうな？　おのぼりさんの田舎男爵のマヌケな従者ではなく、王室護衛官で王宮士爵だ。傍流であるが王室の血門である。そして私は王室法務官、血筋的には大したことはないが守護辺境伯の三男坊であり王宮男爵位を戴いている。我ら二人に対して狼藉を働くということは王室にたてつく反逆者と言う事で血脈、人脈共々累を及ぼす事を理解できるだろうな！！」

げっ！王室付処刑専門護衛官かよ！！　とか　この餓鬼終わったな！　とか聞こえたのは気にしない！

って、言うか護衛官貴殿の噂尾びれつきすぎ！！

そんな周りの声を聴いて

「お、おいらはいいから他のみんなを勘弁してくれよ!!」
「無理だろうな、子供の君に対しては保護責任として保護者にもれなく刑罰が降るし、そもそも王室役職に対する犯罪は王の行為に対する反逆とみなされることもあるから。よくて追放か労役、拷問の末に死罪というのもよくある判決だな。」

あっ、子供が泣き出した・・・・・・・・・・

怒りが冷め始めた護衛官、泣いている子供をみてうろたえている・・・・・・・

二三発殴って済まそうとしたならばそれでよかったが剣を抜きかけていた時点で貴殿を擁護するつもりはなくなったよ。

薬が効きすぎたかな?
後は背後関係でもあればそいつを捕えるなりしておけばよいだろう・・・・・・・

なんて考えていると
「申し訳ありません、貴族様!! 私の弟が何かしでかしたのでしょうか? 私の身に何がありましても構いませんので弟だけは弟だけは・・・・・・・・・」
泣きながらしがみついてくる娘さん。

まいったな、どこか静かな場所に身を移すか・・・・・・・・・・

護衛官　貸一つな!!

貴人聖域法と孤児姉弟（前書き）

あらすじ　スリを捕まえたら、姉が友釣りされた。

「私の身で済む事でしたら幾らでも何をされても構いませんので弟だけは・・・・・・・」
「ねーちゃんは関係ないから!!　悪いのはおいらだし・・・・・・・・殺すなりカマ掘るなりすればいいだろ!!」

さて、これはどう収拾つけようかな?
この姉を自称する娘、どう見ても黒髪の子供と似てないし引き取り手という可能性も無きにしも非ず。
でも、子供がかばう様子からして親しい関係と言う事は間違いない。
二人から詰め寄られておろおろする護衛官、まわりから
「あの騎士様、粗相した姉弟をドンブリで頂くつもりよ!」
「まぁ・・・・・」
とか
「子供と娘が必死に謝っているのに殺すだの一族殲滅だの脅しているよ、最低だよなぁ・・・・・・」
とか聞こえてくる・・・・・・・・・

取りあえず、どこかで話を聞きますか・・・・・・・・・
そんなこんなで衛士がきて話を聞かせてもらえませんかと……

仕方ない、行きますか・・・・・・・・・
護衛官お前もくるんだよ!!逃げようとするんじゃない!!
「ま、まて・・・・某まで連れてかれたら・・・」
あきらめろ!!

ところ変わって衛士の詰所。
赫赫云々（かくかくしかじか）と説明をしてこちらの身分を示したら、納得はしてもらえた。
一応上に話は行くらしい、仕方ないね。
別に出世はするつもりはないし構わないけど・・・・・・・・・・・・
護衛官の方は上に話が行くらしいことでこの餓鬼とか言い始めるし
危ないねぇ・・・・・
そりゃ護衛官から近衛将校になりたいというのが目標みたいだったからねぇ・・・・・・
そんな護衛官の様子に衛士達も貴族様に逆らうのかとか困った様子。
衛士の仕事を邪魔する貴族がどこにいる！！
あっ、結構いたなぁ……　あそこの子爵とか男爵とか・・・・・・・・・・
護衛官の方は頭が冷えれば許して呉れるだろうし手助けするか・・・・
「そこの自称姉弟、提案があるのだが貴人聖域（アジール）法を受け入れるか？
刑を受けるにしろ、謝罪をするなりにしろ、この護衛官の頭に血が上っている限り安全ではないぞ。多少制約があるが私の力を及ぶ限り庇護して公平に扱うとしよう。」
「おい！　犯罪者をかばうのか！」
「法務官様、正気ですか！！」

衛士や護衛官は止めるのだがどう考えてもスリの未遂で血を見るのは宜しくない。
まぁ、犯罪の根があるのならばそれを断つのに協力はするが矯正できるならば復帰してもらいたいし、どう考えても憂さ晴らしだから止めないとな。

「で、受け入れるか？」
「はい……」
「・・・・・・・・・うん。」

「宜しい！　我、王室法務官の名の元に汝等姉弟を貴人聖域法（アジール）による庇護を与える。我が力の及ぶ限りにおいて公正と正義を確約しよう。　汝等、我が眷属として庇護に入り仕えること誓うか？」
「「・・・・・・・・はい」」
「貴人聖域法（アジール）はこれにより成立する。証人はここにいた護衛官と衛士達だ。我が眷属として庇護下にいる間働いてもらうが、無理なことは強制するつもりはない。まずは事情を聞かせてもらうことからかな？」

貴人聖域法と孤児姉弟（後書き）

やっと5話目にして題目の貴人聖域法（アジール）が出せた（笑）

しかし、登場人物の名前が出てこないけどどうしたものだろう

貴人聖域法と衛士その他（前書き）

あらすじ、スリの姉弟を庇護下に置く法務官彼の名前はいつ決まるのか？

貴人聖域法と衛士その他

「護衛官、貴殿がこの姉弟に手を出すのならば兄弟弟子だからと言って手加減はできないからね。」
「しかたあるまい、でも背後関係だけは聞かせてもらう！」
「わかった・・・・・・・・・　これは貸だからな！」
「なっ！」
「子供に不覚を取って逆上、未遂とはいえ犯罪証人の抹殺とかしなくて済んだんだからな！」

「あのー　法務官様？　この姉弟の取り調べしてよろしいですか？」
私の庇護下にいるから許可なく取り調べができないわけではないが、逆らいづらいんだな。
衛士達に悪いことしたな、後で差し入れの一つもしておかないとな。
名目は慰問とでもしておくか・・・・・・・・

で、話を聞いてみると
自称姉弟は近くの孤児院の出身で姉の方は卒院して自活していて、弟の方がまだ在院中。
あまりにひもじく、院にいる弟妹達に何か食わせてやりたいと突発的に犯行に及んだと……
身元の方も衛士達の中に顔を覚えている者がいてあっさり判った。
悪いことをする子じゃないと衛士の方から保障されて安心した。

「護衛の騎士様ごめんなさい。」

これで子供にスリをさせる大人がいたりとかでないことに、これな

らばしばらくこっちで反省がてら預かれば何とかなるか・・・・・・

護衛官の方もひもじいとか弟妹達のためにやってしまったと聞いて、感涙しつつ掏られようとした腰の袋を押し付ける。それ、銀貨とか結構入っていなかったか？

「構わん！弱者への庇護こそ貴族たる者の嗜み！！　それに某の不覚がこのような事態を招いたんだ授業料と思えばよろしい。」

馬鹿が馬鹿がいるよ！　師匠、どうしてこの護衛官（ばか）に自制心と知恵を教え込まなかったのですか？

ムリだよー　と遠く師匠の声がした気がする。
でも納得する私がいるのは否定しない。

ここにいる衛士達が報告書作るだろうから、対外的にはぶつかった子供に服とかを汚されて逆上した護衛官から一時的に保護するために貴人（アジール）聖域法で庇護下に置いたことにしてもらおうか。
王室付の官僚相手への犯罪と比べれば子供の粗相ならば護衛官自体も始末書程度で済むだろうし子供にも傷がつかない・・・・・・・・

法務官だけど法がすべてとは思ってないよ。誰も傷つかないならば真実をぼかしたって良いじゃないのかなと・・・・・・・・・・　ばれたら失職だけでは済まないだろうけど。ばれなければ良い！！

孤児院の方にはこちらで一時的に姉弟を引き取っている旨を伝えて（護衛官の金とともに）二人を連れて寮の方に帰ろうかね……

その前にこの子供の方を風呂入れよう・・・・・・・・・・　薄汚れているのを部屋に入れるのはかなわん!!

衛士詰所の水浴び場借りれないかな?
風呂屋は花街にもあるけど、さすがに二人連れて行くには外聞的に悪い。

後は服か・・・・・・・・・・　古着屋でも帰りに寄るか。

もう、夕刻間際だなぁ……　一日が終わってしまうよ。

貴人聖域法と衛士その他（後書き）

用語説明

貴人聖域法（アジール）

些細な罪や過失、逆恨み等から弱者を守るための法律。

認定までには庇護者と被擁護者との契約が必要で、もし被擁護者に咎アリとするならば庇護者も罪をかぶるし、被擁護者を守るために多大な損害を受けることもあるために最近ではだ運用するものがほぼいない。被擁護者の方も眷属としての労役やなにかも受けなければならないが既定の賃金や何かは支払われる。

名前がないどうするべｗ

孤児姉弟と世界の理不尽（前書き）

あらすじ　孤児を二匹拾った。

登場人物の名前はいまだ決めてない！

どうする作者！　収拾はつかないぞ！もっとも誰も読まないがｗ

孤児姉弟と世界の理不尽

孤児姉弟を拾って、身の回りのものとか買って寮に戻る。
って、いうか一つ物を買うのに遠慮して最低限以前のものでどう過ごして来たのだろうか？
一度孤児院の実態を調査せねばなるまい！！

決して、可哀想とかだからではないぞ！
孤児院となれば多少は貴族だの王族だのが支援しているはずだ！
こんな杜撰過ぎる経営を行っている孤児院を統べる貴族ないし王族は民草の幸いを守る牧人たる統率者の資格はない！！
経営する貴族王族は絶対落とし前つけさせてもらう！！
これは政を司る我等の責任として行わなければならない事だ！！

「法務官様、私にはこんな上質な服は勿体のうございます・・・・・・」
「法務官様、おいらにこんなもの食わせる必要はないぜ！おいらはそこらの草と藁の混じった麺麭で十分だから」

「君達は我が眷属として庇護下に入る事になったのだから其れなりの格の暮らしをしてもらう、私は末席であっても貴族として存在をしている。その私の眷属たる者を喰わせる事満たす事ができていないとなれば私の格に関わるのだ！貴人聖域法（アジール）の制約下で一時的に我が眷属になった君達とは言え、わたしの下についたからにはちゃんと食って満ち足りた生活を送ってもらうぞ！！」

わたしの言葉はお前らは奴隷だ！奴隷であっても私の格のために食わせるのだからそこを間違えるなと言っているだけなのだが勘違いしているようだ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「はい、法務官様！　民草の牧人たる貴族のあり方を顕す御方。私達のような取るに足らない孤児であっても、救いあげようとする細かい投網の投げ手　私は貴方様の網にかかり幸いを得ました。」
「法務官の旦那、おいらは食わせてくれる旦那についていく・・・・・・・・　一切れの麺麭と繋いだ命にかけて・・・・・・・・」

この科白を聞いて更に怒りが増す。自由民たることを誇る我らが王国の民が一切れの麺麭、一枚の服で隷属を決める現状に！！　王国を切り開けし祖王はそを見たらなんと嘆こう！　王位を投げて民の守部たらんと野に下れり我らが初代よこの未来をなんと思う！！
私は怒りの表情をしているのを自覚している。でも、理性ではこの姉弟が悪いのではないと判っている。

「御伽噺を知っているか、この国が成り立ち我等の祖が自由民であることに誇りを持たんと立ち上がった日々を・・・・・・・・・・・・・・・・　如何なる種族であっても、如何なる出生であろうと・・・・・・・・・・・・・・・・　他者を思い、誰かのためにあろうとするもの全て、自らの意思で生きようとするもの全てが自由民であるべしと勇者だろうと魔王だろうと抗い続けた建国の詩を・・・・・・・・・・・・・・・・」
「御伽噺と聞いています。」
「そうか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「旦那、なぜ怒っているんだい？おいらわかんないよ。」
「君等が悪いわけではない・・・・・・・・・・・・・・・・・・　帰るとするか・・・・・・・・・」
「はい、ご主人様・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

寮に帰ると女怪が待ち構えていた・・・・・・・・・・・・・

孤児姉弟と世界の理不尽（後書き）

あれ？シリアス？

それ以前に名前・・・・・・・・・・・・・・

孤児姉弟と下宿の女傑（前書き）

あらすじ、孤児を拾って帰る。
下品表現あり・・・・・・・・・

寮に戻ると女怪がまっていた。
どうも衛士経由で情報が流れてきたみたいだ・・・・・・・・・・・・・・・

「なんか言い訳はあるかい？」
「ありません」
「姉弟どんぶりをしてさらってきたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・
貴族として、いや人として間違っているものをうちに置いとくわけにいかないね！」
「ちょ、まって・・・・・・・・・寮母さん！！　姉弟どんぶりしてないから！寧ろ保護している立場だから・・・・・・・・・・・・・」
「そんな事言って、貴人聖域（アジール）法盾に眷属だからと姉の初物を散らして弟の後ろを味わいつくして姉弟相姦を無理やりにさせたりとかご奉仕せよと無体を・・・・・・・・・・・・・・・」
「してません！！」

「おばちゃん、初物とかそうかんってなに？おいらわかんないよ・・・・・・・・・・・・・・・」
「こんなわかんない子供に無道な事を・・・・・・・・・・・・・・これからはおばちゃんが守ってあげるからね、この腐れ貴族の法務官に酷い事されて大変だったねぇ・・・・・・・」
「あのぅ、寧ろ助けてもらった立場なのですが・・・・・・・・・・・・・・・」
姉弟を抱きすくめる女怪・・・・・・・もとい寮母、どうしろと言うのだろうか？

「法務官に地位を盾に脅迫されても大丈夫だよ、アタシが貴人聖域（アジール）法（ル）で貴方達くらいは守って見せるから・・・・・・・・・・・・・・こ

う見えても王宮伯の地位だからこの糞野郎よりは権力があるからね！！」

「おばちゃんおばちゃん・・・・・・・・・・・・・・」

誤解を解くのに半時ばかしかかりました・・・・・・・・・・・

「すると、おまえさんが保護した立場だと言うのかい？」

「だからそう言っているではないですか！！話し聞いてください！」

「取敢えず、こいつ等に飯と風呂をお願いします。」

「そうだね、娘さんはともかく子供の方は磨き上げたほうが良いだろうしね・・・・・・・・・」

「おばちゃん、さっき水浴びしたよ」

「だめだよ、もっとしっかり洗わないと！あたしが良いと言うまでしっかり洗うんだよ！できなければあたし自ら磨き上げるからね！！」

「寮母さん最初から磨いたほうが楽では？」

「そりゃ、そうだけど子供だって自立しないとだめだろう。」

弟は風呂に向かわされた・・・・・・・・・・・・・・

ついでに私も風呂に投げ込まれる・・・・・・・・・・・・・・遊女の香臭いと・・・・・・・・・・

風呂から上がると孤児弟には洗い立ての服を与えられ、飯を与えられる。

「こんなガリガリで、よく生きてこれたねぇ・・・・・・」

「草の入った雑穀粥あれば生きる事はできるよ・・・・・・・・・

」

その一言で寮母やら配下の従士の細君やら娘さん達が涙ぐんでもっと食べとか食べ物を進める・・・・・・・・・

姉のほうももっと食べないとだめだよと山盛りの食べ物を用意される

申し訳なさそうに食べる姉弟に食べろと進める周りなのだが・・・・・・

「弟妹達が飢えの一歩手前なのに食べて満足するなんてできない」

「食わせてやりたいなぁ・・・・　こんな旨いもの」

と言うものだから周りが涙ぐみながら・・・・・・・・・・

「何で孤児院全部こっちに保護しないのさ！！」

等と詰られた・・・・・・・・・・理不尽だ・・・・・・・・・・・

・・・・

食べたら眠れ！　明日はもっと忙しいぞ・・・・・・・・・・・・・・

孤児姉弟と夜半の書斎（前書き）

あらすじ、孤児姉弟飯をたらふく詰め込まれる。法務官はボロカスに貶される。

孤児姉弟と夜半の書斎

寮の自室。とは言っても書斎に寝室、応接室があるのだが・・・・・・・・・・

姉弟を寝室に押し込み寝台を使えと言っておく。

ふかふかの寝台に申し訳なさそうにしている姉弟に

「今夜は仕事になるのだし気にすることはない、後姉弟でムフフな事をしていたら混ざりにいくからな！」

と釘を刺す。

私はこの姉弟の保護の為の書類とか、護衛官のための報告書とか始末書の原本を作る。

如何して書類が増えるのか疑問が尽きないが前に宰相閣下が

「書類は自己増殖する性質をもち、始末すればするほど倍増する・・・・・・・・・・・・・・・」

等と胃薬片手にボヤイテイタノヲ思い出す・・・・・・・・・・・・・・・・・・

宰相閣下・・・・・・　せめて財務官のアホダレが出世して宰相の地位を得るまで堅くあってください・・・・・・・・・・・・・・・・・

私がならないかって？　勿論なるつもりはないよ！

出世したら遊び歩けないじゃないか！！この法務官だって休みが不定期だし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そんな事を考えながら書類を作り上げていると書斎の扉から控えめなノックの音が？

「誰だ？」

「孤児姉です・・・・・・・・・はいって宜しいでしょうか？」

「うむ、どうした？」
「私の体を弄んでください。でも弟だけは・・・・・・・・・・・・・・・」
まだ勘違いしてやがる！！　私は娼婦を抱く事があるが客を喜ばす専門家としての技術と自信、体を提供するが意に染まぬ男に心までは委ねないとする自由民の気概を持ったものしか抱きたくない！奴隷と化した人形なんか抱いても面白くない！！
まぁ、昨日存分に性愛神殿で楽しんだからたまっていないからね（笑）

「守りたいだけで自分を損なう事をするな！！　君達の主たる私を見くびるな！！」
「でも、街のうわさでは法務官様は色々お楽しみを追求なさる者で老若男女お構いなしの・・・・・・・・・・・・」
「で、私がそのような人物に見えると？　見えるのならばそんなことをしてもいずれは弟も餌食になるだろう。馬鹿なことはやめなさい！」
「・・・・・・・・・・・・・・・で、私たちは貴方様の道楽なのですか？」
「そうだといったら納得して下がってくれるかね？」
「いえ、例え道楽だとしても私たちに光をある方向を指し示してくださいました。国という網から零れ落ちた私たちを救い上げてくださいました。世界という枠組みの中で捨て置かれる私たちを見つけ出してくれました。路傍の石よりも無価値な私たちがかけてくれた思いに対して報いなければ・・・・・・・・・・・・・」
「思いというのが道楽ならば、君達を戯れに拾い上げたのは道楽だろうね。だから、気にする必要ない。君は体をもって報いようとしているが私にしてみれば生き様で報いてもらいたいと思っているのだよ。今の君では抱きたいと思わない！」

まぁ、うそだけどね。栗色の髪はふわふわで顔の造作も悪くない、雀斑があるのは人によっては減点だろうけどそれすらも彼女という存在からすれば生気あふれるアクセントだろう。体つきだって少女を脱して女性になろうとする時代の危ういバランスのほっそりとした体は最上とは言わないけど魅力にあふれているものだ・・・・・・・・・・・

いい素材を無碍に散らすのは美しくない・・・・・・・・・食い散らかすなんてもってのほかである。

まぁ、私を踏み台にして幸せになるくらいの気概を持って欲しいのは贅沢な願いだろうか？

「今宵は遅いし、不慣れな環境ですがりつきたくなる気持ちは理解できる。馬鹿なことを言っていないで眠りなさい・・・・・・」

孤児姉は泣きながら部屋を出て行った・・・・・・・・・・

　ちっとばかし残念な気がするが仕方ない・・・・・・・・

こっちも仕事を仕上げて仮眠を取るか・・・・・・・・・・・

夜が明けて、寮の食堂に向かった私は泣きはらした孤児姉の目元を見た寮母と女性陣に問答無用の攻撃を喰らう・・・・・・・・・・・・・

何故なのだろう　理不尽だ・・・・・・・・・・・・・・・

孤児姉弟と夜半の書斎（後書き）

食わぬ据え膳という男の意地もあるわけですが、理解されないでしょうね。

作者はリアルで殴られました。

胃痛宰相とタタミイワシ（前書き）

あらすじ、夜這いを断ったら女性の敵扱いされた。

やっと下品になれるかな

胃痛宰相とタタミイワシ

一夜空けて勤務日。

泣き腫らして目を赤くしている孤児姉や睨み付けている孤児弟を寮母に任せて王城に向かう。

朝は大変だった・・・・・・・・・・・

泣きはらした顔の孤児姉を見て寮母や女性陣が私が乱暴をして悲嘆に暮れていると勘違いするし、それを聞きつけた従士どもは剣を抜いて迫るし・・・・・・・　君達平民私は貴族だよ　如何して剣を向けるかなぁ？？？？？

「私が許可したよ！　王宮伯の権限で民草に無体をする馬鹿貴族を駆除しろと！！」

そもそも従士と寮母は命令系統別でしょう・・・・・・・・・・・・

「義憤です！！　私達には妻や娘が居ますしそれがこんな思いをしたとなれば相手が王でも剣を持って立ち向かいます！！　寮母様の檄に応じないとなれば自由民である自分にも、家族にも顔向けが出ができません。」

「私たちは女の身でありますからそのような無体に対して許すわけには参りません！！」

あのぅ・・・・・・・・・・・・　ヤってないのですが・・・・・・・・・・・

説明する事半時ばかし、無実を証明するのだがそうしたら

「法務官様は女性が不安になっているのに放置するなんてなんて酷

いのでございましょう・・・・・・・」
「女性を買うだけと勘違いなさっているのでございましょう・・・・・・」
等々・・・・・・・・・・・・・非難轟々

「法務官様女性を敵に回して勝ち目はございませんよ。」
従士、実体験滲み出てるよ・・・・・・・・・・・・・
「そりゃぁ、あっしもおっかぁに気が利かないとか色々と・・・・・・・
・『おまえさん後でじっくりと話しをしようかね』」

すまん従士　君の犠牲は忘れない・・・・・・・・・・・・・・　もっともこっちへの火の粉が防げていないのだが。
あと、君は私個人の権限で王宮準爵位の推薦しとくから覚悟しておきなよ！！この私に対して啖呵を切ったのだから仕事ぶりで覚悟を見せてもらうから・・・・・・・・・・・・

そんなこんなで出るのが遅くなった・・・・・・・・・・・・・・
王宮に向かい執務室に入る、そこには火鉢にタタミイワシを翳している宰相閣下が居た。
「閣下、おはようございます。昨日、私法務官は貴人聖域（アジール）法にて孤児を二人庇護下におきましたので報告いたします。」
「おはよう、法務官。その話は聞いて居るよ。姉弟どんぶりで食い散らかして今囲っているのだろう・・・・・・・・・・。君ともあろうものが孤児に入れ込んで道を踏み外すなんて・・・・・・・・・・・・
　どうかしているぞ！！」
「違いますっ！！　タタミイワシ食ってないで聞いてください私の

話!!食い散らかしてないし、囲ってない!!　確かに囲うのも悪くないかなとも思ったりもしましたがどんぶりってなんですかどんぶりって!!」

「どんぶりとは特定の間柄の二人以上を一気に喰らう事（性的な意味で）だよ!君ほど遊んでいる者がそんな言葉を知らないなんて・・・・・・・・」

「そうじゃなくって!　まだ食ってませんし、一昨日存分に食ったり食われたりしてますし、赤玉寸前ですから抱く気力なんてないですよ!!」

「冗談だ!　でも、まだと言っていたが、抱く予定でもあるのかね?」

この腹黒親父（たぬきじじい）め、持病（すとれす）の胃痛が酷くなって血を吐いてしまえ!!

「そうなれば次の宰相を君に任せて悠々と引退して、海沿いの町で異世界人の魚屋が作るタタミイワシをつまみながら隠遁生活がすごせるな。」

「私は出世するつもりはないです。この地位だって仕事忙しくて面倒なのにどこか地方の閑職はないですか?それに宰相だったら財務官が最適じゃないですか!!」

「閑職があったら、ワシが最初に行きたいのだが、昨今の王族の奇矯な性癖に胃が痛い・・・・・・・・・・　それに財務官は魔国とのつながりが強すぎる。」

「私だって、王族に関わるのは勘弁願いたいですよ・・・・・・・・・・　そのせいで減給処分だって受けているし・・・・・・・・・」

「あれは自業自得。で、それはそうとヤオイ本製作規制法（ネタにするのはかんべんして）はどうなっているかね?」

「一応試案は出来ていますが、通るかどうかは微妙です。出来たところで地下出版して作られる可能性が高いかと・・・・・・・・・・」

「頭の痛い話であるな、ネタ（ひがいしゃ）にされたもの達から苦情が来ているし近衛の騎士達の間には朗読会の護衛が精神的拷問だと移動願いが届いている・・・・・・・・・・侍従長（６４歳）も自分をネタにされた本を見つけて倒れたぞ。」

「そういえば宰相閣下を題材にした本がありましたよ・・・・・・・・相手は陛下（宰相×陛下）で下克上物だとか・・・・・・・・・・」

「聞きたくもなかった・・・・・・・・・・」

閣下は水差しに入っていた胃薬（水薬）を一気に飲み込み苦そうな顔をする。

「それはそうと閣下、孤児院への査察の許可願いますね。あそこ一応国営だか王立だったはずですし保護したときの状態が少し気になったものですから・・・・・・・・・・」

「良かろう、状況改善できればそれで十分としろよ。間違っても運営責任者の貴族をつぶそうなって考えるなよ！やっと護衛官が不例（ぶばか）発言即処刑した王宮衛士隊副長の件が解決したんだから、これ以上の面倒な騒動（ざんぎょうじごく）の処理は勘弁して欲しいからな！」

「判りました、ご期待に沿えるよう努力します。」

「努力ではない！！　絶対にだ！！　お前の不敬発言の後始末だって胃が痛かったんだ！！ワシをつぶすつもりか！」

「たぶんつぶれないですし、閣下早くイワシ食べないと焦げてますよ・・・・・・・・・・」

タタミイワシは真っ黒焦げであった。

あれは炙る程度で十分なのにもったいない・・・・・・・・・・

閣下のタタミイワシの在庫　残り３５枚。

胃痛宰相とタタミイワシ（後書き）

登場人物の名前がないのはあきらめました。

タタミイワシは正義！！

胃痛宰相と書類雪崩（前書き）

あらすじ　宰相閣下のタタミイワシが焦げた。　閣下涙目。

胃痛宰相と書類雪崩

宰相閣下と別れた後、法務官勤務室にて書類整理をする。
宰相府から送られてくる仕事は多岐にわたり、各地からの陳情や法令の不備に対する意見書、司法各局からの問い合わせ・・・・・・・・・・・・・・・
その他にも司法当局の判例に対する書類査察依頼・・・・・・・・・・・・・・・
なんか他の仕事がまぎれているのは気のせいではないな・・・・・・・・・・・
王兄殿下が物陰から見ていて気持ち悪いです（侯爵令嬢１２歳）
王太子殿下が南方都市連合に居るから引取りに来てください（南方都市連合理事）
護衛官の鎧を磨いてください血がついて情操教育に悪いです（女官長）
街灯のガラスが割れています（南参番街某雑貨店店主）

どう考えても私の仕事ではないなぁ・・・・・・
王兄殿下の病気（ロリコン）は後数年もすれば興味が失せるから我慢してといえばいいし、王太子殿下は誰か適当なものに迎えにいかせればよい・・・・・・・・って、いうか西方荒野伯のところに遊びに行くのにどうして南方都市連合?あそこまでここまでは半月かかるぞ!一昨日出たばかりなのに?
護衛官のは自分で言えと言いたいし、街灯の硝子は衛士隊経由で街灯担当に言え!!
孤児院の子供が病気持ちみたいで気持ち悪い駆除して欲しい・・・・・・・・・・（王宮士爵某）
該当の孤児院は孤児姉弟の居たところか・・・・・・・・・・・・病気も

ちみたいでとなると昨日の状態からしても栄養状態が悪かったからなぁ・・・・・・・・実際に病気にかかっている可能性もあるな。後で診断してもらうか・・・・・・・・・・・・・・

寮母王宮伯（おせっかい）の事だから今頃見せているかもしれないが、期待しないでおこう。

孤児院の管理は誰だったかなぁ・・・・・・・　王室出資で管理はどこかの貴族にまかされていたはずだから・・・・・・・・・・・・・・

財務官の支出台帳を見たほうが早いかな？あとで財務官のところに行くとするか・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あと、士爵某　お前は民草のことをゴミのよう表記したから地方へ（左遷）の栄転依頼を宰相府人事宛に出しておいてやろう。ありがたく思いやがれ（にやり

仕事が一息ついたし、宰相閣下に書類を渡しながら紛れ込ませた仕事に対して文句を言うとしよう。

「うむ、良いところに来た。これもやってくれ！！」

「待ってくださいどう見ても私の職務外の仕事も混じってますよね？さっきも二割くらいは他の者の仕事ですよ！！」

「大丈夫！！君なら出来る！　このまま宰相の仕事を任せてもやっていけるからワシが保障する！！」

「宰相補佐、秘書官さーん　ここの胃痛宰相が人に仕事押し付けて逃げようとしてますよ！！」

「無駄だ、法務官！ここに居るのはワシの手の者ばかり、君に逃げ場がないのだよ（邪笑」

「閣下、人育ててくださいよ！！」

「だから育てているではないか、君と言う人材はとても得がたい資質を秘めている優秀な人材だよ。十二分に教育して次期宰相として・

・・・・・・」

「だから私でなくても人はいるでしょう!!　御子息とか甥御さんの中に結構優秀なの居たじゃないですか!!」

「世襲役職は腐敗の元だ!それ以前に息子は武官だし、甥達は技官になっている。どうもワシの血族は現場向けらしいからな。ワシも現場に戻りたいよ・・・・・・・・・・　そういうことで宰相命令!!　これを処理しろ!!」

「わかりましたから宰相府の人間使わせてくださいよ。うちの人間はこれ以上こき使ったら苦情来ますんでね・・・・・・・・・・・・」

「わかった、適当に人を引き抜いてくれてかまわない、次期宰相府の人事の参考にもなるだろうし、何ならタタミイワシも持っていくか?ついでに南方国境伯令嬢とか東方建国公令嬢もつけるぞ!!」

「さらっと、勝手な役職とか見合い話をつけないでください。しかもこの二人の令嬢は王妹殿下の会派で腐っているじゃないですか!!せめて腐ってないのをお願いします。」

「いやぁ、国境伯からも建国公からも娘の縁談どこかないか相談されてのぅ・・・・・・・・・・・君ならば家柄も悪くないし将来有望で人格的にも酷すぎないからなぁ・・・・・十分いけると思ったんだが・・・・・・・・・・　綺麗なお嬢さんだよ。腐っているけど。まぁ、人は遣すから頑張ってくれ給え。」

こうして私は午後も雪崩れそうなほどつみあがった書類の山と格闘するのであった・・・・・・・・・・

書類の間に見合いの覚書が混じっているがこれは処理不可・時効待ちの棚に放り込む事にする。

ところで書類の間にタタミイワシの欠片が挟まっているのだが、誰が食べながら仕事しているのは?

胃痛宰相と書類雪崩（後書き）

宰相閣下のタタミイワシ　残り２３枚。宰相府のおやつとして大人気です。

胃痛宰相と味付け海苔（前書き）

あらすじ　宰相に仕事押し付けられていたら書類からタタミイワシが出てきた。
食べながら書類仕事するんじゃない！！

あと、登場人物の名前は・・・・・・・・　諦めてくれとか・・・・・・

胃痛宰相と味付け海苔

宰相閣下から押し付けられた仕事をこなしていく法務官である私、
宰相閣下と法務官の間には法務長が居たはずなのだが・・・・・・・
どこに消えたのだろう・・・・・・・・・・・法務副長や秘書官に聞いても行方知れずだし、副長やなんかもこれから上級文官学校への講演にいくと消えていく・・・・・・・・・・・　後続を育てるのも義務である等と建前を言いながら・・・・・・・・・・

絶対目ぼしい者を入れて自分が楽するつもりだな・・・・・・・・・・
・　そん時は私の下にも数名ほどください・・・・・・・・・

このまま出世なんかしなくても仕事量は増えていくのは目に見えているし後続を育てて宰相とか法務長に仕立て上げないと毎晩の酒盛りと毎週の悪所通いが出来なくなってしまう。これは由々しき問題だ！！
昨日は飲む暇がなかったし今日こそは飲むために仕事なくすぞ！

そして私は仕事の鬼となった・・・・・・・・・・・・・・・・・・
周りの同僚達や手伝いに来た宰相府の皆の助けを得て数日分の仕事を片付ける！

なんか周りが引いているが気のせいだろう・・・・・・・・・・・・・・
書類の間に挟まったタタミイワシや味付け海苔の破片に対して宰相府のものに書類の作り直しを依頼したり、法令の誤解で一方的に正当性を主張する東南香料地帯子爵に対して法令の説明をしたのだが、

貴族の優越性などとほざいてきた事に切れて国王陛下に相手方の不利益を補填するよう上奏しに行っただけなのに・・・・・・・・・・

仕事しただけだよ、決して飲めないストレスをぶつけているわけではないからね。
決して仕事をねたに鬱憤ばらししているわけではないから・・・・・・・・・・

大事な事なので二回・・・・・・・・・・・・・・　はっ！！

なんて事だ、王妹殿下（ヤオイ姫）を染め上げたあの忌々しき異世界人（ヲタク）の言い回しを使ってしまうなんて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私はそこまで追い込まれていたのか・・・・・・・・・・
あとで同僚や手伝いの宰相府のものに対して差し入れをして詫びを入れなければ・・・・・・・・・・
東南香料地帯子爵に対しては別にいいか・・・・・・・・・・・・・・・・・・

最後、泣いていたけど・・・・・（鬼畜）

これと言うのもあの宰相閣下が仕事を押し付けるからだ！！
来て以外の仕事を押し付けた宰相閣下（たぬきおやじ）が諸悪の根源だ！
やつから大切なものを奪ってやる！！

どうでも良い案件に紛れ込ませてタタミイワシ王都流入禁止条例でも作るかな・・・・・・・・・・・・・・
あのぅ、宰相府の方々・・・・・・・・・・　何で私のほうを極悪人

でも見る目で見ておびえているのですか？　同僚の皆さんも私の腕をつかんで最後の署名をしようとするのを止めたりしているんですか？

「宰相閣下にこき使われて疲れているのは判る、判りすぎるほど判るがそれはいくらなんでも非道だ。やめろ！！」

「法務官様・・・・・・・・・・・・閣下の数少ない楽しみを奪うのは勘弁してください・・・・・・・・・・」

「疲れていたんだな、今日の所は我々で片付けておくからゆっくりと休みなさい・・・・・・・・・・」

なんか口々に生暖かく見守るのですが何故ですかな？

まぁ、仕事をしなくて良いと言うのは良いことだ、孤児姉弟にお土産でも買って帰るとしよう・・・・・・・・・・・・

と、その前に宰相閣下のタタミイワシを少し駄賃代わりに持っていくか・・・・・・・・・・

「もうやめて！　閣下のイワシはもうゼロよ！」

等ととめる声がしたが気にしない気にしない！

タタミイワシって酒が欲しくなるんだよなぁ・・・・・・・・

胃痛宰相と味付け海苔（後書き）

宰相閣下のタタミイワシ　残量ゼロ
明々後日には海沿いに住む異世界人の魚屋から入荷はあります。

ちなみに異世界の魚屋の収入は宰相閣下に納入しているタタミイワシで三割ほどを賄っています。

女傑寮母と過剰愛護（前書き）

あらすじ、タタミイワシを強奪した。最初閣下涙目！！

女傑寮母と過剰愛護

寮に戻ると孤児姉弟はつぶれていた・・・・・・・・・・・・

「だんなぁ、食べれない辛さと言うのは身に染みてたけど　食べる辛さとかってのは初めてだよぉ・・・・・・」

「ご主人様、好意が重たいです・・・・・・・・」

リボンやフリルにまみれて着飾らされた孤児姉に食べ物の山を前に従士の娘さんや宮廷料理人の若奥さんに撫で回されている孤児弟・・・・・・・・・・・・・

初めて迎え入れた愛玩（ペット）動物を弄繰り回している様が思い浮かんだ・・・・・・・

寮母、貴女がついていながらこのような惨状になるのは如何してですか？

「そりゃぁ、寮母様が一番姉弟を猫可愛がりしていたからですわ。」

そういえば寮母の息子は結構でかくてごついからちょうど可愛がり甲斐のある年恰好の姉弟が狼の前に生肉をぶら下げた状態で見えたものだから餌食にされたんだな・・・・・・・・・・・・・

「法務官様どちらか私にくださいません事？ちょうど子供欲しかったですし・・・・・・・・」

犬猫の子じゃないんだから深く考えましょうよ、若奥さん。

完全に潰れた姉弟を部屋に避難させると、一人寮の食堂にて酒を飲

む・・・・・・・・・・・・・・

明日にでも一度姉弟をつれて孤児院でも行ってみるかな、少し状況を見てみたいものがあるし孤児院のほうでも二人を案じているだろうからな

「法務官、何あくどい事を考えているんかい？　表情が強いよ。」

「大したことじゃないさ、明日孤児院を見に行くから何をお土産にしておこうかとね悩んでいるだけさ」

「ふっ、そんなことこれから焼き菓子でもたくさんこさえておくからそれを持っていきな。」

「寮母、手間かけるね・・・・・・　あの子達の状況を見るとろくに食べていないだろうから一番それがうれしいだろうな。」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「さぁ、女衆達！！これから厨房でお菓子を山ほどこさえるよ！！」

「「はいっ！寮母様！！」」

酒瓶とグラスを持って自室に帰り、寝酒としゃれ込むか・・・・・・・・・・・・

帳は下がって夜の色　白銀の月静かに眺め

君のまぶたに眠りの詩が　静かに静かに降り注ぐ

腕の中の眠れる子等は　明日の遊びを夢見るようで
今日の遊びを夢見るようで　永久にこの時続けばよいと

翌朝、寮の食堂に行くと無駄に大量の菓子があり、朝食の支度が終わってないからと寮の住人（独身者や地方からの単身赴任者、王宮の下働きや従士等）達は菓子をしぶしぶ朝食とするか市場に逃げ出していた・・・・・・・・・・
すまん、彼女等に燃料を投下したのは私なんだが・・・・・・・・・・・・ここまで酷いとは思わなかった・・・・・・・
後で皆で飲みに行こう・・・・・・・・・　多分私の奢りになるのだろうな・・・・・・

「あらあら法務官様、孤児院への差し入れの菓子を拵えたのはわたくし達ですのよわたくし達にお礼は？」
「皆で行くか・・・・・・・・・・」

前に行ったあそこの店を貸しきればいいかな？　飯も旨かったし、

表通りだから女性陣が行っても危なくないだろう・・・・・・・・・

女傑寮母と過剰愛護（後書き）

名前がないのは仕様です（開き直り）
誰も読むものが居ないから問題ないね（邪笑）

作者の酒が切れたからとりあえずここまで

女傑寮母と貧乏孤児院（前書き）

あらすじ、山ほどの菓子を見た。男衆は涙目。
そもそもあらすじは必要か??

女傑寮母と貧乏孤児院

菓子を孤児弟に持たせて孤児院に向かおうとしたら、持ちきれなくて仕方なく馬車を用意する。
なぜか寮母がついてくる・・・・・・・・・
「どうせ馬車に空きはあるだろう?あんただけだと孤児院の連中を泣かしかねないからね。」

人を何だと思っているのだろう?
「貴族も黙らす外道法務官、王家を敵に回しても変わらない暴露癖、決して宰相にしてはいけない官僚『貴族５０人に聞きました』」
酷い評価だ、貴族５０人ってなんだろう? アンケートに答えた貴族達にしっかりと聞くとしよう・・・・・・・・

「旦那、おいら馬車なんて初めてだよ!!」
孤児弟ははしゃいでいるなぁ・・・・・・・ さすが１０にも満たない子供だ。
「おいら１２歳だよ・・・・・・・・」

「「えっ!!」」

私と寮母はそろって驚いていた・・・・・・・・・・・・
栄養状態が悪かったから成長できなかったんだなぁ・・・・・・だの、子供の年齢はわからんとか・・・・・・・・だの好き勝手に言い合う。もしかして、孤児姉のほうはどうなんだろうか?

「私は１４ですが・・・・・」

あぶねぇ・・・・・・　手を出していたら王兄殿下（ロリコン）一派の仲間入りだった・・・・・・・

「言っていた事は最低だが手を出さなかった事だけは評価するよ法務官。」

そりゃどうも・・・・・・・・・・　でも、この二人を王宮へあいさつ回りに連れて行こうかと思ったが危険だなぁ・・・・・・・

王兄王妹兄妹一派（ロリ&ショタ）の変態どもから守りきれる自信がない・・・・・・・・・

「後で、性教育とか護身法とか教育してもらうのがいいかねぇ・・・・・」

性愛神殿の青少年向け講座でも受けさせるかねぇ・・・・・・・

あそこはあそこで連れて行くのは危険だが・・・・・・・

「表門から行けばよいのでは。いつも裏門（娼館入り口）ばかり使っているから忘れているのではないかね？」

ごもっとも、表門も結構えげつないけど・・・・・・・・・

あの愛を語り合う人々（婉曲表現）が絡み合う無駄に芸術的な門構えなんかは子供に見せたくないんだが・・・・・・・・・・

時間帯によっては猥歌が神にささげる供物だとばかりに歌われるし、説法なども・・・・・・聞かせられないなぁ・・・・・

世界中の娼婦や男娼、性的被害者や奴隷達の守り神なんだから合っているのかいないのか？

私も敬遠なる信徒として娼婦買い（おつとめ）をして多額の支払い（きふ）をしているのだが・・・・・・・・・

「それはあんたの趣味でしょう！！」

否定しません。

その話は後で考えるとして、孤児院に着いた・・・・・・・・・・・・

建物自体は堅牢で清掃は行き届いているが、どうも子供達は痩せこけて元気がないようだ。

先日の護衛官が渡した財布の中身があるから多少は食いつなげるはずだが・・・・・・・・・・・・

姉弟も古巣に戻るできた安心感からか弟妹達を捕まえたり抱きしめたりしている。

とりあえず馬鹿みたいに大量の菓子は寮母が子供達にばら撒いて餌付けをしている。私は院長に会うとしよう。

院長は元は恰幅が良かったのだろうが痩せて肌がたるんでいる。

我々の来訪と孤児姉弟の貴人聖域法適用に戦々恐々している。そりゃそうだろう、私のような貴族様が場末の孤児院に来ているのだ。

しかも、粗相をして殺される寸前だったとなれば尚の事。憂さ晴らしに皆殺しにされても文句言える立場ではないのだから・・・・・・・・・

取敢えず、建前として孤児院の衛生状態を査察しに来た旨と孤児姉弟の身柄については無事である事を伝え安心させておく。査察については清掃が行き届いているし孤児たちを定期的に風呂に入れろと命令する・・・・・・

風呂は公衆浴場を使わせてもらえとか提案すればとか解決策はこれで十分だろう・・・・・・・

でも、この経営状態の酷さはどうだろうか？

お世辞にも十分な食べ物を与えられていない、栄養失調からの疾病も見受けられる。

こんな状態を見たら孤児弟が護衛官の懐を狙うのも理解できる。

貧困は犯罪の温床である。それしか生きる道がなければ人はどこまでも落ちていくだろう・・・・・・・・・・・・

遠く異国の荒野で盗賊を生業とする一族がこんな歌を歌っていたのを思い出す

殺せ奪えや　生きてくために
　彼の血肉で　私は生きる

祈れ縋れや　来世のために
　今も無力で　明日も無力・・・・・・

取敢えず、話を聞くことにする。
「あの寄付はありがとうございました。あれで付を支払えましたし子供達にも腹いっぱい食べさせる事ができました。」
「いえいえ、礼は王室護衛官に言ってください。彼にしてみれば不覚を取って我を忘れた事に対する口止め料なのでしょうが・・・・・・」
「それでも私どもが助かったのは事実です。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・しかし、この状態は酷いですねぇ・・・・・・一応王立なのでしょうが資金が足りなくなるような事がありましたか？」
「資金のほうはここ数ヶ月入ってきていませんし、王宮のほうに問い合わせても話がつながらない・・・・・・・・・・・・」
「責任者は誰だかわかりますか？」
「南方河岸都市侯だったと記憶してますが・・・・・・・・・・」

やべぇ、数ヶ月前南方河岸都市侯護衛官の不敬発言即処刑にかこつけて色々黒い噂の裏づけをとって廃絶したけど仕事の引継ぎまで気が回らなかった・・・・・・・・・・・跡を継いだのは居たはずだがこの仕事まで引き継いでいるとは思えない・・・・・・・・・・

これは私の怠慢ではないが・・・・・・・・・・・・　何とかしないと・・・・・・・・

「判りました、私の方から話をつけておきましょう。今まで不自由をかけまして申し訳ございませんでした、王国に成り代わりまして私法務官が謝罪をいたします。今後不自由があれば私の名前を出していただければ微力ながらお手伝い致しますのでお声掛けください。」

「法務官様、そんな貴方様ともあろうお方が孤児などという取るに足らないもののために頭を下げていただくわけには」

「いえ、王国が理不尽を強いたのであれば繕うのが我ら臣下の役目！懐に入った窮鳥を無碍にするなぞ王族、貴族の嗜みにはありません、ましてや民草に対して無体を強いるのは頭を下げるだけで許されるとは思いません。せめてもの誠意を見せる機会を与えてください。」

「法務官様・・・・・・・・・・・・・」

孤児院院長の涙なんて見るに値しない、ましてや勘違いで感動している涙なんて流させる価値もない。

「今日の所は少ないですがこれを運営の足しにしてください。」

銀貨を十数枚渡す、院長は驚いたように私を見て、

「こんな大金を私達のために・・・・・・・・・・」

「いえ、子供達に存分に食べさせてください・・・・・・・・・・

　これは私自身の偽善行為です。王国が私が不備あるばかりに子供達に不自由をかけたのですから・・・・・・・・・・・・」

「法務官様・・・・・・・・・・・・・・・」

嗚呼、気分が悪い・・・・・・・・・・・・・

私はもやもやした気分のまま孤児院を出るのであった。

女傑寮母と貧乏孤児院（後書き）

どうしてシリアスになるのだろう？
酒が、酒が足りないんだ！！！

そうだ酒を買いに行こう！！

六大建国公と守護辺境伯（前書き）

あらすじ　孤児院訪問して金出した　思い切り喜ばれた。

六大建国公と守護辺境伯

次の日、孤児姉弟を連れて出勤する。
あのまま寮に置いておいてもよいのだが、女性陣が構いすぎて環境的にも宜しくないという事とこっちの雑用をさせて金を稼がせてやろうという親心である。
まぁ、目の届くところに居たほうが安全だなという諦めにも似た選択なのだが・・・・・・・・・
たぶん無駄なのだろうなとか思ってしまうのは私の居る環境ゆえか其れともこの姉弟の運命か・・・・・・・・・
断じて私の運のなさとかではないことは強調したい！！

実感したら泣けてくるから・・・・・・・・・・・・

「取敢えず、お茶汲みとか指定されたものを持ってくるとか掃除をお願いする事になるだろう。一応少ないが給金は出るから其れなりの仕事をお願いするよ。」
「わかった旦那！」
「はい、ご主人様。」
「ところで文字はわかるかな？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「予想通りか・・・・・・・・・、あわせて文字の勉強もだな、計算も出来るようになっておけ！」
「旦那、文字や計算がおいら達に必要になるのか？」
「この仕事をしていれば必要になるだろうな。こちらから質問するが、何故貴族に金が入ってくるか考えた事あるか？」
「うーん、判らないや。血筋が尊いから金になるもんだと思っていた。」
「孤児姉のほうはどうかな？」

「貴族という力でしょうか？」
「では、貴族という力はどこから来るのかな？」
「血筋からだと思ってますが、叙勲されるものもいますし血筋だけではなく何かしらの力が要るのでしょうか？」
「いい線をついている。その力は何かな？」
「爵位を金で買ったり、武勲を立ててもらったり、あとはいいところの娘さんたらしこんで貴族になるのがいるねぇ・・・・・・」
「技術者や芸術家が爵位もらうのも聞いたころがありますね。」
「いい線をついているね、何かしらの力というか実力があれば爵位がもらえる事が理解できたかな？これらの実力が如何して爵位を与える理由になるのかな？」
「役に立つからでしょうか？」
「逆に反抗されると面倒だからという考えも出来るかなとおいら思うな。」
「どちらも正解だ！まぁ、それが極端に傾きすぎると使い潰されてしまったりとか、叩き潰せとかなってしまうがそれはおいといて代々の貴族が力を持つというのは、人脈や金脈の積み重ねのよる生来の財産に加えて経験則とかのノウハウが伝わっているからだ。つまり知識だな。読み書きでも、たいていの職場で重宝されるのだ！それ以上の知識や技術があれば更に金になるのが理解できるだろう。」
「はい、では法務官様はどのような力で貴族となっているのでしょうか？」
「孤児姉、面白い質問だねぇ・・・・・・　私の力というのは実家である守護辺境伯家の地脈人脈、後は法務官という地位から来る権益と人脈、生来の地位から与えられた知識・教育といったところであろうか。これが君達を脅して居た我が友人の護衛官だと騎士団所属という人脈やそれに伴う教育、剣技に代表される戦闘能力が力になるかな？私の庇護下を離れて独り立ちする日もあるだろうし、その時の為に学べるだけ学んでおきなさい。ここで得た人脈（こね）や知識（ねた）は無駄になっても損にはならないからね。」

「わかった旦那、もらえるもんはもらっておけという事だろう。」
「お前は単純でいいな。その通りだ！」
「でも私はずっとお仕えする積りですが教育とかが無駄になりませんか？」
「無駄ではないよ、例えば主人や客の好みを覚えて恙無く仕事を遂行する、それを覚えるのもまた一種の知識であろう。家事や料理だって覚えてなければ仕事の役に立たない。これも方向性が違うかもしれないが教育なんだよ。また、下にいるものが優秀であれば主人はその人たちの忠義を得る価値のある人材だと評価される。主人が評価されれば下に居る者達も評価される。そうすれば優秀な者達の団体に敵対する事は面倒くさいと相手も敵対的ではなく打算で味方してくれる。判るかな？」
「前半は納得しますけど、後半は何かいやですわ・・・・・・・・・・・・・・・」
「まぁ、私が世界を作ったわけではなく世界に生きているだけだからな・・・・・・・・・・・・仕方がないさ。そういう力を持って振るいまくるのか自衛のためだけに使うのか選べるだけでも生きていく幅が広がるから覚えておいて損はないよ。」
「はぁ・・・・・・・」
「あの寮でガチガチに寮母さんとかに頼んで時期が来るまで守ってもらうのも一つの庇護であるが、方法を教えて早く庇護下から離れる事ができるようにするのが私のやり方だ。期間もあるだろうし君達にも進みたい道があるだろう。分かれ道に来たときに無防備なままで送り出すのは私の流儀に反するからな。金は取られることがあるけど知識はとられてもなくならないからな・・・・・・・　まぁ、仕事するのに便利だから覚えておけという事なんだがな」
「「はい！！」」
そんなこんなで法務官執務室、私が仕事をしている間に二人にはお

茶くみとか掃除とかをお願いする。暇が出来たら書き取りとか教えながら文字を書かせる練習をさせたり本を読ませたりする・・・・・・・・・

ちょっとした計算のやり方を教えたら足し算とか引き算は理解したようだ、これで決算書類とかの計算を任せる事ができる。ずっと居る積りならば法令なども覚えさせて私の後釜に推薦するのもよかろうな・・・・・・・・そうして引退して性愛神殿に入り浸るただれた日々を・・・・・・・・・・・・・と、白昼夢はおいといて仕事に取り掛かろう・・・・・・・・・

一度文字を覚えてしまうと色々読めるのが面白いらしく私の書類を読んでみたりする。

それ一応国家機密なんだが・・・・・・・・・・・

「王妃様の年齢保護条例・・・・・・・・・・・王妃の年齢を無駄に詮索するものは・・・・・・・・・・」

誰だ、ろくでもない法律紛れ込ませた馬鹿は！！

「タタミイワシ保護条例・・・・・・・・・・・・・・タタミイワシの自由かつ健全な流通を守るべく・・・・・・・・・」

宰相閣下・・・・・・・・・・

姉弟、この話は外に漏らしてはいけないよ・・・・・・・・・・・・・・・・・

あまりにも恥ずかしすぎる・・・・・・・・・・・・・・・・・

これを同僚達とともに絶対成立させないように未処理棚に放り込んで封印する作業に勤しんでいると姉弟は不思議なものを見る目をしている・・・・・・・・・・・・・確かに不思議な気もするが、日の目を見せたらろくでもないことになる（特に私が）世の中には解き放ってはいけないものが一杯あるのだよ異世界人とか王妹殿下とか王兄殿下とか・・・・・・・・・・・・・

そんなこんなで作業していると私を呼ぶ声がする

「法務官、いるかい？　お前の敬愛するお兄様が来ましたよ・・・・・・・」

そこには兄上と六人の貴族らしからぬ形をした人物が居た・・・・・・・

六大建国公だ！！

お前ら暇つぶしに見物しに来ただけだろう！！

六大建国公と守護辺境伯（後書き）

登場人物の名前がないのは言ってはいけないことでしょうね。
六大建国公の設定考えてないｗ

酒が切れた！！
今日は開運だったが４号瓶だとすぐだね。

六大建国公と孤児姉弟（前書き）

あらすじ　仕事してたらお偉いさんが来た。しかも暇つぶしらしい。
作者は酒が切れたので新しい酒を開けたぞ！！

六大建国公と孤児姉弟

守護辺境伯(あにうえ)が六大建国公を連れてくるなんて・・・・・・・・
ただでさえ狭い部屋が狭くなる・・・・・・・・・・とはいえ、しがない下っ端法務官である私が逆らえないよなぁ・・・・・・

「どこがだ!!　宰相にしたくない官僚、三期連続ナンバーワンが!!」

「だんな、酷い言われようだなぁ・・・・・・・・・・」
「まぁ、清濁併せ呑んでいる割には切れる部分がわかりませんからね彼は・・・・・・・・」
「なに、彼ほどわかり易い者はないだろう、私は貴族で偉いんだといわなければいいのだからな!がはっはっ!!」
「で、何時宰相になるのかな?」
「宰相になったら負けだと思ってますが何か?」
「では、国王位でも狙うかね?協力するぞ!!」「面倒だからヤダ!!」

で、何で来たのだろう・・・・・・・・・・・・・・

「そりゃ、可愛い弟が姉弟どんぶりをしたからそのお相手を・・・・・・・・・・・・・・」
「兄上!!」

「このお方がご主人様の兄上様ですか?」

姉弟には紹介したほうがよいな、いやでも王宮にいれば顔を合わせる機会があるだろうし人脈(コネ)としては最高級だから・・・・・・・・・・・・・・
人格的にも王家の人たちほどではないし・・・・・・・・・・・・・・

・・・

鳶色の癖毛で同色の目をした小太りの青年は我が兄にして守護辺境伯。王位を面倒くさがって現王家に押し付けた変人の子孫だ！

「可愛い弟よ、お前もその一員だぞ！！さっさと宰相位を取って我々を楽にさせてくれ。」

一思いにくびり殺して楽にしてやろうか糞兄貴！！

「ご主人様駄々漏れです。」

つい、本音が・・・・・・・・・・・・

白髪交じりの砂色の髪、団子鼻を赤らめているのが西方農園建国公。初代は農家の出身でその農業技術と小作や農奴たちに対する慈悲深さで祖王に三顧の礼で迎えられた家柄だ。ほとんどの領地を小作人や農奴達に爵位を連発して分け与えていまや田舎男爵よりも狭い領地になっているが、その当時の男爵士爵連中の子孫が一派を作って守り立てているからいまだ公爵位から逃げ出せないで居る人物だ。

「よろしく、法務官の小さな家来達よ。わしも元を辿れば農家の親父だから、畏まる事はないよ。」

「こちらこそよろしくお願いします。公爵様。」

「娘さんやわしの後添えにならんか？」

「孫みたいな娘に手を出そうとしないでください公爵！！」

鶸色の頭巾をかぶった朽ち葉色の髪、でっぷりとした腹をした鷲鼻のが商会建国公。人国連合に代金を踏み倒された腹いせに祖王についた商人の出身でいくつかの商会の設立に関わる貴族の皮をかぶった大商人だ。黄金の盾で王国を守る影の支配者でもある！！

「人聞きの悪い事をいわないでくれ！儲ける事は悪い事ではないのだよ、貧乏人がそれを妬んでいるだけの事だ。」

生成りのフードをかぶって目隠しをした女性が庭園建国公。目隠し

をしているのは初代が数多の人々を癒し続けた結果、自らの視力を損なった故事に倣っているからだ。常に鉄杖の従者を連れているから鉄杖公とも呼ばれる。彼女らの一族には収入領地を持たないが、王宮の西庭園を住まいにしている。お人好しなので収入があると直ぐに困っているものたちに分け与えてしまう仁徳ゆえに恩義に感じた者達から有形無形の援助が絶えない善意の循環者である。

「そう買いかぶられても困りますわ。目に見える範囲で助ける事ができるのを助けているだけですから。小さい従者達よ、貴方達はよき主にめぐり合いましたね。彼はひねくれ者で娼婦大好きな道楽者だけど、眷族は大事にするから安心して庇護に頼りなさい。」

「公、私に対する評価が酷いです。」

「でも、一昨昨日は3人買ってお楽しみだったのでしょう?」

「・・・・・・・・・ご主人様・・・・・・・・・・・・・」

剃りあげた頭に一房髪を残している皮服の男が騎馬建国公。荒野の遊牧民達の長が帰順したのが初代となっている。もっとも今は遊牧民の諸族の長が持ち回りで公爵位についているのだが・・・・・・・・・要は遊牧民のまとめ役にして王国との調整役だな。独特の騎馬戦士文化を持っている彼らの働きなくして王国の物流と牧畜は成り立たないから一つの国家をまとめる公王ともいえる。

「黒髪の少年よ、汝が護衛官の隙を見事突いたのを聞いた。我らが家族にならんかね?」

「えっ!おいらなんかを家族にしていいの?」

「王国のものは見る目がない、孤児を見捨てて善き種を見逃す事に・・・・・・・・・・護衛官ほどの男の隙をつくのであれば優れた戦士の素質がある。無血で事を運ぶ泥棒として考えても敬意に値する。優れたものが家族ならば我も鼻が高い!!」

「彼らは氏族というゆるい血縁集団でまとまっているけど、外部の優れたものを一族に入れることを喜ぶし、孤児などを見たら自分の子として育てるのが義務と考えているんだよ。」

「義務ではない。善き子供こそ我らの宝だ！　金銀は綺麗だが増えたりはしない。家畜は善き子供を得ればよく増えるし、人の子は自らが増えるのみならず一族の名誉と富を増やしてくれる。黒髪の子供よ、法務官に愛想尽かしたら我が元に来るがよい！」

「ありがとうございます・・・・・・・・　公爵様」

三本の角に毛の生えたとがった耳、金色の猫目に紋様の入った青黒い肌、一見して人外だと判るのだがどの人外かよくわからないのが人外公。実際に古妖精、獣人族、鬼族、竜人族、魔族の血が流れているが、伝説によれば魔王家の流れを汲むとも言われるが真偽のほどは判らない。建国当時は魔王国から追われた人外緒種族とか人外種族と人族の混血などを人族連合、魔王国双方から守るための安息所を作るために帰順したのが初代だ。ちなみに当時の魔王をぶん殴って勇者を叩きのめしたのが二代目でその故事から公式の場では小手を身につけていることから鉄拳公とも呼ばれるな。ちなみに当代のチャームポイントは肉球。桃色で可愛いから機会があったら触らせてもらうのも悪くない。

「どうも、肉球が可愛い人外公です。触るかね？」

「（ふにふに）・・・・・・・・いい感触・・・・・・・・・・癖になりますね。」

「公爵様、貴方の種族はなんになるのですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・その質問に答えられるものは誰も居ないのだよ、少年。あまりにも種族が入り乱れすぎて人外公家全ての外見的特長が一致しないのだよ。今言われた種族以外にも、雪女や小人、巨人に人狼、飛頭蛮、三目族等など下手すれば混ざってない血族がないくらいに混血が進んでいるのだからね。」

「補足説明すると彼ら人外公の領地では種族間の差別が驚くほど少ないのだよ。ある意味人族連合と魔王国との緩衝地帯でわし達商人の交易都市として重要な場所でもある。勿論外交上での交渉地としてもな。」

「へぇ・・・・・・」

そして最後になるのが藍色の蓬髪を鉢金で後ろに流し、服の上から粗末な腰布をまとい、両手足に鎖のついた腕輪をしているのが東方建国公。初代は戦争奴隷出身で開放公とも奴隷公とも言われている。彼の家の家臣達には戦争奴隷や従軍娼婦、各地の奴隷達の子孫が仕えている。戦争奴隷出身という家柄からか武門系の役職についているものが多く、公爵家自体も解放奴隷戦士団なる私兵集団をもって王国の軍事を担っている。弱きもの、虐げられし者を守る事を家訓とし王国の奴隷禁止令を認めさせるために裸で一騎駆けをした愛すべき馬鹿者の末裔である。

「法務官よ、そういえば我が娘との縁談話はどうなったかな？」

「すいませんがその話はなかったことに・・・・・・・・　宰相閣下にお断り申し上げるようお願いいたしましたが・・・・・・・・・」

「ふむ、残念だ・・・・・・・・　君ならば我が東方建国公家を預けても悪くないと思ったのだが・・・・・・・」

「買いかぶりすぎですよ。それよりもこの姉弟に何かありましたら力添えのほうよろしくお願いします。」

「うむ、弱いものであろうと誰かを思いやり幸せになろうと足掻き理不尽に抗う気概ある限り、我は君達の力となろう。」

「「はい、よろしくお願いします。」」

しかし、濃い面子だ！

そして仕事にならないし、本当に彼らの目的は珍獣見物だな（笑）

六大建国公と孤児姉弟（後書き）

何か人物紹介だけで終わった気が・・・・・・・・・・・・・・・

酒が切れた。

六大建国公と宰相閣下（前書き）

あらすじ　六大建国公の紹介、変人ばかりだこの国は大丈夫なのか？

六大建国公と宰相閣下

六大建国公達が我が庇護下に居る姉弟のことを気に入ってくれたらしい。
この人たちも癖が強いから、気に入ってもらえるまでは大変なのだが腐っても建国公、建国以来の名門中の名門！建国記なる御伽噺に由来する生きた伝説の末裔だから弱き者、抗う者達に慈悲をたれてくれるだろう。

でも農園公、貴様の言動は奥方とご子息に報告させていただく！泣き言は家族会議でこぼすがよい！！
と思っていたら、同僚達が早速書類にしたためてる！　こんなときだけ仕事が速いぞ！
「農園公の奥方から公の身辺で目に余ることがあったら報告して欲しいと依頼されているので・・・・・・・」
そっか、貴殿の実家は公からの援助で独立した家系であったな。公自体が流れを汲むといえ傍流で本流のところに婿入りしたから・・・・・・・・・・・・・・

公、心中お察しします・・・・・・・・・・・・

「あまり農園公を追い詰めぬようにな・・・・・・・・・・・・」
騎馬公・・・・・・・・貴方にも心当たりが・・・・・・・・・・
「いや、うちの女性陣は騎馬戦士でな、男衆よりも強いんだ・・・・・・・・　戦いは男の仕事と押し付けるくせに負けると男の癖にと折檻するんだよ・・・・・・・・・・・・・」
背中がすすけてる・・・・・・・・・
「まだいいさ、わしなんか財布の紐を握られているんだから・・・・・・・・・・・・・・・」

商会公・・・・・・・・・・・・貴方まで・・・・・・・・・・・・

この国の貴族には女性を御せる者がいないのか？

「我はいけるぞ！！」

開放公！！　でも、娘さん御せてないですよねぇ・・・・・・

侍従長が心労のあまり倒れてましたよ・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・子育てに間違えたかな？」

否定はしませんが、あれはどう考えても忌々しき異世界人（をたく）が持ち込んだ同人誌（やおいぼん）が原因だし・・・・・・・・・・・・あれ、国外や城外に持ち出していないですよねぇ・・・・・・・・？

「一応国防の長と諜報の長が心血注いでますよ、あんなろくでもないものを世界に流出でもしたら、魔王と勇者の戦い以上の損害が出る！！」

宰相閣下！！

どうしたんです？

「ワシの畳いわしを持ち去った法務官（はんぎゃくしゃ）に仕事を持ってきただけじゃよ。あと、うちの法務官を引き抜くのはやめてくれ！私が引退できなくなる！！」

あくまで自分本位なんですね閣下・・・・・・・・・・・・・・

そんな馬鹿な話している間に

「法務官！　姉弟どんぶりしたって本当？」

王兄王妹（へんたいども）が現れた！

逃げろ孤児姉弟！！　こいつらが諸悪の根源だ！！

六大建国公と宰相閣下（後書き）

缶ビールだと筆が乗らないね

王族兄妹と妄想言語（前書き）

あらすじ　変態が来た

そして下品表現多数あるので気に入らない方は回れ右

パソコン閉じて写経しましょう。

王族兄妹と妄想言語

「ねぇねぇ、法務官。この子達が貴方が毒牙にかけた姉弟？　黒髪の子を舐るように眺めたあとでその黒髪を撫でて愛撫し口付けてしごいて髪にたんぱく質をトッピング？次に髪の生え際とかうなじに唇を這わせて、背中を攻めていくんだわ。しなやかで男性的特長がまだ現れない筋肉をほぐすように撫でていって背骨沿いの感覚帯を栄養状態が悪い体を揉み解して血の巡りを流れるように室と同時に体を高ぶらせるんのよ。高ぶって栄養を欲しがる体にほら僕の栄養を分けてあげるとばかりに白いたんぱく質を口いっぱいに解き放つの・・・・・・・・・・・・・」

王妹陛下王妹陛下・・・・・・・・妄想が駄々漏れです。
そして、私は異性愛者でその妄想は姉が出てないではないですか・・・・・・・・・・

「ん？姉？　そりゃ、法務官（ふたり）×黒髪孤児の交合（からみ）を物欲しそうに見て目覚めていくのですわ！！」

「殿下、何に目覚めるのですか！何に！！法務官保護下の孤児姉弟はごくごくまともな子供ですよ！！貴女様のような手遅れな腐れ同人女とは違うのですからその聞くもおぞましい妄言を垂れ流すのはやめてください！！」

「宰相、あなたも言うわねぇ・・・・・・・・」

「そりゃ言いたくもなるでしょう！！　何が悲しくて国王陛下との絡み本を目にしてしまう不幸を背負わなければならないのですか？」

「大丈夫ですわ、法務官×宰相もありますから・・・・・・・・・・・・・」

ここで反乱起こしても私は後世に納得してもらえるよね・・・・・・・・・

「だから我らは王になるならば協力を惜しまないといっているだろう・・・・・・」

商会建国公・・・・・・・・・・貴方様の所では確か王妹殿下の本を印刷なされて・・・・・・・・・・・・

「言うな、あれは後悔している・・・・・・・・・・。確かに印刷物はよく売れて利益率もよかったのだが工員達（特に男性陣）の精神的打撃が大きくて心身症を発症して毎晩悪夢にうなされている状態なのだよ。」

「侍従長の件も存じているだろう法務官、彼のような被害者を出さないために我々は一致団結して王妹殿下を駆除しなくてはならないのだ!!」

開放公・・・・・・・・・・・・・

「ねぇねぇ、黒髪の少年。私のところに来ない？法務官のところよりいい暮らしを保障するわよ！」

「王妹殿下、子供をだますのはよくない！」

「騎馬公、騙してないわよ！綺麗な服着て可愛い女性に傅いているだけで安楽に暮らせるのよ。一般庶民ましてや孤児では一生無理な生活よ。」

「一生無理なのは理解するが、安楽とは言いがたい。少年よ、家族からの忠告だ！君は我が元か開放公等の建国公、最低でも法務官のところに身を寄せるのだ。間違っても王妹殿下の下に向かうなんて事は人として大事なものを失うまねはよすのだよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・　この人そんな危ない人なんですか？騎馬公」

「危ないかどうかは人によりけりだな。命の心配は最低でもしなくてよいだろう、生活の心配も・・・・・・・・・・・・　男としての尊厳と精神衛生が損なわれるのは覚悟しておいたほうがよいだろう

よ。」

「孤児弟、この御方は王妹殿下。現国王の妹君で在らせられるが、少々奇矯が過ぎるので二人きりになるのは避けたほうがよいよ。」

「はい、旦那!!　殿下は危険殿下は危険・・・・・・・・・・」

孤児弟は人外公の後ろに身を隠す。礼儀正しいのか殿下方のほうに一礼するのを忘れては居なかったのだが・・・・・・・・

本気で王妹殿下および忌々しい異世界人駆除法を制定したほうがよいのかな?

「ちょ、ちょっと!法務官、その法案今年で4通目よ!まさか本気で制定できるとでも・・・・・・・・・・」

「通るまで申請したまえ。ワシも事あることに上奏しよう・・・・・・・・・・・・流石に侍従長×宰相(わし)なんて悪阻ましい物を触手とフタナリショタ化なんでわけのわからぬ味付けで精神的陵辱をされたのだからな!!」

どんなジャンルなのですかそれ?

「私も少々興味ありますわね。殿下あとで見せてくださいます?」

「勿論喜んでご招待いたしますわ庭園公。我が書庫はこの世界一のコレクションを誇っていますのよ。」

そりゃ、世界で唯一だろうな。そんな代物!!

「まぁ・・・・・・・・・・」

鉄杖公!!　まさか貴女まで・・・・・・・・・・・・・・・・従者殿、申し訳ないが公を殿下の部屋に近づけるのだけは阻止してくださらないか?手を振って・・・・・むり?　そうだよなぁ・・・・・・

「ご主人様、この状態は何なのでしょうか?」

「孤児姉よ。気にしたら精神が持たんよ。」

「孤児姉ちゃん、貴女も女の子だからこんなのは大好物でしょう。

お近づきのしるしにあげるからよかったら遊びに来て。」

「「でんか!!」」

「孤児姉よ。これ受け取ったらお前らの孤児院に対する補助の件見直すからな!!」

「ご主人様、そんな無体な・・・・・・・・・・・・　申し訳ございませんが王妹殿下主の許可が出ませんでしたので私宛の贈り物は謹んで辞退させていただきとうございます。」

「あら、そう残念ねぇ・・・・・・・・・・・・　法務官のあんなところとかこんな痴態とか・・・・・・・・・・・・・・・」

「えっ!!」

「もどれ!!　もどってこーーーーい!!」

思わず孤児姉の方をゆすぶる私、あっちの世界に行ってはいかん!!人として大事なものが失われるぞ!!

はっと気がつく孤児姉、取敢えず一安心だ（ほっ

ところで王兄殿下（ろりこん）は？

「幼い子と聞いてみれば黒髪は男だし、姉は終わっているし・・・・・・・・・。まぁ宜しくな、ちっこいのども。」

興味対象（ようじょ）がいないので普通にまともだった・・・・・・・・・・・・

仕事に取り掛かりたいのですが皆さん・・・・・・・・・・・・

王族兄妹と妄想言語（後書き）

名前を考えるには酒で脳が萎縮しておるのだろう・・・・・・・・・

今回は変態話　次回は変態がいるのかな？

孤児姉弟が一番まともな気がするのは・・・・・・・・・・・・・・

王族兄弟と法案議題（前書き）

あらすじ　王妹殿下の妄想駄々漏れで男性陣げんなり。
今日はしらふで書いてます。

下品につき注意。
嫌いな方は回れ右してクルアーンを詠唱してなさい。

王族兄弟と法案議題

そういえば六大建国公が揃い踏みなんて珍しいですねぇ・・・・・・・

「弟よ、今日は御前会議の日だろう。いつもタタミイワシ駆除条例を上奏しているお前からしたら忘れているほうがおかしいぞ。」

兄上、私がいつもタタミイワシを目の敵にしているみたいな言い方しないでください。目の敵にしているのは仕事を押し付ける宰相閣下なんですけど・・・・・・・　早く楽隠居して貴族年金で悠々自適に暮らしたい。

「無理だな、法務官。君に抜けられたら、宰相府の仕事が滞る。能率にして3割減だ！」

王兄殿下、その具体的な数字はどこから・・・・・・・・・

「そりゃ、対応する書類と付随する資料の量からだよ。さりげなく混ぜられている仕事もそうだけど、上奏する法案とか実務者向けの資料とかは判り易いと歓迎されているからなぁ・・・・・・・　貴族官僚どもは凝った言い回しに時間をかけすぎるから作成速度が断然遅い。彼らは法案を詩作か何かと勘違いしているのではないかな？恋文として見ても駄作だが嘔吐剤として売りに出せば一財産作り出せるぞ！」

「それに時々混ぜ込まれる冗談罠的法案（ジョークトラップ）あれの固定的愛好者（ファン）が結構いてそれを楽しみにして会議に来ている貴族も結構いるようですわよ。」

冗談で作成した書類を確認もせずに回し回されて、法案として上奏されたときには本当冷や汗ものだったのだが・・・・・・・

「いやぁ、あれは秀逸でしたなぁ。【法務官引退勧告】まさか自分で上奏していたとは・・・・・・知らなかった。　しかも、後釜まで

しっかり指定して会議で議決されたときには冷や汗ものでしたよ。」
「その後の指定された後釜君の孤軍奮闘が見ものでしたよ。」
「いえ、ちゃんと引継ぎ書類とか人材にも気を配って置いたのですけどねぇ・・・・・・・　まさか、１０日も持たなかったのは予想外でしたが。」
「その様子を裏から何日持つかと賭けをしていた法務官の台詞ではないな（にやり」
「あの賭けは楽しかった。３ヶ月に賭けて金貨一枚すってしまったのはとても痛かったが・・・・・」
「ワシは5日だったが・・・・・・・」
「殿方は残酷ですわね、私は数日と持たないものを見世物にしたりなぶりものにする趣味はありませんでしたけど我が鉄杖の従者は９日と賭けて多少儲けていたようでしたが・・・・・・」
「それを元金ごと取り上げた公のお言葉とは申せませんな。」
「いえいえ、あのお金は困っている方々への助けとなるように従者が自ら差し出したものです。おかげで借金の形に売られそうになっていた娘さんとか保護できてうれしいですわ。」

従者はそのときの様子を思い出してうなだれている。かわいそうに・・・・・・・鉄杖の従者も庭園公に惚れた弱みがあるだろうからなぁ・・・・・・・　逆らえないだろう。

まぁ、賭けは成り行きだよ!
折角、引退できて嬉しかったから彼を信じているということを表したくて１０年は持つでしょうと話したのが切欠で、いや某は一月くらいとか、我も我もと馬鹿貴族どもがのってきたのは予想外だったのだが・・・・・・・
その後釜君、顔出ししていないなぁ・・・・・・・・
どうして上級貴族の嫡男として教育を受けた我が無役で貴様のような下っ端が法務官なのだと聞かれたからじゃないよ本当に（白々しく

折角、本人がやる気も実力もあるといっているから言葉に甘えて引退して悠々自適の年金生活しようとした矢先に問答無用で連行されて復職させられたのは未だに恨みに思っているけど!!

「ご主人様ご主人様、怒りを静めて沈めて・・・・・・・」
「だんな、人相が悪くなっているよ!!」
姉弟になだめられる・・・・・・・・・　最近、疲れているのかな?

「【法務官引退勧告】も面白かったが、【下着は白に限る】法案も中々白熱しましたな・・・・・・」
「あれは何時も堅物ぶっている老伯爵が『否!白い肌に黒の下着!そのコントラストが正義だ!』だの熱血的に一席ぶちかましたのが驚きましたぞ。」
「騎馬公も下着は帯に限るとか言っていたではありませんか」
「うむ、王都の者が着るみたいな形の三角の布切れは脱がし安すぎて安心できん。後乗馬のときあれだと痛いのだからな。」
「遊牧民らしい観点ですわねぇ・・・・・　文化の差を感じますが。」
「ご主人様、白がよろしいのですか?でしたら私も今後とも白で・・・・・」
「まてまて、それは自由でいいから!!」
「慕われておるのぅ、法務官。これが異世界語で【ヤりポ】というやつか?」
「やってないし蒸し返すな!!」
「でも下着くらい自由にさせてほしいですわ。」
「でも、陛下のハートマークは勘弁願いたいですがあんなのどこで手に入れるのです?」
「特注品らしいですわよ、お兄様のは・・・・・・・・・・・」
「納得・・・・・・・・・」

「だんな、結局その法案はどうなったんですか？」
「会議は紛糾してねぇ・・・・・　それぞれに趣味主張で押し通るものだから派閥を超えて混戦となったよ。最後に王妃様が近衛連隊引き連れて馬鹿貴族ども（王族、建国公、法務官含む）を威圧して終わり。この法案は可決されなかったな。」
「当たり前だ法務官！！幼女に着せる下着は白だけでなく水玉もよい縞パンもそれぞれに風情があるものだ！　子供っぽい木綿の下着も可愛らしいし、わざと大人ぶって絹の黒を着ているアンバランスさも捨てがたい・・・・・・・　もちろん最高は裸だがな！！」

「「王兄殿下（ろりこん）はどこで道をたがえたのだろうか？」」
「それが判れば現在至尊の座を戴いているのでしょうがねぇ・・・・・　勿体無い。」
「諸卿ら、君達は勘違いしている。我らが祖王は何を願い国を立ち上げたのか！それは自分らが踏みにじられず幸せになる一角を欲しただけであろう。偶々それが国の形をしているだけであって、我は幸せになれる一角を得ていて誰かの幸せのために力を振るえる。それが王位という形ではないが十分すぎるものであろう！違うかね？（副音声：趣味道楽（ろりっこをめでる）で幸せなんだから、それの邪魔になる王位とそれに付随する義務仕事は勘弁願いたい・・・・・・・・・）」

なんかいやな副音声が・・・・・・・・・
どこかの神か悪魔が演出しているのか・・・・・・・・・・　勘弁してほしい・・・・・・・
「殿下の言うことはいちいち正論のように聞こえるが、本音は面倒だから嫌と・・・・・・・・」
「判ってはいたが、判ってはいたが・・・・・・・・・・　はぁ・・・・・・・」
「この王兄殿下といい王妹殿下といい如何してうちの王族には変態

が多いのでしょうか?神よお憾み申上げますわ。」

憾まれても困るよー!!
この性癖は神々の園でも煉獄でももてあましそうだからかんべんしてほしいんだよー

なんか神の声が届いた気がする。
気持ちはわかるが、何とかしてと祈りたくなる。

そろそろ時間だ、近衛の衛兵が開始が近づいた旨を伝えにくる。
姉弟、君達はどうしようか?

王族兄弟と法案議題（後書き）

さて、これから酒を買ってこう！！
つまみは千葉銚子沖のカツオだ！！

一匹あるから下ろして半身はたたきで半身はお造りか・・・・・・・・
漬けにするのもよいかな？

王族兄妹と御前会議（前書き）

あらすじ　変態の妄想第二弾。ろりっ子の下着について。

作者はカツオを仕込んでおいて酒を冷やしているところでつづっています。

王族兄妹と御前会議

さて、姉弟をどこに預けるか？
法務官室で待っていて貰っても良いのだがいろいろ国家機密（みられてこまるもの）があるし、同僚諸氏に見てもらうのもいささか気が引ける。あることないこと吹き込んだりする意味で。
かといって、預かってくれそうな知り合いも会議に出てくるだろうし・・・・・・・・・

「法務官の従者として連れてくれれば良いのではないか？」
「さすがに恐れ多いですし、口さがない連中にいろいろ言われた時自制できる自信はないですよ。」
「まぁ、あのような場は子供に見せるのはよろしくないですわね。」
「では、我が一族の天幕などは如何かな？」
「お主ら騎馬公の一族が城内において天幕を張るのは聊か不思議に思えるがあそこならば安全かつ快適であろうな。」
「助かります。下働きの者のところで手伝いながらというのも考えていたのですが、変な乱入者がいてちょっかい出されることを考えたら安心しておけますね。」
「うむ、王妹殿下の餌食にならないよう気をつけるし、商会公に間違って奴隷として売られないようにも気を配ろう。」
「おいおい、騎馬公。わしの所では奴隷販売は建国当時からしておらんよ。傭兵やなんかのあっせんはしておるがこれは自由意志だ。」
「守るでなく金の奴隷となって戦う、悲しいことよ。」
「お主ら騎馬公の戦士達も貸し出してくれんかのう？高く評価するぞ。」
「それで一族を守る戦士が足りなくなったら本末転倒である。金はほどほどにあるから稼ぐ必要もない。もちろん一族から旅立ったはぐれがどこで働こうが名誉にかかわらぬ限り問題がないがな。」

「それだけ訊ければ十分ですよ。」

「商売の話はそれまでにして行きますかね皆様方？」

守護辺境伯（あにうえ）の言に一同ぞろぞろ連れ立って行く。途中騎馬公の配下の戦士に姉弟を預け会議場へと向かう。

会議場には主だった官僚や上級貴族などがほぼ集まっていて、六大建国公と王族兄妹とその引き立て役である我々は口々に貴族のあいさつを受けるのである。

「久方ぶりでありますな建国公の皆様方。六人そろい踏みとは滅多に無い珍事。いったいどうしたのですかな？」

「まぁ、なんじゃ……　あの法務官がどんぶりをした姉弟を見物しに行っただけなんじゃ。」

「法務官殿も性が出ますなぁ・・・・・・・、後腐れのない孤児を態々どんぶり用に抱え込むとは。」

「抱え込んでない！！」

「可愛い子だと聞いてたのですが連れてこなかったので？」

「さすがにそこらの孤児を皆様のような高貴な御方の前に出すほどの礼儀を仕込んでおりませんのでねぇ……　うっかり無礼打ちにされたら可哀想ですし騎馬公の天幕に預かってもらってますよ。」

「商会公。先日の取引はどうも助かりました。またうちで・・・・・・」

商売の話やら、時候の挨拶やら長々と話が続く・・・・・・・・・・・・・・・

それも国王陛下がお付きと共に会議場に入ってくるまでのことである。

国王陛下が入場すると途端に静まり返り、進行役となる議長の元粛々と会議は進められる。
現状の報告があり、些細な変更点についての説明あり、国政上の不備とそれの改善策についての議論があったりとかまじめに進んでいる。

今回は孤児院について議題提出しようかと思ったのだが、急ぎの分の資金は前任者に支払われていたであろう運営資金を財務官権限で法務官である私が仮に管理することにして預かっている。
前任者がピンはねしていた分も多少あり、我が手元にはそこそこ潤沢に運営資金があるわけだ。
後は、信頼おける者に仕事を上げる意味合いで管理して貰えれば良いなと思うのだが誰がよいのだろうか？次回に期待ということかな？

そんなこんなで会議も進み、最後の議題となる。
「最後に【忌々しき異世界人の情報を国家機密とする】ですが、なにかありますでしょうか？」
「私は断固反対ですわ。あの素晴しい文化を世界中に発信しないのは大損害ですわ！！」
「否、あれを流された日には世界は深い傷跡を残すことになる。あんな危険な精神汚染物質を今すぐに焼き払いたいが・・・・・・」
「ワシとしては異世界人を何所か処理しておきたい気分じゃが」
「それは宜しくないでしょう。忌々しき異世界人とは言えあの知恵は貴重。知恵だけは・・・・」
「異文化とはいえ宰相閣下×国王陛下なんて不敬にも程がありますぞ！」
「あれの作者は王妹殿下なんですが・・・・」
「触れて欲しくなかったのだがのぅ・・・・・・」
「宰相閣下、お労しや・・・・・・・・・」

「妹よ！あとで話があるぞ！」
「我が兄たる国王陛下、大丈夫です。怖いのは最初だけですから！！」
「実の兄に対して強いる書物を作るなぞ外道にもほどがあるぞ！！」
「そういえば他の異世界人たちも泣いてましたなぁ・・・・・・・
そういう文化があるのは認めるけどここに来てまで見たくなかったと・・・・・・」
「うちの所で保護している異世界人もあれだけは出してはいかんと。同類と見られたくないと懇願してましたが・・・・・・」
「そういえば商会公の所の印刷所の行員たちは回復したのですか？」
「いや、彼らはいまだに悪夢にうなされておるよ。考えてもみたまえ、この世界最高峰の技術を誇る我が印刷所で最高の書物を製作しているのかと思いきや、低俗なエロ本。しかも、題材が自分だった日には精神的衝撃が大きすぎて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「うわぁ・・・・・・・・」
「うわぁ、と言っている貴殿も題材にされておるぞ！　相手はお主の所の小姓だったかな？」
「聞きたくなかった・・・・・・・・・・・・」
「これに対する治療法はないのだろうか、この女性陣が次々に腐化する現状に我々は手をこまねいていなければならないのか！！」

「次回の議題で【実在の人物を題材にした異世界的男色文学の製作所持の禁止】をあげようかと思っていたのですが。」
「法務官！今上げなさい！　さっさと決めよう！！　詳細は後で決めればよい！！われわれの精神が擦り切れる前に！！」
「では皆の衆、【実在の人物を題材にした異世界的男色文学の製作所持禁止】法の制定について・・・・・・・・・・・・・・・」
「賛成じゃ賛成！！」
「異論は認めないぞ！！」

「あれを世界に向けて発信するわけにはいかない。」
「創作の自由は？」
「あれを真に受けて婚約者にがんばれと応援された若手貴族の嘆きに比べれば・・・・・・・・・・」

うわぁ・・・・・ひどい、むごい！婚約者まで腐化するなんてなんて不幸だ・・・・・・・・・・
などという同情の声上がる中賛成過半数で成立してしまった。
罰則とか施行期日は私がつめるのだろうな・・・・・・・・・・・

因みに反対票は王妹殿下とその一派の女性貴族たち。
「しくしく、あの愛の物語がつづれなくなるなんて・・・・・・・・・」
「男性の横暴ですわ！！」
「文学の神よ！われら忠実なる使徒はこのような弾圧にも負けずに生き様を貫いて見せますわ。」

架空の人物でおおっぴらにしなければよいだけの話じゃないか。
男性諸氏の春画本と同じく・・・・・・・・・・
女ってやつは・・・・・・・・・・

王族兄妹と御前会議（後書き）

王妹殿下のジャンルの手広さは・・・・・・・・・・・
この手のネタを外国に持ち込もうとすると本気で怒るところがありますからなぁ・・・・・・・・・・

イスラム圏とか、アメリカとかも本気で怒らないと同類と見られるらしいからこぶし振り上げて怒っていたのを目の当たりにしたことがある。

自分が題材にならなければ良いやと作者は思います。
ホモだのと噂流された日には枕をぬらしましたよ、リアルで。

馬族戦士と黒髪孤児（前書き）

場面が変わって馬族の天幕の中です。主人格は馬族の戦士です。

馬族戦士と黒髪孤児

王宮の執務室、この部屋の主である法務官なる役職の男にこの姉弟の無事を願われた。
我が主である騎馬公に頭を下げ自分の配下の者が恙無く過ごせるように慈悲を乞う。

主も彼ら姉弟を家族として受け入れると言い切る。
いくら孤児がだれのものでもない宝だといっても、原石のままでは意味がなかろう。

我は一時の事と思い、庇護下におきし姉弟が安らかなれという法務官の願いを叶えんと我らが王都での領地【室内天幕】へと誘う。
姉弟は興味津々でものめずらしげに我らが天幕を眺める。
天幕の管理者、我らが長老格である語り部は孤児姉弟を見て、主から家族として扱うよう言われた事に対して成るほどと言う。

何が成程なのか判らぬが、このような幼き姉弟を庇護にも置かず朽ち果てるに任せる事に関しては王都の者の無慈悲と見る目がないと申した主の言い分にも納得がいく。

語り部は姉弟に楽にするがよいと肉汁に羊酪（羊のバター）を溶かしたものを振る舞い、腹が減っているだろうと麦焦がしを与える。
姉弟は感謝の意を示し、食える事に感謝をし食えない弟妹に詫びるかのように食べる。
我らが部族の礼から外れるが食べることに感謝をし食べる事の出来ない者に詫びる姿勢は好感に値する。

語り部が我に教えるに彼の師弟は法務官に拾われるまで、食うや食

わずの生活を送り枯れ草の入った麺麭でさえご馳走であるという暮らしをしていたという・・・・・・・・・・・・

いまだその暮らしをする弟妹に自分だけ美味を食する生活をする事を詫び、生きるために盗みをせざる得なかった自分を恥じ、今食える事を感謝する彼ら姉弟を見て王都のものに関する嫌悪感を強める。こんな食うものをとることもままならぬ土地でよくも無事に生きてこれたものだ。

形(なり)を見るに痩せこけて常に飢えている事が見て取れる。周りの騎馬戦士たちも子供を飢えさせる現状に怒りを隠せない。

法務官なる男は自身がそれを知らなかった事に関して自らを恥、王都の官僚である事を恥、盗みをした姉弟を許し自らの保護下においている。盗みの被害者であった優れた戦士たる王宮護衛官、彼の強さは我等騎馬戦士たちの間にも伝わっているがそれに対して単身言葉で立ち向かい保護するがために己が身命を賭ける姿勢に敬意に値する。

姉弟が盗みに向かう理由も飢えたる弟妹のためで下のもののために己が身をかける行動は我等騎馬の民の子供達ですら行わぬものである。行いは幼く不器用であるが、我等が一族に迎え入れるに十分な資質を持っている。

【室内天幕】の女衆も痩せこけたる子供を見て、自らの子供の飢えたるを考え怒りの涙を隠さない。

女子衆と言う者は男に対しては無慈悲だが子供に対しては保護欲の塊となる。この天幕にはないが羊の群れなども子供なのだろうかなと思ってみるが聞かない事にする。多分聞いて予想通りの答えだった日には我は立ち直れない。聞かないで理想を夢に見る。男の処世術だ。

語り部は云う、黒髪の弟のほうに生きるすべを与えよと・・・・・・・

この子は不器用で自らの庇護下の者の為に体を張ってしまうだろうからと・・・・・・・・・・

長老たる語り部の願いを受け、まずは黒髪の子供の速さを見る。
飢えて体力がままならぬ身であっても、我ら戦士達の腕をかいくぐり逃げ回る。一人ならば十分逃げおおせて二人だと辛いか、生き残るには周りを見て世界を肌で感じてみろと教える。多対一の逃げ方をまず教える。小さい子供に戦いは宜しくない、戦いは戦士達の仕事である。年端も行かない子供が戦いの場に挑むなぞ、大人たちの怠慢である。
それでも黒髪の子供は一人守られるのではなく、自らを守り弟妹達を守るための術を教えて欲しいと乞うので短剣で相手の懐に入る隙をつけと教える。黒髪の子供は重たい武器で戦う体ではなく、我等の様に人馬一体で突進するではない。見てみて隙を突いて生きて逃げて最後に生き延びた事で勝つ術を教えるのが大事かなと思う。

臆病者と嘲る勿れ、弱きものは生きてこそ物事を成し遂げる。弱いからこそ弱い戦いがあるものだ。
黒髪の少年は悔しさに唇を噛み締めながら受け入れる。強ければ金があればとつぶやきながら・・・・・・・・・・・・・・・

なんて事だ、失う悲しさ辛さを知って愛さえ知らぬその身にて自らが愛を与えようとしているのではないか・・・・・・・・・・
自らの辛さを知って誰かに押し付けないで戦いの場に立とうとするその身は主が見出したる誇りに至る道を進む子供だと知る。

語り部は云う。王都には彼が保護したいと願う子供達がいる。彼らは原石のままであるが、そのまま捨て置くにはもったいない。王都

が要らぬというのならば我等で貰い受けても問題はあるまいと・・・・・・・・・・・・・・・

主の思いを知る。善き子供は富だけではなく誇りを増やす幸いの道だという教えを・・・・・・・・・・・この子供は自らの生き方にて法務官に認めさせ保護を勝ち得たものである事を・・・・・・・・・・

この子供が助力を欲したとき我は助力しよう！同情ではなく家族として。

同胞たる戦士たちに言う、この黒髪の子供は主の家族として我等が一族して値するものであると。

願わくばこの黒髪の少年が幸いなる道を歩まん事を・・・・・・・・・・・・・・・

馬族戦士と黒髪孤児（後書き）

酒はよいねぇ・・・・・・　カツオのたたきを食べないで外でユッケ食べていたけど旨いねぇ・・・・・・

馬族長老と孤児姉（前書き）

あらすじ　孤児姉弟は危険人物（主に変態的な意味で）から安全を確保する意味で騎馬公の天幕に招待される。

ちなみに一人称は馬族の長老格で語り部。

馬族長老と孤児姉

大地と風の申し子たる荒野の民。我等が詩をはじめるは人族連合なる街の民が泥の中を転べ回る豚であったときより古く、魔族と称する諸々の民が獣のごとく種々の世界に適応するよりも古い。
我等は荒野の成り立ちと共に生まれ、その地に生まれついた馬や牛や羊や山羊等の諸々の獣達の助けを借りて一族を率い、詩を紡ぎ、恋を語らい、戦を楽しむ。

街の民も諸々の民も己にあるものだけで満足せずに忌むべき盗人と化して世界を食いつぶしていく。
我等荒野の民、その歴史は古けども正しくとも力がなく、力なき正しさはもはや正しさといえない。
何故、隣人を慈しみ　何故、身内ですら敵と出来るのか？

我等答えを知らず踏みにじられる日々を送る。男達は短槍を手に守ろうとするが、異界より来る勇者なる外道どもは生きたまま同胞を焔で甚振り三日三晩かけて焼肉にする。女達は子を守ろうと剣を手に馬を駆るが魔王なる非道の君主は従わぬ我等を大地で覆い生きたまま大地への奉げ物とする。
子等は日に日に少なく、このままでは正しき歴史を伝えるものも世界の正義も途絶えるかと思われたとき。

一人の街の民、声を上げる。
戦火の絶えぬ故郷を前にして正義とは何かと小さな声を上げ、踏みにじる強者に何の意味があろうかと叫びを上げる。
彼は小さな焔。なれど見縊る事勿れ、小さな種火でも世界を焼き尽くす焔の渦になる事もあることを知れば。

まず、従いしは王族、狭間の地にありて人族の防人たらんとする荒ぶる男。叫びをあげた初めの男に、自らの眷属の行く末を案じて王位を与え人魔全ての弱きを守る盾とならん。

次に従いしは奴隷。　人族の尖兵として死ぬべき定めを助けられ、声上げた男に命を借りを得た戦士。万を超える軍団従えて、咎なき囚われ人を解き放つ解放の旗手とならん。

復習の狼煙を上げたるは商人。不誠実たる人族に家財全てを奪われて、信義は何かと声上げる。黄金の壁を築きつついまだに答えは得られずに・・・・・・・

癒しの御手が従わず、その身を削り慈悲の詩ついに光を失いぬ。更に世界を癒そうと命を燃やす癒しの御手に涙ながらに問う男。出来るからだと癒しの御手に傷ふさぐまで待たれよと陣の一つに留め置く。

涙流すは農園主、手塩にかけし実りの詩が一度の戦で灰となる。飢えたる民をまとめつつ、一度燃えれば百を植え、千が燃えれば億を植え、大地全てに実りを齎す。彼が歌うは実りの詩よ、紡ぐは戦が終わりてあとの百をも越える実りの季節。

懐深きは異形の男。人魔全ての世界から外れた哀れな孤児を鉄の拳で守りつつ、男に慈悲を願い出る。彼欲するは聖域を　小さな小さな聖域を　些細な願いの代償に勇者を殴り魔王を叱る。彼の叫びは血の叫び、声を上げたるその後に残るは異形の朽ちたる骸。

最後に従う我等が祖。千をも越える民草全て、戦支度に身を包み。世界を包む戦の傷に否と声上げ狼煙を上げる。

千の千倍超える敵、万をも超える悪意の渦に。人魔全てを敵にして、
万超える日々声上げる。何故戦うと、何故話さぬと・・・・・・・・・
・・
千の千倍超える敵、万をも超える悪意の数に、億の至誠を示して治
め。六の光と一つの盾と数多の民が壁となり、戦のおろかさ訴える。
人魔全ての敵は我等かそれでもこの血で終わるなら。世界の傷が癒
えるなら、惜しくはないと笑い往く。

ついに音を上げ人と魔は初めて話を交わしたる。
戦の愚かさ身に染みて、一度剣を収めたる。

子等よ忘れる事なかれ。一度抜かれた剣は振られ、百をも超える悲
嘆を得ると・・・・・
今一度の戦火に世界は二度と耐えられぬと・・・・・・・・・・・・・
・

小さな娘よ、黒髪の子供よ、我等が長が迎え入れたる新たな家族。
この詩　その身に刻み込み自分と誰かの幸いのため生きてく事を切
に願う。
何度でもこの天幕にこられるがよい。
そのたびにこの詩で迎え入れ、君達の物語を聞くことを楽しみにし

よう。

長話をしてしまったかな？　この年寄りの癖だと笑い飛ばしてくれ・・・・・・・

これ、女衆！　小さな子が飢えてしまうではないか！
肉汁に羊酪に麦焦がしを存分に用意しなさい。炙った肉もあるだろう。脂の乗った所をたっぷり与えなさい。
この王都は捕らえる獣も摘む事のできる草もない乾いた地。人の心も乾いて手助けもなくここまで生き延びたのが奇跡。
痩せこけた手が子供の証か？飢え死にする一歩手前ではないか？

ワシが長話をするからだと・・・・・・・・・それはすまなかった・・・・・・・・

さぁさぁ、子供達よ存分に食べなさい。我等天幕に居る荒野の民はお前らを家族として迎え入れよう。
遠慮するでない・・・・・・・・・・・・・・　感謝もいらない。
子供に食わせるのが大人衆の役割よ・・・・・・・・・・・・・
なに、食えぬ弟妹に遠慮しているだと・・・・・・・・・・・・・・・
幼い身で何を考えている。食って力をつけて弟妹達を守れるようになるのがお前等の成すべき事よ・・・・・・・・・・・
さぁ、食え！　力が足りねば法務官をせっついて庇護下に入れさせてしまえ。
あの法務官なる男も無力を知って無知を恥じて今頃叫んでいることだろう。あれも昔語りの一族の、始まりの王族の末。理不尽に踏みにじられる幸いをと願う声を無碍にはしまい。

本当にこんな子供に理不尽を強いるなぞ王都の者は無慈悲にも程がある。戦士よ、孤児院なる場所を押さえておけ。必要ならばこの宝

の原石を荒野の民で貰い受けて富と名誉を増やそうではないか。

黒髪の子供よ、何故食べぬ？
なんと、弟妹が満ち足りぬ現状で自分だけ満ち足りるわけにはいかないと・・・・・・・・・そして盗みを犯した自分が家族として迎え入れられる資格がないと・・・・・・・・・
大丈夫だよ、法務官なる男は君達だけを満たして満足する男ではない。だから食べて良いのだよ。
それにその盗みは弟妹のためであろう。方法は良くなかったが思いは十分理解できる。荒野の民が受け入れずとも我語り部の名において君達を受け入れよう。
よしよし、大変なところで生きてきたんだねぇ・・・・・・・　ここに居れば大丈夫、飢えも理不尽も全て守ってあげよう。

いらない？
寧ろ守る力が欲しいと・・・・・・・・・
馬鹿な子であるな。　戦士よ、黒髪の子供に戦いを教えな。

庇護よりも誇りを守り大事なものを守る術を得たいとする気概をつぶすのは大人のなすべき事ではない。

娘よ、法務官が戻るまでは時間がある。女衆と共に手仕事でもしてみるか？
お前の手も働き者の綺麗な手だ。皺とか胼胝とかがあっても恥じ入ることがない綺麗な手だ。
簡単な刺繍ならば作る時間もあろう。
複雑なものが作りたければいくらでも居てもいいのだよ。

なぁ、女衆。
この娘が好いてくれる者が居ればそいつは幸せものだよなぁ・・・・

・・・

見てみたいと思わないか？
働き者の良い娘が幸せな番となるところを・・・・・・・・・・・・

小さな客人にして新しい家族よ。
君達はどんな物語を聞かせてくれるのかな？
ワシは楽しみじゃ・・・・・・・・・・・・・・

馬族長老と孤児姉（後書き）

今回も微妙に別視点でありました。次は法務官視点に戻るかと・・・・・・・・・・思いたい・・・・・・・・・・・・

護衛官と孤児姉弟（前書き）

あらすじ　法務官は会議をして、孤児姉弟は荒野の民馬族の天幕で歓待を受ける。

護衛官と孤児姉弟

御前会議から数日、平穏に日々を過ごす。
私と姉弟は法務官室に出勤し、宰相閣下(たぬきおやじ)の無茶振(しごと)りを処理をする。
騎馬公の一族は姉弟を気に入ったのか、我等の姿を見つけると姉弟を招待したりする。

そこで、姉弟は刺繍を習ったり、戦いの術を習っているようだ。
そのまま馬族の子になってしまいそうで苦笑する。
あの強面で異相の集団は実は女子供に甘い連中であるのは知る物は少ない。
あまり甘やかさないでくれ、私の手から離れたとき飛び立てなくなったらどうする！

戻されたら、こっちでも文字や計算を教え戯れに法務官予算の計算などをやらせてみたりする。
なかなか覚えがよく、計算や検算には重宝する。
財務官も師弟の計算能力を買っていて、どっちか譲ってくれなどとほざく。

そんなに欲しければ孤児院に子供はたっぷり居るのだから自分で引き取って仕込め！！
「そんなことといわずにさぁ、法務官。私と君との間ではないか」
「馬鹿いうな！宰相閣下から来る仕事を君が受け持ってくれるならば譲るけど・・・・・」
「それは勘弁願いたい。」

誰か代わってくれぬかな？

寮に戻れば、寮母を初めとする女衆は姉弟を猫可愛がりして構う。
同居する男衆も年の離れた弟妹か、子供のように扱いやはり猫可愛がりをする。
何人か王兄王妹殿下（変態）の薫陶を受けた馬鹿がハァハァしているのが居るがそれは駆除される。

正義はここにあったのか！
昨今、忌々しき異世界人の影響か変態が多くなりすぎて対応に苦慮していた私は思わず涙する。

「だんな、疲れているんじゃない？　仕事なんか誰かに押し付けて休んだら？」
孤児弟よ、それをしようとして失敗しているのだ。この国にはまともな人材が誰もいないのか？
「そうだったらだんな、孤児院の皆に国事を仕込んで乗っ取ってやろうじゃないの！そうすりゃ皆だんなの仕事を取ってだんなは隠居で皆でおいら達のような子供の出ない国をつくればいぃ！」
ははは っ！　良いな、その夢。保護が切れたら私の従者として学ぶか？

「元よりだんなはその積りだろう。」
違いない・・・・・・・・・　その為には色々学んで、力をつけないと・・・・・・・・・・・・・・・・
最低でも王族（へんたい）に物申す程度の力をな・・・・・・・・・・
「だんな、王族のルビがおかしいのだけど？」
間違ってないぞ、お前等みたいな小さい子供が好きな変態とか後は口に出したくないような趣味趣向を持ったものとか・・・・・・
・・・・　実家の流れがなければ亡命するか下野しているところだ。
如何してあんな変態に権力があるのだろう？

「ご主人様のご先祖がお譲りになったからでございましょう？」
痛いところだ・・・・・・・・・・

今更王位とか取り戻そうとも思えないし、仕事増えるのは面倒くさい・・・・・・・・・・・・

「でも王兄殿下曰く、法務官様が事務方をあらかた片付けるから仕事しなくて楽だと・・・・・・・・・・」

王族め！！　この恨みはらさで置くべきか・・・・・・・・・・・・・・・・

革命だ！！　この国を共和制に導くのだ！！
王族貴族は断頭台（ギロチン）にかけて・・・・・・・・・・・・・・・・

「「法務官様！！」」

私は壊れかけているみたいだ・・・・・・・・・・・・・・　少しでも正気のあるうちに・・・・・・・・・・・・・　引退しないと・・・・・・・・・・・・・

そんなある日、法務官室で仕事していた我等三人のところに王妃とお供の方々が訪れる。
いつもの暇つぶしなのだろうが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・面倒だ。

護衛官と孤児姉弟（後書き）

ユッケが食いたい！！　生肉を買いに市場に行こう！！

護衛官と若作り（前書き）

あらすじ　王妃は邪魔だ　さっさと自分の巣に帰れ！
このロリバ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（作者は粛清されました

護衛官と若作り

作者は粛清されたので、この話は続きません・・・・・・・・・・・・・・・（ｂｙ王妃様）

視点：法務官
ぶはっ！何で私まで被害にあうのだ！
婆に婆といって何故悪いと言う気概は認めるが、私までまき沿いにするのは許せる行為ではない。
作者、謝罪しろ！！

「ごめんなさい」

そして、忌々しき異世界人と変態王族と、濃すぎる六大公をなくして私の緩々隠居ライフを描くのだ

「無理です」

なんでだ！！

「だって、君が濃いから周りも濃くしないと・・・・・・・・・・・・・・・」
げふっ（吐血

「だんな、だんな！！
「ご主人様！！」

あれ？変な夢を見ていたような・・・・・・・・・・
「よかった・・・・・・・ご主人様が過労のあまり壊れてしまったのかと・・・・・・・・・・」
それは否定しないから、そこに居る王妃様にも仕事回さないとね
「あらあら、まぁまぁ、仕事ですか？」
ええ、この書類にサインをしていくだけの簡単な仕事です。
よく読まずにサインください・・・・・・・・・・
「なになに、【王室化粧費削減案】？化粧費ということは個人用の支出ですわよねぇ・・・・・・それを削減？何故ですの？」
いやぁ、例えば王妃様がお供の方と一緒に使われている化粧品、例えば保水クリーム一つにしても銀貨５枚の掛かるのですが、それでこの孤児姉弟の孤児院が一日食費その他まかなえるのです。
つまりその厚塗りを・・・・・・・・・・げふっ（法務官は粛清されました

ふ、復活して話さねば・・・・・・・・・
本当に人の言葉尻を捕らえて粛清するのはやめてください！！
ともかく、仕事しない王族に払う金はないと言いたいだけなんですから！！
そもそもあなた方王族の生活は誰から成り立っていると思っているのですか！！
「そりゃ、私のびぼ・・・・・・・・・・」
黙れ、
民草から納められる税金から成り立っているのでしょうが！！
その税金で厚塗りしようとロリショタ道楽に走ろうと、結果を出しているのならば文句は言いません！！
今現在、この姉弟を見てみなさい！！
生まれに親が居ないからと家畜ですらもう少しまともな扱いされるのに、飢える寸前まで放置されて私が見つけなければ道を踏み外すか飢えて朽ち果てる寸前だったのですよ！！

王室は何をしているのですか？
出来ない王室ならば出来るやつに任せて私達みたいに下野しなさい！！

但し私に振るのはだめですよ！！
私だって隠居したいんですから！！

判りましたら厚塗りをする時間を仕事に当てて、厚塗りする化粧品の代金を光ささぬ者の為に当てて全うな王族となってくださいませ！

そして、道楽で私の庇護する姉弟を見物しに来るではなくて、彼らの苦難の一つでも味わって世界の理不尽さにでも怒りなさい！！

「護衛官、この腐れ法務官を粛清しなさい！！」

「御意！！」

私の意識は刈り取られる・・・・・・・・・・・・

それでも私はこの王族に対する呪詛を緩めるつもりはなく、それで駄目ならば国ごと滅べと叫びを上げる・・・・・・・・積りだったが声も出ない・・・・・・・・・・・・・・

護衛官と宰相閣下（前書き）

あらすじ　法務官は粛清されました。どうなる王国、積み重なる書類仕事で宰相の胃壁のライフはもうゼロよ！！

護衛官と宰相閣下

わたしは言いたい事だけ言って、朽ち果てるのは構わないが姉弟はどうなるだろうか？
騎馬公と荒野の一族が保護してくれるとよいのだが・・・・・・・・・・

この期に及んで他力だな・・・・・・・・・・・・・・・・

視点：護衛官
不敬なる法務官、とりあえず意識を刈り取る程度に打撃を与えその口を黙らせる。
某もその言い分はわかる。
何故に、孤児弟が某の懐を狙わざるを得なかったのか？
そこを考えてみれば、王室が下々にまで遍く光を当てて見捨てられるものが居なければ法務官は叫びを上げる必要はなかった。

現に、法務官と我々の間には孤児姉弟が立ちはだかり法務官の盾になろうとして懐剣に手をかけている。
国民である姉弟が王族であろうと構わぬと立ち向かおうとしている姿を見て王妃様は何も思わないのか？

・・・・・・・・・・多少はその忠義に感じ入っているようであるが、このままでは姉弟が誅されてしまう・・・・・・・・・・・・・・

どうしたら良いのか？

「おいらが、酒場でこの護衛の騎士様が王妃様の年ほどの祝福と乾杯をといって・・・・・・・・・・酒場の連中に５０回ほど乾杯をさせていたよ・・・・・・・・・・その酒手は某が払うとかほざいて・・・・・・・・・　それで良いカモだと思って財布狙ったんだよ！！

五十回でも足りないと近隣の酒場の酔っ払い集めて千回やって年につりあうと叫びあげていたし！！」

ま、まて！少年！！

某そんなこと覚えてない！

５０回も乾杯させたら・・・・・・・・・・・・・・

あれ？王妃様？　どうかなされましたか？

「へぇ、貴方も私のことを厚塗りの婆と・・・・・・・・・・・・思っていますのね・・・・・・・・・・・・・」

ま、まって・・・・・・・・・・・・・・

「この不忠者を地下牢に！！」

「待ちなさい！！　王妃様、年齢だけでそんなに切れてどうするのです。齢数百歳の分際で！！」

さ、宰相閣下！！

貴方まで死亡フラグ（異世界語）立ててどうするのですか！！

「そもそも、王妃たるもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（以下半時ほどほど説教）」

「はい、」

「法務官と護衛官の処分に関しては私に一任なさいませ。出来ぬの

ならば私はこの場にて下野いたします。」

あれ？まとめてしまったかな？

そして私のお咎めは？

「法務官は実例として化粧代をあげたが、君の場合は故意に王室批判をしたから免職くらい覚悟しておいたほうがよいだろう！」

いやっっほーーーーーーーー！！

やっと変態から開放される！

あれ？聞こえてた？

ま、待って・・・・・・・・・・・・・・　某まで不敬罪の適応範囲？

のぉぉぉぉぉっぉぉぉぉぉぉぉ・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・（護衛官は粛清されました

法務官と辞職願（前書き）

あらすじ　法務官は粛清された。護衛官は地下牢へ　作者はノリで書いているがつじつまが合わせられないぞ。

法務官と辞職願

ふむ、私は王妃相手に一席ぶちかましたあと、護衛官にやられたのだな・・・・・・・・・・・・・・

護衛(ばか)官の分際で手加減しやがって・・・・・・・・・・・・・・・・

少なくとも死ねば、王妃や何か諸共に出来るだけの算段つけていたのに・・・・・・・・・・・・・・

何のためにコネを作り続けていたのやら・・・・・・・・・・・・

「ご主人様・・・・・・・・・・・・・」

孤児姉か、君はここに居る必要がないのだよ、弟もせめて騎馬公のところに保護を願い出なさい。

今ならば私一人の不敬罪で済むのだから巻き込まれることは宜しくないでしょう・・・・・・・・・・

「だんな、あんたの叫びはおいら達のために色々張ったんだ！ここで逃げたら弟妹達に顔向けできないだろう！

「ご主人様、私はどこまでもお供いたします。」

馬鹿どもが・・・・・・・・・・・・・・主人の意向を無視してからに・・・・・・・・・・・・・・

貴人(アジール)聖域法の適応外だぞ。下手すれば私の巻き添えで悲惨な事になるだろうに馬鹿なやつらだ・・・・・・・・・

「だんなのほうこそおいら達の事を無視すればうまく立ち回れただろうに・・・・・・・・・・・・」

それは出来ぬな、貴族だし・・・・・・・・・・・・・・・・・・

さて、どうするかね？

取敢えず見張りとかいないところを見れば、せいぜい叱責か減給処分。爵位降格程度が関の山か、命にかかわるとかはなさそうだから今のうちに逃げるとするかね・・・・・・・・・・・・・・・・

「だんな、やけはよくないぜ！」

否、今の機会逃して自由になれることはないのだ！！

紙紙と・・・・・・・・・・・・・・

赫々云々と・・・・・・・・・・・・・・

辞職届

私こと法務官は王室の長たる王妃の自らの行為を省みぬ民草侮蔑の言動に我の仕える主ならずと判断いたしましたので本日をもちまして法務官の職を辞し、爵位を返上いたします。
なお仕事のほうは、まとめてありますので心あるならば遂行して民草の生活の一助となれば幸いでございます。

返還物。

金貨１０枚（孤児院運営費）
法服３着
私物一式と私服
タタミイワシ３０枚

服を脱いで畳んで・・・・・・・・・・・・・・・
「ご主人様何故裸に？」
それはね、王国で働いた給金で買った服だからだよ。
王室に属して衣食住整えるなぞ恥ずかしいではないか！君たちは従う必要はないけどね・・・・・・・・・・・・

さて行くかね！

私は裸のまま寝台を起き、執務室で全てを片付けた後王宮を後にするのである。

止めるものが居たのだが、
「今の王室から受け取るのは私の恥とするところなので裸のほうがマシ！」
といったら黙って通してくれた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

宮廷魔術師はせめてもの餞別と股間光線（はだかのおうさま）演出魔法をかけてくれる。
女性陣たちは目を隠しつつも指の間からチラミしているし、ガンミしているのもいる！

そんな私達の前に宰相閣下が現れたがそれを無視して外に出る。
「法務官、悪いようにしないから戻らないか？」

戻って王室の犬となれと？
私は今の王室の現状に昔王位を譲って行った先祖に顔向けできないし、私としても愛想が尽きたといったら引き止める気力もなくしたようだ・・・・・・・・・・・・

近衛たちも現れたが、苦言を発した忠臣なのか乱心者なのか判断に困るようなので判断に苦慮しているようなので
私は辞職願を出し、王室から賜られたものを全てお返しできるものをして外に出るところだといったら、生暖かい目で通してくれる・・・・・・・・・・・・

かくして私は裸のまま城門を出て城下町を歩くのであるがどこに向かうかね・・・・・・・・・・・・
城門であった衛士と騎馬公の騎馬戦士と開放公の解放奴隷戦士団戦士が居たので今までの経緯と姉弟の為に骨折りしてくれたことを主に感謝する旨を伝えええると槍を胸にそろえたり、鎧の胸を叩く其々の最敬礼で送り出してくれる。
それに値するものではないのだが・・・・・・・・・・・・・・・・・・

まずはどこに行くかな？
守護辺境伯館か？そこにいっても現当主（あにうえ）に負担かけるだけだし、他の諸侯に頼る気もしない。
建国公だって力関係が在るから頼るに頼れない・・・・・・・・・・・・

姉弟だけならば何とでもなるが私までとなると無理だろうし・・・・・・

まずは孤児院行くかな？

法務官と全裸賢者（前書き）

あらすじ　法務官は裸で出奔。

いつもどおりに下品な感じ
いやならば、回れ右して旧約聖書でも読みやがれ・・・・・・　あれも下品だが、そもそも基督教が上品であったためしがない

裸でいると腹が冷えるのだ。
取敢えず孤児姉弟と共に寮に戻って着替えと小銭を取りに良くのである。

まぁ、小銭といっても金貨にして数十枚、これは自力で手に入れた金だし（主に貴族との仲立ちとか紛争仲介とかの意味合いで）着替えに関してもその金だと思えば・・・・・・・・・・・・・・

あと、自宅に仕事持ち帰ったときの用意として法務官印（偽造）を持っていかねば・・・・・・・・・
宰相印とかもあるがこれも処分しないと・・・・・・・・・・・・
色々面倒だからってはしょっていたのがばれてしまう。

寮につくなり
「服着ろ！」
寮母のきつい一言・・・・・・・・・・・・

「馬鹿には見えない服を着ているのだ私の世界樹が見えるとは寮母、馬鹿だろう！」
「黙れ椎の実！！」

泣いていいですか？
「ご主人様のは立派です、世界樹とまではいかないまでも千年樹位の」
姉よ、そのような慰めは・・・・・・・・・・・
「大丈夫です椎の実だろうと不能だとしても私のお仕えする主はご主人様一人です。」

余計にダメージが・・・・・・・・

「そもそも、ふざけた法案で爵位を逃げようとする魂胆が丸見えなんだよ。」
「仕えるに値する主でなければ、けり捨てる程度であったし。」
「で、あんたはどうするのだい？」
「都落ちして、魔王国にでも入るかねぇ・・・・・・・・人族連合は腐りきっているし・・・・・・・・」
「そうかい、二人は任せていきな」
「願おう」

そうして一人行こうとするのだが、馬鹿が二匹（こじしてい）がついてくる。
仕方がないので孤児院に行って、王室からの嫌がらせに注するように警告をして困ったときに頼る先を伝えにいこう。もっとも私のせいといわれればそれまでだが。

ちなみに服はまだ着てない・・・・・・・・・・・・
着ようと思ったが全裸で都落ちというのも嫌味がきいていて王室の格を下げるにちょうどよかろうと・・・・・・・・・・・・
服は孤児弟に持たせて、孤児院へと向かう・・・・・・・・・・・・・・

王都では私の話が流れているらしく、孤児のためだけに意見して追い出されたとか、全裸で追い出されたとかうわさが流れる・・・・・・・・・・・・
衛士が止めようとしても、市民が壁になって私の行方を妨げない・・・・・・・・・・

何故だ？　全裸の変態がいるならば市民は通報して袋にするだろう、民度を疑う！これでは極東半島のヒトモドキがあいごーあいごー泣いているのを鑑賞しているのと変わりないではないか！

そんなこんなで孤児院に着くと、六大建国公の手下達が屯している。聞いてみると王妃の報復で孤児院が狙われる可能性があるから夫々の元に保護しに来たと・・・・・・・・・・・・・・・

普段は見捨ててこのときとばかりに行動を起こす六大公の軽率さにあきれ果てて涙が出てくる。

まるで子供という資源を争奪している図にしか見えない・・・・・・・・・・・・・

怒りに駆られて私は語る

「この馬鹿者どもが！孤児たちを保護する積りでいさかいを起こすとは何事だ！！そのために孤児たちが傷ついたらどうするのだ！！判っているのかこの脳筋ども！！それでは護衛官と同類だ！！　そもそも困っているものは他にもたくさんいるだろう、孤児院だってここのほかに貴族主催孤児院あるのだが、そこでは孤児たちが売られているのだぞ！！知らなかったとかいうのは許さない！！　大人が困らない、親がいれば困らないというのは間違いだ！そこの奴隷公配下の戦士！！お前の幼馴染は親である王宮士爵が病気のため薬代のために花を売っている事実を知っているのか？そこの農園公配下の農園主！君の馴染みの娼婦は子供を養うために泣きながら体を売っているのだよ！！それを知らないなんてどうかしている！！そこの商会公配下の傭兵！！君の友であった者の子息は親がいないことをいい事に親類の下働きになっている事を知っているのか！お前等考え違いしていないか！この孤児院だけが不幸の塊といわないで、この国！否、この世界の不幸に憤れ！！」

「「「法務官様！！」」」

「元だ！　どうせ自ら栄達の道を捨てた身だ、一つお節介をしてやろう。ここに紙があり、偽造法務官印とかある。これで王都中、いや、国中の不幸なものを掻っ攫って幸せにしてやれ！　先に挙げた者達だけでなく、そこから芋づる式に不幸の連鎖を叩き潰せ！」

書き書きぺたぺた・・・・・・・・・・・・

六大公爵私兵団宛依頼書　　依頼者：法務官

・王都にて寡婦、貧困者の子女等が止む得ず私娼化しているので、それを保護し更生の道をつけてほしい。尚、遠因として王国功労者年金の支給不備等があれば合わせて調査されたし。
・王室孤児院以外の貴族孤児院での実態調査、衛生・栄養環境について不備があれば報告されたし。尚、孤児院自体に問題ありと判断されたときは強制的に孤児等を保護し安全等確保されたし。
・孤児等の養い先に対する追跡調査。孤児等々が養い親の元で適切な養育を受けているか調査されたし。尚、虐待等の疑いあれば保護をお願いしたい。

上記の案件について必要とあれば適切な武力・逮捕権の行使も容認する。但し、要報告の事。

「法務官様、官印の偽造は死罪と聞いてますが・・・・・・・・・・・・」

「元より出奔して無事でいられるとは思っていない、ならば死ぬ前に嫌がらせの一つでもしてやろうと思ってやっているだけだ。君たちは私に騙されて命令されたといえばよい。君達の主人は度量が在るし力もある。悪いようにはしないだろう・・・・・・・・・・・・」

「法務官様？死ぬ気では？」

私は答えない、彼らに重荷を背負わせる気はないし死ぬつもりはないから・・・・・・・・・・・・・・・・・・

せめて私に従うこの姉弟の先だけは誰かに頼めないものか・・・・・・・・・・・・・・・

騎馬公の戦士がいたか・・・・・・・・・・・・

彼も首を横に振り好きにさせろという・・・・・・・・・・・・・・・・・・そして自分もと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿がいる。

奴隷公の戦士も農園公の小作人も商会公の傭兵も人外公の隠密兵も庭園公に恩がある自由戦士も・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ついてくるなどという。

「必要ないからついてくることはないよ、できれば助けた人たちのために助力をお願いしたい。」

取敢えず、実行されてから人道的な行動を偽命令といって取り消すことは出来ないだろう。

したら王室の権威が失墜するし、受け入れて体面を取り繕う事しかできまい。後々、消しにかかることもあるからそれに対する保険として彼ら六大公の戦士達にお願いしたいのである。

「全裸賢者様・・・・・・・・・・・・・」

だまれ！　そんなへんな称号で呼ばれたくはない！！

少なくとも、王都の不幸の一欠位は救う手伝いが出来た事に満足して王都を出るのである。

しかし、王都と嘔吐は似ている言葉だ、吐き気がするのまで同じなどとは笑い話だな・・・・・・・・・・・・・・・

法務官と全裸賢者（後書き）

今日は印度鮪を解体していたのだが飽きた

法務官と衛士（前書き）

あらすじ　書類の偽造は違法です。　変わらず下品です。合言葉は『黙れ椎の実』

法務官と衛士

あっ、その前に孤児院へ挨拶兼事情説明するの忘れていた。
私たち主従は孤児院へと入り、院長に面会に行く。

「服を着てください法務官様！！」
「私の世界樹がそんなに見苦しいかね？」
「黙れ！椎の実！！」

私よく戦ったよね。ここで終点（ゴール）についてしていいですか？
「ご主人様、院長先生は自分が中指より立たない事を僻んで言っているだけですから・・・・・・」

孤児姉よ段々ひどくなっているよ。
院長ともども揃って打ちひしがれている・・・・・・・・・
孤児姉の教育誰がしたの？

それは兎も角、私が退任して裸になる経緯を院長に話すと
「馬鹿ですか！私らなんかのために・・・・・って、言いますか裸になる意味合いはないでしょう。」
「まぁ、それはそれとして、もしもの時にはここにいる六大公爵の私兵団に頼って欲しいのと私とは無関係であることを言って子供たちを守って欲しいのです。」
「そんな事言えるわけないでしょう、子供たちは法務官様のおかげで生きながらえることができたことを知っていますし私自身そんな恥知らずなことはしたくありません。」
「私は裸の狂人だよ。そうでなくても不敬罪、下手すれば反逆罪に問われる身だ。賢く回りなさい。」
「子供たちになんと言えば・・・・・・・・・」

「何も言わなくてよい。新しい保護者として六大公爵がついたと説明すればよいだけだ。」

そんな話をしているうちに、衛士が兵隊の集まる孤児院を不審がって現れるのだが門前で私兵たちに阻まれる。そんなゴタゴタで不安がる子供達。捕まるのも仕方ないかと表に出る。

「服着ろ変態!!」

「人を王族兄弟みたいな言い方で呼ばないで欲しいな。衛士君。」

「黙れ椎の実!!」

「この世界樹を見て椎の実とは君はとても自信があるのだな!性愛神殿で君の事は聞いているよ・・・・・・・・『うわぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!』」

衛士は叫びを上げた。興味深深に聞き入っている私兵達、何の話だかわかっていない子供達、衛士の同僚たちは衛士に肩をたたいて慰めている・・・・・・・・項垂れた衛士に代わり別の衛士が聞いてくる。

「椎の実がどうかという話は置いといて、何故六大公爵の私兵集団が集まっているのですか?」

椎の実かどうかは大事なことなんですが、この私の世界樹を椎の実などと言うのは君たちの目が腐っている証拠・・・・・・・・

「黙れ椎の実!!」

凹んで良いですか?

「赫々云々で・・・・・・・・　法務官様、今となっては元なのでしょうが彼に対する報復で孤児院が狙われる前に我々が夫々の主の意向で来たわけで・・・・・・・・・・まさか鉢合わせするとは自分らもびっくりでありまして・・・・・・・・」

と凹んでいる私に代わり解放奴隷戦士団の隊長格と思われる戦士が衛士に説明をする。

衛士たちのほうでも

「成る程、それでこの命令書は？」
無理やりに復活した私は
「中身を確認してもらえばわかるのですが、辞職するに当たって纏めて置いた仕事の依頼書をこの孤児弟が間違って持ってきてしまいましてねぇ・・・・・・　ここに私兵の皆さんがいるついでだからお願いしておこうとしただけですよ・・・・・・・・　前々から私娼の扱いとかで問題が出ていていたものですからねぇ・・・・・・」
「私娼ねぇ・・・・・・・　確かに生活苦から身売りする女性が出ているのは否定しませんが、どうして私達衛士に依頼されないので？」
「依頼書は書いておいといたのですが王宮の方で忘れられているのかもしれません。若しご協力の意思があるのならば六大公爵の私兵団への協力という形で参加してもらえるか？情報提供だけでも助かるのですが・・・・・・・・」
「成る程、この依頼書は王族や貴族への嫌がらせみたいですね。元法務官様。」
「実際嫌がらせですよ、恩給とか年金を払ってなくて私娼に落ちる案件を個人的に知っているからそれに対する牽制とか王国の貧民政策にケチをつけているわけですからね。」
「一応日付は確認してくださいね、偽造ではないですから。」
「成る程、インクが乾いていませんが日付も印鑑も正式なものですし問題ないでしょう（にやり」
衛士達も判ってくれたようだ・・・・・・・・・・・・・・・
「但し、その粗末な椎の実はしまっていてください！子供たちの教育に悪い！！」
「しぃ・・・・『黙れ椎の実！！』」
未だ股間光線効果魔法は効いていて見えないのだけどね。

だから私の世界樹を確認できなくて椎の実などと言っているのである。

「黙れ椎の実!!」

「服着ろ服!!」

「全裸賢者様だから仕方ないですよ。」

めいめいに好き勝手言われている。私は貴族様だよ!平民風情がそんなことを言って・・・・

元だった・・・・・・・・・

「ご主人様が全裸の変態であろうと全身全霊をもってお使え申し上げますわ。」

孤児姉、その無駄に私が変態である前提の忠誠・・・・・・・・・・・・

涙が出てくるのだが・・・・・・

嬉しくてか悲しくてかは敢えて言うまい・・・・・・・・・・・・

イソイソと服を着る私の背後では・・・・・・・

「孤児達の養子先について私達の情報のほかに町の顔役に聞いてまいりましょう。巡回のついでとなりますがよろしいですかな?」

「それは助かる、ついでに寡婦とかで生活に困っていたりする者の情報も集めてくれるとありがたい。私娼のほうは我等が女性を買うついでに・・・・・・・・」

「それでしたらある意味商売敵の性愛神殿に問い合わせて情報を提供してもらうのもありでしょう。売春は否定していないはずですが、無秩序に素人に商売させて犯罪の餌食にされるのは彼らの教義に反しているはずでしょうから。」

「成る程、孤児院の奴隷疑惑などはどうしようか?」

「それでしたら限りなく黒に近い商人がいるのですが、背後に貴族がついているらしく手が出せなかったのを貴方方公爵家の威光で無理やり調査するのはどうでしょうか？私達衛士だけでは、権力も武力も足りないものですから。」

「判りました、そちらへの助力はお任せあれ。と言いたいですが一応主達にお伺いを立てないと・・・・・・・」

「では、決まり次第連絡を。元法務官様の遺願を果たすために！！」

まてぇ！遺願って死んでる前提で言うな！！

「えっ！でも、こんな依頼書ばかり出していたら貴族連中からにらまれて法務官様の人生詰みでしょ！」

否定はできないが・・・・・・・・・否定はしないが・・・・・・・・・

「だんな、きっと良いことあるって・・・・・・・・・」

こんな孤児(こども)弟に慰められるなんて・・・・・・・・・

兎も角、これで都落ち出来るかな？

「だめですよ、（元）法務官様。この作戦実行のために貴方様の知恵を借りないといけないのですから！！」

あれれ？

法務官と衛士（後書き）

椎の花の匂いって、アレに似ているよね。
判る方お返事ください（冗談

性愛神殿と全裸賢者（前書き）

あらすじ　黙れ椎の実！　法務官が服を着た。
やっぱり下品です。
嫌いな方は回れ右して希臘神話でも・・・・・・アレも夜這いだのいろいろだった。

前話１６日１６時１６分　狙ったわけでもないので重なってびっくり。

性愛神殿と全裸賢者

私はなぜか性愛神殿にいる。
私が立案依頼した貧民孤児等の保護の為、六大公爵の私兵と衛士達が共闘するに当たって孤児院では不適当な話が多すぎるのだ。

娼婦とか奴隷とか・・・・・・・・子供に聞かせる話ではない。
綺麗事だけど。

それに私の姿がいるとなれば、王室が黙っていないだろう。
私の捜索依頼が出されているようだし、孤児院に類が及ぶのは本意ではない。
それに此処ならば老若男女身分関係なしに来たとしても不自然ではない。
神殿側としても性犯罪の一歩手前にいる女性達や子供達を助けるのは神の御心に適うことであるし渡りに船であったのだろう。
商売敵等と勘ぐっていた我々は恥じ入るばかりである。

「いえいえ、下手な素人に安売りされては私共の売春行為事にけちがつきますでしょう。ほかの教育を受けた娼婦達だって商売あがったりになるのですのよ。そうなれば、彼女達の生活や権利が脅かされるのですから既存権益の面からも保護を行わなくてはならないのですのよ。」

「そんなことを言って美乳の神官様、顔が赤いですよ・・・・・・・・・・」
「うるさいですわ!!」

それは兎も角、王室と一歩違った権力である神殿側に匿われる事は我々にとっても安全であることには違いない・・・・・・・・・・・但し、孤児姉弟の精神衛生上悪そうなのは否定しないが・・・・・・・・・

「だんな、女性神官達から一緒に寝ようと誘われているんだが？いいの？」

「添い寝ですむならば良いけど、喰われるぞ（主に性的な意味で」

「・・・・・・・（赤面」

「多少はその方面に対して、知識はあったんだなぁ・・・・・・」

「だんな！！　そういうことは好きあった二人同士で・・・・・・」

「それはそれで否定しないさ、行為というものを学ぶのも本当に好いたものがいたときに傷つけずに行えるという面もあるのを否定してはいけないよ。」

「でもだんなの場合好きだからでしょ・・・・・・・・・」

「否定しないよ、彼女達は正直でおおらかな愛で包んでくれるからね。例え一時だったとしても彼女らが癒してくれなかったら世界はもっと殺伐としたものになるだろうし・・・・・・・・」

「おいらにはわからないな。」

「わからなくてもいいさ。でも、初陣を済ませるならば彼女らをお勧めするぞ。この世は男と女で成り立っている、彼女らに教わることはたくさんあるだろう。」

「あっちのことについてかい？」

「いいや、それよりももっと大事なことだ。」

「なんだろう・・・・・・・？」

「それは孤児弟、君が自分で見つけないといけないことだ。」

「不潔ですわ二人とも！！」

孤児姉もいたんだった・・・・・・　これは迂闊。

「不潔なものか、愛が不潔だったら生まれてきた我々はみな不潔で

はないか！」

「それはそうですけど・・・・・・」

「世界はもう少し寛容であるべきだ。性愛神殿（かのじょ）の神殿娼婦達のようにすべてに向けて愛を振りまき傷ついたもの、疲れ果てたものを癒し包み込む。彼女達のようにとは言わないけど誰しもほんの少しだけのやさしさを発揮していれば世界はもう少し過ごしやすくなるのだが・・・・・・・・」

「でも、それってご主人様の欲望・・・・・・・・・」

「うっ！！　ま、まぁ、私の欲望だったとして君には問題があるまい？」

「嫌なものは嫌なんですが・・・・・・　ご主人様が誰かとごにょごにょ・・・・・・・・・」

「父親を取られる娘の気分かな・・・・・・・・くくくっ」

「ご主人様！！」

「性的に愛を振りまくのは苦手でも優しさを振りまくのは色々な方法があるからね、そういう事も考えてみるがいいさ。」

「でもご主人様があっちのことを運動か娯楽みたいにとらえているのは嫌なんです！」

「それは否定しないが変えることは出来ない。何故ならば私は女性が大好きだからだ！！」

「・・・・・・・・・・・私のことも女性としてみてくれればいいのに・・・・・・・・・」

最後の一文は聞こえなかったことにしよう。

そうして十日程も過ごしているうちに次々保護された女性とかが神

殿に訪れる。
神官達は彼女達を労わり、傷ついたものがいれば神術で癒し続ける。
また、求めるものには処女膜再生神術(きれいなからだにもどれ)で痕跡をなかったことにする。
心までは癒しきることは出来ないがそれでも新しい一歩を踏み出す一助になれば良いなと柄にもないことを思ってみたりする。
「（元）法務官様、貴方がいたからこそ彼女達にも光が差したのですわよ。」
「いえいえ、貴女方を始めとする皆さん達が幸いになりたいという声を拾ってくれたから成し遂げたことですよ。私なぞただの嫌がらせで発案したに過ぎません。」
「あら、耳まで真っ赤ですわね。」
美乳の女神官、余計なところまで見なくて良い。
「意外とかわいい所もあるのですわね。股間の椎の実以外にも・・・・・・」
「私のは世界樹だ!!」
「そういうことにしておきますわ。（自称）世界樹の全裸賢者様。」

あの時はあなたの世界樹で私という大地に根付いてとせがんでいたものを・・・・・・・・・
「あらあら、種はいつしか大樹となるものですわ。」
「誰がうまいことを言えと・・・・・・・・」

さらに半月程が過ぎ、保護された人たちの感謝を受けたり・・・・・・
全裸賢者様と裸で感謝をされるのは勘弁願いたいのだが、主に孤児姉の機嫌的な意味で・・・・・・・
保護された街娼の一人が農園公の小作人と出来てしまって、孤児も養子にしてひとつの家族が出来たり。私はそのままで周りが変って

いくのも楽しいものだと眺めている。
何より、王族や宰相の無茶振りがないのが私の心の平安となっている。

保護した街娼達の中で仕事がないのは私の私財から孤児院の保母として住み込みで雇ったりしている。
仕事や受け入れ先があればそっちも良いが子供連れで受け入れてくれるところはあまり多くない。
子供も孤児院で受け入れて食住を保障すれば、少ない金額でもやっていけるだろう。

農園公の配下達の荘園とかで下働きの賄とか、奴隷戦士団の医務係の手伝いとかで受け入れてもらえるか私兵達経由で聞いてみるとしよう。

子供達の教育も行わないとな・・・・・　読み書き計算が出来れば結構重宝がって受け入れてくれるだろうし、親の方も一緒に教育してもいいかな?読み書きできないから騙されたと言う女性達もいるわけだし・・・・・・・

「親子して法務官様の教育・・・・・・・・・　そしてどんぶりにして美味しく頂く（性的な意味で」
女神官、そのネタは・・・・・・・・・王妹殿下と被ってますよ・・・・・・・・
項垂れる女神官・・・・・・・・・　聞けば、あんな変態ととか被るなんで最低ですわとかつぶやいている・・・・・・・・・　別にいいか・・・・・・・・

そんな、保護した人たちが幸いであればよいかなと思っていてもうまくいかないのが世の常で助け切れなかったものもいるのである。

性愛神殿と全裸賢者（後書き）

はい、下品です。
つぎは１９日１９時１９分　（いくいくいく）で攻めてみようかな。
これは実行できるかは保障するものではありません。

性愛神殿と叫びの祈り（前書き）

あらすじ　法務官の檄により街娼などが保護される。　法務官は椎の実。

グロ注意：１８禁にはしないよ　１５禁だってしたくはない。本気で痛みと向き合えるならば年齢なんて関係ないと思っている。

グロとか否定する読者がいるならば。回れ右して二度と私の作品を見るな！

グロとか肯定して楽しむ輩ならば、我が身に降りかかる拷問の数々を考えてみるがよい。

「早く癒しの神術の使える神官の元へ・・・・・・・・・」

運ばれる小さな体、手足は折れ曲がり体中に傷がつき、血にまみれた小さな体。

爪は剥がれ落ち、挙げるのは声にならない叫び！

嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああ
ああああああああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼ああああああああああああああああああああああああ嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああああああああ
ああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああ
ああああああああああああああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああああああああああああああ
ああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああ
ああああああああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼ああああああああああああああああああああああああ嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああああああああ

ああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああ
ああああああああああああああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああああああああああああああ
ああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああ
ああああああああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼ああああああああああああああああああああああああ鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああああああああ
ああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああ
ああああああああああああああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああああああああああああああ
ああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああ
ああああああああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼ああああああああああああああああああああああああ鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああああああああ
ああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああ
ああああああああああああああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああ

死にたくても死に切れない、だけどどうして苦しまなければならないのかわかっていても受け入れられないものの叫び・・・・・・・・・・・・

体はボロクズのようで、更に薬を使われたのか痛みという感覚を失われても体を傷つけられる不快感を失われていない。
寧ろ死ねたほうが幸せなのかと思える状態。
私はこの叫びが幸せになりたいと泣いているように思える・・・・・・・・・・・・・

鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああああ
ああああああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼ああああああああああああああああああああああああ鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああああああああああ
ああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああ
ああああああああああああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああああああああああああああああ
ああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああああ
ああああああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼

嗚呼ああああああああああああああああああああああああああああ嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああああああああああああ
ああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああ
ああああああああああああああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああああああああああああああああああ
ああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああああ

声を上げるたびにのどから血をあふれさせ、いきたいと叫びながら
小さな命は消えていく

そのいきたいが　生きたいのか往きたいのか逝きたいのか活きたい
のか行きたいのか　判らないが・・・・・・・・

何で死ななければいけないのか？
私は世界に問いかける！！

帰ってくるわけがない！　神は種族としての人間には興味はあれど
固体としては特定の変異個体意外には興味を示さない。
彼らは人の牧人であって、個人夫々の導きではないのだから・・・・
・・・・・・・・

私には抱きしめる事しかできない、ただ消えていく命に対して出来
る事なんてたかが知れている。

抱きしめて大丈夫だよと訴えかけても、壊れたモノは剥がれた爪であっても体を掻き毟り守ろうとする。叫びしか上げない口元でも残された歯を唯一の刃として噛み付いて肉をむしりとる。

私にできるのは抱きしめてささやきを続ける事だけ・・・・・・・・・・・・・・・

血肉は別に惜しくないが失われる小さな命は自らに執着しない。

本当ならば私が手を汚してでも死なせてあげるのが優しさだと思う。

殺して死なせて私はもたないのと叫びながら

鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああ
ああああああああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼ああああああああああああああああああああああああ鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああああああああ
ああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああ
ああああああああああああああああああああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼
鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼ああああああああああああああああああああ
ああああ鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼鳴呼

嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああ
ああああああああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼ああああああああああああああああああああああああ嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああああああああ
ああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああ
ああああああああああああああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああああああああああああああ
ああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああ
ああああああああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼ああああああああああああああああああああああああ嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああああああああああああああ
ああああああああああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼
嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああ

私にはなす術がない・・・・・・・・・・・・・・・・・

抱きしめて小さな命が尽きるその時まで、肉を掻き毟らせ、肉を噛み千切らせ、千の侮蔑と万の呪詛をその身に受け止める事しかできることはない。

体は傷だらけ、楽しむために薬漬けにして、生きている事が不幸なその小さな命に対して・・・・・・・・・・・・・・・

私は無力だ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

どれだけ時がたったのだろう、刹那の時かも知れない。私が気がついたときは小さな命と私の血肉とでまみれた姿で私は亡骸を抱いているのであった。

私の耳は私という存在がある限りこびりつかせているだろうこの夜のいきたいと言う叫びを。
私という存在がいる限り、叫びを上げねばならないのだろう。この小さな命のいきたいと言う叫びを、何故死なないといけなかったと問いかける叫びを！！

で、この子を痛めつけた糞野郎はどこのどいつだ！！
「・・・・・・・・・・・・・・・・・です。」

私は裏から手を回し続ける・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

性愛神殿と叫びの祈り（後書き）

うーむ、連戦の後は体が高ぶらない

性愛神殿と破門回状（前書き）

あらすじ　死んだ命は戻りません。　合言葉は黙れ椎の実！！

小さな躯を抱え、傷だらけの体となった私が正気を取り戻したのは顔を拭われる感触であった。
私を拭う孤児姉は血まみれの布巾をもって手の中の躯を眺める。

「孤児姉」
「ご主人様、この子は私達の妹分で・・・・・・・・・・・・・・・うっ・・・・・・・・・」
私は声をかみ殺す孤児姉を抱きしめ、傍らで無残な状態となった妹分を眺める孤児弟を抱き寄せるのである。

性愛神殿の神官たちも自らの無力さと世界の無慈悲さに怒りを隠せない・・・・・・・・・・

今は躯となりし小さな命をここに連れ込んだ衛士や私兵達は自らの求めぬ結果に涙を隠しきれて居ない・・・・・・・情に脆い馬鹿者どもが・・・・・・・・・・・まだ弔ってやれるだけ幸いだろう・・・・・・・・・・・・・・

「だんな、おいらは問いたい。なんでなんだと」
「答えは出ないよ・・・・・・・・・・・」
「それでも・・・・・・・・・・・」
「その前に孤児弟の妹分に大したことへのお礼参りが必要だろう・・・・・・・（邪笑）」
「うん！」

相手はわかっている、後はどうするか・・・・・・・・・・・・・

貴族に対する不逮捕特権は衛士では歯が立たないが、貴族ならば・・・・・・・・・・・

私兵達の中には爵位持ちも居るし、不逮捕特権を無視できる神殿勢力から誰か借りるのも手であるか・・・・・・・・

あくまでも正当な裁きの形でつめないと・・・・・・・・・・・・・

私自身が出てそいつを殴りたいが今は私も外に出れない身。誰かを代理に立てて・・・・・・・・・・・・

「おいらが・・・・・・・・・・妹の敵を取りたい・・・・・・・・・・・・・」

駄目だ、初陣も済ませていないない子供に血なまぐさい事をして欲しくない。

女神官も怒りを隠せない。教義云々より目の前の命が無残に散らされた事に怒りを感じているのだろう・・・・・・・・・・・

「破門回状をだします。これでこの貴族とその一族は破滅ですわ。」

成程・・・・・・・・・・・・・ついでだから商会公から手を回して兵糧攻めとしておきますか。

そうこうしているうちに、冥界神殿の弔い人が現れ物言わぬ躯を綺麗に整え囚われる前の姿にする。

これから大地の糧となるのにやさしい事だ・・・・・・・・・・・

小さな躯を弔って数日、貴族は頭を垂れ神殿に謝罪し縛に着くのである。

そこから芋づる式に奴隷商だのその配下だのが捕まるのである・・・

・・・・・・・・・・・・

私の役割は終わったかな・・・・・・・・・・・・・・少し眠りたい・・・・・・・・・・・・・・・

全裸賢者と孤児姉（前書き）

あらすじ　黙れ椎の実！　法務官は眠りについた

たっぷりの睡眠をとった、王族と宰相の馬鹿な仕事の押し付けがないととても快眠できる。

「ご主人様、二日ぶりのお目覚めですね。」
「二日か、今までの睡眠を取れなかった分ここで挽回しているのだな。」
「いえ、あの時死んだ私の妹分がつけた傷が膿んでしまいまして・・・・・・・・・・・・・熱出して生死の境さまよってましたが・・・・・・・」
「誤差の範囲だ。変わったことはあるかね？」
「いつもどおりに礼を言おうとする街娼や孤児たちにご主人様に王城に来るようにのたまう愚かなる王城の連中だけです。」
「では、朝食としようか。」
「今の時間だと夕食かと・・・・・・・・・・ご主人様。」

そんなに眠っていたのか・・・・・・・・・
王城の連中はともかく、礼を言いに来た連中には悪い事をしたようだな。
「いえ、皆様方は眠られるご主人様の邪魔をしたくないと外に控えてますが・・・・・・・・・・・」
先に言え！

部屋の外に行くと廊下にたむろするは街娼や孤児の群れ、それを見守るかのように神官や私兵達がいる。
私の姿を見て、涙ぐんだり近寄って平伏したり・・・・・・・・・・・・私に何の価値があるというのだ！

「我等を救い上げてくださいました法務官様。身命を賭して我等の為になした事柄のために御身を損なうなんて・・・・・・・・・・・・・・・」

「馬鹿を言うな！私は貴族王族に対する嫌がらせとして、発案しただけ。寧ろ、実行した神官や私兵、衛士たちに礼を言うがよい！」

「我等を覆う無情なる世界の形を焼きその牢獄を崩し上げたる種火は貴方様でございます。その一点におきましては事を起こせし皆々様方も法務官様のお叱りによって目覚めたと・・・・・・・・・・・・・・・」

ふざけるな！王族貴族は民草が幸いなるを守るがゆえにその地位にあるのだ！そんな当たり前のことに感謝なぞほしいわけではない。ただ幸いなる様を楽しみ民草を慈しんでこそ貴族たる本領があるのだ！農民が大地を耕しその富を得るように、我等貴族は民を耕しその富で暮らしを成り立たせるのだ。それが出来ぬならば食いつぶすしか脳がないといえよう。

とはいっても、私は爵位も返上した身か・・・・・・・・・・・・・・・

「ご主人様位この身で稼いで養って見せますから安心してください。」

私はヒモ決定か（笑）

「法務官、王城へ召喚する。いざ参られよ。」

兵士達が性愛神殿を囲んでいる。逝かねばなるまいか・・・・・・・・・・・・・・・

自決用の水薬と懐剣、正装で・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

二人とも何かあったとき、この者達の力添えをしてくれ・・・・・・・・・・

「いえ、死出の旅路であろうとついてまいります。」

「わかった、だんな！」

夫々の答えは違うが、後のことは神官に託して一人　王城へと向かう・・・・・・・・・・・

幕を引きに逝きますか・・・・・・・・・・

全裸賢者と国王陛下（前書き）

あらすじ　王家から迎えが来た。死刑か？全裸法務官！！

全裸賢者と国王陛下

神殿を取り囲む王国兵、指揮官は我が友である財務官。
少なくとも紳士的であろうとしているのはその布陣で見て取れる。
囲んでいるが必要であるものには簡単な誰何で通し続ける。

兵糧攻めとなればつらいものがあるが、そこまではかからないと見ているのだろう。

「我が友法務官。陛下の命である。急ぎ王宮に参られたし。」
「私は職を辞した身。今更王宮に参るつもりはない。」
「陛下も法務官の身を案じておられる。私の名誉にかけて貴殿とそれに関わる者の心身の安全を確約しよう。」
「では、上から無体を強いられたとき財務官君はどうする？」
「無論、盾となり力及ばずとも最悪共に逝こう。」
「男と共に逝くなんて美しくもない・・・・・・・・・・　陛下にお伝え申し上げよ。どの面下げてこの（元）法務官のことを呼びつける積りだ！と」

その日、財務官は兵を残しかえっていった。

次の日、来たのは宰相閣下。
「法務官、名誉も職位も元のままと陛下は確約なされた。必要ならば条件も話し合うとおっしゃられている。悪くない話だ。共に来るがよい。」
「断ります。好き好んで仕事の山に戻る馬鹿がいますか。」
「それについてもわしの権限で何とかしよう。戻ってきてくれない

か？」
「いえ、民草を蔑ろにする馬鹿王族に愛想を尽かしました。」
「王妃様は謹慎なされておる。王族の方々も夫々に省みられて自身を律しておられる。それでは不満かね？」
「何故に前もって成されなかったのかききたいですな。」
その日、宰相閣下は兵を残しかえっていった。

その次の日、兵を引き上げさせ門前に立つは守護辺境伯にして我が兄上。
「弟よ、われらが一族の休暇は終わりだ！王族に喧嘩を売りに逝くぞ！！」
「怠け者の兄上とは思えぬお言葉、如何成されたのです？」
「そりゃぁな、弟の忠勤を言葉尻を取って無碍にする。我が一門にも意地があるし使えるべき主くらい選ばせてもらおう。だから爵位職位を返上しに参ろうではないか！！」
「で、そこに隠している守護辺境伯領兵団は？」
「恐れ多くも国王陛下相手の喧嘩だぞ、全身全霊でぶつかるのが礼儀であろう。」
馬鹿な兄上だ！　兵団の中には次兄がいるし、見知った顔がぞろぞろと・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「父上はなんと？」
「やっと、一族の宿願である平民としてのんびりとした暮らしが出来ると隠居所を兄弟分作って楽しみにしておったぞ。」
一族そろって引きこもる気満々だ・・・・・・・・・・・・・・・・
「さて、皆の衆。参ろうぞ！！この法務官が来なくても、喧嘩くらいは存分に出来る。勇者と魔王が戦った我等が建国の御伽噺が田舎の祭りと思えるくらいに派手にいこうではないか！！」

「「おおっ！！」」

「兄上、皆様方。そんな楽しい事を私抜きで行こうだなんて酷いですな。折角ですから、王の首でも狙いますか。」

「馬鹿言っちゃいけねぇよ！法務官様、王様は生かして仕事させないと。間違って王冠なんかかぶってみろそれこそ不幸だぞ！！」

「ちげぇねぇ・・・・・・」

笑いあう、辺境伯兵団の連中。何事かと伺う野次馬連中の中には元奴隷や元街娼、孤児達がいて一緒に行くとうるさい。

それにつられて姉弟も

「おいらはだんなの従者だから行かないと美しくないよなぁ・・・・・」

「ご主人様のために玉座をご用意して差し上げます。」

姉よ話聞いてないな。玉座なんか座ったら痔になってしまう。

「勿論冗談ですわ。ご主人様が玉座なんて座ったら過労死するのが目に見えて判っていますもの。」

・・・・・・・・・・・・・・・

そうして、我等は王族に喧嘩を売りにいく。

王城で一悶着あったが

「彼らは我が守護辺境伯の儀仗兵である。建国以前からの功臣である我等辺境伯家と王国の要石であった我が弟法務官の身辺を貴殿一人で守れるのか?守れなかったときの責任を一身に受け止める事ができるのか?」

と守護辺境伯(あにうえ)がすごんでいると近衛の隊長格は無理だと言い合う。

結局のところ一隊のみという条件で王城内に入り謁見室に向かう。

王城正門前で陣取る辺境伯兵団及び野次馬達・・・・・・・・・・

すごい迷惑だなぁ・・・・・・・・・・・・
威圧感あるし、殺気立っているし・・・・・・・・・・・・・・・・

謁見室に行くと王族が勢ぞろいし（王妃除く）護衛官も我が友以外の護衛が勢ぞろいしている。
文武百官に貴族達も見守る中、国王陛下が口を開く。
「法務官、孤児や街娼の保護の件、真に大儀であった。何か望みはあるか？」
「では僭越ながらお願いしたい儀がございます。このたびの一件のみならず民草が無体を強いられている現状それを見過ごす王族貴族全ての首を賜りたく存じます。」
ざわめく周り・・・・・・・・・・そうだろう、ここに居る全ての首を遣せといっているも当然だから。
「それは叶えがたいので他にはないか？」
「でしたら、守護辺境伯家一門全ての爵位職位の返上をいたす事お許し願います。」
「国の要たる貴家一門がいなくなれば国が麻の様に乱れる事請け合いだぞ。それでも良いと申すのか？」
守護辺境伯（あにうえ）が答えて
「元より我等一門は世界に不平の叫びを上げた祖王に王権を譲りましたので、その責は受け取った王家が負うべと思いますが如何に？」
「その瞬間にも反逆として受け取られて滅ぼされても構わぬと申すか？」
「今からでもやりあいますか？陛下の首くらいならば何とか取れそうですが（ニヤリ」

我等が儀仗兵（？）達も一気に襲い掛かるつもりで準備をする。迎え打たんとする護衛隊。貴族達の中にも逃げ腰になるもの側面からつかんと剣に手をかける者様々である。

「静まれ！守護辺境伯。汝の本当の願いは何だ？」

「我等は御伽噺の住人として人知れず忘れ去られる事でございます。世界は何故理不尽ばかりだと嘆き正したい叫ぶ祖王に王権を譲った身。欲してなった王家ならば、今更失態の尻拭いに駆り出されるは勘弁願いたいのです。」

「わかった、二度と私の治世においてこのような事がない様に取り計らおう。」

「ありがたき幸せ。」

「で、法務官。汝の願いは何ぞ？」

「職を辞し、馬鹿王族に関わらない隠居生活であります。」

ざわめく周り・・・・・・・・・・・・・・　そうだろう、自らの王を馬鹿呼ばわりしたのだから。

「それだけで良いのか？」

「では、今回の件で尽力してくれた者達に王家の感謝と費用を与えられん事を。そして保護されたもの全てに幸いの道を見つける手伝いを・・・・・・・・・・・・　費用についてはここに明細があります。」

私は費用の明細を護衛官を通して陛下に上奏する。

「高いがこれは本当にかかったものなのか？」

「はい、夫々の戦士たちは手弁当で参戦なされたのですが、それを正規の費用で雇うとなればこれ位は掛かるかと・・・・・・・・・他にも情報提供者たちの保護費とか、保護された者たちの生活費や治療費等・・・・・・・・・・・・　金貨二千枚は安いかと思います

が・・・・・・・・・・・・・　これを蔑ろになさいませんよね？陛下？」

「戦士達の慈悲に頼ることは出来ないのか？」

「何をおっしゃいます陛下、元来陛下たちが行うべき事柄を代行してもらったのですよ。人にしりを拭かせて知らん振りというのは王族として如何なものかと？足りないならばそこらの貴族の二三家を潰して財産没収すればよいではないですか！」

「ちょうど、我等一門爵位と領土返上いたしますのでそこからどうぞ。兄上！功在るものに報いるのに領地を手放すけど構いませんよね。」

「いい考えだ、弟よ。では忠義の剣をお返しし致し後は陛下に丸投げいたそう。」

「まて、払わないとは言っていない！」

「では、払っていただけますね？」

「うむ、ただ手元に・・・・・・・・・」

「それでしたら商会公に借りれば宜しいではないですか。」

「けつの毛までむしられてしまう！！」

「そこまでの無体はしないはずですが・・・・・・・・・・・・・・・？」

「金策はこちらで何とか致そう。しばし遅れるが必ず払おう・・・・・・・・・　で、法務官戻ってくる気はないのか？」

「手付けとして王族の首一つで、後待遇については話し合いにて受けましょう。」

「戻る気はないのか？」

「はい、辺境伯家はそのままでも構いませんが私個人としては爵位も職位もお返しいたしますので王族に関わる事のない平穏な日々が欲しいです。」

「そうか、呼び出してすまなかった・・・・・・・・・・・・・・・　下がるが良い。」

こうして、私は王城をあとにする・・・・・・・・・・・・・・・
「いいんですかい？だんな？　これに乗じてあれやこれや願い叶え放題じゃないか？」
「そうすると私の隠居生活が遠のく。見てみろ宰相閣下を！過労死寸前だぞ。」
「それって、だんなの仕事を押し付けられているからなんでは？」

全裸賢者と国王陛下（後書き）

適当に書きなぐってみる。一発書きだと消えたときが泣けるね。

明日は印度鮪の解体だからこれにて失礼。

全裸賢者と孤児院の一日（前書き）

あらすじ　法務官は王様と対面した。

シリアス分減で下品成分増量となります。

全裸賢者と孤児院の一日

王宮より帰還して数日、私は孤児院に寝泊りしている。
「だんな、ここじゃなくて家借りれば良いじゃない？金ならあるんだろ。」
「今家借りても逃げ出さなくてはならない可能性が高いからな、犯罪者とまではいかないが要注意人物なんだよ我々は。いつでも動けるようにしておくのも生活の一部だ。」
「そもそも仕事から逃げているから追われるんじゃないのかい？だんな。」

否定はしない、でも見ただろうあの宰相閣下の死にそうな顔を・・・・・・・・・

「あれはだんなが仕事押し付けたから仕事に追われているだけだろう・・・・・・・・」
「否、あの宰相閣下（たぬきおやじ）は私以外に人を育てていなかったのが悪いのだ。最低でも2組、出来るなば4組以上の作業班を育てておいていざというときに備えなくてはいけないのだ。部下を持って仕事を教えるというのは自らの後継作りのほかにも自らの職権を任せられるものに育てる事によって自分の作業量が少なくなる意味合いがあるのだ。有能な部下を持ってみればいい。大分楽になるぞ。」
「楽したいからおいら達に文字とか教えていたんだね。」
「その通り、他にもお前達が自活できるようにとの意味合いもあったのだがな。」

あのまま性愛神殿にいてもよかったのだが、私が神官たちと宜しくしているのを見ているのは姉弟にとって精神衛生上宜しくないと諸方から叱られたからであって追い出されたわけではない。その証拠

に昨日も神殿では大歓迎を受けて神官達に色々ともてなしを受けていたのだ。帰る事には紅と白粉と女の体臭でなんともいえない匂いになっていたのだが・・・・・・・・その匂いは孤児姉はお気に召さないらしくお冠なのはいつもの事だろう。

「孤児姉ちゃんは苦労するのよねぇ・・・・・・」

「いの一番で飛び掛った女神官様とも思えない科白ですな。」

それはさて置き・・・・・・・・・・・・

孤児院の朝は早い。

ニワトリ代わりに奴隷公の開放奴隷戦士団の鍛錬の音が鳴り響き、荒野の民の祈りの声が高らかに詠われる。

にぎやかなので酒の残っている自由戦士や商会公の傭兵が顰め面をしているのはご愛嬌だ。

朝日が昇り始めるころには皆目覚めて朝食を作るものと街の清掃に向かうものに分かれて夫々の働きをする。

朝食は色々あって保護された女衆の手を借りて慣れない手つきながら包丁を握り、おっかなびっくり野菜を刻んだり卵を殻ごと叩き潰したりしながら作っているのである。あまりに酷いようだと女衆が止めに入ったりしているので一応は食えるものとなっている。これでも孤児達は日頃まともなものを食っていなかったのか旨い旨いとがっつくのだからこれまでの労苦を押して知るべし。

街の清掃に向かう子供達は年長者を頭に数人で組を作って孤児院の近所限定だが回って清掃する。数人ずつで組を作っているのは作業の効率化を図るのが一つ。奴隷商人とかが摘発されたりしているが治安の面からもまとまっていたほうが問題がおきにくいだろうと考えての事だ。清掃は無料奉仕だが住人との関係が良好になるのと孤児達の引き取り先を探すための顔見世の意味合いもある。そんな難

しいことはともかく、子供達は遊びの延長として清掃をしている。ちょこまかと働く子供達を見て街の商店主やそのおかみさん辺りからお菓子だのの差し入れが入ってくるので子供達の仕事ぶりに熱が入るのは見ていて微笑ましい。勿論、先に心づけを渡して子供達に差し入れをしてくれと仕込みをしたのは内緒である。でも、渡した額でこれだけの量を買うのは無理だと思うのだが商店主とかの好意と思っておこう。

朝食を食べたあと、部屋の掃除とかをさせて読み書きを教える。教師は私のときもあれば孤児院に屯している六大公の手の者達が教える事もある。

我が国で主に使われている文字は表音文字で幾つかの例外を除けば文字の丸覚えで十分に本やら何やらを読む事ができる。女衆にも一緒に教えているが子供ほどに記憶力がないから追い越されて悔しそうにしているのは笑い話としておこう。

文字が読めるようになると面白いらしく色々本を読み始める。ここで色々な興味を示して世界が広がるように広い範囲での書物を用意してもらったのだが、

「男は女の（3文字削除）に手を触れその濡れ細った泉を・・・・・・・・・君よ君、汲めども尽きぬ聖域の泉より流れ落ちたる蜜の川、口にふくみて小さな果実・・・・・・・・・」

「えっと、何を読ましているのかな？」

「物事を覚えさせるにはエロを絡めるのが一番の早道だと農園公の作付け頭が公の書籍から持ち出した書物ですが・・・・・」

「まてぇい！！子供達相手なんだから御伽噺とかあるだろう！」

「（元）法務官様、（三字削除）ってなに？」

「それは其処の農園公のところのおじちゃんに聞きなさい。」

「おじちゃん、（三文字削除）ってなの？　（五文字削除）ってどういう意味？」

「え、えっと・・・・・・・・・・・・それはね、大人になったら自然と判るよ。」
「子供達に変な本を読ませないでください！！」

嗚呼、農園公の作付け頭は正座で女衆に怒られている。
一度書物の選定をしなくては・・・・・・・・・・・・　女衆、早く文字を覚えて不適当な本をはじいてね。
「（元）法務官様、この不適切（えろえろ）な本はどうしましょう？」
「農園公のところに送り返しておきますよ。事の経緯を記してね。」
「やめてくだせぇ！（元）法務官の旦那、そんなことされたらうちの農園公（おやかたさま）の尊厳と地位がなくなります。」

婿養子で奥方に頭の上がらない農園公は尊厳とか地位は無いに等しかったのでは？
「ひでぇ！！」
「そ、それはいくらなんで人でなしの行いだよ。」
「人ではないけど其処まで言うのは同じ男として出来ないよ。」
人族人外諸々の抗議を受けて、取り合えず子供の目に届かないところにおいておくに留めようとしたら、女衆の一人が即座に荷造りして農園公のところに送り出してしまう。しかもご丁寧に奥方宛に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

農園公、貴方のことは忘れない・・・・・・・・・・・・・・・・
男たちは青空に浮かぶ農園公の面影に涙ながらの敬礼を送るのであった。

「ご主人様、農園公様は死んでませんし縁起でもないですよ。」
「いや、この一件で彼は死ぬほど酷い目にあうだろうから間違いでもないだろう。」

作付け頭は未だ正座して反省させられている。多分彼は農園公のところに戻ったら更に酷い事になるのだろうな。
まぁ、自業自得だしほっとくか・・・・・・・・・・・
「助けてください！」
うーむ、無理だ私にはこの女衆を宥める力が無いし気も無い。

文字を教わる子供達のそばで文字を覚えた子供達は色々な本を読んで知識を深めたり、私兵達のもとで更に深い知識を得たりしている・・・・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・・・・ここの計算はこうしてこうやって、利益率が一割だと銀貨一枚得るのに百枚作らないといけないでしょう。そこで二割の利益率にすると・・・・・・・・・・」
「おしべとめしべがくっつけば花は実をつけるけど、・・・・・・・・・・・・・」
「西の国には大きな湖があってそれはそれは塩辛いのだ・・・・・・・・・・・・」
「いえすろりーたのーたっち！　これは異界の言葉で私は幼女大好きですが・・・・・・・・・・・」
「昔々あるところに・・・・・・・・・・・・・・・怠け者の法務官がいました・・・・・・・・彼は怠け者で怠け者で仕事が大嫌いだから、自分の分の仕事を即座に済ませると一生懸命働いているほかのものを尻目に娼館にむかうのでした・・・・・・・・・・・」
何か不適切な教えが混じっているが気のせいだよな、気のせいであると願いたい・・・・・・・・・・・・

なんだかんだしているうちに昼の時間となり皆で昼食を取る。
昼飯は女衆が交代で作るのだが、なぜか私兵達が共に喰らっている。
確か夫々の主から食料とか供給されているはずだと思ったが？
「いやぁ、食料とか食費は提供してますよ。作るのが面倒だからとかたまには女性の手料理が食べたいなとか・・・・・・・・・・・・」
「要は便乗して作ってもらっていると。」
「悪いですか？飯は皆で食ったほうが旨いじゃないですか！」
開き直りやがった、女衆の方も大きな子供を見るような目で笑っている。
そのまま頭を撫でられても違和感がなさそうだ。ここで二組目か？

って、言うか騎馬公の騎馬戦士達！昼間から酒を喰らっているんじゃない！！
「大丈夫だ、これは子供でも飲める乳酒だ！食事代わりの飲むのが今の季節の健康法だぞ！」
「子供達には酒は早すぎます！！あんた達も飲まない！！」
乳酒に手を出そうとする子供をひっぱたきながら騎馬戦士ににらみを聞かせる女衆！
「我々の文化では乳酒は食事であり、長い冬を越えた体に必要な成分があるのだ。こんなにもやせた子供達には滋養のある乳酒で栄養をつけて抵抗力を持たせなくてはならない・・・・・・・・・・・・」
クドクドと説明をする騎馬戦士の敗色濃厚で女衆は一歩も引かない・・・・・・・・・・・・
「王都の者は我等の文化に偏見を持っているのか・・・・・・・・・・・・」
でも、騎馬戦士達が飲んでいるのは乳酒でも原液ではなくて蒸留した方だろう、それじゃいくらなんでも説得力は無いだろうに・・・・・・・・・・・・そんなもの飲んだら子供が目を回してしまう！！
女衆の剣幕に酒樽を持ち出そうとしていた傭兵やなんかも後ろ手に酒を隠す。

「大人しく野菜の煮物食べてなさい！」
「にんじん嫌い・・・・・・・・・・・」
「食べなさい！！」
どこまでも、女衆は強かった。

昼食後、午睡を取るもの、書を読むもの、私兵たちと一緒に遊ぶもの、私兵に訓練をつけてもらうものなど夫々に過ごす。交代で夕飯の用意をする子供もいる。
そんな子供達のお気に入りの遊びが【奴隷狩られ】である。
わざと薄汚れた格好で、裏道を歩き人攫いをひきつける。そうして攫おうとした人攫いから逃げる振りをして跡からついてきている私兵達のところに誘導するのである。そうして捕まえた人攫いを散々弄んだ跡で衛士に突き出す遊びだ。
この効果は結構あって、平民の子供でも人攫いに会うことも少なからずあったが人攫いが鳴りを潜めつつあり、子を持つ親からも感謝されている。しかし考えてみるといい、子供を攫ってウッハウッハだと狙ったところで人外公の隠密兵がぬっと出てくるのである。子供を庇うように身の丈大人より頭一つ大きい筋骨隆々の鬼族が睨みをきかせて、逃げようとしたら口を大きく割いて鋭い牙を見せて笑っている狼頭の戦士だの毒が塗っているらしきぬらぬらとした短剣をいじくっている小鬼族、後ろには紅い目だけを爛々と光らせている黒いローブの男。助けを呼ぼうにも偶然を装って解放奴隷戦士達の一隊が囲んできたり騎馬戦士達が短槍や馬上弓をしならせていたりする。ある意味人攫い達の自業自得とは言え私兵達のリンチにあい、子供達から落書きだのやーいやーい人攫いの駄目人間とはやし

立てられる声とか落書きに心が折られてから衛士の元に送り込まれる。少しえげつないだろう。

「おいらの弟達ながら良くヤルヨ。これに味をしめて性格がゆがまなければいいんだけど・・・・・・・・」

「それ以前にこれって、おとり捜査・・・・・・・・・」

「大丈夫ですよ、我々が後ろから悟られないようについていますから。結構、人攫いの懸賞金は我等のいい小遣い稼ぎになりますし・・・・・・・・・・・・」

「後で話をしようね。」

私兵達の小遣い稼ぎかよ！

まったく油断もすきも無い。

そのやり取りも女衆にばれてこってりと絞られる私兵達。人攫いにあった経験のある子供達は人攫いに遭うのは僕達だけで最後にしたいと協力しているんだと庇うのだが火に油。子供ともども絞られている。

こいつらからどれだけ油が取れるかな？

「ご主人様、そういう問題ではない気がしますが・・・・・・・・・・・」

「私の居ない間になんか孤児院が迷走している。」

「否定はしませんが・・・・・・・・性愛神殿にこもってお楽しみを続けていたご主人様に言う権利はないと思われますが。」

最近きつくなってないか孤児姉？

なんて事をしているうちに夕刻となるのだが農園公の奥方と作付け頭の奥さんが農園公配下の若い衆を連れて作付け頭を柱にくくりつ

けて連行しているのは見なかったことにしよう。作付け頭の犠牲に敬礼!!

夕刻の茜色の空に浮かぶ作付け頭の歯はきらりと光っていい笑顔を浮かべている。ありがとう作付け頭。さらばだ作付け頭!!男にエロスは必要だ!!それに準じた君は今世の勇者だ!

夕飯前、薄汚れた子供達を風呂に叩き込もうと騎馬戦士(モヒカン)が

「汚物は消毒だぁぁぁぁ・・・・・・・!!」などと子供を追い掛け回して捕まえていたりするのはなんかが違う気がするけど私の気のせいか?

汚れたガキを風呂に叩き込んで磨き上げた後、夕飯となるのだが如何して私兵達君等まで(略)

「そりゃ、一緒に作るから材料よこしなと女衆に言われたら断れないでしょ。」

「まぁ、我々としても楽できるからお任せしているのですが・・・・・・・・」

「細かいことは言いっこなし! だんな、皆で食べたほうが旨いじゃんか。」

口々に勝手なことを言う私兵達。その手には酒の入った杯があるのを見逃さない。出来上がっているな。

女衆を口説こうとして肘鉄食らっている。あれは農園公のところの若い衆ではないか。微笑ましいのぅ・・・・・・・・・・・・・

女衆の中にも酒が入って私兵達と笑い会っているのがいる。何組目だ?

馬鹿笑いしながら、楽しく会話して食事をする。

まぁ、悪くないか・・・・・・・・・・

私は孤児姉に酌をさせながら杯を開けていくのである。

院長は？
孤児院の運営に関する書類仕事に終われてましたとさ・・・・・・・・・・・・・・
「（元）法務官様、書類手伝ってくださいよ・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「嫌だ。」

全裸賢者と孤児院の一日（後書き）

冷凍の塩鮭きっていたら手が痛い。２００きろは切りすぎか？

私塾と教本（前書き）

あらすじ　法務官は（元）法務官にランクダウンした。孤児院で居候だ。

　そして農園公の男性陣の明日はどっちだ。どうせ尻にしかれるのが落ちなのだろうが・・・・・・・・・・・・

多少の下品成分やらヤオイ蔑視発言がありますが気なる方は回れ右してドナスィヤン・アルフォーンス・フランスワ・ド・サドの著作でも読んでいなさい！！

私塾と教本

平穏は良いなぁ・・・・・・・・・・・

生活のほうは今まで貯めてきた物に合わせて、方々に出資した物の利子で贅沢しなければ十分やっていけるし・・・・・・

「ご主人様、いくらお金がありましても孤児院のために使われたらあまり残らないと思うのですが・・・・・・・・・」

「孤児院にいれば食費には困らないし、自分の住環境に気を配るのに金を惜しんじゃいけないだろう。孤児院はついでだよ・・・・・・・孤児姉弟にも給金払っていなかったから少しで悪いが渡しておこう。」

「銀貨！！こんなには要りません！！」

「もっときなって、たまには綺麗な服を買ったりおいしいものを食べたり自分のために使うのも社会勉強だ。」

「あ、ありがとうございます。」

可愛いものだな・・・・・・・・

「だんな、おいらにもこんなにいいのかい？」

「構わんよ、君たちが扱った書類仕事は普通貴族官僚が半日がかりでやるものだ。それを手伝ったんだから寧ろ少ないくらいだ。財務官が君たちの事を引き抜きたがっていたぞ。うまくすれば下級とはいえ貴族の仲間入りすることも可能だがどうする？」

「おいらはあいつらに関わりたくない。何か身の立つ方法見つかるまでだんなに従うよ。」

「私の主とするのはご主人様一人だけですので・・・・・・・・・それで稼いで養えというのであれば従いますが・・・・・・・・・」

だめか（苦笑）
まぁ、彼らの人生だ。私という宿木に立ち止まって飛び立つ練習をしているところだしあせることは無いか・・・・・・・・・・
この短い間で彼ら姉弟が生活の一部になっている自分に苦笑する。
手放すのが勿体無いとか寂しいとか思うのはあるがどんな未来に進むのか見てみるのも楽しみである。
しばらくは私がこき使うから覚悟するがよい。

孤児達に読み書きを教えているのを知った近隣の住人がうちの子達にも文字を教えてくれとか言ってくるので、ついでに教える事にする。親世代で文字の判らない者も居るから子供には文盲で苦労させたくないなという親心が見える。近隣の商店や工房に奉公している見習い達も親方衆が自分で教えるよりも元とはいえ貴族様に教えてもらえるならと便乗しているのには苦笑を隠すことが出来ない。
一応、教えるのだから少ない金額だけど受講料をとることにする。
これは手伝いをしている孤児姉弟やなんかの給金代わりになるのだが殆ど御奉仕状態だ。

大体二三日に一度講義をする。一月位すれば文字を覚えるので本を読ませたりするのだが、自宅から持ってきて書写をさせる。（本が無い家庭には孤児院の書物を貸し与える）本のある半数の家庭は御伽噺とか問題の無い話なのだが、残りが問題であった。子供たちに持たせる本が如何して過激な恋愛小説や春画集、挙句の果てには王妹殿下謹製宰相国王本を持ち込んだ馬鹿が居る。これらの本を持ち込んだ者の保護者は即効で呼び出して説教をする。子供が勝手に持ち出したとかいうのが大半だが後で正当な持ち主が家族会議で最終審判になっても私は知らない。

通う子供達に聞いてみると
「お兄ちゃんの寝台の下に隠してあったからもって来た。」
「親方のコレクションを拝借したんだけど・・・・・・・・・・」
「お姉ちゃんがお城で侍女をしていて王妹殿下から下賜された物なんだけど、お姉ちゃんがこれで布教しなさいって私にくれたの・・・・・・」
君達、家族や親方の物とはいえ無断で持っていくのはいけないよ。後、最後の侍女妹。君のお姉さんの本はご禁制の品だから速攻燃やすのが良いよ。見つかったら家族ごと酷い目に合わされるからね・・・・・・・・・・
「はい、（元）法務官様！」

王族と関わりたくないのに・・・・・・・・・・・・よりによって、この王妹殿下（ヤオイ姫）の書籍にぶち当たるとは・・・・・・・・・・不幸だ・・・・・・・・・・

「だんな、諦めたほうがよいのでは？」
折角、折角・・・・・・・・・・・不敬罪とか一実在人物書籍化保護法《勝手にモデルにするんじゃない》を制定していたのに宰相閣下、諜報の長あなたたちは何をしていたのです・・・・・・・・・・
・・　王宮の警備はザルだった・・・・・・・・・・・・
これが民草にまで広がったら、ましてや他国にまで広がったら・・・・・・・・・・・・・・・世界は終わりだ！
「（元）法務官様、お姉ちゃんが言うには魔王国の雷竜の姫君とか聖徒王国の第一侯爵令嬢とか南方商連合の香料商会の三女とか色々、本を作ったり手紙やなんかで語り合ったりしている見たいらしいよ。時々会うと”かっぷりんぐ”とかで激しく論争したりしてるみたいだよ。ねぇ、”かっぷりんぐ”って何のことだろう？」
「それは知らないほうがよい知識だ。深入りすると二度と戻って来

れなくなるから気をつけような。」

世界は終わった・・・・・・・・・・　芸術神よ文芸神よ！貴女方は何をしておられるのですか！

このような、戯言を文学として芸術として広めようとしている冒涜者を何故見過ごすのですか！！

だって、わらわも楽しみにしているし（ｂｙ芸術神）

異世界人呼び寄せたの私だし・・・・・・・・・・あたりだったわ。（ｂｙ文芸神）

神までも腐っていたのか・・・・・・・・・・・・自重しろ文芸神！！

一緒にしないで欲しい（ｂｙ決闘神他男性神一同）

犠牲にされる身にもなってくれ（ｂｙ剣神他ネタにされた神々）

そのうち神々の最終戦争が起きるのではないか？

これは幻聴だよね。幻聴だといってくれ！！お願いだから・・・・・・

「ご主人様、戻ってきてください！」

はっ、私は何を・・・・・・・・・・　取り合えず、書写する教本をこっちで用意したほうがよいのか

【法律の黒歴史：法の成立裏話】【暗黒屍骸魔道書】【やさしい毒草辞典】【礼法入門書：荒野の民偏】【軍隊式指導教本：罵倒編】等々・・・・・・・・・・・・・・・・これだけあれば足りるか・・・・・・

「だんな、エロ本よりやばいのがちらほらあるのだが・・・・・・・・」
「気のせいだろう。」
「（元）法務官様!!　もっと御伽噺とかにしてください!!禁書扱いのものも幾つかあるじゃないですか!!」
「知識はよいぞ。腹を膨らす手伝いにもなるし頭を満たしてくれる、更に奪われる心配も無いのだからな。」
「だからって黒知識を子供にいきなり教えないでください!!」

院長、頭が固いな・・・・・・・・・・・・
「ただでさえ、濃い者が集まって子供の教育に悪そうな雰囲気になっているのにどこに突き進むつもりですか!!」
「せいぜい私を超えてもらいたいという師としてのささやかな贈り物だよ!!」
「どこがささやかな贈り物ですか!　劇薬でしょうに!!建国の御伽噺とかなら良いじゃないですか!略本とかが安価で流通してますし。」
「私が誰だか知っていっているのか?先祖の黒歴史を美化された状態で聞かされるのは拷問だぞ!」
「ははははっ、そっちの理由でしたか（元）法務官様。恥ずかしがることも無いですのに・・・・・・・・・」
「うるさい!!」

結局読み書き用の教本は風神教団の神話集を荒野の民に用意してもらって使用することとなる。

文芸神とか芸術神は専門用語（スラング）とか多いし決闘神等の戦闘神関連は血なまぐさすぎる。性愛神はエロ本だし冥界神殿は裁きの場面で血みどろだ拷問だと子供に読ませられない・・・・・・・・・・・・結局無難な自然神からの神話集になるのである。

「その割にはご主人様が用意した書物もえげつないもの多かった気がしますが？」
「気のせいだよ。」

平穏は良いねぇ・・・・・・・
子供達に教鞭を振るいながら、握拳なき教えを心がけようとする私は私塾の講師として過ごすのであった。
鍛錬とか専門的な分野は私兵達にお願いするか。

私塾と教本（後書き）

話が進んでいない・・・・・・・・・・

酒を飲んでいないから体がだるい

私塾と糞餓鬼（前書き）

あらすじ　（元）法務官は私塾の講師だぞ

私塾と糞餓鬼

私塾の講師というのは中々新鮮である。
子供というものの発想とか疑問というものが私という唯一視点しか持たない存在からして異質であり驚きに満ちている。

「如何して異世界人は呼ばれるの？」
「神様の一柱がね世界にこれが足りないと思ったら呼び寄せるという説もあるし、間違って世界から零れ落ちてこっちに漂流するという説もある。さらには異世界の知識を持ったまま転生するものも居る。」
「神様が呼ぶにしたら異世界人の影響って問題児ばかりだよね。神様って馬鹿なの？」
「馬鹿というよりも私たちのことを考えていないだけじゃないのかな？」
「神様って守ってくれないの？」
「気に入ったのは守るみたいだけど一人ひとりは見守らないだろうね。」
「どうして？」
「神様は国とか民族とか種族といったくくりでは滅んだり理不尽をしないように守るけど個人個人はどっちでも良いのでは？人間だけの神様じゃないしね。」
「じゃあ、神様に祈っても意味ないのかな？」
「礼儀として祈っておけば良いよ。何か適うと思うのは間違いかもしれないけど・・・・・・・・・」
うわぁ、神学論争になりそうなやり取りだなぁ・・・・後で神官連中に聞いてみよう。

やめて、ササゲモノガ減る（ｂｙとある神々の一柱）

「如何してやりかけのまま残すのは駄目なの？」
「後からやり直そうとすると余計に手間が掛かるからだよ。」

「貴族って如何して貴族なの？」
「ただ、略奪者の子孫として生まれついただけなんだよ。それに取り入って略奪者の仲間入りをして富み栄える・・・・・・・・・・・・・・・」

「赤ちゃんってどうやって出来るの？
「それはねそこの女衆に聞きな、ついでに彼女の相手として農園公の若衆を指名すると実演してくれるかもよ。」
「しません！！」

色々問題のあるやり取りは多少あるが、それはそれで楽しいものだ。文字を覚えて本を読んで自分で知識を増やしながら疑問点をきいてくる。その繰り返しで成長していく。
質問は人文、理学、神学と広範囲にわたるが出来るだけ答えるようにしておく。

「でも、だんな子供の質問なんて色々難しい割には子ども自身が理解しないんじゃないか？」
「馬鹿言っちゃいけないよ。子供というのは物を知らないだけで馬鹿じゃない。道筋をつけて教えていけばたどり着くものだ。お前にも覚えがあるだろう、なんにでも疑問を感じたころを。それに対して答えてあげるのは大人の義務だよ。私もそうやって大人になったのだし、この子達には聞く大人が私しか居ない。それだけだろう・・・・・・・・・・・・・・・」
「ふーん、だんなって意外と律儀なんだね。」

「ふっ！」

そんなこんなしているうちにも色々な子供達が教わりにくる。
ある餓鬼なんかは貴族の家柄らしいのだが、家柄をひけらかせて孤児なんて云々とかほざいているものだから貴族として力量はあるのだろうなと私は静かに問いかけて糞餓鬼がうんと言うものだから貴族にふさわしい量と質の学習をさせてみた。一時間後、泣いている餓鬼を叱りつけながら更に進める。８時間後、親が迎えに来たが貴族らしい学習速度でなかったから一晩預かりますと更にビシバシ教え込む。明け方、私の幼少時代の三分の一しか出来ていないのだが泣きが入って物にならないと判断した私はこの糞餓鬼を家に帰す。親が王宮伯だから子供であっても私（元王宮男爵）並みの知識量とか期待したのだが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
駄目だったか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

親である王宮伯は怒鳴り込んだが、私と同程度出来ないのだったら貴族として絶望的だからといったらといったら糞餓鬼を置いていって死んでもいいから仕込めという。
まぁ、座学ばかりでつまらんだろうから、私兵達に頼んで稽古をつけてもらう。
死んでもよいというお許しが出たし、死ぬ寸前まで追い込んでみるのも宜しかろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「（元）法務官様無茶が過ぎます・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（汗」

そうか？
ならば、書物の要約程度で許すか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
この本を４日で要約してもってこい。宿題だ！！
餓鬼は許されるのがうれしくて約束をして逃げていく・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

４日後、私が私兵達をつれて宿題を取りに行くと寝台の下で隠れて震えている糞があった。

親も怯えているが気にしちゃいけない、師弟の交わりを捨てるか今から不眠不休でやるか聞くと師弟の交わりを捨てるほうを選ぶ。根性のない餓鬼だ！

「いえいえ、いじめ過ぎでしょう。」
「いじめてないよ、貴族たらんとしない餓鬼に貴族と名乗られるとムカついただけだ！！」
「うわぁ、大人気ない。」

私塾と王妹殿下（前書き）

あらすじ　餓鬼をいじめるのって楽しいよね。生意気な餓鬼をつぶすのは面白いよね。

多少の残虐な表現と変態さんが出ますから耐性のない方は回れ右して毛皮を着たビーナスでも読むのが良いよ。　小学生向けの楽しい小説だ！！

私塾と王妹殿下

糞餓鬼は師弟の交わりを捨てるといっていたが、最後の授業くらいはしてあげるのは捨てられる師匠としては餞別代りに教えを授けるのは当然だよな（邪笑

ついでだからこんな根性なしの餓鬼を育てた親にも教育してあげよう・・・・・・・・・・・・・　王宮伯だから私の代理くらいできるだろうし！！

その後、王宮伯家に響き渡る悲鳴は近隣の恐怖を煽ったとか煽らないとか・・・・・・・・・知った事ではない。

高々、私の幼少時代の教育を繰り返しただけなのに三日で潰れるなんてなっていないなぁ・・・・・・

親のほうも私のつい最近までの仕事量に必要な知識とか詰め込んだだけなのに涙ながらに許してくださいと泣いているのはどうしてなんだろう？

「だんな、宰相閣下が過労で潰れるほどの仕事を一人でこなした人間と一緒にしたいけないよ。」

「折角法務官というか次期宰相候補として推薦してあげようとしたのだが、親子ともども根性がないねぇ・・・・・・・・・・」

「貴族ってこんなにやわなんかい？」

「孤児弟よ、この程度でつぶれるようなものは貴族の名に値しないねぇ・・・・・　鍛えてあげないと彼らが可愛そうだ。」

「だんな、鬱憤晴らししてないかい？」

「いやぁ、教育だよ教育。未だ軍事訓練まで課していないから楽なはずだよ。」

「軍事訓練って？」

「指揮官たるもの冷静に物事を処する必要があるから四六始終命を狙われ続けるんだ。対毒、対人、対謀略等の防御訓練を行うんだ。面倒くさくなって教官を直に殴りこみにいったのは懐かしい思いでだなぁ・・・・・」

「その教官はどうなったの?」

「未だ生きているはずだよ、背後にうちと敵対した貴族が居たからそいつは丁寧に足の骨を折っておいたけど・・・・・・・・・・・」

「丁寧にって?」

「指の骨から太股の骨までヒビ入れておいてから回復呪文をかけて貰って、また折るという繰り返しだよ。後遺症を残さないように折り続けたりするのは大変だったよ。」

「聞きたくないけどその貴族はどうなんたんだい?だんな」

「あの時は私も未熟だったから、半日ももたずに壊れちゃったよ。復習を防ぐ意味でその子息とかを同じ目に合わせようとしたら親父に怒られてねぇ・・・・・・　折角追い落とそうとしているいきの良いのが居るんだ、そいつに仕事押し付けてわれわれは隠居生活するんだから壊すんじゃないって・・・・・・・・・・・　子息のほうは一緒に勉強をして勝てなかったら父上と同じ目にあわせるといったら泣きながら亡命していったよ・・・・・・・・・・・・・・・今頃何をしているのかなぁ?」

「だんな、この親子をどうするんだい?」

「そりゃ、推薦状を送りつけたから二人で私と同じ程度の能力を持ってもらわないと・・・・・・・・・・・・・王国のためにならないだろう（邪笑」

「そういえばだんな、前も同じような事をしてなかったっけ?」

「後進を育てるのも大事な役割だよ。やる気のあるものを引き立てて、早く隠居生活を送りたいからね。それを邪魔するのは敵だよ。今まで育ててきた中で一番の逸材は孤児弟君だよ。まぁ君にやる気はないだろうから無理強いはしないけど・・・・・・・・・・・・」

「ドンだけ人が居ないんだ王国は・・・・・・・・・・・・・・・」

「だからこそ、守護辺境伯(あにうえ)が先日軍事行動を起こして仕事を押し付けるなと国王陛下相手に怒っていたではないか！」

「それは身内の厄介ごとを処理させるには身内でさせたほうがという考えでは？」

「こんな、清廉潔白な私を捕まえて厄介ごととは孤児弟よ私の従者の割には言うねぇ・・・・」

そんな会話を聞いていた糞貴族の親子は先日の反乱未遂を思い出して顔を青くする。

酷いなぁ・・・・・私はそんな非道なものじゃないのに・・・・・・・

「宰相にしたくない貴族ランキングでナンバーワンを取っただんなの科白じゃないな。」

「丁寧に投票してくれたのがこの王宮伯家だったりするけどな。」

「だんなそれじゃ意趣返しでは？」

「まさか、宰相にしたくないのならば自分で宰相になってもらわないと・・・・・・・・・・・　折角その能力がつくように教育しているのに・・・・・・・・・・・・・・」

「ねーちゃんが居なくて幸いだったよ。だんなが教育しているのにその御心も判らないなんてと一寸刻みでシチューの具にしかねないから・・・・・・・・・・・・・・」

「こいつらのシチューなんて食いたくないぞ。最近孤児姉も強くなってきたからなぁ・・・・・・・」

「まぁ、雑談はこのくらいにして仕込まないとねぇ・・・・・・　推薦状も送った事だし・・・・・・・・・・・」

その後この王宮伯家から悲鳴が上がったが近隣の処家は見てみぬ振

りをしていたそうな・・・・・・・・
私兵達に折角だから近隣の子息にも教育を施してあげようとか言って招待しておいでといったのだが、そこまでひどいことは出来ませんとか言われた・・・・・・・・・・・・
仕方ないので近隣の処家にお騒がせして申し訳ないと謝罪に言ったら、当主が出てこないで家令とかが応対してくる始末。令息とかがいれば一緒に教育しましょうかといたら金貨を渡してそれには及びませんといってくる始末。金は要りませんからといったら、本気で勘弁してくださいといわれた。
仕方ないのでこの糞親子の教育を進めるとしよう。取敢えずは貴族の力関係を黒歴史込みで教えるとしておくかな・・・・・・・・・・・

「すいませんすいませんすいません・・・・・・・・・・・(元)法務官様その情報を知ったら消されそうなんで勘弁してください教えたなんて他に漏らさないでください・・・・・・・・・・・・師弟であったという事すらなかったことにするためならばどんなことでも聞きますから・・・・・・・・・・・・」
「では、私の後釜に・・・・・・・・・・・・」
「それじゃ、私ら親子に消されろと言う様な・・・・・・・・・・・・」
「消されないように大事な情報として教えているんじゃないの。」
「勘弁してくださいい金ならば全財産差し上げますので・・・・・・・・・・・・爵位も返上いたします。何ならこの国から脱出してどこかの田舎で隠れ住みますので・・・・・・・・・・・・・勘弁してください。」

駄目だ、壊れてしまったか・・・・・・・・
使い物にならないから仕方ない、推薦状の辞退は自分でしろといって孤児院に帰る。

ちっ！使えない貴族だ・・・・・・・・・・・・・・　上を目指すならばそれ相応の力をつけやがれってんだ！
「だんな、やさくれてないかい？」
「うむ、これならば孤児や町方の子供達に色々教えていたほうがよかったと思っているよ。私のもっている知識だと役に立たないのが残念だけど。」
「だんな今日はこれからどうするんだい？」
「街でもぶらぶらするかねぇ・・・・　姉のほうも誘ってやって三人で市場でも冷やかすか。何ならばここにいる私兵も含めて男だけで色々楽しむというのもありだがな。」
「ねーちゃんを誘って上げなよ。最近構ってもらえなくてお冠だから・・・・・・・・・・」
「可愛い娘の機嫌をとってやるのも師父の勤めか（苦笑」
「（元）法務官様、意外と親馬鹿なんですねぇ・・・・・」
「眷族のものを大事にするのも貴族の嗜みだろう。私兵君、公爵閣下がどれだけ君たちに心を砕いているかわからんでもないだろう。」
「違いないですな、うちの親分連中もお人よしですから・・・・・・・・　あれは血筋なんですかねぇ・・・・・」
「それは否定できないね。」

そんな馬鹿話をしながら孤児姉でも誘って日頃の労をねぎらってやろうと孤児院に戻ると簀巻きにされた眼鏡の淑女がいる・・・・・・・・
王妹殿下だなぁ・・・・・・　どう見ても、あの時の話し合いの条件には王族の首といったが生で持ってくるのは勘弁して欲しいものだ・

・・・・・・・　子供の教育に悪い・・・・・・・・・・

女衆が不憫に思ってか縄を解こうとするが、これを解き放つなんて生肉の塊の群れの中に狼を解き放つようなものだしなぁ・・・・・・・・・・・　男色文学愛好だけじゃなく少年趣味（しょたこん）だし、危険だ！

女衆には身分は高いが痴女だから縄解いたら子供達の貞操が危ないからと衛士隊か近衛隊呼んで回収して貰ってと言って私は見なかったことにして孤児姉を誘い市場に向かうのだった。

いきなり簀巻きにされて孤児院に放り込まれるなんて、王妹殿下人望ないなぁ・・・・・・・

実行犯は王妹殿下被害者の会か？

絶対王妹殿下被害者の会だな（断定

私の要求にかこつけて王妹殿（へんたい）下の駆除をするなんて宰相閣（たぬき）下の差し金だな！

それはいいけど生で持ってくるな生で！！

子供たちが見たらどうする！！

「んぐぐぐぐきぐぐるぎぐり・・・・・・・・・・・・・（私が何で見せられないものなのよ）」

そりゃぁねぇ・・・・

「んだ、んだ、おらとこの印刷所の若い衆は今だ女性不振に陥っているだ。」

「分家筋の若当主は婚約者にガンバと言われてへこんでいるだよ。」

「そういえば付き合いのある伯爵家当主が小姓と出来ているというわさが流れて小姓の親に怒鳴り込まれて大変だったのを見たことあるな。」

「一度見せてもらった事があるがあんな本を作る人物は子供にあわ

せないほうがよいな、教育に悪い。」
「陛下はいい人なんだけど如何して一族様は変態ばかりなんだろうなぁ・・・・・・」

いや、陛下も陛下で服飾センスが悪いという欠点が・・・・・・・・・許容範囲だが。
しかし私兵達にもこんな評価だなんて大丈夫なのか現王家!!

私兵達に王宮まで届けてもらおうとしたのだが、皆触るのを嫌がっている様子。
無理もない、どんなとばっちりがくるか・・・・・・・・・・・予想の斜め下を行くお方だからなぁ・・・・・
縄を解いて恩に着られて近従に取り立てられて出世と思わせといて実は・・・・・・・・・なんて悲劇は味わいたくないよな。
近衛隊(引き取り手)が来るまで害するものがないようにするのが一番だろうな。
「もががもがががが・・・・・・・・・・（縄解きなさいよ！）」
といたらうちの可愛い子達に襲い掛かるでしょうが!

窓辺からよだれたらして眺めて西域交易都市伯令息に心的外傷(とらうま)与えた人物に隙を見せるなんて危険なことは出来ません!!

私兵と女衆に後のことを頼んで、孤児姉弟と市場に行くのである。
実のところ私も係わり合いになりたくないのである。

私塾と王妹殿下（後書き）

登場人物の名前がないのは仕方ないね。

市場と端切れ屋（前書き）

あらすじ　糞貴族をしめた。王妹殿下は放置プレー中。
そしてなぜか１００００ＰＶ突破。見ている人がいるとは・・・・・・

市場と端切れ屋

今、市場にいる。王妹殿下はそのうちに衛士なり近衛なりに引き取られるだろう。
本当にあんなのを送りつけるなよ。嫌がらせか？　嫌がらせだな！！絶対嫌がらせに決まっている！！

「だんな、だんな！！」
まぁ、気を取り直して市場を楽しむか。商店街と違って自由市は一日単位で場所を借りて雑多な物を売り買いするところだ。店の権利を買えない駆け出しの商人や旅の行商、近隣の農家や平民が思い思いの商品を持って売りに出しているのである。毎日店を出す場所が変わっていたりするので馴染みの店を探すのが大変なのだが、思わぬ掘り出し物が出たりするから結構楽しいものである。

大体敷物一枚分位の広さを借りて店を広げているのだが屋台あり、敷物の上に商品を並べただけのものがあり、商品を並べないで売り子だけいる店もある。一番多いのが近郊の農家が自分ところの作物を山積みにしているだけの食品関係である。
まぁ、私らに食品関連は孤児院あてに来る食物や私兵団の上前を撥ねているから必要ないのだけどね。

先日も農園公夫人がうちの男どもが馬鹿な物を持ち込みましてとお詫びがてらに沢山の野菜やら何やらを持ってきてくださったから十分あるし農園公の女衆も痩せこけた子供達を見て男衆に子供達が瘠せているのに何でスケベ本を持ち込んで食い物を持ち込まないのさと説教をかましていたくらいだからな。
今のところ数が多くて手余りな孤児院の女衆とか孤児達のうちで体の大きな子たちを農園労働者として引き取る算段をしてくださった。

うちは独身の男どもが多いから女性が増えるのは歓迎なのさと嘯いていたが一度は苦界に身を沈めた女性たちをまとめて引き取る度量は流石だなと敬意を表す。
見た目は農家のおばちゃんなんだけど・・・・・・・・・・

さて、今日はどんなものがあるのかな？
彩り豊かな果物に不揃いな根菜たち。タロを一つとってみても、親芋に子芋がくっついているもの、親芋だけのもの、子芋の可愛らしいものを笊いっぱいに積み上げていたりとか、葉っぱを食べるもの赤紫の茎を干したモノとか見ているだけでも楽しいものだ。とはいえ、私は貴族。どれがどの料理に使うものなのかよくわからないが。
「大丈夫です。ご主人様。私が全て説明できますから。」

そうだよな、孤児姉は自活していたこともあるからなぁ・・・・・・
今度何か作ってもらうか。
「お口汚しでよければ・・・・・・」
楽しみにしているよ。

食物関連でも、色々あるのだが次に多いのが小間物関係。食器や雑貨、香油や染料など貴族専門の店よりも品落ちなものが多いがこれはこれで楽しいものだ。この香りは好いな、何の花だろう？
「旦那、花じゃなくて木の根っこの香りだ。東方に生息する木の根っこにキノコが寄生すると香を発するようになるんだとそれを乾かしておいた物だ。煮出して香水代わりに使うのもよいし、薄く削って炊き込めるのもよい。どうだい？おまけするよ！」
「珍しいな、少し貰おうか。」
「毎度、そちらの譲ちゃんにも香水の一つでも用意してやらないのかい？」
「好みがあるからなぁ・・・　孤児姉、どんなのが良い？」
「えっと……　この野路菫の香水を・・・・・・」

「渋い好みだねぇ・・・・・　野で花摘む女の子はこの匂いが染みついていて他の匂いが良いなんて言うのに。」
「街から出たことがないから逆に新鮮ですけど。」
「所変われればそんなものかね。毎度あり！！」
「ありがとうございますご主人様。」
小さくお礼を言う孤児姉の耳は真っ赤で可愛いものだ。思わず頭をなでてしまう。
この髪の毛の感触は癖になるのだよなぁ・・・・・・年頃の娘にすることではないのだが。

色々と細々としたものを買って、適当な露店でつまめる焼き菓子を買って食べ歩きながら冷やかして回る。
そんな中でも孤児弟は軽食とかを買い食いするし姉の方は奇麗な小物とかに興味があるようだ。
今までの孤児暮らしで手に入らないものを自分で稼いだ金で手に入れることができてはしゃいでいるようだ。
金を使うということも覚えておくのは良いことだ。それ以前に楽しんでほしいかな。

私も久方ぶりの外出らしい外出を楽しんでいる。
実際ここ数カ月は孤児院か性愛神殿にこもりきりだったしな。
少し歩くだけでも疲れが来る。これからはもう少し歩くとしようか、旅に出るのもよいな。
この二人を連れて、どこか珍しいものでも見に行くのも悪くなかろう・・・・・・・・
海を見てみるのもどうかな？姉弟も見たことないだろうし驚くだろうな。とはいえ私も見たことがないのだがどんなものだろう？

まだ見ぬ海への想いでぼんやり歩いている私だったが、ふと気がつくと孤児姉が一軒の店に目が釘付けになっているのに気が付く。私

がそのまま通り過ぎるので後ろ髪に引かれながらもついてこようとしているようだ。
孤児弟のほうは付かず離れずどこで買ってきたのか菓子の袋を抱えている。どうせ孤児院に戻ったところで弟妹どもに食われてしまうのが落ちだろうに・・・・・・・・

孤児姉がどんなものに興味を示したのか気になってその店をのぞいてみると、レースや何かの端切れを扱っている店であった。そこにあるいろいろなリボンに目が行っている。
「いらっしゃい、旦那。こんな可愛い子が物欲しそうにしているのに無視して行ってしまうなんて意地が悪いよ。どうせ暇なんでしょ、付き合ってあげなさいよ。」
「そうだな、では幾つか見繕って貰おうか。この子を可愛く飾り立ててやってくれ。後で剥いて楽しむから（にやり」
「おやおや、旦那お楽しみですね。わかりました存分に飾り立てて差し上げましょう。」
そんな売り子との会話に孤児姉は耳まで真っ赤にしてうつむいている……
「ぇっ！ご主人様が私を・・・・・・どうしよう、下着は白じゃないし・・・・・・・オテイレガ・・・・・・」
動転しているなぁ…・

「二人ともねーちゃんをからかい過ぎだよ。」
孤児弟に窘められる。
「まぁ、飾った姿を愛でるのは悪くないがな。剥いたり無体はしないけど。」
「さぁさぁ、嬢チャン気を取り直して何にする？　さっきからかい過ぎたからおまけするよ。」
「どれにしようかな？」
機嫌を取り直した孤児姉は売り子と共にあれこれと悩み始める。

長くかかりそうだ。

私は孤児弟に飲み物を買いに行かせると隣の小間物屋を何と気なしに眺める。

「旦那、暇つぶしですかい？女の買い物は長くかかりそうだからなぁ…」

「仕方あるまい、古来よりそういうものだと決まっているのだから。私も暇だし付き合うくらいよいだろう。暫し邪魔するぞ。」

「じゃぁ、うちのもなんか買ってってくださいよ。おれも暇だし・・・・・・・」

「暢気なものだな。」

店を見てみると、オオカミの毛で作った服ブラシとか内袋を丈夫な麻でつくり外側に絹と金糸で丁寧な刺しゅうの入った硬貨袋があったのでそれを買う。そうしているうちに孤児弟が飲み物と軽いつまみを用意してきた。

カップに入っているのが三つ、壺が一つ。壺からは酒精の香りがする。

「旦那にはこっちの方が良いだろう。」

「まだ早いと思うのだが、気がきくな。小間物屋お前もどうだ？」

「貴族の旦那に酒を奢られるなんて、珍しいこともあるもんだな。ありがたく頂きますよ。」

小間物屋はカップを取り出し（売り物だが）注がれた酒を嬉しそうにのどを鳴らして煽る。

私も酒を嘗めながら孤児姉を眺めている。つまみも用意するとは長くなることを覚悟しているな。

「だってねーちゃん、選ぶのに時間がかかるもん。おいらたちのことを忘れていると思うよ。」

「ちげぇねぇ。坊主、お前の言うとおりだな。多分、ご主人さまも目に入ってないぞあれは・・・・・・・・」
思い当たる節があるのか小間物屋も水煙草をふかし始める。

「そういや、貴族の旦那。お付きの者が主人を放置して買い物に熱中していいのか？」
「たまには良いだろう。私も暇つぶしできているだけだし、あまりかかるようならばさっさと済ませるがな。」
「甘やかしすぎだろう旦那。」
「まぁ、私が甘やかしてやらんと甘え方を忘れているような娘だしなアレは・・・・・・」
「普通親とかが甘やかすもんだろうが。」
「あの娘の親はどこにいるのやら、小さい頃から弟妹の面倒に追われて我儘を言ってはいけないと思い込んでいる節もあるからな。難儀なものだ。」
「へぇ、旦那は孤児を従者に使っているんかい？物好きなものだねぇ・・・・・」
「孤児だからって馬鹿にしたもんじゃないぞ！こいつらは下手な従者雇うよりも有能だしな。引き抜きを断るのが大変なんだ。」
「この子達がねぇ・・・・・・　旦那が仕込んだんですかい？」
小間物屋が半信半疑で姉弟と私を見ている。そうだろうな、年端もいかない子供に道楽貴族ですと看板背負っているような私。先ほどのやり取りがつながる様子がない。
加えて、端切れ屋と孤児姉が主人そっちのけでやり取りしているし何処が有能なのだろうかと判る材料がない。
「まぁ、私の仕込みに掛かれば官僚貴族が頭を下げて引きぬきに掛かる補佐官が出来上がるのさ。」
「でも、だんな。従者というか官僚補佐として仕込めたのはおいらたち姉弟だけでしょ。どう考えても今日の王宮伯家とか失敗してるじゃないか。他にも某家の嫡男とかつぶしまくった話を聞いている

よ。」
「気のせいだ！」
「旦那いろいろやっているんだねぇ・・・・・　旦那も官僚だったんかい？」
「今は職を辞してのんきな隠居生活だからね。」
「隠居には早いんでないかい？」
「そうか？普通の貴族官僚の一生分の仕事はしたと思うが。過労死する前に逃げ出したのさ、これからゆっくり酒を飲んで女はべらして自堕落に過ごすんだ。」
「うらやましい御身分で・・・・・・・・・・」

小間物屋の皮肉にもう一杯どうだと酒を注ぐが切れているようだ。
孤児弟に酒の追加を命じて孤児姉を眺める。
いまだにこれにしようあれにしようと悩んでいる。端切れ屋も年頃の娘が悩んでいる姿を微笑ましくてかどう飾ったら可愛くなるか真剣に悩んでいる。孤児姉が悩んでいるのは財布の中身で端切れ屋は出来上がりという違いがあるのだがそこのすり合わせには時間がかかるのだろうな。

まぁ、よいか・・・・・・
孤児弟が持ってきた酒を飲みながら小間物屋と二人暇を持て余す。
こういう日常も悪くないなぁ・・・・・・・

二杯目の酒も切れる頃になっても決まらないようだ。
どうも、手持ちの予算で選ぶリボンをどれにしようか選びきれないようだ・・・・・・・・
そろそろ手助けするか

「孤児姉、決まったか？」
「うーん、どっちも欲しいのですけど持ち合わせが・・・・・・・

そんでどっちかにしようと思うのですがそれも決まらなくて・・・・・・」
「端切れ屋、この二本を包んでくれ。」
「はいよ！」
「ご、ご主人さま・・・・・・・・そんな事をしていただかなくても・・・・・・・・・」
「なぁに、たまにしかしないからなこんな事。あと、端切れ屋悩んで泣く泣く諦めていたのがあったろう！その3本も包んでくれ。」
「ありがとうございます！！」
「ご主人様！そこまでしてもらわなくても・・・・・・・・」
「可愛い従者が着飾ったところ見たいだけなんだから……気にしない気にしない。」
「嬢ちゃん、ご主人様がイイって言ってんだから素直に甘えておきな！こっちも売り上げになってうれしいし。」
おい、こら！そこで本音出すな！

孤児姉は真っ赤になりながら
「ありがとうございますご主人様・・・・・・・・」
と礼を言ってくる。
気にすることはないと頭をなでる。さらに真っ赤になる。
何度も言うようだが年頃の娘にやることじゃないな。照れくさいのだろう・・・・・・・・・・

「こうやってみると、年端もいかない娘をたぶらかしている男にしか見えないのだがなぁ・・・・・・」
「たぶんだんなは誑かす積りもないと思いますよ。単純に性愛神殿に入り浸っていたから女性の扱いに慣れているだけだし・・・・・・
ねーちゃんも不憫だよなぁ・・・・・・・・・・敬愛するご主人様が道楽者で怠け者、女が好きで王家に睨まれている。どう考えても、仕え続ける主人じゃないのに・・・・・・・・　一生ついてい

くつもりだぜあの様子だと。」
「でも、お前等はつかえているんだろ今も・・・・」
「借りがあるからね、あの御方に。あの御方がいなければおいらたち姉弟は今頃よくて牢の中か最悪奴隷にされていたろうしな・・・・・」
「苦労しているんだなぁ・・・・・・・・・・・・・」

そこの小間物屋と孤児弟。好き勝手言っているではない!!
誰が誑かしているんだ?孤児弟後で査定に入れておくからな!!
「いいよ、だんな。そんときは財務官の所にでも世話になるから!!」

口の減らない餓鬼だ（苦笑

「帰ろうか、だんな。もう夕暮れだし、孤児院の皆もおいらたちを待っているだろうし・・・・・・・・・」
「そうだな、孤児姉もいくぞ!」
何やら端切れ屋から色々おまけして貰ったものを抱えつつ孤児姉も付いてくる。

そうして、我ら主従は夕日に染まる街並みで三つの影となるのであった。

市場と端切れ屋（後書き）

もちろん孤児弟の菓子は弟妹どもに食いつくされてしまいましたとさ。

孤児弟は多分それも計算に入れていた節もあるのですが。

孤児姉ご褒美の巻でありました。

さてと、今日の酒は何だろうな。ハイランドの酒でも試すかな。

市場と小間物屋（前書き）

あらすじ　市場でお買い物。

市場と小間物屋

孤児院に戻るとまだ王妹殿下（しょたこん）がいた。
しかも縄を解いて優雅に寛いでお茶を飲んでいる。
誰だ！縄を解いたのは！！こんな危険物野放しにするなんて危機管理体制がなっていないぞ！
そんで、何で迎えが来ないんだ！

「あっしは王城にちゃんとお迎えを寄越すように伝えたのですが。近衛の方が来て、わかりました後ほど迎えのものを寄越します。といっていたのだがねぇ・・・・・・」
「誰が応対したかわかるかい？解放奴隷団の小隊長。」
「えっと、某王宮男爵閣下とその一統です。」
「ああ、王妹殿下の犠牲者だ。握りつぶすか、思い切り遅れて迎えを寄越すかだな。あの人は婚約者が腐化して男の愛人作らないのといわれて泣いていたからなぁ・・・・・・」
「あら、某男爵でしたら本にして婚約者さんにも渡してありますわ・・・・・・・・・・・・・・」

うわぁ・・・・・・・・・・道理で某男爵、婚約者の父親から怒鳴り込まれたわけだ。男爵の男色本が父親の目に留まったんだな。哀れな・・・・・・・・・・・・・・

「で、誰が縄といたの？」
「す、すみません。私です殿下が、ご、ご不浄を申し出られましてさすがに漏らされるのは・・・・・・・・・・・・・・」
「仕方ないか、裏のゴミ捨て場にでも捨てて置けばよかったのに・・・・・・」
「（元）法務官様、さすがに酷くはないですか？」

「それでも生ぬるいと思うのだが・・・・・・・・・まさか、子供たちに遭わせてないですよね？」
「それは大丈夫です！私兵の方々が流石に危険すぎるって・・・・・・・・・」

よくやった私兵団！後で差し入れだ！
夜も遅いしそのまま放り出すか！
「ちょっと！法務官！仮にも貴婦人を一人で王城まで帰れって放り出すの？」
「運がよければどこかの暴漢か追剥が始末してくださるでしょうから。」
「それは酷いですよ（元）法務官様！暴漢なり追いはぎだって選ぶ権利はあるでしょうから！」
「そっち？？」
「それはいくら悪人でもなぁ・・・・・・」
「肯定？」
「だって、襲われたら襲われたでそれをネタに暴漢鬼畜攻め本とか作りそうだし・・・・・・・・・」
「それは創作意欲そそるねぇ・・・・・・・・・・・・」
「写実性のために体を張るその姿勢、敬意に値します。殿下。」
「では取材に行ってらっしゃーーーい！」

ぽいっ！！
「ちょ、ちょっと！！開けてよ入れてよ！！」
煩いなぁ・・・・・・・・・・・・・・・
「いくらなんでもこれは洒落になってないって！！」
「本気なんですが。」
「酷い・・・・・・・・・・・・・・・」

門外で崩れ落ちる王妹殿下（しょたこん）流石にこんなのを王都内にうろつかせる

のは民草の安心できるところではないですな。
「（元）法務官様酷くないですか？」
「そんなことはないよ。彼女一人で暗殺者を退けたことありますから。ただし、暗殺者総受け妄想だけで・・・・・・・・ちなみにこれは内緒ね。」
「うわぁ、知りたくありませんでしたわ。こんなこと誰にもいいたくないですわ・・・・・・・・・・」
へこむ女衆その一、悪い事したなぁ・・・・・・
「ねぇねぇ、そこの女衆。私の本を読まない？」
「持ち込むな！！　私兵！！そこの殿下を簀巻きにして納屋に放り込め！！」
「だんなだんな、始末したいのはわかるけど、それを口実にだんな捕縛隊とかくるんじゃないのかい？」
「おっと、それは失念していたよ。これでも王族だからなぁ・・・・」
「ありがとう孤児弟！！お礼に私と一夜を共にすることを許すわ！」
「すみません、殿下。お礼はいりませんので・・・・・・・」
「遠慮しなくてもいいのに、かわいがってあげるわよ。」
「だから言わんこっちゃない、孤児弟王妹（へんたい）殿下の取り扱いには十分注意しなくてはな。」
「痛いほど思い知りました。縛って石を抱かせて運河に沈めておきます。」
「ちょ、ちょっと！！」

仕方がない、朝まで置いといて開門と同時に届けるか・・・・・・・・・・・・・・

私兵達申し訳ないけど殿下が脱走しないようにお願いしますよ。
「はいっ！」
心底嫌そうな役割を命じられた私兵達は涙目であった。

夜中、嫌な予感に目が覚めた私は男児部屋を覗き込むとそこには窓から涎をたらさんばかりに覗き込み体をねじりこもうとしている王妹殿下の姿があった!!

「変態が出たぞ!!!!私兵はこっちに!!」
「何で王妹殿下(へんたい)が窓からここは3階だぞ!!」
「男の子にまみれてもふりたいのぉぉぉぉ!!」
「ご主人様どうなされたのですか?」
「大丈夫だから寝てなさい。孤児姉には問題がない話だから!」
「だんなぁ?うるさいよぉ・・・・・・」
「逃げろ孤児弟!!できれば男の子連中を連れて私兵団の天幕辺りに行くか女衆の部屋に行け!!」
「えっ!うわぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・」

髪の毛振り乱して涎たらした女が窓から入る姿を見たらおびえるよなぁ・・・・自分が餌食になりそうだとわかったら特に・・・・・・・

捕獲には以外に時間がかかった。何故ならばあまりに怖くて私兵達の誰もが逃げ腰だったからである。
「そりゃ、そうでしょうよ。捕まえようとしたものの性癖を捏造した男色話を流されたら逃げたくなりますよ・・・・・・・・・・」

わくわく、きらきら・・・・・・・・・・
騒ぎを聞きおきた女衆の一人が王妹殿下の話を心待ちにしている。
堕ちたか・・・・・・・・・・・・

堕ちた女衆の一人を不寝番にして王妹殿下が逃げないように簀巻きにして部屋に放り込む。

窓の外にも見張りを置いて、扉の外にも見張りを置いて・・・・・・・・・・このまま部屋ごと封印したい衝動を抑えながら寝なおす。孤児姉弟が私の部屋にもぐりこんで寝ていたのは仕方がないことであろうか。
少しでも安全なところにいたい気持ちはわかるからねぇ・・・・

次の日の朝、朝食の後私は王城に王妹殿下(へんたい)を送り届けに行く。
案の定、王城には連絡が行っていなかったらしく問題になっていた。
まさか簀巻きにされて私の元に贈り物よろしく届けられた件に対して
「どうして処理してくださらなかったんですか!!」
と涙目で怒鳴られる。応対に出た近衛の門番よ!!お前も被害者だったんか!

引き渡す段になって王妹殿下(へんたい)を連れた私は転んでしまい王妹殿下(おうけのはじ)を王城の堀に落としそうになる。
「ちょっと!!わざとでしょう!!」
王城のほうから　ちっ!!　という舌打ちの声が（複数）聞こえた。
「ちょっとちょっと!!誰よ舌打ちしたのは?酷いんじゃない!!」
残念!今度はうまくやろう・・・・・・・
「今度はって何?　今度はって!!」

それはさておき、今回の経緯について聞いてみる。
いくらなんでも王妹殿下(きけんぶつ)を簀巻きにして孤児院にまで届けるのは単独犯では駄目だし結構上位の役職もしくは爵位のものがかかわっている可能性が・・・・・・・

応接室にて財務官が
「久方ぶりだね法務官。王妹殿下(やっかいもの)の保護については（すごく不本意

だけど）感謝するよ。ところで、戻ってくる気はないのかい？」
「すまんな財務官。やっと手に入れた隠遁生活だ、手放す気になれないよ。ところで王妹殿下（しょたこん）を送り込んだ実行犯は被害者の会かな？」
「たぶん、その被害者の会だろうな。実行犯は誰だか特定はできないが、宰相閣下あたりが手引きしているんじゃない？」
「やはりなぁ・・・・・・　閣下にあったら伝えといてくれない？生で送るんじゃない！！子供たちが見ておびえていただろう！！って。」
「おびえてた？　流石にそんなことないでしょうに・・・・・・」
「それが赫々云々で・・・・・・しかもそれにおびえた孤児弟が部屋から出てこなくなったよ。」
「うわぁ・・・・・・・・それは酷い・・・・・・・・」
「まぁ、そんなんだからこんなことが無い様に頼むよ。」
「約束はできないがわかった。」
「すまんな、こんな厄介事持ち込んで・・・・・・・・　今度飲もう。」
「いいねぇ・・・・・・・・　では今から飲むか！」
「朝早くから？いいのか仕事は？」
「自分の分は終わらせた。しばらくはお前の後釜に来たやつの手助けだな。一月もたっているのに覚えが悪くて困るよ。」
「気長に育ててやりなよ。少なくとも3人は来ているんだろ。」
「１０人来ているんだが、半数が潰れ掛けて残りが逃げ出しそうになったから椅子に括り付けている。長関係は法務官を連れ戻すことに成功させたものには金貨１００枚与えるとか言っているけど連れ戻すことが不可能に近いから誰も実行してないというか実行する暇がないよ。」
「なんと、そこまで追い込まれているのか。」
「そこで相談なんだけど賞金半額渡すから・・・・・・・・一時の手伝いでもいいから来てくれないかなぁ？」
「断る！」

「そこを何とか・・・・・・・・・・・・といいたいところだけど無理だよね。　見つからないうちにのみに行こう友よ！！」

財務官と二人して王城を後にするのだが、他の官僚たちに見つかって
「法務官だ捕まえたら金貨だ！！」
「それよりも仕事をさせろ！！俺たちが死ぬ前に！！」
だの
「ああっ！！財務官が裏切ったぞ！！」「おえっ！おえっ！！捕まえていくんだ！！」

遠いかけっこ・・・・・・・・・・・・王城の門前で門衛が何事かと思ってびっくりしていたのだが、我々は気がつかず王都を駆け巡る・・・・・・・・・

自由市の辺りで息を整えると流石に・・・・・・・・・・・・　って、言うかまだ追いかけてくる！！
「ま、まて！！貴殿等話がある。」
「はぁはぁ・・・・・　なんだ法務官？話くらいは聞いてやるぞ。我々だって鬼じゃない！！」
「私は鬼族ですが・・・・・・」
「話がややこしくなるから黙れ！！」
「で、話とは？」
「このまま今日は休んだらどうです？酒おごりますので・・・・・・・・・」
「ふむ、その心は？」
「あなた方は私を説得するために接待をするという設定で・・・・・・・・・」
「ふむふむ、金貨百枚分の価値はある人材を入れることは国益にも反しないからな！」
「そうそう、そんで失敗したとしても仕方ないですよね。数日がか

りで説得しても・・・・・・・・・・」
「よく考えたらその名目だと法務官に奢らせるのは不味いなぁ・・・・・・・国庫から人材費があるからそれを流用して・・・・・・・・・・」
「それは良い考えですな財務官!!善は急げだ!!早速飲もう!!」

皆さんそれでよいのですかぁ？

「法務官が抜けてから二月強、飲みにも行けてないんだぞ!!」
「確かにあの状況だったら逃げたくなるのはわかるが、俺たちのことも考えてくれよ・・・・・・・・・」
愚痴を並べられている・・・・・・・・・・うんうんすまないねというしかない私がいる。
「良いよなぁ、法務官。性愛神殿で入りびたりだったんだろ。下にもおかない扱いでさ・・・・・・・・・」
「いや、下にもなっているだろう。式武官、彼は下からゆれるのを眺めるのが好きらしいから。」
「なるほど民部官、それは絶景だなぁ・・・・・・」

下の話になっている・・・・・・・・・・　昼間の市場で何話しているんですかねぇ・・・・・官僚たちが・・・・・・
「貴族の旦那、どうして俺のところで居座っているんです？」
「それはな小間物屋、酒場の開いてない時間でつまみと酒を手に入れるには市場が一番だろ。それで持って両隣に酒の量り売りとつまみになる干し肉、前には漬物が置いてある店。そこに酒を注ぐカップだの皿だのを扱っているお前の店があったら絶好の立地条件だろう。」

「だからって、俺の店を占拠しないでくださいよ!!これじゃ商売上がったりじゃないですか!!」
「悪かったと思っている。どうせ暇なんだろ。一緒に飲まないか？」
「場所代くらいは負担してくださいよ・・・・・・・・・・　今日の稼ぎがなくてなんて言い訳しよう・・・・・・・」
「わかったわかった。売り上げの半分くらいは払ってやるから諦めろ・・・・・・・・・」
「ううっ・・・・・・・・・」

我々は飲んで騒ぐ。まぁ、煩いが人には絡まないよ。市場担当の衛士も我々の姿を見て何か言いたいのを思い切りこらえて何もいえないでいる。なんたって貴族様相手だ、自分の首が飛ぶかもしれないからね（雇用的にか物理的にかは秘密）そんな市場で最強となった我々は大いに飲み食らう。
これが旨ければ旨いなと大いに騒ぎ、釣られた客に貴族様の舌が認めたものと信じ込んで買っていくのである。おかげで周りの食品商は売れ行き好調。それを聞きつけた市のつまみ系と酒関連の店の店主は我々の元に来てこれはどうかと薦めるのである。我々が飲み食いして評価を下せば、その評価に自信を持って王宮の貴族様が認めた味だよと客を呼び込む。商魂たくましいね。
実際に王宮の飯と違った味わいがあってうまいのだよねぇ・・・・・
王宮でも認めていいものがあるし、この品質を庶民価格で売る良心的な店は大事だよ。
逆に管理の悪い酒などはちゃんと欠点を教えてあげ次に繋がる様にする。
私らは悪魔じゃないからね
「私、あくまでも魔人族（でーもん）なんですが。」
「黙れ!!　その血は薄まりすぎてほとんど人族だろうが!!」

そんなやり取りしているうちに衛士が法務官様少し遠慮なさってく

ださいと言ったもんだから、私の正体がばれてしまう。あたりに広がる全裸賢者の称える声！！声！

誘拐された子供がありがとうございますと礼を言ってきたり、街娼に落ちて体を壊していたのが身を持ち直して店を開けるまでになったのが自分の過去をさらしてまで礼を言ってくる。子供共々幸いに暮らしているようで良いのだが態々自分の過去を大勢の前でさらすこともないだろうに・・・・・・・

「自らの過去は隠したいものですが、助けてくれた恩人に礼の一つもいえない生き方はしたくありません」

等と堂々と礼を言い続けるものだから、民草どもは感動してその女性の店に殺到する。性愛神殿にいたころは身体中ぼろぼろで無事に回復できるのだろうかと心配した者の一人であるだけに感慨深い・・・・・・・

街娼風情が等と同情得ようと乞食商売しやがってと抜かした貴族がいたのだが、そいつは小間物屋が思い切りぶん殴った！！鼻を押さえて貴族に貴族に何をしやがるとか言うのでさらに殴りつける小間物屋！

小間物屋は悔し涙を流している。身内か誰かつらい思いした者がいるのだろうか・・・・・・

剣を抜きかけた貴族に近衛文官と式武官が首筋に剣を突きつける。更には侍従官が胸倉をつかんでぶん殴る！！　民部官は貴族の素性をたまたま知っていたので、そいつに対して決闘を申し込む。

「某子爵令息！この民部官が決闘を申し込む。この小間物屋の勇気と名誉を守るのが私の役割と知ったがゆえに！小間物屋！お前は私の貴人聖域（アジール）法の保護下に置く！！」

おおっ！民部官美味しい所もって行きやがって！！等と官僚達が口

々に言っているが。
それぞれに得物を抜いて我等も義によって参戦いたすなどというものだから、馬鹿貴族は逃げていった・・・・・・・・・・

やんややんやと大喝采！　義に厚い貴族様が守ってくださったぞと口々に称えれば！
民部官
「私はこの小間物屋がこの小さな店のご婦人の名誉の為に立ち上がった男気に応じたまでだよ！称えるべきは貴族であろうと理不尽に抗おうとする勇敢な小間物屋だろう！！皆の者！小間物屋を保護することができて私の名誉はいっそう高められた！！私は感謝する！！このような高潔な民がこの国にいた事を！！」
「ありがとうございます。貴族様方、俺のような取るに足らない小商いの為に力を振るっていただいて・・・・・・・・・　俺の女友達も親の薬代を稼ごうと苦界に堕ちたところを法務官様に助けていただいたものであります。いまだに彼女が泣いていることを知っていたから尚更あの糞貴族の言葉が許せなかったんです！！ありがとうございました。」

平伏して礼を言う小間物屋に侍従官は顔を上げるようにいい、近衛文官はその女性はお前の大事な人なのだろうお前が本気で怒る程にとからかい、式部官は我等の治世に綻びがあるからと頭を下げる。
そして民部官

「よし、小間物屋！お前は多分狙われるだろうから、家族と共に我が元に来い！！ついでだ、その女友達とやらの家族も保護しよう。どうせお前のいい人だったんだろう！！」
顔を真っ赤にする小間物屋・・・・・・・　分かり安すぎるな！

「よし店を片付けて、小間物屋の保護に急ごうではないか！！ここ

に集いし民草の衆、小間物屋の商品を誰か買うものはいないかね？
我等一同が認めた者の品だぞ！！品のほどはしらないが彼はしばらく商いができなくなるから身軽にするのを手伝ってくれ。所で小間物屋お主は読み書き計算はできるか？」
「そりゃぁ、小商いですが商人ですから帳簿位はつける程度にはできますが・・・・・・」
「保護している間の仕事はすぐに見つかるよ、商いはできないが商いをやるくらいには稼ぐことができるだろうさ・・・・・・・・・・・・・・・　そして、私が助かる・・・・・・・・・・・・」
最後の一文なんか民部官の本音が出ているが、無茶はしないだろう・・・・・・・・・・宰相閣下じゃあるまいし。

一同に笑いの渦が巻き起こり、買い付けにかかる群集。
数分もすれば小間物屋の商品は店主自身という有様。

酔っ払い官僚どもは意気揚々と抜剣して、イザ行かんとか進むので群衆は道を作り、あるものはついていきながら彼らを見送る。
私は新たな物語の始まりを見てほほを緩ませる・・・・・・・・・

これで誤魔化せた・・・・・・・・・と
「これで誤魔化せたと思っているでしょう法務官。」
なぜに財務官がここに？
「今日のところは諦めるけど私は君に戻ってきてほしいと思っているのだからね。陛下だって戻ってもらうためには何したらよいのだろうと私にも零すんだから、愚痴の相手まではしたくないんだから。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「では、また飲もうではないか我が友にして次期宰相閣下。」

「まて！誰が次期宰相だ！！私は仕事したくないんだ！！」
「あはははははっ！！　私はいつでも待っているからね。何時でも君の席はあるんだ、早く帰っておいで仕事がなだれ落ちて孤児院まで押し寄せる前にね！！」
「脅しか！脅しなのか！！」

財務官はそれには答えずに群集達に法務官を宜しく等といいながら酔っ払い官僚どもについていく！！
あいつめ！　仕事が大変で猫の手も借りたいだけだろう！！

市場と小間物屋（後書き）

その後、小間物屋は民部官の補佐として活躍するのだけどこれは別の話。
読み書き計算のできる人材は貴重なのです。

市場と王兄殿下（前書き）

あらすじ　民部官が小間物屋を引き抜いた。　王妹殿下を始末できない法務官は涙目。

今私は市場にいる。
あの時民部官が小間物屋を保護したのはよいが、元街娼のご婦人を保護し忘れているから彼女が仕返しの対象にならないかと気になっているからである。

まぁ、あれだけ派手に逃げていれば大抵の者ならば恥ずかしくて来れない筈だが世の中には恥知らずという人種がいる。あの糞貴族がそれでない事を祈りたい。

「あら、全裸賢者様。」
「元気にやっているかい？」
「皆様方のご好意でなんとかやっていけてます。」
「それは良かった、あのときの騒ぎからイラン事に巻き込まれていないか心配でねぇ・・・・・・」
「それは賢者様の心配なさることではないでしょう。」
「いやいや、流石に何かあってからでは寝覚めが悪いからね。私の自己満足のために無事でいてくれよ。」
「大丈夫ですわ、私と息子の一人位何とか逃げるのは出来ますから。」
「それなら良いけど、そっちにいるのは息子か？」
「はい、息子や全裸賢者様にご挨拶なさい。」
「椎の実の賢者様母がお世話になりました。」
ぐはっ！！ダメージがでかい！！こんな子供に言われるなんて・・・・・・・・・
「ご主人様。ご主人様のは千年樹ですから・・・・・・・・・」

「だんな、だんな！子供の言った事子供の言った事・・・・・・・・
・・・　気にしたら負けだ！椎の実の意味もわかっていないはず
だから！」

「この子ったら・・・・・・・・・・・・・　賢者様に謝りなさい。」
「ごめんなさい　粗チ●の賢者様。」

どうも、母親と親しくしているのを見て嘗ての客と重ね合わせてい
るのかもしれない・・・・・・・・・・・
そう考えると仕方ないなとも思える・・・・・・・・・・　でも、
椎の実とか粗◎ンとかは許さん！！
「少年、力が欲しいか？」
「欲しい！せめて母ちゃんを守れるくらいに！」
「いい目だ！　今度から孤児院に来い！　知識という力を教えてや
ろう！」
「知識だと誰も殴れないよ？」
「殴るだけなら一度に一人だろ。知識はうまく使えば一度に千人を
殴り飛ばすことが出来るぞ。」
「本当？」
「では、お前の母親が帰ってきたときのことを思い出してみるとよ
い。どれだけの者が殴られていたかな？」
「判るような判らないような・・・・・・・・・・・？」
「まぁ、来るがよい。殴り方ではなくて身の立てることも教えてや
ろう。」
「行くから絶対！守れる力を頂戴ね！！」
「少年のがんばり次第だがな！」
生徒獲得成功！　■チンと言った恨みしっかりと果たしてやる。
促成コース決定かな（邪笑

「だんな、大人気ないよ。」
おっと、反省反省・・・・・・・・・・

「賢者様、私のみならず息子にまで情けを・・・・・・・・・・・・・・
このお礼はなんと言ったらよいか？」
「礼はいらないよ。小額とはいえ授業料はもらうし、これは私の道楽だからね。」
「それでもありがとうございます。」

仕込み甲斐のある活きの良いのが手に入ったな。
どう仕込もうか・・・・・・・・・・・・・・・・・・

等と馬鹿なやり取りをしながら日々をすごす。
市場で私が来れば小商いの者達がこれを持ってけとかあれを食べて見てくれとか色々やってくる。
別に私はお前らの守護者ではないのだが
「いえいえ、全裸賢者様は博識でありますから、その見識の一欠けらで結構いい商売をさせて貰ってます。」

嗚呼、先日の酔っ払い連中といた件か・・・・・・・・・・・・・・・・
「ご主人様何をなさったのですか？」
「市場で店を占拠して、酒盛りをして色々な店の商品を好き勝手に批評して喧嘩しただけだよ・・・・・・・・・・」
「話だけ聞いてると酷い駄目人間みたいな気がしますが・・・・・・・・・・」
「お嬢ちゃん、それは違うよ。酒盛りしていたのは事実だし好き勝手言ったのは否定しない。但し舌に関してはあの一党は嘘ついてないからねぇ・・・・・・　その評価だけで売り上げ倍増だったよ。
そう言えば旦那、あの連中は何時来るんですかい？」

「あの連中ならば次の日登城したら仕事サボって酒盛りしていたのがばれて今頃仕事の山に埋もれているよ・・・・・・・・・・・あの時の小間物屋ともども・・・・・・・・・・」
「うわぁ、お気の毒様！」
「そりゃぁ、私に仕事をさせようとする輩には当然の報いだ・・・・・・・・・・・・・・・小間物屋には悪い事したかもしれんが・・・・・・・・・・」
「しばらくは来れないのですね・・・・・・・・・・・・・・・期待していたのに・・・・・・・・・・」
「悪いな・・・・・・・」

日々は平穏である。
孤児院に王兄殿下が簀巻きで来て、下に転がしておいたら
「下から眺める幼女と言うのも乙であるな白い下着が見え隠れしているし・・・・・・・・・・・・・はぁはぁ・・・・・・・・」
等と変態発言をかます程度なのだから。

私が手を下すまでもなく女衆が蹴りを加えていた・・・・・・・・・・・・

一緒になって子供たちも蹴りいれている。
「幼女たんに蹴りいれられるなんて新しい扉を開きそうだな。なんていうか色々見えるのもうれしいし・・・・・・」
「黙れ変態！女性の敵！！」
一応、王族だぞ。
「いえ、子供達に手を出そうとする変態は例え神であろうとぶん殴ります！！」
勇ましい事で・・・・・・・・・・・・・

これはすぐに引き取りに来てくれた・・・・・・・・・・・・・

引き取りに来た、某侯爵が自分の娘が狙われているからかすごく不本意そうな顔をしていたが孤児院での暴挙を聞くにつれ王兄殿下を心底嫌らしい物を見る目で見下している。

「どうして王族は癖の強いのばかりなんだろうかねぇ・・・・・・」

「わしに聞かないでくれ！」

その次の日も王兄殿下が簀巻きで届けられている・・・・・・・・・・・・・

その日は見つけたのが私兵団だったので、そのまま猿轡に目隠しをして王都の外に捨てに行った。

自然か彼を抱きとめて帰してくれるだろう・・・・・・・・・・・・・・・

「死ぬかと思ったじゃないか！！」

「王兄殿下お早いお帰りで・・・・・・・・・・・・・」

「旨い事縄抜け出来なかったら今頃獣の腹の中だったぞ！！」

「それは獣にとって幸いな事でございましたねぇ・・・・・・・・おなか壊す事なくて！！」

「そっちか！」

さすが兄妹芸風が似ているな。

「似ている言うな！！あんな（差別表現により削除）と！」

「おら思うに似たり寄ったりだとおもんだべがなぁ・・・・・」

「んだ、んだ。」
「まったくだ・・・・・・・・・・」

その日はお帰りいただいたが、また来そうだ。
対策を立てないと・・・・・・・・・・・・・・
「子供の下着をおいといて落とし穴とか・・・・・・・・・・」
「ここはトラバサミだべ」
「べとごんボールと言うのも使ってみたいなぁ・・・・・・・・・・・」

獣用のわなばかりだ・・・・・・・・・・・・・・
そんなわなに掛かるんだったらわなを仕掛けた奴に金貨進呈してやるよ！！

三日後、かかってましたよ。
落とし穴のそこで幼児用下着を握り締めている王兄殿下が・・・・・・・・・・・・・・
「これはおれんだ！　誰がなんと言おうと渡さんぞ！！ようじょのぱんちゅようじょのぱんちゅ・・・・・・・・・・・・・・・・」
「殿下まことに申し上げにくいのですが、それはいていたのは男の子だったんですよ・・・・・・・・・・・・・・」
「ぐはっ！」

王兄殿下は血をはいて崩れ落ちた・・・・・・・・・・・・・・
「金貨はもらった！！」

よかったね、奴隷公の軍団副長・・・・・・・・・・・・・・
「まいどあり！！」

そこで軍団副長へと向けられるオゴレコール！
すぐに消えるなその金貨・・・・・・・・

崩れ落ちている王兄殿下、流石に哀れになってきたので女性の下着を落としてやる。

うっほうっほ喜んでいる王兄殿下、そこで私は真実を教えるのであった。
「その下着は幼児用に見えるが実は裏の婆様（６７歳）の下着だよ。」
「ぐはっ！！」

「（元）法務官様、それはあまりに無体でありましょう・・・・・・・・・・・（汗」

酷い事したかな？

死体となった王兄殿下を放置して私は市場へと遊びに行くのであった。

末王女と法務官（前書き）

あらすじ　孤児院は変態に狙われている。どうする（元）法務官！！子供達の貞操は君の働きに掛かっているのだ！（あらすじに嘘成分は多分に含まれています。

末王女と法務官

どうも子供だけが集まっている状況と言うのは王族兄妹(へんたい)をおびき寄せる誘蛾灯みたいなものらしい。
誘蛾灯自体異世界の産物なのでどのようなもので良く判らないのだが・・・・・・・・・・・・・・・

誘蛾灯と言うのはね、異世界の害虫である蛾を集めるために燈す明かりの事なんだよ（ｂｙ知識神）

ご丁寧な説明ありがとう、神様。
で、王族兄妹(へんたい)をどうするかと言う話なのだが、何か良い案はないだろうか？
あの時落とし穴に落ちた王兄殿下を婆の下着ごと埋めていたのだが次の日には抜けた跡があり、その日の夕方には遊びに来ている始末。
私兵の話では埋めたそばから丸太でつき固めて、水掛ながら石灰をまいて、更に石を埋めてから封印魔法を掛けたらしいのだが・・・・・・・・・・・・・・・
今度封印魔法掛けるときは対魔獣級ではなくて魔神、勇者級の封印魔法にしたらどうだろう？

「（元）法務官の旦那、そんな使い手いないって・・・・・・・・・・・・・・・」

神よ、我等を見捨て給うか・・・・・・・・・・・・・・・

いやいや、見捨ててないよ・・・・・・・・・・・・　流石に最後の一線だけは守るから（ｂｙ幼女守護神）

えっと、なんてニッチな神様がいるのだろうかという疑問はさて置いて、どうしたらよいのだろうか？

「害虫と一緒で地道に見つけたら潰すしかないのでしょう。旦那。」
作付け頭が言うと地道で現実的に聞こえるから不思議だ。
「だって、おれ達農民は地道で現実的な生き物だからさ。そうでないと生きていけないし、それができないものは町に出て一旗上げようとするだろう。」
ごもっとも・・・・・・・・・・・・・・

そんなこんなで市場に遊びにいったり、子供達に色々教えていたり王族兄妹（へんたい）を撃退したりしている日々をすごす。
そういう日々を過ごしているある日。私の事を椎の実だの粗チ○等とほざいた元街娼の息子を鍛えていた私に来客が来る。
元街娼の息子には自習課題として問題をどっさり与えて客に向かい合うことにする。
「賢者様、僕が悪かったです。勘弁してください・・・・・・・・・・・・」
「君は母親を守る力が欲しいのだろう。一時も早く力が要るだろう！私も不本意だが心を鬼にして問題を出しているのだ！これが終わったら私兵団に体術の訓練をお願いしているからがんばりなさい。」

一度決意しただけに投げ出せずがっくりする元街娼の息子。気合を入れて課題の山を崩そうと襲い掛かる。
うむ、下手な貴族ですら受けていないような問題を一歩ずつ歩みは

遅くても取り掛かっている。
「まずは、時間を掛けてもいいから基礎をものにしなさい。判らなかったら私なり誰かに聞いてもいいからね。」
「はい、賢者様!!」
私に対して恨めしそうな視線を向けつつ課題に取り組む元街娼の息子。根性はあるようだから色々教えてみよう。
「だんな、椎の実とかいわれた腹いせはほどほどにしてくださいよ（苦笑）」
自重しよう（棒読み）

「法務官!どうして私が王族を寄越したのに首もとらないで返却するの!!王宮の仕事がたまってこっちまでとばっちり来るじゃない!!!」
「末王女様、貴方の差し金でしたか・・・・・・・・・・・・　生で送るな生で!!孤児達の教育上悪いだろう!!」
「大丈夫よ!一寸早い性教育と思えば、それより何時になったら王宮に戻るの?」
「引退すると辞職届出したし国王陛下にもそう申し上げて在ります。私の力なぞ二度と当てにしないでください・・・・・・・・・・って、言うか如何やって王族兄弟（へんたいども）を簀巻きにして持ち込んだのですか?」
「それはね、王族兄妹（おじ、おば）に簀巻きにして孤児院に行けばかわいい子供を鑑賞し放題と乗せただけですわ。」

齢１０の子供の発想じゃない、色々な意味で王族兄妹（へんたいども）の性癖を知り尽くした末王女ならではのやり方だな・・・・・・・・・・・・・・・・
おねしょこいている幼女の発案じゃないな。
「おねしょは関係ないですわ!!」
「別に恥ずかしい事ではないですよ、先日私が懇意にしている娼館

の栗髪の長耳娘もねぇ・・・・・」
「あーーーー!!　聞こえない聞きたくない!!子供にそんな話をしないでよ!!法務官!!」
「事に及んで、戦する事いく度か・・・・・・・・・・・・私が討ち果たしてぐったりした長耳娘を・・・・・・・・・・・・」
「いやぁーーーーーーーーーーーー!!　そんな事言っているわけじゃないでしょう!!」

「だんな、小さな子にそんなことを話すのはまずいでしょう・・・・・・・・　小さくとも貴婦人なんですからそれなりの扱いをしないと。」
「あら、この黒髪の従者はいい事言うじゃない?主人に苦言を言える配下と言うのは貴重だわ。何処で見つけたの?」
「末王女様、この孤児院で育った者ですよ。この孤児弟は・・・・・・・・　ちなみに私の秘蔵っ子だから王女様の頼みでも差し上げるわけにもいきませんよ。この孤児弟の忠心を得ることが出来るならば別ですけどね・・・・・・・・・・・・」
「そこの黒髪の、私の元に来ません?法務官より良い条件で雇うわよ。」
「王女様、おいらはそこらの孤児ですのでそのような大役は勿体のうございます。」
「本音で言えば王妹殿下とその一統に会いたくない。これに尽きるだろうな・・・・・・・・・・・・心的外傷(トラウマ)になっているし・・・・・・・・・・・・」
「だんな、それは言わないでくださいよ!」

「で、末王女様?貴方様がここに来たのは私を戻すための話し合いに来たということですか?」
「そうよ!戻ってくださるわよね?」

「国王陛下には申し上げたと思いますが、私がその話し合いに相対する条件として王族の首をと要求しましたが末王女様がその首を差し出してくださるのですか？」

「えっ！王族兄妹(おじさま、おばさま)を差し出したじゃない！！」

「生で送るなんて非常識にも程が在りますよ。貴方様も王兄殿下(ロリコン)につき狙われて酷い目にあっているじゃないですか！！それを孤児院の孤児達に受けさせようというのですか？それ以前に首は受け取ってないので話し合いにすら立てませんよ。末王女様の首をもって交渉の席を開きますか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「その覚悟もなくただ王族というだけで人が動くというなんて戯言はおいといて、王城にお戻りください！今日のところは私たちがお送りいたしますので・・・・・・・・・・・・・・」

「だって、法務官がいないと国家運営ができなくて国王陛下(おとうさま)や官僚たちが日に日にやつれていくんだもの。そんなの見てらんない・・・・・・・・・・・・・・・・うわぁぁぁ・・・・・・・・・・・」

末王女は泣き出してしまった。

知ったこっちゃない、齢10とはいえ王族として相対するのだ！厳しいけど其れなりの責任は掛かってくるのだから覚悟とか決意とか策とかが必要だろう！

泣いている末王女を見て、孤児姉弟とか末王女付侍従官とか女衆が私のことを鬼畜を見る目で見る。

「ご主人様、流石に子供相手にそんな仕打ちは・・・・・・・・・・・」

「（元）法務官様、少しは話くらい聞いても・・・・・・・・・・」

「法務官、王妃様との一件は某も聞き及んでいるから気持ちがわからんでもないが態々、足を運びいただいた王女様の気持ちも考えて

もらえぬか？」

口々に非難の声がかかる・・・・・・・・・・・・　私に味方は居ないのか？
もしやこの事すらも作戦のうちなのか・・・・・・・・・・・・・・・
仕方ない交渉に立つとするか・・・・・・・・・・・・・・・

「末王女様、私も口が過ぎました。お詫び代わりに交渉に乗りましょう。但し、条件はありますしそれが満たされない限りは仕事はしませんよ。判りましたね！！」
「うん！法務官大好き！！」

泣いたカラスがすぐに笑いやがった。涙でぐしょぐしょの顔をして仕様がない子だ。

「末王女様、元々がかわいらしい顔をしていますのに泣き顔なんて勿体無いですよ。ほら、涙を拭いてください・・・・・・・」
孤児弟が手巾（ハンケチ）で末王女の顔を拭う。涙を拭いて、洟が垂れていたので更に新しい手巾（ハンケチ）で拭ってやる。
「ほら、かわいらしい顔に戻りましたね。もう泣かないでくださいね。おいらのほうからもだんなに働きかけてみますから・・・・・・・」
多分、弟妹の相手の延長線なんだろうが見た目の悪くない孤児弟にやさしくされて末王女が照れて返事をする。
そして、照れている末王女に弟妹にするように頭をなでる・・・・・・・・・・・・孤児弟にしては無意識にあやしている様な物なのだろうが甘やかしてくれる経験が少ない末王女には免疫がなかったのだろう・・・・・・・・・・

「これって、落ちましたよね？」
「そう思いますか？侍従官様・・・・・・・・・・・・」
「でも、孤児弟は如何見ても弟妹相手の延長線だな。」
「このわがまま王女が如何攻めるかが見ものですな。」
「孤児弟はその気がないから無駄な努力となりますわ。」
「そもそも、身分がない孤児と王女様という組み合わせは如何なんでしょうか？」
「なぁに、いざとなればどこかの貴族の養子という形をとって降嫁すればものにできるんでは？」
「となると持参金は法務官の復帰とか・・・・・・・・・・・・」
「そ、そこまでは考えすぎでしょう・・・・・・・・私は復帰するつもりはないですよ！！」

ま、まさかね・・・・・・・
逃げろ！孤児弟！地の果てまでも・・・・・・・・・・・
今ならばまだ逃げられるぞ！！

「黒髪の従者、ありがとう。」
満面の笑みで孤児弟に礼を言う末王女。

末王女と法務官（後書き）

読みづらくて申し訳ない。登場人物の名前がないこともごめんなさい。考え付かないです。

さて、飲みながら続きかけるかな？

末王女と市場（前書き）

あらすじ　末王女来襲！どうする孤児弟！君の逃げ場は（多分）ない！！！

末王女と市場

とりあえず、末王女様を送り届けますか・・・・・・・・・・・・・・・
そう言えば、ここに来る事を誰かに伝えてあるのかな?

「王妃殿下(おかあさま)に伝えてありますわ。侍従官もいますし問題ないでしょう。」

「末王女様に押し切られてしまいまして・・・・・・・・・・・・・・法務官が流石に子供相手で無体な事をしないだろうと思いましてつれてきたのですが・・・・・・・・・・・・　せいぜい、門前払いで仕事をしないと突っぱねる程度でしょうし。」

そりゃ、そうでしょうが無用心だな。
これで何かあったら、孤児院自体が取り潰されてしまう。そのことを考えていなかったのだろうかこのわがまま王女は・・・・・・・・・・・・

「だいじょうぶですわ、その時は宰相あたりが私の首と難題を吹っかけて法務官を復職させるでしょうし目的は果たせますわ。私とこの侍従の身柄で済むならば安いものですわ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・　うわぁ、それ子供の発想じゃない!!私も引くよ・・・・・・・・・・・・・・」

末王女の発言に周りが引く・・・・・・・・・・・・・・　侍従官も今更ながら事の重大さを気がついて青い顔をしている。
下手したら守りきれなかったと一族郎党路頭に迷いかねない状況だったし、侍従の首が物理的に飛ばされるのは確実だろうし・・・・・・・・・・・・

「私助かったのですか・・・・・・・・・・・・・・」

「今のところはな、多分城に戻ってから始末書くらいは書かされるのではないかな？」
「はぁ・・・・・・・・・・・・・・」

がんばれ末王女付侍従官！手伝いは出来ないが応援はするぞ。
移動願いは侍従長宛だが侍従長は王妹殿下の本が原因で療養中だから何時になるかわからないぞ。

まぁ、私も交渉につくといった手前、どのような条件にするか考えながら歩く。

・再契約なしの期間雇用である事。
・二度と復職要求をしない事。
・仕事内容は補佐である事。

これが前提だな、後は賃金面かな？
私のほかに孤児姉弟は普通に来るから三人でいくらが良いかな？
金貨１０枚くらいかで半月程度か・・・・・・・・・・・・・・

そんなこと考えているうちに市場の前を通る。
結構な人ごみに末王女の手が孤児弟のすそをつかむ。見慣れぬ景色と人ごみに吃驚しているのだろう。
こういうときは年相応だなと思って微笑ましく思う。
孤児弟のほうも妹にするように手を差し出す。そういう事をすると逃げられなくなるぞ。
差し出された手をおずおずと握り返す末王女、普通侍従官が抱きかかえるとかしないか？

「それは一応不敬ですから。それにこんな微笑ましい末王女様の様子に水を差すなんて無粋ですよね。」
ニヤニヤしながら言うな。それこそ不敬だぞ。
「いえいえ、末王女様の健全な成長を見守っているだけですよ。孤児弟ならば節度を保ってくれそうですし。」
「そりゃ、そうだな。でも孤児弟も男だから何時狼になるかわからんぞ。」
「それならそれで、止めますから大丈夫です。」
ならいいのだが・・・・・・・・・・・・
手を握って安心したのか周りに慣れたのか末王女は色々興味を示して孤児姉弟を質問攻めにする。
念のためにそばにいた衛士に末皇女の事をそれとなく見守るようにお願いをしてこっちも若い二人のやり取りを眺めてついていく。
少々寄り道になるが交渉が長引いたと諦めてもらおう。

「孤児弟！　あれはなんだ？　食べてみたいぞ！！」
「末王女様、引っ張らないでください。あれは薄焼きの麺麭に野菜のペーストを塗りつけて好みで塩蔵肉や乳酪をはさんだものです。お城に行けば、いくらでもおいしいもの食べられるのですから我慢してください！」
「嫌！おなかすいたの！侍従官。あれを買って来い。」
「王女様、わがままはなりません。王女様の食べるものではないでしょう・・・・・・・・・」
「法務官だって普通に食べるものだから王女の私だって食べられるもの。」
「法務官は悪食ですから大抵のものを食べてもはら壊さないですけど王女様はおなかが弱いですから当たりますよ。」
「侍従官、お前に言われたくないぞ・・・・・・」

「おなか壊すようなものをわがこくみんがうるわけないだろうが！侍従官我が王国民を見くびるな！！」

「末王女様、あと少しで王城ですから我慢は出来ませんか？」

「できない！あたしはあれがたべたいのだ！！たべたいのだ、たべたいのだ！！」

「末王女様、一つ買ってあげますからこれ以上ねだらないでくださいね。」

末王女に負けた孤児姉が一つ乳酪をはさんだ麺麭を買って末王女に与える。

おっかなびっくり一口齧るが、お気に召したらしく次の一口は大きくかぶりつく。

口のまわりがべとべとになるが気にもせず無心にかぶりつく。

食べ終えた末王女の口を孤児弟が手巾（はんちけ）で拭い、いつの間にか用意したのか飲み物を渡す。

何処にでもあるような柑橘と蜂蜜を水で割ったものだが、物珍しさと甘さに一気に飲み干す。

まだ欲しそうな顔をしているのだがこれ以上は翌朝世界地図を描くことになるからと侍従官に止められる。

「乙女の恥をさらすなんて侍従官は残酷だ。」

「確かに非道ございます。でも、侍従官様の苦言もお聞き入れくださいませ末王女様。」

「世界地図なんて書かないのだ！」

「そうでございましょう、末王女様。あまり食べ過ぎても歩けなくなりますよ、ここら辺で抑えておいてくださいませんか。」

「うむ、孤児弟がそういうのならばその言受け入れて使わす。」

「ありがたき幸せ・・・・・・・・・・」

孤児弟、末王女との相性がよさそうだな。この分だと侍従としても

いけるのではないか？

「それは面白いかもしれませんな。侍従長に進言してみますか・・・・・・・・・・」

「流石に苦労すると決まっている職場に送り込むほど私も非道ではないぞ・・・・・・・」

「法務官、聞こえておるぞ。あたしは子供だがそこまで非道な主ではないはずだが。」

「そうでしょうとも末王女様。ただ、周りの王族（へんたい）と関わりあう事自体が苦難でありましょう。」

「否定できない事がつらい・・・・・・・・・・・」

「末王女様、大変なのですねぇ・・・・・」

「判るか孤児姉。あたしもあれが血を分けた一族だという事を否定したいのだが・・・・・・・・・・・・・」

そんなやり取りはさて置き、色々なものを見て店の者を質問攻めにして困らせたりしているが全裸（わたし）賢者の連れという事でお目こぼしして貰っている。

店によっては果物とかを一切れご馳走になったりしている。意外とちゃっかりしているなこの姫様は・・・・・・・・

迷惑料代わりに一品二品と品物を買う侍従官。無理して買うことはないのだが・・・・・・・・・・

そんな末王女に振り回されつつ孤児弟はかいがいしく世話を焼く。

迷子にならないように手を繋いで、質問に答えながら売り子達に丁寧に礼を言ったり、暴走しがちな末王女を嗜めたり・・・・・・・・・

はしゃいでいる弟妹の面倒を見ているようである。

そのうち焼き菓子を買ってもらったり（弟妹達のお土産用に買ったのを奪い取ったともいう）しているうちにべったりと懐いてしまっ

ている。如何見ても手のかかるわがままな妹と仕方なしに面倒見てる兄という構図である。

「あの子も意外と面倒見がいいから・・・・・・・・・・・　あのまま末王女様に振り回されてしまうんじゃないです？」

まぁ、肝心なところでは手綱取ってるから問題なかろう。

そんなこんなで市場を楽しんでいる末王女であった。

「もう、満腹だ！　市場には色々美味なものがあるという事がわかった。あとで料理人に作ってもらおう。」

「あれだけ食べればねぇ・・・・・・・」

末王女の食い扶持を払わされた孤児弟は少々涙目・・・・・・・・・・・・・・・　後で補填してやるから泣くな。

末王女と端切屋（前書き）

あらすじ　末王女の策略（子供の涙とも言う）にはまった法務官、狙われる孤児弟。
孤児弟の財布の中身が食い尽くされるのは時間の問題か？

末王女と端切屋

末王女は市場を満喫しているようだ。この市場と言うものが色々観た事も聞いたこともないもので溢れているおもちゃ箱みたいなものなのだろう。はしゃいでいる姿はまるで子供である。

「なぁなぁ、法務官。あれを買ってくれ！」

指差したのは何かの毛皮、一尾分丸々剥がされているそれは敷物なのか素材なのかが良く判らないが値段を見てみると結構いい値段している。

「末王女様、買って差し上げても宜しいですが二度と交渉に応じませんよ。それで宜しければこの法務官、喜んで末王女様のために献上いたします。」

「ううっ、法務官の意地悪！！侍従官、買って！」

「今持ち合わせがありませんので・・・・・・・・・・・・・・・」

「王城に行って、お金とって来て！」

「王女様、なんの毛皮か聞いて後で買いに行かせれば宜しいではありませんか・・・・・・・・・・・・　王女様の化粧費から出るでしょうがそのくらいの余裕はあったはずです。」

「むぅ、ちゃんと用意してよね！！」

「仕方ありませんね、この店の主人に取り置きを依頼しておきますから我慢してくださいね。」

なんだかんだと侍従官も末王女に逆らえないようだ。甘いぞ甘いぞ侍従官！王族のわがままを諫めるのも侍従の勤めではないのかね？

「いえ、暫くすれば忘れますのでそれまで放置です。」

「納得・・・・・・・・・」

「はい、末王女様。こちらが取り置きの契約書となります。王城宛だと五月蝿そうでしたので孤児院宛に届くようにしてありますので

代金は後で孤児院のほうに回してください・・・・・・・・・・・・・」
「ありがとう孤児弟！」

孤児弟に抱きつく末王女！しかし、何時の間にこんな気働きができるようになったんだ？

「だんなの下でしばらく働いていれば嫌でも出来る様になりますって、こうやって毛皮をネタにしておけば交渉が失敗に終わっても王女様の買い物を届けに来たと言う口実が出来てごまかせるじゃないですか。」
「うむ、さすが私の従者だ。これは褒美だ、どうせ末王女に食われまくって涙目なんだろう・・・・・・・・・・」
「だんな、助かります。」
孤児弟に銀貨を数枚渡す。ちょいと渡しすぎな気もしたが今まで給金渡していなかったからちょうど良しとしよう。
「ご主人様弟を甘やかしすぎないでください。どうせ食べ物に消えてしまうんですから。」
「まぁまぁ、孤児姉。今日くらい多めに見てやれ。王女様に結構食われて可愛そうだろ・・・・・・・・・」
そう言って頭をなでると孤児姉は気持ちよさそうに目を細めながら
「ご主人様は甘いんですから・・・・・・・・・・・・無職で倹約しないといけないのに・・・・・・・・・」
と小言を言う。世帯じみた発言に苦笑していると、
「甘い雰囲気のところ悪いが・・・・・・・・・・・・　法務官、金の事ならば心配するな！復職の際には給料を倍額！いや、三倍は出させるよう宰相に頼んどくから・・・・・・」
「末王女様、私は仕事したくないんですが・・・・・・・・・・・・・・・特に王族の下では。」
「王妃殿下（おかあさま）との一件は知っている。娘として申し訳ないと思う。どうか許してやってくれないか？」

「それは虫の良すぎる発言でしょう。殺されかけて一言で許せと言われて許してもらえると思いますか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「まぁ、陛下でも答えられなかったものですし、子供に言ってもしようがないですがね。王女様が気に病むことではないですよ。それにしても王宮の人材不足はどうしたものなのかねぇ・・・・・・私の代わりを育てて置いてくださいと陛下にも宰相閣下にもお願いしてあるのですがそれをしていなかったから今回のように私が抜けただけで自爆する。そっちのほうが問題ですよ。」

「むぅ、それだって法務官が急にいなくなるのが悪いんだ！！」

「では、質問しますよ。私が出奔しなくても急病とか事故とかで抜けたとき如何するのですか？私だって無敵の存在ではないのですよ。それも含めて国家運営を行うべきなんですよ、誰がいないと駄目と言うのならば誰かがいなくなったとき国が壊れてしまうでしょう？」

「居なくなった者の代わりに皆で仕事を分担するのは？」

「その結果が今の現状でしょう。そこも含めてこっちに回すなと文句の一つも言いたい気分ですので交渉のときが楽しみですよ・・・・・・・・・・・ふふふっ」

「だんな、だんな！！相手は小さな女の子。抑えて抑えて・・・・・・・・いくら王族でも文句つける相手が違うでしょう！！」

おっと、自重自重・・・・・・・・・この怒りは宰相閣下と国王陛下に・・・・・・・・・・

「法務官、私が言う立場ではないがその・・・・・・・・・　お手柔らかにな！」

「大丈夫、酷い事はしないから・・・・・・・・・・・・・・・　そんな酷い事は・・・・・・・・・・ふふふっ・・・・・・・・・・・・・・」

「法務官、怖い・・・・・・・・・」

末王女が孤児弟の背後に隠れてしがみついている。侍従官も心なしか引いているようだ、酷いねぇ・・・・・

自分達のしたことを棚に上げて怯えるなんて・・・・・・・・・・・・

「それを言ったら、だんなも結構えげつないと思うよ。上奏一つで国を混乱に陥れたんだから・・・・・・・・・・・・」

呆れ顔で言うな、遠因その一が！

「あら、あの時の端切れ屋がありますわ。王女様気晴らしに覗いてみませんか？」

「端切れとは？」

「布のキレッパシですわ。服とか拵える時のあまりの部分とかを売る店があるのですよ。」

「なんに使うの？」

「見てみれば判りますわ・・・・・・・・・・・・」

遠因その二が末王女を連れて行く、流石にこんな雰囲気に子供を置いておくことを不適当と思ったようだ・・・・・・・・・・・・

うちの侍従達は良い子達だ・・・・・・・・・・・・

「あの二人を侍従官として引き取らせてください！！」

金貨を積まれてもやらんぞ。

「財務官の補佐官、宰相閣下の経理見習い、東方樹林帯伯の家令見習い、東方街道城伯令嬢の学友、騎馬公の養子に侍従官・・・・・・・・・・・・　おいら色々引き抜きに掛かっているんだな、ある意味凄いや・・・・・・・・・・・・」

「私の知らないところから引き抜きにかかっているようだが、他にも王妹殿下（しょたこん）の小姓とか東方建国公令嬢の付き人（ふじょし）なんて言うのも声かかっているし、王宮では仕事に困らないぞ・・・・・・・・・・・・」

「うわぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　助けてください・・・・・・・・・・・・（涙目」

「法務官、世の中には知らないほうが良い事とかいっぱいあるだろう！こんな小さな子供に残酷な現実を教えるなんて酷い奴だ！！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・確かに、残酷すぎる現実だったな。」

男三人が馬鹿な会話をしている間に末王女と孤児姉は端切れ屋で色々見て回る。
末王女にしてみればこんな布切れがどうして売れるのかとか如何使うのかがわからない様子だが端切れ屋がパッチワークキルトを見て小さな端切れが大きな布になる事が純粋に驚いているし、小さな布切れを使いまわして花ができたりするのも興味津々に見ている。
針仕事と言えば針子が作る服か手巾の刺繍くらいしか思い浮かばない末王女としては新鮮なのだろう。

「今日は貴族の旦那の付き添いじゃなくて、この御嬢様のお供かい？」
「そうなんですよ、ご主人様の知り合いの娘さんで今日はお忍びで遊びに来ているのですよ。」
「うむ、苦しゅうないぞ。普段どおり応対すればよい。」
「凄い高位の貴族様の御令嬢かしら？ゆっくり見ていってね、然程流行っている店じゃないから。娘さん達が群がっているだけでも客寄せにはなるわ。」

端切れ屋、お前が客寄せと言い切ったお嬢様は一応王族だぞ。
「法務官、末王女様はれっきとした王族ですから・・・・・・・・」
「突っ込みどころ其処？」
「普通客寄せと言うところで突っ込みいれないですか侍従官様？」

まぁ、少々小さいのもいるが女の子が屯してる光景は華やかである。

微笑ましいものだな・・・・・・・・・・・・

末王女は孤児姉が髪にしているリボンと同じものが店にあるのを見て付けてみたいなどと言い、端切れ屋は見本のリボンを合わせてみる。手鏡を見て思い通りの仕上がりにならなかったことに不満を覚えていると

「顔の造作や髪の色が違うのですからお嬢様にはこういうのが宜しいのでは？」

と、色々なリボンを合わせてみる。

「どうせならば先ほどの布の花を合わせてみたら面白そう・・・・・・・・・」

「それだったら、こっちのリボンにして花を髪の色を調和させるように・・・・・・・・・・・・」

「髪にリボンを編みこんでみたら？」

「それ面白そう！」

末王女はすっかり端切れ屋と孤児姉のおもちゃと化している。本人も満更ではない様だ・・・・・・・・・・・・・・・

商売はいいのか端切れ屋？

我々男性陣は孤児弟が買ってきた茶を片手に待ちぼうけを喰らっているのである。

「貴族の旦那、今日は酒にしないので？」

「おお、酒屋か・・・・・・・・・・・・　今日はあの御姫様のお供だから素面でいたいのだよ。」

「そっか残念・・・・・・・・・」

「法務官、先日馬鹿どもがお主を出汁に呑んでいたというのはこの市場か？」

「そうだがなにか？」

「何故、誘わなかった！！　魔神族侍従官は楽しかったと嬉々として始末書書いているし置いてきぼりは悲しいぞ！！」

「あれは良かった。某子爵令息を脅したのなんて楽しかったぞ！！」
「だんなぁ、楽しかったって其処かい？」
「正義の名の元に無体をするのは楽しいぞ、そういえば小間物屋はどうなったか判るか？」
「民部官の元で書類仕事に忙殺されているぞ、経理面が楽になったと喜んでいたなぁ・・・・・　小間物屋自体は最近やつれてきているようだが・・・・・・・・・・・」
「激務なんだな・・・・・・・・・・・」
「法務官が戻ってくれれば楽なんだが・・・・・・・・・・」
「蒸し返すなよ、仕事なんてしたくないのに・・・・・・・・・・　おっ、そろそろ決まるかな？」

私は話題をそらして末王女を見る。
布製の花飾りをリボンであしらって結んでいる。髪と同時に花が揺れているようで面白い。
末王女の可愛らしさを生かしているが髪が揺れるたびに香りが・・・・・・・・・・・・・・

「それはね、髪飾りの中綿の代わりに香草を詰めているからだよ。一種の匂袋だね。」
「面白い工夫だな。」
「もともとあの花は箪笥の中に入れて虫除けに使う物だし・・・・・・・・・・」
「虫除けか・・・・・・・・・・・・・・・くくくっ」

で、支払いの段になって孤児姉の持ち合わせでは少々足りないようだ。普通大金は持って歩かないだろうし仕方ないね。
末王女はもの欲しそうに我々男性陣の顔を見る。私は払うつもりはないぞ・・・・・・・・・・・
侍従官も顔を背けて視線をそらす。残るは孤児弟か・・・・・・・・

・・・・・
じぃ・・・・・・・・・・・・・・・・・（視線
負けたな・・・・・・・・・・　あと一時は持たせないと・・
・・・・・・・
「・・・・・・・・・・・　末王女様この場の支払いはおいらが
持ちましょう・・・・・・・・・・　この小さな花を受け入れ
ていただけますか？」
「感謝するぞ孤児弟！！」
抱きつかんばかりの末王女。満面の笑みを孤児弟に向ける。
笑みを見て仕方ないなとため息一つ。小銭入れを開いて代金を支払
う。
「少年、男を上げたね！それにしてもこっちの大人達ときたら・・・
・・・・・・・・」
「基本このお姫様は私にとって厄介事を持ってきたものだから其処
までする必要はない。」と嘯く私と
「少々持ち合わせがね、つらいのだよ・・・・・・・・・・・・」
と弁解する侍従官。
「本当に私の元に来ないか？孤児弟、あたしはお前が欲しいぞ！」
等と引き抜きにかかる末王女。虫除けの花の積りが食人華だったか・
・・・・・・
奢ってくれる孤児弟を財布と認識したようだ・・・・・・・・・・
・孤児弟は私の従者だからと逃げている。
子供らの駆け引きを微笑ましく眺める孤児姉。
「侍従官、孤児弟がかわいそうだからこの代金も請求するぞ！」
「わかった、善処する。」

「さて、帰りましょうか。あまり遅いと皆様が心配なされるでしょうし・・・・・・・・」
「わかりましたわ侍従官。」
孤児弟の手を引き、王城への道を進む末王女。
引かれていく孤児弟は仕方ないかとなすがままにされる。
王城まできたら返してもらうからな！！私が手塩に掛けた従者だ！
末王女如きにはやらん！！

「ご主人様大丈夫ですわよ。孤児弟はなんだかんだ言っても裏切りませんから。」
「裏切り以前に連行されそうな雰囲気だぞ。」
「まぁ、お気に入りの友達を家族のところに連れて行く程度でしょうから大丈夫でしょう。」

孤児姉が言うのならばそんなものだろうけど、そのまま捕まりそうな気がするのは私だけか？
「まぁまぁ、微笑ましい光景ではないですか。こんなに喜ばれている末王女様は久方ぶりですよ。もう少し貸して置いてください。」
「孤児弟を牛や馬みたいに貸し借りするつもりはないのだがな。」
「そりゃ、そうでしょう。牛や馬を借りたければそっちを借りますから・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・
孤児弟の将来に幸あれと祈りながら、王城へと向かうのであった。

末王女と端切屋（後書き）

孤児弟のフラグ立ての回？でした。

この後、末王女の造花を見た王妃様は面白そうだと端切れ屋を呼びつけて自分の分を作らせたりするのは別の話。

これで王宮の舞踏会における飾りの派閥に生花派、宝玉派、造花派等という分類が出来て夫々に贅を尽くし始めるのですがどうでも良いですね・・・・・・・・・・

「女性の衣装に如何でもいいですねとか最低ですわね作者・・・・・・・・・・」

あれ？王妃様？

「いいです事女性の衣装と言うものは・・・・・・・・・・・・・（説教」

はい、作者は連行されてます。

期間雇用と条件交渉（前書き）

あらすじ　罠にはめられた（元）法務官。獲物として狙われた孤児弟。二人の明日はどっちだ？
酒が切れたから話は続くのか？

復職交渉は難航を極めるはずだ・・・・・・・・・・・
私程度の人材であっても切実に欲する王国が私の他に従者としての孤児姉弟などという有能な素材を所持しているとなれば国のためと称して抱え込もうとするだろう。

孤児姉弟が望んでその身を立てたいとするるのであれば問題ないのだが王妃の一件以来王国に不信感を抱いている。

どっちにしろ私も隠遁生活を楽しみたいから交渉の席には着いても受けるつもりはない。
いざとなれば亡命もありだろうな・・・・・・・・・・・・・人族連合は人外がいないし、美しくない・・・・・・・・・・・・・魔王国か南方諸族連邦、南方都市連合、極北部族連合・・・・・・・・・・・・・後は極東か・・・・・・・・・・・・・
「意外と亡命先はあるんだね。」
「勿論だ孤児弟、金はそこそこあるし知識は政治法文分野だが十分にある。知名度もあるからどこの国に行っても受け入れてはもらえるよ・・・・・・・・・・・・・・・」

すいません、うちの国に来ないでください。当代の魔王が泣いて震えますから（ｂｙ魔王国担当地域神）
うちも勘弁願いませんか？もし何でしたら今の王族に天罰下してもいいですから（ｂｙ南部連合、連邦担当地域神）
来るな！！（ｂｙ極北担当地域神）
お願いします、世界の王になりたいとかハーレムとか叶えますので来ないでください（ｂｙ極東担当地域神）

何か戯言が聞こえるが気のせいだな。
「ご主人様神々の御言葉を戯言等と・・・・・・・・・・・・・」
「気のせいだろ・・・・・・・・・・・」

まぁ、条件は
再契約なしの期間契約、復職要求なし、今回は補助業務のみ位だな・・・・・・・・・・・・・・
期間は短ければ短いほど良いし、金額は出来るだけ上げて破綻することを前提に進めるか・・・・・・・・・・・・・

「だんな、金貨１０枚くらい請求するのかい？」
「桁が違うよ、孤児弟。金貨１００枚が最低ラインだ。」
「げっ！ちょっとした貴族領土の年間予算並みじゃないか？」
「ご、ご主人様・・・・・・・・・・・・それはいくらなんでも・・・・・・」
「勿論一月にだよ。私は仕事やりたくないのに押し付けようとするのだ其れなりの報酬が必要だろう（邪笑」
「うまくいけばいいのですが・・・・・・・・・・・・」
「うまくいかないことを前提なんだから問題ない・・・・・・・・・・・・・・」
「勅命で言われたら・・・・・・・・・・・・・・」
「無視する！」
「命がいくつあっても足りないぞだんな。」
「私が死ねば仕事が滞るだろ（邪笑」

そんなこんなで交渉当日。相手は宰相閣下と財務長、王兄殿下に末

王女に王妃がいる・・・・・・・・・・・・・・・

「まず初めに法務官に謝罪いたしますわ。先の事はまことに申し訳ございませんでした。王妃たる意識に欠ける発言にて失望させました事を深くお詫び申し上げます。」

「王妃様、お顔をおかげくださいませ。私自身女性の嗜みに関わる部分で例を挙げた無神経を深く反省いたしております。ですが、隠遁生活は私自身の望みでありますので復職については勘弁願いますようお願い申し上げます。」

「そのような事を言わずにもう一度戻ってきてもらえませんか？」

「お断り申し上げます。遅かれ早かれ隠遁生活を送るのが私の願いでしたので今更戻ろうとは思ってもおりません。本日末王女様のお誘いを受けたのもそれを申し上げるためでございます。」

「条件があるのならば正直に申せ。出来うる限り叶えようぞ。」

「まずは今回の孤児たちの件のみならず民草に無体を強いる貴族王族全ての首。弱者保護のために使われた金貨２０００枚の即時保障。これが前提条件です。」

「うーむ、財務長、出せるか？」

「すぐには無理ですな・・・・・・・・・・・・・・・　首に関しては身代金を受け入れること出来るか？」

「金額と金の出所によりますが・・・・・・・・・・・・・・・　領地の税を上げて身代金を得ようとかはしないのであれば受け入れることを致しましょう。ちなみに分割払いは不可で。」

「支払いの時期は少々余裕持たして欲しいが王国が保障して払うから信じて欲しい。」

等々・・・・・・・・・・・・・・・

交渉は長引いたが

・再雇用なしの一月間限定。

・業務内容は後継の育成を中心とした補助業務。

・補助人員については必要な応じて雇用可能。但し、私自身から給

与その他は支払う事。
・契約金は金貨１００枚。

孤児院や街娼保護に関しても
・保護に要した費用金貨二千枚は一年かけて毎月分割にて支払う。
・その後適時保護を行う為の予算法令を成立させる。但し、現場の意見を反映させるために顧問として協力を願う。その場合の役料は別途支払うものとする。
・前の条項から私に非常勤の王室顧問に任命する。任期は二年、再任は基本的に無しとする。
・孤児院の所属する区分に王族兄妹（へんたい）を近づけない。

身代金に関しても
・貴族家党首の首か王室政府へのある一定以上の能力を持つ人材の拠出、金貨１０枚の支払いのどれかの選択性とする。
・なお、先の弱者保護に協力した緒家については免除とする。
・金貨については弱者保護に助力した緒家への補填とし孤児院や街娼保護の費用に充てるものとする。

私の身柄に関しても
・本人の意思を無視した任命は一切行わない。
・命令の拒否権を有する。
・王族への意見具申において私本人が上奏する限り如何なる危害を加える理由にならない。
・貴族年金については規定通りに支払う。
・前の条項から爵位に関する返上は認めない。

と、なんとか仕事を逃げる算段はついた。年金がつくから爵位からは逃げられないと言うのは仕方ないし、弱者保護に関する王室顧問

についても仕方ないだろう・・・・・・・・・・私がまいた種だ。
命令の拒否権とかは意外に難しいが、仕事の押し付けから逃げるのに使わせてもらおう。
意外だったのは業務補助で月金貨１００枚と言うのは結構設けたな・・・・・・・・・

「さぁて、地獄にようこそ。法務官。君の仕事はたっぷりあるよ・・・・・・・・・・」
肩に手を当てて語りかける官僚達・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
私は引きづられるように官僚部屋（たこべや）に運ばれる。その後を呆れたように孤児姉弟がついてくるのだが彼らは知らないどれだけの仕事が待っているのかを・・・・・・・・・・・・・・・・・・

仕事は数多かったが殆ど経理部分だった。
それの確認で手間取っている、分業が出来ないかな？
私が内容の確認をして姉弟に計算部分を任せる。これで結構効率的に進められる・・・・・・・・・・・・・・・・・・
私の後釜達は死にそうな顔をして仕事をしているが一人一人で仕事をしているから能率が上がらないのだろう。
それ以前に計算能力が絶望的である・・・・・・・・・・・・って、言うか休みとっていないから壊れているみたいだ。
半日の睡眠と一日の休養を命令して、その間に書類の山を片していく・・・・・・・・・・・・・・・・
民部官も小間物屋を経理部分に使い仕事を推し進めていく。民部官

も経理部分が嫌いだったからなぁ・・・・・数字を見ると泣きが入るとか言っていたし・・・・・・・良い拾い物だったな。

しかし小間物屋がやつれているのは何故だろう？

「法務官の旦那、仕事はきついけど民部官の旦那は金払いはいいし彼女とも世帯を持つことが出来ました。彼女の親に関しては今だ回復の見込みはないのですが、民部官の旦那の厚意で医者に見せて貰ってますし何とか家族６人暮らしていけます。しかし、何ですねぇ・・・・今こうして王宮で働いているなんて不思議な気持ちですよ・・・・・・・」

「まぁ、市場の連中も心配していたから後で挨拶でも言ってくるがよい。」

「市場でおれの店を占拠している旦那は変な貴族だと思っていたのですが、本当に偉いお方だったんですねぇ・・・・・・」

「見てみるが良い、この姉弟の働きぶりを・・・・・・・・・　引き抜きの話はうそではなかったろう。」

「あの時は失礼致しました・・・・・・・・」

二日後、書類の山を大分減らした我等主従は後釜達に仕事を任して資料の整理と掃除を行おうと思っていたのだが・・・・・・・・・・・・・・・・・・

全員　逃げやがった!!

あの野郎ども・・・・・・・・・・・・・・

命令書作成・・・・・・・・・・・・・・　服務規程違反にて後釜貴族１０名を生死を問わず

「だんな、だんな、殺したら仕事できないでしょう。」

「そうだった、生け捕り限定で・・・・・・」

法務長、命令書に認可印お願いします。
ぺたり・・・・・・・・・

近衛兵団と衛士隊に命令書。
後釜貴族の寮や実家に言って迎えにいってもらおう・・・・・・・・

逃げるなんて許されないぞ（邪笑

なぁ、皆の衆！

ふふふふふふふふふふっ・・・・・・・・・・
逃亡者には死を・・・・・・・
書類責めだ・・・・・・・・・　椅子にくくりつけてやれ・・・・・・・
そういえば貴族家廃絶の命令書作ってくれない・・・・・・・・・
　いいよぉ・・・・・・・・
戻ってこなければ帰る場所すらなくしてやればよいのだ・・・・・・・・・・・・・・

ふふふふうふふうううふふっ・・・・・・・・・・
ぐふふふふふふっ・・・・・・・・・

「皆様方壊れてしまって怖いですわ・・・・・・・・」
「大丈夫だよ孤児姉、君はこの部屋の一服の清涼剤だから皆大事にしてくれるよ。
ほら、お茶を用意して差し上げなさい・・・・・・・・・・」
「はい」

後釜貴族達はすぐに捕まった。半分は泥のように眠って起きれなかっただけなので勘弁するとして、逃亡を図った半数は・・・・・・

・・　ふふふふふふっ・・・・・・・・・・・・

「だんな、貴族様達が怯えているから抑えて抑えて・・・・・・・・・・・」

「大丈夫だよ、酷い事はしないから・・・・・・・・・・・・・・」

「そんなことを言って酷い事にならなかったことある？」

「大丈夫、命まではとらないから・・・・・・・・・・」

「その前提条件が間違っているって・・・・・・・・・・」

居眠り貴族は身体をしゃきっとさせた後で二三人一組で計算と書類の確認を交互にやらせておく。個人でやるよりも班分けでしている分能率が上がるらしく作業効率が上がっている。何人かで仕事している分相談の出来るし気持ちが楽になるだろう・・・・・・・・・・・

逃げ出した奴はどうしてくれようかねぇ・・・・・・・

拷問だ拷問・・・・・・・・・・　財産没収で国外追放だろう・・・・・・・・

一族郎党死罪と言うのも悪くないだろう・・・・・・・・・・・・・・・

こらこら、皆ひどいことを言っちゃいけないよ！

財務官如何するのだ？

そりゃ、部屋に閉じ込めて仕事してもらえばいいじゃない・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

終わったら家に帰ってよしといって・・・・・・・・・・・・・・・

おおっ！それは良い考えだ。さすが財務官・・・・・・・・・・・

以上、官僚部屋（たこべや）の古参達の会話でした・・・・・・・・・

可愛そうに逃げ出そうとしたばかりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

この五人に関しては私は感知しない、やぶへびになるからね。

「そりゃご主人様が逃げなければ後釜様達も地獄を見なくて良かったのに・・・・・」

「それは違うよ孤児姉、私が居なくなったから彼らは仕事を得て立身出世の道を開いたのだ。私と言う存在は上を目指そうとする野心溢れる若い貴族達にとって目の上のたんこぶだったのだよ。だから、官僚となって上を目指す野心溢れる若者たちは機会を得たのだ。それを生かしきれないのは本人の資質の問題でだろう。」

「ご主人様の理屈は正論に聞こえるから性質が悪いですわ。」

更に三日がたって書類の山が無くなり机が見えてくる。

ここまで来ると交代で休みを取る余裕が出てくる。そんなときに見つけた一枚。

【護衛官釈放依頼書】

王妃様の年齢分の祝杯を捧げた不敬なる護衛官を恩赦とし釈放することを許可する。その後は原隊に復帰し云々・・・・・・・・・・

期日は？３ヶ月前？

「おーい！　誰か護衛官を見ていなかったかい？」

「そういえばここ数ヶ月見てなかったなぁ・・・・・」

「不敬罪で捕まって、処刑されたものだと思っていたが違うのか？」

「宰相閣下彼の処遇は？」

「すっかり忙しくて忘れてた・・・・・・・・・・」

「ここに釈放依頼書があるのですが、心当たりは？」

「大分前に作った覚えがあるのだが、どこに隠れていた？」

「書類の山の一番下・・・・・・・・・・」

「「「「あははははっ・・・・・・・・・・」」」」

「馬鹿野郎！早くこれに印鑑押して貰って釈放してもらえ！」

「護衛官無事でいてくれ！！」
「何で誰も突っ込まないんだ！」
「だって、王妃様関連の不敬罪だぞ。私刑になったと思うだろう！」
「近衛隊！地下牢に言って早く護衛官を保護してくれ！！」
「って、言うか護衛官の所属は近衛だろ・・・・・・近衛文官忘れていたのか？」
「すっかり忘れていた・・・・・・・・・お前らだって忘れていたろう！！」

どたばた・・・・・・・・・　数時間後地下牢から助け出された護衛官はすっかり壊れていた・・・・・・・・・・
「あははははっ・・・・・・・・・・　皆忘れるなんて酷いなぁ・・・・某は死ぬかと思ったよ・・・・・・・・・・　あははははっ・・・・・・・・・・」
「戻ってこーい！！　ごえいかーーん！！」

期間雇用と条件交渉（後書き）

そういえば、私を連れ戻したものには金貨１００枚と言われていたがあれはどうなったのだろう？

「法務長、財務長私に掛けられた懸賞金はどうなったんですか？」

「あれは末王女様が交渉につかせたのだから私の手柄といって持って行ったぞ。」

「でもワシが、仕事をさせることに成功していないから金貨１０枚なら手数料として払うといったら喜んで貰って行ったぞ。君を交渉の席まで着かせる手管は見事だったな。」

「あの糞餓鬼・・・・・・・・・・」

「でも、王妃様に見つかって子供に大金は宜しくないですからと持ってかれたなぁ・・・・・」

「大方いろいろな事に消えるのでは？」

「哀れな・・・・・・・・・・」

「三人とも人聞きの悪い事言わないでください。ちゃんと毎月のお小遣いとして与えてますって。全部無駄遣いで無くしそうでしょう。そうでなくても、法務官のところの黒髪の従者に奢らせて当然な顔をしていたのですから甘やかしちゃ駄目ですよ！」

「「畏まりました、王妃様。」」

「そういえばうちの孤児弟に奢らせた分はある程度補填してもらえるので？」

「それは仕方ないですわよね、末王女付侍従官にも言われてましたし・・・・・・・」

「うわぁ、金貨！」
「これで足りるでしょう？釣りはいらないわ。」

期間雇用と孤児諸々（前書き）

あらすじ　法務官は期間雇用となった。結構えげつない条件だ・・・・・・財務長涙目。護衛官はがんばれ・・・・・

期間雇用と孤児諸々

法務官補佐として勤め始めて数日。書類の山も一段落して私も姉弟ともども休みを取ることが出来る。
姉弟も暫く缶詰だったから身体がこわばっていると孤児院で子供達相手に遊んだり、私兵達を相手に剣術の訓練などをしている。
私がある程度の王室とのつながりを持ったから私兵達も少しづつ減らしていくかな？
「いやぁ、解放奴隷戦士団の物資集積地として孤児院の一部借りてますので。」
「同じく騎馬公の簡易宿泊所として・・・・・」
「近くに商会公の宿舎を立てたからそのうちに引き上げますよ。実際騎馬公の戦士達とか解放奴隷戦士団から引き抜くのにこの孤児院は良い場所なんですよね・・・・・・・・・　孤児たちの引き抜きもしたいですし・・・・・・・・・　結構良い感じに育っていますし・・・・・・・・・・」
「我等人外公戦士団としては人目を着にせずくつろげる場所というのが少なくて一部を物資集積所という名目で借りてますが・・・・・」
「おらたち農園公配下は別に家があるから、孤児院に野菜届けるついでにサボっているだけだし・・・・・・・・」
「いやぁ、宿代が無いときに孤児院にお世話になってます。」

自由戦士、本気の手弁当だったから・・・・・・・・・悪い事したねぇ・・・・後で費用請求してね。
後、農園公配下、君たちの中の妻帯者がうちの女衆を口説いていたのはきっちり報告させてもらうね。
サボりは聞かなかったことにしておくけど（笑）
「や、やめてけろーーーーー！」

それは冗談として・・・・・・・・・・・意外と手弁当といっても利益を取れるようにしていたんだな。
「そりゃ勿論伊達に公爵位を取っていないから、庭園公以外・・・・・・・」
庭園公はねぇ・・・・・・・・・・・仕方ないか。
「あの御方の生きる事への不器用さは筋金入りだからな。」
自由戦士まで言うか・・・・・・・・・

そんな事馬鹿なことを言い合っているうちに孤児姉のほうでも
「孤児姉、このリボン良いなぁ？　賢者様に買ってもらったの？」
「そうですよ。私が自分で買おうとしたら選んでいたの全部って・・・・・・・・・・・」
「良いなぁ・・・・・・・」
「私も欲しい・・・・・・・・・」
「基本うちらって現金収入ないからおしゃれも出来ないし、働く場所もないからねぇ・・・・」
「私も賢者様のところでお仕事できるかなぁ？」
「ご主人様の従者は足りていますしねぇ・・・・・・・・・・・・・基本無職だから。私一人でも十分世話できるし・・・・・・・」
「夜のお世話とかは？」
「な、何を言っているのですか！！ご主人様は私にそんなことを求めてくださらないですよ！！」
「じゃぁ、私がそれに立候補しようかな？」

「馬、馬鹿言わないで・・・・・・・・・・・・！！ご主人様に対して・・・・・・・」

「あれぇ？ご主人様とはそんな関係じゃないのでしょう？だったらいいじゃない！」

「デモでも・・・・・・・・・・・」

「はいはい、冗談だよ。とらないって！あたしらだって感謝しているんだからあの賢者様に・・・・・・・・・　全裸で道楽者でだらしないところある人だけど悪くないと思っているよ。」

「あのお方だったら初めてを捧げてもと思えるからねぇ・・・・・・」

「良いなぁ、孤児姉は・・・・・・・」

「おーい、孤児姉。これから市場に行くけどお前もついてくるか？」

「はい、ご主人様！」

「悪いな娘ちゃん達、孤児姉はこの悪い法務官様がさらっていくぞ！」

「きゃーきゃー！今日はどこまで行っちゃうの？」

「そりゃ市場までに決まっているだろう。」

「ええっ！色々官能の世界じゃないの？」

「私らもいきたーい！」

「良いでしょ？」

「仕方ないなぁ・・・・・・　まとめてついてくると良い！！」

「「やったー！！」」

こうして私は孤児姉とその他諸々の娘さん達を連れて市場に行くのである。

「すいませんご主人様妹分たちが・・・・・・・・・」

「まぁ、たまにはいいだろうよ。ちと幼いが綺麗どころを連れて行

くのも乙なもんだ。」
「ああん、わたしのごしゅじんさまになってぇ☆」
「私は夜の帝王だから身体が持つかな？」
「はいはい、馬鹿いってないできりきり歩く。ご主人様に失礼があったらはたきますよ。それにご主人様も小さい子相手に下品な事言わない。」
「はぁい！」
「下品じゃないよ、男として健全な・・・」
「黙れ椎の実！！」
「げふっ（吐血」

椎の実じゃないよ、本当だよ・・・・・・・・・・・・・
「二人きりのときじっくり確か・・・・・・・・・・・・いたっ！！　酷い孤児姉！」
「ご主人様に失礼な事をしたらはたくといいましたよね・・・・・・」
「怖いよ孤児姉！！」
「ふふふふっ・・・・・・・・・」
「あれは取られたくない一心だよねぇ・・・・・」
「可愛いねぇ・・・・・　恋する乙女の目だねぇ・・・・・」
「どっちかというと父親を取られたくない娘の心理だったり・・・・・」
「かもね賢者様、うちら父親依存（ふぁざこん）の気が在るのかもしれないからねぇ・・・・・」

そんなこんなで市場につく。
色々な物があるが全て何がなんだか判らないな・・・・・・・・・・・・・・・
食べ物関係は料理になったものを見るのが大半だし・・・・・・・・・・・・
銅貨数枚を各自に小遣いとして渡し、一団となって消えていく孤児姉の妹分を眺めている。

まぁ、小物売りか端切れ屋だろうからその近くで陣取っていれば良いか。

「貴族の旦那今日はどうだい？いっぱい呑んでかないか？」
「悪くないねぇ・・・・」
「今日は可愛い子達を引き連れて色々頑張るのかい？」
「それやろうとすると私の従者が凄い目でにらんでくる。」
「ははははっ、やきもちやかれるんだな。可愛いもんじゃないの・・・・・・」

酒をあおり、小物屋に群がっている孤児娘達を眺めている。
いつの間にか傍らには孤児姉がいる。
「ご主人様、すいません妹分がわがまま言って・・・・・・・・・・」
この分は私が働いて返しますんで・・・・・・・」
「そんなのはいいけどね。いいのかい？一緒に行かなくて。」
「私は別にいつでも買えますから、あの子達は中々そういう機会もないし・・・・・・働き口もないですからねぇ・・・・・・」
「確かに」
「あの子達も自分で稼げる場所があるといいんだけど・・・・・・・・・・　従者にしてとかいってくる子もいましたしねぇ・・・・・・」
「そういえばあの子達の計算能力と読み書きの能力は？」
「うーん、ばらつきがあるけど孤児弟に一歩劣る程度かな？私等より教わるのが少し遅かったからその位かな？知識面はあまり期待しないほうが・・・・・・・・・・」
「商会公のところで帳簿の付け方も習っていたよなぁ・・・・・・・」
「確かそうですけど・・・・・・」
「ためしに王宮の官僚部屋の下働きでもさせてみるか？」
「それはいいですけどあの環境にあの子達を放り込むのは・・・・・・・・・・・・・・・・ちと酷かと・・・・・・・・・・」

「まぁ、其処は私たちで補助してあげれば何とかなるでしょう。私の権限で雇えるし問題なし。そうと決まれば、あの子達の他にも二三人連れて行く子を決めてくか。」
「人攫いみたいですわねご主人様。」
「ははははっ！良い子は皆攫って仕込んじゃうぞ（邪笑」

この発想は孤児弟の孤児達による王国奪取計画なんだけどね。

孤児姉の頭をなでながら孤児娘達がきゃいきゃい言っている風景を眺める。
心なしか孤児姉が身体を寄せて気持ちよさげにしているが娘が父親にしているように懐いているだけなんだよな、そうだよな。

「貴族の旦那、可愛い彼女連れてうらやましいねぇ・・・・」
「五月蝿い！」

「いいなぁ、孤児姉は」
「私らも混ざっちゃえばいいのよ！」
「賢者様ぁ～☆」

すりすり、べたべた・・・・・・・・・・
「なんだなんだ！！」
「私たちも可愛がって・・・・・・・・・・」
「なでてなでて・・・・・・・・・・」
「うわっ！！」

押し寄せてきた孤児娘達にもみくちゃにされて私はしりもちをつくのであった。

「旦那、モテモテだな！」
「良いだろう。」
「むぅ・・・・・・」

あれあれ、私を取られて孤児姉がむくれている。よしよし・・・・・・・甘ったれが。

「やっぱ大事にされてるよねぇ・・・・」
「良いなぁ・・・・・」
「父親っていたらああいうものかねぇ？」
「どっちかというと恋人みたいなものじゃない？」
「どっちにしても良いなぁ・・・・・」

期間雇用と孤児諸々（後書き）

法務官ハーレム形成の話でした。
まぁ、娘さんたちは自覚しているように法務官を男としてよりも父親としてみているからじゃれ付いても本気で仕掛けることはないでしょう。多分・・・・・・・・・

孤児院の院長は？
あれはおじいちゃんみたいなものだと認識されてます。

期間雇用と小売商の息子（前書き）

あらすじ　法務官はハーレムを作った。

今回の話は差別表現がありますので嫌いな方は回れ右。

期間雇用と小売商の息子

「孤児娘達、金稼ぐ積りある？」
「なになに？どんな？」
「賢者様の夜のお相手？きゃー　うれしい・・・・・・・・・・痛いなぁ、孤児姉　！」
「ご主人様に不敬な発言は粛清しますよ。」
「まぁまぁ、孤児姉落ち着いて、夜の相手できるほど体力ないのに無理しないのｗ」
「ご主人様の相手は私だけで十分です。」
「おやぁ？独占宣言ですか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

孤児姉の意見を受け入れ私の助手と言う名目で子供達を働かせる準備をする。
人員の選定、危険人物に対する対応、仕事内容の説明・・・・・・・・・等々

あの休暇から三日後、私と孤児娘達を含む孤児数名、及びに元街娼の息子を引き連れて王城に出陣するのであった。

「賢者様、何でおれを連れて行くの？」
「元街娼の息子、いや、小売商の息子よ、君は母親を助けたいと思っているのだろう？金を稼がせてやるからついて来い！」

「いいけどよ、おれなんかでできるのか？」
「大丈夫だ、お前には並みの貴族では逃げ出す教育を行ってきたんだから・・・・・・・・・・・・」

「やっぱりご主人様根に持っていらっしゃるわ。」
「だんな、子供相手に大人気ないなぁ・・・・・」

だまれ！
彼は実際に優秀だよ。母親を守りたいと言う覚悟は兎も角、あれだけの課題を歯を食いしばってこなして来たんだから・・・・・・・・・・普通の貴族の教育課程を一月あまりで終わらしたんだから・・・・・・・・・・

「うわぁ・・・・・・・・・・・・やっぱ、あれはいじめだったんだ！」
「いや、君の母を思う心に打たれて敢えて鬼となって教えたのだが・・・・・・・・・・」
「うそだ！！」

王城に着く、手伝いの子供達を官僚部屋に連れて行き、顔通しをする。
手伝いに連れてきた私の教え子達だと・・・・・・・・・・・・一応孤児姉弟の最初のころ程度の力はあるから使えるぞと・・・・・・・・・

官僚達は大喜び！

初期の頃の孤児姉弟の能力でも十分戦力になるからだ。
自分らは文面とか何やらを行って、検算部分だけでも任せる事ができれば十分に楽できるからである。
子供に何が出来ると思うのがあるのだが、計算部分だけとはいえ楽できるとなれば出かけた言葉を飲み込んでいる・・・・・・・・・・・・

実際には計算部分だけではなくて疑問点とか質問してくるから、其処から書類の不備とか穴を見つけてごまかしとかを発見してからは子供たちも受け入れられていく。
可愛い私の教え子達だ、そんじょそこらの貴族の馬鹿子息以上の仕込をしているからなぁ・・・・・・

「どれだけ仕込んだんだい？法務官。」
「取り合えず読み書き計算と商会公仕込の経理帳簿、後は私直伝の黒知識・・・・・・・・・・・・・・個人個人にもよるけど国内の商品知識とか、土木工学とか、農業、医学、神学と色々彼らの興味の赴くままに教え込んだけど・・・・・・・・」
「うわぁ・・・・・・法務官、外道だろ！特に黒知識・・・・・・・・・・即戦力と言うのは判るが、子供に何を教えているんだい！」
「じゃあ、いらない？」
「すいませんでした、一人ください！！」

孤児娘達に小売商子息等を初めとする子供達は官僚達に受け入れられている。
期間限定なのが勿体無いとか、終わってからもこないかとか誘いの声がかかっている。

そんな中でも子供達にいい顔しないのがいるわけで・・・・・・・・

・・
「餓鬼に何が出来るんだ?」だの
「計算できるだけで仕事だと思うなよとか・・・・・・・・・・・・・・・」
挙句の果てに
「孤児や売女の餓鬼を王城に入れるなんて法務官様もどうかしてるよな、見てみろよあの餓鬼を!顔に傷跡だらけで見てらんないよ・・・・・・・・・・こんな顔に欲情できるなんてどこの豚面鬼(ゴブリン)かよ。しかも奴隷上がりだろう?そんな者に王宮の仕事任せるなよ。」
ちなみにこの発言は同一人物である。私の後釜に入った貴族の一人なのだが日頃の鬱憤を立場の弱い私の可愛い子供達に押し付けようとしている・・・・・・・・・
顔に傷跡のある孤児娘は、顔を下に向けて歯を食いしばって耐えている・・・・・・・・・・・・・・・目に涙を浮かべている・・・・・・・・・・・・
そんな、傷跡娘の様子を見て露天商の息子は殴りかかるのだが馬鹿貴族に殴り返されてしまう。
傷跡娘は小売商の息子に駆け寄って庇おうとするが小売商の息子はそれを手で制して立ち上がって更に殴ろうとする・・・・・・・・・・・・・
「うわぁ、傷だらけのブスと雌犬の息子が庇いあっているよ。美しくも見苦しい光景だなぁ・・・・・」
私は小売商の息子を手で制し
「ここは王城で君達は私の配下だ!悔しい気持ちはわかるが、私に任せてもらえんか?」
悔しそうな顔を隠さない小売商の息子は糞貴族をにらみつける。

「君は身分風体だけで私の眷属の能力をないと決め付けているのかね？」
「実際、奴隷もどきと売女の息子なんて価値があるんかね？」
「私があると保障するからここにつれてきたのだ？彼らを馬鹿にすることは私に対する侮辱ととって宜しいかな？」
「逃げ出し椎の実の分際でえらそうに言うな！」
「それだけの能力が自分にあると自信があるようだな・・・・・・・・・　では、私等は手を出さないから我々並みの仕事をこなせるのかね？」
「ああ、奴隷と雌犬の息子をいくら連れてこようと私の仕事には及ばないだろう。何なら椎の実の法務官様、貴方様の仕事も奪って見せましょうか？」
「うれしい事を言ってくれるねぇ・・・・　お手並み拝見といこうか？」

この糞貴族に仕事を任せて皆で仕事ぶりを眺める・・・・・・・・・・・・・・・
「うわぁ、ここの字間違っているよ。子供でも間違えないのに・・・・・・・・・」
「計算式が間違っているよ・・・・・・・」
「計算が遅いね？うちらでももっと出来るのに・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・くすっ」
「あ～あ、口だけなんかなぁ？」

子供達は茶々入れながら、他の官僚達の仕事を手伝っている。
口は動いているが手はすばやく計算を行っている・・・・・・・・・・・・・
あのやり取りが鶏冠に来ているのだなぁ・・・・・
傷跡娘は小売商の息子に目線を送りながら手元の書類の清書をして

いる。
小売商の息子も糞貴族の倍の速さで検算をしている。
子供達が手元の山をなくしているのに対して糞貴族は山を積み上げて新しい山を作り上げている。
そこで嫌味たらしく小売商の息子が
「貴族様、この書類手伝ってあげますよ。ここで滞るとわれらのような愚民達が困りますからね。決して同情じゃないんですよ・・・・・・・」
と言って書類を奪い取る。
仕事ができると言った手前、出来ない所を示されて怒り堪え切れない糞貴族は立ち上げり殴りかかろうとするのだが・・・・・・・
「うわぁ、奴隷上がりと雌犬の息子如きにマジになっているよ。恥ずかしい！　官僚様、これって普通の貴族なんですか？」
「小売商の息子よ。駄目貴族が逆切れするが。普通の貴族はまず能力で人を判断するし、最上の貴族は原石を磨き上げる事から始めるよ。」
「成程、貴族様これは駄目貴族なんですか？」
「いやぁ、駄目貴族ならば仕事しないことを是とするだけ邪魔にならないが・・・・・・・・・・」
うわぁ、初対面の法務副長と息を合わせてとどめさしてるよ。えげつないなぁ・・・・・・小売商の息子。
顔を怒りで赤黒くして震えているよ・・・・・・・・後釜君。
「だんなの薫陶だな。あれは・・・・・・・・・・」
「最初から口が悪かった気がしますが、ご主人様の事をぼろくそに

いっていたし・・・・・」
「あそこまで言われたら立ち直れないぞ、普通。」

「手が止まっているなんて余裕ですねぇ・・・・・この貴族様は」
「こらこら小売商の息子、彼は君たちに手加減しているんだから茶化さない。」
「はい、官僚様。」
「私は法務副長だ。覚えておきたまえ。」
「はい法務副長様。」
「いやぁ、君は優秀だな。平民とはいえこの後釜君より仕事をこなしている。私の下につかないか？」
「俺はただの手伝いだから、椎の実の賢者様に断らないと・・・・・・」
「私からも口添えするから仕事について話し合おうではないか・・・・・（にやり」

「副長！学園からめぼしいの引き抜く積りだったんじゃなかったんですか？」
「目の前に逸材がいるのに学園上がりの試験馬鹿を入れる必要があるのだ？」
「だからって、私の弟子を引き抜かないでください！」
「法務官が補助の仕事終わった後は予定あるかね？」
「法務副長様、なかったはずですが・・・・・・・・・」
「ならば、後でその話をしよう・・・・・・・・・　ところで後釜君手が止まっているがどこまで手加減しているのか？早く挽回しないと山が増えていくばかりだぞ！！」

後釜の糞貴族は逃げ出した・・・・・・・・・・・・・・・

傷跡娘は小売商の息子に抱きつき、ごめんねとかありがととかうわ

言のように言い離れない。
小売商の息子は抱き返そうか突き放そうか悩んで、よしよしと慰める・・・・・・・・
傷跡娘は大声で泣いてしがみつく・・・・・・・・・・・・・・

二人をとりあえず別室に隔離して仕事の続きをする。
聞き耳を立ててみると

顔大丈夫？こんなに腫れて・・・・・・・・・・・
気にするな！あいつが気に食わなかっただけだ・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・とか
豚面鬼（ごぶりん）でも見向きもしないようなあたいのために・・・・・・・・・・　馬鹿言うな、傷があっても十分可愛いじゃねぇか・・・・・・・・・・・・・・・・・・
とか
ほんとうに？　嘘はいわねぇよ・・・・・・・・・
傷だってお前がつけたくてつけたもんじゃないだろう・・・・・・・・・・・・・・・
・・　がたがた言うやつはおれがぶん殴る・・・・・・・・・・・・

いやぁ、青春だねぇ・・・・・
「ご主人様、下品ですわよ。仕事にかかりましょう！」
と耳を引っ張られて仕事に向かわされる。

後で、後釜君にはお礼しないとな・・・・・・・・・・・
「法務官、それは私に任せてくれないかな？」
「副長？なにをするんで？」

「いやぁ、彼の親には色々貸しがあるからね・・・・・・・・・・・・
とりあえず彼の一族を干してあげるとか・・・・・・・・・・・」
「うわぁ、えげつねぇ・・・・」
「後顧の憂いを絶たないとね（邪笑」
「たしかに・・・・・・・・・」

「法務官室ってだんなみたいなのがごろごろしている魔窟なんだねぇ・・・」
「孤児弟、思っても言わない。」
「あのぅ、私たちはあんなことできませんが・・・・・・・・・・・・」

後釜君、そのせりふを言うか・・・・・・・・・後で話し合おう・・・・・・・
「ひぃっ！！」

ちなみに逃げ出し後釜君の行方は知らない・・・・・・・・

期間雇用と小売商の息子（後書き）

今回の主人公（？）の彼は元街娼の息子→小売商の息子→法務副長付補佐官とクラスアップします。

傷跡娘とは不器用な付き合いになるのかな？

其処までは責任持てません・・・・・・・・・・

期間雇用と傷薬（前書き）

あらすじ、小売商の息子が副長付補佐官にクラスアップ。あと、顔腫れまくり。男前だね。

期間雇用と傷薬

しっかし、男前になったなぁ・・・・・
見事に腫れあがった小売商の息子の頬をつつきながら薬の準備をする。

「痛いからつつくのやめてくれない？賢者様。」
「お前みたいな突進馬鹿にはこのくらい痛みがないと駄目だろう。薬塗ってやるから大人しくしとれ！」

ふと親切心を出した私は傷跡娘を呼ぶと彼の顔に薬を塗るように命ずる。
傷跡娘は自分のために立ち上がって傷ついた小さな勇者に祝福を与えるために薬を手に取り塗り付ける。
「染みる染みる染みる！！いたたたたたたたたっ！」

腫れて敏感なところに触れられたものだから悲鳴を上げる小売商の息子。
「男ならば我慢しろ！傷跡娘が不安がって涙目になっているだろう！彼女のために立ち上がったんならば最後まで意地を張り通せ！」
「ご、ごめん・・・・・痛かった？」
おずおずと視線を下げる傷跡娘に
「大丈夫！染みて痛いけど我慢できないほどじゃない！」
「痛かったら言ってね・・・・・・・・」
「さっさと・・・・・・・・・・・　って、いたいいいいっ！！」

微笑ましい小さな恋のメロディーを見ながら孤児弟が質問する。
「だんなぁ、あれはそんなに染みるんですかい？」
「ああ、効き目は一番だが痛みが一時的に倍増するのが欠点だな。」

「何で痛みが倍増するのだろう？」
「なんでも痛みが治癒力を促進させる効果があるからだと言う説明をされた事があるが、如何考えても薬の製作者は加虐嗜好（サディスト）だろうな。」
「孤児弟よ、あれは本当に染みて痛いぞ。」
「俺は酒場の喧嘩で怪我をする馬鹿のために考案されたと聞いたことがある。効き目は抜群なんだがなぁ・・・・下手な霊薬並みに回復するんだが・・・・・・・・染みるんだよなぁ・・・・・」

口々に怪我をした経験（ロクでもない原因だったりするのは共通）から怪我した以上に酷い目にあったとつぶやく大人たち。
子供達は薬も満足に宛がわれない環境だったからそんな事知らず一歩引いて彼を見ている。

「だんな、小売商の息子に対する仕返しですかい？」
「まさか、私は可愛い眷族の為に立ち上がってくれた彼に最高の治療を施しているだけだぞ。」
「うわぁ、白々しい・・・・・・・・・」
「ご主人様あの程度の怪我でしたら唾つけとけば治るのでは？」
「孤児姉も言うねぇ・・・・」

そんな周りのやり取りを聞いていた小売所の息子は
「この薬をわざと選びやがったな！　この腐れ賢者！黒官僚！おれにこんな酷い薬塗りやがって！お前なんか王妹殿下の妄想素材（ネタ）になって触手人間から後ろから貫かれてしまえ！！」
「人聞き悪いなぁ・・・・・　我が弟子よ。この薬は欠点があるが良い薬だ。痛いのはお前が殴られるようなことをした結果だ！」
「殴られたって殺されたって腑抜けて良い場面じゃなかったろう！理不尽に泣く人間に更に石を投げるような真似をする屑は許せない！」

「其処までわめければ大丈夫だな。礼を言うぞ、糞餓鬼。私の可愛い眷族のために立ち上がってくれて・・・・・・・・・」
「ふんっ！賢者様の礼なんか要らないよ！おれは勝手に殴りかかってやられただけだ！」
「意地っ張りが、其処まで元気あるならば西の庭園に行ってこの書類を届けて来い！　もう喧嘩売るんじゃないぞ！」
「判った、行って来る・・・・・・・・・・」

小売商の息子は書類を受け取ると駆け出していった。
元気が有り余っているなぁ・・・・・

「そういえば法務官、庭園公のところに書類なんて良く在ったなぁ・・・・」
「あれか？糞餓鬼の治療依頼だ。庭園公は治癒術の使い手だし少し頭冷やすにはちょうど良いだろう・・・・・・・・・・」
「で、知っているか法務官？」
「なんだ式部官？」
「最近庭園公のところに王妹殿下（しょたこん）が入り浸っているのを・・・・・・・・・　彼女らの茶会もあそこで開かれているぞ・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・王妹殿下（へんたい）の存在を考えていなかった。と言うか庭園公が腐化していたなんて知らなかった・・・・・・・・・・　前々からその傾向があったのだが・・・・・・・・・」
「孤児弟！急いでいって連れ戻せ！！必要ならば近衛兵とか借りても構わん！！早く行け！！」
「はいっ！！」

「無事でいてくれよ・・・・・・・・・・・・・」

心配で手がつかない男達とはべつに孤児娘たちはテキパキと仕事をこなしていく・・・・・・・・・・

孤児弟が急いで駆け出して行ったのだが、遅かったようでしばらくして戻ってきた二人はげっそりとやつれて泣きそうな顔をしている・・・・・・・・・・・・

「だんな、ただいま戻りました・・・・・・・・・・」

「賢者様、治療はしてもらえたんですがお茶会に巻きこまれてしまいました・・・・・・・・・・・・」

「二人とも済まなかった・・・・・・・・・・・・大丈夫だったか？」

「何とか貞操だけは・・・・・・・・・色々着替えさせられてもみくちゃにされてしまいましたが・・・・・・・・・・・・」

「おれも・・・・・・・・・・・・・・・・うわぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・貴婦人怖い貴婦人怖い・・・・・・・・・・　おれはそんなもの入らないよぉぉぉ・・・・」

「しっかりしろ小売商の息子！！　大丈夫だよ、ここにはお前らを脅かすものなんて居ないんだから・・・・・・・・・・・・！！」

「法務副長さまぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・（泣」

数刻でこの威力。恐るべし王妹殿下（ヤオイおんな）・・・・・・・・・・しかし、この二人がこの状態だと仕事にならんな・・・・・・・・・

「法務官、まずこの子達の心の安定が重要だ。今日の所は我々が進めておくから君はこの子達を連れて落ち着かせてくれ。」

「済まない民部官。」

「いや、我々もまた王妹殿下（もうそうしゅぎ）の被害者なんだから・・・・・・・・・・・・　この子達の痛み存分にわかる。」

同情の視線を二人に注ぐ男達、私は孤児達を連れて退出する・・・・・・・・・・

孤児院には連れて行けないな、性愛神殿で治療してもらえるだろうか？無理だな・・・・・・・・・・・・

小売商の息子を親元に帰すのは流石にまずいし寮に連れて行くか・・・・・・・・・・・・あそこなら安心できる・・・・・・・・・・・・

寮母ならば二人の面倒くらい見てくれるだろう・・・・・・・・・・・・

帰るか

「ねぇねぇ、孤児姉。王妹殿下ってそんなに凄い人なの？」

「凄いと言えば凄い方で王宮の女性陣の何割かは彼女の属性に染められていると言うか・・・・・・・・・・・・前孤児院に持ち込まれた宰相国王本の作者と言えばわかるのでは・・・・・・・・・・・・」

「あの本ドキドキした・・・・・・・・・・」「手に入らないかなぁ・・・・・」

ごすっ！

私は思わず染まりかけた孤児娘達に拳骨を落とす。

痛いだの酷いだの言う彼女達に一言。

「あれに染まったら人として終わりだからな！あれだけは本当に駄目だから・・・・・・・・・・」

見てみると男達もうんうんうなづいている・・・・・・・・・・

男達の真剣な様子に孤児娘達も理解してくれたようだ。

気をつけないとここに王妹殿下（おせんげん）だけは連れて来てはいけないと・・・・・・・・・・・・

「副長、王妹殿下（ふじょし）避けの結界張れませんか？」

「難しいだろうが警備を増やす方向で進めよう・・・・・・・・・」

さて、寮に行こうか・・・・・・・・・・・・・・・

「もう、おなかぺこぺこ・・・・・・・・・・・」

「そういえば昼食べていなかったものね。」

「賢者様、食事もよろしくぅ☆」

すっかり仕事していて忘れていた。寮による前に何か食べていこうか・・・・・・・・・・・・・・・

「「やったーーー！」」

娘たちは色気より食い気のようだ。犠牲(ふたり)者も美味しい物食べれば少しは回復するだろう・・・・・・・・・・

期間雇用と傷薬（後書き）

あれ？どうしてこうなったのだろう？

孤児娘達と酒場（前書き）

あらすじ　小売商の息子と孤児弟は王妹殿下の犠牲となる・・・・・・・

野良犬にかまれたと思って・・・・・・・・・諦めろ。

孤児娘達と酒場

使いのものに寮の部屋を用意して置くようにお願いした後、我等主従は夜の酒場に向かうのである。

「おいしぃ！」「これなんだろう？」「これちょうだい！！」「・・・・・・・・・・・うまし」「むぐむぐ・・・・・・・・・・・・・ごくん」

これこれ、子供達料理は逃げないからゆっくり食べ・・・・・・・・・・

「おばちゃん、これおかわり！！」「これ、ほしい・・・・・・・・・・・・」「これ、かぁちゃんに食わせたいなぁ・・・・・」「給金入ったら食いに行けば良いじゃないか・・・・・・・・・・・・だんなは支払いはケチらない方だから食べに行くくらい払ってくれるよ・・・・・・・・・・・・」

もぎゅもぎゅ、がつがつ・・・・・・・・・・・・旺盛な食欲である。

私の来る前は食うや食わずの生活だったし、私が着てからも孤児院は改善されたとはいえ大量に作る料理が多く手間隙かかったものなどは食べる機会はなかったのだろう・・・・・・・・・・始めてみる料理に好奇心が動かされ、美味に心奪われている・・・・・・・・・

酒場の給仕の女性もはじめは酒場に子供をつれてくるなんてと白い

目で見ていたのだが美味しそうに食べる子供等を見て厨房に気合を入れさせる・・・・・・・・・・・・

孤児姉弟を拾う前日に来た店なんだが店、相変わらず美味でよい・・・・・・・・・・

鳥の辛味煮込みに乳酪を掛けて焼き上げた物とか素揚げした野菜に酸味の効いたたれを絡めたものとか干した魚を戻して炊いたもの・・・・・・・・・料理の種類数はさほど多くないが手間かかっているからなぁ・・・・

私は腸詰を肴に酒を飲んでいる・・・・・・・・・・・・・・・

子供たちも酒に興味を示しているのだが給仕の女性に叩かれて手を引っ込める。

「貴族様も子供を夜の酒場につれてくるなんて・・・・・・・・・・・・・・・」

なんて苦情もあるが聞き流してどんどん食べさせる・・・・・・・・・・・・

「そういえばご主人様、王宮にも職員向けの食堂とか会ったはずですがどうしてここに？」

「そりゃぁ、酒が呑みたかったのと食堂も閉まる時間帯だったからな。」

「簡単な夜食くらいは用意してもれたはずですが・・・・・・・・・・・・・・・」

「この食欲を見てみなよ。感動するくらいの食いっぷりだぞ。この欠食児童の一個小隊を連れて行くのは食堂の連中に酷だ。」

孤児姉がついでくれる酒で唇を湿らせながら孤児達の食欲を眺める。

皿がつみあがり、これでもかと食べている・・・・・・・・・・・・・・・

食べる量から言えば大人顔負けである・・・・・・・・・・・・・・・ろくなもの食っていなかったからなぁ・・・・・

周りの客たちも見事見事と食いっぷりを見ている。

「・・・・・・・・・・・これ、美味しそう。」

「旨いよ、食うか？」

「じゃぁ、一口・・・・・・・・・」

「旨いか？」

「うん、こっちもおいしいから・・・・・・・・・・・たべる？

あーん。」

「あーん・・・・・　むぐむぐ・・・・・・・・・・・ちっと、

染みる。」

「大丈夫・・・・・・・・・？」

「大丈夫だって、そんな顔をするなよ・・・・・・・　ほれ、もっと

食べろよ・・・・・・・・・食ってないだろうが・・・・・・・・・

」

「うん・・・・・・・・・・」

「ほれ、ソースが頬についているぞ・・・・・・・・・」

「／／／／／」

なんて言うか、撒甘空間を作り上げているのが約二名ほどいますが・

・・・・・・・・

「甘いねぇ・・・・・」「だだ甘だわ。」「良いなぁ・・・・・」

「これが伝説の二人の世界・・・・・・・・・！！」

「だんな、これどうします？」

「どうもこうもないだろう・・・・・・・・・・こんなのは食えな

いぞ。」

「微笑ましいじゃないですか・・・・・・・・・」
「そうなんだけどね、くっつくにはまだ早い!!お父さんは許しませんよ!!」
「はいはい、賢者様。邪魔しない!」
「そういう君達は如何なんだい?」
「賢者様がオッケー出してくれれば今夜にでも押しかけますが。」
「ははは、君たちだけで足りるかな?私は絶倫だから大変だぞぉ!!」
「きゃー、孕まされちゃう!!」「いやーん!」

ぼかっ!
給仕の女性に殴られた・・・・・・・・・・
「小さな子相手に馬鹿なことを言ってるんじゃないよ!!あんたたちも男を見る目を養いなさい!!こんな道楽貴族じゃなくてまっとうな男を捕まえないと!!」
「えー!賢者様はいい男だよ!!」「ぶーぶー!!」
「私は貴族で君は平民。平民の分際で手を上げるとは覚悟は出来てるだろうね給仕!」

ぼくっ!
「酔っ払いは黙ってな!!」
「貴族に対して・・・・・・・・・」
「黙れ椎の実!!」
「げふっ!!」
「本当にこの貴族様は・・・・・・・・・・」

いつの間にか来た客たち（平民）は私が殴られている様を見て笑っている。
中には孤児娘達にちょっかいを出しているのがいるのだが給仕に殴られている。

それを見て更に笑い出す客達、殴られた客もいたたと頭をさすりながら笑っている。

孤児たちも私が殴られている様を見て笑っているので悪くないと思うことにする。

しかしこの給仕、遠慮しないなぁ・・・・・

「酔っ払い相手に遠慮してたら店が成り立たないわよ！」

そりゃそうか。

そんなこんなしているうちに追い立てられる。

「はいはい、存分に食べたでしょう。夜も遅いから子供たち連れて帰った帰った！！」

まぁ、治安は良いとはいえ酔っ払いとかが多いからなぁ・・・・・・・・・

心配するのも当然か、帰るとしよう。

会計を済ませ、孤児達をつれて寮に向かう。

腹がくちくなった子供達は眠たそうにしながらついてくる。

さぁ、帰ったら眠ろう・・・・・・・・

明日も仕事で大変だぞ！

「うちは昼もやっているから、子供つれてくるときは昼にしな！！」

孤児娘達と酒場（後書き）

寮に戻ったときには寮母に飯を用意してのにと怒られるのは別の話。

孤児娘達と午前の執務（前書き）

あらすじ、皆で食事。

孤児娘達と午前の執務

初日以来、孤児娘達の寝泊りする場所が寮になっている。
初日酒場で食事を取った私たちは寮母に食事を用意したのにと怒られ（寝床だけと言ったのに）
小売商の息子の殴られたあとを見て、何故止めなかったと叱られる。

その辺は予想の範疇だったのだが、そのまま娘達の部屋を用意されてここで寝泊りしていけば良いと勧める。
断れる雰囲気ではなかったな・・・・・・・・・

そういうことで今、寮にいる。
勿論私達主従も寮の元の部屋に住まいを移している。
「だんな、古巣に戻ったような気分だ。」
「古巣か、お前の古巣は孤児院だろう。」
「そりゃ、そうだけどさぁ・・・・・・・・　だんなとの暮らしや教えがここから始まったんだなと思うとさ、なんて言うかおいらが始まったのもここからなんだなと・・・・・・・・・・・」
「そんなものかね？」
「確かに孤児院が古巣なんでしょうけど、ここもまた戻ってくる場所なんだなと思いますわ。」

面白い感性だ・・・・・・・・・・

孤児娘達もフカフカの寝床を宛がわれてはしゃいでいる。
「わー、フカフカ！」「ここで寝ていいのかな？」
「・・・・・・・・・・むぐむぐ、すはー」
「ｚｚｚｚｚｚ・・・・・・・・・・」
「これが貴族の暮らし・・・・・・・・・！」

「二度と戻りたくないなぁ・・・・・・・・・・・・・・・・孤児院の暮らし・・・・・」
「孤児院だって最近まともになったじゃない。」
「そうなんだけど、自分で稼いで生きていけるって・・・・・・・・・・初めてだし捨てたくない・・・・・・・・」
「そうだね。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・誘いに乗る？」
「継続の誘い？　賢者様に相談してからのほうがいいかもね。」
「もっとかっこいい男のいる働き場所ないかなぁ・・・・・・・・・・・・・・・・せめて賢者様くらいの・・・・・・・・・」
「だね、孤児姉ちゃんがうらやましいよ。」
「二号さんで良いから、受け入れてくれないかなぁ？」
「やめときな、孤児姉に叩き殺されるよ・・・・・・・・・・」
「あの子も嫉妬深いから・・・・・・・・・・」
「ふふふ・・・・・・・・・」

「なぁ、何で俺までこの部屋なんだろうか？凄い居辛いんだけど・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・大丈夫。小売商の息子の事、男としてみていないから・・・・・・・・・・」
「げふっ・・・・・・・・・・」
「よしよし・・・・・・・・・・・・・私は信じてるから・・・・・・・・・」

「まぁ、弟みたいなものだしねぇ・・・・・」
「雑魚寝していたし・・・・・・・・・今更・・・・・・・・・・・・小部屋で別れているから問題ないでしょ・・・・・・・・・・・・」
「そうなんだけど複雑だ・・・・・・・」
「かわいそうにお姉ちゃんと一緒にねるぅ？」
「むぅ、駄目！」

「傷跡娘ちゃん、とらないから心配しなくて良いよ。君の勇者様と共に寝る？」
「ちょ！まてよ！　男と女はそう簡単に一緒に寝てはいけないよ・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・どうして？」
「・・・・・・・・・・・そりゃ、えっと・・・・・・・・・ごにょごにょ・・・・・・・・・」
「私ならば問題ない。温もりを分かち合うと落ち着くし」
「ぶっ！！」

何か小売商の息子が追い込まれている気がするけど、あくまでも気がするだけな・・・・・・・・・・・・
部屋も違うし・・・・・・・・・・・

「腐れ賢者！この部屋割りが悪意あるだろう！！」

何か言われているが聞こえないなぁ・・・・・・・　男一人で女性に囲まれているなんてうらやましい環境じゃないか。
それとも、傷跡娘と二人が良かったのかなぁ？それは許可できないけど・・・・・・・・・・・

そんなこんなしているうちに夜が明けて次の日・・・・・・・・・・・
　仕事して・・・・・・・・　帰って・・・・・・・
なんて数日が過ぎる。
仕事自体も慣れてきて資料整理や部屋の掃除なども出来る程度の余裕が出てくる。
一番変化があったのが官僚達である。同じ職場に子供とはいえ女性

がいるから身だしなみに気を使ってくるようにしている。不潔な環境で篭っていたから体調を崩して仕事の能率が悪くなるんだ・・・・・・・・・・・・

少しは私を見習って身奇麗にしておけば良いのだ・・・・・・・・・・

「でも、ご主人様の出奔で官僚達がボロボロになったんじゃ・・・・・・？」

「孤児姉、こいつらは最初から襤褸雑巾だったんだよ・・・・・・・・・・・・」

「法務官、君も酷いもんだったじゃないか・・・・・・・・・・半月ほど風呂にも入らずに篭っていた君の言い分とは思えないな。」

「仕事をやめて健全な生活をしているから余計に判るのさ・・・・・・・・・・」

「早く隠居生活がしたーーーい！！」

「無理だな近衛文官！ただでさえ、近衛には文官を出来る能力のあるものがいない・・・・・・・・・・・・・・」

「そうだなぁ・・・・・・・・・・計算ですら頭の中の筋肉を鍛える行為だという馬鹿ばかりだし・・・・・・・・・・」

「戦神（決闘神等肉体派の守護神含む）肉体賛美派がまぎれてないか？」

「否定はしない・・・・・・・・・・・・・・」

だんだん清潔になってくる官僚部屋、我が元の古巣であった法務官室も例外ではない・・・・・・・・・・

私がいなくなってから書類置き場でしかなかったのだが、今となっては執務室として機能している。

そうなれば仕事の能率が上がるのだ・・・・・・・・・・・・・・

そんなある時、新しい書類が運び込まれる。

なになに・・・・・・・・・・・・外交文書だな？
「外務官、これお前宛だぞ。」
「どれどれ・・・・・・・・・・・・　ぶっ！」
文面を見て噴出す外務官・・・・・・・・・　一体何を見たのだろう・・・・・・・・・・・・
「法務官見てみろよ、これお前の案件だよ。」
どれどれ・・・・・・・・・・・・・
貴国に於きましてはますます反映の事まことに喜ばしく存じます・・・・・・・・・挨拶は省いて・・・・・・・
貴国の鋭才法務官殿が我が国に出奔成されると言う話しを聞かれたのですがこれはまことなのでございましょうか？
法務官ほどの人材を放出されると言う事は貴国に置かれましては何か事情がありましたのですか心配になります。
世界平和のため、貴国の繁栄の為法務官殿を留め置きその才を振るえる様伏してお願い申し上げます。
危険人物を国外の野放しにするな・・・・・・・・・
勘弁してください、自国のごたごたを他国に輸出しないでください・・・・・・・・
うちの貴族たちが泣いて怖がるから勘弁してください。
何の脅しでしょうか？
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんだこれは・・・・・・・・・・・・

「だんな何かやらかしたんですかい？」
「そのつもりはないが」

「嘘はいけないなぁ・・・　奴隷商人を山ほど捕まえたときその所属国に奴隷は神の教えに適っているのですかと神殿協会経由で公開質問状を叩きつけて諸国を宗教戦争一歩手前まで落としこんだ危険人物の科白じゃないな。」
「うわぁ・・・・・・・・・・・・・・　だんな、それは酷い・・・・・・・・」
「賢者様、その頃から私達のために・・・・・・・・・・・・・・」
「それも無駄足だったけど・・・・・・・・・・・・・・　でもここまで拒否られる理由ではないのだが・・・・・・・・・・・・」
「ご主人様他国の人たちにも私達程度の教育をしたとか・・・・・・・・・・・」
「何人か個人的に家庭教師をした事があるなぁ・・・・・・・・・・・・・・皆泣いて喜んでいたけど・・・・・・・・・」
「それ、帰れる歓喜の涙だと思うが・・・・・・・・・・・・・・」
「賢者様のあれを国外のものに・・・・・・・・・・・・・・うわぁ、そりゃ近寄りたくないよなぁ・・・・・・・・・・・・・・あれは二度とうけたくない・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

其処まで酷くないのに・・・・・・・・・・・・・・外務官、一応和解しているから観光で遊びに行くとき宜しくと言う文面で送ったらたら・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「法務官、それ嫌がらせだから！！」

何か酷いいわれようだ・・・・・・・・・・・・・・

孤児娘達と午後の執務（前書き）

あらすじ　そんなもの必要なのか？

孤児娘達と午後の執務

午前中に私の存在にダメだし出されたが私ほど国益に適う人材はいないよ。

おかげで隠居生活も遠のく遠のく・・・・・・・・・・・・・

「他国に行って隠居したいと言って見たらどうだい、だんな？」

「どこの国でも喜んで受け入れてくれるだろう！」

「寝言は寝て言え法務官！！、どこに出奔するだけで他国から干渉される貴族がいるんだ！！」

「ここに！」

「うがぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！話が通じねぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーーーーーーー！！」

「ご主人様、外務官様如きをからかうのは置いといて、どこの国に亡命するか考えませんと・・・・・・・・」

「そうだったな、孤児姉。どこの国が今の王国に一番衝撃を与えるか検討するよ・・・・・・・・・・・・」

「待て待て待て待て・・・・・・・・　世界大戦を引き起こす積りか！！」

「まさか、勇者と魔王が田舎の祭りに思える程度の大騒ぎを起こそうかと・・・・・・・・・・・・」

「ご主人様は迂闊過ぎますので従者である私が、ほころびをタップリ繕って差し上げますわ。」

「だんなにねーちゃん、それ洒落になってないから・・・・・・・」

「冗談だ、わらえ！」

「笑えるかぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアーーーーーーーーーーーーー！！」

「ご主人様の高潔さに比べれば世界などたちの悪い冗談ですわ！」

「孤児姉、それ冗談だよな。」
「勿論ですわ、ご主人様の下劣さと下品さは下町の娼婦でさえ舌を巻くほどですし、悪辣さにいたっては悪魔が泣いて逃げ出すほどですから・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな冗談みたいなやり取りはさて置いて、私の自筆で遊びに行くからと各国の首脳宛に手紙を認めて昼飯を食べに行く。
今回は王宮食堂である。

私のような下っ端貴族や侍女や洗濯女、従者や近衛の下級兵士等が銘々に飯を喰らいに行くところである。
質より量、な所があるがあたたかいものを暖かいまま食えるのはありがたい。
毒見されて冷え切った飯なんて食いたくないときにはうれしいものだ。
其処でも孤児娘たちは旺盛な食欲を見せる・・・・・・・・・　太るぞ！

「賢者様って乙女心わかってない！」「ひどい！」
「どこにお肉があるか夜の寝台で調べて貰って良いですか？」
「・・・・・・・・・・・・・・あたし、でぶなの？」
「そんなことないよ。お前は可愛いからそんなこと気にすることはない！！」

一部檄甘空間があった気がするか非難轟々である。
「これはだんなが悪いと思う。」
「法務官様、酷いですわね」
「少女はふっくらしているほうが良いものさ。」
「今までがやせすぎでしょうに、ちゃんと世話しているの王室顧問

様！！」

「大丈夫ですわ、ご主人様がどれだけ敵を作ろうと私だけはついていきますわ。ですから夜私に突いてください・・・・・・」

孤児姉、それは何か間違っているぞ・・・・・・・・・・・・

そんなこんなで飯がすみ食休みを取った孤児娘達が帳簿と格闘をする・・・・・・・・・・・

「ねぇねぇ、この数字毎回同じ間違いしているけど、数年前を見てみたらどうなるの？」

「どれどれ？　うわぁ、ここ２０年ばかり同じ間違いしてるよ。しかもそれが通過してるし・・・・・・・・・」

「他に穴はないかなぁ？」

「みてみて！こんな間違え子供でもしないよねぇ・・・・・・・・・・・・・・」

「本と本と・・・・・・・・・・・・なんで、これで通るのかが問題だよねぇ・・・・・・・・・・　一桁違うし・・・・・・・・・・・・・・」

「もっと、あらを探してみない？」

「これを私たちが指摘すれば・・・・・・・・・・脅して、がっぽがっぽ・・・・・・・・・・・・・・いたい！！」

脱線しかけた孤児娘の一人に拳骨を落とす。

「そんなことしなくても、これの報奨出るから。危ない橋渡らないの！」

「でも賢者様危ない橋渡りまくりじゃないですか！」

「それ以前に人としての道を踏み外しまくりですが・・・・・・・・・・・・」

「この貴族のあら捜しはいくらでもして良いし、潰してかまわないから危ない橋渡らないように」

「「「はぁい！」」」

「それで良いのか法務官師弟！！」

「べつに？孤児娘達に危害がなければ良いさ！！」

「うわぁ、親ばかで最悪発言。」

「そんなこと言うと私の可愛い娘たちを引き上げるぞ！」

「それは勘弁、って言うかお義父さん娘さんをください！」

「近衛兵、この馬鹿引っ立ててって！私の娘をたぶらかす悪党だから・・・・・・・・・・・・」

「まてまてまて、働き手をとるな！！」

「この不埒物を排除したら娘達を寄越しますんで・・・・・・・・・・・・」

「うむ、無事罪を償って更生するんだぞ！」

「ひでぇ・・・・・・・・・・・・・・」

そんな冗談を交わしつつ仕事をしていると王妃様が乱入して孤児娘達を連れ去る・・・・・・・・・・・・

多分、お茶会ついでに娘達を着せ替え人形にする積りなんだな・・・・・・・・・

ついでだから宮廷礼法を仕込んでくれないかなぁ・・・・・・・・・・

孤児娘達の教育になりそうだし・・・・・・・・・・・・

「この書類は如何する法務官！」

「本来ならば娘達に頼らずにする仕事だったでしょう・・・・・・・・・・・・」

「王妃め・・・・・・・・・・・・　どれだけ仕事邪魔すれば・・・・・・・・・・・・」

「何で謹慎解きやがったんだ！」

何か反逆罪すれすれな発言が・・・・・・・・・・・・・
「孤児娘達保護条例を発令せよ!!」
「王妃の魔の手から我々の貴重な戦力を守るんだ!」

「賢者の旦那、彼女らの仕事誰が・・・・・・・・・・」
「そりゃ、我々でするしかないのだろう・・・・・・・・・・・・・」
「やっぱり」

取り残された小売商の息子と孤児弟はやりかけの山を見てがっくりするのであった・・・・・・・・・・・・

そして娘たちは夜になるまで解放されなかったのは言うまでもなく、官僚達が孤児娘を取り戻そうと近衛の一隊を率いて離宮に乱入したのは笑い話としておこう。

「ねぇねぇ、王宮顧問。貴方の娘達私に預けてくださらない?」
「それしたら、官僚達を敵に回しますよ。」
「いいじゃない、こんな可愛い子供達をむさいところで置いとくより健全ですわよ。」
「否定しないが、国が成り立ちませんよ・・・・・・・・・・・・って、言うか仕事の邪魔するな!!」

「孤児弟、菓子が有るから一緒に食べないか?」
「末王女様おいらは仕事中ですので・・・・・・・・・・・・」
「そんなこといわずに遊ぼうよ・・・・・・・・・」
「いけませんって、王女様・・・・・・・・・・」
「お前の代わりに貴族どもをいくらでも放り込めば良いだろう・・・・・・・・だから遊ぼう!」

敵は王妃だけではなかったか・・・・・・・・・・・・末王女、貴族の有象無象を入れられても邪魔ですからやめてください！

「あらあら、末王女ったら孤児弟がお気に入りなんですわね。」

「一見微笑ましいですが、孤児弟が捕食されるようで可愛そうです。」

「末王女様自重してください。王室顧問の外付け良心回路を・・・・・・・・・」

「それは大変ですわ・・・・・・・・・・・・・末王女！！」

王妃と王女のやり取りを背に一寸ばかり聞きたいことがあるな、官僚諸君・・・・・・・・・

「法務官目がマジだよ。どうしたのかなぁ？」

「まて、まてまてまてまて・・・・・・・・・・・・・・・落ち着け、話し合おうじゃないか！！」

「そうですね、話し合いましょうか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・私に何故外付け良心回路が必要なのか・・・・・・・・・・」

「うわぁっぁぁぁっぁぁ・・・・・・・・・・・・・・」

「判るでしょう、末王女。王室顧問の暴走を抑えられるのは今の時点で孤児姉弟だけなんだから・・・・・・・・・・・・」

「ううっ　わかったのだ！」

そんな馬鹿な乱入者がいたのだが無事に仕事が終わるのである・・・・・・・・

疲れ果てている官僚達と共に先日から民部官の下で働きづめになっている小間物屋・・・・

「旦那方、やっと終わったんですね・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
ばたり!!

小間物屋が倒れ落ちる
「うわぁっぁぁーーーーーーー！　小間物屋!!しっかりしろ!!」
「旦那、近衛呼んできます!!」
「それよりも葬儀屋だろう!!」
「まて、新婚なのにそんな不幸があって良いのか!!後家さんは任せろ!!」
「てめぇ、どさくさにまぎれ何を言ってやがる!!」
「医師(せんせい)、早く早く・・・・・・・・・・・・」
「ははははっ、旦那方なに大げさな・・・・・・・・・・・・・・・・そ、そんなに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（がっくり」
「うわぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・誰だこんなになるまで働かした馬鹿は!!」
「貴人聖域(アジール)法は勤労条件に当てはまるのか?」
「否、それでも逃げる権利はある恥だが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「皆さん黙っていてください。患者の容態わからないでしょう!」

「「すいません」」

結果だけ言おう。

小間物屋の症状は【腎虚】だった・・・・・・・・・・・・・・

新婚で夜はがんばりすぎて、昼間はこき使われる・・・・・・・・・・・

これで潰れないほうがおかしいのだが・・・・・・・・・おかしいのだが・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あんの小間（ばか）物屋放置して酒でも飲みに行くか・・・・・・・・・・」

「そうだな・・・・・・・・・・・」

「サルかよ・・・・・・・・・・・」

「貴人聖域法（アジール）解除しようかな・・・・・・・・」

男達は夜の街に消えるのである・・・・・・・・・・・・

孤児娘達と午後の執務（後書き）

小間物屋は嫁さんもらってハッスルしてます。多分、何度か倒れる予定です。

期間終了と外交書類？（前書き）

あらすじ　法務官改め王室顧問、彼は国際的な危険人物だった。

期間終了と外交書類？

そうして雇用期間が過ぎて行こうとしている。
一月と言うのは早いもんだな・・・・・・・・・

「賢者の旦那、どう考えても今までの一生分より濃い時間が流れた気がするが。」
「小売商の息子改め法務副長付補佐官見習。略して補佐見習、それは君の今までが大したことがなかっただけだよ。」
「誰に向かっての説明か良く判らないが、旦那と会ってからむちゃくちゃな日々が流れていたことだけは確かだな・・・・・・・・・
平穏な日々を返せ！！」
「それは無理だな、我が弟子よ。君は私が隠居生活するための代替労働力として認識されているのだから・・・・・・・・・・」
「この腐れ賢者がぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・・！！」

「だんなの後釜に認定されているなぁ・・・・・・補佐見習は・・・・・・」
「いいんじゃない？私たちの弟妹分の中で一番の出世頭だよ。傷跡娘ちゃん、いい物件捕まえたね。」
「・・・・・・・・・・・・・・まだ捕まえたわけじゃない。」
「ご主人様が手ずから鍛え上げた人材です。それに堪えられて時点で十分有能な人材なのです。惜しむらくはご主人様に忠誠を誓われない事でありましょうか？」

仕事自体は補佐見習が頭になって孤児娘達を率いている。
って、言うか孤児娘達は王妃に捕まって着せ替え人形にされている・・・・・・・・・・・・・
返して・・・・・・・・・貴重な労働力を・・・・・・・・・・・・

「王妃様、いい加減孤児娘達を戻してもらえませんか？」
「嫌よ、こんな可愛い子達。むさい官僚達の所に置いとけるわけないじゃない・・・・・・・・・・・・」
「別に私は良いんですけどね、孤児娘達に宮廷作法とか色々教えていただけるんでしたら・・・・・・・・・・・・　ただ、其処の官僚達（ぞんびたち）が・・・・・・・・・・・・・・・」
「王妃様のいけず・・・・・・・・・・・・・・・」「・・・・・・・・・・・・・・・貴重な文官が・・・・・・・・・・・・・・・」「王妃様も仕事してください・・・・・・・・・・・・・・・」「おれの嫁が・・・・・・・・・・・・・・・げふっ！」

最後の一人は私自ら粛清した・・・・・・・・・・・・・・・私の可愛い娘を邪な目で見る害虫は王妹殿下に食われてしまうが良い。

「・・・・・・・・・・・・・・・で、その分の仕事はおれがやる羽目になると・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・がんばって、手伝うから・・・・・・・・・・」
「悪いな、傷跡娘・・・・・・・・・・・・・・・お前だけだよおれの支えは！」
「・・・・・・・・・・・・・・・いいの、あの時立ち上がってくれた貴方に私は救われたのだから・・・・・・・・・・・・・・・例え、誰かの代替として立ち上がったのだとしても」
「傷跡娘が悪くないのに糞味噌に言う貴族が許せなかった・・・・・・・・・・・・・・・多分賢者の旦那はおれが立ち上がるまでもなくコテンパンにしたんだろうけど。」
「それでも、うれしい・・・・・・・・・・・・・・・賢者様は義憤で私を見ていない、貴方は私を見て怒ってくれた！」

「・・・・・・・・・・・・・・照れくさい、その話は置いといて仕事進めようか・・・・・・・・・・・・・・　終わったら、飯でも食おうぜ！」
「うん。」

この二人は檄甘だなぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・・・・・・・・・良いなぁ・・・・・・・・・・・・」
「だんな、空気入れ替えませんか？」
「王宮魔術師呼んで冷気魔法かましてもらえ！」
「そこのわんこ系の近衛兵君、食える？」
「私はわんこ系じゃなくて狼族系獣人ですが食えませんよ、こんな甘いの・・・・・・・・・・・・」

この二人の能力自体は目を見張るものなんだがなぁ・・・・・・・・
どうして、二人の世界（らぶらぶわーるど）作り上げて仕事するんだろう？

「まぁ、暫くすれば倦怠期になるから・・・・・・・・・・・・・・」
「財務長、経験談ですか？」
「恋人から夫婦になると言うのはそういうもんだろう。」
「でも、財務長先日奥さんと手を組んで街を歩いてましたよねぇ・・・・・・・・・・」
「ここにも居たか！檄甘空間（ばかっぷる）」
「前は離れるも嫌だと仕事場に押しかけていたなぁ・・・・・・・・・・・財務長の奥さん。」
「前、財務長のところに遊びに行ったときには気まずかったよ・・・・・・・・・」
「子供さんは全寮制の学園に逃げましたよねぇ・・・・・・・・・・・・」

「あれだけ、あてつけられたら逃げたくなるよ・・・・・・・・・・・・・・・彼も彼女作っていちゃラブしているらしいけど・・・・・・・・・」
「血は争えないと言う事か・・・・・・・・・・・・」
「私はあれほど酷くはないぞ、息子は４人同時にいちゃラブしてるけど・・・・私は妻一筋だ!!」
「うわぁ、殴りてぇこの親子・・・・・・・・・・・・・」
「近衛文官わかるが抑えろ!!これを殴って壊したら誰が仕事をするというのだ!!」
「はっ!そうだった。ありがとう財務官、私を取り返しのつかない事から引き戻してくれ・・・・・・・・・・・・・」
「君たち、わしを殴るより仕事する人間がいなくなることを優先するとはどうゆう倫理観しているのかね?」
「そりゃ、ねぇ・・・・・・・・・・・・・」

孤児娘達・・・・・・・・・何時になったら戻るのだろう?
「だんな、あきらめたら?」
「御主人様、この一月終わったら見捨てるのですから別に妹どもが仕事サボって王妃に流れていっても良いじゃないですか、彼女達にも王妃付の侍女みたいな仕事あるわけですし・・・・・・・・・・・・・・・」
「そりゃ、そうか!」

「「「いくない!!」」」

その後官僚達は事務員確保法案を作って王妃に対抗しようとするのだが、ダメだったようだ・・・・・・・・・・・・
それは私の感知する事ではない。

「最初からいないものと思えば、こんな仕事・・・・・・・・・・・・・・・

・・うがぁぁぁぁ・・・・・・・・・・！」
「・・・・・・・・・・できた。」
「傷跡娘ちゃん、助かるよ・・・・・・・・・・・・・・　法務官、
この子達の給金は出来高制なのか？」
「否、日給制だが・・・・・・・・・・・・」
「ならば、傷跡娘と補佐見習に色つけて金額でつるしかないか・・・
・・・・・・・」
「それはどこからだすの？」
「わしの権限で何とかしよう！」「「財務長！！」」
「でも官僚の皆様方？そろそろ私達終わりですけど？」
「げふっ！！」×複数

「皆っ！！」
返事がない　ただの屍のようだ・・・・・・・・・・・・
流石にこの様子に心痛めたのか宰相と陛下は王妃に掛け合って孤児娘達を戻すように命ずるのであった。
その日だけしか効果はなかったけど・・・・・・・・・・・・

孤児娘達に聞くと、衣装合わせとかお茶会とかしていたが王妃様の書類仕事の手伝いもしていたと言う・・・・・・・・・・・・・
「陛下、孤児娘達の分は王妃から出して貰って良いですか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・仕方ない。わしから出そう・・・・・
・・・・・・・　わしにも回してくれんかね？」
「女性事務員つけたら王妃様がやきもちや来ません？」
「孤児娘達ならば大丈夫だろう、王妃に持っていかれそうだが・・・
・・・・・・・・」
「陛下尻にしかれてどうするんですか！！」
「それはそれで気持ち良いから・・・・・・・・・・・・・・・」
「だぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・！陛下の性癖は如何でも良いか

ら、孤児娘達を返してくれぇぇぇぇぇぇぇっ!!」

「王妃様?官僚から戦力引き抜いて自分が楽しようとしてましたね?」

「・・・・・・・・・・・・・・・てへっ!」

「てへっ!!　じゃない!!　私たちはどうなる!!」

「大丈夫、死に掛けたら神殿の大司祭に復活の呪文を掛けてもらうから・・・・・・・・・・・・・・」

「この国の王族はまともな人材はいないのかぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・!!」

「私とか」

「王室顧問誰が王族だって・・・・・・・・・・・・・そうか、前王族だから分類的には王族なんだなぁ・・・・・・・・・・・・・継承権は?」

「30位以下だが・・・・・・・・・・・・・・・一応継承権もある。」

「王室顧問、君が王族だってことは認めよう!でもまともとは認めらんねぇぞ!!」

酷い言われようだ・・・・・・・・・

「だんなの日頃の行動見ればねぇ・・・・・」

「そう言えば御主人様、御主人様が国外に出るとか言って問題になった件どうなりましたの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・あれはわしの所に来たりしているのだ。各国の外交官が泣きついているんだがどうしたものなのだろう?」

「陛下?」

「私の所にも来てますわよ。おかげで返事書くのに大変で通常業務が・・・・・・・・・・・・・・・　孤児娘達借りて助かりましたけど・・・・・・・・・・」

「王妃様？」

「結局のところは、だんなが・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何が言いたい孤児弟？」

「世界相手に無茶振りをして引っ掻き回したんですか！！」

「其処まで酷くない・・・・・・・・・・・・・　酷くないはず・・・・・・・・・・・・　勝手に相手が誤解して・・・・・・・・」

「だんな！！自重してください！！」

「まぁ、善処しよう・・・・・・・・・・・・・・どうせ隠居生活だから悪名とは無縁の生活になるだろうが。」

「期待できないなぁ・・・・・・・・・・」

そんなこんなで期間が終わるのであった。

契約終了とタタミイワシ（前書き）

あらすじ　立つ鳥跡を濁しまくり・・・・・

契約終了とタタミイワシ

契約終了である。
私の可愛い孤児娘達や姉弟も引き上げとなる・・・・・・・・・・・・
小売商の息子は法務副長付補佐官見習略して補佐見習となって残る事になったが一度学びなおしたほうが良かろうと私の教育を受け入れる予定だ・・・・・・・・・・・・
「私がいなくても十分やっていけるように色々仕込んであげよう・・・・・・・・・・・」
「旦那、お手柔らかに・・・・・・・・・・」
「まさか?守るものが増えたんだろう、ビシバシ行くぞ!!」
「げっ!」
貴族並みの教育しかしないのだが・・・・・・・・
その前にやらねばならない事がある。
そう、私に仕事をせざる得ない状況を作った宰相にお礼参りをする事だ・・・・・・・・・・
「だんな、タタミイワシでも奪うのかい?」
「勿論、この時期タタミイワシが入りづらい事も調べてある。タタミイワシ中毒の宰相にとって、タタミイワシを取られることがどれほど苦痛か・・・・・・・・・・・」
「賢者の旦那、ただの嗜好品だろ。」
「補佐見習、それはそうだが宰相閣下のように重圧の強い立場にいるものにとって嗜好品は欠かしたら精神の安定に欠くものなんだよ。タタミイワシが切れた宰相は書類に味付け海苔の破片を散らばせてとても迷惑なんだ・・・・・・・・・・・覚えて置いて損はないだろう。」

「嫌な知識だな・・・・・・・・・・・・旦那。」
「御主人様、書類に味付け海苔の破片は作業がやりづらいので一緒に強奪して言ったほうが皆様のためになるのではないでしょうか？」
「孤児姉、それは良い考えだ！！」

「物を食べながら書類仕事する宰相府の勤務状況が気に食わないだけでは？」
「補佐見習、諦めろ。だんなはくだらない事に全力で行動する習性があるから・・・・・・・・・・・」
「孤児弟、苦労しているんだなぁ・・・・・・・・・・」
「言わないでくれ・・・・・・・・・・・・　へこむから・・・・・・・　」

そうして、私は孤児娘たちを率いて宰相府に突入するのである。
宰相の執務棚からタタミイワシの束を奪い取ると孤児娘達に運ばせて一枚齧るのである。

「待て、法務官・・・・・・・もとい、王室顧問！閣下のタタミイワシを強奪するなんてなんて非人道的なものなんだ！」
「貴様は鬼か？」「鬼はお前だろう！！」「話がこじれるからその突っ込みは却下！！」
「ははははっ！！この私に仕事をさせた報いを受けろ宰相め！！貴様の大事なタタミイワシを奪い取ってやる！！ついでに味付け海苔も没収だ！！書類に海苔だのイワシだの散らばせるんじゃない！！」
「食べかすで書類の作り直しになったうらみ思い知りなさい！！」
「誤字脱字、計算間違いの処理めんどくさいのよ！！」

孤児娘達も色々思うところがあるようだ。
「さぁ、孤児娘達！タタミイワシを強奪して書類仕事の邪魔をした

馬鹿者どもに思い知らしめてやりなさい！！」
「「は一い！私たちの愛しき賢者様！！！」」」
「なんて無駄に統制の取れた行動なんだ！！」「逆らうな！彼女たちは王室顧問の子飼いの経理部隊だ！！彼女等に逆らうと方々の貴族家の会計担当の二の舞だぞ！！」
「なんて、非道な・・・・・・・・・王室顧問、其処まで恨みを・・・・・・・・・・・」
「そりゃそうだろう、宰相府の仕事回されて毎日の酒盛りが週に一回になってしまったんだから・・・・・・・・・・」
「それは健康的で良いではないか？」
「煩い！私が来てからふた周りほど腹回りがでかくなったのを知っているぞ！そうして奥方に怒られているだろう！！」
「な、何故それを・・・・・・・・・・・」
「そりゃ、奥方が君の仕事ぶりを私に聞きに来ているからな・・・・・・・　はとこ同士だし・・・・・・・・・・」
「そうだったのか・・・・・・・・・・・」

何か馬鹿なやり取りもあった気がしたが、無事タタミイワシを強奪した。
官僚室にて官僚どもと畳いわしを食べる、食べる、食べつくす！！
「これって酒が欲しくなるよなぁ・・・・・・・」
「ぽりぽり・・・・・・・・・・魚がこんな食感になるなんて不思議。」
「ばりばり・・・・・・・・・・これの破片が書類に挟まって手間なんだよなぁ・・・・・・・・・・」
「わたし、これの破片で数字の読み間違えしてやり直しになったのには泣き見ましたよ。」
「二日ががりの仕事をだめにされて泣きが入ったよなぁ・・・・・・」
「あれは酷かったですわ・・・・・・・・・・・　がりがり・

・・・・・・・・・」

「二枚重ね食い!!なんて、剛毅な!!」

「負けてらんないな!こっちは三枚重ねだ!!」

うちの欠食児童どもと口寂しい官僚どもがバリボリとタタミイワシを腹に収めていく。

小魚は骨の成長に良いからもっと食べな・・・・・・・・・・・・・・・

孤児院のおやつにこれは良いかもな・・・・・・・・・・・・・・・・小さい子供もいるし大きくなれよと!!

「それって、おいらへのあてつけか?」

「孤児弟、お前はまだ成長期だろう?まだ伸びるから気にするな。」

「あんまり小さいと幼く見えて王妹殿下の触手が・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ、それは切実だな・・・・・・・・・・・・」

「ばりぼり・・・・・・・・・・・孤児弟があまり大きくなるとキスするとき届かないから嫌だ!」

「うをぉ!!末王女様。何時の間に・・・・・・・・・・・・・・・」

「勉強がつまらないから抜けてきたのだ!王室顧問も今日で最後だろ。そのまま孤児弟を引き上げるだろうから引き抜くならば今日が最後だと思って。」

「イランとこだけは知恵が回るな・・・・・・・・・・・・・・・・ぼりぼり・・・・・・・・・・・・・でも孤児弟はやらんぞ!」

「賢者様、孤児弟は逆玉なんですか?」

「それはないのだろう・・・・・・・・・・・孤児弟を便利な財布代わりに考えているだけだろ。役にたつし気がきくから。」

「ああ、成程」

孤児娘が納得して孤児弟を見ているが、その孤児弟は末王女におされ気味である・・・・・・・・・・・・・・・ばりぼり

「末王女が押し切るか孤児弟が耐え切るか世紀の一戦であるな。王女様の押し切りに銀貨一枚。」
「孤児弟が耐え切るに銀貨一枚。」
と、賭け事を始める官僚達、小さな女の子に押される孤児弟を眺めてキャーキャー言う孤児娘達。

「・・・・・・・・・・・・あれは獲物を狙う女の目。孤児弟は身分こそないけど賢者様を後見に持って知性面でも下手な貴族より優れているし人格的にも無鉄砲な面があるけど下のものを守ろうとする親分肌だから悪くない優良物件。下手に降嫁するならば彼を射止めたほうがましという判断でしょうか。顔も並以上だし唾つけようとする貴族の令嬢も出始めていますからね、ここで見せ付けると言う意味では末王女の作戦勝ちでしょう。」
「解説の傷跡娘さん、ありがとうございました。って、おおっっと！末王女強行手段に訴えようとしています！顔を近づけて既成事実を作ろうと！！唇を抑える孤児弟！耐え切るか？逃げ切れるか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・時間の問題・・・・・・・・・」
「孤児弟、逃げようとするが末王女に押し倒されて転んでしまう。それでも末王女を怪我させまいと自分の身体を緩衝材にしている。末王女、自分のしたことに気がついて涙目になるが孤児弟は頭をなでて慰める・・・・・・・・・・・・・・・末王女の顔が赤いぞこれはどういうことでしょうか？解説の傷跡娘さん。」
「これは孤児弟の必殺技能【なでぽ】・・・・・・・・・・・・・・・
頭をなでた異性に照れを呼び起こし好意度を上げる無自覚技能！！
これは末王女の決意が高まるから逆行為な気がしますが・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・御主人様、なにをなさっているのですか？」
「実況ごっこ。」

「そうですか・・・・・・・・・・・・それは兎も角、陛下がお呼びだそうですがいかが致しましょう？」
「なんだろうな。一度挨拶しに行きますか。」
「孤児娘達も連れてこいとのことですが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「なんだろうな？行くぞお前等！！」

こうして畳いわしを残してわれわれは謁見に向かうのである。

契約終了とタタミイワシ（後書き）

書類仕事するときは食べながらはだめです。

期間終了と謁見室（前書き）

あらすじ　立つ鳥跡を濁しまくり。タタミイワシは正義。
法務官改め王室顧問が去った後、宰相府と官僚達とのタタミイワシ争奪戦が怒るのだが別の話。

期間終了と謁見室

国王陛下の御呼びとはなんであろうかな？
どうせろくでもないことなんだろうけど、これで最後と思えば多少の茶番に付き合うのも悪くない。

「王室顧問様、謁見の間にどうぞ。」
「執務室ではないのか？」
「はい、謁見の間に皆様方をお連れせよと命令を受けました。」

案内の近衛兵の答えに回れ右したくなるのだが此処まで来たのだから腹を括って入るしかないのか？
多分、契約の金貨を下賜すると言う形を持って面子を保とうとしているだけなんだろうが・・・・・・・

「王室顧問と一統様が参られました！」

文武百官が左右に立ち並びその背後を貴族達がひしめき合う中、私達一行は陛下の眼前に臣下の礼をとる。
孤児達は私の真似をして畏まる。別にこの服飾センスの欠片もないおっさんに畏まる必要はないのだが様式美と言う奴である。

「王室顧問にその養い子達よ楽にするが良い。」
王冠の下にロバの耳を飾りつけた国王陛下・・・・・・・・・・
誰か突っ込んでやれよ！！
異世界の逸話（モトネタ）を知っているのは私だけではないのだが・・・・・・
・・・・井戸に向かって叫べばいいのだろうか？
「賢者様？陛下のあれはワザとなんでしょうか？」
孤児娘の一人が小声で聞いてくる、そうだとしか答えられない私は

なんて無力なんだ・・・・・・・・・

「服のセンスは兎も角、実害は王室の中ではないほうだから流していこう。」

小声で孤児達＋１（補佐見習【予定】）に指示を出し、陛下に礼意を示す。

「陛下におかれましては益々ご健勝のご様子、臣としてまことに喜ばしい事でございます。これで私の出番が終わり国事も難なく行える事でございましょう。」

「王室顧問大儀であった。約定の通り金貨をと言いたいのだが・・・・・・・・・・・少し負けてくれんかね？」

「いいえ、鐚一文負ける積りは御座いません。払えないのであればこの場にて失礼致します。」

立ち去ろうとする私に慌てる周りの臣下共、これをネタに反乱でも起こされそうな慌てように子供達のほうが怯えている。

「まぁ、待て。王室顧問、代わりと言っては何だが爵位を・・・・・・・・・・」

「お断り申し上げます。」

「・・・・・・・・・・即答か。」

「はい、我等の一族の悲願は馬鹿な俗事に関わらず引きこもり生活を満喫する事ですので。それに金貨の１００枚で国事の尻拭いができたのは安いと思うのですが如何に？」

周りから、ボッタクリだの非道だの血も涙もないのかとか、あの孤児娘可愛いハァハァ・・・・・・黒髪の男の子が良いねぇ・・・・・とか１００枚あれば内の領地にも灌漑が出来るのにとか言う声が聞こえるが無視無視！！

「あのっぅ・・・・・・・・・・・身の危険を感じるのですが・・・・・」

怯える孤児娘達に危険人物リストにあの貴族を心中で追加して王に向かい合う。

「で、約定の金貨が支払われない理由をお聞かせ願いますでしょうか？」

「うむ、単純に神秘緋金属張扇（オリハリセン）を注文した馬鹿がいて・・・・・・・・注文を取り消そうとしたら無理と言われて買う羽目になったのじゃ・・・・・・・・・・・・・」

神秘緋金属製（オリハルコン）の張扇なんてどこの馬鹿が注文するのだ！！

いたなぁ・・・・・・　絨毯の染みがと言う苦情を受けて近衛経費でそれを買おうとする馬鹿が数名・・・・・・・・・・・・思い当たる人物の顔を見ると顔を背けやがった・・・・・・・・・・・・・・近衛護衛官共め！！

王妃様も顔を背けている所を見ると主犯格か！！

「成程事情を理解いたしました。では、金貨の代わりに私にはその神秘緋金属張扇（オリハリセン）と支払えるだけの金貨で手を打ちましょう。」

「金貨は１０枚くらいしか用意できないが受け入れてくれるか？」

「判りました、神秘緋金属張扇（オリハリセン）を今すぐ用意して頂けますでしょうか？」

「うむ、近習。王室顧問が望むものを用意しろ！！」

「はっ！」

程無くして金貨と神秘緋金属張扇（オリハリセン）が私の手元に用意される。３本もあるなんてなんて贅沢な！！

これ一つで孤児院が一年は維持できる・・・・・・・・・・・・・・周りを見るとこれが伝説の・・・・・・・・・とか、金貨１００枚より是を取るとはやるな王室顧問とか・・・・・・・・・色々声がするが無視無視・・・・・・・・・・　これの費用捻出に苦労した財務

長と宰相の米神に青筋が・・・・・・・・・・・・・・・　少々切れている私も

「陛下、下賜されました伝説を皆様方に披露したいと思いますので試し打ちの許可を願います。」

「うむ、許可しよう・・・・・・・・・・・・・・・」

私達の剣幕に引きつった笑みを浮かべつつ国王陛下は許可の言を発する。

私は宰相閣下と財務長に神秘緋金属張扇(オリハリセン)を渡すと二人は心得たかのように米神に青筋を盛大に立てて護衛官の元に近づく!!

「「「この、どたわけがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」」」

謁見室に三つの叫びが重なった瞬間である。

さすが伝説の魔法具神秘緋金属張扇(オリハリセン)!!

場内と言う事で全身鎧とかは着ていないのだが鍛え上げられた男達は為す術もなく打ち上げられる。

しかも神秘の力で身体強化された我々は落ちてくる護衛官達を三方向から滅多打ちにする!!

「この脳筋どもが!お前らのおかげで絨毯の洗濯費やら買い替えでどれだけ苦労していると思っているんだ!!」

財務長が心からの叫びと共に往復ビンタよろしく護衛官の一人を叩きこんでいると思えば

「高々無礼打ちで神秘緋金属(オリハリセン)使う馬鹿がどこに居るんだ!!無礼打ちならば拳骨とか鞘付の剣で十分じゃないか!!」

と特殊効果【威圧の眼光】と共に打ち落とす。床にへたばって潰れたかえるのようになる護衛官。

「ま、まて、はなせｂ・・・・・・・・・・・ごげぐばぁぁっぁぁぁ！！」

言い訳をする護衛官の胴を思い切り振りぬく私。護衛官は水平に飛び壁画となる。

「たった一つの単純な理由。お前は私を怒らせた。」

護衛官達を沈黙させた後、私達三人は並み居る貴族達を眺め、どれを餌食にしようか目配せをする・・・・・・・・・

「待て、御三方！試し打ちは是で十分ではないか！！」

「少々乱暴でありますわよ！幾ら神秘緋金属張扇（オリハリセン）だからって其処までは無体が過ぎますわよ！！」

しゃしゃり出てきた王族兄妹（へんたい）を特殊効果【星流れ】で流星の如く打ち上げながら私は王妃の元に駆け寄る！

「ま、待って・・・・・・・・・・話せば判りますわね・・・・・・もしや私に対して神秘（それ）緋金属張扇を向けるなんて事しませんよね・・・・・・・・・・きゃーーーーー！！」

「お覚悟！！これは働き手を奪われた官僚達の分！」

ギャーギャーわめく王妃を私は高く打ち上げ！

「これは今回の予定外の出費に抜けていった私の髪の毛の怒り！」

財務官が特殊効果【業火の怒り】を背負って王妃の頭を叩き、

「是はそもそも王室顧問が逃げ出す羽目になった元凶へのワシからのささやかな贈り物だ！」

最初閣下が【威圧の眼光】に加えて【神剣の抜き打ち】と特殊効果の二重掛けと言う大盤振る舞いで王妃を水平打ちに玉座へと叩き込む。

「ううっ・・・・・・・・」

虫の息の王妃を無視して、宰相閣下と財務長は目配せをして国王陛下の下に特殊効果【瞬歩】で詰め寄り左右両方から無駄に息の合った一撃を繰り出す！！

「「王様の耳はロバのみみいいいいいいいいーーーーーーーーーーーー！！」」

高く飛ばされるロバの耳（装飾品）、剣圧だけで玉座に沈みこむ国王陛下。

これって、ある意味反逆罪？

雄たけびを挙げる宰相閣下と財務長・・・・・・・・・・どれだけ王室相手に鬱憤たまっているんだとヒソヒソ声で語り合う貴族共、沈み込んだ国王陛下と護衛官を尻目に二人に襲い掛かる一筋の銀光！！

「淑女相手に何するのですかぁぁぁぁぁぁ！！！！」

王妃様が神秘緋金属張扇（オリハリセン）を玉座の後ろから取り出し【瞬歩】で駆け寄り【地摺り残月】で打ち上げたのだった！！二人の軌跡から零れ落ちる銀光の残滓・・・・・・・・・・

どぐしゃという音と共に床に叩きつけられる二人を尻目に王妃は獲物を私に切り替えると【一陣の風】と化して振り下ろす！私も打たれてたまるかと【金剛打ち】で迎え撃つ！！

きりきりと張扇同士がこすれ合う音が響きお互いに力が篭る。

数瞬だったろうか鍔迫り合いは続きお互いににらみ合う。

「王妃様、何時の間に神秘緋金属張扇（それ）を？」

「注文は５本よ。３本あれば金貨１００枚には足りるでしょ。」

「幾らで買ったんですか？」

「５本セットで金貨３００枚、お買い得でしょ！！」

「馬鹿ぐわぁぁぁぁぁっぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！」

私は思わず突込力を神秘緋金属張扇（オリハリセン）に注ぎ込み王妃に力任せに叩き

つける。
王妃は数歩下がり抜き打ちの構えを取る。私も右八双の構えで迎え撃つ用意をする・・・・・・・・・・・・・・・

両者の気合が充実してきてお互いに次の一撃で決めると駆け出す瞬間。
私は後頭部に衝撃を感じてうずくまる。王妃からの一撃が・・・・・・と危惧するが何時までたっても来ない。
見ると王妃も後頭部を押さえてうずくまり背後には孤児姉が神秘緋金属張扇(オリハリセン)を手に立っている。
もしや後ろには・・・・・・・・・・

孤児弟が同じく神秘緋金属張扇(オリハリセン)を片手に立っているのだった。
「だんな、少々落ち着いてくださいよ！見てくださいこの惨状を・・・・・・・・・・」
床のしみやら壁の飾りと化した護衛官、玉座に沈む国王陛下、貴族達を巻き込んで目を回している宰相閣下と財務長、うずくまる王妃・・・・・・・・そして、場を支配するかのように張扇を構える姉弟。
宰相閣下と財務長の手に神秘緋金属張扇(オリハリセン)がないところを見ると目を回している二人から奪い取ったのだろう・・・・・・・・・・・・

しかしなんだ、この惨状は・・・・・・・・・・・・・・・
「だんながやったんだろうがぁぁぁぁぁぁ！！！！！このくそぼけぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！」
孤児弟の渾身の叫びと一撃に私の意識は刈り取られるのであった。

私が意識を刈り取られ床に叩きつけられた後、護衛官も王族も宰相達も立ち上がる。
あれだけ派手に叩きつけられた後にもかかわらず皆ぴんぴんしている。
私も首をコキコキと回しながら立ち上がる。

王室顧問を一撃で・・・・・・だとかこの場の後始末どうする？・・・・とか、是が伝説の・・・・だの比較的無事な貴族共が囁きあっている最中・・・・・・
あの孤児姉弟、王室顧問の最後の良心とか言われているがうわさは本当だったんだ・・・・・・・・・・・

「さすが神秘緋金属張扇（オリハリセン）伝説に違わぬ一撃よ！！」
と国王陛下が何事もなかったかのように発言すれば・・・・・・・・・・
場は何事もなかったかのように静まり返る・・・・・・・・・・・
宰相閣下と財務長のは無視か・・・・・・・・・・・・二人を反逆とかで捕まえても仕事が滞るだけだしなぁ・・・・・・・功臣だし。

「で、王室顧問。条件は話し合うからまだ働かぬか？」
「いえ、隠遁生活をしたいと思います。」
「そうか、では是ばかりは受け取ってもらうぞ！」

陛下が合図をすると、近習が準爵章を数個天鵞絨（びろうど）のクッションに乗せられたものを持ってきて陛下に捧げる。

陛下は玉座から降りると子供達に近寄ると一人一人に準爵章を渡す。
「つけるが良い。」
孤児娘達に補佐見習は準爵章を身につけると陛下に臣下の礼をとる。
「子供達よ君達の働きぶりは王室に貢献したと認めるに値する。故に我が名の下で君達を準爵と任ずる。是より国事に励むのもよく自由に生きるのも良いが王国の名を汚さぬよう進むよう命ずる。」

「「「はいっ！！」」」

貴族や官僚達がおおっ！と感嘆の声をあげる中、孤児娘達に補佐見習はそろって返事をするが、孤児姉弟だけは臣下の礼を取ったまま準爵章を捧げ持つ。
「君達姉弟はどうしたのだ？」
「私達は王室補佐を主としている陪臣で御座います。故に主の許しもなく爵位を賜るわけにも参りませんし、今の状況で十分満足しております。陛下願わくば我等姉弟をそのまま捨て置かれるよう願います。」
「おい・・・・・・私も姉と同じく爵位よりも主である王室顧問の従者である事に誇りを持ち満足しております。爵位は私に必要とするものでありませんからお返しいたします。」
「そうか、王室顧問は幸せ者だな。君達は是非に是を受け取るが良い。」
国王陛下は気分を悪くした風もなく声をあげ準爵章を受け取らせよ

うとする。

「この孤児姉弟を持つ王室顧問は幸せ者だな。王室顧問よ、この二人を譲る積りはないかな？」

「申し訳ありませんがこの二人の忠心を得たならば兎も角、犬猫の子の様に簡単に譲る積りは御座いません。」

「どうしてもか？」

「はいっ！」

「ううむ・・・・・・・・・・・・　感謝の印として準爵位だけは受け取ってもらいたい。忠心を得られないのは残念だが君達の王宮での働きは十分是に値するものだ。これからも王室顧問に忠勤を励むが良い！」

「でも・・・・・」

「受け取りなさい、これ以上は陛下の面子に関わる。」

なおも受け取り固辞する孤児姉に私は注意し孤児姉弟は控えめに準爵章を受け取る。

「王室顧問よ、子供達はまだ世慣れず幼い者だから後見を願えるか？」

「はっ！我が微力を持ちましても。」

仕方ないよな、孤児達は成年ではないし女性もいる。もう少し力をつけるまで面倒を見るのは当然だな。

「では、今回の謁見を終わる。皆のものご苦労であった。」

こうして、私の仕事は終了した。

「けんじゃさまぁ？この準爵章受け取ったら何があるの？」
「基本的には功のあった平民とか、下級官吏や士官連中への身分証みたいなものだよ。一代限りだし年金も微々たる額しかつかない。一応は貴族と名乗るほどではないが一般市民よりは上、その上の士爵と合わせて【士族】とか【士分】と呼ばれる事が多いね。」
「受け取ったらまた仕事しないといけないの？」
「して欲しく手渡した節があるけど、別に気にすることはない。戦時中とかは従軍義務があるから注意は必要だが・・・・・・・・・私が後見している間はそんなことがないように気を配るよ。」
「そっか、私達いきなり大抜擢だね！」
「私としてもお金を下賜されて終わると思っていたから意外だったな。多分官僚あたりからの上奏があったのだろう。」
「引き抜く気満々だったしね・・・・・・・・・・官僚の皆さん。」
「でも、是からが大変そうなのは補佐見習だよなぁ・・・・・」
「おれがなんで？」
「そりゃ、私の仕込みで育った逸材だから便利重宝に使われると・・・・・」
「受けなきゃ良かったかな？」
「まぁ、親子三人暮らすには十分すぎるほど給金は支払われるよ。」
「なんで三人なんだよ！」
「あれ、傷跡娘を放置するの？」
「ば、馬鹿そんな積りはないって・・・・・・・・・・・・・・まだくっついてもいないだろ・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・」
「だから傷跡娘が嫌いとかそんなわけじゃないくて、おれ達子供だし・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「惚れてくれている娘を蔑ろにするのか？傷跡娘よ、こんな薄情者をほっといて私と共にいくか？」
「・・・・・・・・・・・・・補佐見習、だめ？」
「ダメじゃなくって、傷跡娘の気持ちも聞かずにくっつくとかいちゃラブとか言うな！！」
「・・・・・・・・・・・・・・いいのに・・・・・・・・・・・・・・・」
「えっ！！」
「「暑いねぇ・・・・・・・・・・・・」」
「誰か氷買って来い！」

期間終了と謁見室（後書き）

神秘緋金属張扇（オリハリセン）　オリハルコン製の張扇、各種特殊効果魔法が付与されているが実質的攻撃力はゼロ。演芸神の加護でどれだけ打撃を喰らっても暫くすれば元の通りに復活すると言う特性もある。市場価格金貨７５枚。（まず出回らない）

しかし、どうしてこうなったんだろう？

終了後と支払い諸々（前書き）

あらすじ　子供達は爵位をもらう。罠にはめられているぞ法務官。
亡命するならば今だ！！でも入国拒否はどうしよう・・・・・・・・・・

終了後と支払い諸々

仕事は無事終わる。金にはならなかったが現物で手に入れたからトントンか・・・・・・・・

否、あんな伝説級冗談魔具に金を出すなんて好事家がいるのだろうか？

金貨１０枚あれば孤児娘達や補佐見習の給与を払えるから良いけど・・・・・・・・・・

「賢者の旦那、いいんかい？こんな大金。」

「賢者様・・・・・・・・・こんな大金見たことがありません。」

「何に使おうかな？孤児院の皆の為に美味しいものを買うのは当然としてあの端切れ屋でリボン買占めできるわ。」

「それよりも綺麗な服を買って・・・・・・・・・・・・」

「美味しいもの食べ歩きかな・・・・・・・・・・・・」

「きゃー、食べまくるぞ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・花嫁の持参金。足りるかな？」

一部、問題のある発言があるが喜んでもらえて何より・・・・・・・・・

銀貨十数枚あれば下流の家庭で二月ほど過ごせるはず・・・・・・・・・

なんせ私は貴族だから下々の生活にかかる金子なぞわからないのだよ。

「だんな、世間知らずが自慢にならないって・・・・・・・・」

「そうか？とある聖者は生家が下働きや奴隷にさえ十分に食わせて肥太っていた事を自慢していたぞ。」

「御主人様の下に居る者たちは古の聖者ほどではないにしろ、食は

満ち足りていますし教育も叩き込まれていますから勝っていますわ。
」
そんな問題ではないが・・・・・・・・
「ところで、賢者の旦那。おれの分だけ大分多いのだが・・・・・・・
・・」
「それはな、補佐見習お前や傷跡娘は私の眷属、それに喧嘩売って負けたのは結構裕福な一門。その口止め料に多少貰ったからそれをお前に口止め料として加味しただけだ。あの喧嘩の事は口に出してはダメだぞ。」
「判った、あのことは未だに思い出しても腸が煮えくり返る！口に出したくもない！！」
「・・・・・・・・私にも入っている・・・・・・・・これも口止め料？」
「そうだな、ちなみにあの後釜貴族は引きこもっているらしいぞ・・・・・・・・潰すならば手を貸すが！！」
私自身も弟子や義娘を馬鹿にされて怒りを感じているのだが・・・・・・・・表に出す積りはない。

私の怒りは古い時代の滓（おり）、次の時代に生きる子供達には背負わせるわけにはいかないものだ。
「賢者の旦那、否、師匠と呼ぶべきか？おれはあの糞野郎に費やすならば仕事をしておれのような、いや、傷跡娘のような餓鬼を増やさない方向でいきたい。母さんが命を削っておれを育ててくれたのに馬鹿にする世界を変えたい！！」
「・・・・・・・・馬鹿野郎が、生意気ほざくな！！　王でも狙うか？」
「王なんてならない、王様の綱なんてザルだし（笑）」
「・・・・・・・・・・・・・・私はついていく・・・・・・・・・・・・・断っても無駄・・・・・・・・・・

」

「本気の馬鹿共が、潰れないためにも色々叩き込むぞ！私でも危ないのだから私以上を目指してもらう。」

「うげっ・・・・・・・・・・」

あっ、心折れたかな？

それでも手加減はしないけどな・・・・・・・・　折れた鋼も鍛えなおして後の聖剣になった例もあるしな。

補佐見習が一家構えるときの力にでもなるかな。

家旗に【零れ落ちたものを拾い上げる手となりたい、王族はザルだから】とか盛大に刺繍したりして・・・・・・・・

「だんな、それは王族に喧嘩売っているから・・・・・・・・」

「おっと、先の話に気合入れすぎた。」

「ところで私達はこれからどうなるのですか？」

孤児娘の一人が質問する・・・・・・・・・・

「取敢えずは市場でもいって遊ぼうではないか。働きたいのならば口を利くし、学びたいのならば孤児院にいればよい。私の従者は間に合っているが、王国の官僚補佐や他領の会計担当ならば十分に任せられるだけの力量はあるからどこにいっても重宝されるはずだ。」

「うん、賢者様市場で色々買いたいものがあるんです。初めての給金だし思い切り使いまくるわ！！」

「程々にして置けよ・・・・・・・・・・」

ちょいと反動が怖い気もしないでもないが、皆を引き連れ市場に行くのであった・・・・・・・・・・

いつも見るけど雑多な市場だな・・・・・・・・・・・・
生きた鶏が首を切られている場面を見て若干引きながら市場を歩く。
首を切られた鶏は逆さづりにされて血を抜かれる。血も器に集められて後で腸詰めとかの材料にされるのだろう。
「御主人様、煮込み料理の味付けにとか固めて前菜に使われる事もありますよ・・・・・・・・・」
色々な食べ方があるものだ、孤児姉は食べた事があるのか？

「はい、自由戦士さんに教えられて食べてみましたけど中々美味でした。」
「今度自由戦士に作ってもらうかな・・・・・・・・・・」
「いえ、私も作れますので機会があればご馳走したいと思います。」
「期待しているぞ。」
孤児姉はいい笑顔で「はいっ！」と返事をする。愛い奴だ・・・・・・・・
いつかは飛び立たせるために手放せばならないと思うと惜しく思う・・・・・・・・・・・・・・・

「でも賢者様、貴方様が一言言えば孤児姉は一生ついてくると思いますが？」
「馬鹿言ったらいけないよ、孤児娘。孤児姉は自分で飛べる翼を持っているんだ、それを手折って留め置く事は私の美意識が許さない。君達もだぞ、力と翼を経て世界に飛び立つ事に私は祝福こそすれ厭う事はない！！幸いと思う道があればドンドン飛び立ちなさい！！現に補佐見習は私という止まり木を飛び立って自分の旅路を行こうとしているではないか・・・・・・・・・・・・」
「残される賢者様が寂しいですね。」

「いや、私は自力で飛び立つ君達を誇りに思っているよ。」
「嘘つき！」
「・・・・・・・・・・・・・・寂しいと思っても私の時間は有限だ。永久には足りない時間なぞ耐えられないわけないだろう。」
「「「意地っ張り」」」
「可愛い子供達のためならば、意地も張ろうし世界全てに嘯こう。」

孤児娘や孤児姉弟が抱きついてくる・・・・・・・・・・・・愛い奴等だ・・・・・・・・・
全てを抱きとめるには二本の手では足りないのが悔しい・・・・・・・・・・・・
代わりに順番に頭をなでてやるくらいしか出来ない・・・・・・・・・・・・
無駄にしんみりしてしまったな・・・・・・・・・・・・まだまだ先の話なのに気にすることないのに・・・・・・・・・

「市場で遊び倒すぞ！！」
「「「はいっ！」」」

そうして、市場で買い物を楽しんでいる我等主従に次々と官僚共が合流してくる・・・・・・・・・・・・
私が最終日だから仕事の打ち上げを兼ねて呑み歩く事をたくらんでいるのが目に見えて判る。
大方私の下賜された金貨を狙って・・・・・・
「だいじょうぶ、財務長が予算組んでくれたから・・・・・・・・・・・・・・・思い切り上機嫌で・・・・・・・・・・・・」

ああ、王妃ぶちのめして機嫌がいいのだな・・・・・・・・・・・あれだけ暴れればすっきりするだろう・・・・・・・後で売りつけてみるかな神秘緋金属張扇(オリハリセン)。

「その時は財務長の個人的支出で頼むよ。予算捻出は面倒だから・・・・・・・・・」

判っているよ財務官。

どこを占拠しようかな?

「旦那方、店を占拠して営業妨害する前提の話はやめてあげてよ!」

補佐見習の話は誰も聞いていなかったのは言うまでもない・・・・・・・・・・・・

ちょうど良いところに補佐見習の母君である小売夫人がいるではないか・・・・・・・・・・

借り受ける事出来ないか聞いてみよう・・・・・・・・・・・・・・(ほぼ決定事項)

終了後と支払い諸々（後書き）

次は酒盛りになる予定です・・・・・・・・・・・

勿論下品成分増量で・・・・・・・いきたいですねぇ・・・・・

包丁研いでいたらノリノリになりすぎた。

終了後と市場で無体（前書き）

あらすじ　無事勤務終了。さぁ、酒盛りだ。
下品成分を多くしたいぞ！！

終了後と市場で無体

孤児娘たちは念願の端切れ屋で思い思いのリボンを買うことができるとあって大はしゃぎである。
初めて誰かの慈悲に頼ることなく自力で手に入れることができるものだ。うれしいものだろうな。
私は貴族、上級で名門と言われる生まれだから手に入らないという悔しさはほとんど感じたことはない。
キャーキャー騒いでいる娘達を見ると連れて来て良かったなと本心から思うのである。

「で、旦那・・・・・・・・・・・・・母ちゃんの店を占拠して商売の邪魔をするのはどうかと思うのだが。」
「こら！息子！賢者様になんてことを言うの！！私達親子がこうしていられるのも賢者様の御蔭なんですからね。いえいえ、賢者様の頼みでしたら一日といわずずっと占拠して頂いても・・・・・・・・・・・・」
「いや、すまないね婦人。うちの馬鹿共(かんりょう)が御子息を気に入ってしまってねぇ・・・・・・王宮で使いたいといっているんだよ。今日はその挨拶もかねて来たんだけど・・・・・・・・・・・・・　そこの大馬鹿共！何先に出来上がっているんだ！！特に法務副長！！貴方は補佐見習いの上司だろうが挨拶もしないで酔いまくるのはどうなんだ！！」

みると、小売婦人の店では馬鹿貴族官僚共が先に始めて居やがった！
周りを見ると露天商共がうちの味を見てくれ見てくれと品評会を始めていやがる。
「ああ、顧問。こっちに来てやらんか？」
「遅いから始めているぞ！！」

「これはこれはご婦人、挨拶もなしに始めてしまって申し訳ない。」
「ご婦人、補佐見習いのほかに子息はいないですかな？いたら、王室顧問の教育を受けてもらって式部官室にでもきてもらえないですかねぇ？」

好き勝手言いやがって・・・・・・

「ああ、そこの商人、君のところの果実酒旨いからもう一杯ね。樽でいいよ。」

ぷちっ！
「こんの糞たわけ共がぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

私は下賜された神秘緋金属張扇（オリハリセン）を二本装備すると官僚共をはじきあげるのであった。

「ああっ！これは伝説の二本張扇連撃（ダブルハリセーン）一度使うと3時間は張扇技が使用できなくなるという・・・・・・・・・・・・・・・」
誰だよ、この解説者は・・・・・・・・・・
「さすが演芸神の大祭司。見事な見識です。あの貴族が伝説といわれた神秘緋金属張扇（オリハリセン）の使い手とはしかも二本張扇を使いこなすとは只者ではありませんね。」
「野に埋もれるのは惜しい人材じゃ！是非とも演芸神殿に招かねば・・・・・・・・・」

ごちゃごちゃ五月蠅い外野だな。私は孤児姉から張扇をもう一本もらうとこの五月蠅い外野を叩きのめす！！
「ごちゃごちゃ五月蠅い！！こっちに嘴を挟むんじゃねぇぇぇぇぇ！！！！！」

特殊効果【大噴火】で自称演芸神殿関係者を火山の効果とともに打ち上げるとそのまま力任せに放り投げる。

「うぎゃーーーーーーーー!!」

「ふむ、見事な一撃(つっこみ)!!じゃぁぁっぁぁぁ!!」

そのまま星となった。

きらっ!

うむ、見事我が祭器を使いこなすとは・・・・・・・・・・・・王室顧問よ我が祝福を受けるがよい!(BY演芸神)

三本の張扇から光が零れ落ちる。

それぞれの張扇が一回り大きくなって無駄に装飾がついた気がする。

「おおっ!!ハリセンが神に祝福されたぞ!!」

「はじめてみた。演芸神の祝福なんて・・・・・・・・・・・・・・」

「戦神の祝福とかは結構見るけど・・・・・・・・・・・・・・ありがたやありがたや!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・だんな、突っ込み気質が神に祝福されるなんて・・・・・・・・・・・・・・」

周りにいる民草共が好き勝手いうのは仕方ないが神までしゃしゃり出てくるとは・・・・・・・・・・

私は目を閉じて神の気配を感じるとそこに向けて思い切り振りかぶる!!

「話がすすまねぇじゃねぇぇかぁぁぁぁっぁぁぁーーーーーーーーーー!!」

ぼこっ！
といういい音の後、なにやらわけのわからない感触とともに何かが吹き飛ばされていくのが分かる。
何かの叫びみたいなのが聞こえるが気にしない方向で・・・・・・・・・

神というのは我等よりはるか高位の存在だ。私に理解できなくとも仕方がないだろう。
気をつけねばなるまい、今ここで神を撃退したが第二第三の神が現れるだろう事を。

「って、ご主人様？こちらの官僚様達をどういたしましょうか？」
そうだった、そうだった。
とりあえず、場所を貸してくださる小売婦人に挨拶をさせないと。
「婦人本日は場所をとってしまって申し訳ない。」
「子息の身柄は法務副官であるわしが承った。立派な官僚に仕立てますのでご了承いただきたい。って、いうか断っても連行するけど。」
「おじゃましてまーす！」

挨拶はさせて占拠する許可も取ったし、飲みますかね・・・・・・・・・
私は孤児姉に酌をさせてのどを湿らす。
官僚共と杯を交わしながら市場の賑わいを眺めている。

婦人も久方ぶりに息子に会えてホッとしているのだろう。補佐見習いと他愛もない話をしている。
王宮はどうだったとか仕事がどうだったとか、店のほうも何とかや

っていけるから心配せずにがんばりなさいとか・・・・・・・・・・・・

親子の語らいを孤児娘たちは端切屋の店先からうらやましそうな、微笑ましい物を見るような複雑な表情で見ている。親が今どこにいるかも知らないし、温もりも知らずにいたんだから寂しいのだろうな。その寂しさは分かるが同情はしない。一人翼を得て飛び立つ雛鳥に対して失礼だからだ。彼女等もそんなものは欲しくないだろう。温もりだったら抱いてあげるけどな、主に寝台の中で！

「ご主人様！下品ですわ。」

「ははははっ！なぜ、分かった。」

「ご主人様の考えくらい分からなくてどうするのですか？」

「いいじゃない孤児姉、賢者様は貴女の物じゃないんでしょ。私たちも嫌じゃないし・・・・・・・・」

「むぅ・・・・・・・・」

「膨れちゃって可愛い！」「大丈夫だから、一番最初は譲ってあげるから。」

「そ、そんなんじゃなくて・・・・」

「いいじゃないの、今晩でも襲いにいけば・・・・・・・・・」

「何なら、私たちも混ざる？」「きゃー！だいたーん☆」

「・・・・・・・・・・・・いいかも・・・・・・・・・・・・」

「待て待て待て・・・・・・・・・お前等何の相談をしている！」

「そりゃ、賢者様を（ぴー）する相談だけど。私たちを抱いてくださらないし溜まっているんじゃないかなぁと・・・・・・・・」

「適度に性愛神殿通っているからそれほどでもないんだがな。」

「周りにこんなに可愛い子がいるのに？」

「可愛いのは認めるが子供だしなぁ・・・・・もう少し育ってからならば出したくもなるが。」

「本当？ちゃんと育って手を出してもらうんだから！」

孤児娘たちにもみくちゃにされる。まぎれて孤児姉も抱きついているがご愛嬌だ。
頬にキスとかこそばゆい

「王室顧問モテモテだな。」
「うらやましいだろう、分けてやらんぞ！」
「けち！」
「私の可愛い娘達をどこの馬の骨とも知れないやからにやれるか！！」
「親馬鹿発言だねぇ・・・・・・・・・・・・・いつ手を出すんだい？混ぜてくれよ！！」
「そういう発言は君の婚約者に伝えておくから・・・・・・・・・・・・」
「うわぁ、やめてくれぇ。農園公系の血筋だからそんなことばれたら全裸で折檻されてしまう。」
「そういうプレーか、君たちも進んでいるねぇ・・・・・・」
「そんなんじゃないって・・・・・・・・・・」

馬鹿な話でわいわい、市場の衆から差し入れられる酒やらつまみやらで宴は楽しいこととなっている。
君達ただ酒するんじゃないぞ！
「分かってるって・・・・・・・・・・・・そこの若商人。その腸詰を一束こっちにくれぇ・・・・・・」
「婆さん、その卵の塩漬け実家に届けてくれんか？場所はこれこれ・・・・・・・・・・」

またもや始まる便乗商売・・・・・・・・・・・・貴族様御用達とか賢者様の舌が認めたとか・・・・・・・・・・・・
市場が活性化している。衛士もまたかと呆れ顔で見ている。
前回より人数が多いし、位のほうも法務副長（副大臣）クラスが・・

・・・・・・いるからどう突っ込みいれていいのかが分からない・・・・・・・・

私ら貴族様、君達平民・・・・・・・・・・逆らえないよね・・・・・・・

「ううっ、正義はないのか？」

「そうだよ、力こそすべてだ。正義の神なんてもう死んだのさ！」

「それよりも衛士隊のツケ、払っておくれよ！貴族様はちゃんと払っているのにあんたらは払ってないじゃない！貴族様に文句つけるならば取り立てに行くよ！！」

ああ、私等貴族というよりも小売商たちのツケが・・・・・・・・・・・・

金で縛られるとは世知がたい世の中だ。可愛そうだから財務長予算からツケを払ってあげよう。

「王室顧問、衛士達を甘やかしちゃだめだろう。ほとんど酒手だし・・・・・・・・・」

「いや、甘やかしてちゃいないよ。その分便利重宝に使うから・・・・・・・・・・」

「うわぁ、法の番人が買収だ。えげつないなぁ・・・・・・・・・・・・」

「こらこら、侍従官。買収などと人聞きの悪いことをいわないように、法務官と協力関係にある部署に協力しているだけだよ。もともと衛士隊は宰相府王都管理部門で法務長の下部組織だから下のものに便宜を図ってやるのも間違ったことじゃないんだよ！」

「うわぁ、この法曹一門。理論武装だけはしてやがる。」

「ふふふ、準備だけは怠らないように・・・・・・・」

「もぐもぐ・・・・・・・ご主人様は本当に衛士隊を買い取ってしまいましたわね。」
「いいんじゃない？悪用はしないから・・・・・・・・私用ではこき使いそうだけど。」
「せいぜい、この場を丸く治めるくらいだろうしねぇ・・・・ごきゅごきゅ」
「・・・・・・・・・・・この塩蔵肉おいしいわね。孤児院に届けてもらおうかしら？」
子供達は子供達で小売婦人と一緒に我等のつまみを奪い取り食べている。
小売婦人も娘たちと語らいながら娘達の戦利品を手にとって見たり、髪の毛をいじったりしている。
婦人も息子だけだから娘ができたみたいでうれしそうだ。
補佐見習は居心地悪そうに市場をいろいろうろついている。そんなに離れていると自爆するぞ・・・・・
案の定、話題は傷跡娘との一件にも及ぶ。
補佐見習(いのしし)が貴族に喧嘩を売って、顔を腫らした事は心配するだろうから黙っていたかったろうに・・・・・・・・・
それでも母は強かった。
婦人はあっけらかんと笑って傷跡娘を手招きしてその顔を見る。
傷跡娘は彼が自分のせいで傷つけられているからかびくっとしてしまう。
「うむ、息子(ばか)の趣味は悪くないことは分かったわ。十分喧嘩売るだけの価値はあるわ。」
と、傷跡娘の頭をなでる。
「それにしてもうちの息子(ばか)は気が利かないわね。こんな可愛い彼女がいるならばどうしてうちにつれてこないのよ。」
「・・・・・・・・・か、彼女・・・・・・・・・・・・・・・／／／」

「おやおや、母親公認ですかぁ？補佐見習も外堀埋められてるねぇ・・・・・（ニヤニヤ」
「この二人がいると暑くて暑くて・・・・・・・・そういえば賢者様が宮廷魔術師様に氷の塊を用意しろと怒鳴っていたことありましたねぇ（ニヤニヤ」
「おやまぁ、あの馬鹿息子は手が早いにもほどがあるわね（ニヤニヤ」
「・・・・・・・・・・・・・まだ、手、だされてない・・・・・・・・」
「まだって事は手を出される予定でもあるのかなぁ？傷跡娘ちゃんは・・・・・・・・」
「まだ早いですよ、せめて二十代のうちはお婆ちゃんと呼ばれたくないからね。お義母さんならば歓迎だけどね・・・・・・・・・・・・」
「え、えっと・・・・・・・・・・・・それは・・・・・・・・・・・・」
そこで戻ってくる補佐見習、ああ、可愛そうに・・・・・・・・・
「息子！どうしてこんな可愛い彼女がいるのに家に連れてこなかったの？」
「母ちゃん、そんな事言ったってこいつは彼女じゃないって・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・彼女じゃない・・・・・・・・・・・そうなのね・・・・・・・・・・・・・・・あたしは思い上がっていただけなのね・・・・・・・・・・・・」

「息子、かわいそうに傷跡娘ちゃんが落ち込んでいるじゃないの！謝りなさい！」
「なんでかーちゃん・・・・・・・・・・・・・・・　だから傷跡娘、お前のことを嫌いだからじゃなくて・・・・・・・・・・・・・・・なんていうのかまだ早いというか・・・・・・・・・・・・・」
「いいの・・・・・・・・・・・・・・・あのときの思い出だけで生きてい

けるから・・・・・・・・・・・・・」
「だからなんなんだよ！　傷跡娘お前のことは嫌いじゃないし、むしろ好きだ！！　彼女とか恋人とかって言うのは出会って間もないのになるもんじゃないだろう！！」
「・・・・・・・・・・・・・無理しなくていい・・・・・・・・・・・・・
・こんな傷跡は醜いでしょ？」
「馬鹿いうな！傷跡くらいでお前が損なうわけじゃないだろう！！お前は可愛いんだ！」

「えっと、そこの道行く犬頭の氷売り。これって食える？」
「あっしは狼系なんだけど甘ったるすぎる痴話喧嘩なんてくえないですよ。貴族様。それにあっしをオチに使うのはやめてくれませんか？」
「そうか？悪い悪い・・・・・・・・・この雰囲気は暑過ぎて困るから人数分の白玉氷くれないか？」
「まいどあり！！」

その日氷売りは繁盛したという。
「だからあっしをオチにしないで欲しいんだけど！！」
なんか嫌なことがあったんだろうか？

終了後と市場で無体（後書き）

ぐだぐだです。次も酒盛りでしょうか？
作者には酒をください。

狼系（自称）の氷売りは痴話喧嘩とかの遭遇率が高いのだろうか？
作者にもなぞです。

終了後と馬鹿ばかり（前書き）

あらすじ　市場で宴会だ。君たち貴族だろう！ルンペンみたいにしているんじゃない！

ルンペンと貴族の共通点は働かなくてもいいなどといったものがいるが、どちらも働き方が平民からすれば異質であるために働いていないように見えるだけである。

って、意味もない前文をつなげてみたところで本筋とは関係がない。

終了後と馬鹿ばかり

狼系獣人の氷売りの氷白玉（氷水に白玉団子を浮かべて蜜をかけたもの）を食べて補佐見習と傷跡娘が発する熱気（らぶらぶ）から一息つけた私達一行は市場を酔い覚ましもかねてぶらつくことにする。

とは言っても道行く露天からこれを食べてけとか味を見てくれと言う依頼が多くて苦笑する。

少し食休みとか腹ごなしの運動が必要かな？

「そうだ！娼館へ行こう！！」

それは良い考えだ王城管理官！だてに彼女いない暦が年齢と一緒ではない！

「それは関係ないと思うぞ。」

賛意多数で向かうのだが問題は・・・・・・・

「さすがに連れて行くわけ行かないよなぁ・・・・・・」

「だよなぁ・・・・・」

「性愛神殿に住まわせていたときだって怒られた物なぁ」

「そりゃそうだ！」「当たり前だ！！」「王室顧問どうかしているぞ！」

娼館通いをしようとする連中に言われたくないなぁ・・・・・・

私は今回止めておいた方がよいかな？

「君たちだけで楽しんで行きたまえ。私はこの子達がいるからなぁ・・・・」

「悪いな王室顧問。私達だけでイングリモングリしておくよ。孤児弟に補佐見習、お前らも行くか？」

「え、えっと・・・・・・・・・・・・・・・興味はあるけど・・・・・・」
「むぅ・・・・・・・・・」
「息子、さすがにかわいい彼女の前で娼館に行くなんていわないわよね・・・・・・・・・」
「お誘いは有難いのですが、こいつが嫌がるんで勘弁してください。」
「・・・・・・・・・・よし（なでなで」
「こ、こら、なでるなよ恥ずかしいだろ！」

「見ているこっちが恥ずかしくなる！狼系の氷売りいるか？」
「なんだい？貴族の旦那方？」
「見ていて暑苦しいから冷たい氷白玉をおくれ。」
「あいよ！　って、あっしをオチに使うのは勘弁してくださいよ！」

まぁ、そんな馬鹿なことを言いながら紳士諸氏は花街に消えていった・・・・・・・・・
私もいきたかったなぁ・・・・・・
そんな思いが零れ落ちたのか孤児娘達の視線は冷たい・・・・・・・・・
・
「賢者様ならば私達で発散すればいいのに・・・・・・・・」
それは聞かなかったことにして、孤児院に持っていくお土産でも用意しようか・・・・・・・・
お菓子に服に食べ物に・・・・・・・・玩具やなんかもいいかな・・・・・・・・
少々買いすぎた気もしないでもないがそれはそれで・・・・・・・・・
・

孤児娘達も自分で欲しがっていたリボンやら服やらが買えて満悦である。

帰ろうかね・・・・・・・・・孤児院に。

小売商婦人親子と別れて、我等主従も孤児院に向かうのである。

久方ぶりの孤児院、孤児娘達が帰ってくると院長やら孤児達やらわらわらと出てくる。
その後で女衆も顔を見せて出迎えてくれる。

土産の品々を見ると子供達は歓声を上げながら群がるし、女衆はそれを見て微笑ましそうにする。
孤児娘達は示し合わせていたのか幾許かの銀貨を院長に渡し孤児院運営の足しにしてくれと言ったものだから院長の目にもきらりと光るものが見える。

夕餉の時間となったのだが、我々は食べ続けていたからあまり腹が減ってはいない。
それでも一緒に席に着き、お互いに何があっただのこれがあっただの言い合って夜も更けていく・・・・・・・・

その夜、私は孤児娘達を集めて今後の進路を聞いてみることにする。
「うーん、このまま官僚様の手伝いでもいいかな?」
「もう少し勤務時間短いほうがうれしいけど・・・・・・・・」

「賢者様の夜のお供じゃ・・・・・・・痛い！！」
「ご主人様に不埒なことを働くものは許しません！！」
「こういう不埒なことならば大歓迎なんだけど。」
「ご主人様！！」
「まぁ、孤児娘達は今まで通りでいいのかな？」
「「はいっ！」」
「条件についてはこっちで調整するから何かあったら言って頂戴。
まぁ、二三日は羽を伸ばせばいいだろう。暫く私も王宮によらないで孤児院で子供達の相手をしているしな・・・・・・・・」
「そういえば寮母様に挨拶しなくてよろしいので？」
「忘れていたなぁ・・・・明日にでも皆で行って見るか。多分返してもらえないかもな（苦笑」

「孤児姉弟は今後どうする？爵位をもらったから貴人聖域（アジール）法から外れるが。」
「私はご主人様についていきます。止まり木がどうのとか言うのは無しで、私が仕えたいからご主人様の元にいるのですし・・・・・・」
「おいらは暫く旦那とともに色々見てみたい。王宮勤めも悪くないのだろうが、まだおいらは小さいからな・・・・・・・・・」
「お前らがそういうのならば仕方がないな。王宮勤めほどの給金は出せないが付き合ってもらうぞ。」
「「はい。」」

さてと、今夜は遅いし疲れたろうから寝るとするかね？
って、部屋がない？

「すいません、皆出て行ったからそのまま自活するかと思って部屋他の者に明け渡してしまいました。」

あらら、客間が一つあるからそこに夜具を用意しても皆で雑魚寝かな・・・・・・・・

「賢者様よろしいので？」

「かまわんよ、一夜くらいそういうのも悪くなかろう。」

孤児姉に娘達・・・・・・・・・近いんだが・・・・・・・・

「父親のぬくもりってどんなだか興味があるから・・・・・・・・いいでしょ賢者様？」

「押さえが利かなくても知らないぞ。」

「そのときは私に・・・・・・・」

「馬鹿なことを言っているんじゃないの！」

孤児姉の頭を軽くはたく。

孤児姉は膨れている・・・・・・・・・可愛い者だ。

むくれている孤児姉をなでながら寄り添ってくる娘達とともに静かに眠りの園につくのであった。

「おいらは空気か？」

孤児弟は一人外れたところで疎外感を感じながら不貞寝するのだが、そこにあふれた孤児娘達が寄り添ってくれたのだが起きるまで気がつくことはなかったのである。

王室顧問とだらけた一日（前書き）

あらすじ　依頼の一ヶ月が終わったぞ。自由だ！

王室顧問とだらけた一日

依頼された一月が終わって私は自由の身となった。
孤児院は部屋が無いと言う事で寮の一室にいるわけだが、何処かで住まいを探さないといけないねぇ・・・・・・

「だんな、別に居座っても良いんじゃないの？王室顧問と言う役職もあることだし。」
「孤児弟、こんな近くにいると言う事は何時呼び出しが来ても・・・・・・」

どんどん！

誰だろう？

「王室顧問其処にいるのはわかっている！大人しく孤児娘たちを連れて官僚部屋に連行されろ！！」

「ほらな。」
「思い切り良く判った・・・・・・・・・で、どうするんだい？」
「勿論無視、今日は孤児院に講義しに行かないと・・・・・・・・」
「御主人様準備が整いました。」
「では行こうか・・・・・・・・」

我等主従は孤児院に向かうことにする。
官僚？何それ美味しいの？
後釜君達が育っているんだからこき使えば良いではないか（邪笑
それに補佐見習とかいるだろうに・・・・・・・・・　遠くから聞こえる怨嗟の声を聞き流して向かうのである。

「そういえば御主人様妹達は？」
「多分市場をうろついているんじゃないか？暫くは仕事しない積りだろうし・・・・・・・」
「なるほど、妹達が捕まらないから御主人様をえさに捕まえようとしているのですね。」
「私達は一組か（苦笑）」

確かにそうかもな、職能集団王室顧問経理部隊とでも名乗るべきか。
「単純に王室顧問一門じゃないのかな？」
「経理だけにとどまっていないからなぁ・・・・・　そういえば孤児院の子供達の中で有望そうなのはいるか？」
「おいらが見た限りだと3人と言ったところか？まだ、小さいから王妹殿下（しょたこん）の餌食にされないように気をつけないといけないが・・・・・・・・」
「私が見た感じでも3人くらいでしょうか？ただ、王室自体に良い感情を持っていないようですので他の場所を勧めるのが宜しいかと・・・・・・・・・・まぁ、目ぼしいのは商会公様が引き抜きにかかってますけど・・・・・・・」
「あの御仁は目敏いなぁ・・・・・流石は商人青田買いも平気でやるか・・・・・・・・・」
「そういえば孤児娘たちも引き抜きの対象にされていたよ。」

抜け目ないなぁ・・・・　おかげで商会公経由で投資した金の配当だけで暮らしてはいけるんだが・・・・・
今度何処か住む所でも斡旋してもらうか・・・・・・・・・・・・・

「屋敷でも買われるのですか？」
「そんなには金はないよ、王都に空きがあるかどうかも怪しいものだしな。下級貴族区画で小ぢんまりとした家くらいならば買えるが、私達くらいならば寮や共同住宅の一部屋くらいなものだ。」

「今の寮が嫌ならば守護辺境伯屋敷でもいいんじゃない？」
「其処は其処で実家の仕事手伝わされるから嫌だ！！」
「ぶっ！あはははっ！！　旦那仕事から逃げらんないじゃないか？あはははっ・・・・・・・・」

笑うな孤児弟！！
事実なだけにへこむじゃないか。

そんなこんなで孤児院に着く。
孤児娘達も孤児院で子供達の世話をしている・・・・・・・
「あら賢者様遅いじゃない！」「夜の孤児姉とはしゃぎすぎたんでしょう・・・・・・」「起こそうとしても起きなかったしね」「・・・・・・・・・・・・・・・・賢者様は基本だらけているのが好きだから。」
「まぁ、私らも二度寝に巻き込まれたりしそうだしね。」

それはおいといて・・・・・・・・・

孤児院で子供達相手に文字を教え計算を教える・・・・・・・・・・
一人一人の熟達は違うが着実に進んでいる。授業を聞きながらうつらうつらしているのがいるが神秘緋金属張扇（オリハリセン）で叩けばすぐに目が覚める。
是は便利だ全国の私塾で・・・・・・・・・・・
「一本金貨何十枚もするようなものを買えないって」
そうだった、そんな欠点があったんだ！！
「普通の張扇で十分では？」
「そうだな。」

授業はきりの良いところで終わらせて、孤児院で昼飯をご馳走になる。
どうして羊の肉塊なんだろう？
「是は羊を一頭ぶつ切りにしてゆでたものだ。好みで塩なりタレなりつけるが良い。」
しかも頭がグロいし・・・・・・・・
「脳みそは旨いのだぞ、賢者様食え！！」

うわぁ・・・・・・・・・・・・護衛官の話に出てきそうな形だな。
子供達も普通に喰らっているから食えないわけではない・・・・・・・・　ぱくり！

うむ、是は美味
滑らかな舌触りにこってりとした風味。上顎が喜ぶと表現が出来るな。
タレをつけて・・・・・・・・・・実に良い。
うまいぞーーーーー！！

そして蒸留酒に良く合う・・・・・・・・・・　えっと荒野の戦士達。酒盛り開始しているのは構わないが後ろから女衆がにじり寄っているよ・・・・・・・・・・・・・・
ああ、殴られた・・・・・・・・・・・・・・
君達反省しないねぇ・・・・・・・・　えっ？私もかい？
酒は私の潤滑油だよ。取り上げるなんて酷いな。

昼飯後は午睡としゃれ込む。餓鬼共がまとわりついて暑苦しいのだが仕方ない。

なぜか孤児姉も私の背中にへばりついているのだが・・・・・・・・・・
・薄いとはいえ柔らかいものが・・・・・・・・

女なんだなぁ・・・・・

そうしているうちに夕方である・・・・・・・・・・・・・・・

さて、夜は性愛神殿でもいくかな・・・・・・・・・・・・・・

美乳の女神官とお勤めをしないと敬遠な性愛神殿の信徒として・・・・・・・・・・

うちにこない？（ＢＹ演芸神）

王室顧問とふざけた一日（前書き）

あらすじ　我はお笑いと突っ込みの神、演芸神。王室顧問の突っ込みと張扇捌きが気に入ったから加護を与えようとしているのだが中々来てくれない。心が折れそうだよ。突っ込みすると思ったら性愛神殿で女神官の股間相手に突っ込みをしているし・・・・・・・・・・・・

突っ込みと言うものはこうなんていうか、世界に対して叫びを上げるようなものだと思うのだが・・・・・・・・・・・・

王室顧問とふざけた一日

何か馬鹿な神の声がしたような・・・・・・・・
そもそも神が馬鹿であると言うことはありうるのだろうか？
超越者たるもの我等凡百の者からすれば遥かに超えたところに存在するからそれなりに知性とか色々発達しているはずなのだが・・・・・・・・・・

今度神に会うときがあったら聞いてみたいものだ・・・・・・・・・

ノーコメントで（ｂｙ通りすがりに神の一柱）
演芸神と同類にしないで（ｂｙ文芸神）
少なくとも私は馬鹿じゃない、そして君が信仰している神も（ｂｙ馬族守護神）

変な夢を見た気がする。
「王室顧問朝ですわよ。」
けだるげに眼を開けるとそこには裸の胸を惜しげもなくさらした女神官がいる。
そういえば昨夜は性愛神殿にて苦行（おたのしみ）をした後か・・・・・・・・・・

「何、ぼんやりしているの？目覚めに一発抜いたほうが宜しいのでは？」

女神官は寝ぼけている私に枝垂れかかり私の世界樹の苗をまさくり始める。
女神官の秘儀に応え私の世界樹は天をも突かんとばかりに屹立する。
世界樹の幹をなでる手は知恵の泉に導いて・・・・・・・・・・・・・

一時後・・・・・・
朝から疲れた・・・・・・・・・まさかあの後世界樹の滴を3度流す羽目になるとは・・・・・・・・・・・・・
「あらあら、もう少しいけたでしょうに我慢なさらなくて宜しくてよ。」
「後が怖いわ！」
「あらあら、まだまだ若いのに・・・・・・・・・」
「君には負けるよ」
私は優しく女神官の髪に口を寄せて情事の余韻を楽しむ。
くすぐったそうに笑う女神官と寝台で横になりただ温もりを楽しむ・・・・・・・
これ以上は一滴たりとも出て来ないだろうし無理をするよりも余韻を楽しむくらいが丁度良い。

そうしていると朝の鐘が鳴り一日が始まったことを歌う祈りの声が聞こえてくる。
性愛神殿に集まる人々は娼婦やその客だけではなく、苦界において身も心もぼろぼろになって道端に打ち捨てられた者。奴隷として囚われたもの、意に染まぬ経験で苦難の日々を受けざるを得なかったもの。傷ついた者がお互いに傷を舐め合い助け合って生きている。
一歩先に進めるものがいれば、弱者達が互いに足場となり踏み台となって飛び立ちなさいとその者の背中を叩き祝福する。
朝の祈りは旅立つ者を祝福して自分等のような苦痛が誰も受けませ

んようにと馬鹿で無駄な祈りを捧げる愚かで弱い者達の血の叫びなのである。

誰かの褥には幸せな交わりがありますように
誰かの道に幸いが落ちてますように
誰かの苦難がありませんように
誰かの幸いが誰かの幸いの種となりますように
自分等で苦痛は終わりにしてくださいと・・・・・・・・・・・・・・・

この祈りはかなえられることはなく、叶えるために神官や信者達は誰かの盾となって傷つくのだ。
娼婦達は優しく男を抱きしめて一時であっても温もりを与えるし、解放奴隷達は自らの血肉を持って虐げられたもののために剣を振るう。彼等が求めるのは誰かが幸せになること。
彼等こそ幸せになって欲しい物だ・・・・・・・・・・・・・・・先の街娼や孤児達の保護の件で裏方として傷ついた者達を必死に看病していた性愛神殿の信者達。

膿んで腐臭漂う傷口に口をつけて膿を吸出し、糞尿に塗れた身体をやさしく洗い、蛆の湧いた傷口を厭う事無く手当してくれた優しき馬鹿者達。挙句の果てに自ら病を得て倒れ臥して尚、誰かを案ずる大馬鹿者。救いようのない愚か者と一緒になりたいと神殿で修行している元街娼も少なからずいる。孤児達の中には初めて知った温もりがこの俗世で生きるには不適当なやさしさとやらしさとやましさを持つ性愛神殿であると言うものも少なくない。

ちゃんと王国からの金が此処まで流れてくるように気をつけてやら

ねば・・・・・・・・・・

「そんなことは良いのに、賢きおばかさん。」

女神官は私を抱きしめてくれるのである・・・・・・・・・・・・・・・

是が私達の祈りの形、お互いの温もりをもって一つの幸せを分かち合う。

愚かしくも一番最初の幸せの形。

それの名は・・・・・・・・・・・　なんだろうな？

すっきりして、心満たされて、幸いを得た私は神殿に保護されている者達が息災でいるかを訪ね歩き幸いである事に満足する。

今だ傷がいえないものがいるし、飛び立つ前に倒れ臥し旅立ったものもいる。

せめて今が幸せである事を今際に幸いであったと言う言葉を残してくれた事を喜ぼう。

市場開場の鐘が鳴る時となった。私は神殿を出て、王城へと向かう。

私が性愛神の信者として為すべきを為す為に・・・・・・・・・・・

成り行きで得た地位を振るって、零れ落ちたものを無くす為に。力を振るえるのは残り二年弱。
どれだけの者を取りこぼさずにすむのだろうかね？

その二年弱が終わったら次の時代に生きる者たちに任せて私は静かに朽ちて逝こう。

王室顧問とふざけた一日（後書き）

傷ついたものの汚れを清めるのは決してプレーじゃないんです。プレーじゃないと信じたいんです。プレーで慣れているのは否定しないでしょうが、プレーじゃないんですと声を大にして言いたいのです。（ｂｙ性愛神）

王室顧問とくだけた一日（前書き）

あらすじ　これは元法務官こと現王室顧問の一日を描いた物語である。
彼の回りにはまともなものがいない気がするのだがそれはこの地を治める某王国地方担当地方神の趣向からである。絶対おれの所には彼らを寄越さないでもらいたい。極北部族連合の首長と極北地区神殿連合の連名で王室顧問絶対来るなと外交文書を作らせないと・・・・・・・・

神にも刃向かう変人どもが来た日には四十万の白い世界が損なわれる。（ｂｙ極北地方担当神）

王室顧問とくだけた一日

朝起きると小鳥のせんｚ・・・・・・さえずりが聞こえてくる。
ムクドリが逆さにぶら下がっているし、鶯が谷を渡っている。
そんなことは良くある朝の光景だから気にもしないのだが・・・・・・

身支度を整え、私が部屋を出るのを待っていた孤児姉弟を従え寮の食堂に向かう。

孤児弟は朝から良く食べる。今まで食べる事に不自由していたからその反動だろうか？
同じ年代の子供より小さい体のどこに入るのかいつも不思議に思う。
大皿から山盛りによそられた食べ物を楽しそうに食べる。最初のうちは手掴みに近い食べ方だったのだが最近は作法に沿った食べ方をするようになる。次から次へと食べ物が消えていくさまは見ていた面白い。
私に保護されてからは最初に肉がついて次に背が伸びてくるのである。まだまだ小さいがひょりと一日ごとに伸びていくさまはどこまで大きくなるのだろうかと感心してみる。

反対に孤児姉は食べる量的には私よりやや少ないくらいで一般的な女性と同じくらいだろうか？
動く一般市民の女性よりやや少ないくらいである。もっと食べても良いのにというと
「作るときにつまんでいますから・・・・・・・・・　今朝は前に言っていたタロの料理を用意してみました。お口汚しではありますがご賞味くださいませ。」

なるほど、寮で料理もやっていたのか・・・・・・・・・・・・別に寮付の女性陣に任せても良いのに・・・・・・・・・・これが孤児姉のタロの料理か・・・・・・・・・・・・煮含めたタロに肉のそぼろを添えたのだな・・・・・・・・・・・・・・どれどれ・・・・・・・・・・

出汁の風味が絡まっている表面の粘りに濃い味に仕立て上げた肉のそぼろが絡み合いいい味を出している。
肉自体も大きさをワザと不ぞろいにして肉の食感を出す部分と味をタロに移す部分とを作っているのが面白い。
王宮料理の華美さはないが滋味溢れる一品である。

「旨い。」
「良かった・・・・・・・・・・」
安心したような孤児姉の顔、まずくても可愛い従者が私のために作った料理だ食べるのが礼儀であろう。
「こういうものを食べると落ち着くなぁ・・・・・・・・　華美さはないがお前らしいやさしい料理だ。」
「まだまだありますので、色々試してください。」

そう言って孤児姉はタロの料理を数品出すのであった。
潰したタロを団子にした汁物。タロの茎を湯がいた後で酢にあわせたもの。小さいタロをゆでたたけのもの。本当に色々作ったのだな・・・・・・・・・・

うむ、美味！
食べた事がないものもあったのだが興味深いものである。どこの地方料理だろうか？
「いろんな地方の料理の寄せ集めだよ。孤児姉は結構勉強家だから何処かの書籍から調べてくるんだろうね。」

「ふむ、一つの材料で色々作るとは孤児姉は工夫の才があるのだな。どこに出しても恥ずかしくない私の自慢だな。」
「ずっと手元に置いときたくなるんじゃないの？」
「攫われないように気をつけないとな。二度と手に入らない逸材だし。」
孤児姉は寮母と私の会話に真っ赤になってうつむいている。照れているのだろう・・・・・・・・・愛い奴だ。

「旨かったぞ。また頼むな。」
「・・・・・・・・・・・はい。」

それを見ていた孤児娘達は・・・・・・
「あたし達も手伝ったんだけどねぇ・・・・・・」
「何か持ってかれたね。」
「実際私らはタロを洗うくらいしかしてないけどね。」
「・・・・・・・・・・・もぐもぐ、美味。補佐見習に持っていってみるかな？」
「おやおや傷跡娘ちゃんは胃袋からも攻略するのかなぁ？」
「それもあり。」
「おやおや暑いねぇ・・・・・」「冷汁取って来よう。」
「補佐見習は逃げられないな（ニヤニヤ」
「・・・・・・・・・・・・・あたしのほうが捕まったから仕方ない。」
「はいはい、ごちそうさま！」

朝食を取った後で孤児達を引き連れて王宮へ向かう。
孤児娘達の仕事のある日である。私がついていくときもあれば彼女達だけで行かせる日もある。
彼女達だけで行かせるときも念の為に迎えを寄越してもらったりし

ているのだが、過保護だろうか？
まぁ、若手官僚達も寮にいるものがいるから彼と一緒に行かせているのだけなのだが。
「まぁ、誰かが付いていないと横から掻っ攫っていくのがいるからなぁ・・・・・・・王妃様とか王妃様とか王妃様とか・・・・・・」
「うーむ、専属契約だったはずだが・・・・・・」
「いつの間にか変えられていたよ。王宮事務全般の補助作業にと・・・・・・・・・しかも宰相閣下も国王陛下も認可しているし・・・・・・由々しき問題だ。」
「王宮管理官、後釜貴族達を王妃様とか陛下付きの事務員にする？」
「・・・・・・・・・・・・・・・それ断られた。むさい男は要らないと・・・・・・・・・・・・」
「そっちの問題！！となると貴族の令嬢に事務仕事を仕込んで・・・・・・」
「ダメだ！王妹殿下（くされあま）の派閥が王宮内に根をはめぐらせてネタを探し始める・・・・・・・・・それ以前に兄弟姉妹（あなだかさおだか）が多すぎて人間関係が面倒くさくなる。」
「そこまでは面倒見切れない。」
「なんかいい方法ないかなぁ・・・・・　補佐見習も一度、宰相閣下とか某都市候に攫われかけたからなぁ・・・・・事務方として・・・・・・・あれで法務副長切れちゃって、近衛兵の一団連れて殴りこむ寸前までいったよ。」
「内乱起こすなよ」
「お前が言うな！！」

若手官僚である我々が着飾った小娘達を連れて王宮へ行く姿は仕事ではなくて遊びに行くようにも見えるのだが近衛たちも孤児娘達の事を認知しているのか軽く挨拶をして通す。
「そりゃ、彼女達を止めたら仕事滞った部署から予算削減とか減給とか言ってくるからねぇ・・・・・・・・・」

「誰だ?その職権乱用。」
「主に王妃様でしょうか・・・・・・・・・・・・・・・あと官僚の皆様方とか・・・・・・・・・・・」
ジト目で見ると王宮管理官は視線をそらす・・・・・・・・・・おまえもか・・・・・・・・・
官僚部屋に着くと孤児娘達は其々の席について仕事を始める。
主に経理部分の見直しだが孤児娘達にかかれば面白いように計算間違いやら過大請求が出てくる。
是だけで金貨数百枚程度の節約になると財務官が言っている。
恨みを買いそうだから護身用に何か用意するかな?
「王室顧問、それならば指輪形の魔道具でも用意しようか?麻痺とかならば安価で手に入るし。」
「幾らくらいの予算つけるんだ?」
「一人金貨数枚程度。」
「うわぁ、豪勢だ!!」
「そりゃ、引き抜かれたり何かあったりしたらこっちに穴が開く。それならば金貨の数枚くらい安いものだ。」
「そんなものかなぁ?」
「それよりも君が仕込んでいる孤児達の中で使えそうなのいる?」
「孤児娘の年代のは粗方商会公や農園公が引き抜いていったよ。下の年代のもいるけど流石に子供過ぎるだろうし・・・・・・一度王宮伯の令息を仕込んだのだが三日と持たなかったし。」
「うまくいかないものだ。三日も持たないって何をしたんだい?」
「財務官のだんな、王宮伯の餓鬼に個人授業をしたんですよ。最後には親も一緒に仕事教えてやるってしごいたら親子して壊れてしまって・・・・・・・」
「うわぁ・・・・・・・・・・・最近見ないと思ったら、そんなことに・・・・・・・」

「別に大したことはないだろう？貴族ならば普通にこなせないといけない事だ。」
「王室顧問の基準で考えるな。」
「今度貴族資質法として私並でないと爵位名乗れないようにするとか提案してみるかな？」
「やめろ！！貴族がいなくなる！！」

そんなこんなで馬鹿な話していると、騎馬公が来て姉弟を連行するし王妃様とその取り巻きたちが孤児娘達を担ぎ上げてしまうし・・・・・・・・残っているのは補佐見習と傷跡娘夫婦だけ
「・・・・・・夫婦／／／」
「まだ夫婦じゃない！！」
「・・・・・・・・・恋人同士？ラブラブを楽しみたいとか？」
「そんなんじゃねぇ！！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「だから、えっと・・・・・・・・・嫌いだからとかそんなんじゃなくて・・・・・・・・・・」

「えっと、其処のわんこ耳の小姓君。これ食える？」
「官僚の皆様方、いきなり捕まえて何を言うのですか！！こんなのは食いませんよ！それに僕はわんこではなくて狐系獣人なんですから！！」
ぷんすか言いながら小姓君は消えていった。

獣耳の世界も奥が深い・・・・・・・・

奥と言うよりも業だろうな（ｂｙ森林神）

そういう森林神は俺の配下は耳っ子が良いと獣耳種族をたくさん従属させたじゃないか！！（ｂｙ風の神）
貴様が羽っ子ラブといって鳥人とか翼人系を従属種族にしているのに言われたくないぞ（ｂｙ森林神）
まぁまぁ、二人（？）とも落ち着いて、どっちも業が深いだけなんだから争わない！！（ｂｙ漁業神）
人魚はべらせて悦に言っているお前だけには言われたくない！！（森林神&ａｍｐ；風の神）
で、王室顧問はどの属性かな？（ｂｙ大地神）

「うるせぇ！」

私は神秘緋金属張扇を振りぬくと、妙な感触と共に吹き飛ぶ音がする。
これで煩い神共を駆除できた。

「何やっているんだい王室顧問？」
「ただの素振りだよ素振り！！」
「いきなり張扇振り回しているから何かと思ったよ。」
「はは・・・・」

まさか神を打ちのめしているとは思うまい・・・・・・・・・・・

「「此処で神気がぶちのめされる波動を感知しましたが！！」」
げっ！王宮付き祭司！！
「何か王室顧問が素振りしていたが」
「張扇振り回しているだけで神様をぶちのめせる事ないでしょうに・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・神託が降りた。王室顧問が我等を殴り

飛ばしたと・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・神秘緋（オリハリセン）金属張扇は演芸神の加護を受け神器となる・・・・・・・・・・・」
「微妙に祭司になきついているだけの気がするが・・・・・・・・・・・・」
「だまりなさい！！　そもそも神と言うのは・・・・・・・・・・・・・・・（説教が続く」

なぜか私は祭司から説教を受ける羽目となる・・・・・・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・獣耳と言うものはですね、神が与えられた恩寵であり萌えであり希望でもあるのですよ・・・・・・・・・・・・・・・・（略」
何か話しているうちに萌え属性の話に脱線しているし・・・・・・・・・・・・聞き流しても聞き流してもうざったいたらありゃしない！！
そこで私は神秘緋（オリハリセン）金属張扇を下からすくい上げるようにぶちかますと祭司殿は星となった。

きらっ！
「貴様は獣耳を語りたいだけだろう！！少し黙れ！！」
「どうして宗教関係者は変人ばかりなのであろうか？」
「そりゃ、神は変人を好むからであろう。」

うわぁ、私変人じゃないのに
さいですか？（ｂｙ演芸神）

王室顧問とくだけた一日（後書き）

何がくだけたのだろうか？　作者もよくわからん。

天幕と孤児弟（前書き）

あらすじ　日々平穏なり、但し変人多くして神討ち果たされる。

注）あらすじに意味はありません。

可愛そうな補佐見習は孤児娘達の仕事を一身に受け持ちへばっている。
お前等大人が子供に仕事押し付けるな!!

「そんなこと言ったって王室顧問お前は仕事していないだろう。」
「だって、私の仕事ではないし、その分の給料はもらってない。ただ働きで命を削るのは馬鹿らしい。」
「貴族だろう!!仕事しろ!」
「私は道楽貴族。花の年金生活者だよ!!これは陛下が認めてくださったことだ。」
「くっ!」

「旦那方・・・・・・・・・・・・もうゴールしても良いよね・・・・・・・・(ばたり」
完全に補佐見習は沈黙した。
傷跡娘もばてている・・・・・・・・・・・・・・・
「賢者様、疲れた・・・・・・・・・・・・・・・」

書類の山は片付いて後は数枚の決裁書にサインする程度なのだがこれは彼らに任せよう・・・・・・・・・・・・・・・
精も根も尽き果てた補佐見習夫妻を抱えて子供達を回収していく。

「・・・・・・・・・夫妻じゃない!」
「まだ戯言を言う元気があるのか。そんだけ元気あるならば歩け、重たいんだ!」
「ううっ・・・・・・・・・・」
傷跡娘とそのお付を従えて、孤児姉弟のところにでも行くとしよう。

「その表現もなんか酷い・・・・・・・・・・」「・・・・・・・・・・・・わくわく。」

騎馬公の室内天幕につく。

あいも変わらず室内に天幕を張るとは意味不明な光景である。しかも先月見たときとは別の模様だし。

「我等とて気分で衣替えをするさ。布はにおいが篭りやすいしな。」

「長老たる語り部よ。我が従者を帰してもらうぞ。」

「王室顧問よ、つれないではないか。この子達とは色々尽きぬ話があるのだ。一晩くらい貸してくれても良いではないか。」

「で、お前らはどうしたい？」

「おいらはもう少し此処にいたいかな？ねーちゃんはどうする？」

「いつでも遊びに行けますから御主人様に任せますわ。」

「まぁ、急ぐわけでもないからもう少し世話になるか。となると、この二匹もついでに頼む。仕事で精も根も尽きてへばっているから休ませてやってくれ。」

「うむ、我等荒野の民は客人を歓迎するぞ。ゆるりとするが良い、小さな恋人たちよ。」

「お世話になります。御老人。でも、俺達はまだ恋人じゃないのですが・・・・・・・・」

「むぅ・・・・・・・・・」

「おやおや、それは済まないね。この年寄りには初々しい恋人同士に見えたのだがな。くっくっくっ・・・・・」

語り部は女衆を呼び、我等のために乳酪茶を用意させ茶菓子を進める。

乳酪茶はやや塩気のある薄いスープといった風情で干し肉や雑穀を入れた雑炊風にして食べる事もある。

厳しい環境である荒野において茶であっても熱量を取らないと身体

が持たないからだ。
逆に甘い飲み物もある。これは羊乳を発酵させたものや乳酪を取った後に出る搾りかす（乳清）に蜂蜜を加えて飲むこともある。これはとても甘い・・・・・・・・・・
茶菓子は雑穀の粉を乳清で練って焼き付けたものだ。
仕上げにゴマを振りかけているのは香ばしさを出すためか？
傷跡娘は物珍しげに乳酪茶を舐めるように飲み茶菓子を齧る。知らない美味に顔を綻ばせる。
その様子を見ていた補佐見習は零れ落ちた笑みに一瞬見とれたが、すぐに頭を振ると茶を飲むのだがあまりの暑さに顔をしかめる。
ばればれだぞ補佐見習、おまえが傷跡娘の事を気にしていることを・・・・・・・

私は一座の主として荒野の作法に従い、四方に対して手礼をして持成し主である語り部に頭を垂れる。
「荒野の民の語り部に挨拶を天幕に招き入れられる事の幸いに感謝を祖霊の皆様方に幸いを」
返して語り部も寿ぐ
「我が天幕にようこそ客人よ。我が天幕のうちにあるときは我等が家族である。健やかに過ごされるがよい。」
「荒野の天幕に穏やかな風と涼やかな雨の恵みがあらんことを・・・・・　昼と夜が巡るとも羊が常に肥太らん事を。」
「この一座の者に我等が祖霊が祝福を与えられるよう乞う。祖霊よ、今日の出会いに感謝を。」

唖然とする子供達。
長々としたやり取り、それも異文化の挨拶を交わすところなぞ見るのは初めてなのだろう。
孤児院に荒野の騎馬戦士がいるのだが彼らはざっくばらんに会話しているし、格式ばった事所なんてほとんど見せないからなぁ・・・・

・・

「御主人様、今の挨拶は？」

子供達を代表して孤児姉が質問する。

「お前らも見たことがないのか？荒野の民の天幕に招かれたら挨拶をするのが当然だろう、彼らの天幕に招かれたときは持成し主と祖霊と一族に礼を言うのが作法だよ。覚えておくと良い、これでも略式なのだがな。」

「まぁまぁ、王都育ちの子供達に我等の作法なぞ求めないよ。知らない者にそれが出来ないからと礼儀知らずだというほど我等も傲慢ではないからね。まぁ、ゆっくりしていくが良い・・・・・・子供達よ。」

「「「「はい、お世話になります。」」」」

「王室顧問よ、お前にはこっちのほうが良かろう。」

語り部は騎馬戦士が持ってきた酒を玉の杯に注ぐと私に差し出す。

私は受け取ると自分の杯に酒を注ぐと杯を持ち上げる。私も荒野の作法どおりに一杯目の酒は杯を持ち上げた相手の杯を持った腕を絡ませて口につける。これはお互いの中に流れる世界が交差する事を意味する乾杯の作法である。つまり兄妹家族・・・・・・なんでもいいが天幕にいる間は同胞として扱われることを意味する。

王都の者から見れば異質だか私はこの無骨な民の中にある細やかな作法が気に入っている。此処までの作法を済ませれば後は無礼講でいけることも一つの理由だが（笑）

私は騎馬公の方々の助力に謝辞を述べ、その後の事を話す。語り部はその一つ一つを刻み込んでいる。そうして物語として荒野の歴史を残すのだろう。記録としてではなく物語として残す、多分孤児弟は凄腕のスリとして語られるだろうし補佐見習は弱き者の盾として伝えられるのだろう。私はどうなるかな？

「賢者の旦那は扇動者じゃないのか？王家に喧嘩を売って色々な者

を煽りまくったんだから。」
「ははははっ・・・・・・扇動者か。憂国の士といわれないだけ良いか。」
「ご主人様は憂国の志をお持ちで御座いましょう。」
「まさか！あの時は私憤で嫌がらせしただけだよ。お前達に情が移っているのは否定しないがな。」
「くっくっくっ・・・・・・・・・　王室顧問殿は始まりの人だよ。彼の叫びでどれだけの人が集まった。王国の建国話を見るようではないか・・・・・・・・・・」
「あれはやめてください、私も恥ずかしいですから・・・・・・・・・・・・まだ、私憤で扇動した糞野郎として語り継いで欲しい者です。」
「それをするとな結果は兎も角、扇動に乗せられた馬鹿になってしまうから断る！」

そっちの理由か・・・・・・・・・・
「結構、荒野の民も見栄とかあるんですねぇ・・・・・・・」
「黒髪の子供よ。そりゃ我等だって見栄もあるし欲もある。今回の事で王都の者からの好感度が上がったし、良い子供達が沢山手に入った。部族間での割り当てとかが大変だがそれだけの価値もあろう。」
「子供達はどうなるの？」
「我等の子供達と一緒に育てて騎馬戦士になるも良いし、羊飼いになるのも良い。荒野を巡る案内人や皮職人、鋳掛け屋だとか色々職はあるよ。進みたい道を進めば良いさ。」
「ふーん、世界が違ってもやることは一緒か・・・・・・・・・・・暇があったら兄妹分に会いに行くのも悪くないな。」
「いつでも向かえば良いさ。我等荒野の民の天幕はお前に対して開いておるからな。」
「感謝を語り部。」

「おやおや、黒髪の子供も我等の流儀に馴染みかけているようだな（苦笑）」

「持ってかないでくださいよ、私が不便になるから・・・・・・・・・・」

「金貨３０枚じゃダメか？」「せめて３００枚・・・・・・・・・・」

「牛が群れごと買えるではないか！！」「これでも安いくらいだ！！」

「語り部様に御主人様、孤児弟を売らないでください。」

「おやおや、それは失礼した・・・・・・・・・・」「５００ならば即売るのだがなぁ・・・・・・」

「そんな事言って、王妹殿下（へんたい）辺りが聞きつけたらどうするのです！本気で買いにかかりますよ！」

「うわぁ・・・・・・・・・・・・（ガクガクブルブル」

孤児弟の壊れた・・・・・・まぁ、そのうち回復するだろう・・・・・・・

「心配ない、黒髪の子供。我等の天幕にいる間は腐った女は入ってこない！」

「騎馬戦士さん・・・・・・・・・・・・」

「でも、女衆が腐っている可能性は？」

「流石に子供を襲う馬鹿はいないだろう・・・・・・・・・・　腐った女は風の神様が嫌っているからな。」

だって、馬族守護神との交合本とかありえないだろう。（ｂｙ風の神）

本当だ、我等は兄弟分としているがそんな関係ではない！作った奴を破門してやろうと思ったが、文芸神に止められた。（ｂｙ馬族守

護神）
いいじゃない！美しい男の友情・・・・・・・・・飛び散る汗、ぶつかり合う肉体、深まる感情・・・・・・・・・すばらしいわ！！
（ｂｙ文芸神）

其処か邪神！！いらんもの召喚しやがって！！此処であったが百年目！！くたばりやがれ！！
私は神秘緋金属張扇（オリハリセン）を構えて神気のする方角に向けて振りぬくと確かな手ごたえと共に名状しがたき者が吹き飛ぶ風を感じる・・・・・・

ひどいわーーーーーーーーーっ！！（ｂｙ文芸神）

いい仕事をした。
私は空になった玉杯に酒を注ぎ足すのであった。

見事だ（ｂｙ馬族神）
彼と彼の養い子達に祝福を授けよう（ｂｙ風の神）

私の中に力がみなぎるのが判る・・・・・・・

王室顧問よ、汝の息子達には風の悪戯（ぱんちら）に遭遇する確率を上げてやろう。娘達には風の悪戯（ぱんちら）から守られるよう加護を与えよう。汝には風で帽子（鬘含む）が飛ばされる事のない加護を与えよう（ｂｙ風の神）

うわぁ、微妙・・・・・・・・・
しかも禿げる前提か！
「ご主人様は頭の形が良いからはげても問題ないかと・・・・・・・・」

「まぁまぁ、王室顧問殿はげは絶倫の証じゃぞ。」

その後王宮付き祭司と文芸神殿から苦情が来たのだが無視無視・・・・・・

寮のほうに帰れない旨を伝えてもらって、ついでだから孤児娘達がいたらこっちに来させるかな？

天幕と孤児弟（後書き）

馬族守護神×風の神本　文芸神殿の女神官が作成したそうです。彼女は神ジャンルの第一人者として名を残すことになるのだが本編には関係ありません。

天幕と末王女（前書き）

あらすじ　突っ込みの神に愛されし王室顧問（元法務官）は邪なる文芸神を成敗した。見事だ王室顧問、がんばれ王室顧問。（ｂｙ馬族守護神）

注）このあらすじは馬賊守護神の主観に基づいています。

そして作者は酒が切れる前に書き上げる事ができるのか？今月の酒代がなくなったら更新が止まるぞ。

天幕と末王女

天幕にて過ごす事数刻、我等は其々思うままに過ごす。
私は馬族の戦士達と酒を酌み交わし、孤児弟や補佐見習は語り部に話をねだっている。孤児姉は女衆と刺繍である。
緩やかなときは過ぎていく・・・・・・・・・・・・

そうしているうちに孤児娘たちがこっちに向かってくるのが見える。
ひのふのみ・・・・・・・一匹小さいのがいるようだが何処かの貴族の娘でもまぎれてきたのかな?いや、あれは末王女か・・・・・・
孤児娘達と仲良くなって付いてきたのか、孤児弟にでも会いに来たのだろう。
ほらほら娘達挨拶は大事だよ。

「「「お世話になります。」」」
「世話になるぞ、語り部。汝等の天幕のぬくもりに感謝を常に柔き青草の絶えぬを祈る。」
「これはこれは可愛い娘さんたちよ。王室顧問はどれだけ幸いの種を独り占めすれば気が済むのやら。」
「ははははっ、語り部よ。可愛い私の娘達だ、荒野の戦士たちに手を出さぬよう釘刺しておいてくれ。手を出すならばどことは言わないが潰す!!」
「しばし見ない間に親馬鹿になったの。うちの若い衆を見繕って早く娶わせればそんな問題がなくなるぞ。」
「その手もあったか・・・・・で、私の眼鏡に合う者はいるのか?」
「こんな可愛らしい娘さんたちだ、うちの若い衆だって奮い立つでしょう。そこで立たなければ男じゃないから引っこ抜いてやれ。」

私達の会話に荒野の男衆は股間を抑えて後ずさる。語り部の言う事は軽い冗談だろう？

「いえ、顧問様。語り部は去勢の達人でありますから我等のブツも手際よく処理するでしょう・・・・・（ガクブル」

「まぁ、其処の末王女だったら幾らでも手を出して良いから・・・・・・・・・・・」

「王室顧問よ、私の事はいい加減だな。」

「誰も手を出さないでしょう、王妹殿下（ヤオイ姫）の姪っ子なんて・・・・・・・・・」

「ぐはっ！！」

「賢者様それは酷い！！いくら王室兄妹（こどものてき）の流れを汲んでいるからってそんな事言ったら小さな子供だし傷つくんじゃないの！！」「そうよそうよ、親族にアレがいるからって王女様までそうとは限らないじゃない・・・・・」「一番嫌がっているのは王女様なんだから・・・・・・事実を突きつけるのって残酷なんではないのかしら！」

「げふっ・・・・・・・・・・・・・・」

孤児娘達、お前等えげつないねぇ・・・・・・末王女が崩れ落ちてしまったぞ・・・・・・・・・

「「「うわぁぁぁぁぁあ！！！！！！末王女さまぁぁぁぁ！！」」」「どうするどうする、私達下手したら処刑よ・・・・・・・」「処刑の前に王兄殿下（ロリコン）の餌食になるんだわ・・・・・・・・・・・うわぁぁん」「拷問だわ拷問、一族郎党殲滅とか・・・・・・・・・・・・・賢者様ご実家の私兵団を動員して今のうちに王族全ての首を・・・・・・」「こういうときは王子様のキスとかが良いと思うな。特に孤児弟の口付けなんか・・・・・・・・・」

騙されるな娘達、末王女はそんくらいではへこたれない。図太い玉なんだから・・・・・・
その証拠にどさくさにまぎれて自分の要求を伝えているではないか!!!

「そうよ、王子様のキスか!!」「王子様といえば王太子殿下とか王兄殿下、王弟殿下は今地方にいらっしゃるから・・・・・・」「後は魔王国のナメクジ系の魔王子様とか紫イボイボガエル系の魔王子様、西騎士連合王国の王子様（４６歳小太り独身）もいた気がするけど・・・・・・」

「まてまてまてまてまてぇい!!何が悲しくて、実の家族やらロリコンやらナメクジに蛇にかえるの三すくみやら中年のデブを相手にキスしなくてはならないんだ!」

「末王女様、その発言は国際問題・・・・・・・・・うちの国は特に人種問題に煩いし・・・・・・」

「黙れ!!わたしにも好みとかあるだろう!せめてはじめて位は好みのタイプとしたいではないか!!」

「餓鬼じゃあるまいし、夢見ているんじゃないと思うのですがね。」

「まだ１０歳だ!!そんな話が流れてみろ。本気で輿入れとかなったらへこむぞ。」

「大丈夫、輿入れ道具にうちの賢者様を侍従としてつければ誰もよってこないですから。」

「うぉい!私は虫除けか?ああっん!!」

「はいはい、末王女様の血縁関係の酷さは世界中誰もが知っていることだから今更蒸し返すこともないでしょう。」

語り部、お前が一番酷い・・・・・・・・

そんなこんなで夕食が持ち込まれて皆で食べることとなる。

天幕は長と給仕役の席は決まっているのだがほかは適当に車座となって座るのである。椅子などないから座布団に胡坐などをかいて座るのだがなれないとねぇ・・・・・・ほら末王女がパンツ見えているし・・・・・・

「末王女様足の位置にお気をつけくださいませ・・・・・・・・・・

孤児弟にアピールするのは宜しいのですが時と場所を考えませんと・・・・・・・・・・・・・」

「うわぁ／／／」

これが風の神の加護か・・・・・・・・・

まぁ、孤児弟は気にする様子もなく食べ物に集中している。子供の下着姿なんて見慣れているから気にもしないのだろう・・・・・・

「それはそれで嫌なんじゃが・・・・・・・・・・・むぅ・・・・・・・」

「はいはい、王女様。地べたに座るのが苦手なようですからおいらのひざの上にでもどうぞ。」

「ウ、うむ・・・・・・・・・・／／／」

「アレは幼い妹とかを世話するかんじの延長ですわね。」「その鈍感力は侮りがたし。」「俺もあそこまでは出来ないな。」「・・・・・・・・・・・あたしもしてみたいけど恥ずかしい・・・・・・・」

「・・・・・・・・・だな。」

「このまま定位置になりそうですわね。」「いえてる。」

そんなこんなで食事となる。

あいも変わらず羊のぶつ切りの茹でた奴につけるタレが数種、具入りの団子に乳酪茶の雑炊、果物がある。荒野の民は果物食べないのではなかったか？

「単純に手に入り辛いから季節でもなければ食べないだけですよ。携帯食には干した果物もありますし・・・・」

この場の長である語り部が塩を風に乗せてから食事の開始となる。

孤児弟は末王女に座られている関係上片手しか自由にならないし羊を手掴みで食べる分には問題ないが雑炊とか団子とか取りにもいけない・・・・・・・・・・そこは孤児姉が旨く補助してくれているのだが不便そうだ。

末王女は孤児弟から食べさせてもらったり好き勝手に動いている・・・・・・・・・・子供だしなぁ・・・・・・

だんだん足もしびれてきているのが見て取れる。まぁ、がんばれ。

自分で言い出したんだ、我慢するにしろ投げ出すにしろ自分でやっておかないと・・・・・・・・・・

暫くたって、食べ終わる。孤児弟は何とか耐え切ったようである。

男だな・・・・

そして、だらだらと話が続くのであるが流石に夜も遅いからと末王女は侍従官に連れられて寝室へと向かうのであった。

名残惜しそうなのであるが自分の寝床が近くにあるのならば其処で寝るのが一番だ。

我々も床につくとしますかね。話があるのならば明日もまた語らえばよいのだし・・・・・・・・・・

天幕と末王女（後書き）

酒が切れた

天幕と傷跡娘（前書き）

あらすじ　ただ天幕にてだらけた行いをする王室顧問一行。

作者は一升しか飲んでないので筆が進まない。

天幕と傷跡娘

夜も深けて月は中天を越えている。
語らいも酒盛りも下火になる。

天幕の中は酔い臥した戦士達がごろごろと転がっており、我等も眠気と戦いながら荒野の民と語らうのである。
荒野の民にとって子供を飢えさせる行為が許しがたく、孤児院にて雑草の混じった腐りかけの麺麭で生き延びる事ができたという語りは強面な戦士達でさえ涙を誘うものであった・・・・・・・・・・・・・・・
孤児院の管理者である貴族に対して個人的に戦を挑もうとする馬鹿が多い。その家は廃絶して庶子を一人残すのみ。彼でさえ家から捨てられた者だから意味がないと言葉を尽くして復讐を諦めさせることができる。

馬鹿共が・・・・・・・・・・・・・・・
御伽噺の時代のまま取り残されて、弱い子供に対して大人の義務だと保護を行おうとする時代遅れの蛮族達は見捨てられた子供に対して本気で怒りをかんじている。
愛しき大馬鹿者達よ、我等の憤りを次代に残すような真似は止めておくれ。

そして彼らの怒りは傷跡娘の顔にまで及ぶ。
彼女が傷を得た原因は母親が残された娘に無体に花を散らされることがないようにワザと傷を残して見向きもされないようにと泣きながら傷をつけていた話を本人から聞く。そのお陰で奴隷として価値もつかず、今私と補佐見習に見出されたと淡々と語る語りに荒野の民達は戦う者戦わぬ者問わずに怒り憤る。

その奴隷商人は芋虫にされて見世物となっている。母親は大地に帰り、最後まで幸いをと祈り続けていた・・・・・・・・・・・

傷跡娘は自分だけ幸せになれて申し訳ないと語るに至っては我が行いに乗せられた戦士達にどうしてその他も救えなかったのとか詰る女衆の姿を見受けられる。

私が済まないと謝ると、女衆も悔し涙を滲ませながら私を詰るのである。

そうして、彼女を馬鹿にした貴族に対して怒りをあらわにした補佐見習に賞賛を送る。

例え力及ばずとも理不尽に対して叫びを上げる彼は敬意に値するのであろう。

そして、その後の仕事ぶりの理由として彼を育てるために命を削り苦界に身を落とした母親を誇りたいと言い切った事に荒野の民の涙は海を作るかの如く流されているのだ・・・・・・・・

人前で泣く事を潔しとせぬ戦士達でさえ口に布をくわえ泣き声を聞かせぬとしながらも眼を濡らしている。

彼等は涙脆い民族だ。本気の叫びに対して涙を流し助力を申し出るお人好しの集団だ。今だ命ある糞貴族に対して個人としての義憤の誓いを立てる者も居る。それに対して立ち上がった愚かな小間物屋の拳にさえ敬意を表するのである。

私は感謝を送りたい。このお人好しの大馬鹿者達を・・・・・・・

そして夜も深け子供達を眠らせる時間になる。

語り部は子供には眠りと闇の帳が必要だと床に就かせる。

傷跡娘と補佐見習は同じ天幕の下だ。

室内天幕の中で更に小さな天幕を作られる。男部屋と女部屋である。

眠りに際して夜這い等々あるのは宜しくないとする族長の意向であろうか？そのほかに夫婦部屋として小さな天幕が張られるのである。

傷跡娘と補佐見習は其処に押し込まれる。荒野の民にとって補佐見習は小さな傷跡娘を任せるに値する若者と判断されたのだろう・・・・・・・・・・・

眠れぬ夜を過ごしそうだな補佐見習。手を出したら本気で殴るぞ！

そんな中荒野の民は賭け事をする。
この二人が出来ているかどうかと・・・・・・・・・・・・
男も女も語り部も孤児娘達も乗っている・・・・・・・・・・・・・・

忘れていた、荒野の民は賭け事が好きな道楽者である事を・・・・・・・・・・・

天幕と傷跡娘（後書き）

手を出したのか出さないのか如何やって決めるかね？
メッセで早く来た者に従うかコイントスか？

天幕と補佐見習（前書き）

あらすじ　荒野の民の天幕にて一夜を過ごす王室顧問一行、夜はお楽しみ☆　補佐見習のドキドキタイムだぞ☆　ちなみにワシは補佐見習は手を出さないほうに賭けている。（ｂｙ厨房神）

俺は手を出して抜かず三発（ｂｙ照明神）

・・・・・・・・・・（以下神々が賭けをしていて収集不能。）

寺銭位払えよな。

天幕と補佐見習

夜が明けて暁星が夜空を駆ける頃、荒野の民は祈りの声を響かせる。
大地と風と数多の命に感謝を捧げる古い古い祷りの唱を

遠く星辰の彼方に消えていく魂を思い、大地に融けていった身体を思い、風に流された詩を思う。
彼らの世界では命は魂と身体と詩で成り立っていると考えられている。

私達も祷りの声に目を覚ますが祈りの時間を邪魔しないように静かにただずむ。
娘達は孤児院でも聞いている馴染みの深い唄を邪魔しないように目をつぶっている。

祈りはすぐに終わる。
竈番を除いて我等は補佐見習夫妻の天幕を覗く。もちろん出来ているかいないか賭けの結果を知るためである。
「どれどれ、私達の可愛い傷跡娘が無事補佐見習を手にいれることが出来たか見てみますか・・・・・・・・・」
「手を出しているんじゃないぞ・・・・・・・・　なけなしの銀貨一枚が・・・・・」
「大丈夫ですわ、傷跡娘が襲っているはずだから。」「いや、補佐見習が若さと性欲をもてあましているから・・・」

天幕の中は身支度を整えた二人がいた。
情事の香りがないところを見ると何もなかったようだ・・・・・・

悲喜交々の声が上がり続ける!!

「お前等いい加減にしろよな!!いくら俺でもこの状況で傷跡娘を抱けないだろう。」

「二人きりなら抱くのか?」「うっ!」

「・・・・・・・・・・ぬくもりは暖かかった、手のひらは優しくなでてくれた、胸はどきどきしていた・・・・・・・」

「ごくっ!」

「彼は重たかった・・・・・・・・・・・・・・そして痛かった・・・・・・・」

「えっ!!ちょ、俺は無実だ!!」

「それからそれから?」

「こらっ!傷跡娘!なにを・・・・・・・・・むごごっ!!」

「・・・・・・・・・でも、うれしかった・・・・・・・何度もあたしの名前を呼んでくれた・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・で、やったの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・腕枕して貰ってあいた手で頭をなでて貰って、寝ぼけて蹴られて覆いかぶさられただけ。」

「でも、名前何度も呼ぶって?」

「それは、けられて目が覚めた私を案じて大丈夫かと何度も呼びかけてくれた。彼はいつも私を見てくれている。それが嬉しい・・・・・・・・」

「けっ!」「ちっ!」

結局はダメだったと・・・・・・・・・

「で、補佐見習。君は耐え切ったようだが、口付位はしたのだろうな?」

「・・・・・・・・・・・・・・・／／／」
「・・・・・・・・・・・・・・・してほしかった／／／」
真っ赤になる二人。したのかしてないのかは判らないが想像したらしい。初心な奴等だ。
多分していないのだろう。

ほらほら、負けた諸君は私に払うが良いぞ！
うははははっ！今朝は儲けたぞ！！

「・・・・・・・・・・・・賢者様、私達だしに賭けしてたの？」
「有体言えばそうなる。荒野の民の大半は君達が出来て盛っている事を期待していたようだがな。」
「・・・・・・・・・・・・／／／」
「賢者様よ、勿論俺たちに払うもんがあるよな？」
「なにをかね？」
「そりゃ、俺たちで儲けたんだから礼くらいあっても良いだろ？言葉じゃなくて銀貨でよろしく。」
「仕方ないなぁ・・・・・・・・ほれ！」
「まいどあり！傷跡娘、臨時収入だ！夜にでも旨いもの食べようぜ！！」
「・・・・・・・・（こくり」
「なにがたべたい？」
「・・・・・・・・・・・・補佐見習が食べたい者ならば何でも・・・・・」
「そっか、前に行った酒場なんて如何だ？」
「・・・・・・・・（こくり」

「この後の展開としては食後に傷跡娘を味わいたいとか・・・・・・・」
「暑くて見てらんないね。」「誰か氷系の魔法使えるものいなかっ

たかしら?」
「呪い師は孤児院のほうだしなぁ・・・・・」
「宮廷魔術師を呼んでくる?」「それよりも人外公の所から雪女借りてくるとか?」
「「ああ、あついあつい!!」」
荒野の民も孤児娘達も手をパタパタして暑い暑いと意思表示している。
お前等露骨過ぎるぞ。

うむ、信じていたぞ。好きな子だからって安易に手を出さない紳士だと(ｂｙ馬族守護神)
ちっ!へたれが!(ｂｙ照明神)
傷跡娘のほうが襲ってくるかと思っていたのに・・・・・(ｂｙ岩石神)
だから言ったでしょ、この子達は初心なんだからのんびりすすめるのよって(ｂｙ河川神)
折角、身体の相性良くなるように祝福したのになぁ・・・・・(性愛神)
だめよ、補佐見習は孤児弟と・・・・(ｂｙ文芸神)
違うわ!補佐見習は法務副長とでしょ!(ｂｙ芸術神)
どうしてお前等腐った発言しか出来ないのだ?(ｂｙ発酵神)
いつも腐っている貴方に言われたくないわ!!(ｂｙ文芸神＆ａｍｐ;芸術神)
・・・・・・・・・・・・以下神々の雑談。

補佐見習はからかい続ける我々に対して怒りを感じたらしく、大天幕の隅においてある神秘緋金属張扇(オリハリセン)を掴むと縦横無尽に駆け回り張扇を叩きつけまくる!
「おまえらっ!!ごちゃごちゃ煩いんだよ!!折角の二人きりの夜

を邪魔するんじゃねぇぇぇぇぇ！！！」

背後から怒りの特殊効果【雷光乱舞】を纏わせながら。すくい上げるように叩き込む。

吹き飛ぶ我々・・・・・・・なんか、肉体を持つ者以外の気配も飛ばされているのだが・・・・・・・・・

天井にたたきつけられたり壁の染みになってペラペラとなる者、かまどの頭を突っ込んだ者なぞ悲惨だった。起き上がったときには髪の毛が縮れて陰毛の如く、髪形が丸くなっていたのだから・・・・・・・（どうせすぐに戻るけど）

肩で息をしている補佐見習！！まぁまぁと押さえにかかる傷跡娘。

天幕の中は混沌としている・・・・・・・・・・

寵に突っ込んだ者がいるために朝飯はなくなってしまった・・・・・・・

王宮の食堂に行くか・・・・・・・・・　荒野の民を引き連れて食堂に出陣するのであった。

朝飯から戻るとなぜか王宮つき祭司がいて、神秘緋金属張扇（オリハリセン）で神を殴るなと苦情が来たがだれかしらない？

「それ俺かも、さっき張扇振り回していたとき名状しがたい感触がしたから・・・・・・・・・・・」

まぁいいか、神様丈夫だし。

それでも非常に痛いんです（ｂｙ通りすがりの神）

天幕と補佐見習（後書き）

神様は暇人なのだろうか？

酒が切れたから今宵はこれまで。

張扇と神々（前書き）

あらすじ　物語が色々生まれてきているのだけど語り手が途切れさせた物語はどうなるのだろうか？そのまま時間が閉じられたままになるのだろうか？それとも、語り手と言う観測者がないままに進められていくのだろうか？願わくば物語と言う世界が生まれたまま放り出されて朽ち果てませんように・・・・・・・・・・（ｂｙ文芸神）

あらすじと関係ないではないか！しゃしゃり出てクンナ腐れ神！！

張扇と神々

どうも最近、神殿から苦情が多く寄せられている。
神秘緋金属張扇（オリハリセン）が演芸神の加護で神器と化してから突っ込みついでに神まで誤爆する事が多いのだ！
その場にうろちょろしているのが悪いのだ！！
特に文芸神とか芸術神とか演芸神とか・・・・・・・・・・

うそだ！！（ｂｙ文ゲイ神・・・・もとい、文芸神）
思い切り狙って打ち込んでいたよなぁ・・・・（ｂｙ森林神）
このままでは２４６７８人目の神殺しが生まれてしまう（ｂｙ農業神）
ところで、文芸神とか芸術神と同列に並べられるのはとても不本意なんだが（ｂｙ演芸神）
それはこっちもいいたいことですわ！（ｂｙ芸術神）

そもそもなんで神が其処にいるのかということを問いたいわけで・・・・そこを神職の者に聞いてみると
「神と言う者は世界の構成要素として存在しており、神気を介して顕現されるものと認識されている。世界は神気に満ちているので何れの神もどこであろうと顕現出来るのである。まぁ、神々には其々の領域があり領域外での顕現はあまり見られない・・・・・・・・・・」
「どう考えても領域外で神気を介した意思を感じるのは気のせいだろうか？」
「単純に神々は好奇心の赴くままに顕現されますからねぇ・・・・・

・領域の外では確率が格段に下がるだけで顕現されないわけではないですからねぇ・・・・・・」

「要は出歯亀？」

「そういわれると身も蓋もないのですが・・・・・・・・・」

「となると神避けの結界は・・・・・・・・・・世界を否定していると同義だからすぐに決壊すると・・・・・・・・・」

や○だくーん、ざぶとんいちまい！！（ｂｙ演芸神）

出てけ！！（ごすっ！

○風師匠なんて読者にはわからないよ・・・・・・・・・・・（ｂｙ演芸神）

しつこい！（ごげしっ！！

本当しつこいなぁ・・・・・一匹見かけたら三十はいると思ったほうが良いのか？

酷いなぁ・・・・・まるで我々がゴ○ブリみたいではないか（油虫神）

「・・・・・・・・・・・えっと、神職。極端に神々が集まる状況をどうにかしたいのだが・・・・・・」

「しかし、よく神気を辿れますねぇ？って、言うかさっきのは神々の気配だと思うのですが・・・・・・」
「どうでも良いでしょう演芸神くらい。こんだけ神の気配に接していると気がついてしまうのですよ・・・・・お陰で、うちの子供達も神気に対して感覚が鋭くなる始末で・・・・・・・・孤児院では神の一柱を幼子達が追い掛け回していましたよ。」

アレは悲惨だった。無邪気で加減の知らない子供達に追い回されて、捕まったら触りまくるはシャブルはで気がついたらボロボロになっていた神様を見たときは思わず同情してしまったものだ。

きつかったよぉ・・・・・・・　まさか、天罰下すなんて大人気ないこと出来ないし・・・・・・・（たまたまその場にいた暗黒神）

「・・・・・・・・・・・・えっと、子供達を神殿に預けませんか？いい祭司になると思うのですが・・・・・・・」
「自分を冷やかしていた神々に神秘緋金属張扇（オリハリセン）でドツキまくる者をですか？」
「大丈夫です。うちの神殿には馬族神×風神本を綴ったツワモノがいますから。」
「馬族神と風神の涙が感じられそうな本ですなって！言うか！御神体をそんなことしたらダメでしょうが！！」

思わず手に取った神秘緋金属張扇（オリハリセン）で神職を殴り飛ばしてしまった！ついカッとなってやっ・・・・・・（略

「反省してください！！」
ちっ！復活しやがったか。
「これは反省すべきところなんだろうか？否、人として間違っては

いないはずだ！」

間違いではないぞ（ｂｙ馬族守護神他）

言論統制よ！言葉を力で封じ込める悪しき行動よ！！（ｂｙ芸術神）

以下喧々囂々・・・・

「で、この状況はどうしたらよいのでしょうかね？神職・・・・・・」

「うーん、神職の者としては羨ましい限りではありますが一度神殿で説法してもらえますか？」

「私にできるのは王室に対する扇動演説くらいですよ。それでよければ・・・・・・」

「・・・・・・それは勘弁してください。」

よい判断だ神職！そんな事されたら私の領域がしっちゃかめっちゃかになる。（ｂｙ某王国地方担当神）

それをうまく立ち回って王国を手に入れるのも・・・・・・・・（ｂｙ聖徒王国地方担当神）

少しもぎ取ってやるのも良かろうな（ｂｙ魔王国担当神）

・・・・・・・・・いいのか？王室顧問が解き放たれるぞ！お前らのところに亡命させるぞ！！（ｂｙ某王国地方担当神）

ひぃぃぃっ！！（ｂｙ他の地方担当神達）

「って、言うか王室顧問何をなさったので？」

「前に奴隷商人を捕まえたとき、神殿経由で神々と信徒達への公開質問状を送っただけですが。【神は奴隷を認めているのか？】と」

「ああ、あの時の・・・・・・・・・神殿内部どころか聖徒王国やその周辺国が宗教論争でごたごたした件ですか・・・・・・・・・あれは悪夢だった。聖典を紐解いてあーでもないこーでもないと論争しまくって違いからの殺傷事件が後絶たないし・・・・・・・・

・・・・奴隷商人の焼き討ちや奴隷達の反乱も出てくるし・・・・・・・・・・・・其処から戦争寸前まで行くし・・・・・・・・・・・あれはもう一度やったら破門じゃなくて神の審判にゆだねますよ。」

「で、あの話はどうなったの？」

「奴隷の存在は認めるが所有は望ましくない。とあいまいな神託でごまかしてましたよ。」

「今度は神々の正義はどこなのか質問してみるか・・・・・・・・・・」

「やめてーーーー！！」

神職の絶叫は王城内に響いたという・・・・・・・・

張扇と神々（後書き）

油虫神　ねえ？俺って放置？
突っ込みもなしなの？

さみしい・・・・・・・・・・（がさごそ

張扇と王妃（前書き）

あらすじ　特にない。

張扇と王妃

あいも変わらず、王妃による孤児娘略奪が横行しているようだ。

あの若作り外面だけは良い物だから孤児娘達もホイホイ付いて行ってしまう。

御蔭で官僚達の仕事が滞る滞る、泣きついてくる先が私というのは間違っている気がする。

宰相閣下とか国王陛下に泣き付きなさい。

白い山脈が雪崩落ちそうな官僚部屋に缶詰にされている官僚達を横目に王妃執務室に向かうことにする。

「てつだってけぇ！王室顧問！！」

「後で酒を奢るからさぁ・・・・・・・・・・・・・・。」

「賢者の旦那・・・・・・どうして俺達だけ残されるんだい？」

「補佐見習は趣味じゃないらしい、まぁ、行った所で居心地悪いだろうがな。」

「納得だが、どうして傷跡娘を連れて行かないのだろう？」

「素材の生かし方がわからない駄目王族だからねぇ・・・・・それ以前に傷跡娘は離れたくないそうだし・・・・・くっくっくっ・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・どうせ着飾ったって、見てくれる人なんていないから仕事したほうがよい。」

「そんなことはない！」

「でも・・・・・・・　傷跡のせいで・・・・・・・」

「馬鹿言うな！！少なくとも俺が見ている。」

「だったら、見てくれる人のそばがいい・・・・・・・・・あたしを見出した人は補佐見習いだけなんだから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫！お前の母親だってお前が可愛いから傷をつけたんだろうし・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「まぁ、他の奴等に見初められるのは俺が気に食わないんだけど（ぼそっ」
「・・・・・・・・・・・・・・・なんか言った？」
「いや、なんでもない！　早く書類の山を片付けようぜ！」
「・・・・・・・・・・・・・・うん（こくり」

うぉぉい！　この二人は書類を衝立代わりにして何二人の世界を作っているんですかぁ？
もしもーし・・・・・・・・・・・・・・
という、我々の呆れた視線をよそに書類を黙々と片付けている。

「作業速度は孤児娘達と一線を画しておる。この二人だけ昇給すること出来るかな？」
「財務官、それは大丈夫だろう。孤児娘達は仕事量に応じたにすると言えばいいのだし。単純な時間単位でもこなしているからそれに紛れ込ませればよいではないか。」
「それもそうか・・・・・・・・・・・・　ついでだから王妃様に連れ去られた日の日当は王妃化粧費（こじんてきししゅつ）から出してもらうか。」
「そうだな、そんな話を陛下とも話した覚えがあるが・・・・・・・・・」
「ついでだからその案件を次の御前会議で提出したらどうかね？」
「提出したが、うちでも金を払うから寄越してくれという貴族が多数いて・・・・・・・・・孤児娘達の引き抜き合戦になって有耶無耶になってしまった。」
「・・・・・・・・・・・・・・・有能な経理担当は何処でも欲しいのか・・・・・・・・・・・・・・後でその貴族の事を教えてくれ。孤児

院の子供達をもう少し鍛えてから紹介状を書くとしよう。」
「その子供達こっちで研修させないか？」
「魂胆が丸判りだぞ！財務官（邪笑」
「・・・・・・・・・・・でも、損はないはずだが（毒笑」
「そうだな、孤児娘達より小さな子供達になるから王族兄妹（ロリショタ）よけになんか対策してくれ。」
「判った・・・・・・・・・・・」

白い衝立の中握手をする二人。お互いに悪い笑みを浮かべて人身売買計画をしているのだが止めるものは誰もいなかった・・・・・・・・・・

「ご主人様？めぼしいのは商会公様に引き抜かれてますけど？」
「何、大丈夫だ！孤児院にいるのは孤児だけじゃなくて平民の子息達もいっぱいいるのだし、彼らの中でも使えそうなのを引き抜けばよい！！」
「ついでですから貴族の冷や飯食い達も一緒に鍛えられたらいかがですか？」
「孤児姉も言うねぇ・・・・・・・それについては、誰か見繕ってもらうか。」
「良いぞ、王室顧問。取敢えず財務官の子息など最初に鍛えてみるか？」
「王城管理官、考えていることはわかるが漏れなく彼の取り巻き（りあじゅうはしね）が付いてくるぞ。只でさえ補佐見習夫妻（ラブラブカップル）が暑苦しいのにこれ以上暑苦しくしてどうする。」
「うっ！」
「まぁ、貴族も寄越してくれれば鍛えるからその辺はよろしく。」
「あい判った！」「うむ」「諾」「・・・・・・・・・・あの家の次男坊がいたなぁ・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・進まない原因って、この雑談のせい？」
「それはないと思うが、人を入れる相談だし・・・・・・・・・・・・・・・
それよりも宰相府へのタタミイワシ攻防戦とか王妃様への突撃とか
があるんじゃないの？」
「・・・・・・・・・・・・・・どっちにしても仕事して欲しい。終わ
らない。」
「だな・・・・・・・・・・・・　これ終わったらしばらくゆっくり過
ごすんだ・・・・・・・・・・・　まだ、期間奉公だからそのくらい融
通が利くだろうし・・・・・・・・・」
「それはどうかな？補佐見習よ。君が居ないとここは成り立たない
んだ！ほらキリキリ働けぇ！！」
「うわぁぁぁぁ！！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・むごい・・・・・・・・・・・・・」

どさっと置かれる白い山。書類は自己増殖するという説は本当だっ
たのか。
げんなりとした補佐見習を背に王妃執務室へと向かうのであった。
「お土産は孤児娘達でいいからなぁ・・・・・・・・！」

民部官、お前には小間物屋（したばたらき）が居ただろう！
「奴ならば腎虚で休暇中だ！」
「で、家で休んでいると・・・・・・・・・」
「そうだが・・・・・・・・・・・・・あ！」
民部官にも私の言わんとしている事を理解したようだ。今となって
は遅いけど・・・・・・・・
小間物屋が回復する日は遠そうだ。

歩くこと暫し、王妃執務室に着いた我々は孤児娘達の様子を見に行

く。

「失礼いたしますよ王妃様。」

混乱を極めている官僚部屋と違い、常に侍女達に整えられている執務室は片隅には花が飾られて茶と茶菓子を専門の給仕に用意させて本当に仕事しているのかと思える状態である。

ちなみに国王執務室は官僚部屋より掃除が行き届いている程度なのだがそれほど仕事がたまっていない。我々優秀な官僚達がサインだけで済む状態までお膳立てするからなんだが、それでもサイン量が多くて腱鞘炎にかかったとぼやいている。サイン偽造の名人用意すればよいのに・・・・・・・・

「だんな、それは問題だから・・・・・・・・・」

「どうせ、サインだけだから責任者としての首とサイン書く腕だけあれば国王なんて誰でもいいのだから・・・・・・・・・・」

「王室顧問、いきなり人の部屋に来て危険な会話しないでもらえます？」

「これはこれはご機嫌麗しゅう・・・・・・・・　王妃様、官僚達が泣いてますので孤児娘達を返してもらえますか？」

「嫌よ！こんな可愛い子達をむさ苦しい狼共の巣に置いておくなんて酷い事出来ないわ！」

「むさ苦しくて非衛生的な動く死体もどきなのは否定しませんが、王妃様の処にも日にち決めて寄越しているじゃないですか、それじゃ仕事が成り立たないのですか？」

「だって、貴族の娘達は頭の中がクリームしか詰まっていない会話しかしないし仕事も出来ないじゃない。もう着飾っているから楽しみが薄いし・・・・・・・」

どう考えても最後のが本音だな・・・・・・・・・

孤児娘達を見てみると針子や侍女達に囲まれて弄繰り回された後ら

しく、着飾らされて良い所のお嬢さんっぽくなっている。
「賢者様、あそびにきたんですか?」
「いや、官僚達が仕事溜まっていると泣付いてきてなぁ・・・・・・・・戻るぞ。」
「まだ、王妃様の仕事も終わっていないんですけど・・・・・・・・・・」
「今日は契約外なんだが・・・・・・・・・・・・・・　って、終わってない?」
「そうなんですよ、書類ためる部屋があって、そこから一山づつ持ってくるんですよねぇ・・・・・・・・・・」

へぇ・・・・・・・・・隣にあるという書類置き場を見て絶句する・・・・・・・・・
な、なんじゃぁこりゃーーーーーーー!!!

私は腹を押さえて倒れこむ。

書類が山積みになっているのだが、順番がめちゃくちゃだわ黄ばんだ書類があるわ・・・・・・・・・・・・・・
なにやっとるんだ!この王妃は!!
王妃付事務官だっていたはずだぞ!
「えっと、王妃様?　この書類の山はいかがしたんですか?」
「私が謹慎中に溜まったものとかその後に雪崩れ込んだ物とか・・・・・・・・・・・・・」
「それで、事務官が居たはずですが・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・てへっ（照」
「てへっ!じゃない!!　どうしたんだ事務官は!!」
「・・・・・・・・・・・・・・・王妃様に成り代り説明いたしますと事務官長様は仕事押し付けられた事に切れてしまい王妃様に対して思い切り罵倒した挙句に辞職届を出して故郷に帰られました・・・・・・

・・・・・」

女官の説明に王妃付事務官長の事を思い出す。落ち着いた中年で大抵の事では怒らない温厚な男だったはずだが・・・・・・・・・その実直で温厚な働き振りから態々宰相府から引き抜かれた人材を・・・・・・・・・彼を怒らせるなんてどれだけ酷いことをしたんだ!!

「他の事務官は?」

「そ、それが事務官長様が切れられた時に無礼打ちしようとした護衛官様を止めようと・・・・・・・・・そこの壁のしみが・・・・・・・・・」

え、えっと・・・・・・・・・・・・壁に人型のしみがあるがもしや・・・・・・・・・

「一応、命は取り留めておりますけど・・・・・・・・・・・・暫くは復帰できない状況で・・・・・・・・・・・・報告が行ってなかったでしょうか?」

女官の説明に私は王妃に対して視線を送る。王妃は視線をそらす・・・・・・・

「王妃様、何か言うことは?」

「つい、かっとなって・・・・・・・・・・・・今は反省していますわ。・・・・・・・・・・・・てへっ(照」

ふつんと言う音がした。

「孤児姉。」

「はい、ご主人様。」

孤児姉から渡された神秘緋金属張扇(オリハリセン)を手に王妃へと襲い掛かる!!

「何、人手不足を加速させているんじゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

上段からの打ち下ろしに王妃は何処に隠し持っていたのか神秘緋金属張扇（オリハリセン）を打ち上げるように迎え撃つ。

王妃の張扇に威力を受け流され私の張扇が王妃の脇へと空を切るのだがその隙を狙って王妃の一撃が右袈裟に襲い掛かる。半身をずらしてその一撃をかわすとかわした捻りを生かして胴打ちを狙う。

王妃も然る者、返す張扇で受け止める。

暫し、鍔迫り合いが続く・・・・・・・・・・

「王室顧問、女性に対して酷いのではありませんか？」

「いえいえ、王妃様の人使いに比べれば何処が酷いのでございましょう！」

鍔迫り合いは続くがそこは男女の差、膂力は私の方があるので王妃を押し込む。体勢を崩された王妃は一歩下がり構えを直そうとするのだが遅い！！

私の逆胴が襲い掛かる。

がっ！！

二刀流！！

王妃は咄嗟に張扇を召喚して左張扇で受け止めたのか！！

張扇の召喚とはやるではないか！

私は左わき腹に打ち上げられる張扇の一撃を受け止めた張扇を支点に体を回り込むようにかわしすり抜ける・・・・・・・・

周りの者達は突如始まった（無駄に）高度な張扇技の応酬に呆然としている。

剣戟と違うのは一撃でも食らえば吹き飛ばされ勝敗が決するのと刃を欠けたり折れたりするのを気にしないで良い為に受け止めが大事

な防御手段として存在することである。どちらかというと棍術や棒術に近い・・・・・

私はすり抜けた勢いのままに腰だめの構えをし神秘緋金属張扇（オリハリセン）に気合を込め叫びと共に打ち放つ！！

「仕事の邪魔をするのはいい加減にしやがれぇぇぇぇぇぇぇ！！」

私の周りには財務官が民部官が式部官が王城管理官が侍従官が近衛文官が・・・・・・・・・その他諸々の官僚達が力を貸してくれるのがよくわかる！その残影が拳を突き上げて王妃に対しての怒りを打ち出している。その力の奔流に後押しされた神器神秘緋金属張扇（オリハリセ）が七色の光と共に王妃を打ち上げる！！

背後には舞い上がる書類吹雪！

また詰まらぬものを打ってしまった・・・・・・・・

どさっ！

書類の上に落下した王妃に

「書類の海で溺れ往け・・・・・・・・・」

唖然とする侍女女官・・・・・・・・

「あの張扇無双の王妃様が・・・・・・・・・・・」

そっち？

「事務官達を壁のしみにしたあの日から犠牲が出ないように張扇技の習得に余念のなかった王妃様が・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・

「王室顧問程度に遅れをとるなんて・・・・・・・・・・」

まてまてまて・・・・・・・・君達なんか違う方向に行ってない？

普通、諌めて仕事に向かわせるでしょうに・・・・・・・・・・

「ううっ、私負けたのね・・・・・・・・・　悔しいけど王室顧問の張扇技(つっこみ)が演芸神に認められるだけのことがあるわね・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・ぷつん。

「お前等詰まらない事している前に仕事しやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！この糞たわけ共がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁ！！」

私の全身全霊の一撃(つっこみ)は王妃を初めとする王妃付の侍女や女官達を書類の海に叩き込むのであった。

「だんな、女性相手に酷いのでは？」

「仕事を溜め込む馬鹿に男も女もない！！今度から本当に孤児娘達の分を王妃付化粧費(おこづかい)から差っ引いて貰おう。」

「それはそうと王室顧問、この惨状は何かね？」

後ろからする声に振り向くと米神に青筋立てている国王陛下に宰相閣下・・・・・・・そして完全装備の近衛兵達の姿があった。

「あはははっ・・・・・・・・・・国政を蔑にする女狐達を討ち取っただけですが・・・・・・・・だめですか？だめですよね？　あはははっ・・・・・・・・・」

「時間はたっぷりとあるからじっくりと話をしようではないか・・・・・・・・・」

「そうですわ、王室顧問には一度じっくりと王室に対する敬意というものを・・・・・・・・」

「王妃様もこの溜め込んだ仕事とか事務官達が居ない件について説

明をしてもらいますよ（怒」

米神の血管が切れてしまいそうな国王陛下と宰相閣下は近衛兵達に私達を別室に連行させるとお話をするためについていくのであった。

後に残されたのは孤児達・・・・・・・・・

「これ片さないと駄目なんだろうね・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・そうだね」

「誰がやるんだろう・・・・・・・・・？」

「この分だと私達じゃない？」

「今からかかったほうが安全ね・・・・・・・・・・・・・」

「「「「はぁ・・・・・・・・・・・・・・（嘆息」」」」」

「後でご主人様においしいものでも奢ってもらいましょう。」

「「「「うん！」」」」」

孤児達に幸あれ・・・・・・・・・（ｂｙ某王室担当地方神）

張扇と王妃（後書き）

その後の王妃付事務官長

どこぞの田舎か、のどかの田園風景に遠くから牛の声が響いている。
古ぼけた小さな一軒家に手入れしていた男衆が出来たぜと都から来たばかりの親子に声をかける。
都落ちした親子の主が男達に礼を言って袋一杯の硬貨を代金として支払い、都から持参した酒樽を渡す。
男達は礼を言いながら酒樽を担いで帰途に着く。
ここは親子の新天地、元王妃付事務官長はこの地にて友人である領主の事務官をすることとなっている。他にも近隣の領主達からも暇を見て手伝ってくれと依頼が来ている。見知らぬ土地にて受け入れてくれる領主（とも）や住民達の暖かさに感謝をしつつ不安と期待が入り混じった表情で愛する家族達を見つめる。

「いやぁ、ここが私の故郷だ。すまないねぇ・・・・・私が不甲斐ないばかりに・・・・・・・・・・」
「あなた・・・・・・・・・・・・・・」
「ぱぱぁ、新しいおうちはどこにあるの？」
「あそこだよ、王都のうちより庭が広いからいろいろお花でも育てようね。」
「うん！！」
「苦労かけるね、おまえには・・・・・・・・・・・・・・」
「あなた、それは言わないで・・・・・・・・・・・・・・貴方は正しいと思った事をやっただけなんですから・・・・・・・・・・・・・・
誇りこそすれ、怒ったり恥じたりはしませんわ！」

「おまえ・・・・・・・・・・（抱」
「あなた・・・・・・・・・（抱」

「えっと、お取り込み中のところ悪いのだが王妃付事務官長、貴殿には王室から召喚状がきている。我等についてきてもらおうか・・・・・・・・・・・・」
「嫌だ！！誰が王妃の下になんていくもんか！！」
「つべこべ言わずとっとと来い！！」

力づくで連れ去られる事務官長、悲しいかな文官として体を鍛えていない為に武官の膂力に対抗できないのである。
「あなたぁぁ・・・・・・・・・・・・・・」
「ぱぱぁぁぁ・・・・・・・・・・・・・・！！」

残された妻子はなすすべもなく見守るしかないのである。

泣き崩れる親子を見た近隣の住人は領主を呼び、領主もその経緯を聞いて王都への早馬を走らせて自らも兵を率いて奪還に向かうのである！！

善き友であり有能な文官である彼を理不尽から救うために！！！

温厚で善良な元王妃付事務官長の経緯を知った近隣の領主達が合同で兵を起こして王都へと向かって騒ぎとなるのは、また別の話。

田舎貴族と事務官長（前書き）

あらすじ　王妃をどついて反省中、孤児たちは後始末で涙目・・・・・・

田舎貴族と事務官長

あの後、酷い目にあった。
宰相閣下と国王陛下にいくら王妃が（公の場でかけないような表現）で（国家機密）な（作者による自主削除）だからって張扇を振り回していい理由にはならないと懇々と説教された。
隣で王妃が王妃付事務官長保護命令書を書かされているし・・・・・・・

えっ！その前に捕獲命令を出したって？
早く取り消せ！！

そんなことしたら事務官長の安全が・・・・・・・・・・・

「王妃様、事務官長を捕獲いたしました！」
部屋に入ってきた武官が王妃に報告する。
「で、事務官長はどんな状態だ？」
「少々旅の疲れがありますが健康です。一応貴人牢に捕獲してあります。」
「うわぁ！！早く釈放してやれ！！出来ればここに連れて来い！」
「はっ！」

武官が急ぎ足で回れ右をする。牢番に無体されなければ良いけど・・・・・・・・
奴は男でもイケル口だからなぁ・・・・・・・・・・

こんなことが王妹殿下（へんたい）に知られたら・・・・・・・・・・
ぴきーん☆　ネタの神様が降りてきた（ｂｙ王妹殿下（へんたい））

暫くして連れてこられた王妃付事務官長、旅の垢を落とす暇もなくやつれている・・・・・・・・
ひでぇ、誰だよこんな過酷な事を命じた馬鹿は・・・・・・
その場にいる者が王妃に視線を送れば、王妃は視線をそらす。

「王妃付事務官長よ、体のほうは大丈夫かね？」
「はい、陛下体のほうは疲れてはいますが大丈夫です。何故に呼ばれたのかお教え願えますか？私自身の身であればいくらでも覚悟出来ておりますので。」
「そう、鯱ばらずとも良い。君に無体をしいた事を詫びたい。」
「陛下、頭を下げる必要は御座いません。悪いのは其処にいる王妃様でしょうから！」

うわぁ、温厚な事務官長が怒っているよ。どんな事したら彼をここまで怒らせることが出来るのか知りたいが知りたくもないな。
「事務官長、王妃が嫌ならば宰相府に戻らないか？」
「閣下田舎に引き篭もりたく存じます。」
「王室顧問と同じ反応だな、王室顧問説得は出来ないか？」
「私も心情的には彼と同じですので無理です。せめて王妃の首でも持参出来るならば別ですけど。」
「そんなものは要りませんので帰してください！」
「だめですね、私より頑なになっています。」

そんな物扱いされた王妃はへこんでいる。たまには良い薬だ。
「陛下、とりあえず事務官長を休ませましょう。」
宰相閣下の良識的な意見は即差に受け入れられた。

「陛下、王妃様のやり口はあまりに酷いのでうちの子達を引き上げさせて宜しいでしょうか？流石に後見として受け入れがたく存じま

す。」

「・・・・・・・・・・・・仕方ない、後王妃が連れて行った分は王妃化粧費から出させる。」

「わかりました後で計算して請求書を回します。」

こっちの意見も受け入れられた・・・・・・・・・・　今すぐ回収に行かないと・・・・・・・・・・

事務官長を連れて王妃執務室に向かう・・・・・・・・・・王妃付の侍女や女官は謹慎させられているから、誰も作業する人がいない・・・・・・・・・・・其処に取り残されている孤児達が心配だ・・・・・・・・・・何処かの貴族達に狙われないかが心配である・・・・・・・・・

事務官長も自分がいない間にそんな状態になっているとは露知らず不安げについてくる。

「事務官長、とりあえず旅の疲れを癒しながら奥方と子供に手紙でも書いて安心させると良い・・・・・・・・」

「そうですね、あの連れ去られた状態で妻子が不安がっていると思いますので。」

「隠遁生活できると思ったのに残念ですな」

「明日から思い切り引き篭もります。」

「羨ましい限りだよ・・・・・・・・・」

「王室顧問だって暫くしたら抜けるのでしょう?」

「そうではあるが子供達が育たなくてねぇ・・・・・・」

「おやおや、親バカですか?」

「そういう事務官長だって娘さんが可愛くて仕方がないという話を延々としていたはずでは・・・・・・・・・・」

そうなんですよ、と親バカ丸出しの発言をしている事務官長に相槌を打ちながら王妃執務室につく。

そこは・・・・・・・・・・

いくらやっても減りそうにない書類を相手にしている孤児達の姿であった・・・・・・・・・・・・

「うわぁ、これは酷い・・・・・・・・・・・・」

事務官長の悲嘆は書類に向けられているのか、孤児達に向けられているのか？

「おーい、子供達これはほっといて帰るぞ！！」

「旦那、いいんですかい？」

「陛下の許可は取った。これは王妃の責任で片付けるそうな。」

「・・・・・・・・・でも、これ放置しておいたら国民生活に影響のある案件もありますよ？」

「外交文書は下手すれば戦争すれすれの部分がありますし・・・・・・・・・」

どれどれ？

うわぁ、酷い・・・・・・・・・・・傷病貴族軍属遺族年金が放置されてるよ・・・・・・・

こっちは？　これって国外の奴隷商人に対する逮捕状だし、なんで期限の過ぎた舞踏会への招待状が放置されているんだ？　どう考えても国際問題になりかねん代物だな・・・・・・・・・・・・

とりあえず仕分けだけしておくか・・・・・・・・・・事務官長手伝ってくれる？

「はぁ・・・・・・少しだけですよ。」

しぶしぶながら手伝う事務官長・・・・・・・・・・そういえば、事務官たちは大丈夫なのだろうか？壁の染み残しているけど・・・・・・・・・

壁の染みの見覚えのある人影に事務官長も引いている・・・・・・・・・

そりゃそうだろう自分を守るために犠牲になった者達をこれでもかと主張されているのだから、部下思いな事務官長の心中は如何程の重荷を背負っているのだろう？

命はあるようだし後で見舞いにでも行こう・・・・・・

そろそろ終わったかな？

可哀想に子供達はなまじ責任感あるから投げ出せずに進めているし・・・・・・・・・・・・不器用な奴等だ。

「大雑把に終わったら飯でも食いにいこう！子供達今夜は好きな物奢るぞ！！」

「やった！」「じゃあ遠慮しないで食べるわ！」「楽しみ・・・・・・」

「だんな、おいらは肉ね！」「御主人様いいんですか？」

口々に勝手な事を言う孤児達に苦笑しつつ、事務官長を見る。

「事務官長もどうだい？部下達の思い出を偲んで。」

「いいですな。」

やっと事務官長の笑みが見れた。後は無事に帰すことを考えるか・・・・・・・

そばにいた近衛を呼んでこの手紙を彼の故郷に届くよう手配して夜の酒場街に突撃するのであった。

あのぅ、俺達まだ死んでないから偲ぶとか縁起でもないんだけど・・・・・・・・・・（ｂｙ王妃付事務官その壱@ただいま療養中）

田舎貴族と事務官長（後書き）

田舎貴族の屋形の前に私兵が数名屯している。
私兵といっても村の青年団みたいなもので普段は家業を手伝いながら持ち回りで見回りとかする程度なのだが・・・・・・・・・

「さぁ、出陣だ！！済まんなお前達、こんなわがままな主人を持って。」
「いえ、あの奥さんと子供の嘆きを見たらほっとけないでしょう・・・・・・旦那。」
「それにおれっちの又従兄弟殿だしな。」
「違いない！」
「ご主人様、近隣の領主達も兵を率いてこっちに向かっております。」
「そうか、いざ王都へ！われらが兄弟分を救出するために！！」
「「「おおっ！」」」

其処に集うは時代遅れな鎧姿の騎士が十名程に彼らの私兵がその数倍程度・・・・・・・
武装は貧弱だが意気は高い・・・・・・・・・・
槍とかが主武器なのだが間に合わないのか大鎌とか熊手を担いでいる者も見受けられる・・・・・・・・・・
「近隣緒領十数家、義によって参戦いたす！」
「申し訳ない、個人的な案件につき合わせて・・・・・・・・・」
「なぁに、貧乏な田舎貴族同士助け合わんとな。」
「それに親類が苦難にあっているのにほっとけないだろう・・・・・・」
「義弟に無体するならば王族であっても意地を通させてもらう！こ

れは某の問題でもある！」

「旦那方大変です！御屋形様がこちらに向かっています！その数２００！！」

彼らの間に冷や汗が出る。御屋形様は彼らの本家筋に当たり、地主に毛の生えた程度の貧乏田舎貴族である彼等の兵力を軽く数倍する私兵団を擁する近隣の顔役なのである。

間もなく軍馬の響きが彼らを囲み老傑の怒鳴り声が響き渡る！！

「この馬鹿者共が！！何コソコソ企んでいるかと思ったら王家に弓引くなんて何たる不忠！！じっくり説教してやるから覚悟して置け！」

近隣の領主達にとって本家筋で実力があるばかりではなく貴族教育を受け持ってくれた恩師に当たる存在だから頭が上がらない・・・・・・

詰んだかと皆思ったのだが・・・・・・・・・

「この馬鹿者共が！！お前等が王妃付事務官を助けようと兵を集めているのはしって居るのだぞ！！それなのにワシに何の相談もなく馬鹿なことをやるんじゃない！！その装備はなんだ！」

「熊手です。」

「熊手で近衛兵団相手に取れると思っているのか！ああっん！！」

「いえ、それでも意地を張らねばならない場面ですから！」

「だったら！意地を張るにふさわしい得物で来い！！馬鹿もんが！！」

「・・・・・・・・・・・・・」

「御屋形様、我等を止めるのですか？」

「当たり前だ！お前らはワシの可愛い息子みたいな者だ！馬鹿なことをしたら親として止めるのが当然だろう！！」

「では、僭越ながら押して通らせてもらいます。」
「ひよっこがほざき居るわ!!そのケツについた殻を取り外してから言いやがれ!!」
「糞爺が隠居でもしやがれ!!こっちは友を助けるんで時間が惜しいんだ!!」

ごすっ!
一撃でのされる田舎領主!
「さぁ、そんな馬鹿な装備で村の青年団を連れて死地に向かうんじゃない!!ワシだって鶏冠に来ているんだ!王族相手の喧嘩を見せてやるからついて来い!!」

おおっ!!と歓声が上がる!
「ワシだって可愛い息子分が無体されて孫みたいな者が泣いているとなれば重い腰を上げざる得ないだろう!!さぁ行くぞ!救出までは時間が勝負だ!ちんたらしていると置いていくぞ!!」
「「「「はい!御屋形様!!」」」」

「その前に・・・・・・・・・・王妃付事務官長の妻子はいるか?」
「はい、ここに。」
「貴様等は士分の妻子で身分的には平民だろう!可愛い嫁御分とその娘に我が保護を与える!!　貴人聖域法(アジール)の名の下に!!」

「「「おおっ!!」」」
「これで名目は成り立った。我等が保護するは王族に無体された者の妻子。その夫が被害者ならばこちらで保護してやるのが我等貴族の役目であろう!さぁ、派手に行くぞ!!馬鹿息子共が!!」

辺境領主連合　総兵力３００
頭首　麦秋地方辺境伯　以下辺境貴族十数名が連名。

王妃付事務官長の苦難を救うために王都に向けて進軍中。

おれ殴られ損？（ｂｙ田舎貴族）

「いや！ワシが頭に立つために見せしめになっただけだ！」

田舎貴族と酒場の官僚（前書き）

あらすじ　王妃に無体されそうになった事務官長を保護した。でも仕事してしまうのは習性なのか・・・・・・・・　働いたら負けなのに・・・・・・・

田舎貴族と酒場の官僚

酒精の香り漂う酒場にて日頃の疲れを癒さんとする民草共、其処に混じるは我々主従。
床に染みこんだしみにも酒と言う歴史が滲んでいて歩くたびにぎしぎし言っている。

さて、呑め呑め食え食え!!
王妃から孤児達や事務官長を助け出したぞ!!

わはははは!!　かんぱーい!

何か出来上がっている・・・・・・・・・
我等主従と事務官長は城下の酒場にいるのだが、どうして官僚(こいつら)共がいるのだろうか?
「そりゃ勿論、酒盛りの匂いを感じたからだよ!!」
「どこの獣だ!!」
「ははは!酒精神の加護厚い我輩にかかれば君達の行く店くらいすぐにわかるものだ!!」

どーもー　私にも一杯頂戴!（ｂｙ酒精神）
「どぞどぞ神様、ささささぐいっと!何時見ても見事な呑みっぷりですねぇ・・・・・」
いやぁ、酒は命の水だから（ｂｙ酒精神）

「まだまだいけるでしょう。今夜は皆と一緒に飲みましょうぞ！！」

「えっと、街道管理官。何故神様がいるのですか？」

「この御方とは出張先の酒場であって酌み交わしあったら意気投合してしまってねぇ・・・・・以来飲み友達になったんだよ。」

王室顧問だっけ？今夜は楽しもうねぇ（ｂｙ酒精神）

「・・・・・・・・・・・・・はい。こちらこそ宜しくお願い致します。」

「賢者様が押されているってはじめてみるかも。」

「神を飲み友達って・・・・・・」「旦那の友好関係って得体が知れない・・・・」

「ある意味神殿関係者がいたら泣きそうな光景ですよね・・・・・・・・」

「あそこの席の法衣って神殿の方じゃない？」「顔が青ざめているねぇ・・・・・・」

「確か降臨て過去数度しかないとか・・・・・・・・・・・・」

そんなことはないよぉ、気が向いたらちょくちょく現れているしね。（ｂｙ酒精神）

「そうそう、子供達お前等も飲むか？神様の加護で悪酔いはないはずだから。」

そうそう、気持ちよく飲む飲み友達にはその場限りだけど悪酔い知らずの祝福を授けるよぉ（ｂｙ酒精神）

ぽんっ！という気の抜けた音と共に酒場中に酒精の匂いが立ち込める。

其処にいた者たちは貴賤の区別なく程よく酒が抜けている。

そして杯を構えると皆して乾杯の声が交わされる！！

君達この事態の異常さに気がつかないと・・・・・・・・・・・・
別に良いか？神々が遊びにくるのは日常だし・・・・・・・・・・

その状況はあまりよろしくないのだが・・・・・・・（ｂｙ某王国地方担当地域神）
だよねぇ・・・・・（ｂｙ農業神）
最近王室顧問近辺に観察がてらに呟きを入れる神（やつ）が多くてねぇ・・・・・・・・・（ｂｙ街道神）
神々との境が曖昧になりすぎると良くないのだが・・・・・・・・・・
連れて帰るか？（ｂｙ境界神）
そうだねぇ・・・・・（ｂｙ農業神）

はいはい酒精神帰るよ！あまり人の世に邪魔してばかりだと迷惑でしょ。（ｂｙ厨房神）
いやだ！　まだ呑むんだ！！　いやぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・
我が愛しの酒樽が・・・・・・・（ｂｙ酒精神）
だまれ！勝手に抜け出して酒盛りなんて！俺達だって飲みたいんだ！！帰るぞ！！（ｂｙ農業神）
あーーーーれーーーーーーっ（ｂｙ酒精神）

酒精神は連れ去られてしまった・・・・・・・・・・・・
呆然としている法衣共・・・・・・・・・・・・そりゃ、そうだろう。
信仰している神々が降臨されて無意味に行動しているのだから・・・・・
事務官長も唖然としている。
この位で驚いていたらこの世界では生きていけないぞ！

「かこに例を見ないほどの神々の複数降臨って！この程度で済ませないでください！！」
「非常識にも程があります！！」「何で神と杯を交わしているんですか！」
「そういえば貴方、前に神をとつきまわした要注意人物！！」
「って、何でこの娘達に風の神の加護があるのですか？」
「風の悪戯（パンチラ）からの絶対防御って・・・・・・・・・・・・無駄に微妙な加護が・・・・・・」
「その手にしている神秘緋金属張扇（オリハリセン）って・・・・・・・・・・・・演芸神の加護が・・・・・・・・・・・・」
「そっちの貴族からは酒精神の気配が色濃く漂っているし何者だ？この一団は？」

法衣共が煩い・・・・・・静かに酒が飲めないじゃないか？
酒盛りの邪魔する奴は排除しても良いよね、いいよ（自己完結）

私は張扇を構えると法衣共に向けて一撃を放つ！！
「ごちゃごちゃうるさーーーい！！」
法衣共は夜空の星となった。

きらっ☆

「・・・・・・・・・・貴族様？そちらの法衣様の飲食代をいただいていないのですが・・・・・・・・・・」
あっ！
払いましたよ・・・・・・・・・・法衣共の飲食代も・・・・・・・・・・
・しくしく（泣

田舎貴族と酒場の官僚（後書き）

辺境の地から攫われた事務官長を救出するために麦秋辺境伯を初めとする辺境貴族連合が街道を進む。

道筋の貴族達が守備隊を差し向ける。その数１０００！
率いるは王国の要石である守護辺境伯。
数で持って抑えて穏便に収めたいと言う彼の意思は通じるわけもなく対峙する。

「どいてもらえぬかな守護伯殿。我等は大事な家族を助けに行きたいのだ！！」
「そのために兵を用いていくのは愚策だよ麦秋老。」
「兵を用いるのが愚策であることは承知、されど王家の無体に泣く一家を見てだんまりを決めるほど腐りきってはおらん！」
「そもそも何がどうなったのですか？」

かくかくしかじか（事の経緯を説明中）

「なるほど、あの腐れ王妃が！折角王権を譲ったのに問題を起こして我々に仕事をさせるとは。ここは当家に任せてみませんかね？我が弟が王都にいるから、奴ならば王家に対して弓引いてでも守ってくれるはずですよ。」
「あの道楽者か！いまだに王都にてあるのか？一度野に下ったはずだが・・・・・」
「なぁに、あの馬鹿は養い子達の面倒見るために王室顧問として在籍してますよ。王妃にも引くことはないですから十分頼りに出来るはずですよ。」
「でも、貴様の弟でも力及ばずということもあろう。早馬にて保護

の依頼を願うが念のために我らも王都まで進軍いたす！」
「軍を進めるとなれば止めなくてはいけないのが私の役目なんだよねぇ・・・・麦秋老悪く思わないでくれ・・・・・・・・でも、その前に早馬だけは送るよ。」

対峙する両軍に緊張が走る。
死を覚悟した辺境貴族連合軍３００に傷つけたくない守護辺境伯私兵団他１０００。
共に王家の暴虐に怒りを隠せないのだが其々の立場が引くことを許さない！

にらみ合いが続く事半日。
「守護伯殿、如何しても通さぬと言うならば圧して通る！！」
「悪いな麦秋老。ならば私も及ばずながら盾となるべく行動させてもらおう。まずは大将同士の一騎討ちと洒落込むか？」
「貴様らしくもないことだな。受けて立とう！」

両軍の間に立つ　二人。
風が吹きぬけ草が転がり通る・・・・・・・・・・
老傑麦秋辺境伯は鎚矛を構える。乱戦で長期戦となることを覚悟して切れ味が鈍る剣よりも装備に関係なくある程度の効果が期待できる鈍器を選んだのだろう。
対する守護辺境伯は刃を潰した剣、峰の部分が櫛状になって相手の武器を書きおるためにできている。所謂（いわゆる）ソードブレーカー。鎚矛のような重量のある打撃武器には意味はないが出来るだけ傷つけたくないと言う意思を構えからも見せている。

「いざ参る！」
「胸を貸してやろう小童！」
両者の武具が打ち合い力比べが始まる。

「そんな、軟弱な武器ではすぐに折れてしまうぞ！」
「なぁに、麦秋老の腰の方が参ってしまうのが先でしょう。」
「いいおるわ！ふんっ！」

麦秋老の力任せに押し付けた鎚矛に守護伯は体勢を崩し一歩下がる。
其処に襲い掛かる鎚矛、守護伯は身体を半身にして避ける。大地に響く衝撃・・・・・・・・・・
そこで抜き打ちで打ち込まれるソードブレーカー・・・・・・・・・・
非力な武器である悲しさか麦秋老の肩当に阻まれて決定打とならない！

両軍だけでなく、街道を歩む商人達も何事かと二人の戦いを眺める。
その中には王都からの早馬もある・・・・・・・・・

早馬の者は辺境貴族軍の中に田舎貴族の姿を認め、駆け寄り事務官長の無事を伝える。

「おおぉい！！御屋形様、守護伯様！！事務官長は無事に王室顧問様に保護されているそうです！！」

その声を聞いて互いに武具の切っ先を下げ左足を引く。
これは決闘時の一時休戦の合図である。
どちらともなく武具を下げ安堵の笑みを交わす・・・・・・・・・・

「久々にいい汗かいた。」「こっちは冷や汗でしたよ。」
「運動不足じゃな、その腹を引っ込めるためにもう一度ワシとやらんか？」
「勘弁してくださいよ。」

両軍にゆるい空気が流れる・・・・・・・・
「それよりも田舎貴族、早く詳細を説明せんか！」

かくかくしかじか（早馬の報告を聞く・・・・・・・・）
「うむ、今のところは大丈夫か。まずは一安心といったところか。」
「まぁ、私の愚弟ならば養い子達を引き下げると言えば王国政府にとって嫌がらせになりますから暫くは大丈夫でしょう。」
「では、無理やり押し通るわけではないが迎えにいくぞ。兵達は護衛程度ならば問題なかろう。」
「それならば問題ありません、此処まで来た皆さんも王都までは無理でしょうが我が領地でゆるりとされたらいかがでしょうか？ついでに家にお土産なども買われていくのも悪くないですよ。」
「守護伯、貴様には商会公の血が流れてないか？」
「そんな心外な、あそこまで悪辣ではないですよ。」
「まぁ、よい。早く事務官長を保護して安心させてやりたい。」
「では、私も付き合いましょう・・・・・・・・我が儀仗兵を連れて（にやり」

麦秋老は自らの軍団に向かって声を張り上げる。
「皆の者聞くがよい！！事務官長は辺境伯の末弟である王室顧問が保護していることがわかった。我等の役割は半分終わったわけだ！まずはこの事を喜ぼうぞ！！そして帰る者は家路について故郷に吉報を伝えるが宜しかろう！！ワシは一度王都に赴いて彼を迎えにいくぞ！そして一発ぶん殴る！我々を心配させた馬鹿弟子にけじめをつけさせるために！」

おおおっ！
と歓声ががる。勿論守護辺境伯私兵団側からもだ！

そうして辺境貴族連合は帰途に着き、麦秋老と数名の貴族、その護衛が王都に向かうのであった。それに付き添うように守護辺境伯私兵団が旅路に加わるのであった。

辺境貴族連合　麦秋老以下２９名。守護辺境伯私兵団５９名。

ところでさあとがきの方が文字数の多い小説ってどうなのよ（ｂｙ文芸神）

うーん、そんなこともあるさ前衛文学ということで（ｂｙ作者）

田舎貴族と二日酔い（前書き）

あらすじ　あとがきのほうが長い話だった。王室顧問何をしているのだろうか？
酒を飲んでます。　納得・・・・・

そして作者は日本酒の熟成物で酔っ払ってます。誤字脱字はいつもの事ですのでご容赦あれ・・・・・・・・・・・・

事務官長はうなっている・・・・・・・・・
そりゃそうだろう、いくら酒精神の加護があったとはいえ丼で酒を飲んでいれば二日酔いにもなろう・・・・・
神様は二日酔い対策の祝福はしてくれていなかったし・・・・・・・

ごめんねぇー　忘れてた（ｂｙ酒精神）
「いえいえ、二日酔いがあるから呑みすぎたりする戒めになるのですから。」
まぁ、アレだけ呑めば酒に強い鬼族とかでも潰れるよねぇ・・・・・・人属なのに凄いなと思ったよ（ｂｙ酒精神）
「暫く放置しておけば良いでしょう。」
そだねー（ｂｙ酒精神）

何か酒精神と普通に会話しているけど気にしたら負けだ。

「だんな、迎え酒をしているから寄ってくるのでは？」
「別に文芸神と違って害はないから気にしない。ささ、神様ぐいっと一献！」
すまないねぇー（ｂｙ酒精神）
「酒精神様も人界に普通に降りてきて大丈夫なんですか？」
問題ないよー、前は神も人界に降りてきて共に楽しんでいたんだよー。
その名残として神の流れを汲む家とかあるじゃないー。神も人もこの世界にあるものだから共に仲良く騒いで時に喧嘩するくらいでいいのさー（ｂｙ酒精神）
「そんなものなんかなぁ？喧嘩とか物騒だし・・・・・・」

なぁに、馬鹿な喧嘩の一つもできないと鬱憤たまってだめだめよー。
喧嘩した後で酒を飲んで仲直りすれば良いんだよー（ｂｙ酒精神）
「そして酒席でまた喧嘩と・・・・・・・・・」
世界は巡る糸車ー、回って回って何かを紡ぐー♪　（ｂｙ酒精神）
こうして何度も起こる出来事を専門用語で【天丼】という。（ｂｙ演芸神）

お前は呼んでない！！（げしっ！！
およびでない、こりゃまた失礼しましたーーーーー☆（ｂｙ演芸神）

キラッ☆

ささっ、酒精神　飲みなおしましょう・・・・・・・・・・
良い酒は嬉しいねぇー　朝酒は楽しいねぇー　ぐびぐびぐびとのみほすよー（ｂｙ酒精神）
「そうそう、良い呑みっぷりで。ところで事務官長、一緒に飲むか？」
「いえ、二日酔いが酷くて・・・・・・うぷっ・・・・・・・・。ちょいと失礼！！」

事務官長はけつを抑えて駆け出す！
便所か・・・・・・・・・・

あんだけ呑めば下痢になるよー。酒を飲みすぎると腸内の水分バランスが崩れるから下るよー（ｂｙ酒精神）
「あの状態だと人は一本の管であると言う話がよくわかる。」
運命神の分野だけど食べて糞して世界を変えるのが生物らしいぞー（ｂｙ酒精神）
「奥が深い定義ですなぁ。今度はこっちの酒を行きますか。」
いいねぇーいいねぇーどんどんのもうねぇー。酒は世界の潤滑油だ

よー心も口も滑らかにするんだからー（ｂｙ酒精神）
「孤児姉、つまみはまだか？」
「御主人様朝からなんか駄目人間丸出しなんですけど良いんですか？　あとこれつまみです。」
むぐむぐ、良い味してるねぇー。（ｂｙ酒精神）
・・・・・・これは美味だな。王室顧問よ、良い娘を捕まえたな。
（ｂｙ厨房神）
「いいだろう神様達、だがやらん！」
「・・・・・・・・・・／／／」
可愛い娘はべらせて朝から飲んだくれ。浪漫だね（ｂｙ厨房神）
「わかる？やっぱ貴族と生まれたからには可愛い娘はべらせて堕落した生活するのがあるべき姿だと思うんだよ！」
貴族じゃなくても神でもそんな生き様が良いんだよー、厨房神呑んでないじゃん。ささ、ぐいっと逝こうー（ｂｙ酒精神）
おっとっと、こりゃこりゃ・・・・・・・溢れているじゃんか！
（ｂｙ厨房神）
若いからすぐこぼれてしまうんだー（ｂｙ酒精神）
あはっはっ！！（ｂｙ神々）
「酒場の親父か！」
たいした違いはないよー（ｂｙ酒精神）
「そりゃそうか・・・・・」

「ねーちゃん、これはどう収拾つけるんだ？」
「・・・・・・・・・／／／」
「だめだこりゃ。」

しかし、事務官長遅いなぁ・・・・・

本格的に下ったな（ｂｙ厨房神）
あんだけのめばねー（ｂｙ酒精神）

「王妃付という重圧から解き放たれて、たかが外れたんだろうな。」
たまにはいいよねぇー（ｂｙ酒精神）
妻子の元に返ったら満足に飲むことなんて滅多になくなるからな。
（ｂｙ厨房神）
それって厨房神の予言ー？（ｂｙ酒精神）
常日頃の力関係からの推測だね（ｂｙ厨房神）
「だから私のように独身貴族でいれば良いのに。」
ただ単に性愛神殿通いが過ぎて振られているだけでしょー（ｂｙ酒精神）
まぁ、継ぐ家もないからねぇ（ｂｙ厨房神）
「うるさい！」
図星刺されて怒ってんのー（ｂｙ酒精神）

いいんだ！今の生活を楽しんでいるし、結婚したら一人しか相手できないじゃないか！！

妻妾同時プレーとかあるじゃないか（ｂｙ農業神）
それで腎虚確定コースってか？（ｂｙ冥界神）
死因は腹上死ってか（笑）（ｂｙ岩石神）

何かどんどん神々が増えてくるなぁ・・・・・孤児姉、酒とつまみをどんどん頼む。
「はい、御主人様！」

孤児姉が神々に供える酒とつまみを用意するために部屋を出る。勿論孤児弟も手伝いとして借り出されるのは確定事項だろう。
うーん、良い子達だ！

ほんとうにどっちかくれない？（ｂｙ酒精神）

「断る！」

けちぃー（ｂｙ酒精神）

その後暫く、便所詰めとなっていた事務官長だがこの場に戻ったときに屯している神々に驚いて目を回したのは笑い話である。

ところで神様達に質問。

どうして神職や法衣たちの元に行かないの？

そりゃーねー　願ってばかりでうっとうしいしー（ｂｙ恋愛神）

あからさまにワシの事を邪魔者扱いするし（ｂｙ疫病神）

一応、公私の区別をつけないと（ｂｙ秩序神）

私が行くと自分が選ばれた者だと勘違いする馬鹿が多くて・・・・・・（戦神）

なるほど・・・・・・・・・って、お前等自分の飲み代くらい払えよな！！

田舎貴族と二日酔い（後書き）

旅路は長いようで短く。
麦秋老を首魁とする一団は王都の門をくぐる・・・・・・・・・

先触れを出し、害意をないことを示し門衛の敬礼を受け進む。
王都の雰囲気は以前と比べてよくなっている。

種々の弱者保護政策が実を結びつつあり、孤児や乞食にも寝床や仕事が与えられ放置されたまま朽ち果てると言う事がなくなったからであろう。

市場に行くと子供達が駆け回って買い物をしているところを見るし、職人街は仕事の音が絶えない・・・・・・・・
民草が丹精こめて慈しまれている事が見て取れる。

麦秋老は道行く衛士に王室顧問の居場所を尋ね案内させる。
王室政府勤務者向けの寮か性愛神殿、孤児院のどれかだがどこから回ればよいのか迷い衛士は仲間を呼ぶとその三箇所を中心に居場所を探させる。

「守護伯よ、貴様の弟は居所がつかめないなぁ？」
「愚弟は道楽者ですからねぇ・・・・・・・」
「無事に見つかればよい・・・・・・・・」
「暫く時間かかりそうであるから何処かの茶店でもいきますか・・・・・・」
「そうだな。」

程無くして衛士が王室顧問の居場所を突き止めてくれたのでその場

所に向かう。

先に挙げた三箇所ではなく、裏通り沿いの酒場兼宿屋であった。

そこに横たわる事務官長・・・・・・・・・

何らかの責め苦にあったのか唸り声を上げて青白い顔を歪ませる・・・・・・

「おい！王室顧問これはどういうことだ！！」

「久方ぶりでありますな、麦秋老。大したことはありませんよ・・・・・」

王室顧問は鼻を赤くしてのんびりと応える。

事務官長が唸っているのを尻目に旧知の貴族や親族と挨拶をする王室顧問。

「やぁ、我が弟よ。この麦秋老には手を焼かされたよ。兵隊つれて王都攻め込もうとするし・・・・・・」

「兄上、陛下の前で儀仗兵を突撃させようとした者の科白ではありませんな。」

「なぁに、王妃の首でも取れば大人しくなるだろうと思っていたのだが、事務官長自体が大人しくしてないと駄目な状況みたいだな。」

「まぁ、明日には回復するでしょうし・・・・・・・・・」

酒場だからか微かに酒精の香りがする・・・・・・・・・・

麦秋老は今の事務官長の容態を聞く。

「ただの二日酔いですよ。王妃をやりこめて無事に王城を出たから祝い酒と称して私や官僚達と共に散々飲んでましたからねぇ・・・・・・・・」

「ほぅ、ワシらが命がけで進軍している間に悠長だな！　って、おきろ！！」

事務官長の腹に刺さる拳！
その衝撃で崩れ落ちる事務官長。そして押さえが利かなくなった腹からは・・・・・・・

濁流が開放されそうになる・・・・・・・・・・・・
あわてて駆け出す事務官長・・・・・・・・・だいじょうぶか？
便所までは持たせろよ！　持たせなかったら・・・・・・・・・・・
悲惨だ！

あーあ、酷いことするなぁ・・・・この爺様は（ｂｙ厨房神）
とどめさしたねー。（ｂｙ酒精神）
無事つけるかねー？（ｂｙ戦神）
無理じゃない？このウンコー状況からして（ｂｙ大地神）

「麦秋老それは酷い！」
あわてて駆け出した事務官長を見てジト目で見る貴族達・・・・・・・
おなかを下した者に腹を殴るなんて・・・・・・・・・・・・

ま、事務官長を擁護する者も同情する者もいなかったのだが・・・・・
「助けてみれば酒盛りで潰された後だったと・・・・・・・・・・・
　王妃に潰されなかっただけましなんだろうがこのやり場のない怒りは・・・・・・・・・」
「田舎貴族、諦めろ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿らし、

帰るか。」
「だな。」
「奥方にはしっかり報告しておかねばな」
「言えてる。」

ちなみに事務官長は無事漏らしませんでした。

ぴー！！

加速のつく便意。

田舎貴族と雪隠事務長（前書き）

あらすじ　事務官長は下痢ピー　流石にもらすかと思ったが何とか持ちこたえたようだ・・・・・・・・　漏らされたら話の続き書くの嫌になるなぁ・・・・・おっさんの脱糞シーンなんて（ｂｙ作者）

６９話目だからあいなめとかって話を持っていくべきだったか？

田舎貴族と雪隠事務長

「王室顧問、事務官長を持ち帰ってもよいか？」
開口一番麦秋老の率直な問い。婉曲表現を好まないこの老傑らしい問いかけである。
私も
「持ち帰っても良いですけど、せめておなかのものを出し切るまで待ちましょう。」
事務官長の体調を案じる答えをする。

ふむ
と応える麦秋老に田舎貴族共もそうだなと納得する。

王都のとある酒場の一室。
酔いつぶれてお腹を下した事務官長が養生中である。
この場で流石に酒を飲むものもなく皆で茶を喫している。
老を初めとする一団は強行軍の疲れが見え、一度休んだほうが宜しいだろう。

護衛の兵隊達は麦秋辺境伯屋敷等に詰めているだろうから、皆して其処に移るのも選択肢としてありか。
もう一度くらいは王宮にて話し合いがあるだろうし其れまでの間に無体されないとも限らない。

面子を潰された王妃とか仕事の手が足りない官僚とか・・・・・・・・・・
国王に宰相が手綱を握っているとは思うのだがとち狂った者と言うのはどこにでも居るものだ。
此処だと守るには手狭だし民草に迷惑をかけるのは貴族として宜し

くない。

「一度麦秋領屋敷に世話になって宜しいですか？もう一度くらい呼び出しがあるでしょうから。安全そうなところに移しておきたいのですが？」

「うむ、わかった。」

「王室顧問ならば安全そうな場所を色々伝手があるのではないか？性愛神殿とか・・・・・・・・」

「其れは田舎豪族君の好みだろう。行くのは構わんが故郷に帰ったとき君の奥方に夕飯は茹でた干草しかもらえなくなっても責任持てないぞ。」

「大丈夫、田舎豪族の奥方はそんなことはしない。優しいから腕の一本くらいで許してくれるよ。後に引くことはない・・・・・・・」

青ざめる田舎豪族、心当たりがあるのか？

まぁ、私の感知するところではないのだが・・・・・・・

孤児弟に命じ支払いを心づけ込みで払わせ、麦秋屋敷に向かう・・・・・・・・

事務官長は戸板送りである・・・・・・まるで死人の扱いだな・・・・・・・

「ううっ・・・・まだ生きてますって・・・・・・・」

二日酔いと腹部の打撃とどちらがダメージ大きいのだろうか？

ぴー

麦秋屋敷にて我等一同は今後のことについて相談をする。

麦秋伯以下ド田舎連合は

「ド田舎言うな！！」

とりあえずは事務官長の無事を確認して迎えに来たことを固持してもらおう。

私兵団も護衛と言い張って貰って・・・・・・・・・・・・・・・

有耶無耶にするか。

「宜しくないな。王室の配下に対する扱いのまずさは糾弾しないと。」

「事務官長を守るために壁の染みになった事務官とその家族も保護しないと・・・・・・・」

「そっちは、我が友である財務官が手を回している。宰相閣下も気にかけているから大丈夫だろう。後で見舞いには行かないといけないが・・・・・・・・・・」

「そっちは心配ないならば、事務官長の無事だけを願えば大丈夫だな。」

「転属でも良いから復職すれば丸く収まるのだが、其れは無理だろう。王妃の首をもってしても関わりたくないと言い切ったからなぁ・・・・・」

「あれに其処まで言わせるとは何をしたんだ王妃？」

「あいつは温厚そのものなのに・・・・・・・・・」

「仕事しないで孤児娘たちを着飾らせて遊んでいたらしい・・・・・・・・・」

「王妃を監禁して仕事させろ！！」

「また謹慎するのが落ちでは？」

議論は堂々巡り　結局は堂々として行き当たりばったりと言うのが

結論だった。

ところで事務官長は？

雪隠詰めにされていた・・・・・・・・（文字通り）

「もう酒なんて飲まないぞ！」

みっかともたないだろーねー（ｂｙ酒精神）

田舎貴族と雪隠事務長（後書き）

麦の海が続く麦秋地方、其処の領主たる麦秋辺境伯府。
王都より移住してきた親子が保護されている。

親子の家長たる元王妃付事務官長は王都からの召喚状を持った兵士に囚われてしまっている。

一日千秋か・・・・・・・・・・この思いを言葉にするならばこれがしっくりと来る。
どうか無事でいてください。
どの神に祈ればよいのかわからないが親子は必死に祈る。

祈りが通じたのかある日、王都からの伝令が来る。
事務官長からの簡潔な一文。

我無事　今王室顧問のところに寄宿している。暫くしたら戻る。

簡潔な文章、でも必要なことはつづられている。
さぁ、帰ってくる前に家を片さないと・・・・・・・・・・・・・・

麦秋老と王室顧問（前書き）

あらすじ　事務官長は下痢ピーだ　以上！

麦秋老と王室顧問

麦秋屋敷になだれ込んだ我等一同、あいもかわらず事務官長はお腹を下している。
二日酔いと腹部への打撃とどちらがとどめさしたのだろう？
そんな田舎貴族達を放置して私は王宮へと向かう。
「だんな、辺境貴族連合を放置して宜しいので？」
「大丈夫だ！ど田舎者に王室に弓引く度量などない！！」

「ど田舎言うな！！」

今日は孤児娘達が働いているだろうから後見にいかないとな。
「御主人様、妹共はしっかりとしているから大丈夫だと思いますが？」
「大丈夫だと思うが王妃の一件の後だ、警戒するに越したことはない。」
「わかりました支度の方は整っておりますのでいつでも向かえます。」
孤児姉は気働きが出来る。これだけ出来る従者と言うのは得がたい者だ。
私は孤児姉の頭をなでると孤児姉はくすぐったそうにそれを受け入れる。
では向かおうか・・・・・・・・
爺と下痢のおっさんと田舎者ばかりでむさいところから可愛い私の娘達のところに・・・・・・・・・・

「後で陛下にご機嫌伺いしたいから段取りを組んでくれ。」
「判りました麦秋老。」

王都の道は石畳ででこぼこだ・・・・・舗装したそばから馬車が通り人が通り磨耗していく、その轍の跡が足跡が王都の歴史を物語る・・・・・・・・・・この通りの轍は塩が通る馬車の者が主でとか色々話しながら向かう。姉弟もたかが轍なのに其処に刻まれた歴史や経済活動を聞いて不思議な話しを聞くかのよう耳を傾ける。

王城に着く、門衛は私達の顔を覚えているから敬礼して通してくれる。
門の中では竜がのんびりと寝そべっているし、その上では小鳥が鱗についた虫をついばんでいる・・・・・・・・・・のんきだなぁ・・・・
竜の鼻先からこぼれる火花を避けながら官僚部屋へと向かう。

官僚部屋は相変わらず混沌としているが官僚共の顔色は良い。
孤児娘達が勢ぞろいしているからか？
「いやぁ、王室顧問。王妃が仕事の邪魔しないから楽で良いよ。」
「その割には仕事量が凄くないか？」
「王妃の仕事がこっちに回っているのだが、王妃が仕事滞らせていないし邪魔もしないからはかどるはかどる。」

財務官、表現が露骨だな。
孤児娘達も普通に仕事している。傍らには菓子の包みとか花とかが置かれているが・・・・・・・
「ああ、これですか？貴族の皆様方が私達にどうぞとくださるのですよ。流石に装飾品とかは遠慮しているのですけど食べ物は断りきれなくて・・・・・・・・・・」

ああ、多分引き抜きのための段取りだな。
「あまり受け取り過ぎないようにな。貴族は下心タップリだからな。」
「賢者様も？」
「勿論だよ、可愛いお前達が王国を乗っ取って私を養ってくれると言う下心がな。」
「ささやかな下心ですわね。」
「賢者様くらい私達で養うから、でんと家で構えていて。」
「ついでに可愛がってくれると嬉しいんだけど。」
「何時だって猫可愛がりしてあげよう。皆で別室いっていちゃつくか。」
「「「はーい」」」

「おい、王室顧問孤児娘たちを連れて行くな！」「もげろ！」
「仕事終わった後だったら・・・それでも許せん！」
「羨ましすぎるぞ！」「お前は孤児姉がいるだろう。更に求める積りか？」

旗で聞いている孤児姉が真っ赤になっている・・・・・・
収拾がつかない官僚共に軽く神秘緋金属張扇（オリハリセン）でなでて正気づかせる。
若干壁にへばりついているのとかいるけど気にしない。しばらくしたら復活するだろう！！

「ぐふっ！我等死すともてない男の嘆きは晴れず、王室顧問への呪詛を紡ぎ続けるだろう・・・・・・・・」
何馬鹿な遺言をはいているんだ！！（どげし！

「ほらほら、仕事！！」
官僚共を仕事に追いやって宰相閣下（たぬきおやじ）のところにいく。
宰相閣下はタタミイワシを炙りながら仕事をしている。

「閣下、タタミイワシの破片が書類に挟まって邪魔なんですが。」
「開口一番それか？てっきり麦秋老のこと出来たのかと思ったのだが。」
「麦秋老と田舎者達は事務官長を保護して満足していますし、陛下に一言二個と文句言えば収まるでしょう。」
「そう願いたいが、王妃を如何するかと言うのも悩みどころだ。」
「腕の良い処刑人と良く切れる斧が解決すると思うのですが・・・・・」
「お前も護衛官と同じような思考回路しているのか？」

げふっ！私の心に剣が刺さる。潰してしまえば二度と問題起こさないから最良と思わないけど現実的な解決策だと思うのだが・・・・・・・　これだから文明人は。
「だんなも文明人だろ！」
「いいや、私は野獣だよ。特に夜はな。」
「だんなの戦歴は性愛神殿にいる間に良く判ったから置いといて・・・・・・・・刃物でものを考えるなと宰相閣下が言いたいのでしょ。」
「うむ、王室顧問よりこの子供のほうが道理がわかっている。孤児弟、君なら如何王妃の始末をつける？」
「仕事をさせないで後宮？離宮？良くわかんないけどそんなところで謹慎して飼い殺し・・・・・・・・・・・・公的行事の飾りとして使う以外は何もさせなければよいのでは？その前に見せしめの罰くらいは必要だけど・・・・・・・・・・」
「中々良い意見ではないか。独創的ではないが受け入れやすい、王室顧問に飽きたらワシのところに来い。」
「なにさらっと、私の従者を引き抜きにかかっているのですか！自分で育てなさい！自分で！！」
「よいではないか！二人いるんだから独りくらい！！」

「ダメです！！」

どうして人のものを欲しがるのかなぁ？

「おいら物じゃないのに・・・・・・」

「私は御主人様に全てを捧げた身ですから・・・・・・・・・・・・・・・」

対称的な答えだな。

さて、問題は何時麦秋老を連れてくるかだな？

まずは事務官長のお腹を・・・・・・・何とかしないとか・・・・・・・

閣下、何時にしますかねぇ？

「近いうちに非公式の茶会か何かで呼ぶのが一番無難だろうな。」

「ですな・・・・・・・・・・・・」

私はゆるりと仕事に取り掛かるのであった。

麦秋老と王室顧問（後書き）

酒が切れたから今宵は此処まで。

麦秋老とお茶会（前書き）

あらすじ　王妃は邪魔者。子供産んだし用済み・・・・・・・・・・・・婆に存在価値は・・・・・・・・うわぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・（作者は粛清されました。

―作者は粛清されたので話が続きません―

はいはい、そのままだと腐って邪魔だから復活してね（ｂｙ冥界神）お前の骸を間違って口にしたらねずみやゴキブリが食中毒起こすわ！（ｂｙ森林神＆大地神）

ざわざわ・・・・・・・・・・まだ生かすのか？とか酒の飲みすぎで残り少ないのだから今殺しても問題ないだろうとか、酒はまだかいのぅとか、机の一番下の引き出しにはタイとかの売春宿で手に入れた写真が眠っているからそれを寄越せとか戯言が聞こえる・・・・・・

ああ、俺は戻ってこれたんか・・・・・・・・・・・・・・また、塩鮭とカツオを捌き続ける日々が・・・・・・・・鮪をやりたい！もっとも○間の鮪もブランド価値だけで初夏の頃から仲夏の頃の境港あたりで取れる２０キロサイズの本鮪が旨いのだよ。養殖の脂っこいだけの・・・・・・・・・・・・（漁労関係者に口封じされました）

だから死ぬな！！（ｂｙ冥界神）

作者口が軽いだろう、東北某地方のホタテが北から種貝買って誤魔化しているのだが金が欲しくて身が入っていないのに高く売りつけ

ているとか、震災便乗で数売りたいのに正直に言って不良在庫になったから次に契約を切られそうになっているとか・・・・・・・・・・うわぁぁぁぁぁぁ・・・・・（ｂｙ漁労神）

―漁労神は異世界の漁業関係者から粛清されました―

麦秋老とお茶会

「えっと、前書きが混沌として居るのだが・・・・・・・・・・・」
「麦秋老、世界の外側にまで気を使わなくても・・・・・・・・・・・・」
「そうは言っても神が一柱粛清されているぞ。」
「所詮神なんて舞台装置・・・・・・・・・いくらでも替えがききますし大丈夫です。」
「王室顧問、それは世界に対する問題発言!」
「問題ない!いいですね!」

これだから頑固爺は・・・・・・・・・・・・・
「だんな、普通神々が潰されるのは日常じゃないですから・・・・・・・」
「そうか?結構な数の神が消滅しているぞ。」
「そんな本筋に関係のない話しないで建設的な話をしましょうよ。」
「無理だ!」
「なんで?」
「作者の酒が切れた・・・・・・・・・・・・・今から買出しに行くらしい。」

一一刻後一
「麦秋老、陛下との可否公式ですが会談の席を設けましたのでご参加願います。」
「うむ、これで事務官長の身柄を完璧に保護できるとよいのだが・・・・・・・・・・」

「貴重な文官ですからねぇ・・・・・王国政府としても手放したくないのでしょうが、どうでるか？」
「その辺はそこらの貴族の無駄飯食いでも仕込んで凌いで貰おう。」
「それが良いですな（邪笑）」

「だんな、絶対自分がしでかした事忘れているよね。」
「あれは御主人様の御厚意についていけない貴族の無能力が問題であったから大丈夫ですわ。」
「ねーちゃん、おいら達がついていけたからって貴族様がついていけるかというのは別問題だろう？」
「出来なければスープの出汁にして他の皆様方の食事に振舞いますから無駄がありませんわよ。」
「ねーちゃん、大丈夫か？」

こらこら、孤児姉そんな物振舞ったら他の者がお腹壊すでしょう。
「そうでした、反省いたします・・・・・・・・・・」
「私も食べるならば孤児姉みたいな可愛い子を食べたいし。」
「・・・・・・・・・・・・・・／／／」
「だめだこりゃ、この馬鹿主従誰かどうにかしてくれ。」
「孤児弟よ、ワシの所に来るか？」
「麦秋老・・・・・・・・貴方も突っ込みで事務官長に止めさしているから同類かと・・・・思うのですが？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

麦秋老はうなだれている。

「あの鉄壁の老人が子供の一言で・・・・・・・・・・」
「確かに王室顧問と同類といわれれば精神的打撃が・・・・・・・・・・・・」「一気に白髪が増えている。」「いや、抜け毛が・・・・」

ド田舎貴族共、後でじっくり話そうか？
「「「ひぃっ！！」」」

そんなこんなで茶会の日。
私は麦秋老を連れて陛下の元に向かう・・・・・・・・・・・・・・・
途中孤児姉弟は荒野の戦士達に委ねて置く。ついでだから孤児娘達にも護衛としてついてもらうように願うと群れを率いて護衛に当たる。気に入られているなぁ・・・・・・・
苛酷な環境で生き延びて自分等のような者を二度と作りたくないと叫んだ補佐見習とか親の愛だといって傷跡を認めている傷跡娘がいるからなぁ・・・・・涙脆い馬鹿者達には十分守るに値する者なんだろうな。

茶会の会場に着く。侍女達が甲斐甲斐しく茶と軽食を用意する。
侍女達は自らの職分が終わったとき下がる。
それは密談するに十分な用意が出来た事を意味する。

「では、麦秋老。貴公の言い分を聞こうではないか。」
陛下が一言の元に本音を言えというと
「事務官長は当方で引き取りたく存じます。」
と本音で言い切る。
事務官長は貴重な文官で手放したくないといえば、無体を強いて損なったのは王室の責であるからそれは受け入れよという・・・・・・・
で、事務官長の様子は如何だと聞けば無理やり連れてこられた衰弱と官僚達の酒盛りで療養中だと応える。

麦秋老、自分の打撃で与えた内臓への影響をはぐらかしているな・・・・・・・・・・いいけど・・・・・・

そして、王妃への扱いに話が進む・・・・・・・・・

死刑を望む麦秋老に寛大なる処置を願う国王・・・・・・・・・・・・・平行線である。

そこでくちばしを挟む宰相・・・・・・・・

「王妃様の処遇につきましては暫しの謹慎と奉仕作業、今後は公式行事の参加のみとして政府業務に携わる事を一切禁止とするのはいかがでありましょうか？」

「あれに無駄金ではないか？」

「その点につきましても王妃化粧費を半減すれば十分元が取れますが・・・・・・・」

「斧で解決する事を何で生かすのだ？」

「外聞が悪くありますから生かしておけば使い道がありますし・・・・・・・・・」

腹黒宰相め・・・・・・・・・・・・・胃薬の世話になっているくせに・・・・・・・・

「仕方あるまい、但し事務官長に対する手出しは我等一同本気で立ち向かうぞ！！」

麦秋老はあくまでも頑固だった。そうでなければ麦秋老でないしな・・・・・・・・

さて、麦秋老自体の幕引きに手を貸しますか・・・・・・・・・・・・

厳しくやさしい時代遅れの頑固者。

「陛下、麦秋老と辺境貴族連合が私兵を王都に差し向けた件については如何致しましょう？」

「あれは護衛ときいて居るが。」「そもそも我々王室の失態からだから別に不問と・・・・・・・」

「だまらっしゃい！陛下方の失態とはいえ反乱未遂なんですぞ！それを放置するとなれば王国の先は成り立ちません！はっきり言って私のときでさえ私を処刑すればよい者を有耶無耶にしている事自体が問題なのです。麦秋老と辺境貴族連合が一時は本気で王国に弓引いているのですよ。それについて処遇しない事には他国に舐められますよ！！そうでなくても後の世に我々を前例として反乱を起こされたときどれだけの民草の血と涙が流されるんと言うのですか？其処を考えて発言してください！！出来ないならば今この場で私が貴方方を叩きのめして反逆者になりますが宜しいでしょうか？」

「それでも麦秋老は功臣で・・・・・・・・・・・それを処断するとなれば王国の威信が・・・・・・」

「黙れ！功臣に対して其処まで思いつめさせている時点で威信なんて意味がない！！」

「こちらの不手際で・・・・・・・・」

「ああ？不手際を認めたら他国やら他の貴族に付け入る隙を与える羽目になるだろう！！今更ながら言うけど必要ならば事務官長とその家族を殺すくらいのことを念頭に入れて・・・・・・・」

「王室顧問・・・・・・・・・・・・・ワシがこの場で・・・・・・・・・・」

「いえ、これは処罰だから意味があるので自害なんかされてもごみが増えて邪魔なだけです。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「では、如何したら良いというのかね？」

「反乱未遂ですから死刑！陛下の温情で一等減じて貴族称号剥奪。家名断絶が穏当かと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・その後暫くしてから

子息あたりに家名復帰を許可するくらいが妥当かと。勿論子息殿には功績を架空でも用意しないとダメでしょうが。」

「ふむ、それで話をつめよう。」

「すまぬが麦秋老、この茶番に付き合ってもえら得ぬか?」

「判った・・・・・・・・・・」

こうして、茶番劇の筋書きは出来るのであった。

麦秋老とお茶会（後書き）

酒は良いねぇ・・・・・

今朝の酒は雪小町福島の地酒である。

麦秋老と赤き腹巻（前書き）

あらすじ　事務官長は下痢ピー　そして茶番劇

麦秋老と赤き腹巻

茶会で決まった結論を元に王室会議を開く事になる。
その糾弾の場に現れるは麦秋老、有象無象の前にして心なしか青ざめた顔をしているが毅然として場を睨み付ける。

王室に楯突く田舎貴族がとか悪逆の徒めとか罵詈雑言が飛んでいく。
私はこの腐れ貴族共に嫌悪感を隠せない。そして言葉を発する。

「黙れ、能無しども！どうして麦秋老が兵を率いて王都まで行かねばならなかったのか知ってその口をたたくのか？」
「知ろうと知るまいと反逆は悪だ！」
「そうか？では貴殿は家之子郎党が無体にさらされても忠義として受け入れるというのだな？」
「・・・・・・・・・・・・・・・うむ。」
「その間は何だ！悩まず忠義をすればよかろうに。そういえば貴殿の娘は可愛い盛りだな、王兄殿下（ロリコン）に差し出して忠義としたら如何だ？」
「そ、それは・・・・・・・・・・・・・・・」
「それが答えだ！」

喧喧囂々、煩型があーでもないこーでもないと騒ぎ立てる。
麦秋老は一言も発さずに場を眺めている。

そうこうしていると宰相閣下を伴い国王陛下が入場する。
「静まれ！」
先触れの護衛官が鑓矛を床に打ち付けると床の破片と共に大音響がする。
静まり返った貴族諸氏、其処に宰相閣下が声を上げる。

「貴公等も存じ上げて居ろうが王妃の無体から逃げ出した王妃付事務官長を救出せんと麦秋伯と辺境貴族連合の件について話し合おう。」

「王妃の無体とは何か?」「どうせ仕事から逃げ出したのだろう?」

「下級官吏くらい幾らでも替えがいるのに馬鹿なことだ!」

ピキピキ・・・・・・・・・私の米神から青筋が浮き出るのが良く判る。

この腐れ貴族共が・・・・・・・・・・

私が怒鳴り声を上げようとした矢先、

「静まれ!わしからこの件について説明しよう。」

宰相が淡々と説明する。

王妃の謹慎からその後の勤務態度、故に起こった政府機能の停滞・・・・・・・・・寡兵で立ち向かう王妃付事務官達・・・・・・・・・・それを諫めぼろきれのようになった事務官達と辛くも逃げ延びた事務官長。故郷に落ち延びた事務官長を襲う追っ手・・・・・・・・・・彼もまた今だ癒えぬ傷を負っていること・・・・・・・・・・(正確には二日酔いと麦秋老の打撃による)

貴族達も黙る・・・・・・・・・

「この件については事務官長を不問とし王妃については公的行事以外は無期限謹慎とする。」

どよめく貴族共・・・・・・・

「そして、麦秋老に関しては王室に対する反乱として死罪!以下辺境貴族連合所属のものに対しては一家あたり金貨3枚の罰金。但し、麦秋老に関しては以前の功に免じて罪を減じ家名断絶とする。」

更にどよめきを増す貴族。

本人の死罪より家名断絶という処分はその家の名誉をない物とする。家名第一の貴族としては酷すぎる刑罰であろう。
家名断絶で笑うのは守護辺境伯家くらいな者であろう。

「ありがとう御座います陛下とは申しあげません。そもそも、陛下が王妃様を御していればこのような事態に陥らないものでしょうから・・・・・・　何故に民草を蔑ろにする者に権力をお与えになったのか聞きたいものであります?そして諸兄等に問いたいですな、どうして誰もいさめなかったのかと・・・・・・・・」

ばたり・・・・・・・・・麦秋老が倒れる。足元には赤い水溜り・・・・・・・・・・

この糞爺影腹を切ってやがった!!

青白い顔だと思っていたが緊張ではなく失血だったのか・・・・・・・・・

「早く医者を呼べ!!」「良いではないか反逆者くらい!!ぐえっ!!」

「とりあえず止血を・・・・・・・・・」

暴言を吐いたのは私が殴り飛ばして麦秋老を助け起こす。
息も絶え絶えで意地を張っている糞爺は
「願わくば・・・・・・・・・・無体に泣・・・・・・・くものなき施・・・・・政を・・・・・・・・・・」

顔色を失う国王陛下に宰相・・・・・・・・・・立ち込める血の匂い・・・・・・・・・・

そばに駆け寄る庭園公・・・・・・・・・・

「どいてください!」

庭園公に連なる血族の得意技である癒しの術。その光が庭園公の腹部から命の逆りを押し止める・・・・・・・・・

せめて無事でいてくれ。

一時的処置を終えた庭園公は麦秋老を連れて庭園に引き篭もる・・・・・・・・・

誰かが声を上げる

「麦秋老の功績と今の影腹に免じて刑を軽減できぬのか？」

「いや、ただの嫌がらせだろう！放置しておけ！」

「あの功臣がここまで行うにはそれなりの理由があってしかるべきだ。その理由から言っても罪に問うのがおかしい・・・・・・」

喧喧囂々・・・・・・・・

一時を越える激論の末、本人の引退及び貴族籍剥奪。家名は娘婿に継がせる事を条件に存続許可に収まる。

麦秋老の娘婿か・・・・・・・押しが弱いが堅実で麦秋老とは違うが領民思いの良い領主になるな。

ここには居ない麦秋老の娘婿の事を思い出す。

数日後・・・・・

麦秋老は一命を取り留める。腹部の傷がふさがりきっていないが庭園公曰く

「馬鹿の治療は此処までですわ。後はつける薬がないからご自分でなさって。」

と辛辣な事を言う・・・・・

腕はいいのだが言葉がきつい・・・・・・・・・おまけに腐っているし・・・・・・・

「最後のは関係ないでしょ！」

腐った者に言われたくない・・・・・・・・・

面会を許可されて麦秋老と話す。

「糞爺、議場の床の清掃が大変だったぞ！！」

「ふんっ！そんなことを言いにきたわけではないだろう用件を話せ。」

「家名だけは残ったぞ、爺お前は平民に格下げだ！」

「・・・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・」

自分が生き残っていることにいまだ実感が持てずにいる糞爺に問いかける？

「麦秋老、これからのことを決めているのか？」

「否、娘の元に厄介になって孫と遊んで過ごそうと思っていたが・・・・・・」

「老みたいな頑固者は鬱陶しがられるぞ。それよりも孤児院で教鞭でもとらないか？今、王室向けの官僚を育成しているのだが教えることが出来るのが少なくてな・・・・・・・・・・」

「そんな魂胆か、ワシの教えは厳しいぞ。餓鬼が逃げ出さねばよいがな（苦笑」

「なぁに、私の弟子達はそんなにやわではありませんよ（邪笑」

そのとき孤児院で勉学に勤しむ孤児達に悪寒が走ったというのは笑い話。

通いの子供達はそんな予感を知らず一時の平穏を楽しんでいた。

貴族の子息連中は逃げ出すだろうな（邪笑

麦秋老と赤き腹巻（後書き）

その頃の麦秋領城館。

麦秋老の娘夫婦は身支度を整え掃除をしっかりとさせ使用人や配下の兵達に暇を出す。
麦秋老が兵を挙げたときから夫婦で決めた事だ。

多分反逆ととられて麦秋領は接収されるだろう。その後、領民たちがどんな無体をされるかわからないがそれに抗おうと・・・・・・・
弱腰な娘婿にしては似合わぬ決断だ。其処には弱気な婿養子の顔ではなく覚悟を決めた男の姿があった。

それに感化されたかは知らないが暇を出された兵達や使用人の中には家族ごと手弁当ではせ参じる者がいる。

「馬鹿者共が！！これは麦秋伯家の戦い、関わらなければ何事もないのに！」
「水臭い事はなしですよ若旦那、大旦那には世話になっているし嫁にはけつをたたかれておらが行かなければあたすがいくとばかりに包丁持ってはせ参じる始末でしょう・・・・・・・・・・」
「御屋形様の喧嘩ですからねぇ・・・・・・あの爺様、抜けているところあるからあっしらが整えてあげないと気の抜けたものになってしまうでしょうし（笑」
「ちげぇねぇ。」

集まった領民その他数百・・・・・・・・・その中には事務官長の妻子がいる。

「私達親子のために立ち上がっているのにのうのうとしてられません。」

事務官長の妻の手には似合わぬ剣が握られている。

「愛しきお馬鹿さんたち・・・・・・・・・この一線は勝ちを拾えるとは思えませんが意地を見せますわよ！」

麦秋老の娘の檄に集まった衆は声を上げる。

王国の伝令が早馬で老の結末を届けに来たときには街道が封鎖され意気揚々と戦いの準備をする麦秋地方の民草の姿に腰を抜かすのであった。

その収拾に病み上がりの麦秋老が意地でも止めると倒れたり王兄殿下が土下座内政に向かったりするのは別な話。

作者も書く予定はない。

禁酒令と馬鹿官僚共（前書き）

あらすじ　事務官長は何時回復するのだろう？

禁酒令と馬鹿官僚共

「陛下、王宮の食堂から苦情が来ております。」

「なんだ?国王つき事務官。」

「官僚共の酒代が嵩んでいるので予算の増額と勝手に持ち出すのを止めてくれとのことです。」

「市場管理の衛士からも市場で酒盛りするのは勘弁してくれと苦情が出ております。」

「経理部門からも酒代の異常な増加に監査を要求しております。」

国王執務室、官僚共の取りまとめた書類を判子押すだけという印象が強いが国王は国王で自前の事務官を抱えて書類の審査を行っている。そうでもしないと官僚共が暴走したときに突込みが入れられない。

今代の官僚達は馬鹿な事に全力を費やすところがあるが基本的に王国に忠誠を誓って汚職などに無縁である。

「ところで王室顧問、事務官長の容態はどうかね?」

「はい、陛下。大分良くなっていますが今しばらく時間がかかりそうです。治癒魔法や神聖術の世話になる段階は過ぎていますが体力の回復とか諸々が・・・・・・・・・・・・」

「そうか、一度回復してから話がしたいものだな・・・・・・・・・・・・」

「わかりました、事務官長にはそう申し伝えておきましょう。」

一応麦秋老の一撃は黙って置くように釘刺さないと・・・・・・・・・・・

「まぁ、腹部への一撃が致命傷だったということは聞いて居るがそ

の前の飲酒でも結構内蔵系に負担がかかっていたそうだな。」

ばれてる。

「そうですねぇ、あの時は皆で樽を開けてましたからねぇ・・・・・・」

「そんだけ馬鹿飲みすれば普通の者ならば数日は動けないよ。」

「まるで官僚たちが底なしの大酒呑みみたいな言い方ですねぇ・・・・・」

「見たいなというか実際そうだろう！何で酒がらみの苦情しか来ないのだ！！」

「王国政府の運営自体は順調ですし、外交も小さな諍いはありますが燃え盛る前に手を打ってありますからねぇ・・・・・せいぜい、私が観光旅行に行こうとすると止められることに抗議する位でしょう。」

「それは正当な抗議だからなぁ・・・・・」

「酷いですなぁ、陛下。私のような下っ端貴族が行った所で問題なんかおきるわけないじゃないですか！」

「いやいやいやいや、君の教え子達が怖がって雲隠れして政府が機能しなくなると苦情が来ているのだが。」

「大丈夫ですよ、引きずり出して仕事机に縛り付けてあげますから・・・・・・・・・・」

「それをするから外交問題に・・・・・・・・・・・・・」

「いっその事私を外務官にして諸外国に派遣するのは。」

「陛下、諸国連名で王室顧問を国外に派遣するのだけは勘弁して欲しいと嘆願が着ておりますが・・・・・・・・・」

と、陛下と馬鹿話をするのであった。

しかし情報はやいなぁ・・・・・・どこかで漏れてないか？
ためしに王妹殿下の【聖王魔王本】（ヤオイ作家）でも朗読してみるか・・・・・・・・・

「其処の事務官、この本を朗読しなさい。」
「・・・・・・・・・・・・王室顧問、何の嫌がらせですか？」
「勿論、国王陛下への嫌がらせだが・・・・・・・・・・」
「ごほん、王室顧問。外交問題を起こす積りかね？」
「いえいえ・・・・・・・・・・・・」

「陛下、聖徒王国と魔王国連名でそんな本朗読しようとするな！それ以前にそんな本は燃やしてしまえという抗議文が着ておりますが・・・・・・・・」

どこかで漏れてない？
しかも犬猿の仲の両国連名とは・・・・・・
「そりゃ、隣室には諸国の大使を待たしておるしな。」
盗み聞きか・・・・・・・・
「成程、ぜひとも【ヤオイ本輸出入禁止条約】を制定してもらわないと。」
「そんな話題で時間を割けるか！！」
「大丈夫ですよ、各国の貴婦人が腐化していることを情報として仕入れてますので、持ちかけたら食いつくのでは？」
「それ以前にワシがいやだ！」
「そりゃそうか。」

「陛下、時間です。」
「そうか、では行くか・・・・・・・・・王室顧問、官僚達に酒は程ほどにしろと釘を刺しておけ。」
「無理だと思いますが一応刺しておきます。」

さて、官僚部屋に行きますか・・・・・・
何か大使達を集めた部屋からはヤオイ本は即刻禁止するようにとかという話が出ているがそれはほっておこう。
どうせ決まるわけないだろうし女性の大使もいれば女王の国も在るし・・・・・・・・・

「おーい、お前ら屁以下もとい陛下が酒はほどほどにしろといっていたぞ。」
「王室顧問か、我々はそんなに飲んでいないだろう。」
「そうだなぁ・・・一昨日魔国大使の竜族の爺様を飲みつぶした程度だし。」
「一昨日は極北連合の副大使の熊討の勇士と呑んでいたろう。竜族の爺様は一昨昨日だ。」
「あれ?一昨昨日は聖徒王国の大使の聖騎士を戸板送りにしていなかったか?」

お前等、どれだけ外交官潰せば気がすむんだ!
「いやぁ、向こうから酒席に誘われてねぇ・・・・・」
「勿論こちらからの返礼の席を用意する事も忘れていないぞ。」
「で、他の面々は兎も角竜族と言えば酒に強かったはずだぞ!それを潰すなんてどれだけ飲ましたんだ?」
「緑魔酒を主として・・・・・・・・・ちゃんぽんで・・・・・・」

このアル中度共が・・・・・・・・・緑魔酒なんて悪酔いする物を飲ませるんじゃない!!

「あの爺様、茸酒だと弱すぎると・・・・・・・・・言ってたし。」

「茸酒って・・・・・・・・・・・どこの未開民族の成人式ですか！！」

「あれはあれで、旨い者だがなぁ・・・・」

「飲むな飲ますな作るな！！」

「良いじゃないか、本人も了承の上だし・・・・・・・・・・」

馬鹿がいる・・・・・・・・・・・いや複数形だから馬鹿共がいる・・・・・・・・

誰かこいつらにつける薬を・・・・・・・・・・

どびゅーーーん！（匙を投げる音）

無理です（ｂｙ医療神）

おおっ、匙がよくとぶなぁ・・・・・（ｂｙ鳥類神）

星にぶつけるのは止めてくれ運行が狂う（ｂｙ天空神）

ごめんなさいね（ｂｙ医療神）

そもそも酒自体が薬だからねー（ｂｙ酒精神）

薬をがぶ飲みしたらどくだろー！！（ｂｙ医療神）

まぁまぁ、そんなに切れないで一杯やりなよ（ｂｙ酒精神）

どもども・・・・・・って、酒を飲ませるなぁぁぁぁぁ！！（ｂｙ医療神）

そうか、こいつらにはつける薬がないのか・・・・・・・・・・かわいそうに・・・・・・・・・

うちの可愛い子供達に馬鹿が移るといけないから退避させるか。

「ちょ、王室顧問！自分に棚に上げて我等の酒癖の悪さを出すか！」

「だって、私酒癖は悪くないよ。酒は飲んでも飲まれるな。ってい

うであろ。」

いいこというねぇー（ｂｙ酒精神）

「それにね、戦神曰く【心に棚を作れ】と教えを説いているではないか！！」

いってないいいってない！！（ｂｙ戦神）
それって異界文学の一説だね（ｂｙ文芸神）
たてーばんこくのろうどうしゃー♪（ｂｙ演芸神）
それは労働スト決起！モトネタは（版権削除）だろうが無理やりボケを入れるな！！！（ｂｙ知識神）

「いってないいいってない！！戦神様が泣くぞ。」

泣かないもん男の子だから、でも何故だろう目から汗が・・・・・・・・・（ｂｙ戦神）
よしよし、強い子だから泣かないの（ｂｙ豊穣神）
うん・・・・・・・・・・・（ｂｙ戦神）

なぜか節酒の話は有耶無耶になってしまった。
よくあることだ。

私も子供達と仕事をしながら今日はどこで飲もうかと馬鹿話をしていると陛下が来る。

「お前らぁぁぁぁぁぁ！！誰を飲みつぶしているんだ！！酒合戦しろと挑戦状を叩き付けられたぞ！！」

えっと、いいですか？
大使達も馬鹿ですかぁぁぁぁぁ！！

まともな人物送ったら染まって大変じゃないか！（ｂｙ聖徒王国担当地域神）

禁酒令と馬鹿官僚共（後書き）

はい、お酒は楽しく適量を・・・・・・・・・二十歳からとは言いませんけど呑みすぎて迷惑をかけないように・・・・・・・・・

はい、酔っ払いの作者が言っても説得力がないですね。

禁酒令と馬鹿大使共（前書き）

とある王国で大使達との会談。

「とりあえずは魔国と人族連合の間ではこれまで通り我が国を緩衝地帯として交易を行う事でよろしいですかな？諸条件についても、麻薬、人身売買の禁止を改めて盛り込ませてもらいますが・・・・・・」

「その件なんだが、うちの侯爵の身代金をもう少し負けてもらいませんかな？」

「その件については話がついているはずです。うちの国民をさらっておいて奴隷として売り出していたのは貴国の侯爵様ですよ。悪いですけど芋虫にして晒し者にしておきたいのを我慢しているんです。金貨の５００枚くらい安いものでしょう。」

「戦でもするつもりですか？」

「我が民を脅かすものを放置しているならばそれは仕方ありませんね。戦争は最低の愚策ですがこの際だから奴隷商人を保護しようとする国を潰すのも吝かではありませんな。」

「……本国に相談してみます。」

「ちなみに期限までに支払いがなければ、うちから輸出している小麦を止めますからそのつもりで。」

「わかりました。（この某王国め。足元見やがって）」

「負けて差し上げてもいいですよ。ただし貴国に奴隷解放令と奴隷禁止令を公布してくれるのでしたらね。金貨５０枚くらいにはして差し上げますよ。」

「そういえば魔国大使、貴方の姪御さんが【聖騎士総受本】を綴っているようなんですが止めてもらえませんかね？」

「無理だろう、王国の。そっちの王妹殿下を止めることできるならばその方法を知りたいのだが・・・・・・・・」
「ううっ・・・・・そっちも駄目ですか。」
「勘弁してくださぁい！」
「聖騎士殿、すまないねぇ・・・・・」
「雷竜の長殿・・・・・・・・我々男というものは無力なものですな。」
「ああ、無力だ・・・・・そっちの第一公爵令嬢もなかなか・・・・・」
「恥ずかしいことに・・・・・・【魔王勇者本】略して【まおゆう】なんて分類を作り上げまして・・・・・・・・某王国の初代人外公との三角関係を・・・・・・・・・」
「それは聞いてないですよっていうか、聞きたくなかった・・・・・」
「お互いに苦労しますなぁ・・・・・」
「ええ・・・・・・・」「この件についてはお互いに協力いたそうか。」
「うむ。魔王陛下も苦慮されているから……まさか魔王国第5王女が腐化しかけているから」
「うちも聖女様が・・・・・・・・」
「頭から腐るのは・・・・・・・・まさか腐教とかしてないでしょうな？」
「それが・・・・・・・・ううっ、私の力及ばず・・・・・」
「うん、悪くないよ悪くないんだ聖騎士殿は・・・・・・・・すまんな我が国に召喚された忌々しき異世界人があんな物を流布してしまったからだから。」
「ああ、神よ。我等は貴方を恨みます。」

ここに長く対立の歴史を歩んでいた人族連合の要とも言える聖徒王

国と異種族連合ともいえる魔国との初めての協調路線が築かれるのであった。

ごめんよー　文学神の暴挙を止められなかった（ｂｙ境界神）
まこと異世界人の欲望は理解しがたい（ｂｙ大地神）
恨まれる筋合いはないわ！女性だけ餌食にされる文学なんて不平等ですわ。それに異世界人の持ち込んだ文学は世界をさらに芳醇にしてくださいますわ。（ｂｙ文学神）
しかし、世界平和がこんな形でなんて……記録に残したくない（ｂｙ歴史神）

うんうん、その気持ちよくわかる。（ｂｙ風の神）

「ところで雷竜の長殿、貴殿が酒場で打ち取られたという話を聞いたのですが。」
「いやぁ、お恥ずかしい。交易の件で某王国の官僚共と酒場に赴いたときに緑魔酒をしこたま飲んでしまいましてね。」
「かくゆう私も官僚達に腐女子対策について教えを乞いに行ったときにしこたま飲まされましてねぇ・・・・・・・・」
吾輩もとか我が国の副大使もとか前任大使が飲みすぎで引退したとか・・・・・・・出るわ出るわ・・・・・

「某王国の官僚達には酒の席でつぶされているから一度打ち取らないか？」
「それはおもしろそうだ。」「同意する。」「では、酒は用意しよう。」
「このまま引き下がるのも我が国の威信に・・・・・・・・」「それはないから。」

「そういうことで国王陛下、貴国の官僚達を酔い潰す許可を！」
「・・・・・・・・・・う、うむ。仕方あるまい。（あの馬鹿共が外交問題おこしやがって）」
「では、日時とか場所とかは後程決めるとして準備にかかるとしよう。」
「本国から酒豪を呼び寄せねば・・・・・・・・・・」「落陽国の本気だな。」「鬼族と竜族を・・・・・・・・」「酔い覚ましの魔具があったなぁ…・」「極東のそれは反則だろう！」「そ、そうか？（がっかり」

こうして酒合戦が始まるのであった。（冒頭につながる）

禁酒令と馬鹿大使共

陛下の怒声が響き渡る!!
「お前等、どれだけ他国の者を酔い潰したんじゃ!!」
「えっと、魔国の雷竜の長殿に聖徒王国の聖騎士様に・・・・・・・奴隷売買で捕まえた某国の侯爵様も酒の席で漏らしたことをもとに捕まえたなぁ・・・・・」
「南国商業連合の営業担当も二人ほど本国送りになっているけど……」
「それを言うなら洛陽国の大使なんかは裸踊りして見苦しかった・・・・・・」「裸踊りといえば酒国の姫大使が脱ごうとしているのは・・・・・・・・」「それは見たかったぞ!」「どうして誘わなかった!!」「馬鹿言え、脱ぐの止めようとすると切り付けられるし死にかけたんだぞ!!」
「・・・・・・・・・……それでもいいから見たかった。」
「それはわしも見たかったなぁ……」

陛下・・・貴方には王妃がいるでしょうに!
「たまには違うものも・・・・・・・」
「それは十分理解できますが・・・・・・・」

「うぉっほん!!」
宰相閣下(たぬきおやじ)の咳払いに一同静まる!
「兎も角、向こうから再戦の挑戦状が来たのだからお前等は無様さらすんじゃないぞ!」
「さらしたら?」
「禁酒令発動する!!」
「げっ!」
「その上で減給処分だ!」

「うぐっ！」
「更には王都中の酒場に手配書回して出入り禁止にしてやる！！」
「ひどい・・・・・・・・・」
「大丈夫だ、君たちが無様晒さなければ良い！」

うなだれる官僚共・・・・・・・宰相閣下の禁酒令がよほど効いているのだろう。
最近官僚の酒がらみの苦情が多いから腹に据えかねているのだろう。
私には関係ないけど・・・・
「王室顧問、君も孤児姉に飲みすぎだと心配されているぞ。程々にしておけ。」
くぎを刺されてしまった。
孤児姉・・・・余計なことを。
「実際ご主人様は飲みすぎですよ。月に銀貨１０枚とか家計に余裕があるといわれましても控えてもらいませんと・・・・・・・」
「それは飲みすぎだな・・・・・・・・」
「孤児姉は良い家令になりそうだな。」
「実際、孤児姉がいなければ私はもっと自堕落に過ごしているからな。頼りになる従者だよ。」
「・・・・・ご主人様。」

「それはそうと、王室顧問。準備はよろしく！！」
「なんでですか？」
「この官僚共に任せると酒に毒を混ぜかねないから・・・・・・・・・」
「そこまではしないと思いますが・・・・・・・せいぜい弱い酒に見せかけて性質の悪い酒を用意する程度でしょうし・・・・・・・・・」
「それに、この大馬鹿共は監禁して仕事させないとな！！ここの所酒がらみの苦情が多発していて少しお灸を据えないと・・・・・・・

・・いかんだろう。」
「それは良いですけど・・・・・・・・死にますよ官僚達。酒が主食だから……」

ああ、禁酒して仕事しろと聞いた途端にうなだれる官僚達・・・・・・どうするのだろうこれは？
「また、俺達の仕事が増えるのか・・・・・・・・」
あきらめろ、補佐見習。君はそんな定めだ！
「大丈夫・・・・・・・・・補佐見習には私がついているから・・・・・・」
「傷跡娘・・・・・・・・お前だけだよ、頼りになるのは……」
「あのぅ、私達もいるんだけど・・・・・・・」
「もう二人の世界だね。」「らぶらぶ。」

「ほら仕事しろ！！官僚共（ばかども）！！子供にばかり仕事させるんじゃない！！」
「「「うぃーっす。」」」

さて、どこでどのように行うかね？
勝っても負けてもいいお祭り騒ぎとして考えておけばいいかな？
酒はこっちで用意して、解毒魔法等の使用は禁止で・・・・・・・・
便所で吐いて逃げるのは反則で・・・・・・・
酔いつぶれたり吐いたり粗相をしたら負けにして……
適当に官僚共を潰させて他国に花を持たせないといけないからなぁ・・・・
酒だけだと悪酔いするからつまみを用意するか？それとも持参も可とするか？

食べ物の戒律とか好みとか色々あるからなぁ・・・・・

「だんな、市場でお祭り騒ぎにしたらどうだい？場所もそこそこあるし旨い酒と肴は揃うだろう？」

「それは良いな、警備の問題があるがまずは市民とかの造った酒の品評会なんかをして我が国の物産の営業をするのも悪くなかろう・・・・・・・・良い案だな。」

「酔いつぶれたものの介抱するための人手が必要ですわね。」

「それだったら医療神の神殿から人手を借りて、性愛神殿からも綺麗所を揃えてみるのも面白そうだな。」

「なんか大掛かりになってますわね。」

「その方がよいだろう。派手に騒いで楽しんで有耶無耶にしてしまおう！！」

「ついでですから賞品とか罰とかも用意したらいかがですか？」

「それも面白そうだな・・・・・・・・・酒を一樽とかつまみの詰め合わせなんかでいいか……」

「だんな、盃なんかいいんじゃないか？酒飲みの証として大杯で栄誉とか……ダメ押しで酒精神あたりから祝福つけてもらうとか・・・・・・・あのお方だったら酒の匂いにつられて出てきそうだし。」

「なんか神の扱いが適当すぎる気がしないでもないが頼んでみる価値はありそうだな。」

だんだん案が煮詰まってくる。あとは挨拶回りだ・・・・・・・・・何事にも根回しが必要だな。

禁酒令と馬鹿大使共（後書き）

次は酒合戦の場面となるのでしょうか？

ああ、酒が飲みたい・・・・・・・・

酒合戦と馬鹿官僚（前書き）

あらすじ　酒合戦だ！吐くまで飲むぞ！！

はいたらさけがもったいないねー（ｂｙ酒精神）

酒盛りシーンが嫌いな方は回れ右ね。しばらく酒盛りだけで話が進むから。

酒合戦と馬鹿官僚

数週間後、各国の大使に招待状を出し酒合戦の挑戦状を出した。
挑戦に応じないものの見物にという大使も多く、何故か各国の王族やらなんやらが参加表明したり見物に来たりしている。
こいつら実は暇だろう！

「いえ、国元にいる家臣団が優秀でなぁ・・・・・任せられるんじゃよ。」（ｂｙ某国国王）
某国の家臣団の涙目が目に浮かぶようだ・・・・・・・・・反乱起こされるなよ。

主催が我が国ということで準備にてんてこ舞いとなっている。
各国から選りすぐりの酒豪が集められ酒盛りが始まっているところがある。
そんな早くから飲んでいたら本戦でつぶれてしまうだろう。

この日ばかりは警備上の理由から市場を閉鎖してしまうことにした。
次の日に平民向けの酒合戦をすることにしているのでそれで勘弁を・・・・・・・

まさか、王侯貴族ぞろぞろの場になってしまったことに緊張している市場の商店主達……普段は農家のおじちゃんおばちゃんやら小商いの商人たちは緊張してコチコチである。
わからんでもないけどね。とりあえず無礼うちは勘弁してもらうことにする。

「まぁ、平民に礼法とか期待するのが間違いなのだよ。それにこれは祭りだ！」（ｂｙ聖徒王国第一公爵）

「嫌ならば受け答えは家来にやらせておけば礼儀知らずに関わることもなかろう。」（ｂｙ綿羊国某族長）

ごもっともで・・・・・・・

酒とかの用意は市場の協力を得ているけど給仕は性愛神殿経営の娼館とか酒場から綺麗所を呼んで応対させている。見物の衆は美人に酌をしてもらって鼻の下を伸ばしている。女性陣の為に美形の酌夫も用意しているからそっちも問題なし！

酒も我が国の酒のほかに各国の酒を用意しておいてある。

この時ばかりは商会公の実力がものを言うねぇ……

さて、私も孤児姉の酌をさせてほろ酔い気分で酒合戦の開始を宣言する！

ちなみ酒合戦のルールは

1、三人一組で誰か一人でも潰れたら負け。粗相や絡み酒も潰れたとみなす。

2、飲む順番や飲み方は自由。一人で限界ぎりぎりまで飲んで交代してもよいし、三人で飲み尽くしてもよい。

3、解毒魔法や薬物その他それに類する方法の使用は禁止。

4、便所で吐いて酒を抜いたりすることも禁止。

5、つまみは持参でも用意されたものでもよい。ただし、前項3に抵触しないものとする。

一応、王家秘蔵の酒一瓶とつまみのセットが優勝賞品として用意してある。

後は大杯！

さて始まりますよ。解説の酒精神様よろしくお願いします。

はいはい、よろしくねー（ｂｙ酒精神）

まずは果実酒を一樽である。

「さぁ、酒合戦は開始となりました・・・・・・・・解説の酒精神様どこの国が有力だと思われますか？」

そーだねー、酒に強い竜族と鬼族で固めた魔王国とか酒席無双の姫巫女と蟒蛇族を投入した極東国なんかが有力だねー・　あとは、常に火酒を嗜んでいる酔っ払い天国の極北連合なんかもいい成績残すんじゃないかなー？どちらにしてもいろいろ面白い展開になりそーだねー（ｂｙ酒精神）

「ここで、一気に樽をあけた剛の者がいる！！魔王国の鬼族随行員だ！！すごい！樽を持ち上げて一気飲みとは鬼族の膂力と酒の強さに任せた力技だ！！　ああ！鬼族の随行員竜族の大使から殴られている！」

そりゃそーだねー、酒を独り占めしたんだから（ｂｙ酒精神）

あっ、鬼族随行員正座させられている。

それにしても各国の飲み方はい色々あるねぇ…・

塩をつまみにしているのは西南諸島連合だし、食べ物をこれ見よがしに並べて食べているのか飲んでいるのかわからないのは西部平原国家、美人の酌婦を自ら用意して悠然と飲んでいるのは南方商業連合か？ところで車座になって一人飲んでは次の者に盃を回して囃し立てているのはどこの国だろう？

♪それ何某のちょっといいとこ見てみたい♪
一気一気一気一気・・・・・・・もういっちょ！
そらのめやれのめのみまくれ～♪

あれはねー異世界人の組だねー
飲むときに掛け声をかけてそれに合わせて飲むのが彼らの流儀らしーよー（ｂｙ酒精神）
「なるほど、さすが酒精神様。酒に関しては万全ですねぇ…・」
それほどでもあるよー。孤児姉ちゃんこっちにも頂戴ねー（ｂｙ酒精神）

この様子を見ている各国の王族も我等も負けじと騒いでいる。ところで金貨が回っているけど何しているの貴方達。

「もちろん最初に潰れる組を賭けているのさ！因みに我は西部平原国家が最初に潰れると思っているのだが・・・・・・・」
「つまみもなしに飲んでいる洛陽国の呑兵衛達もすぐに潰れそうだがなぁ・・・・・」
「慣れない果実酒で苦戦している極東もつらそうだな・・・・・・・・・」
「それでも極東は蟒蛇の青年が楽しんでいるねぇ・・・・・・歌い始めたよ……」

そして我らが官僚達は？
えっと、何しているんだい？
果実酒のつまみに火酒？つまみはそれなりにあるけど……お前ら馬鹿か！！

「だって酒精が足りないから・・・・・・・・・」
「いやぁ、久々の酒だし・・・・・・・・・なぁ、近衛文官。」
「そうだとも、しかしこの酒は旨いなぁ・・・・・どこの銘柄だ？」

突っ込み所満載な非常識な酒盛りに唖然とする各国の代表たち。
それについていけるのは蟒蛇族のいる極東か魔王国位なものだろう？

官僚達はあるちゅうだからねー（ｂｙ酒精神）

あちらこちらで酔いが回り始めている者たちがいる。
参加表明した西南交易都市国の老王と大使達は早々と白旗を上げているし、東南緩衝地帯国の色黒の随行員は便所に駆け込んでいる・・・・・飲みすぎだろう。大使達はほとんど色づいていないから若さに任せて彼に一気飲みとかさせたのか？

参加している代表の中に医者に酒を止められているのに飲んでいて・・・・・・・あれ、大使の奥方とそのお付らしいのに見つかって説教されているのが見えるが・・・・・・・・あれは霜降国の大使だったかな？
随行員と本国から呼ばれたらしい酒豪氏は大使を放置して歌いながら飲んでいるし・・・・・・・・・酒の肴にしてないか？これは反則負けかなぁ？

一人潰れているも当然だから負けだねー（ｂｙ酒精神）
「でも、大使を放置して飲んでいる二人は？」
いいんじゃないー、飲む分にはー（ｂｙ酒精神）

そうこうしているうちに時間が来て果実酒の時間が終わる。
その時点で飲み切れて居ない組、戦線離脱を表明した組とかが三割ほどいる。

ちなみに一番最初に潰れたのは東南城塞都市伯国の組で転んで樽をぶちまけてしまい反則負けとなってしまったのである。

「ううっ、酒が飲めなかった（涙」（ｂｙ転んだ東南城塞都市伯国随行員@簀巻き）

「大使、客席で飲み直しますか・・・・・・・」
「そうだな、この馬鹿随行員は放置しておいて」

酷いなぁ・・・・・

酒合戦は次の局面に続く。

酒合戦と馬鹿官僚（後書き）

お酒は楽しく適量を、ちなみに異世界人の囃し歌は一気飲みのコールです。
一気飲みは危険ですのでやめましょう。

酒合戦と乳酒（前書き）

あらすじ　酒びたり

作者からのお願いだ、お酒は楽しく適量を・・・別に二十歳になるまで飲むなとは言わないけど自分で稼いだ金で飲もうね。

酒合戦と乳酒

果実酒一樽飲み干した参加者たちは次なる酒に取り掛かる。

次は乳酒である。見た目はヨーグルトなのだが、僅かに酒精が入っている。

これは一人丼一杯づつ飲んでもらいましょう。（他のものに飲んでもらうのは可）

「さすがにこれは好みが分かれる飲み物ですねぇ・・・・・」

匂いも酸味も強く飲みづらいのだが健康と美容によいよー（ｂｙ酒精神）

神の言葉で口をつける者たち。

飲み口があまり宜しくないから一気に呷る者が多発。

口からたれる乳酒は・・・・・・まるでせい（略）・・・・・・あ

りがとうございました。

特に極東の姫巫女や西岸騎士団領の女騎士等女性参加者の口からたれている姿は・・・・・・・・（略）

参加者見物者問わず男性陣の大半が乳酒を選んだ私に対して賛意を示す！

一部女性陣が私に賛意を示しているけどこういう意味かは知りたくない。

あらあら王室顧問、わかっているくせに（ｂｙ文芸神）
「わかりたくないだけだぼけぇぇぇ！！」
どげしっ！！ぼくっ！！

ごむたいなぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！（ｂｙ文芸神）

きらっ☆

よし、邪神は成敗した。
私が神秘緋金属張扇（オリハリセン）を構えて残心を解かない姿に王侯貴族は見世物かとやんややんやの喝采！
一部神気の辿れる技能を持ったものは私が打ちのめしたものの正体をある程度は見極めて驚き怯えている。

「何で神々の一柱を叩きのめせるんだ！！」
「恐れ多い・・・・」
「最近神々が泣きついてきているのはこの事か・・・・」
「ああ、私達（ふじょし）の守護神様が・・・・・・・」

いくつか問題発言があったが進行には関係ない。

この酒はほとんどのものが飲んだねー（ｂｙ酒精神）
飲みづらさだけ除けば胃腸の助けにもなるよきものだからな（ｂｙ馬族神）
そういえばどうして酒にするのかな？ヨーグルト状態でも十分じゃないか！（ｂｙ風の神）
それはな酒にすることによって乳の成分が我等の子の体に受け入れやすくなるからだ（ｂｙ馬族神）

「解説の神々には感謝いたします。皆様方一献どうぞ。」

私が合図すると孤児娘たちが神々に酌をする。
うれしそうに喉を鳴らす神々。この場に降臨されている神々は人形に合わしているがそれぞれに個性があるな・・・・やはり趣味？

もちろん（ｂｙ大地神）

「乳酒で胃腸の一休めができたところで次の酒に参りましょうか。次は極北連合や北国に欠かせない酒。彼らの燃料火酒だ！！今回は極北連合の極光商会のご好意により最高級の火酒をご用意いたしました！」

うおぉぉぉぉ！！
と盛り上がる極北連合および北国の方々。やっと自分の得意分野にありつけると大喜び！
めったにここまで入ってこないからねぇ・・・・・極北連合産の火酒は・・・・・

「これはとても酒精が強いので慣れない者には胃を焼く辛さがあると思いますので割り水や果汁等を用意いたしました。お好みで調整してください。なお、今回に限り時間内で飲み続けた者のうち上位半数を次の試合に進めるものとします。では皆様方宜しいでしょうか？」

「うっし！飲むぞ！！」「初めてですわこんな強い酒は・・・・・・」
「滾る様な酒とは始めてであるな。」
それぞれに気合十分である。

酒合戦開始！

「さて、解説の酒精神様。今回はどう見るでしょうか？」
順当にいけば馴染みの強い極北連合がぶっちぎりかなー。いまだ殆ど飲んでいない魔王国や北部沿岸地方の諸国の大使なんかもがんがんいくかねー。どっちにしろこれは割って飲むか生のままで飲むかで勝負が分かれると思うねー（ｂｙ酒精神）
これは一気に呷るのが通だろ。とはいえ軟弱な民ではそれに耐えられまい。これは極北の酒だ！！（ｂｙ極北地方担当地域神）

「ささ、極北神様も一献！」
うむ、やはり酒はこれくらい強くなくては（ｂｙ極北地方担当地域神）
こっちもちょうだいー（ｂｙ酒精神）

観戦中の王侯貴族達にも火酒が振舞われる。
馴染んでいる北国の諸侯はくいっと呷るが、馴染みのない地方の者は一口なめてこれはきついと氷や何かで割って飲んでいる。一気に呷ってむせる剛の者もいる。

慣れるとこれくらいじゃないと酒じゃないと思えてくるものだ。（ｂｙ極北地方担当地域神）

試合会場を見てみると生のままで呷るのが北国の大使達と我が官僚達。他の国々の参加者達は氷で割ったり果実を加えたりしている。変わっているのが異世界人の組で色々と組み合わせてグラスには種々の混合酒が出来上がっている。

「解説の酒精神様、異世界人の組は何をしているのでしょうか？」
それはねー　異世界の飲み方で雄鶏の尻尾（カクテル）という楽しみ方なんだよー。色々な酒を果汁や香料と混ぜ合わせることによって飲みやすくしたり、彩りを楽しんだりするものなんだよー（ｂｙ酒精神）
「なるほど、強い酒を量飲むために薄めるだけではなくて味付けにもこだわっているのですね。」
そだよー（ｂｙ酒精神）
これはこれで面白そうだな。後で異世界人に聞いてみるとしよう。
（ｂｙ極北地方担当地域神）

でも、火酒を基本にして果実酒とか色々混ぜているけど酒精分はあまり気にしていないのかな？
旨そうに飲む異世界人を真似して色々な味わいを作ろうとする他の国家組・・・・・・

「あっ！自作の混合酒を造ったは良いがあまりの不味さに便所に駆け込むのが出ました！！何を混ぜたか聞いてみましょう・・・・・・・・・　ふむふむ、果実の蒸留酒を何種類か混ぜてそこの火酒を加えたら・・・・・・・えっと自爆としか言いようがないです。あまり酒精分が変わっていないです。強い酒を強い酒で割っても変わらないでしょう。そこに香りの混合が直撃となれば・・・・・・・・ご愁傷様です。」

それでもいくつかの国家代表は自作ながら受け入れられる組み合わせを見つけてそれを飲み始める。

生のまま飲んでいる北国の連中は自ら持ち込んだつまみをつまみながらぐいぐいと楽しんでいる。

「がははははっ！胡瓜の酢漬けが一本あれば一杯飲めるわ！！」
「となると五本あれば五杯飲めるのですな？」
「そのとおり！」
「では十本あれば十杯飲めるわけで・・・・・・」
「馬鹿野郎！そんなに胡瓜が食えるか！！」

「極北神さま、貴方の民は酒の量ではなくてつまみの量で飲酒量が決まるのですか？」
そ、そんなことはないと思うが・・・・・・・・（ｂｙ極北地方担当地域神）
他のつまみがあればまだ飲めそうだねー（ｂｙ酒精神）

他の北国の面々を見てみれば・・・・・・・・・
何だ、あの厳重に封印されている壷は！！口を覆っている皮が膨らんで暴発しそうだ！！

風上に避難するが良いよー（ｂｙ酒精神）

私は神の教えに従い風上に逃げる。そこで壷の口を開く北国の某国大使！

ぶしゅーーーーー！！
腐臭が当たり一面に漂い、腐汁が飛び散る！！自身にかからないよ

うにしている某大使だが回りに対する配慮は一切なかった。

くさいくさいくさいくさい！！

うわぁ！　きゃー！！貴婦人達が逃げ惑い気を失うものが出てくる。

かわいそうなのは飛び出した汁を顔面に受けたものだ。

とてもくさい汁を顔一杯にぶっ掛けられて目にしみるらしく転げまわる・・・・・・・・・

あわてて従者が水をぶっ掛けて洗おうとするのだがそれだけでは匂いがこびりついて落ちない・・・・・・・・・

あれは悲惨だねー（ｂｙ酒精神）

まさか、この場に持ち込むものがいるとは・・・・・・（ｂｙ厨房神）

「あれは何なのでしょうか？厨房神様。」

あれは北国沿岸の保存食で魚の塩漬けをとろとろの汁になるまで発酵させたものだ。腐らないように厳重に封をするのだがその中で圧力がたまって封を開けるとこのように暴発するのだ！

これを食べるときは周囲に人がいないことを確認しろとか室内で開けるなとか汚れてもいい服を着ろとか注意事項が沢山ある危険な食べ物だ！！

この味は好みが分かれるが病み付きになる者は好きだが、嫌いなものは食べた人間おそばにも近寄ろうともしない独特な風味が特徴である。まさかここに持ち込む剛の者がいるとは・・・・・・（ｂｙ厨房神）

あれは癖があるが旨いものだぞ。おい、そこの北国諸侯大使、俺にも一口くれ！（ｂｙ極北地方担当地域神）

あれが食べ物だとは・・・・・・・・・北国恐るべし・・・・・・

本当に食べているよ、あんなくさいものを旨そうに・・・・・・・・・
芋とか麺麭に塗りつけて火酒で流し込んでいる。

その臭気に他国の者たちの中には逃げ出すものが出ており、酒
合戦の妨害ではないかという苦情もでる・・・・・・・・・・・・で
も規則の裏をかいているとはいえ違反ではない。
あっ！便所に駆け込んでいっるものがいる。それにつられて便所に
駆け込むものが・・・・・・
これは同時多発ゲロ！！

これを反則とするかは悩みどころだ！！
って、いうか北国諸侯大使団の一人が気絶しているではないか！！

「退場ーーーーーー！！」
私の掛け声に騎士達が北国諸侯大使団を水場に連れて行き洗う！
そして、例の危険物を魔術師達が風の呪法で匂いを閉じ込めてから
大甕に封印する。
これはどこか地中に埋められるのだろう。

あれは北国の連中の中でも好みが分かれるから嫌いなものは気絶す
るほど嫌うからねぇ・・・・・（ｂｙ厨房神）
なんとももったいない（ｂｙ極北地方担当地域神）
「もって言っても良いですけど王国内で食べないでよう願います。」
好き嫌いはよくないぞ王室顧問。（ｂｙ極北地方担当地域神）

よくよく考えたら北国諸侯の大使に対して無体しているよなぁ・・・
・・大丈夫かな外交面？
「いや許す！！」「悪いが北国諸侯のつまみは酷すぎる！！」「我

々が責任を持って君を守ろう！」
「我が細君が気絶したままなんだが・・・・・」
「あんなにおいしいものを！」「「本気か！！」」

喧々囂々・・・・とりあえず、北国諸侯大使団の負けと言うことで火酒勝負終了としますか・・・・・・・・・

外交問題については私は知らん・・・・・・・・・・

酒合戦は続く？のか？

その前に会場の洗浄からでしょう・・・・・・・・・
周辺住民から苦情がきそうだ！

酒合戦と乳酒（後書き）

酒合戦ネタ勝負の会でした。

北国諸侯大使は本国で査問を受けてしまう羽目になりますが、北国の民は旨いものと思うのが大半だからあまりたいした罪にならなかったようです。

外交上もそういう食べ物があるというネタが増えたと表面上は許してもらえたようです。規則上はだめじゃないからねぇ・・・・

次回からの酒合戦では禁止されるでしょう。

あの危険な食べ物の元ネタは世界で一番危険なあの缶詰です。

一度食べたことがありますが臭かったです。

酒と胡瓜の酢漬けも元ネタは露助冗句であります。

ああ、酒が飲みたい。

酒合戦と極北勇士（前書き）

あらすじ　いくらなんでもニシンの缶詰（異世界版）を持ち込むのは宜しくありません。

くさいのやだー（脱兎）（ｂｙ酒精神）

作者からのお願いだよ。酒は楽しく適量を、飲酒運転で事故なんて悲しすぎるからね。それは酒のせいじゃなくて自分のせいなんだから。

さて、呑みながらつづりますから誤字脱字差別表現に下品発言は見逃して頂戴ね。

酒合戦と極北勇士

市場の洗浄は思いの他手間取って市場の復帰が二三日後となるそうだ。
北国諸侯に洗浄費を請求しよう。
近隣の住民からも苦情が来るし・・・・・・・・・・・・こっちの責任かよ・・・・・・・・・・

「そりゃ規則を定めた王室顧問(きけんぶつ)の失態だ！」
「って、いうかあんなニシンの塩漬宰相閣下だって知らなかったでしょうに。」
「其処も含めて手配するのがお前の仕事だ！」

で、酒合戦を如何しようかな？

「旦那、大分絞れたんだし王宮でやったらどうだい？」
「ふむ、それも良かろう。」
「では、私は王宮に段取りをつけてきますね。」
「孤児姉、補佐見習と孤児娘たちを連れて行きなさい。」
「孤児娘たちは孤児姉の言う事を聞いて段取りをつけなさい。」
「「「「はいっ！」」」」

「孤児弟は騎士達と協力してこの酒樽を王宮に運びなさい。」
「わかった。」

「屁以下、もとい陛下。酒合戦を王宮に移してやろうかと思いますので許可を」
「うむ、庭園あたりならば十分場所があるだろう。騎士達を使って良いから存分に持て成しなさい。」

「畏まりました。」

王侯貴族の皆様を一度王宮に誘導して・・・・・・・・・・
臭いところに痛くないだろうし・・・・・・・・・・頭が痛い。

最も逃げ出した王侯貴族は王宮に向かっているから其処で回収すればよいだろう。
では、皆の集一度王宮に向かいますか・・・・・・・・・・・・

この時点での残っているのは
・魔王国
雷竜の長（大使）、鬼族随行員、岩妖精族随行員
酒好きの種族で固めた編成。鬼族随行員がほとんど飲んでしまったために残り二人が飲めなくて不満たらたら・・・・
・王国（馬鹿官僚組）
街道管理官、近衛文官（鬼族系）、式部官
酒精神の飲み友達である街道管理官を頭とする酔っ払い貴族。更に酒を持ち込む馬鹿。
・極北連合
熊討勇士（大使）、武官二名
人族最高峰の酒飲み民族の出身、但しつまみは胡瓜の酢漬けだけだと飽きるらしい。
・聖徒王国
聖騎士（大使）、随行神官、随行武官（第一公爵家第三子）
戦闘力ならば兎も角、酒席での耐久力に難あり。普通の酒豪程度。
・極東
姫巫女、蟒蛇族武官、大使
酒席無双の美女である姫巫女と酒に強い蟒蛇族の組み合わせ。大使は一般人程度の酒量。
・西岸騎士団領

外遊騎士隊長（大使）、女騎士、随行文官
これも聖徒王国と同じ程度の酒豪、口から乳酒をこぼした女騎士にはご馳走様を送りたい。
・酒国
姫大使（第３王女）、酒席補佐官、酒商人
酒の味にうるさいお国柄、姫大使の脱ぎ癖に期待。

この七カ国か・・・・・・・異世界人組は水っ腹で辞退、他の組もニシンの塩漬けでダウンしたり、限界が来たりして敗退・・・・・・・これで決戦すればよいか・・・・・・・・・準備も出来たようだし賓客の皆様方をお呼びして・・・・・・

「ではでは、皆様。場所を移しまして王宮庭園にて酒合戦の頂上決戦を行います。これまで勝ち進んできた酒豪の皆様を暖かくお迎えください！」
王侯貴族共は乗りよく歓声を上げる。志半ばで敗退した者達も、お祭り騒ぎだと知っているのでのりに乗っている・・・・・・

「この場での勝負は簡単、三者交互に飲んでいき、一人でも倒れたら負け。最後まで残った組が勝者とさせていただきます。ちなみに飲む酒の種類はくじ引きで決めたいと思います。では、最後まで呑むのを楽しんでいきましょう。」

最初は・・・・・・・・・【極東醸造酒】
普通に皆飲んだ
二番目・・・・・・・【緑魔酒】
近衛文官、酒で割って呑むものじゃないだろう・・・・・・・・・皆通過
三番目・・・・・・・【麦酒】

極東の大使が辛そうだったが全員通過。
四番目・・・・・・【果実蒸留古酒】
魔国大使がお代わりを要求。それじゃ勝負にならないだろう。
五番目・・・・・・・・・【蜂蜜酒】
極北武官がお代わりを要求。騎士団領の女騎士がふらふら。
六番目・・・・・・・・・【実芭蕉醸造酒】
匂いがきつく、聖徒王国の随行武官と酒国の酒商人が涙目。
七番目・・・・・・・・・【白濁(どぶろく)極東醸造酒】
おじちゃん若いからすぐこぼれちゃうんだよねぇ・・・・・という下ネタに姫巫女が酒を拭きだし白濁塗れ。ご馳走様でした。（極東脱落）
八番目・・・・・・・・・【楓糖酒】
極北の武官がお代わりを要求。彼は甘党らしい。女騎士脱落（騎士団領脱落）
九番目・・・・・・・・・【穀類蒸留酒蛇の血割】
聖徒王国の随行武官が鼻血を出す。若いって良いなぁ・・・・皆通過。
十番目・・・・・・・・・【魔国特製妖精酒】
魔国大使がお代わりを要求。酒国姫大使が顔を上気させる。
十一番目・・・・・・・・・【極東銘酒鬼殺】
属性打撃により魔国鬼族随行員と王国近衛文官がふらふら・・・・・・　姫大使は胸元をはたけだす。
十二番目・・・・・・・・・【性愛神殿謹製調合酒】
姫大使が脱ぎ始める、これまで飲んだ酒の影響もあり三番手の男性陣前かがみ。
十三番目・・・・・・・・・【果実氷結酒】
姫大使が本格的に脱ぎ始め酒席補佐官が魔術で隠蔽。但し、刺激が強すぎたのか聖徒王国随行武官が鼻血を吹いて倒れる。（酒国、聖徒王国脱落）
十四番目・・・・・・・・・【宰相閣下の秘蔵果実古酒】

宰相閣下涙目、皆喜んで飲む。私も飲みたかった２０年もの。
十五番目・・・・・・・・・・・・・・・【蛇酒】
総員前かがみ・・・・・・・・・後で娼館めぐりをさせないとだめかな？見物のご婦人方がニヤニヤ・・・・極北武官が開き直っておったてたブツを見せびらかすように仁王立ち。
十六番目・・・・・・・・・・・・・・・【火酒】
総員呑み切る・・・・・・・・・・・・街道管理官ふらふらか
十七番目・・・・・・・・・・・・・・・【神便鬼毒酒】
属性攻撃回避のため魔国鬼族随行員及び近衛文官降参・・・・・・・・・・・勝者、極北連合！！

「うわぁ！鬼族随行員！に近衛文官！！」
誰だ！鬼殺しとか加えた馬鹿は！！鬼族系を殺すきか！！
「早く医者を！」「冥界神殿の祭司を・・・・・・・」「それには気が早い！！」

とりあえず二人とも無事でした・・・・・・・・・・・・・

勝者たる極北連合の勇士の皆様には商品として最高級の果実酒と大杯を・・・・・・・・・・・・
勿論大杯の口開けをしてもらいましょうね・・・・・・・・・・・・

それいっきいっきいっきいっき・・・・・・・・・・・・・・・・
さぁ皆様ご一緒に唱和を！
一気一気一気一気・・・・・・・・・・・・・・・・！！

ごくごくごくごく・・・・・・・・・・・・・・・・ばたり×３

「うわぁ！！極北の！！」

参加者がほぼ飲み潰れた酒合戦は此処にて終了する事となった。
酒精神の祝福で二日酔い以外は別状はなかったけど、色々問題があり過ぎて国家行事としての酒合戦は封印される事となる。
「二日酔いが一番の問題なんだ！いたたたたたた・・・・・・・・」

おさけはたのしくてきりょうにぃー（ｂｙ酒精神）

酒合戦と極北勇士（後書き）

酒合戦はこれにて終了かな？官僚共を下して名実共に世界最高峰の酒客集団となった極北連合はどこに行っても酒の歓待にあって飲み潰されるのであった。

ところで鬼殺しとか誰が加えたのだろう？
作者にもなぞです。

さて、これからゆるりと呑みますか・・・・・・・・・・・・

酒合戦と朝酒（前書き）

あらすじ　酒合戦は極北連合に勝利となった。色々な種族が参加する大会で特定の種族への嫌がらせみたいなものは止めましょう。

朝酒は最高ですよ。

酒合戦と朝酒

酒合戦から一夜

一命を取り留めた鬼族随行員と近衛文官（鬼族系）を放置して、参加者観戦者共に酒を飲んでいる。
どれだけ酒を飲めば気がすむんだ王侯貴族。

「二日酔いには迎え酒だろ！」
「色々試してみたい酒があってねぇ・・・・・・」
「あの異世界人の雄鶏（カクテル）の尻尾？あれを呑んでみてくて・・・・・・・」
「何はともあれ酒だ酒！！」

えっと皆さん、酒盛りに来たんですか？
「勿論！」×複数

あきらめなよー　王室顧問。一時的にとはいえ我が聖域になっているからねー（ｂｙ酒精神）
おおっ！こっちにも酒くれや！！
ねーちゃんいっしょにのもーよー
びみびみ・・・・・・・・・・・・（ｂｙ神々、名称特定できず）

「王室顧問、何で神々が・・・・・・・・・」
「祭司殿、気にしたら負けだ。酒精神が最近ちょくちょく降臨しているのは事実だし実害はない。神々の祝福を得ていると思えば・・・・・・・・・・・・最近の官僚達の酒代って此処から出てないか？」
「祝福ですか・・・・・・実体降臨なんて１００年に一度あるかな

いか位なのに、有り難味がないですなぁ・・・・・・・」
「贅沢な悩みだねぇ・・・・・・」
「この際だから色々記録をとりますか。」
「脚色なしでお願いしますね。今までの記録は御伽噺か物語かと言う位美化しまくっているから。」

そりゃぁねぇ、私だって見栄があるし改めて現実を突きつけられると・・・・・・・泣けてくる。（ｂｙ記録神）
歴史はぼかしているから謎があって面白いのだよ。決して・・・・・・・（ｂｙ語るに落ちた歴史神）
「神様も苦労しているのですねぇ・・・・・・ささ、一献。」
うむ、ありがたく受け取ろう（ｂｙ歴史神）

王宮付祭司殿は神々と歴史談義をしている。神々が講師で祭司殿が受講生？この話には歴史や物語好きな者が集まっている。色々な裏話を聞いて　ふむふむ　だの　へぇ　だのと歓声が上がる。
そのうち詩人神が乱入して詩物語（サーガ）を語りだす。古く古く今は滅びた国の忘れ去られた優しい物語を・・・・・・・
今を生きている者が誰も知らない歌を奏でる詩人神。この物語を奏でた人々はどんな人だったのかな？そしてどうして今更詩人神はこの物語を選んだのだろうか？

朝日に咲ける花見て思う　散りて別れた同胞を
今や幸い得ているだろうか
昼にざわめく市見て思う　湖底に眠りし父母を
眠りは今も健やかですか
夕辺に流れる風見て思う　異国で暮らす友輩を

家族を見つけているのかと
夢路を通り君が元　千里の道をひた走り
いつかさいかいできるのだろうか？

ああ、古き物語。滅びた民の些細な詩を
埃を払い日の目にあてよう・・・・・・・・
今を生きてる聴衆よ　一度時間を私におくれ
些細な詩を聞くために・・・・・・・・・

事の起こりは・・・・・・・・・

我等神にだってお気に入りの歌もあるし民もある。守護の力及ばず滅んでしまう事もあれば時の流れに押し流されて存在が疲れてしまうことがある。彼等にゆっくりお休みと次の世界に送り出すのだが思い出は我等にも溜まるのだよ。
永く在ると溜め込んだ物が世界から忘れ去られる事に耐え切れなくなることもあるのだよ。詩人神（やつ）もたまっていた時の埃を叩き落として現代（おもて）に出したのも愛しき日々への感傷なのか抗いなのか？歌物語（サーガ）を聞いて心に刻み込めてやってくれ。忘れ去られるのも寂しいし、取り残されるのも寂しいのさ。どっちが寂しいかは知らないが愛しい日々が詩として甦るのが詩人神（やつ）には嬉しい事なのさ・・・・・・・・・・その思い出に付随する悲しさや悔しさも一緒に出てくるのだがそれでも愛しい日々のために詩を語るだろう。感傷と笑うが良いさ人の子よ。でも、この詩だけは聞いておくれ・・・・・・・・・・・（ｂｙ今は滅んだ民族の守護神にして小さな土地の些細な守り神）

爪弾く遊牧琵琶（ウード）　細く細くささやかな秘め事のような歌声に聞き手達は静まり返り、湖底に沈んだ故郷を偲ぶ少年の嘆きには厳のような大男でさえ涙を隠さない。遠く昔に滅んだ国の優しい優しい物語・・・・・・・

さぁ、聞くがよい。子供らよ・・・・・・・
今は昔の物語、湖底に沈む故郷を偲び旅する人々を・・・・・・・・・・・

糸杉の雨　銀の糸　日論の雨　金の糸
故郷失う少年の　今の故郷どこにある
少年曰く　故郷は世界全てが我が家で　出会う人々皆家族・・・・・・・

詩人神の〆の語りが終わると後に残るのは涙の雨と物語を噛み締める人々の群れ。
語る詩人神の眼にもきらりと光る銀の粒。
愛しき日々というものはそれだけ大事だったんかな？

「ご主人様、これを・・・・・・・・・」
私の目にも汗が・・・・・・・・・孤児姉が寄越してくれた手巾（はんけち）で目元を拭う。
孤児姉も涙ぐんでいる。安住の場所なき生活を思い出して共感しているのか。

そっと頭をなでると安心したように身を寄せてくる・・・・・・・・・・・
甘ったれが・・・・

その傍らで腐臭に満ちた会話をする貴腐人たちがいる・・・・・・・・・

この物語は文字が降りてくるだのかっぷりんぐは少年と奴隷商人とか・・・・・・・・・・

詩物語（サーガ）の余韻を汚された王侯貴族は私に向かって死刑の合図をする。

神々も

やりなさい（ｂｙ詩人神）

許可（ｂｙ極北神）

文芸神ごとやらないと（ｂｙ河川神）

以下神々の許可の発言・・・・・・・・・

「孤児姉」

「はい、御主人様。」

私は神秘緋金属張扇（オリハリセン）を大きく振りかぶると、貴腐人の一団（プラス文芸神）に対して大きく振りかぶる！！

「折角の物語を汚すんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーーーーー！！」

どげっ！！

吹き飛ぶ貴腐人ども、文芸神も壁のしみだ。

あたりの観衆達は拍手をして私を迎えてくれる。

良いことをした後は気持ちが良い。

確かに善行だ！（ｂｙ風の神）
物語は救われた（ｂｙ詩人神）

この場の王侯貴族たちの殆どの者は思った。
これ以上世界を腐化させて溜まるかと！
これが世界が一つになる切欠となるのであった・・・・・・・・・・・・
（ｂｙ歴史神）

そんな記録とるのはいやだぁぁぁぁ！！（ｂｙ記録神）

酒合戦と朝酒（後書き）

綺麗な話の積りがどうしてこうなるのか？
作者である私にもわかりません。

今日は眠いからこれにて失礼。酒も切れたし・・・・・・・・・・

極北戦士と酒盛市場（前書き）

あらすじ　【きふじん】を変換すると【貴腐人】と素で出てくるパソコンがとても嫌になりました。ちなみに単語登録はしておりません。

あらすじ関係ないだろう！！

極北戦士と酒盛市場

酒合戦から数日。王侯貴族は帰国の途に着く。
「こんな合戦ならば大歓迎だ！」「めったに話が出来ぬ国と話せて為になった。」
「定期的に開催してくれぬか？」
おおむね好評のようだった。

暴発するニシンの発酵物を市場に持ち込んだ北国諸侯大使は市場の清掃費用を負担して、出席達に酒盛りを設けて許してもらったらしい・・・・・・・・・・でも暫くは出入り禁止の国が出てくるのは仕方ないよなぁ・・・・・

で、お前等何故未だ居座っている？極北戦士団。
君達は酒合戦に来たのではないのか？
「ああ、王室顧問か。この国は良い、強い戦士が沢山いるし其々戦い方が違う。我等の戦士団を鍛えるには良い環境だ。」
「他国の兵隊相手に道場破りしているんじゃない！！」
「我々とて其処まで馬鹿じゃない。そんな戦争まがいな事をするわけなかろう。」
「はぁ？」
「酒合戦の戦士達を鍛えているのだ！　馬鹿か？王室顧問！！」
「理由をつけて酒が呑みたいだけだろう！！」
「そうとも言う。」
「国で飲め国で！」
「無理だ、国許では女衆が酒の管理をしている・・・・・・・・・・・・・・・勝手に飲もうとすると・・・・・・・・・・・止めてくれー
指は痛いのです。麺棒は麺棒はそんな使い方をするもんじゃウギャーーーーー！！」

なんかの精神的（トラウマ）外傷に触れたらしい・・・・・・・・・
こんなごついなりをして女性に負ける？
「いやぁ、うちの大使の細君は片手で熊をのしてましたから・・・・・・・・・・・・・・」
「夫婦喧嘩はとても見ごたえあるだろうね。」
「壁に穴をあけてた事もありますよ。」
「どのようにあけたかは聞きたくないよ。」
「賢明です。」

極北の大使が気を取り直したようなので本題に入る。
「極北連合大使、熊討勇士殿。市場で酒盛りは勘弁してもらえないかな？うちの衛士達が風紀が乱れて困ると苦情言って来ているのだが・・・・・・・・・」
「なんとここは宴会場ではなかったのか！！我々が飲むと市場の民達がわれ先に酒を売りに来ているし、我等に挑戦状をたたきつける酒客共が出てくるから、てっきり野外の酒場だと思っていた。」
「違ったのか！気候も良いときに野外で酒盛りを連日行うとは王国は良いところだと思っていたのに・・・・・・」
「その割には王国の官僚たちが場所を占拠して飲みまくっているのだが・・・・・・」
「酒国の面々もこれは我が国にない試みだと視察していたのを見たぞ。」
「視察？如何見ても酒盛りだったぞ。」「西方平原国の侯爵様が食べ歩いているのをさっき見かけたが・・・・・・」
「魔国の竜の族長が其処で酔いつぶれているし・・・・・・・・・・・・・」

やぁ、王室顧問。この国の市場は良いところだねぇ・・・・・・・・・・酒は旨いしネーちゃんは綺麗だし（ｂｙ極北地方担当地方神）

何か極北の祭司達が見たら泣きそうな光景が・・・・・・・・・・
見た目偉丈夫の極北神に市場の女性達が接してまめまめしく仕えて酒を注いでいるのである。極北神も満更でもなく尻をなでたり抱き寄せたりしている・・・・・・・・・・女性のほうもおバカで大きな犬でも世話しているみたいにひっぱたいたりつねったりして楽しんでいるのである・・・・・・・・・・

「極北戦士、お前等の神が色々やらかしているけど良いのか？」
「国と変わらん。うちの国の祭司というのは神の愛人みたいな者だし・・・・・・・・見目麗しい者が選ばれるしその祝福で若さを保っていられるから女性に人気の進路の一つだ。まぁ、尻を撫でたりするだろうがそれ以上はしないから安心して貰って・・・・・・・・」

ねーちゃん、これから二人きりで如何？俺神なんだけど若さと美貌を祝福しちゃうぞ！（ｂｙ極北地方担当地方神）
「嫌ですわ、極北神様。まだ日が高いではないですか・・・・・・・」
昼間からというのもおつなものだよ。極北においでよ、あそこは一日じゅう昼の季節があるから明るいうちからお楽しみに勤しむ・・・・・・・・・・（ｂｙ極北地方担当地方神）

「・・・・・・・・・・えっと、それ以上はないといっていたが・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・　大丈夫、そろそろ・・・・・・・・・・」

極北の戦士がそろそろといった途端空が暗くなり、七色の天布がたなびいている・・・・・・・・・・
大地と空との交わりの間に焔と言う帳が下りているかのようである。

「ほら、来た。我等が極北神の妻にして夜の帳と七色の情熱の女神、極光神様だ！」

七色の天布は空高く浮かんでいる女性の方にまとわり肩掛けとなる。七色に輝く肩掛けを見た途端、極北神の顔色が白を通り越して蒼くなる。

七色の肩掛けは電光を付きまとわせて女神の背後に幾筋もの光を降り注がせる。

やぁ、我が夜の帳よ。ご機嫌は如何かな？（ｂｙ極北神）

ええ、愛しの白夜よ。我等の娘達のみならず外界の娘達にも祝福を振りまくとは我の嫉妬を煽りたいと見える。（ｂｙ極光神）

麗しの天の火よ、一番の愛は君にのみ降り注いでいるというのに信じてもらえないのかな？（ｂｙ極北神）

判っているとも祝福の与え手。我等が白き世界で一番の愛は我に注がれておる事を、でも、我に目もくれず外界の娘達に鼻の下を伸ばしているのが嫉ましく思うぞ・・・・・・・・・　これは我が想い受けてくれるよな、愛しき大地よ（ｂｙ極光神）

こらこら、激しき思いの焔。七色の電光よ。此処では脆い人の子が多すぎ・・・・・・うぎゃーーーーーー！！（ｂｙ極北神）

「これが極北名物【極光の制裁】である。公職で浮気性な極北神を追いかけて極光神がイカヅチをおとすのだ。」

「つまるところ、神の夫婦喧嘩？」

「そのとおりだ、橇引きの犬でさえ見向きもしない馬鹿馬鹿しい痴話げんかである。」

其処に通りかかる何時ぞやの氷売り（狼系獣人族）
「久しいな氷売り。」
「だからあっしを出汁にしないでくれと言っているじゃないですか旦那！食いませんよ神の痴話げんかなんて、それにあっしは狼であって犬じゃないんですよ！！其処間違えないでくださいよ！！」
「まぁまぁ、私は何も言ってないだろう。とりあえず、この嫉妬に狂った愛が暑苦しいから白玉氷を人数分くれ！」
「いいそうな雰囲気だったくせに・・・・・・・・・・　あいよ！氷白玉は出来た順から持っていってくれ！！」

その日、氷売りの商売は繁盛したのだった！
「だからあっしをオチに使うなって言っているんだろう！！」

暫くして・・・・・・・・・・・・黒焦げになった極北神の燃え滓を放置して我等は酒を飲んでいるのであった。
「結局酒場じゃないのか？」
「市場だ！」
「旦那が飲むから説得力というものが・・・・・・・・・」
「それは違うぞ孤児弟よ。極北の酔っ払いどもは酒さえあれば良いのだが、私は民が幸いである姿を楽しんでいるのだから。」
「なんと王室顧問それは斬新な飲み方だ！」
「うははははっ！私は根っからの貴族なんだよ！下々のものが楽しそうに生活をしているのを見ているのは最高の肴なんだよ。君達みたいに杯一つきゅうりが一本とは違うのだよ！」
「くっ！」

うちの馬鹿（極北神）といい、この男共と言い極北の地にはろくな

男がいないのかしら・・・・・・（ｂｙ極光神）
「どこに行っても男というのは馬鹿で可愛い生き物なんじゃない。それがいいのに・・・・・・・・」
そうなんだけど、何千年も同じように嫉妬で焦げ目つけるだけというのは我も悲しくなってくる。（ｂｙ極光神）
「まぁまぁ、女神様。構って欲しいから其処の燃え滓もやっているのでしょう？」
そういう見方もあるのか市場娘よ、感謝する。これは我からの祝福だ喜んでもらえると嬉しい。（ｂｙ極光神）

市場娘に七色の光が降り注ぐ・・・・・・・・・・・・

我の感謝の印だ。一度だけ夜空に極光を呼び寄せる力を授ける。皆で見て楽しむもよし、これと決めた男と情緒的な夜を過ごすために使うのもよい。市場娘よ、また語らいたいものだな・・・・・・（ｂｙ極光神）
「いつでもお待ちしておりますわ。身に余る祝福をありがとうございました。」

ではなと言う声を残して極光神は空高く飛んでいった・・・・・・・・・・あっ！七色。
「賢者様何が七色というのですか？」
「それはな、極光神の・・・・・・・・・・うぎゃーーー！！」

我が愛しの帳に対してそんな目で見るのは許さん！！（ｂｙ極北神）

私は黒焦げになっていた。
「わーっ！御主人様！！」
「旦那！大丈夫か？冥界神殿呼ぶか？」
死んではいないが身体が動かん・・・・・・・・・
それに孤児弟、私の死に方は腹上死か腎虚に決まっているのだ。勝手に殺すな！

心配するな、演芸神の突っ込みと同程度だ！（ｂｙ極北神）
それにしても自分の死に方まで決めているとはこの王室顧問、只者ではありませんね。（ｂｙ極光神）
ただの馬鹿で危険人物。極北には入れるなよ（ｂｙ極北神）
こんな面白そうな人の子は久方ぶりなのに・・・・・・・・・・（ｂｙ極光神）

極北戦士と酒盛市場（後書き）

この市場はあまりに酒盛する王侯貴族の関係者が多すぎて酒盛する場所を作る羽目になったそうな。

これが後に酒盛市場として名を馳せる観光名所の始まり始まり・・・・・

極北戦士と孤児娘（前書き）

あらすじ　極光神の・・・・・・・・うわぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・（醜い嫉妬に駆られた極北神に粛清されました）

そんなに嫉妬するくらいならば、極光神といちゃいちゃラブラブし続けて引き篭もっていれば良いのに・・・・・・・・・

極北戦士と孤児娘

あいも変わらず極北戦士団は市場に居座っている。
ちなみに極北神と極光神夫妻も一緒だ。

たまには夫婦水入らずで旅行というのもよいな（ｂｙ極北神）
それでも人目が気になりますわね。（ｂｙ極光神）
まぁ、取るに足らない人の子の目なんてきにしなければよいではないか（ｂｙ極北神）
強引ね・・・・・・・・・・うふふっ（ｂｙ極光神）

「そこの道行く氷売り、この馬鹿神夫妻が暑苦しいから氷白玉おくれ！」
「あっしをネタにしないで欲しいといっているじゃないですか！！」
狼頭の氷売りの抗議も空しく、今日も商いは繁盛するのだった！
「だからあっしをそういうネタにつかうな作者ーーーーー！！」

無理だな、狼頭の氷売りの宿命は【暑苦しいバカップルのそばを仕事中に通りかかる】というものだから・・・・・・・・（ｂｙ運命神）

「そんな説明聞きたくなかったぞ！！」
「うんうん、運命とは非常なものだなぁ・・・・・」

一つだけいいことを教えてあげると、可愛い彼女が出来ると氷系の術者とかがその代わりをしてくれるらしいぞ（ｂｙ運命神）
ついでに我もいじられ運命に哀れみを感じてその場所に居合わせた

ら商売繁盛するように祝福を与えたのだが・・・・・・・・・・（ｂｙ商売神）

「そういえば極北の地に可愛い狼娘さんはいないのかい？」
ふむ、雪狼の一族に毛色の変わったのがいて本人は可愛いのに毛色のせいで居心地悪そうだからこっちに連れてくるのもよかろうな（ｂｙ極北神）
アラ、あの子は気立てが良いのに先祖返り起こして灰褐色の毛色しているから・・・・・・・・・こっちに寄越してこの氷売りと娶わせてみてもよいわね（ｂｙ極光神）

雪鏡の神術でその娘の姿を見た氷売り、尻尾をふりふり千切れんばかりに振りかぶって興奮状態。
狼娘のほうも氷売りの歓迎振りにはじめて私を綺麗と思ってくれる狼がいたと涙する。
そんなやり取りで甘ったるくなった空気・・・・・・・・・・

「いいんですかい？神様方。あっしにそんな可愛い子を紹介してくれて。」
後は自力でがんばるのね。旨く行ったらわれは祝福を与えるけど（ｂｙ極光神）
我が愛しの帳は子供達を娶わせる事に情熱をも焼いているからなぁ・・・・（ｂｙ極北神）

その後、神々の立会いの下であった二人はお互いに意気投合しラブラブバカップルになるのであった。

「おーい！其処の氷売り夫妻はすぐ氷を溶かすから。其処の魔術師殿、氷を作ってくれぬか？」
「だからなんで僕がそんな役割を・・・・・・・・・・」

歴史はプリザエス。（ｂｙ演芸神）

そんなことはさて置き・・・・・・

「あっしはただの前説？」

「勿論だとも・・・・・・・・・ちなみに可愛い彼女はまだ未来の事だからできるかどうかは確定ではないぞ。」

「がーん！！」

それはさておき、極北戦士団は市場に居座っている。別に店の権利を借りて酒盛りをしているだけなのだがガタイの良い戦士達が車座になって酒盛りしている姿というのは・・・・・・・・どこの神話の蛮族ですかと突っ込みいれたくなるほど荒々しい雰囲気に包まれている。民に手を出すほどあほではないから実害はないに等しいのだが・・・・・・・・・・この極北飲酒青年団は・・・・・・・・・・・・・・・

ちなみに今日は私は子供達を引き連れている。

定番の姉弟に孤児娘達、傷跡娘夫妻・・・・・・・・・今日は孤児院のちびどもである。

私の可愛い子供達がちび共を一塊づつ引率してお菓子を買ったり生活雑貨を買ったりしている。

「其処の子供達は王室顧問の子供達か？」
「そうだといったら？」
「あまりに似ていないなと。」
「そりゃそうだ。全て養い子だし、似ていたらおかしいだろう。」
「なんて酔狂な・・・・・・・・・・」

私は語った、この子供達がどれだけ素晴らしいかを・・・・・・・・光差さぬ路地裏でさえ生き様と懸命であったものが今の場所を得て同じ境遇の者を作らないようにと自ら王国の中へと立ち向かっている事を・・・・・・・・・・

極北の戦士達は涙する。過酷な白い世界の中で飢えて行くとかひもじい思いをするということは命を削るに等しい事である事を知っているから。そのなかで腐りかけの麺麭であっても唯一の食料を全て与え飢え死にしていった兄姉のくだりでは叫び声を上げそろいもそろって髪を逆立て剣やら斧やらを打ち鳴らしながら散っていった命を惜しみ、生き残った悔しさを滲ませる子供達を抱きしめる。

涙を見せる事が適切ではないとする荒野の民の文化とは違い氷原の戦士達は泣く事も怒る事も簡単に顕にするのだな・・・・・・・・・・

「王室顧問、この子の敵はどこだ？」
「人の子という意味では私や王国の大人達が粗方片付けた。あとは、偏見と世界と戦うだけだ。」
「なんと不自由な世界なんだろうなここは。」

そりゃ、俺の治める白い世界は子供を蔑ろにする馬鹿には報いを与えているしな（ｂｙ極北神）
あたりまえでしょ、我のいる白い世界には我等の子供達しかいないのだから（ｂｙ極光神）

「それに王室顧問あの女のこの顔の傷は何だ！お前は娘に傷をつけて平然としていられるのか？」
「いや、いまだに腸が煮えくり返る。これが親が娘にしてやることが出来た唯一の贈り物だとしても・・・・・・・・・」
私は語った、傷跡娘と補佐見習の恋物語を・・・・・・・・・

親が娘にせめて幸いであれと苦難を課すくだりではおいおいと泣き、その姿を馬鹿にしたものを殴り倒す始末。
たかが奴隷の雌豚を等と言っていた貴族の子弟らしきものは極北戦士団に鼻を削がれていた。
極北の戦士達は剣を掲げて、傷跡娘を詰った馬鹿貴族を八つ裂きにせんと立ち上がるも、等の傷跡娘に止められる始末。
補佐見習が立ち上がりその馬鹿貴族は敗北しているから敗者を鞭打つなという一言に戦士達は嗜みに欠けると反省しきり・・・・・・・・

傷跡娘を見て良い子だと持ち帰ろうとする馬鹿な戦士がいるのだが補佐見習に阻まれる。
補佐見習の後ろに隠れる傷跡娘・・・・・・・・・・・・・・

笑う戦士達・・・・・・・・・・

こらこら子供達、王室顧問の子供達をからかう出ないぞ（ｂｙ極北神）

孤児娘達が未婚であると知り、求婚をする向こう見ずな戦士達もあるのだが
「この命は賢者様に救われたそのときから賢者様だけに捧げる者と決めてますので・・・・・・・・・・」
「私のために世界に喧嘩売る程度の事が出来ない者とは一緒になれないですわ」
「・・・・・・・・・・マッチョは趣味じゃない。」
「妹達がご無礼を・・・・・・・・・」
謝る孤児姉に、求婚する極北戦士・・・・・・・・・・
「私は御主人様に身も心も捧げておりますので・・・・・・・・・・・・・・」
極北戦士撃沈・・・・・・・・・・
恋というのは最も古い戦であり最も新しい戦である・・・・・・・・・・・・
戦士の戦死。（ちーん）

極北戦士と孤児娘（後書き）

呑まずに殴りかいてみました。これから呑みます・・・・・・・・・・・・・・・

極北戦士と粛清女神（前書き）

あらすじ　極北戦士は全敗。

我が可愛い孤児娘たちに振られて落ち込む極北戦士の若者たち。
項垂れている若い衆に近寄る別の若者・・・・・・・見てると銀貨の受け渡しをしている。

負けたぜとか言ったとおりだろだの言う声が・・・・・・・・・・

ほう、私の可愛い娘達で賭けをするか。
娘達は自分らに求愛されて満更でもなかったらしいのだがこの現実を知って目に涙を浮かべている。
この落とし前はじっくりとつけてあげよう・・・・・・・・・・・・

「いやぁ、若者達。私の娘達に手を出す度胸は認めてあげるけど、これは一寸頂けないなぁ・・・・・君達は自分が何をしたかよぉく判っているよねぇ・・・・・・（邪笑」
「・・・・・・・・・・・・・えっと、王室顧問様？」
「本気で惚れて手を出すならばまだしも、賭けねぇ・・・・・・実に楽しいことをしてくれるではないか。そこらの村娘に対してすることであっても不愉快なのだが、この可愛い娘達が私の娘であるということ以外にも立場があるんだよ。末席だけど王国爵位を持つものに対しての謂れ無き侮辱は戦争とかも覚悟しているのだろうね？」
「えっと・・・・・・・・・・・・・そこのちんくしゃな小娘がそんな・・・・・・・・・・・・」
「王宮準爵位、官僚補佐が彼女達の正式な身分だ。」
「俺達はそんなつもりは・・・・・・・・・」
「では、どんなつもりだったのかね？」
「気に入ったのは事実だし許可を得たら責任を持って受け入れるつもりでしたが・・・・・・・・賭けの件は景気づけというかな

んと言うか・・・・・・・・・・・・・・・・・・すいませんでした・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・へぇ、謝ってすむの？ねぇ、極光女神様。あなたの国でも女性に対してこんなふざけた事をした場合どうなるのですか？」

我の白い世界では特にこれといって罰は無かったが・・・・・・・・・・我も個人的には幼い娘達をたぶらかす馬鹿な男に対しては制裁せぬとよくないのぅ・・・・・・・・・・・・・・・（ｂｙ極光神）

「どうしてくれようかね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・王室顧問、許してやってくれないか？」

「大丈夫、私は優しいから・・・・・・・・・・・・娘達、この遊び半分で君達に求婚した馬鹿をどうしたい？」

「そうですねご主人様・・・・乙女の敵ですから性愛神官に頼んで去勢して貰うのはよろしいでしょうか？」

「・・・・・・・・・・・・・相手にするに値しない。」

「死なない程度に甚振りますわ。」

「王妹殿下の実験材料・・・・・・・・・・・・もとい、文学の題材。」

「刻んでシチューの具。」

いろいろな意見があるものだ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

我としては庇護下にある娘達がふざけた男達に弄ばれるなんて許せん。この者達の周りには砂埃が目に入る風しか吹かないよう呪いを与えよう・・・・・・・・・・（ｂｙ風の神）

可愛い酌婦をおろそかにされたのだから飲む酒みんな酢になる呪いをあげるねー（ｂｙ酒精神）

わが国の（書類面の）守護者達を馬鹿にされたのだから極北の民が我が国に足を踏み入れたら馬の糞を踏んでしまう呪いをあげよう（

ｂｙ某王国地方担当神）
うわぁ、呪いのフルコースや！しかも微妙な呪い・・・・・・・・・
即死とか国の滅亡とかは無いの？

さすがにそこまでは（ｂｙ某王国地方担当神）
だって、極光神の分残すのは礼儀だよー（酒精神）

「そうだなぁ、神々にも礼儀があるし縄張りがあるから嗜みに欠けることとしてはいけないよなぁ・・・・・」

神々の礼儀を理解するとは中々賢しいのぅ。縁があれば極北の白い世界に遊びに来るがよい。
さて、この者の処罰は簡単じゃ、大使夫人と我らが巫女達にに事の経緯を伝えておくだけじゃ・・・・・（ｂｙ極光神）
「意外とぬるいですねぇ・・・・・・」

「うわぁ、終わったな・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・勘弁してください。」「いっそ殺して・・・・・・・」
当事者達は売られる子牛のような目をして項垂れているし、周りの極北戦士達は可哀想な者を見る目でみている。

なんでだろう？
「そりゃ考えてみてくださいよ、王室顧問様。女衆ににらまれて生活が成り立つと思いますか？」
「思わないな・・・・・・・・」
「しかも、女衆は乙女の夢を汚すような馬鹿者を許すと思いますか？ちなみに物理攻撃力は女性のほうが強いです・・・・・・・・・」

「そういえば大使夫人は熊を素手でのしていたとか・・・・・・・・・うん、強く生きろよ！私は許しはしないが同情をしてやろう。」

「たすけてくださぁい！」

「無理、私に神に立ち向かえるわけ無いだろう！」

だうと！！（ｂｙ文芸神）

だうと！（ｂｙ芸術神）

嘘だ！！（ｂｙその他神秘緋金属張扇の犠牲になった神々）

世界中から嘘だとかダウトの声がするが気にしない。神に喧嘩売れても怒れる女性に立ち向かうほど勇気は無い。

それは真理だ。（ｂｙ詩人神）

彼等、国に帰ったら茹でた草しか食わしてもらえなささそうだな。（ｂｙ風の神）

その前に家に入れてもらえるかどうか？可愛そうになってきたよ（ｂｙ某王国地方担当神）

そだねー（酒精神）

神々はのろいを解いてくれた・・・・・・・・・・・・・・・・・らしい。

それほど過酷な運命を彼らは背負ったのか・・・・・・・・・・

馬鹿なことをしたのは認めるがそこまでひどい目に会う必要があるのだろうか？（ｂｙ極北神）

悪いけど私は女だよ。馬鹿な男には鉄槌食らわすものさ（ｂｙ極光神）

こうして極北戦士達の馬鹿達は国を捨てて旅に出るかどうか真剣に悩む羽目になるのだった。

「さぁ、娘達。馬鹿共は放置して美味しい物を食べに行こう・・・・・・・・今日はおごるよ！」

「わーい！」「どうせ私達にはろくな男が寄り付かないんだわ！今日はやけ食いよ！！」

「まぁ、本気で言い寄られても邪魔なだけだしね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・補佐見習以外の男に興味ない。最低レベルで賢者様か孤児弟だし。」

「・・・・・・・・・・・照れくさい事いうなよ。」

我もつき合わせてもらおう（ｂｙ極光神）

「いいよね賢者様。一人くらい増えても！」「一緒に食べよ！」

「この場合一人ではなく一柱というのが正しいのだが・・・・・」

よいではないか、細かいことなんて（ｂｙ極光神）

因みにこの一軒を知った官僚達と荒野の民が極北に対していろいろ制裁を行うのだが（政治経済的な意味で）彼らの自業自得として受け入れてもらいましょう！

「ちょっ！まって！！それは我が国の生命線が・・・・・・・・・・・・・・」

「お前ら、どうしてくれるんだ！！」「うわぁ！」

「勘弁してください謝りますから・・・・・・・・・」

「国に帰ったら壁のしみにされてしまう・・・・・・・・・・・・・」

「どこか亡命受け入れてくれるところあるかなぁ・・・・・」「無

理だな・・・・・・・・・・・・（しくしく」

強く生きろよ。

極北戦士と粛清女神（後書き）

女性の敵は即つぶされてしまいますな。

孤児弟と酒盛市場（前書き）

あらすじなんてものは意味がないので別の話を

俺は貧しいが父母と妹と共に過ごしていた。
貧しいながらも父母は俺達が飢えないように命を削って働いてくれた。
村の皆も貧しいがわずかな大地にへばりつくように大地を耕し得られる恵みに感謝して生きている・・・・・・・・・・・・・・

貧しくても皆優しくて分かち合いながら俺達子供を慈しんで生きていた・・・・・・・・・・・・・・

それでも世界はままならないものである年日照りが襲ったのだった。
畑も森も干からびて全ての生き物が飢えていく・・・・・・・・・・・・・・・・・・

大人達は俺達子供に飯を与え次々に飢えて死んでいった。
まずは年寄りから飯を絶って朽ちていき、育てきれない赤子には塗らした布で苦しまないように息の根を止めて泣きながらおばさんたちがごめんねといい続ける・・・・・・・・・・・・・・・・・・

実りのない秋を迎えて、森に食い物を探しに言った男達が戻ってこないし俺達子供は飢えていく。

領主の配下達が俺達の村に来て少しの大人と子供だけを見てダメだと判断したらしい・・・・・・・・・・・・・・・・・・

俺達は村を捨てて街に行く羽目になった・・・・・・・・・・・・・・・

街の連中は冷たくて、村から来て俺達を無駄飯食い扱いする・・・・・・・

実際そうなのだが村の収穫で生計を成り立たせる商人達が俺達を真っ先に見捨てるのは如何なのだろうと思う・・・・・・・・・・・・・・

雪の季節が来て、大人達は子供達に食わせるのが精一杯で次々に倒れる・・・・・・・・・・・・・・

俺達子供は食わせてもらうのが悲しくてせめて大人達に手助けしたくて色々な売り子の手伝いやなんかをするのだが大人どころか自分達すら守るのが精一杯・・・・・・・・・・

妹分が物言わぬ躯で見つかった日には神の助けのないことをうらんだりもした・・・・・・・・

貧しくても満足する小さな村ですら神は容赦なく刈り取るのだろうか？

そんな時俺達はうわさに聞いた。王都と呼ばれる大きな都には全裸賢者と呼ばれる聖者がいて貧しいものや奴隷や孤児達を助けるために命を削っていることを・・・・・・・・・

大人達は自らの稼ぎの中から少なくない金を俺達に渡して都に行って全裸賢者を頼れと言った。

大人達は飢えて痩せこけているのに俺達のために金を用意してくれた・・・・・・・・・・・・・・

女衆は春を売りながら稼いでいるし」、男衆は身を削って俺達が前

に進むために金を用意してくれた・・・・・・・・・・・・・

領主はもはや当てにならない・・・・・俺達子供は王都目指して進むのである。

俺は子供の中で最年長だ。

村の子供達をできるだけ多く王都に導かなければならない・・・・・・・「

俺達孤児のために命を削るなんて戯言は信じられないが王都の孤児院ならばせめて飢えないですむだろうと信じてチビ共を騙すようで悪いのだが街から足を進ませる。

途中で足を止めた子供を負ぶって進むけど、足を止めた子供は三日と立たないうちに物言わなくなった・・・・・・・・・・・・・

途中の村々では俺達に同情して飯を食わせてくれるけど、俺達はそれに頼ってはいけないと知っている。

頼って村の子供となっても余所者だから最初に切り捨てられる。

それだけならいい、下手すれば奴隷として扱われても文句が言えない立場になるのだろう・・・・・・・・・・・・

俺一人ならば耐えられるが、託された小さい者達のために歯を食いしばって王都へと足を進める。

金がなくなればゴミをあさったり、俺の尻を欲しがる酔狂な酔っ払いに任したりして王都への道を進む・・・・・・・・・・・・・・・

大人の足で１０日程の道なのだが半月ばかりかかる・・・・・・・・・・

俺の尻は血が流れてとまらないし、託された子供のうち5人は路上に放置する羽目になった・・・・・・・・・・・・ごめんよ・・・・・・

・・・俺がもっと速く尻を売れば助けられたのに・・・・・・・・・・

それでも１０人近い餓鬼共を連れて王都近辺といわれる場所までたどり着く・・・・・・・・・・此処まで来れば何処かの農家の市場に向かう馬車とか乗せてもらえるのだろうか？最悪俺の尻を売ればちびどもを王都まで届ける事ができる。王都まで行けば衛士なり誰かに頼んでちびどもを幸せに満ちた全裸賢者様の元に送る事ができる・・・・・・・・・・・・・・

そうすれば俺の命なんか如何でもいい・・・・・・・・・・・・・・

やっと、報われる・・・・・・・・・

村の大人達の願いを命を削って俺達に金を用意して幸せになれと血を吐いた父母の思いに報いる事ができる・・・・・・・・・・・・・・

王都に近づいた俺達に、胡散臭い男達が近づいてくる・・・・・・・・・

俺達が王都に向かうことを知って、捕まえようとする残忍な顔をした馬上の戦士に上半身裸で大剣を持った男。その下っ端らしいモヒカンや眼帯の男達・・・・・・・・・

俺は噛み付き持たされた短剣で切りつけながらチビ共に逃げろと時間を稼ぐ・・・・・・・・・・

こいつらは奴隷商人だ・・・・・・・・・・一人でもいい、王都にいる賢者様の元に行って幸せになれと叫びながら俺は男達の邪魔をする・・・・・・・・・・・・・・

一人一人捕まえられる・・・・・・・・・・・・・・・そいつに向かって俺は短剣を振るうのだが、相手は大人。それも訓練を受けた連中だ・・・・・・・・

何人か王都に向かって逃げ出せたのを確認して気が抜けたところで男達の一撃を受ける・・・・・・・・・・・・・・・

薄れ行く意識の中で・・・・・・・・・・・・・・・一人でもいい、王都にたどり着いて俺達の村の記憶を持って幸せになってもらいたいと願うのであった・・・・・・・・・・・・・・・

いつもの通り私達主従は市場に遊びに来ている。
孤児娘？極北の馬鹿共に弄ばれた心の傷を忘れるかのように王宮で働いている。

結局極北連合からは詫びの品物が来たのだが孤児娘達は送り返してしまったのだ。
「あたりまえでしょう、やったことを品物で済ませるなんて不誠実受け入れる気はありません。」
「本人が土下座で謝っているから謝罪は受け入れますよ。官僚様方の事は国の面子ですから知ったことではありませんが・・・」
「実害はないけど、見たくはないですわ極北連合の民なんて・・・・・・・・・」

私自身、可愛い娘達に戯れに手を出した馬鹿に対しては意趣返しをしなくてはいけないかなと思ったりもするが、その辺は兄上達が切れてしまって街道筋を抑えてしまったのだった。

「弟よ、可愛い義理の姪っ子たちが辱められたのだろう？極北連合に麦が一粒たりともいかない様に街道筋を抑えたから心配しなくて良いよ。」
「兄上、港も押さえないと・・・・・・・・・　とりあえず諸国の港の港湾管理官に賄賂渡して極北連合を一番後回しにするようにお話していきましたが・・・・・・」
「子供達よ、生ぬるいぞ！王国法に極北の民がいたら即死刑にする程度の条文を提案しなくては・・・・・・・・」

上から長兄（現聖域守護辺境伯）、次兄（聖域守護辺境伯城代）、父（前聖域守護辺境伯）
如何して見ず知らずの娘のために・・・・・・・・・・・・・・・

「あのなぁ、お前が庇護下に置くと宣言したときから、この娘達は我々の一門だ！それに対して理不尽を行うならば、王家だろうと神だろうと喧嘩を売るぞ！」
「父上は孫娘に恵まれていなかったから、弟の娘達に目をつけたのだろう。母上も孤児娘たちを可愛がりたくて仕方ないから一度顔を見せに来い。」
「そうだな、主に俺達の精神衛生を守るために・・・・・・・・・・・・・・」

即、極北連合が詫びいれに来た・・・・・・・・・・・・・・
大使夫人が態々王都まで来るなんて・・・・・・・・・・・・・・
「あら、其処のダメ男達の教育ついでですからお気遣いなく・・・・・・・・・」

大使公邸の壁の修理が増えた気がするのは気のせいだろうか？
「見なかったことにしてください王室顧問。」
泣きながら極北戦士が土下座するので見なかったことにする。

大使夫人は孤児娘たちを抱きしめ、
「うん、こんな可愛い子供達を戯れに求婚するなんて・・・・・・・・・・」

極北連合の武官が著しく減少した件については私は何も見てないよ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

話を戻そう、私達主従は市場で補佐見習の母君の店に邪魔になりながら市場の賑わいを楽しんでいる・・・・・・・・・・・・・・・

ちなみに補佐見習夫妻は仕事中である・・・・・・・・・・・・・・・

私が市場で民草が幸いなやり取りをしているのを見ながら茶を楽しんでいる。孤児姉は端切れ屋に向かって色々相談している。私は孤児弟とのんびり茶と茶菓子を楽しんでいるのである。

補佐見習の母君は私達主従が茶を飲んでいるのを尻目に小物の商いをしているのだが売れていないようである。

息子の稼ぎは一般市民の数倍になっているからある意味趣味に近いのだろう。その嫁を合わせれば一般市民の年収を半月で稼いでいる計算になるのだが・・・・・・・・・・・・・・・

「私はそんな贅沢に慣れるわけいきませんから・・・・・・・・・・」

でもこの分だと孫の面倒で引退なんて・・・・・・・・・・

「あと3年・・・・・・・もとい4年待て欲しいですわ・・・・・・・・・・・・二十代で祖母なんて・・・・・・・・・・・・・・・」

いくらか複雑な思いがあるようだ・・・・・・・・・・・・・・・

そんな市場見物の間・・・・・・・・・・・・・・・ぼろきれをまとった餓

鬼を見つける。
今時珍しいな、飢えた子供なんて・・・・・・・・・・・・・
私を見つけると
「何で全裸賢者なのに服着ているの・・・・・・・・・・・・・」
勝手な事をいって倒れる・・・・・・・・・・・・・・
「おいおい！大丈夫か？」
餓鬼を見ると腹を鳴らしている・・・・・・・・・飢えと疲れか・・・
・・・・・・・・・
私は孤児弟に命じて食い物を用意させるのだった・・・・・・・・・
・・・
本当に誰だ！！こんなに飢えさせて大丈夫だというやつは！！
飢えて倒れた餓鬼の介抱を補佐見習のご母堂に任せて色々考えるのだった。

孤児弟と酒盛市場（後書き）

わたしはにげる
わたしはにげる
わたしはひっしににげる

おにーちゃんがにげてぜんらけんじゃにたよれといったから

わたしはしっている。おにーちゃんがまちについたらいやいやおとこのひとととへんなことをしていることを・・・・・・・・・
それをしられたくないおにーちゃんのおもいをしっているからわたしたちはだまっている。
ときどきおにーちゃんはつらそうにしている。こしをいためているのかひきづりながらわたしたちをおうとにつれていけばしあわせになれるといいながらみちをすすんでいることを・・・・・・・・・・

ちいさいこたちはみちでたおれてうごかなくなる。
それをみちばたにおいていくときのおにーちゃんのかおはなきたいのにわたしたちのまえだからないてはいけないとがまんしている。
そしてわたしたちにむりやりあるけあるかないとおいていくぞとおどしている。

わかっているんだ。うごけなくなったものをおぶったりするとこんどはじぶんまでうごけなくなると・・・・・・・・・・・・
おにーちゃんはかばうならばさきにすすめとおこりながらすすんでいる。

でもおにーちゃんはうごけなくなったちびをじぶんでできるだけせおっている。

これをむじゅんというのかな?

そうしてなんにちもなんにちもみちをいくととおくからおおきなかべがみえる。
あれがおおとだとがんばってあるけという。

そのみちをいくとおおきなひとがたちふさがってどこにいくのとき く。
おおとまでだとおにーちゃんがいうとおくってやろうとおおきなひとがいう。

おにーちゃんがえんりょすると、おおきなひとたちはわたしたちをかかえてつれていこうとする。

おにーちゃんはひとさらいだ! かまわずにげろといいながらないふをわたしたちをにがそうとする。
おおきなひとたちはうまのうえからくさりをまとったはだかのうでからわたしたちをつかまえようとする。

おニーちゃんはないふがだめならばかみついてあしどめをする。
わたしたちはおうとにむかってにげだすのだがおにーちゃんはひとりでとめるのもひとりがげんかい。

つぎつぎにむらのこどもたちがつかまる。

わたしはこわくなってこわくてまもれないくやしさをかかえながら

にげだす。

どれだけにげたのだろう？おうとのもんがみえたときあんしんしてないてしまった。

でもあんしんすることがわるいことだとおもった。

どうしてうごかなくなったのがいるのだろう？

どうしてわたしをにがすためにみんなかみついたりしたのだろう？

どうしておにーちゃんはまちでおとこたちといっしょにいやなことをしたのだろう？

どうしてどうしてどうして？

まちでけんじゃさまにあえばわかるだろう。

まちでやりをもったおじさんにぜんらけんじゃさまにあいたいといったらいまはいちばにいるとおしえてくれた。

いちばといわれるばしょにいった。

おとなたちはいろとりどりのふくをきてしあわせそうにいろいろなことをしていた

こどもたちはきれいなかっこうでおなかがすいていない

どうしてわたしはおなかがすいていておなかがすいていないのがいるのだろう?

いちばでけんじゃさまがどこにいるのときいたらおばちゃんがおかしをくれた。
おじちゃんがかおをふいてくれてくだものをくれた。
おねえちゃんがここだよとつれていってくれた。

そしてけんじゃさまにあった・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ぜんらけんじゃなのにふくをきている。
わたしはしんじられなかった。
しあわせそうなこどもをつれてけんじゃさまはさけをのんでいたから!

だからわたしはぎもんのさけびをあげた。

「何で全裸賢者なのに服を着ているの!!」

さけんだらいのちのほのうがきえたらしくわたしはきがとおくなる・・・・・・・・・・・・

ごめんね、むらのきおくをひきつげなれなかった・・・・・・・・・・・・
しあわせになれなくてごめんね・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

わたしはやみにしずむ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

孤児弟と貴人聖域法（前書き）

あたしは「たすけて！」といわなかったのにこうかいしている。

わたしはしぬだろうけど、どれいしょうにんにつかまったむらのこどもたちやおにーちゃんはまだいきているだろうし、うまくいけばだれかひとりくらいたすけてもらえたかもしれないのに・・・・・・・・・・・・・・・

あたまがぐるぐるする。おなかがぺこぺこで、のどもからから・・・・・・・・・・・・

いちばのおちちゃんにおかしをもらったがぜんぜんたりない。

あれ？のどにみずがとおる。あまくてすっぱい。

「大丈夫？ここまで来たからには死ぬなんて結末は許さないからね。生きたいならば目を開けて・・・・・・・・・・・・」

やさしいおとこのこのこえがする。

わたしはよびもどされたのだろうか？からだがあたたかい。

めをあけるとくろいあめがひかりとあそんでいる。

「だんな！この子、気がつきましたよ！！」

おとこのこはこえをあげてだんなというおとなをよんでくれる。

だんなとよばれたひとはきぞくがきるようなきれいなふくをきている。

そこにつきしたがうようにきれいなふくをきたおねーちゃんがたべものをもったかごをよういしている。

おとこのこはかごのなかからぱんをひとつとってわたしにくれた。

「ゆっくり食べるんだよ・・・・・・・あわてて食べると身体に悪いからね。」

おとこのこからもらったぱんはあたたかくやわらかかった。

なかにはいっているくるみとほしたくだもののあじはあまくておいしくてなみだがでてくる。

みんなとたべたかったなぁ・・・・・・

みんなどうしているのだろう?

ひどいことされてないといいんだけどむりだろうな

どうしてひとりだけ・・・・・・・・・・

わたしはないていた・・・・・・・・・・

おとこのこはだまってだきしめてあたまをなでてくれた。

おにーちゃんがわたしがないていたときによくしてくれたことといっしょだ。

わたしはなきながらなみだとかはなみずとかなすりつけるようにないていたのにきがついた。

おとこのこのふくはきぞくさまといっしょのきれいなふくなんだけどわたしのはなみずとかどろとかできたなくなっている。

あっ!きれいなふくをよごしたらおこられる。とおびえていると・・・・・・・・・

「大丈夫だよ。もっと食べる?」

とやさしくなでてくれた。

だんなとよばれたきぞくさまはさっきぎもんのさけびをあげたけんじゃさまだった。

けんじゃさまはやりをもったへいたいさんたちとかきれいなおんなのひととはなしをしている。

きれいなおねーちゃんはわたしのかおをふいてくれた。
そしてやさしくなでてくれて

「君は一人で来たのかな？どこから来たのかな？」

わたしはむらのこどもたちのことをわすれてぱんをたべていたことにきがついておもわずさけんだ！

「たすけて！おにーちゃんが！むらのこたちがおとなたちにさらわれたの！！」

わたしのさけびにけんじゃさまとやりをもったへいたいたちがわたしのもとにくる！

「話を聞かせてもらおうか！」

孤児弟と貴人聖域法

衛士の中で手当ての心得がある者がいて、この薄汚い幼女が過労と空腹で倒れただけで目を覚ましたらゆっくり休ませておけばじきに回復すると言っていたので一安心だ！

孤児姉と補佐見習の母君に食べ物とか用意させるよう命ずるのだが、市場の衆が其々に少しずつだが持ち寄ってくれた食べ物がまだあったのに気がついた・・・・・・・・・・
それでも肉とか酒とか・・・・・・・・・酒宴の用意じゃないか！

そりゃーねー、市場に来ては酒を飲んで楽しんでいるところしかみせてないしねー（ｂｙ酒精神）
一緒になって楽しんでいた酒精神には言われたくないな。あと極北緒神群とか荒野領緒神群とか諸々にも・・・・・・

「賢者様、身体の弱った者にはきついですわね。食べやすい者を用意しましたからこちらからどうぞ！」
「ご婦人、手間をかけさせてすまない。」
「いいえ、私も救われた身。今生かしてくれている方々の名誉を貶めることは出来ません。」
「はいはい、堅苦しい事言わないで助けたいから助けるんでしょ。ご婦人。」

婦人の顔が赤い・・・・・・・・この親子はお人よしな所を建前の仮面で誤魔化そうとするところがあるからなぁ・・・・・・

其処が好ましいところなんだが。
補佐見習も傷跡娘が惚れているから立ち向かったりしているのに彼女の名誉のために立ち上がったとか嘯いているからなぁ・・・・・

孤児弟は薄汚い幼女を膝枕して水差しの薬湯を口に含ませようと四苦八苦している。
それでも無理だと判断したらしく、薬湯を口に含むと口移しであたえる。

市場の衆はひゅーひゅーと囃し立てるがこれは人助けなんだよ！

幼女の喉が鳴るのをみて、安心する孤児弟。
程無くして幼女が目覚める。
その時に一筋の光が孤児弟に降り注いだことは神々の悪戯に違いない。
私よりよっぽど絵になるではないか・・・・・・・・・・

これが後に【連作：黒髪孤児の一幕　叫びの幼女】の題材（モチーフ）となる瞬間であった。（ｂｙ歴史神）

イラン歴史捏造するな！！

ぼくっ！！（神秘緋金属（オリハリセン）張扇による殴打音）

いらぬ神の介入によりそれてしまったが目覚めた幼女は如何だろうか？

孤児弟が渡した焼きたての麺麭をゆっくりと食べている・・・・・・・・・・
何故泣く!!

泣くほど大したことはしていない!
これらから貧民は良く判らん。

食べて、安心したのか泣きつかれたのか孤児弟の服をべとべとに汚しまくった薄汚れた糞餓鬼は叫ぶ!

「助けて!おにーちゃんが!村の子達が大人にさらわれたの!」

この糞餓鬼が、叫ぶ順番が違うだろう!
この私に対して服を着ていると叫びやがるし!最初にこの助けの叫びを上げやがれ!
「賢者様、この子は幼い子供ですから穏便に・・・・・・・・・・・・」
「御主人様、まずはこの子の話を聞きましょう。」

女性陣の窘めに私は大人気なかったなと心落ち着け、幼女の話を聞く・・・・・・・・・・・・・・・

村を襲った日照りに大人達が次々に消えていく話・・・・・・・・・・・・・・
領主が街に連れて行ってからの苦難・・・・・・・・・・・・・・・・・・
大人達が命を削りながら子供たちに王都に向かって私を頼れなんて投げなしの金を渡して進む?
子供達だけの旅路の苦難・・・・・・・・・・・・・・・
おにーちゃんが売春して子供達のために金を工面する?
私の顔が怒りに満ちてくるのを感じて幼女が怯えているが気にしな

い。
とりあえず人攫いの話を聞こう・・・・・・・・・・・・・・・
なになに？人攫いは鎖を身体に巻いた大男とか馬に乗ったモヒカン頭？残忍そうな獣人？馬に乗った男はひゃっはーとかいって手当たり次第攫ったりしていると？どっかで覚えのある連中だな？

「だんな、普通に孤児院にむかいませんか？」
「孤児弟、やはりお前も同じ考えか？」
「御主人様、彼等にとっては善意の積りなんでしょうが・・・・・・・・」

まぁ、子供達を攫ったのが彼等ならば問題ないのだろうが・・・・・・少しは頭で考えて当たり障りのない応対をして欲しい者だが・・・・・・・・確か彼らも爵位もちがいたはずだが・・・・・・・・
「騎馬戦士（モヒカン）様は騎馬公配下の子爵位をだったはずですし、奴隷公の配下達も準爵位とか普通に持っていましたはずですが・・・・・・・・・・」
「あとで、礼法講座を開くとしますか・・・・・・・・・・・・・・」
「だんな、だんな。とりあえずはこの子を安心させてやるのが第一なのでは？」

うむ、孤児弟は心得ている。
忠義第一ではなく、主たる私にも必要ならば苦言を発する。得がたい人材だな・・・・・・・・・・

私は衛士達に子供達の回収を命じて市場の衆にこの幼女の連れを見つけたら褒美を取らすと檄を飛ばす！！

幼女は驚いて私を見るが、私は気にしない・・・・・・・・・・・・

薄汚れた餓鬼に懐かれても私の趣味ではない！

奴隷商人だったら飢えた死肉喰らいの蛆虫が救いに思える程度の責めをしてあげよう。

そして私が孤児院への道を向かう前に孤児弟が

「旦那、この子供をおいらの保護下に置いて良いですか？」

と問いかける。

私は弟子にして従者にして養い子の魂の叫びに鷹揚に受け入れる。

孤児弟が自分から私に対して自我を張るところなんてはじめてである。

弟子にして息子の最初の我侭に私は本気で叶える用意をしよう。

孤児弟は叫んだ

「この孤児幼女をおいらの貴人聖域法（アジール）の保護下に置く！神だろうと国だろうと世界だろうとその理不尽に泣くものを放置する者には本気でぶん殴る！！」

神々も

命を削っての叫び！応じない輩は聖戦で潰す（ｂｙ某王国守護地域神）

不器用な馬鹿の問いかけに応じない神なぞある意味はない。その神は潰すから存分に進め！（ｂｙ馬族守護神）

孤児弟の檄に応じない神なぞ滅ぼしてしまえ（ｂｙ性愛神）

飲み友達の子供が酒飲みは幸いにつながる叫びを上げたんだからおうじるよー（ｂｙ酒精神）

いいともさ！神々の助けなんかなくても私はこの王国に理不尽を起こすなんて私に対する喧嘩とみなして高く買ってやろうじゃないか！

神々？世界？我が弟子の世界に対する名乗りの祝いとして華々しく飾り立てて差し上げますか！！

まずは世界に対して！奴隷解放宣言をするか？それとも困窮する者に対する助けを与えない者に神の子たる資格なしと公開質問状をおくるか？

それ以前にこの餓鬼の兄妹分が無事である事を確認せねば・・・・・・・・・・

「幼女、心当たりがあるから一緒について来い。」

多分正解ならばどこぞの馬鹿が保護と称して連れ去っただけだろう・・・・・・・・・・

それならば、悲劇を茶番としてこの餓鬼の心から救うとしよう・・・・・・・・・・

孤児弟と貴人聖域法（後書き）

俺たちは囚われてしまった・・・・・・・・・・
一人残ったのが俺の妹だけか・・・・・・・・・・　無事に賢者様の下で俺達の分まで幸せに過ごして欲しいものだ・・・・・・・・・・・・・・

男たちは俺達を王都の中の建物に連れて行く・・・・・・・・・・・

その建物は怪しげな男達の中を女たちがまめまめしく働いている。
俺たちはいきなり風呂に放り込まれて洗われる。　多分に俺たちが高値でつくように手入れするのだろう・・・・・・・・

女たちに現れている俺はケツの異変に女たちは戸惑う・・・・・・・・
しりの処女は高値なんだろうけど価値を損なう俺は如何しようかと・・・・・・・・・

俺は女たちについていきある部屋に行く。
その部屋は調度が整えられているのだが薗にいるのは二人の爺だった。
一人は気弱なモヤシ爺だし一人は筋骨隆々なマッチョ爺だ・・・・・・・・・・

二人の糞爺は俺を見て女の話を聞くと苦々しげな顔をする・・・・・・・・・・

そうして俺の身の上話を聞く・・・・・・・・・・
もやしは同情の視線をくれるがそれは俺に対する喧嘩ととろう！！

マッチョ爺はにらみつけるが俺に対して怒っている訳ではない様だ。

そうしておれは別のところに連れて行かれる。
そこは男と女の絡みが彫刻されている建物なのだが、其処を平気ではいる女というのはどうかと思う・・・・・・・・・・・・・・
俺は其処で美人さんと話をして俺がけつをうったはなしをするといきなり体をひん剥く・・・・・・・・・・・・・・

俺のケツは血が止まらないし、痛いのだがそれを見た女は薬を塗ってくれた。
そして抱きしめて、つらかったねと泣いてくれた・・・・・・・・・・・・・・

そして、なよなよした男たちが俺のことを甲斐甲斐しく世話してくれる・・・・・・・・・・
男たちは俺と同じ境遇のようだ・・・・・・・・・・・・・・

俺のことを大変だったねと抱きしめてくれて、朝晩薬を塗ってくれる。
あの何処かの街の男達みたいに自分のことだけを考えてけつを傷つけるわけではなく大丈夫、守ると優しく薬を塗ってくれる。

うっ・・・・・・・・気持ち良い。
どうして?
と聞くと男たちは
しかるべきことをすればお尻だって気持ち良いと教えてくれた・・・・・・・・・・

がんばったねとか辛かったねと泣きながら抱きしめてくれる男たちはおれが歩いてきた旅路を知っているかのようだった・・・・・・・・・・

・・・

「そりゃ、僕達だっていろいろあったんだから・・・・・・・・・」
と昔語りをしてくれる男たちは俺よりも酷い目にあっていた・・・・
・・・・・・・・

でも、俺のために本気で心配してくれる男たちは俺に幸いを与える
ために神に祈って命を削っている・・・・・・・・・・・・・・・・
・

ばかやろう!
オレガソレヲウケイレルトオモッテイルノk!!
かみよ!俺のことは良いからこの馬鹿な男達のために祝福を・・・・
・・・・・・・・・・

神は朴念仁なのか倒れた男達をを尻目に俺に対して癒しの技を振る
う・・・・・・・・・・

なんでだよなんでだよなんでだよ・・・・・・・・・・・・・・・・

孤児弟と性愛神殿（前書き）

あらすじなんて語ったところで判ってくれる者がないので

性愛神殿祈りの間。
俺は俺の傷を癒すために連れてこられた・・・・・・・
其処にいた男娼神官たちが俺のために身命を削って祈りを捧げる・・
・・・・・・

なんでだよ！なんでだんだよ！！
腐れ神！どうしてこんな全うな奴の願いを聞いてしまうんだよ！！

それはね君に幸せになって欲しいという願いを彼らが魂すら賭けて
願ったからだよ（ｂｙ性愛神）

俺は願いを拒絶する　俺は神を拒絶する。俺は彼らを拒絶する・・
・・・・・・・
俺が願うは彼らがの幸い　俺が願うは弟妹どもの幸い　俺が願うは
誰かの幸い
俺の幸いという願いならば全て拒絶する
俺に対する願いの欠片があるならば誰か不幸な奴に回してくれ！！
この馬鹿共が自分が不幸なのにどうしてどうして俺に対して願いを
かける・・・・・・・・・・・・

くそったれがぁぁぁぁぁぁーーーーー！！

大馬鹿野郎が・・・・・・・・・・・こいつらの願いを無碍にしやがって・・・・・・・・・・・・お前は神に見捨てられても良いのか？（ｂｙ性愛神）

かまうもんか！！
ほんと世界には幸せになって欲しい者と幸せになるべきものがいるんだから！！
俺はそいつらの後でいい！！
この節穴の出来損ないの（以下罵詈雑言）

孤児弟と性愛神殿

私は幼女の助けを求める声に心当たりがありすぎる・・・・・・・・・

とりあえずは孤児院に行こうか・・・・・・・・・・・・・

「賢者様、わたしはどこに？」

「幼い子、君は王室の孤児院に行くことになる。私も万能ではないから、君の兄妹分を助ける事ができなかったしな・・・・・・・・・・・・それでも其処ならば君が飢える事も怖い思いすることもない・・・・・・・・・・・・・」

「どうしてたすけてくれようとするの？」

「私の弟子の黒髪の孤児弟がお前の事を神に喧嘩を売ってでも助けると宣言したからだよ。この迂闊な孤児弟の事だ、ろくに何も考えずに宣言したのだろう。師匠にして主人である私は尻拭いをしなければならないというわけだ・・・・・・・・・・・・」

わけが判らないという顔をする幼女に

「多分君の兄弟分は孤児院に行けば手がかりがあるよ・・・・・・・・・・」

幼女は黙ってついてくる。

その手は孤児弟に握られて安心しているようだ・・・・・・・・・・・・

「孤児弟は幼女限定でもてるようだな。」

「弟は弟妹どもに頼られていますから・・・・・・・・・・・・」

「末王女も懐いていたしなぁ・・・・・・・・・・・・」

「お兄ちゃんしてますからねぇ・・・・・・」

そして孤児院へとつく・・・・・・・・・・・・・・・

馬族(モヒカン)戦士や奴隷(はだがくさり)戦士に極北戦士(けがわのふく)なんて悪役っぽい者ばかりなんだ・・・・・・・・・・・・・・

孤児院に連れてこられた幼女は唖然として自分も売られたのかと思ったのだが・・・・・・・・・・・・・・

其処にいる子供たちが健やかでいる様子を見て怪訝そうにしている・・・・・・・・・・・・

その様子がわかるよ、一見怪しい者ばかりしかいないからねぇ・・・・・・

ところで極北戦士如何しているのかね？

「王室顧問殿ではないですか、ここは良いですねぇ・・・・・・酒合戦で張り合うことができる者に事欠かないし酒が旨い・・・・・・・・・・・・・・・・・・そして、女性達が綺麗で気立てが良い・・・・・・・・・・・・・・・・極北(大使夫人)の熊殺しと大違いだ・・・・・・・・・・・・」

幼女には理解できなかったようだが・・・・・・・・・・・・あきれ果ててしまっている。

極光神さま粛清許可願います。

うむ、ここまで恥をさらす馬鹿に遠慮は無用！後で国許の女性たちに伝えておこう。（ｂｙ極光神）

「えっ！えっ！」
「お前等子供らの前で何さらしていんだぁぁぁっぁぁぁっぁぁぁぁぁ！！」
どげしっ！！
私は神秘緋金（オリハリセン）属張扇で其処で酒盛りしてる馬鹿どもを粛清する！！
あべしっ！　だの　ひでぶっ！　だの　たわばっ！
だの言いながら遠く消えていく・・・・・・・・・・・
馬鹿の粛清は終わった・・・・・・・・・・・荒野の民や奴隷戦士団
についてはそっちの女性陣に伝えておこう・・・・・・・・
「ひでぇ・・・・・・・・」だの「鬼だ・・・・・・・・・・・・・」
声が聞こえるが気にしない。
残った、男達にこのよう所の連れがいないかと聞くと・・・・・・・
・・孤児院で保護されている事を聞く・・・・・・・・・・・
孤児院に入ると、暖炉のそばで見慣れない子供たちが一団となって
寝ているのが判る・・・・・・・・・
それを見た幼女はその幼児団子に突進して、心配しただのばかぁ！
だのと無双状態で叩きのめす・・・・・・・
団子幼児たちも幼女が無事であったのを受けて泣きながら喜んだり、
殴り返したり、抱きついたりしている・・・・・・・・・・
よかったよかった・・・・・・・・・・・・
そういえば、幼女が言うにはおにーちゃんなる人物がいたはずだが・
・・・・・・・・・・・

「それならば性愛神殿で治療していますわ。」
女衆の一人が言う。訳を聞くに
「アノコは馬鹿みたいに自分の体を省みないで無理をしていましたから・・・・・・・」
と口を濁す。
子供らの前で言う事ではないだろうから・・・・・・・・・・・しかも、院長とか麦秋老がついているから心配なかろう・・・・・・・・・・・
後は、この子等の兄弟分を見つけて弔ってやるか・・・・・・・・・・・チビ共に兄妹分を置いていった場所を聞くとしよう・・・・・・・・・・・・

「それならば馬族戦士さんが聞き出して手のものを差し出しているはずですわ・・・・・・・・・」
馬族戦士の分際でちゃんと仕事できるではないか・・・・・・・・・・

「御主人様？一応忘れ去られているとは思いますが馬族戦士様は子爵で荒野の民の族長代理の一人だったはずですが・・・・・・・・・・」
そうだった、あれで子爵というのは詐欺みたいな気がするが実はそうだったんだよなぁ・・・・・・・・・
でも、ちゃんと自分の名乗りをして保護するといったのかなぁ・・・・・

「いってないです。王都に行くといった私達にじゃぁつれていこうおらおらのっていけがきども、げへへ・・・・・・おれたちはやさしいからあんしんしなぁ・・・・・としかいってないです。」

・・・・・・・・・・・・・・・

「だんな、荒野の民ってこんなのばかりですか？」
「お前自分の家族をそう悪く言う者じゃない。あれはあの馬鹿だけだ！そうだと信じたい・・・・・・・・・・一応あれが次期公爵候補なんだというのは知っていたが・・・・・・・・・」
「あのぅ、賢者様？あの人たちは良い人だったのですか？」
「そうだよ、幼女君に脅かすような事をしてしまってごめんね・・・・・・・・後できつく言っておくから・・・・・・・・・天幕の女衆に・・・・・・・・・」

「王室顧問様それは後生だから」とか「むごい」だの「ひとでなし」とか言われるが子供に対して脅すように連れ去る者がどこにいる！！

まぁ、怨嗟の声が出ているが女衆もこのやり取りでどんな風に子供達を保護したか理解したらしく！
麺棒片手に男達ににらみを利かす！

まぁ、子供たちが無事とは言えないが保護されてよかった・・・・・・

「さて、孤児弟。君は子供たちが無事に保護された事を確認した。つぎはどうする？」
私は教師役として意地悪な質問をすると、
「おいらは、この子達の親がいるならば親も保護したい・・・・・・・・・一言文句言わないと気がすまない！」

捨てられた身としては捨てる親に文句を言いたいのだろうな・・・・・・理解した。

わかっているか?親を保護するということはその領主に喧嘩を売るに等しいという事を・・・・・・・・・

孤児弟と性愛神殿（後書き）

性愛神は小さな男の叫びを聞いた。
どうしたものかと・・・・・・・・・・

性愛神の信者たちは自らの身命を差し出してこの男の幸いを願っている。
小さな男はそんなもの入らないと突っぱね、自分を生贄にして信者や自分の兄妹分を助けてくれと願う・・・・・・・・・・

どちらをうけるべきだろうか？

どちらも自殺願望丸出しなんだがどっちの願いも利他の願いだ。
玉虫色の解決法なんてあるかなと悩むのだが、そうだと思いつく。

おまえら、願いが自分勝手すぎだ！！
叶えてやるが、代償代わりに呪いをかけてやろう。
お前等三人はお互いの痛みを共有しろ。
それは偽善の報いだ。

あと、小さな男。君の落し物だ・・・・・・・・・・・・・・大事にするが良い・・・・・・・・・・・・・・

我は小さな男が途中で見捨てざるを得なかった小さな骸を５つおろしてやった。

おや？一つ二つ息があるのがあるな？
しぶとい事だ・・・・・・・・・・・・

骸の中に生きようとしているのを見つけた小さな男は慶び我に感謝をして、大きな声で助けを求める！！
我が忠実なる男娼どもは命を削り受け渡す秘術を持って幼子達に生きよと問いかけるし、娼婦たちは薬湯や食べ物を与え命の炎を再び燃やそうと試みる・・・・・・・・・・・・

我が神殿に通う忠実なる信徒たちは神殿の中で小さな命が消えようとしているのを見て有り余った精力を祭司達の助けを借りて分け与えているし、王室顧問の助けを借りて今の境涯にいる元街娼達は円陣を組んで我が神術を唱え命を分け与える。

百を超える人たちの助けを借りて、冥界の淵から助かった命がある・・・・・・・・・・・・・・・
其処にいた全ての人達は小さな子供たちが助かった事に喜び、小さな男は人々に地に臥すほどに頭を垂れて感謝をする。

助けられなかった命があるのに助かった命を喜ぶとは人の子というものは不平等な者だな・・・・・・・・・・・・

辺境伯家と隠遁願望（前書き）

こじいんにつれてこられてなんにちかたった。
たべものはおいしくておふとんはふかふかで、あたらしいともだちはわたしよりひどいところからきているのにあたらしいわたしたちのことをしんぱいしてくれている。ばかなの？

むらからいっしょにきたこどもたちはここはしあわせだとおもっているけどわたしはそうはおもわない。

ちいさいおじいさんはつくえのうえでうなりながらなやんでいるし、いかついおじいさんはわたしたちによみかきをおしえてくれているのだけどやせていたりからだのいちぶがなかったりするこどものことをいつもきにかけている。そのことでからかうこがいたらかべにたたきつけていた。

「ままならないことで馬鹿にするなんて人の子の為すべき事ではない！」

とほんきでおこっていた。
もともとえらいきぞくさまだったんだけどなぜここにいるのだろう？
きぞくさまならばうえからふんぞりかえってぜいたくしているものだとおもっていたけど・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ひとさらいかとおもっていたおじちゃんたちははなしてみるとやさしいいいひとたちだった。
とおいくにだったり、わたしたちとくらしかたがちがうからかんちがいされやすいんだとか・・・・・・・・・・・・・・・・・・
こわらがせてごめんねとあたまをなでてくれた。

ひざのうえとかかたにのっけてくれたときおとうさんよりたかいふうけいにびっくりした。
うまにのせてもらったときもかぜがこんなにもつよいとおもわなかった。
うまからうまへのいどうはほうりなげるのがふつうだとしらなかったからなげられたときびっくりした。
あとでうまのおじちゃんたちはおんなのひとになぐられていたけど・・・・・・・・・・・・・・
ぶんかのさがどうだとかぶつぶついっていた。

けがわのおじちゃんはさけばっかりのんでいるけどわたしたちがくるとあそんでくれる。わたしたちがおなかがすいてうごけなくなったこをおいていったというはなしをするとおおきなこえでないておおきなさけびをあげてかなしんでいた。
つぎのひ、ちゃんとたべろとおおきないのししをかついできたときはびっくりした。でもどうしてかおがぼこぼこなんだろうか?それをきいてもこたえてくれなかった。

くさりのおじちゃんはこどもたちにたたかいかたをおしえてくれている。
なんでもおじちゃんたちのおじいちゃんのおじいちゃんのそのまたおじちゃんたちはひとさらいにあってどれいというものにされていたらしい。
そこからたすけられてそのくさりのおじちゃんのおじいちゃんの（略）はかわいそうなひとやどれいにされたひとをたすけることをちかったのだとか・・・・・・・・・

わたしたちのおやがおかねをわたしておうとにいけとおかねをわたしたはなしをするとおおきなこえでさけんでおこってつるぎをうち

ならしていた。
うごけなくなったこをおいていったとはなしたら、つるぎをもったおとこのひとがたくさんきてこどもたちをむかえにいくとかけあしでいった。
どうすればあれだけはやくはしれるのだろうか？

どうぶつのかおをしたおじちゃんたちもみためはこわいけどいいひとだった。
びょうきのこがいたらよくきくくすりをとってくるととびだしていった。
つぎのひびょうきのこがけろりとなおったあとにぼろぼろになってやくそうをもってきてくれた。
どこまでいったのだろう？

こじいんのおんなのひとはとてもやさしい。
よごれていたわたしたちをあらってくれた。
あたたかいごはんをたべさせてくれた。
つかれてねつをだしたこにはひとばんじゅうついていてくれた。
おんなのひとたちもけんじゃさまにたすけてもらったらしい・・・・・・

でもたすけてもらったからってひとだすけするりゆうにはならないとおもうけど？

ここのひとたちはみんなおひとよしのおおばかなんだろう。

そのことをおとこのこにいうと、けんじゃさまがばかだからそれがうつったのだという。

わたしはばかがうつらないようにきをつけないと・・・・・・・・・・・・

それをきいたけんじゃさまのけらいのおねーちゃんはわらっていた。
やさしいおとこのこもわらっていた。
けんじゃさまもわらっていた。

おとこのこはわたしのあたまをくしゃくしゃなでてくれた。
このきもちいいじかんのためにばかになるのもわるくないとおもった
たがこえにださなかった。

おなかがいっぱいでおふとんふかふかでいまはしあわせ。
でも、おとーさんやおかーさんやむらのおとなたちもいっしょだと
もっとしあわせなのに・・・・・・・・・・・・・・

辺境伯家と隠遁願望

さて、子供達よ本家に挨拶に行こうか・・・・・・・・・・

「御主人様、そういえば守護辺境伯家に挨拶に行くのは初めてなんですが。」

「でも、守護辺境伯(あにうえ)には何度か会っているだろう？皆、君達に会いたがっているから心配するな。」

「でも、どうして今更いくんですかぁ？」

「まぁ、孤児娘達の件で極北に喧嘩売ったから挨拶回りするのと孤児弟が厄介事拾ってきたから根回しに・・・・・・・・」

「厄介事って、小さい子達を保護しただけじゃない。あれを見捨てることなんて出来ないわ。」

「そんなことが出来たら、苦労しないけど・・・・・・・・”おにーちゃん”だしね孤児弟は。」

「確かに、子供を見捨てる孤児弟なんて俺は信じられないしな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・私達の中で一番の愛すべき大馬鹿者。」

「護衛官様の財布狙ったのも弟妹達のためですものねぇ・・・・・」

「そう考えれば今の私達がいるのも孤児弟が馬鹿をやったからなんだねぇ・・・・・・」

「馬鹿馬鹿言うなよ！！」

私達は孤児弟をからかいながら辺境伯屋敷に向かう。

領地は王都から馬車で十日程行った所にあるのだが、屋敷は王都の外れにひっそりと建っている。

「だんな、どうして実家があるのに寮にいるんだい？」

「単純に寮のほうが近いのと、実家だと仕事を手伝わせれるからだ

よ・・・・・・・・私は独立した一家を構えているのに・・・・・・・・本当に兄上達の人使いの荒さといったら・・・・・・・・・」

「単純に使えるのがいるから、手伝わせようとする怠け根性では？」

「それは否定しない・・・・・・・・・・我が家族ながらあの隠居願望の強さといったら・・・・・・・・・」

「それは御主人様もいっしょでは・・・・・・・・・」

「否定しないよ。」

貴族街を抜け市民街を越えたあたり、王都の城壁を越えるか越えないかのあたりに我が辺境伯屋敷がある。

城壁のそばだから練兵場とか私兵団を抱える辺境領主の屋敷が続いている・・・・・・・

ある意味城壁の内側に貴族私兵団の壁があると思ってくれればよい。

もっとも、私兵団の矛先が王城に向かうことも多々あったのだが・・・・・・・・・・

「矛先向けた最新がだんな達だったというのが笑い話だけど・・・・・・・・」

「一番数が多いのも我が一族だぞ！」

「歴史は繰り返すなんて言葉あったけど、反乱の原因っていらん役職押し付けられて酒が飲めないと切れたとか？」

「・・・・・・・・・・よくわかったな。」

「賢者様の一族らしいけど、良くおうちが続いていたね・・・・・・・・」

「そりゃ建国以前からの一族だし、王家の弱みもそこそこ握っていたからねぇ・・・・・」

「賢者の旦那みたいなのが代々いたわけだ！」

「私は其処まで酷くないよ。補佐見習、君の私に対する評価というものは酷すぎるのだが一度話し合おうか？」

「話すまでもないだろう。邪魔する奴等は王でも神でもぶん殴る。

単純じゃないか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・もっと簡単、酒と女を適度に与えておけば大人しい。」

「傷跡娘・・・・・・・・・・・・・・」

そんなこんなで馬車で半時、辺境伯屋敷につく。

屋敷の門には家旗が掲げられ、そこには

【王家は預けた、私は面倒だ！】と書かれている。

あいも変わらずふざけた文面だ・・・・・・・・・・・・

「御主人様のご実家らしいですわ。」

うるさい！

屋敷に入ると応接室に通されて実家の面々と対面となる。

兄上たちは何度か顔を合わせているから簡単な挨拶をする程度だし

父上もゆるりとするとよいとのんきな調子で茶と茶菓子を進める・・・・・・・・・・

一番うるさかったのは母上だった。

「この子が、補佐見習？　女の子の為に無茶をした男の子なのね？」

「俺はそんな大したもんじゃない。あの糞野郎の言い分が気に食わなくて喧嘩を売っただけだ！」

「またまた、謙遜しちゃって・・・・・かわいいんだから。（抱」

「奥方様・・・・・・・むぐむぐむぐ・・・・・・・・・」

ああ、補佐見習母上に抱きしめられて窒息しかけてる・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・むぅ。」

傷跡娘も文句を言いたいのだけど相手が我が母上だから文句が言え

ない・・・・・・

「あらあら傷跡娘ちゃん、貴方の大事なこの子を取ったりしないから心配しなくて良いのよ。」

母上は補佐見習を開放して傷跡娘に近寄ってその顔を見る。

傷跡娘は顔を見られるのが恥ずかしいのか身を捩らせようとするのだが母上はそれよりも早く顔をがっちりと捕まえる。

「うん、傷があっても可愛いじゃない。この子が貴女の為に立ち上がった理由がわかるわ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「傷を理由に内向きになる必要はないわ。貴方はこの子の好意を受け取るに十分すぎるほどいい子なんだから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・うん。」

「そんでどこまでいったの？口付け？それとも・・・・・・・・・・・・きゃ☆」

「母上、このヘタレに其処までする度量なんてないですよ。一度なんか二人きりで一晩過ごさせたんですが何もなかったですし。本当に男なんかと思えるときがありますよ。」

「賢者の旦那！あん時は隣で聞き耳立てていた出刃亀が沢山いたじゃないか！！」

「・・・・・・・・・・・・・出してくれても良かったのに・・・・・・・」

「息子、そんな雰囲気もないところで二人きりにしても手を出せないじゃないの！もう少し考えなくては。」

「そうでした母上、今日は二人だけ離れに部屋を用意してもらえませんか？」

「あら、いいの？まだ小さいでしょう・・・・・・・・・・・・」

「問題ないでしょう、ヘタレだから。」

「ヘタレヘタレ言うな！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・へたれ（小

声で」
「傷跡娘まで・・・・・・・・・・・・・」
ヘタレ発言連発で落ち込んだ補佐見習は置いといて、母上は娘たちと談笑している。
久方ぶりに可愛い小娘を弄れるとあって嬉しそうだ・・・・・・・・・
「賢者の旦那、奥方様って・・・・・・・・・・」
「まぁ、母上は甘ったるい騎士道物語とかの類が大好物だからな。お前のような現実にかっこつける馬鹿を見て舞い上がっているのは否定しない。でも、我が家で一番の権力者だから気に入られて損はないだろう。」
「次は傷跡娘と一緒に遊びに来い、補佐見習。末弟の言うとおり母上はお前を気に入っている。屋敷に部屋を用意するから住み込むか？」
「そうしたら色々な意味で逃げ出せなくなりそうだから・・・・・・・・・」
「それは元々だろう補佐見習。お前が他の女に見向きするとは思えん。」
「遠慮は要らんぞ補佐見習、お前は我々の一門と認められたんだから・・・・・・・・・」
「そう言えばだんな、孤児娘達の件の挨拶とかは良いのかい？」
「この状態を見て挨拶とかいらないだろう・・・・・・・・・・・・」
母上は傷跡娘に色々質問して真っ赤になるのを楽しんでいたり、それに孤児娘達が追加情報を与えて火に油状態にしたり・・・・・・・・傷跡娘が身の置き所がなくなったら孤児姉がたしなめたり・・・・・・・・・

もう、今更だな・・・・・・・・・・・・・

「ある意味王妃様と同じ状態だね・・・・・・・・・・・・・」

「今日一日は付き合ってもらおう、何時来るのかと煩くてかなわなかったからな。長男は男の子ばかりだし、次男は結婚すらする気がないみたいだし、末息子は遊郭通いばかりで嫁の連れてくる気配もない・・・・・・・・・・・・娘とか孫娘が欲しいと常々ぼやいていたからなぁ・・・・・・・・・　なぁ、息子よ。この子達をうちに置かないか？」

「父上、自分の精神衛生のためだけのこの子達を置いとくわけにはいきませんよ。仮にも王宮の官僚として働いているんですから・・・・・・・・・・・・」

「どうして王室はいつも人手不足なんだろうな？お陰で我が家がいつも仕事押し付けられる！」

「参ったものですよねぇ・・・・・」「本当に・・・・・・・・・・・・・・・」

「私程度の実力を持った貴族が一家くらいあっても良いのに・・・・・・・・・・・」

「末息子、我々を追い落としてくれるくらいの実力を持った貴族は？」

「父上、今のところないですな。この子達を仕込んでいるんだけどモノになるまで暫くかかりそうだし、なったらなったで後見とか言ってわれわれもこき使われますぞ。」

「由々しき問題だ・・・・・・・・・・・・・」

「だんなの仕事嫌いは家風だったんだなぁ・・・・・」

「賢者の旦那諦めて仕事すれば良いのに・・・・・・・・・・」

「意地を張らないで仕事したほうが楽なのにおいら達を仕込んでいる時点で余計に仕事している節があるけど・・・・・・・・・・・」

「あらあら、我が家の男たちは仕事をすればある程度以上に有能なのに仕事したがらないから困ったものだわ。私もこの家に嫁ぐとき禅譲の聖賢が一族だからどんだけ凄いのかとドキドキだったんだけど、蓋を開けてみたら隠遁癖を隠そうとしない人型の怠け者でしょう。がっかりしたわ。」
「奥方様・・・・・・・・・・・」
「息子達もそろいもそろって、仕事嫌いだし・・・・・・・・・・挙句の果てには仕事したくないと内戦寸前まで起こすでしょう・・・・・・・・・・・この一族どこで間違えたのかしら。」
「俺達のような子供に問いかけないでください。ついていって良いのか考えてしまいそうですから・・・・・・・・」
「よいではありませんか。御主人様の一人くらい、私達で養いましょう。」
「まぁ、賢者様にはそんくらいの恩があるしね。」「市場で酒盛りさせて置けばご機嫌だから安いもんですわね。」
「時々性愛神殿で運動させないと・・・・・・・・・・・」
「まぁ、それは私達が成長したら交代で相手すれば・・・・・・・・・・」
「あらあら、末息子がヒモになりそうですわね・・・・・・・・・・・」
「まぁ、今の御主人様の資産状況ならば私達主従を連れて隠遁しても問題はないのですけどね・・・・・・・・寧ろ私達の稼ぎを受け取ろうとしないでしょうし・・・・・・・・・・・・・」
「変なところで堅いからねぇ・・・・・・」「変なところは堅くないのに・・・・・・・・・・・」
「こらこら娘達、へんな事言わない・・・・・・・・・・・後で説明するのが面倒になる。」
「末息子？もしや貴方、この子たちの稼ぎあてにしてないでしょうね？」
「大丈夫ですよ、前に投資した部分で食っていけますので。」

「それなら良いけど・・・・・・・・・・・・・・・ちゃんと仕事しなさいよ。」
「わし等も隠遁するだけの準備はあるんだがなぁ・・・・・・」
「はいはい、寝言は寝て良いなさいな。」
「何時になったら隠遁できるのかなぁ・・・・・。」

ゆるりとした雰囲気の中、隠遁したい男達のつぶやきは聴くものがなかった。

辺境伯家と隠遁願望（後書き）

こじいんにきて、なんにちかたったあるひ。
わたしはおにーちゃんをたづねにこじいんからしんでんにいった。
しんでんはきれいでここならばだれもかれもすくってくれるとおもえたがそれはうそである。あぶないあぶない、だまされるところであった。
せいぎなんてなくただあるのはおもいのつよさだけだとけんじゃさまはいっている。
それはともかくこじいんよりひろくふくざつなたてものをにーちゃんをさがしてあるく。
しんでんおなかでおんなのひとがいたのできいてみるとあんないしてくれた。
ここがおにーちゃんのへやか、げんきになったのかな？
とびらをあけてみるとおにーちゃんとおとこのひとふたりがだきあってきすをしているのをみた。
どあをしめてまわれみぎしてはしってかえった。
ああ、おにーちゃんはしんだとおもおう。
たびのあいだにこわれてしまったのだろう・・・・・・・・・・・
ごめんねおにーちゃん。

さいごにひとめみようとのぞいてみると（以下作者の文章力というか精神力が続きませんので削除。そういう行為と思ってくれれば。自己補完でお願いします。）

やっぱり壊れてしまったとしか思えない・・・・・・・・・・・・・・・

ああ、何か色々とすまん（ｂｙ性愛神）

辺境伯家と報復衝動（前書き）

あらすじは俺馬族戦士（モヒカン）がいおう。

黒髪の我が一族、孤児弟は幼子を拾う。
王都に来るために兄弟分を失い兄と慕うものが命を削っているのを知って、世界に対して抗いの叫びを上げる。

我等荒野の民は一番最初にそれに同調して戦う事のできる男たちすべてと戦う事できる女達の大半が子供に無体をする世界に対して鑓を掲げるであろう。

我等が新しい子供よ。
君は我等の名誉を存分に高めている。さらには富の元をちゃんと受け入れて幸いを願う誰かのための道筋をつけている。

孤児弟が宣言したからにはこの幼子を損なう者すべては我等荒野の民の敵である。

だから王室顧問よ、我等の愚行で態々天幕に言いつけるのは止めてくれ・・・・・・・・

肉が食えなくて悲しい・・・・・・・・・・

辺境伯家と報復衝動

隠遁生活したいなぁ・・・・・・・

これは辺境伯家の男ならば常に夢見る事である。
どうしてそれを夢見ているのかといわれても我等にも良く判らない。

祖王に付き従った始まりの禅譲者も事が終わったら引退して静かに消える積りだったらしいが、ごたごたの面倒見ているうちに引退しそびれて一生を送ったらしい・・・・・・・・

その後も代々我が家の者は王家に迷惑掛けられてうんざりしている・・・・・・・・
爵位返上しようにもなんだかんだ言われて受け取らないし、反乱したらしたで王座を即明け渡して色々仕事させようとするから性質が悪い。

仕事するのが嫌だといって反乱した何代か前の先祖は間違って当時の国王を追い出してしまい、自分で仕事する羽目となってしまった。
その後王子を見つけて押し付けたのだが、そいつが無能で散々苦労したと嘆いた日記を見たことがある。

「だんな達も同じ道を進みそうだねぇ・・・・・」

うぐっ！
私のみならず兄上達や父上までも精神的打撃を受けている・・・・・・・・・・

まぁ、それはさておき・・・・・・・・・

我等が隠遁生活するための手駒として孤児達がいるわけなのだが、この子たちはお人好しでかわいそうな子供を見つけては助けようとするだろう・・・・・・・・・・・・

それで一々手を止められても困るから、ここらで我等の宿願を邪魔する貴族共をしめないといけないよなぁ・・・・・・・・・

「良く判っているじゃないか、末弟よ。孤児弟が拾った幼女達の町の領主を突き止めたぞ。」

「どこぞの侯爵様の次男坊らしいが・・・・・・・・・・・・・・一度お前に絡んだのいたろう。」

「ああ、あの時の８日間限定君か・・・・・・・・・・・・」

「一度教育しないとダメだろうな・・・・・・・・・・・・・・大口たたいて逃げ出した挙句に面倒ごとを起こしやがって・・・・・・・・・・・・」

「ついでだから周辺の領主の査察なんて如何だ?泣いて嫌がるだろう・・・・・・・・・・・・・・」

「それならば孤児娘達が帳簿を調べたときに穴があったから控えてありますよ。何時でも仕える状態にしてますし・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・となると、大義名分として孤児弟準爵の貴人聖域法(アジール)に我等が義憤として推参する形が一番か?」

「ついでだから、査察礼状でも取ってきますか?」

「孤児弟の爵位を上げて宮中からの揺さぶりなんていうのは如何だろう?」

「どこかあいている爵位はあったかなぁ・・・・・・・」

「新しい家を作れば良いじゃないか。」「それじゃ新参者と侮られるから、何処かの養子が一番だと思うのだが・・・・・・・・」

「六大公の騎馬公か奴隷公のところは後継がいないらしいから喜んでくれそうだが・・・・・・・・・」

「おいら抜きで話し進めないで欲しいんだけど・・・・・・・・・・」

「孤児弟、可愛い我等の眷属が身を立てる先を探しているだけだ・・・・・・・・・・」

「幼女に対する叫びを行える権力を得る手伝いをしているだけだ。」

「「決して、私達が隠遁するために邪魔者を消して君に全て押し付けようとしているわけではないからな！」」」

「語るに落ちてますよ・・・・・・・・・・・・・辺境伯家の方々・・・・・・・」

「ばれてしまったからには仕方がない、孤児弟私の養子になって辺境伯家を思うがままに動かしてみないか？」

「唐突過ぎます！！」

「断られてしまったなぁ・・・・・補佐見習は如何だ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・厄介事は官僚部屋だけで十分！」

「はいはい、男達。馬鹿な事言ってないで、現実問題として孤児弟が拾ってきた幼女に対して如何するの？親も保護したいという話だからある程度に人手がいるわね・・・・・・・・」

「うむ、我が私兵団と傭兵を雇わねばなるまい・・・・・・・・・・・・」

「孤児弟つながりで荒野の民の一団が助力してくれるだろう・・・・・・」

「合わせて１００位か・・・・・・・・」

「戦争するわけじゃないんだから・・・・・・・・・・・」

「戦争だろ。」「楽しい楽しい粛清生活・・・・・・・・・」

「我が一門が叫んだんだ、しっかりとやらないと面子に関わる。」

いやぁ、楽しいなぁ・・・・・悪巧み・・・・・・・・・・

どんどん話が突き詰められる・・・・・・・・・・・・

辺境伯家と報復衝動（後書き）

酒が足りないから今宵はこれまで

辺境伯家と道楽行動（前書き）

うむ、白い世界を出て幾年月、某王国にいる。
この土地は住みやすい・・・・・・・・・・・・

酒は旨いし女は綺麗で気立てが良い。
風変わりな民も多々いるが、酒を酌み交わすに話の種が尽きないのが良い。
我等が故郷である白い世界に帰ったとき、良い土産話が出来る。

ここの民は誤解しているようだが我々は胡瓜の酢漬だけで酒を飲んでいるわけでもない。ちゃんと、蕪の酢漬けでも酒を飲むのだ！勿論、人参の酢漬けでも大根の酢漬けでも・・・・・・・・青菜の酢漬けでも酒が飲めるのだ！

なに？酢漬けばかりだと？
勿論酢漬け以外でも酒が飲める、肉でも魚でも甘味でも酒が飲める。
流石に酒を肴に飲むような馬鹿げた行いはしたことはない。
今度試してみよう・・・・・・・・・・・・

話はそれた・・・・・・・・
この住みやすい土地で我等は負け続けているのだ・・・・・・・・・
ここは我等の故郷の大地ではないとはいえ酒の飲み比べで勝てた例がないのだ・・・・・・・・・・・・

第一、相手が悪すぎる。
酒を主食としている岩妖精や鬼族、体の大きな竜族や巨人族・・・・・・・・・
毒物に対する耐性がある羽小妖精族なんかもあの体でどこに入るの

かと思うくらいに呑む。
勿論人族も恐ろしいくらい飲む輩が多い。

岩妖精ですら酔い潰す毒の酒を水代わりに飲んで素面でいる者とか、自分の杯を持ち歩いている伊達者。二日酔いのときに薬だといって強い酒を煽りながら風呂に入っていたのがいたがそれは不味いだろう・・・・・・・・・

先の酒合戦でも勝利を得ることが出来たのは、鬼族の者が【鬼殺し】を引き当てた彼等の不運によるものだということは重々承知している。

我等極北の戦士達はこの勝利に驕ることなく更なる高みを目指して鍛えなくてはならない。

さぁ、鍛えるぞ肝臓を！そして次こそは誰にも文句を言われない勝利と掴むのだ！

あれ、大使夫人。如何したんですか？
朝っぱらから酒を飲んでるな？これは我々が更なる酒合戦のために鍛錬をしているのだ。女子供は男の生き様に口を挟むな！！

あれ？大使夫人黙り込んで如何したのですか？
えっ！話し合おうって？その振り上げた拳はなんですか？
口で会話するのが面倒だから拳で会話しようって？
ま、待ってくださいよ！その拳魔力で強化しまくってますよね・・・・・・・・・

口で会話しましょう・・・・・・・・・・どうして・・・・・・・・ぐふっ！！

体重が乗った重たい突きである・・・・・・・・故郷の熊であって
もこんなに重い一撃は・・・・・・・・・・・・
重いいうなぁぁぁぁ・・・・・・・・って、実際体重が乗った重たい一
撃じゃないですか。
我々並の大きな体から繰り出せれる一撃は熊でさえ昏倒させる一撃
を人相手にはなって良いものなんですか？
勿論、朝から酒を飲んで管を巻いている馬鹿には遠慮はしないって・
・・・・・
我々の事？
どこっ！　げしっ！　ぐしゃ！

・・・・・・・・・・・・・・・・　うわぁぁぁぁ・・・・・・・・
・・・ま、まって話せば判る・・・・・・・・・
問答無用って・・・・・・・・・・・
ごげしっ！！
我は壁の一部となった・・・・・・・・・・・・・（多少原型あり）

辺境伯家と道楽行動

「そういえば、某侯爵家の次男坊の領地の財務状況は如何だ？」
父上が普通に問いかける。兄上達も言わんとしている事を悟ったようだ。

行政指導の面から査察を、軍事面から兵隊を、経済的な面からも攻めようと画策しているのだな。
あまり攻めすぎると他の貴族達や王家からも横槍が入るぞ。

「あまいな、末息子よ。我が家には色々な貴族の借金の証文がある。これを取り立てるとなれば言う事を聞かざるを得まい。いざとなったらこれを持って国外に逃亡して色々なところに売りつけるのだ。それだけで国は傾くぞ・・・・・・・・・・（邪笑」
「さすが父上、えげつないやり方で・・・・・・・・・・そう言えば王家にも貸し付けたのがありましたよねぇ・・・・・・」
「金貨にして１万枚程度だが、利子が膨らんでいるからなぁ・・・・・そろそろ取り立てるか・・・・・・・・・・」
「孤児娘達、今の王室の貯蓄金銭額はどれくらいだかわかるかね？」
「およそで言えば、金貨７万枚程度でしょうか？貴族家に貸し付けたりしている分を取り立てればその倍程度かと・・・・・・・・」
「それでも、１万を取り立てたら王国の運営が凄い事になるでしょう。先の孤児達の救済で結構支出が多くなっているようですし・・・・・・・・」
「これは最後の手段として・・・・・・・・・・査察礼状と護衛の兵隊を集める事から始めるかね・・・・・・・・末息子よ、お前はどれくらい動かせる？」
「金貨１００といったところでしょうか？」
「次息子、我が領地で動かせるのは？」

「金貨１０００と私兵団の半分が良いところでしょうか・・・・・・・・傭兵を雇うとしても私兵団の運営があるから金５００位でしょうか。」

「当代の息子よ、傭兵団に心当たりはあるか？」

「そうですなぁ・・・・・　国にこだわらなければ幾つかありますが・・・・・・・・・・・・良識派の傭兵となると少し難しいですな。」

「商会公のところの傭兵くらいの質と倫理観が欲しいところだが・・・・・・・・・・・・全部持っていくからなぁ・・・・・商会公は。」

「そりゃ信用置ける傭兵団なんて物は貴重ですからね・・・・・・・・・」

「ところでだんな、なんで幼女達の親を助けるのに兵隊がいるんだい？」

「そりゃぁ、道中物騒だろう。その護衛もあるし、連れ出そうとすれば自領の不都合を広められる事となるから抵抗もするだろう。お前一人だったら消してしまえば経費的にも楽だからな・・・・・・・・・それに対する防護策だよ。」

「借金なんかもまとめて踏み倒しにかかるんじゃないの？」

「前にもあったけどその時は一つづつ地道に潰していったら、泣きながら返してくれたなぁ・・・・・・」

「あの時は暗殺者雇うので結構痛かったぞ。」「それでも、物産の流通経路押さえて敵対する領地の産物には通行料を無茶振りしたから結構儲けただろう・・・・・・・・・・」「戦争を煽って、傭兵とか入れたは良いけど御し切れなくて領地荒れたりしてたよねぇ・・・・・」「支払いを怠るからだろう・・・・・・・・・・・・・・・」

「裏切り工作したのは兄上の癖にしらばっくれてしまうなんてえげつないなぁ・・・・・」

「まさか傭兵の支払いをしていないなんて思わなかったよ俺は・・・・・・・・・・・・・出来高払いとはいえ前金くらいは払うだろう・・・・・・・・・」

「その一件で傭兵達が愛想つかしたなんて笑い話だよなぁ・・・・・」
「だな・・・・・・・・・・・・」

「どれだけ、やらかしたんだこの一族・・・・・」
「多分、他国の関所あたりを封鎖して兵糧攻めとかやっているんじゃない？」
「それよりも貴族の子弟を官僚にするといって拷問まがいな教育を施したんじゃないのか？返して欲しければ、支払うもの支払えとか言って・・・・・・・・・・・・・・」

「こらこら子供達、人聞き悪い事言わないの。頭さえ抑えてしまえば簡単に事は運ぶんだから其処まで大事にしなければ良いじゃないのさ・・・・・・・・・・我が屋敷に招待して、金を持ってくるまでいてもらっただけなんだけど・・・・・・・・」
「それって、誘拐・・・・・・・・」
「いな、ちゃんと招待状を送ったよ。私兵団で王都屋敷を囲んでおいでおいでしたら、出てきてくれたからねぇ・・・・それれに商会公とかも手伝ってくれたしね・・・・・・・・・・・」
「何で？」
「少し考えてみればわかることだよ、商会公も商人だから貴族達に融通をすることがあるんだけど我が家の事を前例に自分のところも踏み倒されては困るからね。」
「「なるほど」」
「それで、数家ほど客を連れて金を返すまで持成してあげたよ。一つでも払い始めればボロボロと崩れていくし、力で踏み倒そうとすれば他の家の犠牲が出るから其処で問題が出ると・・・・・・・・・・・・千日手になり掛けたところで王家が仲裁に入って踏み倒しするなと釘を刺してもらったのさ。」

「うわぁ、えげつない・・・・・・・・・」

「はいはい、うちの男共は子供の前で生々しい話をしないの！」
母上が手を叩きながら話の終わりを強制する。
「第一持成すといいながら、聖徒王国から拷問吏を呼び寄せて会食したりとか愛玩動物とか言って食人植物を蠢かした庭園を案内したりするのはどうかとおもうわ・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「妻よ、子供たちが引いているぞ。」
「あらいやだ・・・・・・・・・・・　そんな話は置いといて、食事にしましょう。」
母上の合図で侍女達が食事を持ってくる。
貴族の食卓というのは初めてであろう子供達は目を白黒している。

「さぁさ、遠慮しないで食べてね。うちは大した物はないけど量だけは用意したから。」

普段は質素なんだがなぁ・・・・気合入っているな母上。

何で前菜だけで3種類もあるんだ。
主菜も5種類とか・・・・・・・・・どこの王侯貴族の料理だ。
「うちだって王侯貴族でしょう。」

そうでした・・・・・・・・・・
それでも旺盛な食欲を持っている子供達ですら打ちのめす料理の暴力であった。
美味であるだけに食べきれないのが悔しいらしい・・・・・・・・・・・・

まぁ、富を示すためだけに質も量も多く用意するのが客席料理なんだが、この子達はうちの一門なんだから普段通りで良いのに・・・・・・・・・・

食べきれないものは下働きの者達の賄いや持ち帰るものとなるから無駄にはならないのだが、見ているだけで贅沢で無駄と思われてしまいそうだな・・・・・・・・・・・・

それでも水菓子（デザート）と果物に乳酪まで食べ続けた子供達も大したものである。

普段の倍は食べている計算になるからなぁ・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・満足。食べ過ぎた。」

「そうだな、腹がはちきれそうだ。」

「おいしかったぁ。」「食べきれないのが悔しい・・・・・・」「今度作り方教えてもらおう。」

「奥方様、ありがとう御座いました。」

「そういえばだんなはそんなに食べていないけど？」

「食べすぎは体に良くないからね。」

「いつも呑みすぎてるくせに・・・・・・・・・」

「ひとつくらいは良い事しないと。」

「良く食べたわねぇ・・・・　今夜は泊まっていくでしょう。部屋も用意したし帰るなんていわないわよね。」

母上本気で囲い込む気だ・・・・・・・・

「だって、可愛い子達じゃない。末息子にしては良く見つけたもんだと思うわ。其処の孤児姉なんてお前の嫁に良いんじゃないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・えっ！　そ、そんな、わたしな

んかじゃ釣り合わないと言うか御主人様がその気にもなってくれないし・・・・・・・・・・・・・・／／／」

「だいじょうぶよ、家柄くらいだったら何処かの家の養女としてしまえば良いし貴女を買っているのよ私は。うちの末息子（ばか）なんて何時までたっても嫁の来手がないから大歓迎よ。」

「末弟も年貢の納め時か？」

「早く孫の顔を見たいものだな・・・・・・・・・・・・・・」

兄上に父上まで・・・・・・・・・・・私の味方は居ないのか？

「賢者の旦那、諦めな・・・・・・・・・・・・・周りから固められたら逃げられない。」

「補佐見習実体験が篭った言い方だな。」

「俺の場合なんか、旦那達の他にも官僚だの荒野の民だの王族からも確定事項として見られているし、街に出ても市場じゃ夫婦者扱いだよ・・・・・・・・・・・俺に選択の自由はないのか？」

「選択の自由はないよ。それともあたしじゃ嫌なの？」

「嫌とかそういうんじゃなくて・・・・・・・・・・・・もっと選びたかったというか・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺達まだ子供だから結婚には早いというか・・・・・・・・・・・・・・・なんていうか・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・えっと、なんていうか、すまん。何でも言う事聞くから許してくれ・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・じゃぁ、今度二人だけで遊びにいく。それで許してあげる。」

「そのくらいだったら大歓迎だ。っていうかいつも二人で遊びに行っているだろう。今更だが・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・それでもいいの。」

「・・・・・・・・・・・・・照れくさい／／／」

「・・・・・・・・・・補佐見習のことが欲しいから、これからも囲い込むよ。覚悟して。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・ふん、勝手にしな。」

「見せ付けてくれるなぁ・・・・」
「この甘甘なやり取りが毎日のように続くから、つらいのなんのって・・・・・・」
「孤児娘にはいい人はいないのか？」
「周りにいるのは子供と馬鹿と酔っ払いばかりで・・・・・・・・・・・いい男と思えば彼女持ちとか、孤児弟だし・・・・・・・・」
「おいらじゃ何か文句あるのか？」
「文句はないけど兄弟みたいなもの恋愛感情湧かないし・・・・・・・・・」
「それは判る。」
「賢者様の二号さんにでもなるかな・・・・・・・・・・・」
「あらあら、一号さんは誰になるのかしら？」
「それは孤児姉意外にいないでしょう奥方様。」
「なるほどね、孤児姉ちゃんはうちの嫁ね。」
「・・・・・・・・・・・・・／／／」

結局のところ、孤児姉の意見も聞かないで進む話には拘束力がないはず・・・・・・・・
私も同意してないし・・・・・・・・

辺境伯家と道楽行動（後書き）

「宰相よ、そういえば王室顧問はいい年して独身であったな。」
「はい、何人か付き合っている女性はいたようですが、あの性格と敵の多さから分うまくいっていないみたいですな。今のところは特定のものというのは・・・・・・・」
「陛下に閣下。王室顧問ならば孤児姉がいるではないか。」
「孤児姉のほうは慕っているみたいですけど、あれって父を求めている代償行為みたいなものじゃない・・・・・・」
「庭園公、其処から始まる男女関係というものもあるのじゃぞ。」
「商会公、実体験がこもってますな。」
「そりゃ、あれとのなれそめで・・・・・・・・・げふんげふん、それよりも王室顧問の嫁の話じゃなかったか？」
「我が娘を娶って欲しかったが腐っているから嫌だといって断ったな。」
「開放公のところの娘さんが嫌と言うよりも結婚した遊べなくなるのが嫌なんだろうな。」
「身を固めれば大人しくなると思ったんだが、無理そうかな？」
「それよりも並みの貴族の令嬢では王室顧問を御しきれないだろう。」
「陛下でも御し切れていないですからな。」
「痛いところを突くな、鉄拳。」
「今のところは孤児姉弟がいるから大人しいですが、彼等から暴れ始めたら大変なことになりそうですな。」
「彼等は良識的なものだ。主たる王室顧問が暴走しても抑えてくれるだろう。」
「・・・・・・・・・で、王室顧問は誰とくっつくんですかねぇ・・・・」
「おやおや庭園公、興味ありますかな？」

「そりゃぁ、私だって女ですから恋の話は大好きですわよ・・・・・・・」
「腐った恋の話はいうまでもなくといったところでしょうか？」
「鉄拳公は意地悪ね。」
「補佐見習と孤児弟を王妹殿下に巻き込んだものがしらばくれるな。」

たわいもない、六大公と王と宰相の会話。
彼等は王室顧問が誰とくっつくかという賭けをしたのだが、皆孤児姉を推すものだから賭けは不成立だった。

辺境伯家と寝室模様（前書き）

さて、語ろうか。あれは市場を歩いていたときの事。
市場に薄汚い餓鬼がうろついているのを見た。

全裸賢者なるものが自分の持つ全てを投げ打って乞食街娼孤児奴隷を救いにかかってから見たこともない・・・・・・・・・・・・・・・
かの御仁は全てを投げ打ったために裸一貫しか残らなかったらしい・・・・・
それでも、養い子たちが養うために王国に身売りしたとか・・・・・・・・・

話を戻そうか・・・・・・・・・
市場で全裸賢者は茶を喫して弟子と語らっている。
其処に薄汚い餓鬼が近寄ってくる。
全裸賢者の名を持って自身の身の安全を求めているのだろう、その餓鬼は全裸賢者が服を着ていることに疑問の叫びを上げ倒れてしまう。

全裸賢者の弟子であろう黒髪の少年は薄汚い餓鬼の汚れがつくのを厭わずに抱きかかえ手当てをする。体を温め、薬湯を含ませ・・・・・・・・・・・・・さらには霊薬を口移しで与える。

わたしだったら遠慮するね。いくら可愛い女の子とはいえ薄汚れたゴミに近づくなんて・・・・・・・・・・
黒髪の少年は戻って来い、ここで死ぬなんて結末は許さない！と叫びながら魂を呼び戻そうとする。

その願いが通じたのか薄汚い餓鬼は目を覚ます・・・・・・・・・・・・

・

そして大きな麺麭を貪り食いながら泣いている。

それほど飢えていたのか・・・・・・・・・・・・・・・

飢えるというのは辛いよなぁ・・・・　見捨てられるというのは悲しいよなぁ・・・・

それを認めてくれる者がいたとき薄汚い餓鬼は信仰にも似た思いで彼等に服従するのだろう・・・・・・・・・・・・・・・

と、思いきや「助けて！」と同郷の友や兄弟達への助力を願い出る。

厚かましい事だ・・・・・・無力であるという事がそれほどえらい事なのか？

それでも黒髪の少年は優しく問いかけ助けると約束する！

黒髪の少年は馬鹿だった・・・・・・・・・・・・・・・

幼子をかきだくと自らの庇護下におくと神々と世界に対して宣誓したのだ！

あの時の叫びは忘れられない・・・・・・・・・・・・・・・

王でも神でも世界でもこの餓鬼を故無くして害する者すべてを殴ると言い切ったのだから！

傍らにいる全裸賢者は銀扇を手に名乗りを満足げにうなずく。

あたかも其処にいるであろう神が反対の声を上げたのならば即座に討ち果たすかのように・・・・・・・・・・・・・・・

黒髪の少年の周りには光が降り注いでいる・・・・・・・・・・・・・・・

まるで神話の一説のようだった。

誰かのために救いの手を払いのけ、世界の反逆する馬鹿がいるなんて・・・・・・・・・・・

建国王の伝説みたいではないか。

私はその光景に魅入られて、筆を取りたいと思った・・・・・・・・・

黒髪の少年と抱きかかえられる幼女。賢者は銀扇を手に世界ににらみを聞かして、衛士達は鑓を掲げている。幼女の話を聞いた賢者付の女性たちは涙を流し続け野次馬たちは手に手に得物を持って立ち上がろうとしている。

愚かしくも美しい光景。

私は筆を取ってその一瞬を留めようとする。

とある画家の日記より

ところで、私の寝室が物置に化していたのは納得するとはいえ孤児姉と同室で眠れというのは作為を感じるのだが・・・・・・

「別に気にする事でもないでしょう。今までだって共に寝ていた事なんて何度もあるのですし。」

まぁ、そうなんだけどね。孤児姉の風評とか色々守りたいものがあるでしょう・・・・・・・

「それでしたらとっくに御主人様のお手つきという認識になっておりますが。」

「悪い事したな・・・・・・・・嫁入り前の娘にそんな噂を立てさせるなんて・・・・・・・・・・」

「いえ、御主人様相手という噂ならばうれしゅう御座います。」

「母上もそんな噂に踊らされる者ではないと思ったが、悲しいよ・・・・・・・・・・・・」

寝るかね・・・・・・・・・・・　噂に踊らされるのは馬鹿らしい。

「一つだけ宜しいですか？」

「なんだね？」

「私を抱いてくださらないのですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・後々のことは判らないけど今は抱かないよ。可愛い孤児姉よ。」

そして私は眠りにつく・・・・・・・・・・・・・・孤児姉は私のことを抱き枕か何かと勘違いしている節があるが、まだ子供たしかたあるまい・・・・・・・・・・・・甘ったれであるということは言うまでも

ないが。

「御主人様、私は何時までもお待ちしております・・・・・・・・・・」

寝言で嬉しいことを言ってくれる。頭から背中を撫でてあげると私に全てを委ね切った安らかな顔をしている。

この娘は今までどれだけ自分を律しきった生き方をしてきたのだろう、せめてこの娘をゆだねるにふさわしい男が現れるまで守ってやるとしようか。

本当に孤児姉といい、孤児娘達といい・・・・・・・こんな良い子が親がいないというだけで苦労するなんてままならないものだな・・・・・・・・

腕の痺れを感じながら私もまた眠りにつく・・・・・・・・・・・・・・・・

短いようで長い夜が明ける。私は孤児姉よりも先に目が覚めたのだが孤児姉は私から離れようともしない。

離れたら二度と捕まえられないものと勘違いしているのだろうか？

寝起きの顔を見られたとなれば恥ずかしいだろうから寝たふりをして起きるのを待つ。

孤児姉の寝顔くらい可愛いものだから気にすることはないのに・・・・・・・・・・・・

年頃の娘は気にするものだろうから見なかったことにするくらい大したことではない。

暫したつと孤児姉が起きて身支度を整える。

そしていつもの格好で私を起こしにかかる・・・・・・・・・・・・

これは彼女とあってから変わらぬやり取り・・・・・・・・・・・・・
主従という名の家族ごっこ。

「おはよう、孤児姉・・・・・・・・・・」
「おはよう御座います御主人様。」

朝食の席にていつもと変わらぬ我等主従を見て母上は脈がないのかとがっかりしているようだが、
「奥方様。旦那とねーちゃんは雑魚寝も結構こなしているし気にするのはとっくに過ぎているんじゃないのかな？」
「ある意味、末息子は女の子への気遣いが出来ていないみたいなのね・・・・・・・・・・」
「押し倒していたらいたでぶん殴るのに・・・・・・・・・・・・勝手だよな。母上は・・・・・・・・・・」
「当たり前でしょう。こんな可愛い子に無体するなんて許しちゃいけないことでしょう。」
「・・・・・・・・・・・・・・・理不尽だ。」

孤児娘達は健啖振りを示しているのだが、食が進まない様子なのが補佐見習だ。
見当はついているが・・・・・・・・傷跡娘に迫られて我慢して悶々としているといったところだろう・・・・・・・・・
傷跡娘は満足げである。
あれ？普通ならば手を出されなかったと不満気なのに・・・・・・・・・

「傷跡娘ちゃん、ご機嫌だけど如何したの？」
「・・・・・・・・・・・・・・・秘密。」
「そんなこといわずに教えてよ。」
「けちっ！」
「こらこら、そんなことときくもんじゃないよ。大方寝言で補佐見習が傷跡娘の名前を連呼したとか、抱きつきながら夢精した程度だろう・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・この腐れ賢者。」

「末息子、それは朝から生生過ぎるわ。」
「生々しい結果も止めている母上には言われたくない！」

「似た者親子・・・・・・・・・・・」

「「ぐはっ！！」」

特に意味はなく朝は過ぎていく・・・・・・・

辺境伯家と寝室模様（後書き）

話が進みませんが酒が切れてしまったのでこれまで。

飲酒戦士と巨大猪（前書き）

酒合戦　戦士心得

1、我等飲酒戦士、正々堂々飲み比べることを誓おう。
2、飲めない相手に無理やり勧めない。下戸に飲ませる酒はない！
3、つまみは相手の好みを尊重すること。
4、酔い潰して意中の相手をお持ち帰りをしない。素面のほうが楽しいぞ。
5、吐くなら飲むな！飲むなら吐くな！！
6、二日酔いと財布の軽さに後悔するな！
7、飲んで絡むな。
8、給仕たちには感謝と礼儀を
9、酒合戦の仕返しは酒合戦の場でのみと考えろ！
10、お酒は楽しく適量を

監修　酒精神

飲酒戦士と巨大猪

朝食の後、父上は他の貴族家によばれたとかで出立し、長兄は王城に向かい、次兄は国元で私兵団の組織と保護するであろう大人達の受け入れ態勢を作りに向かう。

私と子供達は孤児院へと向かう。

保護された幼女達は最初のうちこそ団子のように固まっていたのだが次第に打ち解け前からいた子供達や私兵団の連中とも仲良くなっている。

で、どうして君達がいるのかね極北飲酒青年団。

「ふむ、その質問に答えよう。うちの大使夫人からイノシシのおすそ分けに来たのだ。」

見ると大きなイノシシが一頭転がっている。

どう見てもイノシシ？ではなくなんかの魔獣ではないのかと疑問に思えてくる。

「こんないのししどこにいるの？」「おっきー！！」

子供たちがワラワラ集まっているが包丁を手にした女衆もどう調理したものか悩んでいる・・・・・・・

しかもイノシシの顔のところがボコボコになっているのだがどう狩ったのだろう？

「イノシシは殴り殺したものがうまい。」

「普通出来ない！！」

「おいらの中の常識がカリカリと削られている音がする。」

「これどうさばいたらいいんですかねぇ・・・・・？」

そこかしこに傷だの痣だの作っている極北戦士。顔の傷はイノシシではなく人の手みたいだが・・・・・・・
そこについては触れないほうがよいみたいだ……

「ところで極北飲酒青年団。」
「飲酒青年団じゃない！！」
「まぁ、酔っ払いであることは確定事項として、その意見は却下して。このイノシシはどうさばいたらよいのかね？」
「ふむ、王都の者はぶら下がった肉しか見たことがないのか？肉というのは自分で狩ってさばいて食べるものだ！！」
「はいはい、そんなに肉をとっても食べきれないから小分けにして売買するのが王都のやり方だ。」
「ふむ、確かにこんな大物我等でもめったに見かけぬ。手に余るのは理解した。では俺がさばこう・・・・・・・・」

そういって、極北戦士は大剣を大上段に構える。まさか真っ二つ？
「剣で二つに割れば食べやすくなるだろう！！」
「待ったーーー！！」
そこに待ったをかけるのは解放公率いる奴隷戦士団の一人。
「貴様は間違っている。真っ二つにしたら切り口が汚れるだろう！イノシシは丸焼きがうまいのだ！！」
「そんなことはこのイノシシを切り分ける技量がないと言っているも当然ではないか！」
「違う！死んだ猪くらい据え物切りしたところで何の自慢にもならない！なんならそこのシロクマでもぶった切って示してやろうか！」
「ほぅ、俺をシロクマ扱いか熊より強いから試してみるかい？鎖に繋がれるのが趣味のおっさんよ。」
「ふっ！熊の分際で口をきくとは面白い。それにオレはおっさんじゃない！！」

解放戦士は戦斧を構えて極北戦士(しろくま)を狩ろうとする。極北戦士も大剣を構えて迎え撃つ。
両者の武器がぶつかり合って砕け散る……破片が飛んで危ないじゃないか！！
壊れた武器を互いに投げてがっぷりと力比べをしている・・・・・・・・・・
力比べはほぼ同格。押して引いての一進一退。

周りの戦士たちはやんややんやと騒いでいる。これは酒の肴だな。
馬鹿らしいから放置。

そばにいた荒野の民の戦士にイノシシをさばけるかと聞いてみる。
「騎馬(モヒカン)戦士、イノシシさばけるか？」
「うむ、この大きさは初めてだが我等も狩はするから普通にさばけるぞ。」
「では頼めるかな？」
「狩り取った者がさばくのが礼儀なのだが、この馬鹿どもではぶつ切りが精いっぱいだろう。それこそ命への礼儀にかける。」

めんどくさそうに言うと騎馬(モヒカン)戦士は腰を上げると、仲間達と共にイノシシをさばきにかかる。
頸動脈を切り、ぶら下げるかと思いきや・・・・・・・・
アバラの境目から切り目を入れて腕を突っ込み、心臓付近の血管をちぎろうとしている。
「ふむ、この大きさだと手ではきついか・・・・・・・・」
騎馬(モヒカン)戦士は小さなナイフを手にもう一度手を突っ込む。

あふれ出る血液、これを器に受け止めている。
「血の一滴も無駄にするのは美しくない。後で血の腸詰とかを作るとしよう。」
血を搾り取った猪を腹から切り裂いて内臓を取り出す。
心臓、肺、肝臓、腸、胃、その他もろもろ……

内臓を取って水場に洗いに行っている騎馬戦士、毛皮を器用に剥ぎ取っている騎馬戦士。
肉塊に分けたところで生肉の塊をもらって齧り付く狼系の獣人。
つまみ食いはよろしくないぞ。

「だんなだんな、つまみ食いじゃなくてマジ食いですから。」
「それにしても生肉は美味しいのですかねぇ？」
「試してみるか？」
「俺はやめておく。」
「生臭そうですしねぇ・・・・・」
「・・・・・・・・・・生肉は精がつくと聞いたことがある。補佐見習い食べて。」
「傷跡娘ちゃんは精をつけさせてどうするつもりなんですかねぇ……」
「・・・・・・・・・・／／／」

それはともかく旨いのか？
「肉を焼くときだって表面だけ炙る焼き方があるだろう。生は生でうまいのだ。」
これは狼系の獣人談。
「慣れないならば塩と香草で叩いてから食べるとよい。」
人外共は口々に言う……

試しに肉を叩いて細かくしてから岩塩と香草、胡椒で味付けしてか

ら食べてみる。
ふむ、美味・・・・・・・・・

「お前ら、人がさばいているのに先に始めているんじゃない！！」
騎馬戦士たちの怒りもごもっとも。自重自重・・・・・・・・

ここまでさばいてあれば女衆の手におえる形になっている。
女衆は煮たり焼いたりして食卓をにぎわす準備をする。

ある程度さばいた騎馬戦士たちは、屑肉や内臓を細かく刻んで血と混ぜてゆっくりと過熱する。
鍋の中に塩と香辛料を入れて味を見てから少し冷ます。
その混合物をきれいに洗った腸の中に詰め込んで適当な大きさで縛り形を整える。

大鍋に湯を張って、血の腸詰というべきものを入れて茹でている。
茹でていると赤から黒に変化して腸自体が締まっているのがよくわかる。

ある程度茹った腸詰を引き上げて煙でいぶす準備をしている。

人外達も肉を細く切り刻んで塩水につける。
暫くたったら紐に通して風通しの良いところでぶらさげている。干し肉でも作るつもりだろう。
塩と香草の中に付け込んで塩漬け肉も作っている者もいる。

そうして猪が骨と皮ばかりになったころ。日も暮れて夕餉の時を知らせる鐘が鳴る。
サカサムクドリは群れをなしてねぐらに帰っていくし、ヨタカは町にうろつき始める・・・・・・・・

子供達もイノシシをさばく様を興味津々に見ていて一日が終わったようだ。
それでも荒野の民が色々と雑用を言いつけたりして身をもって教えていたようだが。

「そりゃ、命に対する正しいやり方を教えておけば無駄なく美味しいものを手に入れることができるだろう。」
「生きた授業というわけか・・・・・・・・」
麦秋老が午後の授業を特に言わなかったのは理解した。
技術とか心構えというものを学ぶいい機会だと理解したのだろう。

孤児院にいる、荒野の民と人外達と子供や女や我々は楽しげな夕餉につくのだった。
子供たちは肉の塊に大喜び。肉を食べる機会は少なくないが遠慮せずに肉に齧り付く機会なんて……

結構あるなぁ……農園公の差し入れとか騎馬公の差し入れとか……
あの人たちの差し入れはさすがに丸のままはないから扱いやすいのだが・・・・・

しかし生肉がうまいとは意外だったな……
「新鮮な肉じゃないと不味いから食べることができるのは肉を作るものの特権だな。」
なるほど、世界は広い・・・・・・・・・

生肉を咀嚼しながら強めの酒を流し込む。口の中に残った脂っ気とかも流れて次がおいしく食べることができる。これは果実酒よりも穀類醸造酒がいいな。

「うまうま・・・・・・・」「むぐむぐ」「おいしぃ！！」
「おじちゃん、これおいしいね。」
「そうだろうそうだろう。荒野の民の伝統料理だぞ。」「でもおおかみのおじちゃんがおしえていたけど・・・・・・・」
「それはね、うまのおじちゃんたちが最初に食べ方を考えて狼のおじちゃんたちに教えたんだよ。」
「そーなんだー」
「嘘はいくない！大本は俺たちだ！」
「何を言ってる。ただ生肉を齧り付いていたお前らに俺たちの工夫を教えたんだろうが！！」
「生のうまさを知らないのに教えたのは俺たちだろうが！！」

喧々囂々・・・・・・・馬鹿な本家争いしているけど、どっちが本当なんだろうか？

ふむ、生肉自体食べるのはどっちも最初からあった文化なんだけど荒野の民のは生肉を皮袋に入れて細かく砕けたのを塩振って食べるものだし、人外達は塊のまま香草とか塩をつけるのを好んでいたからねぇ…両者が出会って出来たものといえば出来たものなんだが……

ここで水を差しておくのは無粋だろう。（ｂｙ厨房神）

なるほど、言い争いも細かくしたのがおれたち荒野の民だから俺たちが元祖だとか香草とか使い始めたのは俺たちだからと本家は俺たちだと人外達が反論する……
ほっとけばいいか、そのうち女衆に・・・・・・・・・　あっ！殴られた！

頭を抱える両者に周りは笑う・・・・・・・
子供達は大人の馬鹿騒ぎそっちのけで肉を食べている。

ちゃんと野菜も食べるんだぞ！！

夕餉は楽しく過ぎていく・・・・・・・・・

さすがに一食では食べきれるものではないので保存食にしておいてよかった。

荒野の民や人外達はお土産代わりに腸詰や塩漬け肉等を持ち帰っていたのは当然の報酬であろう。

ところで奴隷戦士と極北戦士は？

庭を見たら、今度は酒合戦をしていた・・・・・・・・・・・・

「……ううっ、なきゃなきゃやるなきちゃの！おりぇにゃんっきゃこれでのむぞ！！」

と桶で飲んでいるというか・・・・・・浴びている。

「ぎゃはははは！のめてねぇじゃねぇぇぇぇぇんぉぉぉぉぉ？

ヴかがさけというのはこうのむんだひゃぁ！」

桶をひったくって頭からかぶる……

周りは馬鹿笑いしてうるさい！！

「孤児姉、あれを・・・・・・・」

「はい、ご主人様！」
私は神秘緋金属張扇（オリハリセン）を思い切り振りかぶると酔っ払い戦士（ばかもの）の一団に対して叩きつける！！
「お前らいつまでふざけているんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

きらっ★
馬鹿共は夜空の星になった……なんか、尾を引いているが吐瀉物でないことを願いたい。

このつっこみはほんと我が神域に招き入れたいものだな（ｂｙ演芸神）

飲酒戦士と巨大猪（後書き）

ふと思うのだが極北戦士はともかくとして先の合同作戦の時、飯はどうしていたのだろうか？

街娼達が保護されるまでは男世帯だったしそれぞれで作っていたのだろう・・・・聞いてみると

人外公：それぞれの種族ごとに調理をする。便乗したりおかず交換とかも普通に行っていた。種族ごとの嗜好は違うので好みが分かれる。

商会公：専属の料理人を雇っている。美味美味。

農園公：女衆お手製の弁当。自分でも作る。普通に美味。時々手抜き。

庭園公：自由戦士他数名だったので飯屋に通っている。

騎馬公：移動も戦闘も生活の一部なので自分等ですべて賄う。郷土料理で好みが分かれるが美味。

解放公：料理なにそれ？　ぶった切って鍋に入れて塩振ればよい…　当たり外れが激しい。それ以前にこいつらに味覚あるの？（ただ食べれればよいという考え方）

女衆が加わって料理とか後方支援してもらえるようになったとき泣いて喜んだのは解放公配下の奴隷戦士団だったりする。

飲酒戦士と男根茸（前書き）

あらすじ　そんなものはない。
今回は下品だから嫌な者はアグネスちゃんとユニセフ活動して偽善の売国活動していなさい。

飲酒戦士と男根茸

イノシシから数日後。今度は人外達が茸を沢山持ち込んできた。

丸いのから傘が開いているのやら・・・・・・シフォンのドレスのようにビラビラが重なっているのもある。

色も赤いのから茶色いのやら蒼いのやら・・・・・・・・・・

そんな色とりどりの茸の中で異彩を放っているのが如何見てもち・・・・・・・・・・・・げふんげふんに見える茸である。

「つのつきのおじちゃんこのきのこまるでちんこだね。」

子供は正直だ・・・・・・・・・・・・

私がぼかそうとしても思ったまんま言って来る。

「御主人様、この茸食べられるのでしょうか?」

「うーん、食べたくない気分で一杯だが・・・・・・・・・・」

「人外の冗句じゃないでしょうか?」

我々も疑問符が一杯頭にでてくるのである。

「わーい　ちんこきのこちんこきのこ!!」「・・・・ちゃんよりおおきいね。」「院長先生より立派だね。」

「おじいちゃん先生より堅いね・・・・・・・・・」

「おばちゃん、これよりりっぱなおちんちんあるの?」

「賢者様はこれくらいだったかねぇ・・・・孤児姉ちゃんは苦労するだろうね。」

「大丈夫です。」
何が大丈夫なんだろう？

うーむシモネタの嵐だ。
人外諸君、君たちは狙っているんかね？
タケリダケなんてネタに走っているだろう・・・・・・作者。

実際のタケリタケなんて、私のブツにぶつけただけで壊れてしまうだけの軟弱な者だ。
これはこの世界特有の茸として受け入れなさい（ｂｙ作者）

「これはなチンポー茸といって珍味なんだよ。」
狼頭の人外がそう言って説明してくれる。
絶対狙って持ってきやがったな・・・・・・・・・・・・

狙っていないと牛頭が言っているが、誰も信じていない・・・・・・・・

極北戦士がガメテいるが・・・・・・・大使館で大使夫人に壁の染みにクラスチェンジする羽目になるから止めておいたほうが・・・・・・・・・・

まぁ、他人事だけどね・・・・・・・・・・

「茸は焼いて食べたほうが良いのかしら？煮たほうが良いのかしら？」
女衆は見慣れぬ茸を前に調理法に悩んでいるようだ。

うーむ、私も見たことないしなぁ・・・・
「旦那の場合材料自体わからないというオチが・・・・・」
否定できん、私は貴族様だし・・・・・・・・
そんなこんなで色々な料理をしている・・・・・・
煮てみたり焼いてみたり揚げてみたり・・・・・・・・・・・・
茸三昧である・・・・・・・・・・
この男根茸は誰も手をつけていないが・・・・・・・・・・・・
「旨いのだが、丸のままほうばると王妹(へんたい)殿下の餌食にされそうな・・・・」
「切るのを見ると股間を抑えたくなるのは習性だろうか?」
それを聞くに男たちは股間を押さえている・・・・・・・・・・判らんでもないけど・・・・・・・・
ためらっている男達を尻目に女衆はほおばっている。
わざとらしく舐めてから頬張ってみたり、舐め揚げてみたり・・・・・・・・・・・・
「うわっ!中から汁が」
とワザと顔にかぶってみたり・・・・・・・・
ちなみに汁は白濁です。
はい、ご馳走様です。
噛み切るときに思わず股間を押さえてしまうのは仕方がないことであろう・・・・・・・・・・
「そんな茸より俺の・・・・・・・・・・・・・」

といった馬鹿がいるのだが・・・・・・・・・・女衆に連行されてしまっている・・・・・・・・・・・

明日には干からびているかな？

腎虚確定ではあるけどね。

旨かったんだけどね・・・・・・・・・・・

「だんな、次は巻貝を取ってきてチンボーラ等というネタをやらかさないか気をつけないと・・・・・・・・・・・」

「流石にそれはないだろう・・・・・・」

それは如何かな？（ｂｙ作者）

飲酒戦士と男根茸（後書き）

うーん、私が下品なのではなくて世界が下品なのであって・・・・・・・

ごめんなさい。

調子に乗りました・・・・・・・・・・・

飲酒戦士と自由戦士（前書き）

俺は自由戦士。様々なところを自由気ままに旅をして色々な仕事を請け負う何でも屋である。
古代遺跡の奥深くにはいって史学上の発見を手伝ったり、貧しい村に立ち寄って山賊退治をしたり・・・・・・・・・・

人は俺のことを風来坊だの住所不定無職だの言うけど・・・・・・・・・

いかん、目から汗が・・・・・・・・・
せめて子供の前でああいう大人になっちゃいけませんよと指差すのは止めてくれ・・・・・・・・・・厄介事を解決した後で言われると特にへこむ。

今回の厄介事も面倒だった・・・・・・・・・・・・
隊商を狙う山賊を退治したのは良いが、おれ自身が山賊の一味と勘違いされて誤解を解くのに苦労したし、解いたら解いたで報奨金は支払われませんとごねやがって・・・・・・・・・・・・

あまりにもムカついたから山賊の生首をその村の村長（男爵位）に投げつけて出て行った。
他に集めた生首を杭に差して村の領域ぎりぎりに並べて差しておこう・・・・・・・・・

うむ、我ながら力作だ！

あとは首に羊皮紙で

このものはこの界隈を騒がした盗賊達である。
我自由戦士が退治したのでここに首印をさらす。
先の何某村では金が払えぬといわれたので報奨金がある場合は王宮の庭園公宛に送られたし・・・・・・・・・

これでよい。

公爵・・・・・しかも建国公の続きの者である事を示しておけば色々意趣返しにもなろう・・・・・・・・・・

ああ、でも金にならなかったなぁ・・・・・・・・・・・・・
一度王都に戻って孤児たちに会うかな・・・・・・・・・・・

王室顧問様は身銭を切って孤児達のために働いているのに俺のような流れ者にもちゃんと金を払おうとする。
差し出された金貨に驚いて断ったがあれは間違ったかなぁ・・・・・

残りは銀貨が数十枚・・・・・・・・・・
どこかで良い仕事がないかなぁ・・・・・・・

飲酒戦士と自由戦士

どうも、先日食べた茸の中には崔淫作用があるようなものがあったらしい。
あの男根茸が怪しいが今となっては判らない。

お陰で女衆がつやつやで男達は出し殻状態だ・・・・・・・・・・・・
私は孤児姉や孤児娘達専属という事で勘弁してもらっていたが、もし女衆に襲われていたら・・・・・・・・・・・・
お婿にいけない！！

「はいはい、賢者様くだらないこといわない。」
「折角私達の初物をご馳走しようとしたのに・・・・・・・・・・・・」
「甲斐性なし！」
「・・・・・・・・・・・・・・・私ではご不満でしたでしょうか？」

口々に文句を言われるが気にしたら負けだ・・・・・・・・・
彼女たちは可愛い娘だ。彼女達にふさわしい男が現れるまで親として守らねば・・・・・

「その割には股間が世界樹。」

其処は触れないで欲しい・・・・・・・・・・・・
そういえば孤児弟は？

「怖くて衛士詰め所に一晩お世話になってました。」
ヘタレが・・・・・・・
「だって、女衆達が目をぎらぎらさせてにじり寄ってくるのを見た

ら逃げたくなりますよ・・・・・・」
「孤児弟はつれないんだから・・・・・・」
「折角、私達が奉仕しようとしていたのに。」
「流されるくらいで良いのよ。どうせ私達は汚れているんだから・・・・・・」
「それとも汚れた私達は抱く価値がないと・・・・・・」

「いえ、女衆の皆さん。そ、そんなことじゃなくて流されてとか慰みのためとかという事じゃなくて本気で抱きたいと思った女を抱きたくて・・・・・・・・・・・・・・・え、えっと・・・・・・・・・・・・皆さん魅力的ですよ本当に・・・・・・・でも、抱くならば抱いた後の責任というか・・・・・・・・・・・・・・おいらじゃとりきれないのに・・・・・・・・・・・・」
「ばかねぇ、そんなのは無視すれば良いのに・・・・・・・・・・・・」
「そんなのだって!そんなの結果生まれた子供を不幸にするような事出来るわけないじゃないか!!いくら産むのが女衆の皆さんだからっておいらはおいらは・・・・・・・・・・・・・・・」
孤児弟は泣いている・・・・・・・・・馬鹿な奴だ・・・・・・・・・

女衆は孤児弟の本気の叫びを聞いて、女衆は孤児弟を見直したようだ。
惚れ直した者もいるんじゃないのかな?
この馬鹿は幼いが世界を敵に回すことが出来る大馬鹿者だ・・・・・・・・・・
適当に抱くなんて出来ないだろうな・・・・・・・・・・・惚れた女は難儀するだろうな・・・・・・・・・・

「師匠も師匠ならば弟子も弟子ね。」
「だからこそ落とし甲斐があるというものなんだけど。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・御主人様責任込みで抱いて欲しいのですが。」

女衆は孤児弟を抱いてごめんねと泣いている・・・・・・・・・・・・年下のガキに泣きついている女衆、お前等勘違いしてないか？孤児弟はまだ誰かの温もりを欲している年なんだと・・・・・・・・・・君たちがすがり付いて良いもんじゃない。それでもお人好しの大馬鹿者である弟子だから振り払う事ができないだろうが・・・・・・・・・

って、担ぎ上げてどこかに連れて行こうとするな！！何をする積りだ！！

「何をって・・・・・・・・・・ナニですが。」

「うがぁぁぁぁぁぁぁ！！」

私は神秘緋金属張扇（オリハリセン）を振りかぶると女衆に叩きつける！！

「お前らぁぁっぁぁぁ！！男漁りは他でやれぇぇぇっぇぇぇぇっぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

私は弟子に襲いかかろうとする飢えた女たちに対して叩きつけるのである。

特殊効果【背景に異世界の売国奴（日本ユニ○フメンバー）】をきらめかせながら・・・・・・・・女衆を打ち上げる。

「胡散臭い売国詐欺組織の背景に朽ち果てるがよい・・・・・・・・・・」

私は孤児弟に対する脅威を叩きのめしたのであった。

「だんな、おいらは彼女達を受け入れられることが出来ない器の小

ささを嘆いています。彼女たちがおいらを抱いて幸せになれるならば・・・・・・・・・」

「馬鹿言うな孤児弟。ここにいる分くらいは受け入れられても、世界には一杯満足できない女がいる。すべて満足させる事ができるのか？」

「・・・・・・・・・」

「出来ないならば切り捨てる事を覚えろ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・それでも、おいらは親しみを覚えている者を切り捨てることはしたくない・・・・・・・・・・・・・」

「そうか？ならば身をもて知るがよい・・・・・・・・・・・・・・・女衆の皆さん。おねがいします！」

「「「「「「はい！！」」」」」」

孤児弟は女衆に連行された・・・・・・・・・・・・・・・やつは男になるのだろう・・・・・・・・・・・・・・・

「このくされけんじゃぁぁぁっぁぁぁ！！」

孤児弟の叫びが聞こえるが自分で選んだ道だ・・・・・・・・・・・・・・・

「ご主人様・・・・・・・・・・・・・」

「「賢者様・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「これは酷い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

孤児弟は男になった。

「ああ、だんな女というのは良いものなんですね・・・・・・・・・・・・・・・・・」

孤児弟よ、複数の女衆をはべらせながら言う科白ではないな・・・・・・

「勿論頼った女衆は養うよ!彼女達の報われない前半生をおいらが埋めるんだ!!」

まぁ、稼いでいるだろうし勝手にしな・・・・・・・・

その話は如何でも良い話だが・・・・・・・・・・・

「私達の御主人様への純情が如何でも良いなんて・・・・・・・・・・・・・・」

「それはひどい・・・・・・・・・・・・・・」

久方ぶりに自由戦士が孤児院に来る。

「腹減った・・・・・・・・・・・・・・・」

自由戦士は路銀も尽きてやっとこさ来た様だった。

飲酒戦士と自由戦士（後書き）

何かタイトルと違う気がするが酔いのせいとして・・・・・・・・・・・・・・・

ごめんさい

自由戦士と孤児院（前書き）

あらすじ　孤児弟は男となった。

自由戦士と孤児院

自由戦士は食欲旺盛である・・・・・・・・・・・

がつがつがつがつがつはぐはぐはぐはぐはぐはぐはぐ・・・・・・・・・・・・・

凄い勢いで食べている。

三人前ほど食べてから一息ついたのか

食後の祈りをささげる。

「いやぁ、助かりました。ちょいと路銀が足りなくて切り詰めていたか。」

「またこのお人よしはただ働きをしたのかね？」

「そんな、庭園公みたいなことを言わないでくださいよ。」

「はいはい、君も庭園公と同類とわかっているから、どこの村かね？」

自由戦士は素直に吐いた。

そもそも山賊とかの懸賞金は国が管理するのもであって村が独り占めしてよいものではなかったはず。

しかも、功労者に金を払わないなんて・・・・・・・・・・・・

ふむ、これは手加減抜きでいじめないとよくないだろうな・・・・・・・・・・

そういえば先に保護した子供達の村もこの近くだったな・・・・・・・・・・・

では、査察の旅に行こうかね。

まずは王城だな・・・・・・・・・・

自由戦士は旅の疲れが出たのか眠っている。
彼には後で役に立ってもらうから今は疲れを癒してもらおう・・・・
・・・・・・・・・・

王城にて、
「宰相閣下、査察礼状をください無期限無制限の。」
「王室顧問いきなり着てなんだ?」

私は分けを話した赫々云々と・・・・・・・・・・
「無制限の礼状なんて出せるか!」
「ならば内戦覚悟で私兵隊出しますが。」
「せめて陛下の許可を得ろ!」

国王執務室に押し入って
「陛下、赫々云々でこの近辺の調査したいので査察令嬢ください無制限のもので良いので・・・・・・・・」
「お前に無制限なものを渡したら向こう百年間貴族が育たないではないか!!」
「向こう百年間民が育たない事に比べれば大したことではないでしょうが。」
「・・・・・・・・・・少なくともお前みたいな危険人物に・・・・・・・・」
「では危険人物は去りマース。弟子達を全部引き上げて・・・・・・

・・」

「ま、まて、お前は危険人物でも弟子は国に必要な・・・・・・・・・・」

「ことは我が弟子である孤児弟が神でも世界でもぶん殴ると宣言してますんで師匠としては叶えてあげないと・・・・・・・とりあえず守護辺境伯私兵団全部と荒野の民から１０００ほどと解放奴隷戦士団から５００ほど、人外公異族兵団から３００ほど出してもらえるらしいから内乱覚悟で進みますけど。」

数字は希望数だけどね。

「どうしてそう極論に走る！」

「では、陛下即解決してください。」

「事実関係を・・・・・・・・・」

「遅いので進めますね・・・・・・・・・・ことによっては陛下の責任を問います。その首をもってね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・無制限は無理だが軍監付でよければ出そう・・・・・・」

「仕方ないですな・・・・・・・・・・・・それで手をうちましょう。但し解決するまで私の弟子たちは全部引き上げますよ。」

「まて、それは・・・・・・・・・・・・」

「後見がいない状態で仕事なんてさせたら何されるか判らないじゃないですか。陛下達は信用出来ませんし。」

私は孤児娘達と補佐見習を引き上げて孤児院に戻る。

「だんな、また陛下に喧嘩売っているんですかい？」

「喧嘩？孤児弟の喧嘩を彩っているだけだ。」

私は今までの事を説明した・・・・・・・・・・

大まかな事を知ってるだけに誰もが乗り気である。

査察には経理部隊が必要だし、孤児娘達や補佐見習が役に立つのは言うまでもない・・・・・・・・・

子供たちは自ら飢えた経験を持っているだけあり」飢えさせて何もしない貴族に対しては本気で怒りを感じているようだ・・・・・・・・・

其処でも補佐見習が一人残るという。

「旦那の怒りもわかるし、意義もある。それでもここを放置したら困る人があるから俺は残る。」

ふむ、一人前に言えるようになったな・・・・・・・・・・・・

馬鹿弟子が・・・・・・

それに応じて傷跡娘も残るという・・・・・・

これはまぁ、言うまでもないな・・・・・・・・・・・・

では王城の事は任せておいて私達は査察の旅にいくとしよう・・・・・・・・

おらっ！自由戦士起きろ！

「どうしたんですかい？王室顧問様？」

「お前を突っぱねた地方に査察礼状を取った。お前を護衛に雇うから、ついて来い！」

「えっ！そんなことしてもらわなくても・・・・・・・・・・・・」

「お前の報酬はついでだ、コレコレこういうわけで・・・・・・・・・・・・」

「ついていかせてください！！　餓鬼を飢えさせる領主に鉄槌を！！」

こいつは単純馬鹿か・・・・・・・・・・

そして馬鹿はもっといた

「孤児弟、お前の喧嘩彩ってやろう　荒野の民王都在住騎馬隊総勢１００。一族の者の叫びにより参戦する。」

「このガキたちは俺達のいつかあった姿だ。古の誓いにより解放奴隷戦士団より１００、孤児弟に馳せ参じる。」

「人外公異族兵団より７０。いつぞやの奴隷商人捕縛作戦による同属救助の借りを返す。」

其処に乗り遅れた極北戦士たち・・・・・・・・・・

「白き世界より極北戦士団、この場にいる１５名。飲み友達の喧嘩に乱入させてもらう。」

おい、良いのか外交問題だぞ・・・・・・・・・・

「外交なんてどうでも良い、それは大使たちが考えればよい事だ。俺達はこのガキを泣かせた大人にぶん殴らないときがすまない！！」

幼女達を抱いて滂沱の涙を流しながら叫びを上げる。

「いざとなれば王国に帰化すればよいだけだしな。」

えっと、実は大使夫人から逃げたくない？

「多少は・・・・・・・・・・（汗」

それは無理だと思うが・・・・・・・・・・

帰ったら壁の染み確定かな？

自由戦士と孤児院（後書き）

性愛神殿にて手当てして貰っている。
俺の体は大分回復した、一度は死んだと思ったチビ共も大分元気になった。

ああ、性愛神様。貴方様にお陰で死んだチビ共を弔う事ができましたし、生きていたチビ共を生きて幸せにする事ができる機会を与えられた・・・・・・・・・・

俺は性愛神殿で奉仕の日々を送っている。
ここにくるものは傷ついた者が多い、俺の体と習いたての神術で救うことが出来るのは本当にごくわずかなんだが女神官様が言うには、人の子でそのわずかでも出来るのは大事な事だという・・・・・・・

傷口を清めたり、ままならぬ世界の嘆きを聞いたりして日々を過ごす。
そして助けてくれた男娼たちはこんな取るに足らない俺でも気にかけてくれる・・・・・・・

「馬鹿言っちゃいけないよ。君は神に喧嘩を売るほどに僕達の事を気にかけてくれたじゃないか。」
「あの状況で助けようとする誰かを気にかけることが出来る君は馬鹿でほっとけないよ・・・・・・・・・・」
男娼の兄さんたちは俺を抱きしめて全てを受け入れてくれる・・・・・・
罪も怒りも何もかも・・・・・・・・・

俺よりも酷い思いをしたというのに・・・・・・・・・・・・・・・

「だからといって君を助けなくても良い理由にもならないだろう」

「僕たちは君という存在を助けようとする事ができただけでも幸いなんだよ・・・・・・・・・・・誰かのためだなんて馬鹿を救えばその列らなる誰かも幸いに出来るだろう・・・・・・・・・・・・」

「はいはい、君を助けたいがために馬鹿やっているだけなのにかっこつけない。」

嗚呼、涙がこぼれてとまらない

どうしてこんな優しい馬鹿がこの世に存在しているのだろうか?

出来る事ならば俺もそんな馬鹿になりたい・・・・・・・・・・・・・

そんなある日、全裸賢者は兵を集めて俺達の村へ大人達を救いに行くという・・・・・・・・・

なんでも賢者の弟子である黒髪孤児が妹の惨状を見かねて貴人聖域法(アジール)を発動して世界へ喧嘩を売り出したのだ。

その叫びに国内外から兵達が集まってくる。しかも手弁当だというから驚きだ。

世界にはそんな馬鹿が沢山いたのか・・・・・・・・・・・・・・・

俺達の問題なのに俺が出なくて如何するのだろう?

俺は短剣を手に馳せ参じようとする・・・・・・・・・

「君はまだ体が治っていない、孤児弟に任せて寝ていな。」

「全裸賢者様は君が出来る事は戦場ではないとおもっているよ。」

それでも、それでも・・・・・・・・・・・俺達の問題に俺たちが出ないのは間違っている。

俺は一歩神殿を出ようとする。
その前に立ちはだかるのは女神官様・・・・・・・・・
「男の子、椎の実の王室顧問様の心を無にするのですか？」
「無碍にしようと、俺の俺達の問題だ！！　弱いからといって逃げることはしたくない！どうして助けなかったのか領主の馬鹿に問いかけたい！どうして俺たちが・・・・・・・・・・というかチビ共が死ななければならないのかさけびたい！女神官様貴女が相手でも俺は進みたい！！」
「本当にばかだねぇ・・・・・拾った命を・・・・・・・・」
「賢者様と進むのは死にに行くようなものだよ。その体でいくなんて場かも良いところ。」
男娼の兄さん達も加勢してくれる・・・・・・・・・・・・・・
女神官様は留まるように言う・・・・・・・・・・
俺達は邪魔といって・・・・・・・・・・・・
それでもいきたい！！　行かねばならない！！
俺が先に進もうとすると女神官は俺のことを一撃で叩きのめす。
「黙って救われて幸せになっていなさい！！」
だまれだまれだまれ！！
俺は俺の幸せは・・・・・・・・・・・・自分で掴むんだ！
そして、チビ共のためにも俺が立たねばならないんだ！！
死んだ村人達のためのも死んだチビ共のためにも、生き残っているチビ達の為にも俺が立って自分の力で進もうとするところを見せなくてならないんだ！！
立ち上がる俺に女神官は
「本当に馬鹿な子」と嘆きながら・・・・・・・・・

街娼達を娼婦達を男娼達を並べる・・・・・・・・・・・・・・・

「我等性愛神殿神官戦士団、全裸賢者の弟子である黒髪孤児が檄に応じ参戦いたす!!君も共に来るかな?」

と問いかける!!

この大馬鹿野郎共!!どうしてどうしてどうしてどうして!!

「簡単な事ですよ、不幸の連鎖は我々で止めたいからですよ。君まで来られたら我等の願いが一つ遠のくからね・・・・・・・・・・・・・・・・我等の願いを押しのけてでも君は来るかな?」

俺の答えは一つだ!!

「勿論!俺の代で不幸の芽を止めて見せる!!」

性愛神殿戦士団は泣きながら本気の悔し涙を流しながら俺を受け入れてくれる。

ガキである俺を戦いの場所に送り出すことに・・・・・・・・・・・・・・・

そして自分達の世代で不幸の芽を摘み取れなかった事に・・・・・・・・・・・・・・・

嗚呼、優しい馬鹿者達の一団に受け入れられて俺は俺は・・・・・・・・・・・・・・・

彼等こそ失わせるべきではないと本気で誓うのであった。

自由戦士と大使夫人（前書き）

西方建国公城館

「最近君達の行いは目にあまるものがある。市場で酒盛りして極北戦士たちとつるんで一般市民たちが怖がっているとか、孤児院で酒盛りしてゲロを撒き散らしながら夜空を飛んでいくとか・・・・・・・」

西方建国公、通称開放公は米神を指でほぐしながら我々をねめつける・・・・・・・

「で、挙句の果てに兵を勝手に挙げるとは君たちはどれだけ偉くなったのかね？」

開放公の説教は延々と続く・・・・・・・・・・・・・・・

判っている、我等解放奴隷兵団が兵を挙げるという事は国難かそれに類する事であるという事を・・・・・・・・・・・・・・・

それでも、目の前にある誰かの苦難に対して一人立ち向かった孤児（ば）弟（か）にたいして応じないという事は我等解放奴隷戦士団の意味がないということだ。

「君たちは国を割る積もりかね？」

開放公は国を第一にしているのか？

ならば我は否と声をあげる。

「それが必要とあれば・・・・・・・・・・・・・・・我は理不尽になく子供の声を第一に考えます。我の声に否というならば神でも何でも殴り飛ばして考え違いを正します。」

そうか・・・・・・・・と開放公の声に我は何れ来るであろう攻撃に備える。
開放公は熟練の戦士だ。基本、戦術家として名を馳せているが常に戦いに身をおいている一族・・・・・・・・【幸いなき誰かのために】という家訓に乗っ取り常々鍛錬を欠かしていない常在戦場の大馬鹿者だ！
「では、死をもって弁明としろ。」
削りだしの大剣を大上段に構えて振り下ろしてくる・・・・・・・・・
かきん！
開放公の大剣がそれる・・・・・・・・誰？
「お父様、裸鎖の隊長をいじめるのはそのくらいになさいませ。」
お嬢！！
「・・・・・・・・・・ふむ、でお前は如何したい？」
「勿論加勢に向かいますわ。」
「いつもペンしか取らないのにどんな風の吹き回しだ！」
「大したことではありませんわ。私を振った王室顧問に意趣返しをするだけですわ。それに、民を飢えさせる馬鹿領主を潰す悪役は私達の役割でしょう。」
「お嬢・・・・・・・・なんで汚れ役を・・・・・・・・」
「ふん！私が気に食わないだけですわ。子供を飢えさせて自分等は死んで楽になろうとする大人に・・・・・・・・・　体を売って穢れたから幼いものに明日を任せたという馬鹿な少年に！私は幸いな結末が大好きですの！めでたしめでたしで終わらない物語なんて自

分の手で捻じ曲げて見せますわ！！」

「ははははっ！娘よ、お前は紛う事なき奴隷の娘だな！」
「お父様だって、兵を挙げる積りだったのでしょう。」
「それを言うな、詰まらん憤りだけで兵を挙げる馬鹿だったら切り捨てる積りだったがその必要もあるまい。兵を１０００もって行け！！」
「親方様・・・・・・・・・・・」
「泣くな！男の涙なんて美しくない！さっさといって結果だけもってこい！」
「はっ！！」
「私も行くわ！」
「お嬢！戦場に女性の身で行くなんて・・・・・・」
「見くびる事なんてないわ！死ぬことも体を汚される事も覚悟の上ですからね。」
「では、娘よ　孤児弟を頼む。あれは死なせるには惜しいものだ。」
「お父様が其処まで言うなんて面白い子ね。」
お嬢は舌なめずりして狙う目をしている・・・・・・・・・・

「群団長として裸鎖、副長として娘にして経験を積ませるか・・・・・・・・・・・叫びを挙げた祖王のために。」
公のつぶやきはどこに向かっているのだろうか？

で、どうして大使夫人がここにいるのでしょうか？

「多分我々が孤児弟殿の叫びに応じたからでありましょうか。」
「それは判っているけど身の丈よりも大きな戦鎚を構えて臨戦態勢なのは如何したら良いのだ？」
「我等が向かって染みになれば許してくれるのでは？」
「自殺願望？」
「いえ、それが一番犠牲の少ないというか・・・・・・・・・・」

とりあえず大使夫人の言い分を聞こう
「王室顧問様、うちの馬鹿共が迷惑をかけているようで。一度引き取って指導したいのでお渡し願いますか？」
「ふむ、なるほどね・・・・・・・・・・・・・　五体満足でお願いいたしますよ。それに力を貸すと彼らが宣言したのだからちゃんと助力願いますよ。」
「そうかい、この馬鹿の口約束を真に受けるとは王室顧問ともあろうものは落ちぶれたものだね・・・・・・・・・・それについては前もって謝っておくよ。この場でこの馬鹿共は屑肉になるから無理だと・・・・・・・」
「助力が無理なのは仕方ないとは言え、この場の掃除くらいはお願いしますよ。」
「あははっ！面白いねぇ・・・・・王室顧問。大丈夫だ、それは責任もって行おう。では引き渡してもらえるかね？」
「断る！！」

あれ？自由戦士・・・・・・・・・この場に出るなんて私の出番は？

「おやおや、場違いな貧乏臭い戦士が出ているけどだいじょうぶなのかね？」

「・・・・・・・・・・・・貧乏くさいのは余計だが貴女を失望させないくらいのお遊びは付き合えると思うが・・・・・・・・・・」

「お遊びとは言ってくれるね。うちの馬鹿共を指導すればこっちは何もしないのにしゃしゃり出てくるとは命知らずだねぇ・・・・・」

「まぁ、同志として飲み友達として庇わんといけないと思ったのでね・・・・・・・・・」

「そんなかちがあるのかね？」

「なかろうと思うが、邪魔されると腹が立つのでね御夫人。一緒に踊っていただけないだろうか？」

「下手な口説きだねぇ・・・・・　踊るのはあたしの旦那の許可を得てからにしな！！」

大使夫人は戦鎚を振り下ろす。

自由戦士はそれを一歩前に進んで懐に入るように避けてから大使夫人の胸倉を掴んで投げる。

そして地面につくと思うときに軽く力を抜いて衝撃を与えないようにする。

「ふーむ、お前さんやるねぇ・・・・・・」

「お褒めに預かり至極恐悦。」

投げ飛ばされ寝転がったままの大使夫人に自由戦士は大げさな礼をする。

唖然とする一同、熊殺し（素手限定）の女丈夫を無手で下したのだから・・・・・・・・・・・

「あの熊殺しを軽くあしらったぞ！！」

「あいつそんな凄い戦士だったのか！！」
「貧乏ネタにからかっていたけど後が怖いな・・・・・・」

戦士達が自由戦士の実力を侮っていた事を後悔している。
大丈夫だよ、自由戦士は馬鹿正直な男だから過ちを認めた相手にひどいことは出来ないから・・・・・・・
せいぜいお酒をおごれとか言う程度だし。

「で、彼等を見逃してもらえますか？」
「それは無理だね。この馬鹿共は孤児娘達に馬鹿な無体をしているんだから野放しに出来ないだろう・・・・・・・・・＼あたしがついていって監視しないとね・・・・・・・・・・・・」

「ぶはははははっ！！御夫人、貴女も人が悪い・・・・・・・・・」
「なぁに、女性に手を上げるお前さんほどではないさ。でも、どうして無手だったんだい？」
「女性に向ける剣は持ち合わせていませんのでね。」
「おや、見かけによらず浪漫主義者だったのかい。惚れちまいそうだね、旦那の次にだけど。」
「それは残念。貴女ほどの魅力的な女性だったら口説き落としたいと思ったのですが。二十年前ならば・・・・・・」
「おやおや、お前さんは女を見る目がないねぇ・・・・今でもあたしは魅力的だよ。」

「どの口が言うのだこの婆！」
どこっ！！
軽口を発した極北戦士は孤児院の壁画となった。
「大使夫人、あまり壁に落書きは止めてほしいのですが・・・・・・・・・」
「わるいねぇ、王室顧問。後で職人寄越して壁画ごと埋めておくか

ら。」
まぁ、これは極北戦士が悪いんだけどね・・・・・・・・・・

「まぁ、あたしが出張ったのはこの馬鹿共が外交問題とか考えなく力を貸すとかいったからなんだが・・・・・・・・」
孤児院の庭先、互いに茶を喫しながら語らう。
大使夫人が危惧したのは、この極北戦士が暴れた場合外交問題になるからそれに対して釘を刺しにきたのだそうな。
なるほどね・・・・・・・・・・
「で、お前さんたちにはこの契約書にサインして欲しいんだよ。」
大使夫人が差し出したのは、二枚の書類。書いてあるのは傭兵雇用契約書。
なるほどね・・・・・・・
極北の精兵をただでは貸さないと・・・・・・・・
これならば何かあってもここいいる極北戦士達は国と関係ないと言い張る事ができるわけだ。
良かろう、大使夫人の保険に乗っかるとしよう・・・・・・・・・・
その前に・・・・・・・・・一隊金貨２０枚？けっこうするねぇ・・・・・
「そりゃそうだろうさ、一応ここにいる馬鹿共もあたしほどではないが腕が立つんだから・・・・・・・・・・」
しかたあるまい・・・・・・・
こうして、極北戦士を群れ事借り受ける事に成功したのだった。

あのぅ・・・・・俺このまま壁画なんでしょうか？（ｂｙ極北戦士その一）

自由戦士と大使夫人（後書き）

天幕　其処に騎馬公と語り部がいる。
話は騎馬（モヒカン）戦士が兵を挙げる話である・・・・・・・・・・・・・

「如何思う語り部？」
「あの黒髪の子供の呼びかけならば応じないわけいかんだろう。それにしても馬鹿な餓鬼だと思っていたらそれすら上回る大馬鹿だったと・・・・・・・・・・・・」
「でも嫌いではなかろう。」
「当たり前だ、世界相手に喧嘩売るなんて馬鹿でもやらんぞ。」

「あのこの初陣祝いは如何するかねぇ・・・・　我が養子にしたいのだが」
「あの子を群れに迎え入れるのは歓迎するが、あまり大げさな贈り物だと他の若者が嫉妬するだろうさ。」
「そうだな、せいぜい兵を１０００を貸す程度にするか。」
「オヤバカダネェ・・・・・」
「そういう語り部だって、孤児弟のために風の神の呪いをこめた皮鎧を用意しているだろう。」
「ははははっ・・・・・・・・・・・・」

彼等主従はゆるりと夜をすごすのだった。

自由戦士と出陣模様（前書き）

「陛下・・・・・・・・　王室顧問が暴走しました。」
「思ったより早かったな、原因は？」
「市場に助けを求めた貧民の子がいたそうで・・・・・その子達の親も含めて某侯爵家の不手際が確認できたそうで孤児弟が子供の保護に乗り出しました。」
「孤児弟ならば常識人だから子供達とその家族を保護して収めるはずだろう。」
「いえ、それが子供の話を聞いた孤児弟が本気で切れてしまったらしく、持てる人脈等々使って貴族という幻想をぶちのめすと息巻いています。六大公爵及び守護聖域伯、さらには極北連合戦士団を合わせて３０００ほどの軍勢になっています。」
「おい！一地方軍以上の軍勢じゃないか！」
「しかも、性愛神殿、酒精神殿を初めとする神殿戦士団が助勢に来る始末で・・・・・・・」
「一応陛下が渡した査察礼状が根拠となっていますので押さえられる人材の派遣を願います。」
「一人二人では無理だろうな？とりあえず王弟を頭として後何人か送るか・・・・・・・・・」
「下手すれば人柱になりそうですから、誰でもというわけでも・・・・・・・・・」
「王兄王妹を送るか？」
「真っ先に血祭りに挙げそうですが・・・・・・・・・」
「ならば大歓迎なんだが・・・・・・・・・・・一緒になって暴走しそうで怖いのだが・・・・・・・・・」
「どうしてこの国には人材がいないんでしょうか？」
「人災ならば腐るほどいるのにか？」
「陛下、オチをつけないでください・・・・・・・・・・・・・」

自由戦士と出陣模様

ところでこのあたり一面を埋め尽くす軍勢は如何したものあろうか？

せいぜい、３０もいれば十分だったのに・・・・・・・・・・・

「荒野の民、赤岩部族族長代理以下１０００、家族の叫(モヒカン)びを聞いて義戦に馳せ参じる。」

馬に乗った男女の群れ、馬車には子供達も見える・・・・・・・・・・・・

裸の馬の群れが荒々しく嘶きを上げている。

馬に乗った男女は騎馬刀(サーベル)や短鎗を構えている者が大半で馬上弓や投槍を用意しているものもちらほら見える。

「解放奴隷戦士団、団長の名代として公爵令嬢を頭に１０００、世界の理不尽をぶん殴るために推参いたす。」

軽鎧に腰巻、様々な接近戦用武具を携えている偉丈夫の群れ。その先頭に立つ灰褐色の髪をした少女は鉢金で髪の毛をまとめて男装している。

「王室顧問様、いつぞやは父がご迷惑おかけいたしました。」

「いえいえ、令嬢。私はまだ遊びたいから断っただけですよ。」

「その割には可愛らしい子供達を沢山こさえているようですが。」

「この子達は衰えいく私の数少ない誇りにして自慢なんですよ。」

「アラ、以前、庭園公のところにあった男の子じゃない・・・・・・・・・　この子が今回の首謀者？」

「そういうことになるかな。孤児弟、開放公の令嬢だ。挨拶を」

「お初に・・・・・・・・・・・・って、うわぁぁぁぁぁぁ！！！！」

孤児弟が怯えている・・・・・・・・・

そういえば庭園公のところで王妹殿下とお茶会をしていたのだろう・・・・・
何をしたのだ？

「お嬢・・・・・・・・・・・・・・・」

裸鎖の奴隷戦士が呆れた顔をしている・・・・
令嬢はそ知らぬ顔をして、孤児弟の頬に口付ける。
「ふふ、可愛い旗頭君。私がいるからには君には敵の刃の届く事なんてないから安心しなさい。」
「・・・・・・・・・・・・・・はい、よろしくお願いします・・・・・・・・・（ガクブル」

敵の刃は大丈夫だろうけど彼女の毒牙は如何すれば避けられるだろうか？

「人外公異族兵団、混合部隊総員３００　同族開放の借りを返しに参る。」
鬼やら獣人やら竜までいるし・・・・・・・・・
どこの魔王軍だ！
「王室顧問。魔王軍より優れているから安心してください。王都程度ならば半日もあれば廃墟にして差し上げますから。」
「余計性質が悪いわ！！如何見ても火力重視だろう！竜に異族魔法師、妖精族の魔法剣士部隊とかどこまでやるつもりだ！！」
「えっ！世界に喧嘩売るからそれにふさわしい者を選んだだけですが・・・・・・・・・」
「神殺しはいないのか？」
「不十分でしたか・・・・・」
嫌味も通じないのか・・・・・・・・・・・・

やめてー、神殺しをださないでー（ｂｙ酒精神）

「庭園公の依頼を受け、自由戦士。一騎のみなれど助勢いたす。」
旅装の戦士。てにするは数々の血を吸いながらその倍する命を救ってきた無骨な長剣。
貧乏くさいが旅慣れた装い。彼を討ち果たすならば１００人くらいの兵士がいるだろう・・・・・・・・それでも無傷ですまないだろうが・・・・・・・・・
「貧乏くさいは余計だ。」

「農園公より、食料の差し入れだな。」
作付頭が男衆を連れて馬車に何台もの食料を山積みして持ち込んでいる。
「いった先は作物が取れてねぇでしょ。向こうの人たちにたんと食わしてやってください！」
彼等は農民で飢えた人を見るのが許せないのだろう・・・・・・・・・・・

「商会公隊商団　５０名、助力いたす。」
馬車を中心とした隊商の一群がそこにあった。
馬車には色々な物資が積み込まれ、軍という雰囲気がない・・・・・・・
「ははははっ、君たちについていけば盗賊避けになるだろうからね。」
もしもし、私達はだしですか？
「勿論私達は道を知っているから同行して置いて損はないだろうよ。」

「守護聖域伯私兵団　城代以下３００　可愛い孤児弟の喧嘩を彩るために助太刀いたす。」
白銀に輝く磨きこまれた軽鎧。方形盾を構える前線部隊に長槍を林立させる前線攻撃部隊。ぴんと張った長弓を構える後衛部隊・・・・・・・・・投石器とかは何する積りで？
「何事も備えあれば憂いなしだろう。」
って、虎の子の魔術師団まで・・・・・・・・・・兄上、戦争でもする積りですか？
「最悪神や世界相手の戦いになるから備えすぎて損はないだろう・・・・・」

「極北傭兵戦士団　１５名及び軍監の大使夫人。戦力の押し売りに参る。」
毛皮を着た大男の群れの中に大きな鉄槌を担いでいる中年女性。
如何見てもこに一団だけで少々の村くらいならば壊滅させる事ができそうだ・・・・・・・・・・
過剰戦力だろう。

こんなものかな？
「馬鹿を言っちゃいけませんわ。弱者の涙あるところに私達が救いの手を差し伸べに行くのですから・・・・・・・・・」
美乳の女神官様と幼女の兄を中心として娼婦や男娼や依然助けた街娼達がてんでばらばらの得物を持ってあつまっている。
体中に傷を負った女性が性愛神殿の紋章を刺繍した旗を持っている。
「我等、性愛神殿　信徒有志３０名、この少年の決意に応じて孤児弟準爵の義戦に参戦いたす。願わくば失われるものの少ないことを・・・・・・・・・・」
えっと、素人さんを戦場に連れて行くのは・・・・・・・・・・
「性愛神の啓示です。孤児弟を助けろと！啓示がなくても幼女の涙

を無視することは出来ませんけどね。」
「これは俺の村の問題だ。部外者ばかりに任せるわけいかないだろう？」
「子供は黙って見ていろ！　これは大人の楽しみだ。」
「ふっ！俺は子供じゃないぜ！前も後ろも！」
「そういうつもりじゃないのだがなぁ・・・・・・」

「孤児娘準爵監査班　帳簿のアラを弄りに来たよー！」
普段着の孤児娘達が孤児姉に連れられてきている。身につけているものって・・・・・・・・・・・・
「ああ、賢者様。この首からかけている護符は物理攻撃をしてきた者には攻撃が身に帰ってくるようになっているらしいですし、この指輪は麻痺の呪文がこめられているらしくて力をこめると発動するそうですよ・・・・・・・・・・・」
「誰がこんなに重装備を・・・・・・・・・・」
「財務官様と法務副長様が予算を組んで護身道具だと・・・・・・・・・・」
「他にも腰にさしている杖は攻撃呪文がこめられているみたいだし・・・・・・・・・・・・腕輪は・・・・・・・・・・・・性質が悪い・・・・・・・・・・・・どれだけ予算組みやがったんだ・・・・・・・・・」
「何でも、試作品ばかりとかで金貨２０枚程度で済んだそうですが・・・・・・・・・」
「どこまで過保護なんだ・・・・・・・・・・・・・・・官僚達は・・・・・・・・・・・」
「そういう賢者様だって護身用の懐剣に色々呪いをかけて貰っていたじゃない！」

「あのぅ、王室顧問、この魔法具の過剰装備に霊薬の山・・・・・・・・・・彼女達は何なのですか？」
「ああ、宮廷魔術師君。彼女達は私王室顧問が誇る、経理部隊の孤

児娘達だ。」
「ああ、会計が泣いて逃げる。鬼監査・・・・・・・・・・・・」
「こんなか弱い女の子捕まえて鬼とは酷いですわ・・・・・・・・・・・・」
「そういえばうちの大将、つっこまれて泣いていたぞ。」「うちのところも親方が悲鳴上げていたぞ・・・・・・・・・・・・」
手加減抜きか・・・・・・・・・
えげつないなぁ・・・・・・
「王室顧問に似たんだろうね。」
「あははははっ・・・・・・・・」
笑って誤魔化すしかない。

これで終わりかな?
「まって、あたしもいく。」
幼女が孤児院から逃げるようにこっちに来る。
「あたしは知りたい。何故おなかすいている人とすいてない人がいるのか?何故、おとうとおかあが死んでまであたしに生きてもらいたかったのか?なぜ、おにーちゃんが酷い目にあいながら前に進めと脅していたのか?何故チビたちが死ななければならなかったのか? 領主様に聞きたい!そして、これはあたしの戦いだ!じゃまするならは引っ込め!」

このガキも覚悟決めているけど連れて行きたくないなぁ・・・・危ないし
「旦那、この子は連れて行きます。」
「孤児弟これは子供の遠足と違うのだぞ!」
「遠足ならばこんなに連れたって行きませんよ。ちゃんと世界を見せて答えを見つける手伝いしてあげたいですから。」

「お前も馬鹿か・・・・・・・・・」
「旦那ほどじゃないですよ。」

しかし大軍勢だな・・・・・・・・・・・・・・どうするんだこれ？
「おい、王室顧問！数が多すぎだ！監査ならば護衛含めても２０もいれば十分だろう！」
あっ！影の薄い王弟殿下だ！
「誰が髪が薄いって！」
髪の話はしてないって・・・・・・・・・・

その後、王弟殿下の命令で数を大幅に減らされた・・・・・・・・・・・・
そりゃそうだろうね、其処でもひと悶着あったのは笑い話。

自由戦士と出陣模様（後書き）

今宵は酒が切れてきたのでここまで。
何か軍団の紹介だけなのはごめんなさいといいます。

王弟殿下と毛根閑話（前書き）

「モーコン、俺はダメみたいだ・・・・・・・・・・」
「馬鹿野郎！最後まで踏ん張るとここまでがんばってきたじゃないか！どうして・・・・・・・」
「ははは、見てみろよ。もうこんなにやせ細って力がないんだよ。俺の分までケアナー、永らえてくれ・・・・・・・・・・」
「モ、モーコーーーーーン！」

「何故だ、何故なんだ・・・・・・・・どうして俺達にこんな試練を・・・・・・・・・この大地はどうしてこんなにやせ細っているんだ・・・・・・・・・神よ俺達が何をしたというのだ！！」

はっ！夢か・・・・・・・・・・
うわぁ！　また抜けているよ・・・・・・・・・・

モーコン、君のことは忘れない

王弟殿下の目覚め

王弟殿下と毛根閑話

護衛選びは難航した。
極北戦士団は金を払っても羅宝には護衛するといって聞かないし、荒野の民や解放奴隷戦士団は民を飢えさせて子供に付を払わせる貴族をとっちめたくて血に植えているし、人外兵団も基本子供の味方だ・・・・・・・・・・
自由戦士は一人だし旅慣れているから案内人代わりに欲しいから問題ないけど商会公の隊商は・・・・・・・・・・・・・・

そうか、人数が減れば良いから・・・・・・・・・・・・・・

「王弟殿下、ここにいる皆様方を無碍に断ったら彼等の面子が潰れると思うのですよ。あまり威圧的になるのが嫌という事であれば彼等の代表を１０名くらい選んで向かわせるというのは如何でしょうか？それでも１００弱にはなると思うのですが多いけどましになると思うのですが・・・・・・・・・・・・」
「うーむ、仕方ないな。但し、投石器とか魔術師団だとか竜とか明らかに街を攻め滅ぼすものは連れて行くなよ！ああ、胃が痛い。国王陛下はどうしてこの暴走集団の手綱を取れと命じたのだろうか？」
「暴走はしてないじゃないですか！ちゃんと制御しますよ。向こう１００年くらいは貴族が民の顔色伺うくらいには・・・・・・・・・・・・・・」
「余計に性質が悪い！！」
「贅沢な事で・・・・・・・・・・・・」
「って、言うかわざとだろう！」
「なにがです？」
「これ見よがしに兵力を集めて威圧するのが目的じゃなかったのか？」

「まさか、本気で潰しますよ・・・・・・・・・」
「兎も角、兵は１００以下にしろ！！」
「判りましたよ。」

王弟殿下はわがままだ、王族(きょうだい)が変態ばかりだからすっかり髪・・・・・じゃなくて影が薄くなってしまって、とばっちりの後始末で苦労しすぎて毛根が・・・・・・・・・・
「髪の毛から離れろ！！寧ろ禿げて俺の苦労を知れ！！」

王弟殿下は苦労していらっしゃる。

「結構な割合で賢者様が苦労かけてない？」
「旦那は仕事をしたくないとごねるだけだからそれほどでも・・・・
一番は王族兄妹(へんたい)じゃないのかなぁ・・・・・」
「あれは身内だと思うと泣けてくるわね。」
「こういう中で常識人だと割を食うのよねぇ・・・・・・・」
「苦労するのは王族の仕方ないことですわ。諦めてもらいましょう。」
「・・・・・・・・・・・・ねーちゃん、それは酷い・・・・・・・・・・・」

子供達が好き勝手言っている。
だから早く王家を見限って臣籍に下ればよかったのに・・・・・・・・
「下ろうと思ったんだが・・・・・・・・・婿養子行っても、一代王族称号が取れなくて・・・・・・・・・・俺はかみさんとのんびりしたいんだぁぁぁぁ！！」
「そのかみさんが言うにはがんばって王位狙ってねといっていたぞ。

」

「そ、そんなぁ・・・・・・・・・・・・・・」

はらり～

「素直に王位狙ったほうが良かったんかねぇ？」

「確かにあの王族兄妹(へんたい)を駆除したとなれば人気は上がるけど、あれでも俺の兄妹だしなぁ・・・・・」

王位につくのに駆除する前提なんだ・・・・・・・・・・

「そりゃ、そうだろう・・・・・・・・・王兄貴(ろりこん)はまだしも、王妹(シヨタ)は世界的に腐らせてるしなぁ・・・・・・・・」

頭を抱える王弟殿下。

はらり～

「だんな、軍監として来られた王弟殿下を交えて実際の話をつめましょうよ。」

「そうだな・・・・・・・・・」

各軍団の代表を集めて話し合う・・・・・・・・・・

どれもこれも濃い面子ばかりだ・・・・・・・・・・・・これの意見調整は苦労しそうだな。

はらり～

軍団丸ごと持ち込もうとしている血の気の多い解放奴隷団とか人外兵団・・・・・・・・・

お前等どこの侵略者だよ！

民族大移動かましている荒野の民も人の事はいえない・・・・・・・

・

早々と戦線離脱したのが商会公の隊商・・・・・・・・どうせ、同じ方向に向かうから便乗しましょうと匂わせていたが。
性愛神殿信徒団も数名が隊商に便乗して旅をするといっているし、女神官はこっちに合流するようだ。

農園公のは・・・・・・・食べ物だから、うち等の食べ物の御者が必要だね・・・・・・・・護衛ではないし問題ないよね・・・・・・って、作付頭！何を持ち込んでる！！
「護身道具ですよ、護身道具。王室顧問様は疑い深いんだから。」

護身道具って、１２連発式の弩が？　投石具とその弾として用意された炸裂弾が？
「護身道具ですよ。弩は狩するには不便だし炸裂団なんて使ったら肉が取れないじゃないですか。」
そうだけど、そうだけど・・・・・・
農園公配下は常識人だと思っていたのに・・・・・・・・・・・・

はらり～

王弟殿下も同じ思いだったらしく頭を抱えている。
農園公の配下はどうしても護身道具と言い張っている・・・・・・・・・・・・言い争うだけ無駄かも・・・・・・・・・・

戦闘民族達はとりあえず１０名選んでもらうことにして・・・・・・
「我等は力をそんなことに使うのは好きじゃないから戦闘民族違う」
（人外兵団竜族砲兵）
「俺達は馬を駆って風を感じていれば幸せだ。今回は一族の叫びで助太刀に着ただけだ」（騎馬公荒野騎馬戦士団（モヒカン）隊長）

「我々程戦いを嫌うものはいないだろう・・・・・・・・・・」
（解放奴隷戦士団　隊長裸鎖）

・・・・・・・・・・・・・・周りはじと目だ・・・・・・・・・・・・・・

最後に本気で戦争に行く準備だった辺境伯私兵団・・・・・・・・・・・・・

「兄上、何名かにしましょう・・・・・・・・・・」
「うむ、魔術師をうちからは出そう！」

そこで貸し出されたのはうちの４席魔術師
1~3は？
年寄りと辺境（ナマケモノ）伯家しかいない魔術師団で若くて体力があって扱いやすい・・・・・・げふんげふん、人がよい４席魔術師いい餌食・・・・・・・・　もといかもだ。
「どっちもいっしょです！！」

これでだいたい決まったかな？

「あのぅ～　おれは？」
あっ！自由戦士忘れていた・・・・・・・・・・・・・一人だから普通に受け入れるつもりだったたから。

はらはらり～☆

王弟殿下と毛根閑話（後書き）

はらり～　は髪の毛が抜ける擬音です。

王弟殿下とハゲ談義（前書き）

にーちゃん、おなかすいたよぉ～
これ食べな
にーちゃん、これはにーちゃんの分じゃ
気にするな、俺はお腹一杯だ。
いただきます　むぐむぐ・・・・・・おいしい・・・・・・・・
おいしいか、そりゃよかった。これしかないけどごめんな。
にーちゃん　おなか一杯だよ。
これでお前は今日も生き延びる事ができるな。
でも、ニーちゃんほんとうにだいじょうぶなの？
俺はお前より体が大きいから食べなくても大丈夫なんだ。
そーなんだー

ある日、身なりの良い人が着て俺達を見て
「何か一つ我にできうるものを与えるとしよう。」
にーちゃんはいった。
「でも毛布を・・・・・・・・・」
身なりの良い人は聞く
「お前は痩せこけて明日にも死にそうではないか？どうして食べ物ではないんだ？」
にーちゃんは
「俺は明日か明後日には死ぬ身だ。ならば食べ物よりもチビ共に残してやれる毛布のほうが良い・・・・・・・・・・」
身なりの良い人は何か言いたげだったが、毛布をにーちゃんに買い与えると去っていった・・・・・・・・・・・・

明くる朝、にーちゃんは冷たくなっていた。

毛布はチビ共を包んでいた。

そのチビ共も一人しか残っていない・・・・・・・・・・・・・

おいらはにーちゃんみたいになれたのだろうか？

だんなについていって多くの誰かを助ける手伝いはした・・・・・・・

でも、本当に必要な誰かに手を差し伸べる事ができたのかが疑問だ・・・・・・・・・・・・・・

おいらはあの時のカビまみれの麺麭の味を忘れないだろう・・・・・・・

にーちゃんが自分の分を与えてくれたから・・・・・・・・・・今のおいらがいる。

荒野の人々も解放奴隷の戦士達も極北の酔いどれ共も泣いてくれたがその時に助けに来てくれなかった・・・・・・・・・・・・・

おいらは、その時に駆けつけることができるようになりたい・・・・・・・・・・・・・・・・

でも、この幼女のときはおいらはちゃんと必要なときに駆けつけられたのかな？

聞けば、幼女の兄は体を売ってボロボロになっているし、同郷のチビ共は路傍に散っていたと聞いている。

何で何だよ世界は！！

おいらは理不尽を強いる誰かに物申したい！！

おいらがだんなに拾われて、孤児や街娼の姐さんたちや色々困って

いる人を助ける場面に立ち会っている。
妹分は奴隷商人に売られて糞貴族の慰み者としてぼろきれ当然に殺された。生活のためだと体を売って死に掛けた人も沢山見た。勿論死んでいった者達も・・・・・・・・・・・・・・・

助けられた街娼の姐さん達はおいらを男にしてくれた。
汚れた体でごめんねと泣きながら・・・・・・・・・
おいらは姐さん達が世界で一番綺麗だと思う。
苦界に落ちて尚、誰かを思うことが出来るなんて・・・・・・・・・・・・・・・
そんな素晴らしく馬鹿な女たちを見捨てるわけ行かないじゃないか・・・・・・・・・・・・・・・

おいらは子供で王室顧問のだんなに扶養されている身だ。
男だったら慕ってくれる女を全て囲うくらいの甲斐性がなければ・・・・・・・・・・
おいらはつよくなりたい！

そうか、この思いが家族という者の始まりか・・・・・・・・・・・・・・・・・・

おいらは始めて家族という者を手に入れることができる。
おいらの家族に手を出す馬鹿は本気でつぶす！！

そして街娼の姐さん達が願ったように、おいらは幼女を力の限り保護して、理不尽になく誰かのために力を振るおう・・・・・・・・・・・・・・・・・・

神よ世界よ運命よ！！
誰かに理不尽を背負わせるならばおいらがそれをぶん殴る！！

孤児弟の見た夢。

王弟殿下とハゲ談義

市民どもは不安がっているかと思いきや、のりのりである。
少年貴族に庇護を求めた幼い子供、少年貴族は泣きながら周りに助けを求めてそれに応じた六大貴族達・・・・・・・

少年の後見たる全裸賢者は国王に直談判して王国の理不尽を正すべく詔を挙げる!!
神々仕える者も遠く世界の果ての戦士達も少年の叫びに子供の嘆きに馳せ参じる・・・・・・・・・

おい、どこの御伽噺だ!
「俺が情報操作した・・・・・・・・・・愚民共には幸せな夢を見せてやりたいだろう・・・・・・・・・」
この禿・・・・・・・・
毎日毛が抜ける呪いにかかりやがれ・・・・・・・・・

その呪いは意味ないよぅ、王弟殿下は毎日抜けているから・・・・・・・・・・・（ｂｙ毛根神）

市民共には幸せな夢か・・・・・・・・・・
それでも現実を見せて立ち向かってもらわないと、いつか貴族が腐るときが来たときには立ち上がって新たなる王となり新たなる幸いの種を育てる人を育てなくては・・・・・・・・・・

はらり～

道という道は我等の為にあるようなものであった。
野盗も魔獣も大人数に怯えて出てこないし、出てくれば美味しいえさだったのに。
「だんな、だんな、血に飢えてないですか？」
「多少飢えているかな、特に王族のに・・・・・・・」

ちらりと王弟(はげ)殿下を見るのだが・・・・・・・
「俺はここに来たときから犠牲になる覚悟は出来ているが、俺のルビにハゲと入れるのは止めろ！」
地の文を読みやがる。それは反則だろう。
王族(へんたい)を狙うならばまずは王妹(ヤオイ女)殿下からだろうな。これは世界に対する害が大きい。
王弟(MO型)殿下は最後だなまともだし、繰り返し言うと若年性脱毛症(おうてい)は最後のほうだな！
「だからどうして俺のルビははげ関連なんだ！！しかもハゲに俺をルビ振るんじゃない！！」
どうして地の文を読めるのかが疑問である。
王弟殿下(はんばはげ)の分際で・・・・・・・・・・・・・さっさと王位につきやがれ！
そうして、私に隠遁生活送れと年金と共に放り出せばいいのに・・・・・・・王弟殿下(かっぱ頭)はその度量もないか・・・・・・・・王弟殿下(はげ)はヘタレだし・・・・・・・・・・・・

「はげはげいうな！」

地の文どころか心まで読んだぞ・・・・・・・・・危険人物だ!!
「其処まで悪意に満ちた地の文を読むなというほうが無理だろう!!」

「でも、奥方ははげと結婚なんてと嘆いていたぞ・・・・・・・・・・」
あっ、王弟殿下(はげ)は崩れ落ちたぞ・・・・・・・・・・・・・・

それは置いといて・・・・・・・・・・・

我々だけを見れば道楽貴族の避暑か観光みたいに見えるのだが周りに散らばっている同行者を見ていると
商会公の隊商とその護衛・・・・・・・・・(主に奴隷公開放奴隷戦士団)
性愛神殿巡礼集団と護衛有志・・・・・・・・・(主に人外公人外兵団+極北戦士団)
荒野の民の行商に農園公の農作物を売りに出る若い衆(共にえげつない装備付)

どこで如何間違えたのだろう?数百くらいいるし・・・・・・・・・・
・まぁいいか。

「良いかで済ませるな!!如何考えても内戦起こせる数だぞそれは!!!」
「内戦起こさせない政すればよいだけだろう!」
「起こす張本人が言うな!」
「起こしてないよ、私は孤児弟が幼女を助けたいという声に応じたまでだ。」
「其処でおいらを出汁に使いますか・・・・・・・・・」
「孤児弟は悪くない、悪いのは其処の非常識の塊である孤児弟の保

護者だろうな。」

「非常識というより無茶というか無謀というか・・・・・・・・・・・・・」

「ごね得といったほうが・・・・・」

「参戦している私達が言うせりふではないけどね。」

「御主人様が至らない部分を私達で補いますよ。色々魔法具や霊薬をもらったでしょう。」

「ところでどう見ても対人用ではなくて戦術用というか戦略用のものがあるんだけど・・・・・・・・・・」

「官僚の皆様方の親心ですからありがたく受け取っておきましょう。」

「こっちにも非常識が・・・・・・・・・・」

「これには同意。」

「どこからこんなにも禁呪クラスの魔法具を用意したんでしょうかね？」

「四席、お前の所属するところからしいぞ・・・・・・・・・・・・・・・」

「辺境伯家系魔術師（ナマケモノ）が道楽（おふざけ）で作ったとか言わないでくださいよ。聞きたくない聞きたくない・・・・・・・・・・・・・」

「四席、残酷な現実を突きつけるようで悪いが、その通りだ。しかも代々の作製物の実験をかねて提供したらしい・・・・・・・・・・」

ああ、ままならないものだ。

王弟殿下とハゲ談義（後書き）

さけがきれたのでこれまで

王弟殿下と禿の詩（前書き）

抜けていく髪よ　抜けていく髪よ
櫛の歯だけが通り過ぎていく
抜けていく髪よ
遠いとこから抜けていく
このふさふさを　このふさふさを
何時の日か戻さん
暖かき長髪の　髪型

抜けていく髪よ　抜けていく髪よ
生え際だけが追いかけていく
抜けていく髪よ
一人鏡で落ちていく
この目の汗を　この目の汗を
何時の日か止めん
緑なす黒髪の　そよかぜ

抜けていく髪よ　抜けていく髪よ
息吹と共に　抜け落ちていく
抜けていく髪よ
誰も判らぬ我が心
抜けていく髪よ
この空しさを　この空しさを
何時の日か語らん
新しき芽生えなき　ふさふさ

すまん、調子に乗って綴ってしまった（ｂｙ作者）

王弟殿下と禿の詩

「前書きで不快な歌が流れた気がする。」
「王弟殿下(はげ)それは気のせいで御座いましょう。」
「大方作者が呑(よっぱらい)みながら作った戯れ歌だろう。不愉快だ！憎しみで世界が滅ぼせるならば今ここで滅ぼせそうだ・・・・・・・・・」

今作者が飲んでいるのは日本酒らしいぞー。何でパソコンの前に活イカと新秋刀魚の御造りがあるのー（ｂｙ酒精神）
酒精神、一献やるかい？（ｂｙ作者）
やるー！そっちの【澤乃○純米辛口】あけてー（ｂｙ酒精神）

はらり～

「王弟殿下も切羽詰っているねぇ・・・・」
「禿げたらそれは自然の摂理、そのときに禿げすら受け入れられる風格を作れない己が悪い。」
「馬族戦士(モヒカン)さんは禿げたらどうするの？」
「黒髪の少年よ、禿げたらそれに合う髪型をすればよいだけだ。我等(騎馬公)が族長みたいに剃りあげて残った髪を結うのも一つの手だ。因みに我等(騎馬公)が族長は禿ではないぞ。あれは毎朝女衆に剃り上げてもらって整えて貰っているのだ。前に自慢の一房を剃りとられてしまったときがあってなぁ・・・・・」
「その時は如何したんです？」
「その一房を頭飾りにした帽子を作っていたんだが・・・・・・・・・

・・・末王女（当時三歳）が帽子を奪い取った者だから・・・・・・・見事なつるつる頭が・・・・・・・・・・・・・・・あの時は爆笑だったぞ！」

「子供ってときに残酷な事をするからなぁ・・・・・・・」

「むごいかも・・・・・・・・」

「周りにいた貴族たちも笑いを堪えるのに忙しかったぞ。その中で末王女が『つるつるつるつる』と頭をぺちぺちするし・・・・・・・・その時に腹筋が筋肉痛となったものは沢山いるだろうよ。」

「騎馬公も怒るに怒れなかったでしょうねぇ・・・・・・」

「その後に騎馬公は剃りあげた頭に鉢金を巻いた騎馬戦士の装いをしはじめた。」

「そういえば、騎馬戦士の装いのほかにも平服はありますものねぇ・・・・・・」

はらり～

我々は旅をしているのだがまとまって旅をしていると威圧的になるということで街道を前後したり側道を利用したりで多少ばらけているのである。

まぁ、ちょっとした盗賊くらいならばどれもこれも自力で撃退するのだが・・・・・・・・・・・・・・・

時々見かける、四散した無残な死体は何だろう？

「あれは、炸裂弾ですね。前に農園公の荷馬車部隊が護身用として持ち込んだ話していたじゃないですか、どう見てもそれっぽいですねぇ・・・・・・」

「うわぁ、そのまま放置とか美観というものを考えてほしいものだよ。」

「だんな、そっちが問題なんですか？」
「そりゃ、そうだろう、盗賊を潰すのは別に問題ない。誰かがやらないと被害が出るしな、其処までは自衛として認められているし場所によったら報奨金が出るところもある。其処の自由戦士はそれで道中の路銀稼ぎしているくらいだしな。」
「路銀稼ぎとは露骨な表現は・・・・・・・・　確かに否定できないですが・・・・・・・」
「ついでだから、その村にも寄って取り立てるとするか（ニヤリ」
「・・・・・・・・・・・そこまでは・・・・・・・・・　一応仲間たちにはこの村のことを教えておきましたので次盗賊が出たときは自力で何とかしてもらいましょうと思ってますが。」
「結構、根に持っているじゃない。」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「四席、この炸裂弾って手軽に手に入るのか？」
「扱いが難しいので作るものは少ないはずですが・・・・・・・・・・・・・すぐに暴発するし、魔術師が道楽で作る程度でしょうかね・・・・・・・・・・・・戦争で使う事もありますが兵士達が怖がって持とうとしないし・・・・・・・」
「四席、守護辺境伯家魔術師団で作ってないか？」
「多少在庫はあるんじゃないですか？野山を荒らす害獣を追い払うために使ってますから。」
「後で売ってくれ。」
「それは流石に即答できませんねぇ・・・・・危険ですから。」
「うむ。」

この自由戦士はどこまで武装すれば気がすむのだろう？
長剣の他にも短剣を何本か隠し持っているし、靴なんかにも隠し刃が仕込んであった気がする・・・・・・・・
その上炸裂弾？
どんだけ一人軍隊をする積りだ。

「王室顧問様？俺は其処まで戦力過多じゃないですよ。其処の孤児娘達の半分も火力はありませんから。」
「こっちもこっちで火力重視だし・・・・・・・・・・」
「えー！火力ないよぉ！氷結呪文だし・・・・・・・」「こっちは電撃。」「精神崩壊呪文だし！」
「それは流石に危険すぎるから俺の許可なく使うなよ。」

王弟(はげ)殿下が孤児娘達の魔法の杖（攻撃用）の使用を禁止してしまった。
まぁ、麻痺呪文とかの指輪があるからそれを使えばよいか・・・・・・
動けなくして獣の餌とか・・・・・・・・・
「そっちのほうがえぐいわ！！」

王弟(はげ)殿下の肝は小さい、だから抜け毛がとまらない・・・・・・・・・

はらり～

それから数日後、道の掃除をしてくれているのが農園公の荷馬車部隊ではなくなったようだ。
どうみても叩き潰されたような跡とか投げ飛ばされている跡が見受けられる。

「あはははは！楽しいなぁ人間砲弾。」
「今度こそ俺が最高記録出して今夜の酒代を出させるぞ！」
「馬鹿言ってんじゃないよ！俺が一番また取るから・・・・・・・・・」

「きゃー、かっこいい！もっと高くはでになげてぇ☆」
「まかせとけ！」

びゅーん！

ごぐしゃ！

「まだまだ甘いね、人間砲弾とはこうやるもんだよ！」

どびゅーん！！

がしゃ！

「わー、大使夫人すごーい！」「どこまで飛んだか判らないけど」
「これじゃ、記録取れないんですが・・・・・・・・・」

其処にいるのは極北の蛮族達である。素手で叩きのめした盗賊達をどれだけ遠くに放り投げるか遊んでいるようだった・・・・・・・・・
えっと、極北の何をしているのかね？
「ああ、王室顧問の大将じゃないですかい！さっき盗賊を捕まえたから、どこまで飛ばす事ができるか遊んでいたんですよ。」

びゅーーん！
「おお、若いから良く飛ぶなぁ！おじちゃん今じゃそんなに勢いないよ。」
シモネタかますなぁ！！

思わず神秘緋（オリハリセン）金属張扇で極北戦士の一人を殴り飛ばしてしまった。
おおっ！良く飛ぶなぁ・・・・
「結構良い記録出てるけど、道具使っているから参考記録だね。」
「あっ！極北（おっさん）戦士が戻ってきた。」
「元気だねぇ・・・・・」
そりゃ、神秘緋（オリハリセン）金属張扇では打撃与えられないから。
「俺は砲弾じゃねぇぇぇぇぇ1！！」
「いい弾だったのに。」
「人権はないのか？」
「可愛い私の娘達の前でシモネタかます奴にはない！！」

「ねぇねぇ、若いと何が良く飛ぶの？」
ほら、聞いてやがるし・・・・・・・・・・
「え、えっと・・・・・・・・」
若い極北戦士が混乱しているぞ。
「それはね、・・・・・・・・」
性愛神殿の信徒さん、詳しく説明しなくても・・・・・・・・・・・・
若い極北戦士は逃げ出した・・・・・・・・・・
若いって良いなぁ・・・・・・
「御主人様？盗賊が逃げ出してますけど・・・・・・・・・・・・・」
「おーい！孤児娘達、麻痺の呪文で逃げた盗賊をやっちゃって。」
「「「はいっ！」」」
ばりばりばりばり～☆

盗賊たちは効き目がないようだ。
あれ？

「四席、分析呪文かけてもらえる？」

その間にも人外戦士が走って捕まえている。
捕まえた盗賊を見てみると・・・・・・・・・・

「ぶはははっ！！ちょっ！これは酷い・・・・・・・・」
四席が爆笑している・・・・・・・・・
何がどうしたんだろう？

「どうしたんですか？」
「ぶわははははははっ！！ちょっと、皆にも見えるようにするから・・・・・・・・わははははははははっ！！」
四席は笑い転げながら・・・・・・・分析呪文を全体表示してくれた。

分析結果

固体名：盗賊その一
能力表記（略）
現在状況：麻痺（インポテンツ）（股間部分）
属性：（略）

うわぁ・・・・・・・・・・・・麻痺（インポテンツ）（股間部分）これは酷い・・・・・・・・・

「げひゃひゃひゃひゃ・・・・・・・・・これは酷い。」

「男として終わったな。ははははは・・・・・・・・・」

「孤児娘たちこれは酷いよ・・・・・・・・・・わははははは！」

笑い転げる極北戦士たち、人外達は・・・・・・・・・多少引き気味だ。

それが普通だから・・・・・・・・・

そして孤児娘達は

「・・・・・・・・・・・・・／／／」

結果を見て顔を真っ赤にしている。そりゃ年頃の娘さんが麻痺（インポ）（股間部分（テンツ））なんて言葉を知っていても実際自分が巻き起こすなんて事ないだろうしね・・・・・・・・・

私が肩をたたくと孤児娘達は真っ赤にして私の背後に隠れる。

性愛神殿の信徒達も悪乗りして、ほらほらとチラ見せするのだが盗賊達の股間に反応はない。

周りの極北戦士や人外達の股間は手で押さえられて前かがみなのに・・・・・・・・・・・・

「ご主人様は見ないでください！」

孤児姉に目をふさがれてしまった。

「あらあら、やきもちなんて可愛いわねぇ・・・・・・」

「孤児姉ちゃん、味見くらいはするけどとらないから心配しなくて良いのよ。」

「・・・・・・・・／／／」

あのぅ、私は孤児姉のものと言う前提なんでしょうか？
怖くて聞けなかった。

はらり～はらり～

「俺、この非常識の群れを抑える自信がない。」
「あのぅ、王弟殿下？俺も入っているのですか？」
「自由戦士君は比較的まともなんだろうけど、抑えきれるか？」
「無理。」
「おいらも非常識陣に入れないでくださいよ。」
「孤児弟か・・・・・・お前も苦労するなぁ・・・・」
「もう慣れました。」
「こんな若いのに・・・・・・・・・」

はらり～　はらり～

王弟殿下と禿の詩（後書き）

盗賊「いっそ殺せ！！」「せめて全体表示は勘弁してください。」
「この糞あま！後で犯してやる！！」
「たて！たつんだ！じょー！！」
「お前等人として大事な者を忘れてないか？」

盗賊達に言われてもねぇ・・・・・
「同じ男としてもう少し・・・・・・・・」
だってやったのは彼女達だし、下半身で犯罪起こす奴がいると下半身の楽しみが規制されるからねぇ・・・・・・・

「だからって、これは酷すぎる・・・・・・・・」「立たない、俺の大棍棒が・・・・・・」

計測：椎の実。

ああ、そうそう。このまま街まで連行して晒し者にしてあげるから。

「「「やめてぇ！！」」」

次の街ではこの盗賊達はインポである事をばらされて住民達の笑いの種を提供したのであった。

「うむ、民草共が笑えるということは大事な事である。」
「だんなだんな、色々な意味で酷いオチですから・・・・・・・」
「御主人様、どうせならばあの盗賊どもの自称大棍棒のサイズも分析して表示してもらいましょうか？」
「流石にそれは同じ男として・・・・・・・」

「四席様お願いいたします。」

結局、棍棒（自称）の大きさも表示されてしまうこととなってしまった盗賊達。
ところで性癖とかもさらす必要あったのかね？

「ついでですから。」

四席が良い笑顔をしている。

住民達も指差して笑っている・・・・・・・・女性陣も顔を顰める振りをしてクスクス笑っているし・・・・・・・・

「ひどい・・・・・・・・・」
「いっそ殺して・・・・・・・・」
「俺達が何をしたんだ！」

盗賊行為だろ。

孤児準爵と橋守親子（前書き）

あらすじ　王弟殿下は禿だった。

愛も変わらず残酷とか差別発言満載ですので嫌な方は回れ右。

孤児準爵と橋守親子

まぁ、色々と街道沿いの掃除をしながら我等一行は道を進む。
王都経由で道の掃除をしたらゴミを片付けなさいという苦情が来たが、時間が勝負の保護作戦にそんな時間は掛けられない。

「その割には盗賊達を飾り立てるのには時間を掛けるのだな。」
「片手間ですよ片手間。」
「生きたまま吊るして、姓名性癖男根の大きさまで詳細に記して裸で置いておくのがどこが片手間だ!!」
「ええっ!生きたまま肉をこそぎ落として焼肉とかしたかったのに・・・・・・・・・・」
「流石にそれは俺が許可できないぞ!」
「一番美味しいところを食べてもらいたかったのに・・・・・・・・・・殿下には。」
「人肉に美味しいも不味いもあるか!」
「胸より腿肉のほうが美味しいですわよ。」
「実際食ったようなこと言うな!」
「食ったわよ!飢えて死んだら赤ちゃんが共に死ぬから泣きながら食べたよ!悪い!」
「私も食べたわ・・・・・・・・・・　そうしなければ死んでいたから・・・・・・・・・・」

はらり～

性愛神の信者有志たちは我々が助ける前は本当に苦境に陥っていたのだ。
愛する者を喰らって生き延びた経験を持つものだって少なからずいる。

飢えた事がないものに食うも地獄食わねば死亡という悲しみに満ちた選択が世界にはあることを知らないのだろうな・・・・・・・

「うむ、悪いがそれでも飢えた者に対して、大事な者を抱えて生き延びねばならないものに対しては言うべきではない。そしてこの根本が我等王国の失政であればまず我等が頭を下げねばなるまい・・・・・・・・・・・」

「王弟殿下・・・・・・・・・」

「でも、喰らうならばこんな臭そうな男じゃなくて若い女が良いのだがな・・・・・・・・」

「キャー王弟殿下のエッチ。」

「きゃーきゃー」

女衆の機嫌を回復させる事に成功したというか、女衆がこの王弟殿下(は)(げ)に言っても詮無きと思ったのだろう、手加減したのだな・・・・・・・・・・・・・・・

馬車の群れには沢山の人がいる。その中で食人行為に眉を顰める者ばかりだったのだが涙を流した馬鹿がいた。

孤児弟である。

性愛信徒の元街娼達と王弟殿下(くそはげ)のやり取りを聞いて本気でその悲しみに共感して泣いているのである。

仕方がないなと我等が孤児弟の頭をなでていると奴隷公公爵令嬢が孤児弟の頭をかき抱いて体全てを持って慰めているのである・・・・・・・・・・・・・・

あの公爵令嬢(ヤオイ女)に其処までの情があるとは・・・・・・・・・・

孤児弟は泣いていたのが恥ずかしいのかうつむいたままであるのだ

が公爵令嬢は容赦なく孤児弟の顔を持ち上げて顔を拭いてやる。

「よし、孤児弟。君の涙は誰かのためにあるならばそれは恥じ入る事ではないですわ。もしこの涙を馬鹿にするものがいたならば私が全て切り伏せて差し上げますわ。」

公爵令嬢は腰の剣を叩きながら高らかに宣言する。

腐っても奴隷の娘か・・・・・・・・・・・・

孤児弟は顔を真っ赤にして公爵令嬢に頭を下げる。

年頃の娘さんに抱きかかえられたのが恥ずかしいらしい・・・・・・・・

孤児院の女性達相手には無双していたのに・・・・・・・・・

「あれはだんながけしかけたからだろう!!」

「その割には終わってからは女性たちをはべらせてのと凄いことしていたくせに。」

「そ、それは・・・・・・・・・・・・・」

「まぁ、お前には女性の数人くらい囲う力があるから問題としないのだがな。」

「それは全身全霊をかけても・・・・・・・・・・・・・」

本当に馬鹿な子だよ孤児弟は・・・・・・・・・

食人行為をした元街娼達は自分達のために泣いてくれた孤児弟をそっと抱きしめてありがとうとつぶやく。

孤児弟は子供にするように元街娼達の頭や背中をなでさする。

暫し経って元街娼達も落ち着いたのかそっとはなれて別の馬車に移るのであった。

まぁ、その夜は孤児弟は大発奮らしい・・・・・・・・・・・・

元街娼達は孤児弟にすがりつくのだった・・・・・・・・・・・・

「孤児弟は縋られたら離せませんからねぇ・・・・」
「女性で苦労しそうだね孤児姉。」
「どの方も分別のついた良い女性ばかりです。その前が如何であれ幸せになって欲しい方々ですわ。」
「そうだな・・・・・・・・・・・・」

そして数日、我等主従はごくごく少人数で移動している。
人員は我等主従に孤児娘達、公爵令嬢と御者代わりの奴隷戦士。
最近では孤児弟も公爵令嬢になれてきたのか怯える事がなくなってきた。それでも二人きりにはなろうとしないのだが。

「お嬢、どれだけこのガキに色々したんですかい？本気で泣きそうなほど怯えてますぜ。」
「ひどいことなんてしてないわよ！」
「それはどうだか・・・・・・・・本気でこのガキが哀れに見えてくるよ。」

我等だけで進むのもわけがある。
理由としては自由戦士の未払いの話し合いに王弟殿下が自ら調停に乗り出したからだった。
私等が行くと帳簿のあらとか弄りだして村自体を破壊しかねないと・・・・・・・・・・
どれだけ危険物扱いなんだ我等主従は・・・・・・
「賢者様は手加減しませんからねぇ・・・・」
「中小の貴族領地では旨く誤魔化した部分で経営を成り立たせているところがありますからねぇ・・・・・」
「そういえば神殿では王室顧問避けの護符を売りに出してますわ・・

・・・・・・」

「ほぅ、後で神殿に顔を出すか・・・・・・・・・・売り上げ名簿を見せてもらうかね・・・・・・・・・」

「手加減してくださいましね。」

公爵令嬢にまで釘を刺されてしまった。ただ普通に監査しようとしているだけなのに・・・・・・・・

そんなこんなしているうちに街道から外れた道に橋に差し掛かる。大き目の橋なのだがぼろっちくて崩れそうである。其処には橋守と痩せこけたガキがいる。

橋守は足を悪くしているのか杖を片手にしていて我等主従を見ると仕方なさそうに通れという。

ここら辺の規則では貴族には通行料を取らないこととなっているのだろうか？

「おい、橋守。ここら辺の治安はどうか？」

「そうですねぇ・・・・・貴族様、いつもどおりで御座いましょう。盗賊、魔獣、強欲貴族が何かしらせびろうとてぐすね引いてますよ。」

「そりゃ違いないな・・・・・・・・・・この橋はあまり人通りがないようだがちゃんと成り立っているのか？」

「見ての通りビッコのあっしには畑仕事に耐えられないですし、やっと領主様の好意で橋守の役についているのですが通るものがいないですしここ数日子供には満足に食わせてやってないですね・・・・・・・・」

見てみると痩せた餓鬼はあばらが浮きかけている・・・・・・・・・・

私は数枚の銀貨を橋守の手に落とし込む。

「貴族様、そんな金を貰う謂れが御座いません。」

「これは通行料ではない、道の先への情報に対する代金だ。恥じる

ことなく受け取るが良い。」
橋守は頭を下げて礼を言う
「ありがとう御座います貴族様。」

我等主従の乗せた馬車は先に進むのだが孤児弟は食料袋を持って橋守のところに行く。
そして橋守に袋を押し付けるとすぐに戻ってくる。
橋守達は食料を押し付けた孤児弟に頭を下げて我等主従を見送ってくれた。

「何をしたのですの孤児弟君?」
「ただ、買いすぎてあまっている食糧をおいら達だけだと無駄にするから食べてくれと押し付けただけだよ。」
「食料?全然ないじゃないですの。」
「まぁまぁ、公爵令嬢。橋守達に気を使わせないための方便だろ。」
「あら、可愛らしい外見の割には粋な事をするじゃないの。」
「おいら達は食い物位いくらでも調達できるからね。それにあの親子は本気でろくに何日も食べてないだろう。飢えるってのは本当に辛いんだ・・・・・・・・・それを思えば別に袋一杯の食料くらい、大した事ないだろう。」
「そして袋の底に落としてある数枚の銀貨もでしょう。」
「ねーちゃんにはばれていたか。」

「ばかね、気づいていないのは公爵令嬢くらいよ。」
「で、どれだけ入れてたの?」
「銀貨二枚。これ以上だとまぎれていたと誤魔化すにはきついから・・・・・・」
「本当に馬鹿な孤児弟だこと・・・・・・・・・」

公爵令嬢も孤児弟を抱き寄せて頭をなでる。

「馬鹿な子だこと・・・・・・・・・・敵の刃以外にもこの旅で見守らないと駄目なものがあるなんて・・・・・・・」
「おいらは大丈夫だから、守る手数があるならば幼女とかその兄貴分を守って欲しいんだけど・・・・・・・」
「幼女達の体だけでなくて心も守るために貴方が無事であることが必要なの。自己犠牲は美しいけど馬鹿なこと、飢えた者に食べ物を与えるのは美談かもしれないけど飢えさせない状況を作らなくてはいけないのよ。これは貴方が良い事をしたと思っている橋守達に見せるためにも必要なのよ。もしこの食べ物がなくて貴方たちが損なったら橋守達は萎縮してしまうでしょう。守る者はいつでも大丈夫と意地を張らなくてはならないのよ。」
「はい、公爵令嬢。」
「まぁ、心配なさらなくても全ての害悪から守って差し上げますわ。優しい孤児弟、今度から私のことを【御姉様】と呼んでくださらない？私弟が欲しかったのよねぇ・・・・・女兄妹だし周りにいる男共は裸鎖みたいな者ばかりでしょう、孤児弟みたいな可愛い子を弟にしたかったのよ。」

孤児弟は一瞬あっけに取られてしまったのだが、仕方ないなと一息ついて。
「おいらでよければ弟になりましょう。おねーさま。」
「うーん、可愛いわね。」
思わず良い笑顔になった公爵令嬢は孤児弟を抱き頬に口付ける。そして頬ずりを繰り返すのだった。
孤児弟はあっけに取られて為すがままである。

「王室顧問の旦那、うちのお嬢が何かすいません・・・・・・・・」
「いやいいが、孤児弟には女難の相があるんじゃないのか？一筋縄ではいかない女性ばかりに縁がある。」
「先の元街娼達にうちのお嬢でしょう・・・・・・・・・・・・・

うらやましいような哀れに思えてくるような・・・・・・・・」
「私ならば回れ右して即逃げるね。」
「ちげぇねぇ・・・・・・・・・・」

笑いあう御者と私に孤児弟は
「ちょ、ちょっと恥ずかしいですよ公爵令嬢。離してください・・・・・・・・・」
「お姉さまと呼ぶの。それに姉弟のふれあいじゃない、恥ずかしがらないの・・・・・・・・・・・」
「御姉様、あたってますって！照れくさいですから・・・・・・・・・ちょっと痛いって・・・・」

諦めろ孤児弟、公爵令嬢が飽きるまで・・・・・・・・・・・・・・
「賢者様、暫く離してもらえないですわね。」
「だな、彼女がついていれば王城でも孤児弟に群がる害虫避けにはなるかな？」
「令嬢自身が一番の害虫であるというのが問題なのですが・・・・・・・」
「うーむ、悩むところだ・・・・・・・・・・・・公爵令嬢、今夜は孤児弟と同室にするか？」

「それは楽しみですわね・・・・・・・・・・・」
「ちょ！だんな！おいらが無事ですまないって・・・・・・・・・・・・」
「大丈夫だ！いざというときは公爵家に婿入りすれば良いだけだから。」
「待て待て待て・・・・・・・・・・・・おいらそんなの抱え込めないよ！！ネーちゃんも孤児娘達も助けてよ！！御者さんも・・・・・・・・・・」

勿論孤児弟を助ける者がないのだった。
暫く孤児弟は抱きぐるみ状態で公爵令嬢に可愛がられるのだった。
「どう考えても弟に対する扱いじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！！」
捕食されたかどうかは神のみぞ知る。

さすがにこんだけ女性にかこまれたら孤児弟は腎虚になるわね（ｂｙ医療神）
別に人様の寝室まで覗いて回るほど野暮じゃない（ｂｙ大地神）

孤児準爵と橋守親子（後書き）

その頃の王都。
補佐見習は久方ぶりの休みを傷跡娘と母親の三人で過ごす。
傷跡娘も補佐見習の母親と仲良くなりうちの嫁状態で受け入れられている。

そんな三人は市場にある一軒の食堂兼酒場に来ている。
よく王室顧問に連れてこられて孤児娘達と飲み食いしているのだが、たまには母親に対してもいいところを見せようと誘ったのだった。
傷跡娘に対しては・・・・・・まぁ、いつもいるのが当たり前というか俺の嫁だからというか・・・・・・・・・・

「おれはまだ其処まで人生決められたくない！！」

何か叫んでいるようであるが照れ隠しだから放置しましょう。（ｂｙ王都守護神）

食堂に入った三人は仲の良い親子が息子の給料が入った祝いをするのだろうと見られている。正確には母親と息子夫婦だったりするのだが・・・・・・・・

「夫婦・・・・・・・・／／／」
えっと傷跡娘さん地の文で照れないように・・・・・・・・・（ｂｙ詩人神）

店に入り手馴れた調子で料理を頼む補佐見習、傷跡娘の好みとかも把握して彼女が美味しく楽しめるようにするあたりは大事にしているのだなというのが良く判る。

母親に対しても何か食べたいのがないかと聞くあたりは嫁舅問題で囲まれないように両者に気遣っている若い旦那さんのようである。

料理が来て、三者三様に食膳の祈りを捧げて食べ始める。
下味を揚げた鳥肉とか野菜の煮込みとか・・・・・・・・・蒸した塩白身魚なども美味美味と楽しんであるのである。

食べながらも最近の近況とか語り合っている。
補佐見習と傷跡娘は王宮の独身寮にいるし母親は嘔吐に部屋を借りて住んでいる。
寮に来ればと言う話をすれば、世話になるほど年取ってないわよと切り返す。
確かに母親は何時に子供生んだのというくらい若々しい・・・・・・・・・
それに私がいたら二人きりで楽しめないでしょう・・・・・・などと問いかけたら補佐見習がむせて顔を白黒させるし傷跡娘が真っ赤になって黙り込む。

平和な平和な食事風景。
これだけを切り取ってみれば幸せといえるのだろう・・・・・・・・・
そんな幸せな光景をぶち壊す無粋者と言うのはどこにでもいるわけで

食堂の扉を開けてなだれ込んだのが近衛の小隊。
「其処にいたのか補佐見習！王城からの召喚状である。大人しく来るが良い！！」
「まて！今日は休みだろう！久方ぶりの休みを邪魔するな！」
「煩い！法務副長様と宰相閣下からのじきじきのお達しだ！力づくでも連行せよと命令を受けている！」
「うわぁぁぁ・・・・・・・・・・休みの日くらい仕事から離れたいぞぉぉぉぉぉ！！」

あっけにとられる食堂にいる一同。
母親や傷跡娘も状況があほすぎてついていけないし、従業員や他の客達なんかは何が起こったのか理解できていない。

「こら近衛たち！おれは無実の者だぞそんな罪人みたいに・・・・・・」
子供である補佐見習は近衛たちに抱えられるように連行されるのだった。暴れても子供の膂力・・・・・・・・大して意味がない・・・・・・

唖然とする食堂に近衛の隊長格が
「皆様方おさがわせして申し訳ありませんでした。」
と深々と頭を下げる・・・・・・・・・
さらに状況が飲み込めていない一同を尻目に母親の元に来て袋に入った硬貨の山を手に押し付ける。

「ご子息様の活躍で王国は順調に回っております。これは法務副長様からご母堂様にとご子息の借り賃だそうで・・・・・・」
「あらあら・・・・・・・まぁまぁ・・・・・・」
「では、ご歓談のところ失礼致しました。お二方に関しましては御緩りとお楽しみくださいませ・・・・・・・・」

近衛の隊長格は再度礼をするときびきびとした身のこなしで外に向かう。

跡に残された女二人・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・料理が冷めるから食べましょうか義母様。」
「・・・・・・・・・そうね。」

普段と変わらない様子で食事をする二人。其処は仲のよい親子のようであった。
補佐見習がいてもいなくても変わらないようでもあった。

酷いなぁ・・・・・（ｂｙ厨房神）

その後補佐見習を見た者はいない・・・・・・・・・・わけでもなく、官僚部屋で仕事に追われるのだった・・・・・・・・・・・・
「酷い！！俺に何の恨みがあるのだ！」
「うらみはないが仕事はある。ちょうど捕まえやすかったし、残業代は前払いでご母堂に渡してある。諦めてきりきり働けぇぇぇぇぇ！！」

「終わったら呑もう、補佐見習。この上司達の無道を肴に・・・・・・」
「財務官の旦那・・・・・・・・」
「でも、命令書出したのは財務官発案なんだよなぁ・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

孤児準爵と魂の叫び（前書き）

あらすじ　作者は福島の酒を震災復興と買いしめているぞ。ちなみに福島の魚を店に置こうとして仕事干された・・・・・・・・・・・・暫くしたら作者は乞食の仲間入りだ。

孤児準爵と魂の叫び

旅路を行く、其処で見かけた孤児達の数の多さに憤りを感じながら我が弟子である孤児弟は道を進む。
この地方は凶作の地方だ・・・・・・・・・・

それなのに貴族共は己の名声を守らんがために民に無体を強いて飢えたる民の群れを作っている。
民を耕しきれぬ糞虫共が・・・・・・・・・・・・・・・

道々に増え行く盗賊どもは・・・・・・・・・・・・飢えた民の行く末・・・・・・・・・・・・・・

我等は死なずにすむように叩きのめし、軍勢に加えていく。
教育のなっていない愚民共の成れの果てであるが捨て置くのは政治を司るわれらの本意ではない。

目的とする子爵領・・・・・・・・・・・・・・・
その惨状を見て孤児弟は叫びをあげる。

道見るに飢えたる民の群れ。路上に横たわる子供の亡骸・・・・・・・・・・・
それに群がるのは死にたくないと肉切り包丁を持った市民共・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「何故なんだ何故なんだ世界！どう押して満ち足りた人がいる一方で飢えて朽ち果てる者がいるんだ！同属を食らうのは許せるとしても食わざるを得ない状況を作る腐れ貴族共、お前等は許せない！天地人それが許してもおいらが許してはならないと叫びを挙げよう！！ごめんよ、ついてくれた皆！おいらはおいらは世界で一番の貧乏

くじを引いてそれを誇って散ろうと思う!!」
幼女が叫ぶ
「どうしてとーさんとかーさんがしななければいけないのかききたい。」
ようじょのあにがさけぶ
「おれは良い!どうしてどうしてどうしてチビ共が死ななければならなかったのか?どうして俺を庇った男娼達がが命を懸けなければならないのか?神答えろ!答えなくば神すら打ち滅ぼしても世界に物申す!!」
極北戦士達が雄叫びを上げる。
「われらが白い世界では子供を蔑ろにする者はいない。弱い者達もだ!白い世界の秩序を世界に顕す!」
奴隷達が街娼達が馬の民が神殿の信徒達が・・・・・・・・・・・・・・・
其々に叫びを挙げる。

しかし門は閉じられたままだ。
「なあに、扉を開けるにはノックが一番だ。これは世界の常識。」
極北戦士達は扉に棍棒でノックを叩きつける。
しかし、城門は開かれない。

「ははははっ、ノックするにも色々あるのでしょう。」
奴隷戦士達は立ち向かう・・・・・・・・・・・・
「ノックは素手でおこなうのだよ。」
素手で門をたたく。門に凹みが出来たけど無理だった。

「彼等は誇り高い者たちだ、挑戦状を叩きつければよいのだよ。」
荒野の戦士達は城門に兵士の屍骸を打ち付ける、それでも扉は開かない・・・・・・・

人外共が上空から色々投げつけても効果ないし・・・・・・・・・・
・王弟殿下が勅命を命じても動く気配はない・・・・・・・・・・・

そうか、あくまでも世界の叫びに耳を傾けることはないわけだ・・・
・・・・・・・・・・・・・・

では、この土地はこの腐れ野郎と共に朽ち果てろ。

我々はこの町の市民達を保護すべく活動する・・・・・・・・・・・
・・

商会公の物資や農園公の作物がなければこの乞食寸前の愚民共が動くとは思えない・・・・・・・
どうして飢えて死ぬ寸前のたみがこんなにもいるのだ!!

われらの炊き出しにならぶは長蛇の群れ・・・・・・・・・・・・・
・

一椀の粥に涙する者たちに・・・・・・・・・・・・・朽ち果てかけた者たちの群れを見てここの領主共は何も思わないのか!!

朽ち果てている者の中には幼女達の類縁の者がいるしく朽ち果てかけたものの中には幼女達の知り合いが沢山いる。

「皆の物聞け!!　おいらは黒髪孤児準爵!!元々は王都の孤児で

擂りだった！おいらはひもじくてひもじい弟妹分がいたから道をたがえた。それでもおいらの主である王室顧問は気長においらを叩き鍛えてくれた。幸いでありたいと言う願いは叶えられないが、それでも誰かの助けになるために立ち上がっているがそれでも助けきれない。叫びを挙げろ！誰かのために・・・・・・・・・・・・立ち上がって剣を取れ、愛する者のために・・・・・・・・・・・・本当は鍬を手に大地と戦う者が素晴らしいのだが・・・・・・・・・・・・

孤児弟の叫びに相対して性愛神殿を初めとする神殿勢力が集団で癒しの輪を作り飢えて死にそうなものたちに力を分け与える・・・・・・・・・・保護した市民のなかには幼女達の親族がいるが体はボロボロである・・・・・・・・・・幼女兄を初めとした性愛神殿信徒代表達は命を削って誰かの助けになりたいと倒れる・・・・・・・・・・・・

ああ優しい馬鹿者達が・・・・・・・・・・・・四席攻撃呪文で扉を開けてあげよう・・・・・・・・・・・・

雷撃が獄炎が氷櫃が襲い掛かるが無理だった・・・・・・・・・・・・

そうしている間にも親族やら近隣から集められた兵隊達が私達を包囲する・・・・・・・・・・・・・・・・

ああ、正義はすでになく、戦う民はすでに牙を抜かれてしまっている・・・・・・・・・・・・・・・・

義戦聖戦おこなえず民はいつしか家畜と化しているのか・・・・・・

・・・・・・・・

ああ、伝説の一族である我等も討たれる定めか・・・・・・・・・・

・・・・

出来れば世界を造ろうとする気概のある輩に討たれたかった・・・・

・・・・・・・・・

篭城だと気がめいる。

孤児準爵と魂の叫び（後書き）

酒が切れたので今宵はこれまで

孤児準爵と聖（性）戦発動（前書き）

「商会公、あそこ近辺で隊商を派遣する予定はないですかな？」
「辺境伯、いきなり何を・・・・・・・・・・・・・ははぁ、あの子達が気になるのですな。」
「うむ、隊商を派遣するのならば護衛を売り込もうかと思いましてな安価で・・・・・・・」
「あそこには隊商派遣しているし、これ以上は経費の無駄だな。」
「ふむ、どうもいらん手出ししてきそうで嫌な予感がするのだ・・・・・・・・・・・王室顧問（おとうと）を捕まえて査察自体を無効化したり、借金の無視を要求したり・・・・・・・・・」
「それ以前に王室顧問自体を血祭りにしようとせぬか？」
「それだけならば別に二度と日の目を見られない程度のことをすれば良いのだが可愛い姪っ子たちがいるのでな。」
「なるほど、あの子達はワシも引き抜きたいと思っているのだが、王室顧問への忠誠心が強くてなぁ・・・・・・旨く手懐けた者だよ。」
「まぁ、今日は失礼した。とりあえずあそこの領主達が兵を集めているらしいから同行している隊商たちにも気をつけるよう願いますよ。」
「うむ、その情報は入っているし対策として護衛をわんさか連れた隊商をあの近辺をかするように通しておいている。
「さすが商会公手抜かりがない・・・・・・・・・・」

商会公と守護辺境伯の会話。

「開放公、おぬしの兵は余ってないか？」
「いきなりどうした騎馬公？」
「うむ、あの近辺で家畜の売買の可能性がないか人を寄越そうと思っているのだが騎馬の民だけではとっつき辛いだろう。だから王国民を間に挟もうかと・・・・・・・・・」
「とは言え我等も王国の民から見ればとっつき辛い分類だぞ。」
「ふーむ、人外達も馴染みがないし・・・・・・・守護辺境伯の連中も集めるか・・・・・・・・・」
「なるほど・・・・・・・・・・そういうことか。ついでだから、商会公に人を借りて仲立ちしてもらうか。」
「それが良い。商売には専門家が必要だしな。」
「うむ、商売だしな・・・・・・・・・・護衛がいないと盗賊とかが怖い者な。」
「うむ、慣れぬ土地だからどんな危険があるかわからぬからな。護衛としてきてもらえぬか？」
「勿論喜んで、その途中で公爵令嬢達の一行に会って同行しても偶然だろうしな。」
「あのなぁ、刃物で考えようとするな。我等は商売の可能性を探りに行くのだ。決して孤児弟達に合流するのではないのだぞ。それは禁じられているからな。」
「わかったわかった。ついでだから人外公達に商売の可能性を探りに行かないか誘うとするか。」
「うむ、儲け話に対して仲間はずれするのは宜しくないからな。」

騎馬公と解放公の会話。

篭城というよりも挟撃を受ける形になっているのか、しかし城館から何の応答もないのが疑問だ・・・・・・・・
向こうに集められた兵達に聞いてみるか・・・・・・・・・・・・・・

「ははは っ！ 査察と称して我等を蹂躙する積りだろう。この際だから王室顧問一行を捕らえて身代金を貰うとしよう。」
「いや、なぶりものとして憂さを晴らすのが良い。」
「あの娘達は中々楽しめそうじゃないか・・・・・・・・・・」
「あれも守護辺境伯家の者だから手出ししないで身代金の上乗せに使えるだろう・・・・・・・」
「それに加えて借金も無視してしまうとしよう、ちょうど商会公の部下達もいるみたいだし・・・・・・・」
「あの数だとすぐに終わるかな。半日といったところか？」
「一時間だろう。何なら金貨を賭けてもいいぞ。」
「ははは っ、前もそれで損していただろう。懲りないなぁ・・・・貴公は。」
「煩い！」

なんとも寄せ集めっぽい雑多な兵だ。
聞こえてくる会話も下品だし・・・・・・・・数は多いが、私兵達だけならば逃げることも可能か・・・・・・・・・・・
後は足手まとい・・・・・・・・・王室顧問一門、難民達、性愛神殿信徒集団、王弟殿下か・・・・・・・・・・・・・
「だんな、孤児娘達の装備を計算に入れてないんですかい？」
「あのなぁ、いくら強力な装備を持っても戦いに慣れていない孤児娘たちを即戦力になると思わないほうがよかろう。あの装備自体も

微妙なものが多そうだし・・・・・・・・・」
「御主人様、戦の前の交渉で市民達だけでもはずせないでしょうか？」
「孤児姉、とりあえず声がけをしてみるか無理だろうな。四席、拡声呪文を！」
「はっ！」

拡声呪文で貴族軍に対して声を上げる。
「其処に見られるは近隣の貴族諸氏とお見受けする。本日は沢山引き連れてこの子爵への舞踏会でもあるのだろうかな？」
「ははは っ！そうだな踊るのは貴様等だろう。我等はそれを見て楽しむというわけよ。愚民上がりのガキ貴族もどきに色物貴族・・・・・・・・・・それに嫌われ者の王室顧問。面白い踊りが見られるだろうな。」
「我等は踊りは得手ではないので楽しめるかどうか判らぬがお相手いたすとしよう。その前に嗜みとして非戦闘員を逃がしたいのだが如何だろうか？」
「ふむ、動けそうもない愚民に女子供か？お前等の死出の供にちょうど良いだろ、これは我々からの餞だ有難く受け取られるが良い。」
「後、我が陣営に王弟殿下が居られる。流石に王族を手にかけるのは宜しくないだろうから殿下だけでも退避させる事は出来ぬか？」

ざわざわとする貴族軍・・・・・・・・・・
雑兵の中には反逆？などという声が聞こえる。
その中から貴族達の一人が声を上げる。

「王弟殿下なんていたか？」
「そんなのいたの？」
「三兄妹だと思っていたが・・・・・・・・・」「あの禿が王族？」

「似てないよなぁ・・・・特に頭髪・・・・・・・・」
「見たことも聞いたこともないぞ。」
禿げ禿げ発言に王弟殿下(はげ)は抜けて地肌が見える部分を真っ赤にして怒っている。
髪・・・・・・・・もとい、影が薄くて兄弟達(へんたいたち)に存在感を食われているからなぁ・・・・・
でも、貴族達一応王族なんだから顔と名前くらいは覚えておこうよ。

「で、この抜け(頭頂部脱毛)かけの貧相な中年が王弟だって?騙るのはお前等の身分だけにしろ色物たちが!」

一言の元に否定されてしまった。そのやり取りで市民達の間で殲滅させられるのかと諦めが走り、商会公の隊商たちはなにやら魔法具を弄って連絡を取っている。農園公の御者達は其々の武具を手にとっているし、其々の兵達も装備を整えている。数の差は数倍程度か・・・・・・・・・・・・一人当たり１０人程度か。ちょいと割り当てとしては多いかな。
「いやいや、馬鹿にして居るだろうよ!我等極北のツワモノならば、一人当たりその倍は欲しいところだ!」
「何がツワモノだ際物の間違いだろう!そのまま突っ込んで戦場を間違えてしまうのがオチじゃないのか?」
「何を言うか、際物はそっちだろう。どうして戦場に裸で来るんだ!常識で考えろ。」
いつものような極北戦士と奴隷戦士団のじゃれあい・・・・・・・・・・・・どっちも色物だなぁ・・・・・・

奴隷戦士団(はだかにくさり)・・・・・・・色物
荒野の民(もひかん)・・・・・・・・・色物
人外兵(きちく)・・・・・・・・・・色物
自由戦士(びんぼう)・・・・・・・・・色物

農園公(えろおやじ)の御者・・・・色物
商会公(きぞくしょうにん)の傭兵・・・・色物
極北兵団(よっぱらい)・・・・・・・・色物
性愛神殿(娼婦達)・・・・・・・・色物
王弟殿下(はげ)・・・・・・・・色物
孤児貴族達(可愛い子供)・・・・・・色物

うむ、王室(わたし)顧問以外色物ばかりだな。ここまで色物ばかりだと逆に清清しく思う。

《自称》正統派貴族からすると分けのわからぬのがこの国の頭だから嫌なのだろう・・・・・・・・

頭の堅い奴等だ！！

「一番の色物が何一人言っているんだ！」

「色ボケの酔っ払いが！」「王室顧問貴様にだけは言われたくないぞ！！」「そうだそうだ！」

「誰が禿げだ！」「ひどいですわ、少なくとも私だけは奴隷兵団の中で一番まともなのに！」

「腐りきっているのが何を言う！！」「だんな、あんただけには言われなくない！」

「けんじゃさまひどーい！」

「少なくとも全裸で王都を歩き回る奴には言われたくないよな。」

「色物貴族の中で一番存在感を放っているのが何棚にあげているんだ！！」

「貧乏言うな！」

何か敵味方一緒になって私を非難している。酷い言われようだ！

何の個性もない反乱貴族に色物兵団、この板ばさみで私は心が痛いよ。

「「「「「「黙れ椎の実！！」」」」」」

敵味方そろって声を上げてくる！

なんて見事な総突込みだ（ｂｙ演芸神）

私は椎の実じゃない！世界樹だ！！

「世界樹？ぷぷっ・・・・・・・・・・！」

其処、女神官！笑うな！

「だって、どう見たって・・・・・・・・・・・・」

神官がそんな事言うと本気にされてしまうじゃないか！

「御主人様、大丈夫です。椎の実だろうと千年樹だろうと私はついていきますので・・・・・・・・・」

孤児姉、その短小前提の発言は止めて・・・・・・・・・・

そっちの貴族軍の皆様も生暖かい同情の視線は・・・・・・・・・・

うわぁぁぁぁぁ！！

「王室顧問、大事なのは大きさじゃないんだよ。ワシは大棍棒だから問題ないけど・・・・・・・・・・」

「お互いを思いやる事が大事なんだ。俺のは長茄子だから関係ないけど。」

「おらは椎の実じゃないからわからねぇだ。」「おらの大根はむすめっこひぃひぃ言わせてるしなぁ・・・・・・」

「こらこら我が精兵達よ、いくら敵だからといって王室顧問の椎の実をネタとするのは男として如何だと思うんだが・・・・・・・・・・・・」

「領主様、以外と懐が広いんですねぇ・・・・」

「ぶわはっはっはっはっはっ！！」

「でも椎の実でよかった。賢者様の大きかったら私達の体じゃうけとめきれないもの。」
「そういえば孤児弟のは大きかったわよ。」「それで姐さん達が懐いてしまうわけか・・・・・・・・・」
「あらあら、それは興味深いわね。」
「公爵令嬢様、聞いてらしたんですか？」
「そりゃ、可愛い弟のことですもの・・・・・・・・・・・」
「って、言うかまだ捕食してなかったんですか。」「あらあら私はふしだらな女じゃないですわよ・・・・・・・・・」
「でも、裂けちゃいそうで怖いですよねぇ・・・・」
「孤児娘たち、ちゃんとほぐせば結構すんなり行くんですよ。」
「女神官様！」
わいわいがやがや・・・・・・・・・・・・

えっと、この猥談どうすればいいの？

我はこれを記録するのか？とても嫌だ（ｂｙ記録神）
王室顧問が絡むと下に走ってしまうのだからねぇ・・・・・（ｂｙ歴史神）

だまれ！！ごげしっ！（殴打
私は神秘緋金属張扇（オリハリセン）で敵味方神人関係なくドツキ回る！！
「このどたわけどもがぁぁぁぁぁ！！」

背後からイカヅチが乱舞し、殴り飛ばされた者たちは星となって消えていく。
一人殴ればそれが砲弾となって十を弾き飛ばし、十を殴れば焔と供

に打ち上げられて百を吹き飛ばす。
この一団を殲滅するのにそんなに時間がかからなかった。

ハァハァ・・・・・
つかれた！どうして私の周りには色物と酔っ払いと変態と馬鹿ばかりなんだろう・・・・・・・・・
一度人生について考えたくなる。

あんだけ派手な突っ込み無双して言う科白じゃないよなぁ・・・・・（ｂｙ戦神）
見事な突込みだ！我が神器（おりはりせん）をあれほどまでに使いこなすとは精進を重ねているなぁ・・・（ｂｙ演芸神）
戦の気配がしたのに見る前に終わらせているか。（ｂｙ戦神）
いやいや、これは突っ込み。まだ前座だよ。（ｂｙ演芸神）

吹き飛ばされてしっちゃかめっちゃかな状況、どうしたものかと思いきや正面から孤児弟が神秘緋金属張扇（オリハリセン）で私の顔面に打撃を叩き込む！
私は民家の壁にのめりこむ・・・・・・・・・・

「この腐れ賢者がぁぁぁぁぁぁぁ！！」

主人に対して何たる非道。天地人これを許しても我が・・・・・・ごふっ！

「少し黙れ！」
孤児弟は私の発言を封じると立ち上がってきた貴族連合軍に対して一礼する。
「我が主である王室顧問が失礼致しました。おいらは孤児弟準爵、

この査察隊の束ねをしております。今日ここに来た目的は皆様方もご存知で御座いましょうがこの子爵領から難民が出ているという報告を受けて現状の視察と対応策をとることなのですが、皆様方に不都合を押し付ける予定は御座いませんのでこの場は引いてもらえませんでしょうか？」

「ふむ、決の青い小僧かと思ったら、骨があるじゃないか。そうは言ってもな義理もあるし、芋づるという可能性があるから見させるわけには行かないのよ。降伏するならば心身ともの安全を保障するが如何だ？」

「申し訳御座いません。この査察はおいらの貴人聖域法（アジール）が原因ですが、王命でありますので退くわけには参りません。寛大な申し出感謝いたしますが使命は果たしたいと思います。で、厚かましいかと思いますがこの場にいる市民や非戦闘員、女性達を戦いの場から離したいのですが許可願いますでしょうか？」

「市民については問題なかろう。女性陣は爵位持ちや自ら戦いの場に赴いた者であろう、女だからと手加減する謂れはない。それにここの女性陣は男性よりも手ごわそうだ、逃がしたら後が怖い。」

確かに経理の鬼である孤児娘達に素手で熊を伸した極北大使夫人、性愛神殿の女性陣は神聖魔法の使い手で場所柄情報に通じているし、公爵令嬢は腐っても（どっちの意味かはあえて言いたくない）奴隷の娘といえる戦闘能力を持っている。

なんか、女性のほうが強くない？

「そうですか、もう一度お尋ねいたしますがこの査察を妨害するという方向で軍を集めたのですか？」

「そうだ。地縁血縁義理のあるここの侯爵の息子である子爵の査察は彼の前歴に不都合だから止めたいのだ。」

「１０日と持たずに王都から逃げ帰った者にあくまでも義理立てするのですね。」

「そういうことだ、黒髪孤児準爵。貴様だって其処の幼子のためにここまで来たのだろう。両者平行線という事で力のある者が押し通すのが手っ取り早かろう。口で争うても時間ばかりかかる。剣の身分ならば剣で語れ！ではいくぞ！」

「しかたありません。最後に貴方様の名前をお聞かせ願えますか？」

「名乗っていなかったか、それは失礼致した。我は青麦候の呼びかけに応じた燕麦男爵。黒髪孤児準爵よ、きさまをガキと思わず本気でいくぞ！」

「丁寧な名乗りがとう御座います。数の不足ゆえ物足りないかもしれませんがその辺は前もって謝罪いたします。」

「おもしろいガキだ！もう一度言うぞ、今降伏するならば名誉ある扱いをいたそう。詫びを入れるならば今だぞ！」

「同じことをおいらも繰り返します。下手すれば王弟殿下のいる中で戦いなぞ起こしたら反逆罪の適応となりますけど今ならばまだ間に合いますので子爵領の査察を邪魔しないでもらえますか？」

「何度か降伏を勧告するのは礼儀上故、引けぬと判っているのに言葉を繰り返すのは逆に非礼か・・・・・・・・・・」

「戦わずにすめばそれが一番。流す血が少ないならばそれは良い事。なれど引けぬとなれば躊躇いを捨てさせてもらいます。」

「「いざ、まいる！！」」

おーい、お二人さん。何で無駄に息が合っているの？

正史にはこのやり取りを残そう、流石に前半のやり取りは酷すぎるから。（ｂｙ記録神）

捏造？ひどいのは認めるが。

いや、編纂だ。ちなみにこの場面は連作黒髪孤児の一幕で【燕麦男爵との語らい】として名画の題材と鳴る予定だ。（ｂｙ歴史神）

孤児準爵と聖（性）戦発動（後書き）

「商会公、例の隊商たちから連絡がありました。孤児弟達が青麦候を初めとする初期族連合と交戦開始。数は約数百、劣勢です。配下は確認されるだけで十数家・・・・・・・・・・」

「六大公と守護聖域辺境伯家に連絡を！傭兵隊の準備を隊商の救援に向かう。」

「はっ！公は？」

「ワシは王家に出向いて陛下と掛け合ってくる。」

「了解いたしました。」

「ワシの可愛い隊商たちをなぶりものにしようとして儲け話の邪魔をするとはただで済むとは思うなよ・・・・・・・・・・・・くっくっくっ」

「まるで悪役の科白だな・・・・・・」

「商会公の趣味だから突っ込むな。」

「うちらは悪の幹部？」

「いや、せいぜい下っ端だろう。」

「「商会公！！」」

商会公とその配下の会話。

燕麦卿と市民退避（前書き）

ほうむかんがくるくるくるくるくるくるくるくるくるくるくるくる
くるくる・・・・・・・・・
しろいしょるいのなだれとともに
すうじのむれのぐんたいつれてかみうつぺんのぐんかとともに
うすわらいのかんりょうどもがしょるいふぶきでおどりくるって
たたみいわしのにおいとさけぶ
さいんひとつでしんだだれかはしょるいとなってのびちぢみ
さいんひとつでほろんだむらのるろうのたみがけたけたわらう
みっつのつきとあかいほし　とけいのはりはぎゃくまわり
こわいこわいよしょるいがこわい
かべがなだれておそいくる　すうじがぎょうれつうたうたう
ほうむかんがくるくるくるくるくるくるくる
うまのるひととはだかのどれいけがわのおとことへんたいつれて
すうじをうちこみひとじにでても　けたけたわらってごまかしている
ちいさなこどもはしゅうじのへいと
ちいさなむすめはすうじのじじょと
へたへらわらって　たいようおとす
ないたきぞくをあしぶみしつつ　ほうむかんがくるくるくるくる
るくるくるくるぱーぱー

「子爵様・・・・・・・・おいたわしや」
「法務官が来ると聞いて壊れてまったな。」
「自らの地位をネタにわなを仕掛けるなんて・・・・・・・・」
「どうすればあの子爵様が壊れるんだ？」

おうとこわいおうとこわいおうとこわいおうとこわい
ほうむかんこわいほうむかんこわいほうむかんこわい

「どんだけむごい事されたんだろう？」

燕麦卿と市民退避

貴族緒家私兵団（ささつぼうがいぶたい）との話し合いがついて、難民達を避難させることができた。
これで一つ目的が果たされた。ここの市民階級のほぼ全て、農民の半数ほどがこの町にいた計算なのだが数が足りない・・・・・
餓死したり離散したりしたのだろう、傷ましい事だ。

難民達だけだと体力的にも不味いから癒しの手として性愛神殿信徒集団と孤児娘達、農園公の御者や商会公の隊商の馬車隊を供につける。

「いざとなったら判るな孤児娘達。」
「はい賢者様。」「そのまま聖域守護辺境伯領に逃げ込みます。」
「貴族達が手を出してきたら後悔という辞書に一つの事例として乗る程度の事をして差し上げますわ。」

「おいおい、王室顧問この娘達は貴族だろう彼女等まで逃がす算段つけているんじゃないよ。」
「良いのか？燕麦卿、彼女達の装備を解放したら君達だけでなくこの地もまた酷いことになるぞ・・・・・・・・・・・・恥ずかしながら官僚（ばか）達が守護辺境伯魔術師団の最悪な作品（ナマケモノのドウラクモノ）ばかりかき集めて装備させているんだ。私だってあれはむごすぎると思うぞ・・・・・・・・」

ざわざわ・・・・・
「そーいえばおらぁきいたことあるだぁ、街道沿いで盗賊共が細切れになって汚い染みになっていたってなぁ・・・・・」
「おらが聞いたのは岩に突き刺さって・・・・・・・・・」
「生きたまま捕まっているのがいるんだが、大事なブツを潰された

挙句に大きさを椎の実とかかれた札を下げられてさらし者になっているとか・・・・・・・・・・・」

「王都で手を出そうとした貴族がけつを掘られて、その様子が絵物語にされて実家に送られたとか・・・・・・・・・」

「違うって、盗賊は生きたまま土に埋められて獣の餌にされたとか・・・・・・・・」

「書類仕事させられて、心壊れるまで解放させられなかったらしいぞ。」

「酒漬けにされて戸板送りにされた挙句に内臓が破裂するまで殴られたとか言う話は？」

「外国の大男が泣いて土下座したという話を聞いたことが・・・・・・・」

「奴隷商人が殺してくれといまだに王都で叫び続けているらしいが・・・・・・・・・」

「それは自業自得だろう・・・・・・・・・・」

ざわざわざわ・・・・・・・・・・・

なんか違う話が混じっている気がするが、うちの娘達は其処まで酷い事しません。

孤児娘達がきりっと視線を貴族軍に向けたら雑兵達がざざっ！と下がる。

孤児娘達が一歩踏み出すと貴族たちも冷や汗を流す・・・・・・・・・・

ここは可愛い娘たちの名誉のために誤解を解いておかなければ・・・・・・婿の来手がなくなってしまう。

「あのぅ、貴族連合の皆さん孤児娘達はそんなことしませんよ。虫も殺せぬ優しい娘たちですよ。せいぜい、書類の不備を見つけて会計担当を胃痛で療養神殿送りにしただけなんだが・・・・・・・・・

・・」

ひぃいいいい・・・・・・・・・・・・

「六大公と王族に経理上の不備をついて、泣きがはいっても書類をつき返したりもしたけど・・・・・・・・・・」

うわぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・

「それに娘達はまだ魔法具とかを使用してないけど股間麻痺（インポテンツ）の呪文が暴走するから戦場に立たせたくないのだが・・・・・・・・・・・・・・」

うわぁぁぁっぁぁぁ・・・・・・・・・・・

股間を押さえて後ずさる男性陣（敵味方関係なく）

「あの盗賊達は哀れだったな・・・・・・・・・」

「股間を潰された盗賊は孤児娘達だったのか？」

「あれは性愛神殿信徒集団の仕業。金よりも体を狙ってきた盗賊やら酔っ払いを片っ端からちぎっては投げをしてたから・・・・・・・・」

ひそひそ・・・・・・・・

身内からも脅威の視線を受け始めている・・・・・・・・・・

「賢者様ぁ・・・・・・・・・」

孤児娘達から露骨に怒りの視線が・・・・・・・・・・・・

「火に油注いでどうするのですか御主人様？ただでさえ御主人様の身内という事で手を出そうとする若者がいないのに余計に婿の来手がいなくなりますよ。」

孤児姉からも叱られてしまった。

「良いですよ、いざとなったら賢者様の妾になりますから・・・・・・・」

「それは元から・・・・・・・・・・」

「孤児娘達、それは許しません。」

「大丈夫大丈夫、本妻は孤児姉に任せるから・・・・・・・・・・」

ざわざわざわ・・・・・・・・・

「可愛そうに・・・・・・・・・」

「王室顧問の妾なんて・・・・・・・　そんな自暴自棄になるなんてどんな人生送ったんだろう・・・・・・・・・・・・若いのに。」

「王室顧問こんな若い子を囲うなんて・・・・・・・・・・・・・恥を知れ！」

「養女とは言う隠れ蓑でハーレムか・・・・・・・・・・・・・浪漫溢れる生き様よ。」

「経理術とかも王室顧問の仕込らしいぞ、あれが聖域守護辺境伯家の最終兵器・・・・・・・・・・・・」

何か敵味方から私に対する侮蔑と敵対の視線が・・・・・・・・・・・・・・・

そして誤解が・・・・・・・・・・・・・

「王室顧問！こんな幼い娘に・・・・・・・・・・・・・・・許すマジ！！」

燕麦卿がマジ切れしているし・・・・・・・・・・・・・・・

「燕麦卿、何に怒っているのかね？」

「黙れ黙れ黙れ！　こんな幼い孤児娘達を妙な教育を施したり危険な装備を持っていないと生きていけないような状況において保護もせず、挙句の果てに自分のものにしているだと！！そんな、うらや・・・・・・・・・・・・・・げふんげふん、無体を強いていることを棚に上げ、こっちに言いがかりをつけるのは・・・・・・・・・」

「燕麦卿様、そういえば貴方様の領地の決裁書なんですけどコレコレこういう部分が数字抜けているのが数年分あるんですけど・・・・・・・・・・・・・」

「え、えっと・・・・・・・・・・・」
「そっちの踏畑男爵様の不作救援嘆願書の数字も・・・・・・・・・・・・・・・あちらの蕪守男爵様の・・・・・・・・・・・・・」
「おい、今は戦闘中だが・・・・・・・・・・・・・」
「「うるさい！こっちが数字と格闘しているのに適当な書類でっち上げやがって」」
「計算くらい検算してください！」
「誤字脱字が多すぎます！！」
「酒のしみで文字が滲んで読めないんですけど！」
貴族達が後ずさり・・・・・・・・・・・

「あれが経理の鬼姫部隊・・・・・・・・・・」
「経理の暗部と聞いたぞ・・・・・」「噂では魔王国の・・・・・・・・・・」
「引き抜きをかける貴族が多いとか・・・・・・・・・・・・」
「ある貴族の子弟が同じ教育を受けたんだが三日と持たず亡命したとか・・・・・・・・・・」
「其処の子爵様も・・・・・・」
ひそひそ・・・・・・・・・・

あのぅ、話がそれているんですが・・・・・・・・・・・・・・・・・・
私が孤児娘達の肩をたたいたら孤児娘達は私の前で警戒態勢を解かないまま大人しくなった。
この経理に対する熱意が誤解を生む原因なんだよな・・・・・・・・・・
こんな可愛い娘たちなのに（なでなで）

「まぁうちの可愛い娘達にたいする不当な評価を解いて欲しいところですが、まずは市民達を退避させましょう。その後で思う存分戦

を楽しみましょうではないか。」
「うむ、このままでは数字にうなされそうだし・・・・・・・・・・・・・・」
「その時はうちの娘たちを貸し出しますよ、どの子も器量よしで働き者！経理の腕ならば各国からも依頼が来る程度ですから。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・それは終わってから話し合おう・・・・・・・・・・・・・・」

「だんなだんな・・・・・・・・・・話がそれてる燕麦卿様も停戦するならば良いんですが、どうするんです？」
「うむ、黒髪孤児進めるとするか・・・・・・・・・・・このままだと戦闘する気がそれる。」
「そのままそれてくれたほうが楽なんですが・・・・・・・・・・・・・・」
「見得を切った手前、それは恥ずかしいだろう・・・・・・・・」
「恥で済むならばいくらでもかきましょう、幸いのために進む誰かが泣くよりは良い事です。」
「馬鹿か貴様は！貴族ならば名誉を重んじろ！」
「まぁ、孤児弟は市民ともいえない境遇だったからねぇ・・・・・・・・・・・・・」
「あの、歌物語（サガ）は本当だったのか？」
「それがどれを指しているのかは分からないが孤児弟は私が拾って鍛え上げた傑作のひとつだよ！」
「だんな・・・・・・・・・・・・・・・」

市民たちはぞろぞろと街を逃げていく。
それを守るように隊商達や御者達や性愛神殿の信徒達が付いていく・・・・・・・・・

孤児娘達も殿(しんがり)を守るように進んでいく。
よかった、孤児娘達だけでも逃がすことが出来て・・・・・・・・・・・・

市民の退避が過ぎた頃。
両陣営に緊張が走る・・・・・・・・・・・・
戦いに入る前に礼儀だけは果たしておこう

「燕麦卿初めとする貴族諸氏の皆様には感謝します。庇護対象である市民とうちの非戦闘民と孤児娘達を逃がしてもらったことを・・・・・・・・・・・・」
「なぁに、民草に被害を与えるわけ行かないのは貴族の嗜みよ！それに性的機能障害(インポテンツ)にされたくないからな・・・・・・・・・・・・」
「他にも対象者を主人公とした王妹殿下の男色作品を延々と聞かされる呪文が封じられている魔法の杖とかもあったんで助かりましたよ。」

顔を青ざめる貴族諸氏・・・・・・・・・・・・王妹(へんたい)殿下の悪名がここまで届いていたのか・・・・・・・・・・・・

「おい、王室顧問！それはどこの禁呪だ！」
「一般呪文だけど・・・・・・・・・・・・」
「「「「嘘だ！！！」」」」

敵味方関係なく声が上がる。

これは自動文章作成呪文の応用ね・・・・・・・・・・・・これで私の

楽しみが増えていくのね・・・・・・・・・・（文芸神）
これは酷すぎる・・・・・・・・・・・・（魔術神）

そして居残る、幼女とその兄と男娼達・・・・・・・・・・・・
君たちは安全なところに行かないのか？

「あたしはなぜうえなくてはならないのかきいてない。なぜおとーさんやおかーさんがしななければいけないかったのかきいてない！」と強情な幼女に
「これは俺の戦いだ。部外者に任せたままで後ろにいるわけいかない！一度は死んだ身だ！」
と頑固な幼女兄。

「可愛いこの子をほっとけるわけないだろう。」「生きるも死ぬも一緒だよ。」
「兄さん達・・・・・・・・・・」
ひしっ！

えっと、この甘ったるい雰囲気を何とかしてください・・・・・・・・
しかも男色だし・・・・・・・差別意識持ってはいけないことは分かっているんだが・・・・・・・・・・・・
好みがあるだろう。

孤児姉、君もどうしているんだね？
「御主人様が居る場所が私のいる場所です。御主人様だけでは不手

際が多いですから足りない部分を補助して差し上げますわ。」
本当に馬鹿な子だよ。頭をなでると甘えるように体を寄せてくる・・
・・・・・・・

「おいらは?」
「お前は今回の発起人だろうが!逃げるわけいかんだろ!其処の幼
女をしっかり守るんだぞ!」
「はいっ!だんな!」

さて、始めるかね・・・・・・・・・・
楽しい楽しい血みどろの舞踏会を・・・・・・・・・・

燕麦卿と市民退避（後書き）

では、酒が切れたのでこれまで・・・・・・・・・・
コンビニにはろくな酒がない・・・・・・・・・・（求めるな）

ついでに作者は腱鞘炎。
ほうちょうかたてにひゃっはーしすぎました。

燕麦卿と酒合戦（前書き）

あらすじ　内戦だぞ。

一度投稿したのに消えているし、作者は直接打ちだからダメージがでかい。

消えていたと思ったら投稿されているしよくわからん。

酒でも飲もう。

今回も例に漏れず下品で残酷で差別表現満載である。

いやならば回れ右して大庄長なすでも食べているが良い。

作者は米茄子が好きだ。青茄子も大好きだ。イタリアのまだらの茄子が販売されているとうれしいのだが、種すら手に入りづらい。悲しいものだ。

燕麦卿と酒合戦

煌く武具は鋼の色で両陣意気は甚だ高く、天候明朗なれど風強し。

にらみ合うが剣をぶつけ合いとまでは行かないのが不思議である。

互いの名乗りから始まるのが戦の作法であるが誰が先陣を切るかな？

特に決めていなかったからやりたいものに任せるか・・・・・・・・・

そこで俺様がと極北戦士が前に出る。両の腕には酒樽を抱えて・・・・・・

酒樽？

力自慢を見せびらかすんだよねぇ・・・・

背には斧がぶら下がっているし。

「さぁ、貴族諸氏の雑兵諸君。俺様が極北でその人ありと言われた戦士だ！そのなよなよした体で立ち向かえるというのならば前に出るが良い！」

「ふむ、黒髪孤児は人望がないと見える。貴族ではなく北の蛮族を仲間にすることしか出来ないとは・・・・・・・・・・・・　まぁ、この蕪森男爵が先陣の相手をいたそう。」

「ふっ！その下品な髭は貴族の証というのか？男爵だか男色だか知らぬが貴様の母親は好色な豚面鬼と山羊男の出来損ないの混血とま

ぐわったと見える。よぼよぼの婆さん山羊のけつにそっくりだぞ！」
「抜かせ、この白熊が！北の酔いどれどもにはこの髭の高貴さがわからないと見えるな。」
「高貴な髭というならば髭についた昼飯のスープのシミを洗い流してから言うが良い！」
「ふっ、貴様こそ毛皮にワインのしみがついているぞ。酒の一滴血の一滴。大事に飲めないなんて蛮族は食べ方飲み方がなっていないな！」

両人にらみ合い、力がこもる。
舌戦が終わるかと思ったが
「まぁ、俺様からの餞だ一杯やるが良い！」
と極北戦士は酒樽を投げ渡す。そして樽の蓋をコブシで叩き割り樽ごと一気に煽る。
「どうした？戦の前の景気付けだぞ！おまえら貴族連合はこのくらい飲めない軟弱者なのか？」
「抜かせ！蛮族が！樽からそのまま口付けるなんて嗜みに欠けるだろう！杯というのがあるんだ、それを使え。」

蕪森男爵は従者に大杯を持ってこさせると樽からそれをあけて大杯をくいっと呷る。
「甘露甘露！北の白熊風情にはもったいない酒！次は俺が返杯いたそう！」

あれ？この流れは？
男爵はエールを大杯に流し込むとうまそうに呷る。
「北の白熊よ！これを食らうが良い！」
従者にエールの入った大杯を渡すと従者は極北戦士にそれを渡す。
極北戦士はそれを一気に飲み干すと従者に杯を返す。

「蕪森男爵とやら、見事な返杯だ。ただ、これは酒というに値しない！酒というのはこういうものをいうのだ！」
極北戦士はつぼを二つ持ってくると、蕪森の従者に一つ渡す。
「もちろん毒なぞはいってないぞ！我ら極北の火酒。命の水ぞ！」
そう言って、極北戦士はつぼに入った火酒を旨そうに呷る・・・・・・

「ふむ、命の水か。中々洒落た言い回しではないか！こんな物は物の数であるまい。」
蕪森男爵は香りを楽しんだ後、一気に流し込む！

あっ！馬鹿！その酒を慣れないのが一気飲みしたら・・・・・・・・・・・

ぶはっ！げほっごほっ・・・・・・

案の上、蕪森男爵は咽てしまった・・・・・・・・・・
あまりに強い酒だから慣れないと酷いことになるよなぁ・・・・・・

「ほらほらどうした、母親の乳よりも甘い酒なのにどうしたのかなぁ？」
極北戦士はつぼをもう一本手に蕪森男爵の顔を掴み火酒を流し込む。

一気に強い酒を流し込まれた蕪森男爵はじたばたしていたがだんだん抵抗をなくして沈黙する。

蕪森男爵の頭を掴んでいる極北戦士は貴族連合のほうに向かって彼の体を受け渡す！

そして高らかに吼えるのであった！

「ははははっ！この極北戦士は鬼も竜も聖騎士も王国の精鋭も討ち取った世界一の戦士だぞ！貴様等ごとき雑兵が束になっても敵うまい！次は誰だ？ぐははははははははっ！！」

そりゃ、討ち取ったよなぁ・・・・　酒合戦で・・・・・・

「まだまだ俺様にとっては前座に過ぎないが次は誰が出るんだ？強いやつが出てくれるとうれしいぞ！」

高笑いと共に火酒のつぼを呷っている極北戦士（よっぱらい）彼の背後から近寄った影は彼の頭上から容赦ない一撃を食らわす！

ごすっ！

その遠慮呵責のない一撃は貴族からではなく味方の・・・・・・・・・・・・・・・同族である大使夫人の棍棒の一撃である。

ふぅぅぅ・・・・・・

息を吐く大使夫人からは魔力の渦が見える。

極北戦士（よっぱらい）は首から下を地面に埋め込まれた状態で目を回している。

「極北戦士（うちのばか）が手間かけさせたね。貴族連合の皆様方、代わりといっちゃ何だが私が相手をしてやろう！少しはまともに戦えるはずだから退屈だけはさせないと思うがねぇ・・・・・・」

軽く棍棒を振る大使夫人。棍棒の軌跡からは青白い光がばちばちという音と共に煌いている。

「ははははっ、女が先陣切るとは本当に人がいないようだな・・・・・・」

「悪いこと言わんからご婦人は後ろから観戦されると良い。」

腰が引けている貴族連合の諸氏。

熊を素手で倒したという悪名は知らないだろうが先ほどの一撃を見るとただではすまないことを肌で感じ取ったのだろう。

「おやおや、坊や達胸を貸してやるからかかってきな！それとも何かい？こんなか弱い女性に・・・・『嘘だ！！』・・・・・・」

大使夫人は声を挙げた極北戦士の一人に棍棒をぶつける！

極北戦士は鳩尾に棍棒を受け壁に穴をあける。

「おやおや、参ったねぇ・・・・・か弱いから棍棒がすっぽ抜けてしまったよ・・・・・・・・」

誰も突っ込むものがいない・・・・・・・・・・

戦場は沈黙に包まれている。

だけど貴重な戦力を突っ込みで駄目にするのは良くないと思うのだが・・・・・・・・・

一応数の上では劣勢だし。

かよわい？どう考えても大男達を一撃でのしていたよなぁ・・・・・・
さっきはなしにでていたいわにささったとうぞくというのは・・・・・・

ざわざわ・・・・・・・・・

地面に埋まっていた極北戦士はもぞもぞと首を蠢かしている・・・・・・
見ていて気持ちが悪い。

「何が言いたいんだい！はっきりお言い！男だろ！」
誰も言い返せなかった・・・・・・・・・・
「大丈夫、私は極北ではたおやかな淑女として通してきたんだ、怒らないから言ってご覧。」

おまえがいえよ、やだよ死にたくない・・・・・・・・・
どう見ても熊を素手でくびりころ・・・・・・・・・うわぁ！

しーん・・・・・・・・・

なんか真相にたどり着きそうなものを一睨みだけで沈黙させて満面の笑みで貴族連合ににらみを利かせる。なんか悪役というか怖いんですが・・・・・・・・

極北戦士を見てみると上半身は抜け出すことに成功して後は下半身を残すのみ・・・・・・・・・
ぐにょぐにょ蠢いくさまは見ていて気持ち悪い！

すぽっ！

大根でも抜けるように一気に下半身が抜け出す。
えっと、下のお召し物が・・・・・・・・・・・大根・・・・・・・・・・・
・じゃなくて、男根が・・・・・・・・・丸見えですよ。
それに気がつかぬ極北戦士
「おい！糞婆！いきなり酷いじゃねぇか！俺様が戦の先陣を華々しく飾っているところに水を差しやがって・・・・・・・・・・・・・・・・・・
げふぉっ！！」

長なす【品種名：長者】をぶらさげた極北戦士は横なぎの一撃を受けて水平に飛んで民家にぶつかって倒壊させる。

崩れ落ちる民家を見て大使夫人が一言。
「ここいらの建物って柔なんだね。軽い悪ふざけで極北戦士がぶつかっただけで崩れ落ちるなんて・・・・・・・・・・・」

しーん・・・・・・・・・・・

誰か突っ込めよ！

敵味方関係なく沈黙してしまった。
どうすんだよ、この流れ・・・・・・・・・・・・・

その中で声をあげたのがいた。
「ご婦人、皆貴女の魅力に打ちのめされて戦闘意欲を失っているのですよ。この場は私に任せて後ろで観戦していてください。次の勝利は貴女に捧げますんで。」
「おや、うれしい事言ってくれるじゃないの自由戦士。では、私は下がって私の戦士が届けてくれる勝利を待つとしましょう。ほんと

惚れてしまいそうだね、夫がいなければだけど。」
「ははははっ、ゆるりとお待ちあれ。」

自由戦士(びんぼう)が大使夫人をやんわりと嗜めて自らが戦の場に立つ。
「我、自由戦士と相対することが出来る勇士は居らぬか？」
「自由戦士か高名な貴殿なら文句なし！この侯爵領士爵がお相手いたそう。しかし、高名な自由戦士の割には貧乏臭い格好であるな。路上で枕返しにでもあったのか？」
「貧乏くさいは余計だ！いざ参る。」

士爵はやりを残像が見えるほどの速さで突き出すが自由戦士は軽く体を動かすだけでよけ、相手の勢いを利用する感じで剣の柄を鼻頭にぶつける・・・・・・・・・

盛大に鼻血を出して倒れる士爵、倒れた士爵の腕を踏みつけ剣を当て一言。
「勝負ありだな。」
「うむ、仕方あるまい・・・・・・・・・」
士爵は肩を落として自陣に戻る・・・・・・・・・

「次は居らぬか？稽古をつけてやろう。」
自由戦士の宣言に若い貴族と思われるのが数名、手にそれぞれの得物を構えて突進してくる。

ふわり・・・・・・・・ひらり・・・・・・・・

自由戦士は抜き身の剣をだらりと下げたまま、剣や槍の間を潜り抜ける。
その後に銀光一閃！
一人が倒れる。

一人抜けたのがわからないのか残りの若者達も襲い掛かってくるのだが、ふらふらと身をかわす自由戦士に一撃を当てることが出来るものはいない・・・・・・・・・・・・・・・

すれ違いざまに銀光が走り、一人また一人崩れ落ちている・・・・・・・・・

最後の一人は槍と共に体をぶつけるように突進してくるのだが、穂先を一閃して切り取って体制を崩したところに手刀を首に落とす。意識を落とす若者。

「若者達よ精進するが良い。」

若者達は倒れてうめいている・・・・・・・・・・・・・・見てみると切れている様子はないし・・・・・・・・・・・

「見事だねぇ・・・・あの貧乏くさいのは！全部剣の腹で攻撃して斬撃で殺さないように手加減しているよ・・・・・・・・・・」

「よく見えましたねぇ・・・・大使夫人。」

「まぁ、極北の熊の一撃に比べれば・・・・・・・・・・・・・ぬるい一撃だしね。」

一騎打ちは自由戦士の独壇場だった。貧乏くさいのに・・・・・・・・・

「貧乏くさい言うな！！　あの時ちゃんと報酬を受け取れていれば・・・・・・ぶつぶつ・・・・・・・・・・」

ただいまの戦争被害

貴族連合

鼻骨骨折１
打撲５
急性アルコール中毒１
死者ゼロ

黒髪孤児査察部隊

全身打撲２（ただし大使夫人による粛清）
死者ゼロ

民家全壊２

初戦の彩りはこんなものだろうか？
「まだ戦は始まってもいないぞ。」
さて、次はどんな血の色が見られるかね？

燕麦卿と酒合戦（後書き）

どうして極北がかかわるとギャグになるのだろうか？
まいったもんだ。

燕麦卿と一騎打ち（前書き）

あらすじ　戦闘開始というか彩りの一騎打ちだね。
ほとんど両者お祭り騒ぎ・・・・・・・・・・・・・・

「ところでおいらの出番は？」
孤児弟、お前は添え物。
「・・・・・・・・・・・・・・」

燕麦卿と一騎打ち

自由戦士の活躍で勢いづく我等黒髪孤児準爵査察部隊。

そう決戦の前に脅しておくのも悪くなかろう、時間稼ぎ的な意味で。

「次はあっしが出ましょう。」

おや？農園公のところの作付頭いたの？

「農園公様（おやかたさま）から事の次第を見届けて来いと言われましたのでね・・・・・大地や気候条件などは大体見たので対策なども次の季節から出来ますけどね・・・・・・・・　少し農民を見捨てる貴族たちにお仕置きしませんとね。」

良い笑顔だ。

「炸裂弾は止めるように。収拾つかなくなるから。」

「そんなものは使いませんよ。農具と縄だけで十分ですよ（ニヤリ」

次に出たのが大男。力自慢というところか・・・・・・・・・・

「俺は青麦候私兵団一の強力だ！お前等なんてひねり潰す！」

大男は鉄の棒を振り回し民家の壁を叩き壊して力を示している・・・・・・・・・

「大丈夫か？あんな大男、作付頭の倍くらい有りそうだぞ・・・・・・・・・」

「まぁ、見ていてくださいよ。王室顧問、体の差は確かに不便ですが何とでもなりますよ。」

中肉中背の作付頭より頭二つ分くらい大きい強力、明らかにチビが来たと見下している・・・・・・・・・・・・

「あっしは、農園公配下の作付頭。農園公より士爵の位を頂いてい

る。【緑の指】といったほうが通りがよいかもしれんねぇ・・・・」

ざわざわ・・・・・・・・・

「【緑の指】だと！」「あの万年不作地帯の民のために灌漑を引いてその名を変えた伝説の農学博士・・・・・・・・・」

「王家の爵位を蹴り飛ばした植物系魔法の高位魔道師・・・・・・・・・」

「春画の収集でその人ありといわれた・・・・・・・・・・」「実りの体現者・・・・・・・・・」

作付頭ただのエロ親父じゃなかったんだ・・・・・・・・・

「孤児院に持ち込んだ春画って・・・・・・」

「孤児弟それよりも貴方のために戦ってくれる人の戦いですよ。しっかりと見届けなさい。」

「はい、御姉様。」

「伝説の農学博士だろうと戦の前では貧相な親父に違いない。ひねり潰してやる。」

「そうそう、強力君。君は魔法を使うかね？」

「いや、俺はこいつ一筋だ！」

鉄の棒を相棒だといわんばかりに愛情こめて叩く。

「ふむ、いい体だ。農作業するにもう少し鍛えれば十分かな？」

「畑耕すなんて誰だって出来るだろう！」

「ふふふっ、畑仕事を甘く見てはダメだよ。今回は魔法を抜きで相手してやろう・・・・・・・・」

両者見合う、二人の間に転がり草が通り過ぎる。大男が鉄の棒を振り上げて一気に叩き潰す体勢なのだが、作付頭は片手に縄を持っただけで構えも何もない自然体である・・・・・・・・・

大男が鉄棒を振り下ろすが作付頭は軽く大男の腕を叩いて軌道をそらす。そして後ろに回りこんでひざの裏をかっくんとやり大男を転がす・・・・・・・・・・・・・・・

四つんばいになったおおとこの側面によると片手でブツを掴みもう片方の手で短剣をブツに押し当てる・・・・・・・・・・・・

「農園公秘伝、去勢術・・・・・・・・・・・・・・降参するか？しなければブツを切り落とすが。」

「ううっ、参った・・・・・・・・ブツだけはブツだけは・・・・・・・・・・やめてくれぇぇぇぇーー！！」

大男が泣きそうになっている。

「あっしの勝ちですな。」

男たちは軒並み股間を押さえて後ずさる・・・・・・・・・・

大男は泣きながら自陣に帰る。迎えてくれた兵達は肩をたたきながら出迎えてくれる。

去勢という一大事件に男たちは彼に同情したのだろう・・・・・・・・・・

強力君に幸あれ・・・・・・・・・・

「次は私が出ますわ。」

「御姉様、それはダメだって！」

「お嬢、出るならあっしが・・・・・・・・・・」

「大丈夫ですわ、勝ちますから。」

公爵令嬢が出ようとしているがそれを押し止める周り・・・・・・・・・・

一応嫁入り前の公爵の娘、かっても負けても色々問題がありそうだからな。
すでに存在自体が問題だという説もあるが・・・・・・・・・・・・

「王室顧問！」
「なんですかな？趣味に問題がないというのは聞きませんよ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あたちがでる！！」
公爵令嬢を押し止めようとしている間に幼女が前に出る！
「あたしはあなたたちにききたい！どうしてうえているみんなをたすけないでたすけようとするけんじゃさまたちをじゃまするのか？」
幼女は木の棒を前に出して震えながら進む。
「妹が意地張っているのに兄として出ないわけ行かないよね。」
幼女兄が幼女を庇うように前に出る。
「賢者様、黒髪の貴族様、これは俺達の喧嘩です。俺達抜きだなんて野暮は言いませんよね・・・・・・・・・・・・・・」

「馬鹿な子」「僕達の祝福を・・・・・・・・・・」
男娼達は幼女兄に性愛神の祝福を授ける・・・・・・・・・・
「兄さん達・・・・・・・・・・すいません、俺は俺のわがままで兄さん達に痛い思いをさせるかもしれない。」
「僕達を気にしないで自分の戦いをしなさい。」「帰ったら三人で楽しくやろう・・・・・・・・・」

「男同士で楽しくだってよ・・・・・・・・・・俺達が仕込んでやったから・・・・・・・ぐはっ！」
「おい！あの餓鬼、前に町で俺たちにけつを振っていた・・・・・・・・がはっ！」

貴族連合の中で下品な事を言っていた男達の口に矢が刺さっている。

「守るべき子供を食い物にしてその不幸を嘲笑う下品な男は男の価値はない・・・・・・・・・・」

「少し的をはずした・・・・・なまったかな?」

荒野の民の弓士達が幼女達が王都にたどり着く旅で幼女兄の体を買ってむさぼった下品な男達に憤り、その言葉を聴くたびに世界が穢れると清めの弓を放ったのだった。

「食えない狩なんてするもんじゃないな。」

「神の教えに反する。」

「しかし、あの手の下品な男というものは誰かを刺す事に一生懸命で刺されるのは嫌がるんだよなぁ・・・・・・・・・・」

「雇い主の品性も知れるというものだ。」

「あははははっ!」

「馬鹿な子よ、君の復讐は一つ終わったよ。」「それでもひかないのかな?」

「ごめん、兄さん達。僕の復讐と言うよりもけじめだから・・・・・・・・・」

震える体を抱きしめられながら幼女兄は前に出る。

「見上げた根性だ。俺は先の強力の兄だ。お前等二匹は素手で十分だ!」

先の強力とよく似た大男が得物であろう大剣を同僚に預けて前に出る。

「にげるわけいかない。どうしてうえたひとをみすてるのがきぞくなのかしるために!」

幼女が木の棒を振りかざし強力兄に殴りかかる。

ぽすっ！
強力兄は避けようともせず幼女の一撃を体で受ける。

さくっ！
幼女兄の短剣を手のひらで受け止める。
流れ落ちる血潮・・・・・・・・・・

「気がすんだか？」
流れる血に怯える幼女兄。

強力兄は幼女をつまみ上げると孤児弟に向かって放り投げる。
投げつけられた幼女を体全体を使って抱きとめる孤児弟。
その拍子に転んだりもするが幼女に怪我一つないようだ。

「お前が大将ならばお前が守る者をちゃんと守りきれ！！」

強力兄が怒鳴ると怯えている幼女兄にけりを入れる・・・・・・・・
吹き飛ぶ幼女兄の襟首を掴むと
「ガキが、大人の遊び場にでるなんて１０年はええ！　今ならあやまりゃお尻ぺんぺんだけで許してやるぞ！」
とぶらさげる。
幼女兄は強力兄に唾を吹き付けると
「ふんっ！糞貴族に尻尾振って餌貰っている奴なんかに死んだって負けを認めて詫びを入れるもんか！」
「頑固なガキだ！」
強力兄は幼女兄をぶら下げたまま自陣に戻る。

「強力兄やりましたな！」
「このガキを血祭りにあげて威勢上げましょうや！」

「前このガキ買ったんですが結構旨かったぜ」

ぽいっ！

強力兄は幼女兄を放り投げ、下品な事を言った男を締め上げる・・・・・・・・・・・・

ぎりりりりぐきっ！

何か折れそうな音がして男の顔が青く変色する・・・・・・・・・・・・・・・

強力兄を下品な男を壁にたたきつけると男は意識を飛ばして崩れ落ちる・・・・・・・・・・・・

強力兄はそこで倒れこんでいる幼女兄を見下ろすと

「確かに俺等に許しを請うわけいかないか・・・・・・・・・・・・・・・

こんな輩と一緒だと・・・・・・・・・幼女兄、あの街の自警団がお前達を保護せずに甚振っていたなんて・・・・・・・・・・・・・　真相知ったら酒が不味くなる。」

崩れ落ちた男にけりを加えて止めを刺すと、幼女兄を抱えて敵陣である黒髪孤児準爵陣営に歩みを進める。

そして幼女兄を託すと自陣に戻るのであった。

燕麦卿と一騎打ち（後書き）

「あーあ、俺の出世は閉ざされたな・・・・・・・・・・」
「よぅ、馬鹿兄貴。戦する気なくしたけどどうする？」
「弟かとりあえず後ろ下がって酒でも飲みながら戦見物かね。」

「おい、お前・・・・・・・・・・・・・・」
強力兄弟の睨みで声を上げかけた貴族は道を譲る。

「弟よ、この戦どっちにかける？」
「ここだけで考えるならば数の多い貴族連合だろうな、でもその後の報復とか考えると黒髪孤児のほうが勝つんじゃね兄貴。」
「賭けにもならんか・・・・・・・・・・」
「だな。」

「後は戦の落とし所だな。」
「それはお偉いさんが考える事だから俺たちは酒でも飲んでようぜ。」
「俺達の働く分は片付けたしな・・・・・・・・・・」

強力兄弟の会話。

戦始末と燕麦卿（前書き）

作者が投稿しないときは酔いつぶれて寝ているか、引き抜きの酒盛りに連行されていると思ったほうが良いぞ。

あらすじ　一騎打ち連戦、どこのバトル漫画だよ！

戦始末と燕麦卿

幼女兄が意識を取り戻した・・・・・・・・・・・・・・・

まぁ、無茶をやりやがって愚民の分際で貴族様に大人しく守られていやがれ。

お前の痛みが男娼達にも襲い掛かることを自覚しろ！

「ううっ・・・・・・・・・・・・これはこれで・・・・・・・・・・・・」

「気にしなくて良いよ。」

「兄さん達ごめん・・・・・・・・・」

「気にすることはない。」

「世界の理不尽さを考えれば問題ない・・・・・・・・・・・・・・・」

「えっと、だんな。この三人だけ別世界に思えるのですが。」

「深く考えてはダメだぞ孤児弟・・・・・・・・・・・・・・・」

「これはこれで美しい世界ですわ。」

「お嬢、こんなときまで腐らなくても・・・・・・・・・・・・・・・」

「裸鎖、苦労するなぁ・・・・・」

「王室顧問、お嬢も小さいころは本当に愛らしい者だったのに何でこんな・・・・・・・・・・・」

「いうな、辛くなるぞ・・・・・・・・・・」

「御姉様もこれがなければよいんだが・・・・・・・・・・・・・・・」

「これが私なのよ！」

馬鹿な話はさて置き・・・・・

そう決戦といこうかそれとも時間稼ぎをするか・・・・・・・・・・・・

「おいらが出ます！」

「孤児弟、無茶よ！」

「馬鹿なことを言うな！大将が前線に出るのはどうかしているぞ！」

「おいらはお飾りですが、それでも前に出ないといけないと思う。旨く説明できないけど一番最初に血を流して一番多く血を流して一番最後まで血を流すのがおいらでないとおいらがおいらを許せない・・・・・・・・・」

孤児弟は短剣を手に前に出る。

それに対するのは

「では、この燕麦男爵がお相手いたそう。黒髪孤児準爵よ、別れの挨拶は宜しいか？」

「男爵こそ、おいらみたいな子供に負けて後で言い訳を考える時間がないと思うのだがそれは大丈夫なのかな？」

「口だけは回るようだな、これが王都の流儀か？」

「言葉は世界の潤滑油ですよ。」

「ふっ、面白い事を言う・・・・・・・・・・」

大人と子供の戦いである。それでも孤児弟は一歩も引かないなぁ・・・・

「御主人様、孤児弟は御主人様と共に修羅場を潜り抜けてきたのですから胆力だけはありますわ。」

「胆力自体は元から備わっていただろう。後はどれだけやれるかか・・・・・・・・・・」

私は孤児弟に近づいて話をする。

「孤児弟勝算はあるのか？」

「相打ち狙いが良いとこだと思う。」
「まぁ、良い。負けてもいいから生き残れ！死んだらダメだぞ。」
「これは祝福ですわ。」
公爵令嬢がすっと来て孤児弟の頬に口付ける。
「そこまで期待されたら勝たなくてはならないんじゃ・・・・・・・・」
「まぁ、がんばれ。後のことは任せろ。」

律儀に待っていてくれている燕麦卿。
「別れは済ませたか？」
「準備は出来た。いざ・・・・・・・・・・・・・・・」
孤児弟は短剣を片手に突っ込んでいる。
突撃にあわせて燕麦卿が長剣を振り下ろすが孤児弟は体を半身傾けただけで軌道から避ける。
その出来た隙を狙ってわき腹を切りつけるが皮一枚しか切れてない・・・・・・・・・・・・・・・
いな、鎧に少しの傷をつけた程度だ・・・・・・・・・・・・・・・
「体捌きが巧いが悲しいかな子供の体では俺を貫くまでいかないか・・・・・・・・・・・・・・・・」
「はぁはぁ、護衛官よりトロイから何とかなるか・・・・・・・・」
「なるほど、王都の処刑人の剣をかいくぐって生き延びたというのは伊達じゃないのか。」
「もし、おいらが負けたら素直に王都まで帰るよ。」
「そんな大盤振る舞いでよいのか？」
「おいらよりも戦いに慣れてあくどいのがいるから、そいつ等が来

るんじゃない？」

「なるほど、例えばお前の師父にして悪逆非道の王室顧問とかが出るわけだ・・・・・・・・・・　あの悪魔と対峙するくらいならば今ここで査察を受けたほうがよさそうだな・・・・・・・・・」

「今からでも受けませんか？」

「まさか、やっと体があったまってきたのにか？」

こいつは戦闘を楽しんでいるのか？

今度は孤児弟が自分の間合いに入って短剣を振るっては下がり振るっては下がりを繰り返す。

ちょこまかと動く孤児弟に振り払うかのようにを動かすが孤児弟に当たらない・・・・・・・・・・・・・・・

おや、城館のほうが・・・・・・・・・・人の気配が？

孤児弟は短剣を振るって当てていくが、軽鎧に阻まれて致命打とならない。

「見たこともない戦い方だな。」

「荒野の民と奴隷戦士とその他諸々の戦い方を教わってましたので・・・・・・・・」

「なるほど・・・・・・・・・・・・・・・」

孤児弟は短剣を両手に装備して二刀流となる。

「ふむ、戦場で二刀を振るう話を聞いたことがあるが、貴様にそれが出来るのかな？」

「付け焼刃だけどね・・・・・・・・・・・・・・・・・」

燕麦卿が切りかかると孤児弟が避け左右の短剣から連撃が走る・・・・・・・・・・・・

気配が・・・・・・・・・
城館の壁から人の頭が引っ込むのが見える。
腕は三流だな・・・・・・・・・
其処から弓の頭が見えている・・・・・・・・・・・・狙撃か？

ひゅん！

張り詰めた弓から解き放った矢は一直線に孤児弟に向かって向かう。
孤児弟は城館に向かって背を向けているためか狙撃には気がつかない。
仕方ないか・・・・・・・・・・・・
私は射線上に割り込むべく急ぐ・・・・・・・・

がっ！

左肩に熱を感じる・・・・・・・・・・・・・・・間に合ったか・・・・・・・・・・
あまりの痛さにうずくまる・・・・・・・・・・・孤児姉が私を支えてくれるが体格差からか押しつぶされそうになる。

私の異変に気がついた連中からは城館に向かって色々飛ぶのだがあたらないようだ・・・・・・

そんな異変にも気がつかず孤児弟は二本の短剣を振るいつつ懐に飛び込んで喉に向かって突き出すが、燕麦卿も孤児弟の首筋に剣を当てる。
両者寸止めでにらみ合う・・・・・・・・・・・・

「相打ち・・・・・・・・・・・・距離の違いから言っておいらの負けかな？」

「俺の負けだ・・・・・・・・・・」

燕麦卿が孤児弟に後ろを見るように首を動かすと孤児弟は短剣を引いて後ろを振り向く・・・・・・・・・・・・・・・

其処には左肩を貫かれた私の姿があった・・・・・・・・・・・・

「だんな！」

「心配するな、命には別段支障ない！！」

貴族連合側も唖然としている・・・・・・・・・・・・

一騎打ちの最中に狙撃するなんて・・・・・・・・・・・・

公爵令嬢は異変に気がつかなかったことに悔しい顔をしている。

気にする事ではない、従者にして弟子にかかる災難お一つや二つ我が身で受け止めるくらい出来なくてどうする。

ああ痛い・・・・・・・・・・・・・・・

燕麦卿は剣を鞘に収めると

「流石に面子を潰されてまで戦うつもりはない・・・・・・・・・・・・・・・」

と下がる。

他の貴族も呆れて構えを解いてしまうもの、あいも変わらず攻撃しようとする者、逆に城館に突撃をかまそうとする者がいる・・・・・・・・・・・・・・

戦場において油断するのが悪いといわれればそれまでだが・・・・・・・

一騎打ちは戦士の浪漫なのに邪魔するのは礼儀知らずで下品な行為とされる。

流れ矢とかは仕方ないが、しっかりと狙撃するなんて・・・・・・・・・

私もやるから文句は言えないけどね・・・・・・・・・・・・・・

「御主人様も貴族だったはずですが・・・」

「でも戦士ではないからね。文官だし・・・・・・・・・・」

「王室顧問矢を抜きます・・・・・・・・・・・・」

自由戦士が貫通した鏃を切り落とし矢を引っこ抜く。

あまりの痛さに顔をしかめるが気にせず処置をする。

孤児姉は私が暴れないように抱きついて抑えている・・・・・・・・・・

矢が抜かれてからは裸鎖が火酒を吹きかけていく。

酒が勿体無い・・・・・・・・・・

「王室顧問、そんなのんきな・・・・・・・・・・」

「こんなときに飲んだら血が止まらなくなりますよ！」

他の戦士達は城館に向かって其々の攻撃をする・・・・・・・・・・・・

時々矢が放たれるがどれも致命打にならない！

貴族連合は攻撃する気をなくしたようだ。いや、何人か飛び出したのがいたのだが即座に叩きのめされてうめいている。

手足が折られているが命には別状ない・・・・・・・・・・・・これは情けか？

「いえ、けが人がいれば助ける手が必要ですし痛そうなところを見たら怯えてしまうでしょう。」

「あれでは剣は二度ともてないでしょうな・・・・・・・・・・・畑仕事にも支障が出るだろうって・・・・・・・・」

作付頭あくまでも農作業優先なのだな・・・・・・・・・・・・

私は痛みで意識が飛びそうなのだが両脇にいる可愛い従者たちに支えられながら戦場を眺める。

城館は開かないし千日手だな・・・・・・・・・

救いは貴族連合からの攻撃が散発的でほぼ傍観となっていることなんだが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「戦士の流儀に無粋な横槍を入れる馬鹿にはこの御姉さまがお仕置きしないといけないかねぇ・・・・」

大使夫人が恐ろしい形相でにやりと笑っている・・・・・・・・・・

「お姉さまなんて自称にしても酷い！」

「黙りな！」

正当な（？）突っ込みを入れた極北戦士の一人を掴んで城館に向かって放り投げる。

放物線を書いて城館の敷地内に放り込まれる極北戦士！

「この糞婆！俺は砲弾じゃなーーーーーい！！」

声は遠くなりながら消えていく。
大使夫人は極北戦士を次々につかんでは城館に向かって放り投げている。

「うわぁぁぁーーーーーーー！」
だの
「ぎゃーーーーーー！」
だの
「ははははっ！！上空からの攻撃を防げるかな？」
なんて声を上げて投げ入れられていく・・・・・・・・・
そして城館の中から悲鳴が・・・・・・・・・・
「うわぁぁぁ・・・・・・・進入されたぞ！向かえウテェェェ！！」
「糞！こいつ等強い！！」
「貴族連合はどうした！！」
「うでがぁぁぁ・・・・」「ままぁあああああ！！」
大使夫人は次々に投げ入れる。
最後に瓦礫の下に埋まった極北戦士(もろだし)を掴むと力いっぱいぶん投げる！
いままでより勢いがついているが

どこっ！とか
べこっ！　といった音がしない・・・・・・・

べちゃ！　という湿った肉打つ音がして
「いやぁぁっぁぁぁぁっぁぁぁぁっぁぁぁぁっぁぁぁぁっぁぁぁぁぁっぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

という城館の中のものと思われる悲鳴と
「ぐえぇぇっぇぇぇぇ・・・・・・・・・・・たまがたまがぁぁ
っぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・！」
という涙声が・・・・・・・・・

何が起こったかは気にしない方向で・・・・・・・・・・・・

平然と大使夫人が一言
「極北人間砲弾！！」

おい、それまずくないか？
ああ、痛い・・・・・・・・・
「御主人様傷は深いですしっかり・・・・・・・・・」
孤児姉・・・・・・・動転してるな。

戦始末と燕麦卿（後書き）

今宵は酒が切れたのでこれまで。

戦始末と落城記（前書き）

わたしは子爵様の城館の侍女として雇われたのですが、背の低さからか皆から愛玩物認定されているのが悩みなのです。

父方の曾祖母に岩小人（ドワーフ）の流れを汲んだのが原因なのか、曽祖父の先祖が鬼族系の流れを汲んでいるのが原因なのか、母方に草原小人の流れを汲んでいるのが原因なのか・・・・・・・・・・・・・・

金も要らなきゃ男も要らぬ・・・・・・わたしゃも少し背が欲しい・・・・・・・・・・

って、金も男（良い男限定で）欲しいです。

背も欲しいですけど家族全員背が低いので諦めています。

たまには見下ろす事をしてみたい・・・・・・・・・・

そんなことをぼやいたら、守備隊長が肩車をして

「高い高い！」

等としてくれました・・・・・・・・・・・・・・

一応、年頃の娘に対して高い高いはないだろうと思うのですが、皆生暖かい視線で見守ってくれたのは悲しい思い出です・・・・・・・・

本当、背が欲しいです・・・・・・・・

それはさておいて、うちの子爵様。

侯爵様の子息であるのですが王都でやからしたらしく都落ちしてこの城館で引き篭もっているのです。

なんでも法務官という悪辣な輩が地位を譲るからといって仕事を押し付けたらしいのですがその仕事がとても大変だったらしく、心が折れてしまったそうで・・・・・・・・

この城館にいる間も夜な夜な悪夢にうなされているそうです・・・・・・・・

そんなある日、この子爵様が治める領地が不作で流民を出す羽目になってしまって査察が入る事になったそうなんです。

査察自体はどこの貴族領にも入る事はあるし、書類をちゃんと作っていくばくかの賄賂を渡せば穏便に済ませてくれるらしいのですが今回来るのが子爵様の天敵の法務官が手塩にかけて育てた査察部隊らしいのです。

穏便に済まそうにも大貴族の皆様方や王族の歴々の方々まで泣きが入っても許さない容赦のない査察が売りらしいのです・・・・・・・・・・・

子爵様は近隣の親族達に声をかけて城館に近づけないよう用意をするのですが・・・・・・わたしが思うに普通に査察受けて流したほうが楽だったんじゃないかと・・・・・・・・

街を行くたびに餓死した者の屍骸を目に付くしわたしよりも遥かに小さい子供が春を売って生活の糧を手に入れざるを得ないというのはどうかと思うのですが・・・・・・・・

まぁ、城館で三食昼寝付の侍女生活を送っているお気楽娘の言う事ではないのですが・・・・・・・・

なんだかんだで査察部隊が城館の前に来ました。

普通査察なんて数人ですむのに如何して数十人もいるのでしょうか？

しかもどう見ても筋骨隆々の戦士たちとかこいらではめったに見られない人馬一体の荒野の皆様とか伝説の自由戦士様も参戦しているではないですか・・・・・・・・・・・・

この査察部隊どこまで本気なのか分からないです。

それを率いているのが黒髪の可愛らしい男の子。

わたしより背が低くて、撫で回したい・・・・・・・・・・・って、いうか弟に欲しい！

弟もわたしと同じ流れを汲むのにわたしよりも頭二つ分大きいし、その彼女もわたしよりも遥かに大きくてわたしを見るたびにお人形か何かと勘違いしているし・・・・・・・・・・・・・・小姑としては威厳がないのが・・・・・・・・・・・・・・・

失礼しました。

本当に背が欲しい・・・・・・・・・・

それは兎も角上官を囲むひとたちはどう見ても一般人じゃないです。

壱犯人です・・・・・・・《前科的な意味合いで》

門は堅く閉ざされて最低限の見張りを残しておく深くに篭っていますがたまには外の空気をすいたくなるのです。

城門付近を散策していると門番さんが危ないから中に入っていなと小さな子ども扱いするし（飴玉貰いました）

護衛の皆さんも何かあってからじゃ遅いから中にいなさいと忠告してくれるのです（焼き菓子を貰いました）

そんな馬鹿なと思って、城門前を散策していると突如上空から人が降ってきました。

人が降るなんて冗談かと思われるでしょうが、空から筋骨隆々の毛皮の男達がひゃっはーといいながら落ちてくるのです。

すごいなぁ、と場違いな感想を抱いているうちに空から降っている男達は壁にぶつかって血の色をしたシミを残して襲い掛かってくるし、何の怪物たちなんだろうかと他人事のように見物していたら、わたしのところにも男が降って来ました。

他の男たちは服を着ているのに如何してわたしのところだけ下半身裸なんでしょうか？

結構立派なんですがふにゃふにゃで・・・・・・・・おっと、乙女らしからぬ事でした。

思わずわたしはぶん殴ってしまいました・・・・・・・・・・

当たったのは筋肉とも腹筋とも違う微妙な感触で・・・・・・・・・・気持ち悪かったです。

殴る瞬間思わず目をつぶってしまったのですが目を開けると股間を押さえてうめいている男と唖然としている皆さんの姿がありました。

この下半身もろ出しの男はきっと色々乙女であるわたしの口から言えない事を即出来るように準備していたに違いないです。

それを思ったら、つい悲鳴が出るのは乙女なわたしには仕方がないことだと思います。

戦争というのはそういうことを引き起こしやすいとおじちゃんは言っていたし、気をつけないといけないよと侍女頭さんが教えてくれたし・・・・・・・・・・・・

こういう場合は・・・・・・・・

女の敵には容赦してはいけないよ、まずは無力化してから股間を潰すと大人しくなるから其処から思う存分料理しなと死んだお祖母ちゃんが教えてくれたからそれに従いましょう・・・・・・・・・・・

まずは、股間を潰すですね・・・・・・・・・・・

ちょうど良いところに棍棒が・・・・・・・・・・・・

ちょいと重たいですね。

皆さん、何で唖然としているのですか？

この棍棒を股間に向かって・・・・・・・・・

ちーん♪

如何して敵味方そろって恐ろしいものを見る目で見るのでしょうか？

まだ潰れていないようですね。

何度か叩いてみますか・・・・・・・・・・・・・・

如何して止めるのですか門番さん。
護衛隊長も如何して棍棒を取り上げようとするのですか?

敵は撲滅するのでしょう?
乙女の敵は死ぬことですら救いと思えることをしないと・・・・・・・

もう一度棍棒を倒れている男にたたきつけると

敵味方股間を押さえてさがっている。

護衛隊長が戦っていた男にあれは見たくないと目を背けたらダメかと聞いている。

あれ?
どうして戦わないの?

空から降ってくる男なんて変態に決まっているからつぶしちゃっていいんだよね・・・・・・・・・

わたしの変態駆除は始まったばかりだ。
だから護衛隊長に門番さん止めなくていいってば・・・・・・・・・・

戦始末と落城記

極北戦士が門を開けたとき其処にあったのは混沌とした状況であった。

股間を押さえて悶絶している極北戦士（もろだし）。股間めがけて棍棒をを振るい続ける小柄な侍女。
それを止めようと奮戦しながらも壁のシミになっている敵味方の男達・・・・・・・・・・・・・・

小柄な侍女の説得は公爵令嬢に・・・・・・・・・・・・・
あれ、オチタ・・・・・・・・・・・・
更に孤児弟が、大丈夫だよと棍棒を持つ手を握り締めて、ニコッ！
としたら
小柄の侍女は棍棒を落として孤児弟と公爵令嬢に降参する。

これでどうするの？

そうしているうちに城館のかなから子爵があらわれる。

私の顔を見るたびに目を背けて逃げだそうとするのはどうも許せぬな。
わたしが一歩を前に出すと

「ひいいいいいいいい！！」

まぁ、混沌だった・・・・・・・・・・・・・

極北夫人・・・・・・・・・・・・
「大丈夫、その手のことは私が許さない。」
「そっちじゃなくて汚い壁画なんだが」
「後で人を寄越すよ・・・・・・・・・・・・」

小さな侍女ちゃん大丈夫だから・・・・・・・・・・・・・・
そんな見ているほうが痛そうなことを・・・・・・・・・・

極北戦士（ふりちん）が泡吹いて倒れているよ・・・・・・・・・・・・・・・・

「御主人様強姦魔と勘違いされたのでしょう。」

「そうかなぁ・・・・・」

これにて戦は一段落。

戦始末と落城記（後書き）

酒がまずかったのでこれまで。（銘柄は言わないよ）

すいません、本文が思い切り短いです。

戦始末と書類審査（前書き）

あらすじ　作者は買った酒がまずかったので飲みなおし。

やっぱ、醸造アルコールは最悪だね。

メタノールのほうがましだ。

戦始末と書類審査

さて、半狂乱となっている子爵様（笑）は放置して、武装解除してもらいましょうか。
外にいる貴族連合もあきれ返って闘争意欲なくしているし・・・・・

って、奴隷戦士たち何をしたの？
「王室顧問様、ちょっと商会公の名簿を読み上げただけなんですが・・・・・・・・・・・・」

酷い、酷すぎる・・・・・・・・・・・
それは貴族の心臓を掴みあげる魔の呪文だ・・・・・・・・・・・・・・
借金の取り立て勅書を他者に渡すなんて・・・・・・・・・・・・・・商会公、恐ろしい子！

「だんなだんな、怪我して錯乱しているのは分かっているから落ち着いて・・・・・・・・・」
「御主人様、意識を失うようでしたら私が代わりにこの子爵様を細切れに致しましょう。」
孤児姉、心配しなくていいよ。細切れなんて食わない者を無駄に殺さないの。

「失礼致しました。」

可愛いなぁ・・・・孤児姉は

とりあえず書類を改めましょう・・・・・・・・・・・・
私は男娼信徒達に痛み止めの祝福をしてもらい、書類を改める・・・
・・・・・・・

出るねぇ・・・・出るねぇ・・・・・・
どこをどうすればこんな計算が出来るのでしょうか？
ねぇ、ねぇ、元法務官の子爵様。教えていただけるかな？

「だんな、子爵様泡吹いて倒れているけど・・・・・・・・・・・・・
」

「となると侯爵様においで願うかね・・・・・・・・・・・」
「どうするんだい？」
「この肩にかけて全力で力押し&ａｍｐ；商会公も隊商にちょっかいかけられたから兵糧攻め・・・・・・・・あーんど、性愛神殿の破門回状・・・・・・・・・・・・」
「えっと、王室顧問様・・・・・・・・・・・この侯爵領をつぶす積りで？」
「回答次第でね・・・・・・・・・・・・（邪笑）」

ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ・・・・・・・・・・・・・
・・・

あのぅ、青麦領の皆様其処まで引かなくても・・・・・・・・・・・・
・・・
「だんな、領民皆殺しみたいな事言ったらひくって・・・・・・・・・・
」
「黒髪孤児準爵様・・・・・・・・・・・・お助けください・・・・・・・・・・
・・・・」

其処の侍従に会計・・・・・・・・・・家令まで・・・・・・・・・・・・・・

「御主人様鞭と飴です。」

そうか、では私が悪人をすればよいのだな・・・・・・・・・・・・

うーんと

「では、この子爵様を私の後釜として私以上の仕事をして貰って・・・・・・・・・・・・・　民の飢えた部分の保障として・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

如何して、子爵領の皆さんどうして悪魔を見ているような目で見る

のですか？
「だんな、いくらなんでも其処まで要求するのは鬼でしょう・・・・・・・・・」
何を言うか孤児弟私はれっきとした人族だよ。

「御主人様、尻尾が見えてますよ。」
おっと、　尻尾が隠しきれなかったか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「だんな、やっぱり悪魔の流れを・・・・・・・・・・・・・・・」
「何を考え違いしているのかな？孤児弟、これは王都で買ったおもちゃだよ。【悪魔セットの指輪】これを装備して念じると尻尾が出てくる冗句玩具だよ！」
「まさか態々・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「勿論！」

孤児弟がへこんだ・・・・・・・・・・・・・・・

さぁて、書類仕事は楽しいな。特に他人のあら捜しは・・・・・・・・・・・・・

後は貴族連合も叩いてみるかな・・・・・・・・・・・・・

「すいません村一番の娘っこ出しますので・・・・・・・・・・・・・・」
「敵対したのは謝罪しますので・・・・・・・・・・・・・・・・・」

何か私は悪人だな。

戦始末と書類審査（後書き）

適当に今宵はこれまで

戦始末と貴族共（前書き）

賢者様は私達を民を守る盾になれと戦場から送り出してくれた。
のろのろと進む馬車の群れ、痩せこけた人達が放心したように荷物になっている。

不作で領地全体がボロボロ、親しい人が死んでも何も出来ない状況で戦が始まるでしょう・・・・・・・・・そして故郷を捨てざるを得ない状況なんて・・・・・・・・・・
壊れてしまうのは十分分かる。

これはいつかの私達だ・・・・・・・・・・・・

そんな中で孤児弟が保護した幼女の同郷がいる馬車にむかった。

綺麗な服を着たお嬢様達が着て下さってどうしたと怯えているけど、怯えられるような事した覚えないんだよねぇ・・・・・
それでも一言二言話していると幼女や子供達が今どうしているかとか誰が生きて誰が死んだとか・・・・・・・・・・・・
皆話に食いついてくる、死んだ子の親は泣きながらも亡骸を弔ってくれてありがとう御座いますとお礼を言ってくれている。
生きている子供達の親兄弟親類たちは王都で何不自由なく保護されて言う事を聞いて嬉し涙を遠慮がちに流している。死んだ子に遠慮しているのかもしれない。村全部が親戚みたいだと言っていたし・・・・・・・・・・

もし、許されるならば生活が再建したら迎えにいきたいと・・・・・・
本気でお願いされてしまった。

でも賢者様が言っていたなぁ・・・・
如何して子供達だけで旅立たせたのかと！

これは子供を捨てる事じゃないのか？
大人がついていけば旅路も楽に進めただろうに・・・・・・・・・・・・

ここで反省して親子ともども幸せに暮らしましたとなればよく出来た御伽噺だけどどうしたらいいのかなぁ・・・・・・・・

如何して捨てたのか憤りを感じているのだが、それをしたらこの人たちをぼろくそに詰ってしまいそうになる。

子供のわたしに上手に伝える術がない、言葉ってもどかしい。

そうして進んでいるうちに皮服の荒野の民、腰巻をつけた奴隷戦士、様々な種族で構成された人外兵団・・・・・・・・・そして、煌く白銀の軽鎧に古の言葉で【叫び上げたる幼子の言葉を聞いてその身は何をする？】と縫い付けられた戦外套（サーコート）を纏った聖域守護辺境伯私兵団の姿が・・・・・・・・・・・・

私達の姿を認めるなり、３公爵と辺境伯様が私達の元に来て痩せこけた人達の群れを見る。

その惨状に怒りを隠さない様子。

研ぎ澄まされた刃のような皮鎧の男にに巌のような古強者、一目でどこの種族とも取れない得体の知れない人外戦士・・・・・・・・・

その中で白銀の鎧に憂いをたたえた瞳、闇の色を切り取ったかのような戦外套（サーコート）には【我が懐は絶対不変の聖域也】と刺繍されている。

如何して公爵より位が低いはずなのに王者の風格が出ているのかなぁ？

そんな関係ないことを考えていると、公爵達はみすぼらしい人達を見て高らかに叫びを挙げる！

「そは嘗ての我等が姿！」
「幸いにも剣の名誉を得た今でもいつかはなるかもしれない姿」
「嘆きの詩で世界を包み、涙の海で世界を潤すなどと」
「人の子の正義が許すなら」
「諸々の民が許すなら」
「神々が祈りに応じないならば」
「「「我等、虐げられし命！古の誓いにより」」」
「否！我が内より沸き起こる義憤により」
「否！幸いを願い狼煙を上げた家族の叫びに応じて！」
「否！我等が苦難を誰かに味あわせないために！」
「「「今我等個人の想いから世界に対して叫びを挙げよう！」」」

「この苦難に愛し人々の群れを幸いに導くために」
「苦難与えし誰かに報い与えるために」
「世界に馬鹿がいることを示すために！」
「「「高らかに叫ぼう貴人（アジール）聖域保護法と！」」」

そこかしこから叫びが上がる　アジール！　アジール！　アジール！

爵位持ちの者達からは
「我等も古の誓いから新たなる災いを振り払う剣とならん！」

だの
「我が剣、幸いならざる誰かのために！」
だの
「我等一群、幸いを求める者の力となる種火とならん！」

更には私達に近づいてきて、飢えた人達のために食べろと滋養に富んだ携帯食料を押し付けたり、傷ついた者為に【生命力附与】で命を削って癒し与える馬鹿・・・・・・・・・

そして、賢者様の兄君で在られる聖域守護辺境伯様は
「我が懐は聖域也！ここを我が懐として古の六剣が内三剣の裔（すえ）の叫びに応じて・・・・・・・・・・否！我が弟の激に・・・・・・・・・・・否、否！名も知れぬ黒髪孤児の叫びに心揺り動かされたが故、世界を覆う理不尽を覆さんと抗わず盾とならぬ愚か者に報い与えるために！　否、世界に対して疑問を投げかける大馬鹿者を見守るために！否！我等が祖が王家に与えた結果、不幸の連鎖を巻き起こしたなぞ美しくない！否！我は見てみたい！幸いを誰かに分け与えて、皆が誰かの幸いを気にかける愚か者の楽園を！否！我が内より沸き起こる幸いを願う声に形をつけるために！」

そこで三公爵と辺境伯様に光が差す・・・・・・・・・・

そこで辺境伯様が血を吐くかのような叫びを挙げる！
「世界の理不尽に泣く者よ！我が懐に至れ！我は絶対不変の聖域也！正しきと思うならば我は不破の剣となり、不壊の盾となろう！」

「さぁ、高らかに叫ぼう！我は貴人聖域法（アジール）の粗なり！古の誓いにより！否！　我が世界よ幸いなれという欲望により！ここで貴人聖域法（アジール）を発動させる。付き従う者達よ！汝等の主達は我侭により汝等を死地に追いやるかも知れぬ。汝等の家族や子孫達に不名誉を負わせるかも知れぬ！それでもついてきてくれるか？」

辺境伯様の叫びに、兵達は
アジール！アジール！アジール！
と叫び続け！
皆地の果てまでも突っ込みそうな勢いだ！

彼等に避難民の皆さんを任せて私は賢者様の元へ・・・・・・・・・・・・
逸る心を察してくれたのか、公爵様たちや御頭首様（あにぎみさま）は私達に足の速い配下をつけてくれました。

私達は竜の背に乗って・・・・・・・・・・・・其々に逸る心を抑えて来た道を戻る。
護衛として出された面々も速度重視の人達だ。

早馬で知られた荒野の民の中で更に足の速い名馬を操る歴戦の勇士達や
【身体強化】を命の危機レベルで自らにかけてついていく奴隷戦士
契約した様々な魔獣に騎乗した人外戦士・・・・・・・・
それに便乗する聖域守護辺境伯私兵団魔術兵団・・・・・・・・・・・・
どう考えても過剰兵力なのですが・・・・・・・・・・・・

「ははははっ！可愛い姪っ子のためにはこのくらい薄いくらいだな。」

「孤児弟は我が家族だ！あれだけの大馬鹿物失わせるには惜しい。」
「古の誓いによりというか・・・・・・・娘が孤児弟を気に入っているからな。」
「孤児姉弟は物怖じせずに我に向き合ってくれた。異形の身としてはそれだけでも嬉しく思うのだよ。孤児弟に会ったら伝えておくれ。また酒でも飲もうと・・・・・・・・」

私達は皆の好意を受けて進むのである。

愛しき賢者様、私達から逃げ出せないことを思い知るのです。

戦始末と貴族共

地の果てから起こる轟音と土煙。

ごごごごごごごごごごごっ！

其処に見えるのは異形の軍団。

親馬鹿な公爵が兵を率いてきたのだな・・・・・・・・・・・・・・・

戦闘には竜に乗った孤児娘達！

孤児娘達は私の姿を認めるなり、竜から飛び降りて私の元に飛び込む！

大分高度があったはずだが、【飛行】の腕輪の効果で怪我一つなく私の胸に飛び込むのである。

いたたたたたっ！

【鎮痛】の祝福がかかっているのだが矢傷には響く。

私に抱きとめられた孤児娘達は私を守るように杖を構えて戦術級の術を解き放とうとするのだが、敵がいないことに気がついて私に抱きつき泣きじゃくる・・・・・・・・・・・・・・・

そういえばスカート姿で空から飛び降りて・・・・・・・・・・・・・

それは我が与えた加護により大丈夫だ！スカートの中身を覗こうとする不埒者は目を潰しておいた。（ｂｙ風の神）

そういう問題じゃなくて、まぁいいか。

左肩は痛いが娘達の手前、見栄を張るか・・・・・・・・・・・・・・・

「孤児娘達、御主人様の左肩は傷ついていますので抱きつくのは程々に・・・・・・・・・・」

「孤児姉ちゃんそれ本当？」

「誰が？」「殲滅しないと！」

物騒な事を言う孤児娘達をなでながら（右手限定で）落ち着かせる。

それに対して膨れる孤児姉。おねーちゃんなんだから我慢しなさい。

「・・・・・・・・・・・・・・・むぅ」

膨れる孤児姉、可愛い者だ・・・・・・・・・・・・

でも、この過剰兵力は意味ないよ。

「いえ、賢者様に襲い掛かるものを払いのけるには・・・・・・・・・・・・」

「其処の王弟とか・・・・・・・・・」「子爵もどきとか・・・・・・・・・」

「「「その配下とか・・・・・・・・・・・・」」」

今すぐに攻撃命令を出しそうな孤児娘達にたじろく周り。

別にいいだろ。好き勝手やって、適当な命令で民草に無体をしいて損なったんだ。

覚悟は出来ているのだろう・・・・・・・・・・・・・・・・

「だんな、だんな・・・・・・・・・・・・半端に処分したら見せしめにならないから、ちゃんとけりつけてからにしないと・・・・・・・」

「そうか・・・・・・・・・・・・・・」

孤児弟は良く判っている。王族貴族は拷問の上で・・・・・・・・・・・・・・

「おい、王室顧問！」

うるさいな王弟(はげ)殿下！

「俺をはげというな！って、言うか何をする積りだ！」

「なにって、無体する貴族に対して制裁をしてそれを見逃した王族を処理するだけだが・・・・・・・・・・・・・・・」

「処理って・・・・・・・・・・・・」

「全滅させた上で、髪の毛をむしりとった王弟を王位につかせる。」

「全滅は許すけど、俺の髪の毛をむしるのは許さん！」

「残り少なくてみっともないからむしりとって綺麗にしたほうがよいだろう。禿が！」

「禿げ言うな！」

「実際禿だろう！奥方泣いていたぞ！禿げ結婚なんてと・・・・・・・・・・・・・・」

うなだれる王弟(MO)殿下！

これはそのまま放置、軍監といっても力量がないから意味がない。

かといって、他の王族だと血祭りに挙げられたりするからなぁ・・・・・・

流石に末王女に無体するのはいないだろうけど・・・・・・・・・・・・・・

あれも、孤児弟が撫でれば落ちるし・・・・・・・・・・・・

さて、書類整理としゃれ込みましょう・・・・・・・・・・・・・・・
ちなみに私は左肩痛いから補助よろしく。
「はい、御主人様。」
何時もいつも愛い奴じゃな、孤児姉は

書類整理を孤児娘達と行う・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
勿論子爵様（笑）と共にである。
この数字はとかこの案件はとか聞くと答えられないで体たらく・・・・・・・・・
本気で吊るしたくなるのだが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
侯爵様に教育について語りたくなるのは私の偏見だろうか？

「だんな、あんたの教育とやらは普通ついていけないから・・・・・・・・」
孤児弟は自分が普通じゃないと認めている気が・・・・・・・・・・・・・
「普通でいたかったのに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「普通って何だ？」
「なんだろう？」

頭を抱える孤児弟に優しく頭を撫でる公爵令嬢・・・・・・・・・・・・・
お前も仕事しろ！
「あら、私は書類仕事苦手ですわ！」
堂々というな！

「御主人様公爵令嬢は血筋的に脳みそ筋肉ですから。」

「そうだったな、それは悪い事をした。」
「ちょ、ちょっと！」
「だったら、仕事で違うと証明しろ！腐った本読んでないで！」
「腐ってなんかないわよ！崇高な愛の物語ですわ！」
「はぁ？仕方なく体を売って、傷を舐めあっている幼女兄とかをみて素晴らしいという方はわれらと違う感性を持っているようですな！」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「彼等は幸せな結末を得ているだろうけど、その前に不幸を得ているのだ！それをどう考えるのかな？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
沈黙した公爵令嬢（ふじょし）を放置して、書類整理にかかる・・・・・・・・・
「賢者様、不作救援基金が・・・・・・・・・・・」
孤児娘の一人の声に確認する・・・・・・・・・・
これは酷い・・・・・・・・・
「会計君・・・・・・・・・」
「えっと、私は用事を思い出しました・・・・・・・・・・・」
「捕らえろ！！」
会計氏はすぐに捕らえられた。
とりあえず家族を並べてやろうと思ったのだが・・・・・・・・・・・・・・・
「だんな、一族郎党潰す積りですかい？」
「それもありだろう。」
「そんな乱暴な手段とらなくても・・・・・・・・・・・・・・・」
「ではどうするのか？」

「見ていてください・・・・・・・・・」

孤児弟は会計士の耳元で何か囁くと会計氏はうなだれて白状し始めるのである。

上の侯爵付の会計とか家令とかが絡んでいるから断れなかったそうで・・・・・・

って、孤児弟何を言った？

「いやぁ、娘さん可愛いですよねぇ・・・・・王兄殿下（ロリコン）付の侍女に推挙しましょうかと・・・・・・・ついでにその弟君も王妹殿下（ショタコン）付の小姓に推挙（略」

「それは人としてやっちゃいけないだろ！！」

「あら、そんな可愛い子がいるならば私が欲しいですわ。」

「御姉様・・・・・・・・・・・・・」

孤児弟のジト目にたじろく公爵令嬢。

「え、えっと・・・・・・・・・・・」

「一緒に仕事しましょう。教えますので・・・・・・・・・・・・・・・」

一緒に机に座らされた公爵令嬢、孤児弟は仕事を教えていく・・・・・・・・・・

凄い、遠慮なくこき使っている・・・・・・・・

会計もなんか一緒になってこき使われている・・・・・・・・・・・・・・・・・

以外と孤児弟って人使いが荒かったんだな。

別にいいか・・・・・・・・

「だんなも手伝ってください！」
おやおや、私もかね・・・・・・・・・・けが人で安静しないといけないのに・・・・・・・・・・
「ううっ！」
守ってもらった負い目があるのか強く出来れない孤児弟をからかいつつ私は書類の精査に勤しむのであった。

ほらっ！其処の王弟(はげ)殿下お前もてつだえ！

我等は極北戦士をたこ殴りにした小柄な侍女が茶の用意をするまで仕事に勤しむのであった。

ところで孤児娘達は？
貴族達の書類の面倒を見ているのであった。
「ううっ・・・・・・・・・・・・・数字が数字が・・・・・・・・・・・・・」

貴族たちに幸あれ。

戦始末と貴族共（後書き）

この騒動のけが人とかは基本的に良く効く傷薬（奴隷戦士団持込）のお世話になるのだった。

聞くけど痛覚が倍増とか・・・・・・・・・・・・・・・

子爵城館に悲鳴が途切れないのであった。（敵味方関係なく）

「強力兄様薬を処方いたいます。」

「い、いや・・・・・・・唾つければ治るから・・・・・・・」

「いえ、ちゃんと治療しないと・・・・・・・・・・・」

「ま、待て・・・・・・・・・・・・うぎゃぁぁぁっぁぁぁぁ・・・・・・・・・」

「そういえば兄貴、この薬染みるから嫌っていたなぁ・・・・・・・・・・」

しかし悲鳴でうるさい！

一番悲鳴を上げたのが極北戦士（もろだし）そもそも彼が生きていたのが不思議である。

さすが極北の民神秘である。

神秘扱いしないで欲しいが（ｂｙ極北神）

戦始末と強力兄弟（前書き）

青麦侯爵家会計、家令は死罪。
その他従犯数名・・・・・・・・・・　追放刑に処する・・・・・・・・・・

尚、侯爵家については監督不行き届きにより金貨１００枚を罰金として、青麦子爵担当地域を召し上げる。

騒乱に関わった貴族家は、罰金として金貨３枚。
街道筋の自警団については厳重注意、民の保護に対する教育を執り行う事。

死傷者５名（内王弟査察部隊０）
重傷者２３名（内王弟査察部隊３）
軽傷者については記載せず。
酒精中毒１名（内王弟査察部隊０）
過労２０名（内王弟査察部隊３）

某王国　黒髪孤児準爵騒乱事変の判決より抜粋。

戦始末と強力兄弟

さて、片づけが終わりましたし帰るとしましょうか・・・・・・・・

ところで民が帰ってこないのですがどうしたのだろうかね?

「ああ、賢者様。民衆の皆さんでしたら公爵様達と守護辺境伯様が貴人保護法(アジール)と叫びながら連れ去っていきましたよ。」

「そうか、二度と戻ってこないだろうな・・・・・・・・」

「その後も周辺の孤児だの寡婦だの貧農だのごっそり引き連れていきましたし・・・・・・・・・」

「侯爵領周辺は人口激減してますわ。」

「王室顧問、燕麦卿を頭とする貴族達から民の返還に対する嘆願が着てますけど・・・・・・・」

「公爵令嬢、それは君の父君とか我が兄上あたりに直接願いなさいと伝えておいてくれないか?」

「なんでも、軍団引き連れていて会っても貰えないらしくて・・・・・・・・・」

「我が兄上のことだから開墾とか街道筋の整備に使う積りなんだろうな・・・・・・・・・あそこは人手不足だから。」

「まぁ、私の知った事ではありませんね。」

「そうだな・・・・・」

「黒髪孤児準爵、君からも願ってもらえないか?」

「うちの村なんか人口が三割持ってかれて・・・・・・・・・・」

「礼金としてうちの娘で如何だ?」

「俺のところは孤児が何人かいなくなった程度だが、養い親から心配の声が来ているんだ。養い親自体は問題のある人物でないのだが

孤児という事で不幸だろうと連れて行くのはどうかと思う・・・・・・」

「え、えっと・・・・・・・・・・・・・」

貴族たちに囲まれて困っている孤児弟。お前等子供になにをしているんだ！

頼むならば王弟殿下がいるだろう！

「うぇっ！王弟殿下って実在したの？」

「初めて知った！」「あのはげ・・・・・・じゃなくて御仁が本当に王族・・・・・・・・・・」

「「やばい！我等不敬罪じゃない！」」

それ以前に反乱罪とかあると思うが・・・・・・・・・・・・

「それについては査察への無知からの妨害行為と処理しておいた。お前等に任せると血が飛び肉踊る虐殺祭りになりそうだからな。」

「王弟殿下我等のことを勘違いしておられるのでは？私は隠遁を願う道楽貴族ですし、子供達はただの事務官に従者ですよ。ここにいる歴々だって荒野で平和に過ごしている馬の民だとか公益に勤しんだり先祖伝来の仕事についている穏やかな民とか王国の治安維持のために粉骨砕身している奴隷戦士団とかじゃないですか・・・・・・・・・」

「どこにそんなのが居るんだ！世界を巻き込んで騒乱を起こす馬鹿にその弟子達。弟子達も魔王とか竜王とか神々が泣いて逃げ出す鬼会計！王国の財布を握る商会連合に物流と畜産を司る荒野の民、農業生産の一割を占める農園公一門とか王国の総兵力の二割ほどを受け持っている奴隷戦士団とか人外兵団の大群を穏やかで平和を愛する奴等なんだ！」

「おやおや、持っている力だけで平和じゃないというのはおかしいと思いますよ。我等は力におぼれることなく誰かのために振るって

いるに過ぎないのですから・・・・・・・・・・・・そんなんじゃ、心労で禿げてしまいますよ。」
「はげはげいうな！」

心配しているのに・・・・・・・・人の心遣いが分からない禿だ。
「御主人様、王弟殿下は毛髪を気にしておいでなのですからそっと見なかったことにしてあげてくださいまし。」
「そうだな、孤児姉の言うとおりだ。四席、王弟殿下の頭にモザイクをかけてあげること出来るか？」
「・・・・・・・・・・・・王室顧問、それは逆にいじめですよ。ここは普通に鬘を・・・・・・・・・」
「その手があったか。」

「で、何時領民を帰してくれるんですカッ！」
「それは、君達の施政が去った者達に魅力と感じたら自然と帰ってくるよ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「一応伝えてはおくが期待しないでくれ。」

「どうしてこの人達は小火を消すのに街を破壊するようなことをするのだろう？」
「手加減できないからねぇ・・・・・」
「でも、神々も逃げ出す鬼会計って酷いですわね。」
「後で王弟殿下の領地の書類を洗い出して見ましょう。」
「うん♪」

荷物を整理して、侍女達に頼んでおいた衣類を詰め込んで・・・・・・

お土産代わりに子爵（笑）を連れてきて・・・・・・・・・・・・

「だんな、子爵をどうするので？」

「勿論逃げ出す前の仕事をしてもらうのだよ、自分で出来るといったのだから責任とって貰わないと・・・・・・・・」

「その心は？」

「以前だした法務官引退勧告の実行をして私が隠遁生活を行う。」

強制連行される子爵（笑）をみて顔を青ざめさせる貴族達、君達も行く？

そろって首を横に振っている。

遠慮しなくてもいいのに、この数日で君達の書類処理能力が格段の進歩を見せているのだが。

孤児娘達の本気に引いているのだろう。

彼女達は私の可愛い弟子だからな、半端な貴族や王族では太刀打ちできないだろうし。

寧ろ息子の嫁にとか言ってくる貴族がいたのだが、尻に敷かれても良ければ見合いくらいはしても良かろう。

馬鹿息子だったら親ごと潰すけど・・・・・・・・

「王室顧問、親馬鹿発言駄々漏れだぞ。」

「親馬鹿といったら君達の族長程じゃないだろう・・・・・・・・・・」

「それを言われたら返す言葉はないんですけど・・・・・・・・・・・・

危険発言は程々に・・・・・・・・ここは王都じゃないのですから・・・・・・」

「それを言うならば騎馬戦士（モヒカン）をどうにかしてくれ！子供達にひゃはは一！とか叫びながら強制連行遊びとかするし・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・善処します。　あの、野郎！荒

野の民の品格を落としやがって・・・・・・・・・（小声」

やっぱり、騎馬戦士（モヒカン）は問題児だったのか・・・・・・・・・

騎馬戦士（良識派）は騎馬刀（サーベル）を鳴らしながら去っていった。種族特有のがにまたで・・・・・・・・・

そんなこんなで出立日、極北戦士団を含む軍団は先に返している。隊商は他の目的地があるということで護衛隊として馬族だの人外兵団だのを連れて（やとって）旅立っている。

自由戦士（びんぼう）は気ままなたびらしい・・・・・・・・・王弟殿下に仲介して貰って懸賞金を貰ったし、私からの報酬もあるから暫くは食いつなげるだろう。お人よしな事しなければ・・・・・・・・

王弟殿下も軍団と共に帰っている。我々といると心痛で禿げるとか何とか言って。

諦めればいいのに・・・・

今いるのは我等一門と公爵令嬢、、性愛神殿有志一同（幼女兄妹含む）、極北戦士（モロダシ）・・・・・・・・・

護衛を残すの忘れていた・・・・・・・・・

其々の戦闘能力は・・・・・・・・・・・・下手な連中が束になってもかなわないだろうが女子供に貴族様・・・・・・・・・

狙ってくださいといわんばかりだ・・・・・・・・・

誰かいないかな?

そこらへんで所在無さげにしている強力兄弟がいた。
彼等は先の一騎打ちで評価が下がって飼い殺しにされているし持っていっても良いよね。
いいよ（自己回答）

「其処の強力兄弟、共に都に行かないか？」
「王室顧問の旦那、どんな風の吹き回しで・・・・・・・・」
「いやぁ、護衛を残しておくのを忘れてしまってねぇ・・・・・どう見ても無力な女子供に怪我人だけだから獲物と見られてしまうんだよ。」
「でも、どれを見ても一級の危険人物じゃないですかい！」
「その評価は私と可愛い娘たちには当てはまらないが『うそだっ！』・・・・・・・・・孤児弟、話の腰を折るでない。・・・・・・・実際道中物騒だからねぇ・・・・　君達を雇いたいのだよ。君達も先の一騎打ちで出世の道を立たれてしまったろう。」
「そうなんですが・・・・・・・・・・」
「いいじゃねぇか兄貴！王室顧問様が連れて行ってくださるんだ、ただで都見物の旅に行くつもりでいけば。」
「まぁ、報酬のほかに食費くらいは出すけどな・・・・・」

露骨な強力弟の発言に苦笑しながらどうするか聞いてみる。
「・・・・・・・・・・・・うーむ、弟の言うとおりだな。都を一度見てみるか。では、お話をお受けいたしますぜ。旦那！」
「ところで家族とかは大丈夫なのか？」
「まぁ、家に婆が一匹いますが大丈夫でさぁ。」
「ついでだから連れてこい！」
「うるさい婆ですぜ王室顧問様。」
「足手まといとなるんじゃないですかい？」
「構わんよ、細々とした事をお願いしたいしな。」
「街道にいく間に俺達の家があるから先に行って準備してます。兄

貴先にいっているぜ！」
「ああ・・・・・・婆の説得は任せた。」
強力弟が駆け出して家路に向かう。

「王室顧問、行きましょうか。」
美乳の女神官の促しに我等一門も重い腰を上げる。取敢えずは、軍団に追いつく事を考えますか・・・・・・・・
合流すれば諸々の面倒ごとは防げるしな、無理ならばのんびりと各地の見物でもしながら進むのも良かろう・・・・・・・・

「やっと、終わった気がする。」
「王都に帰ったら市場で買い物したいな。」
「傷跡娘と補佐見習はどこまで進んでいるかなぁ？」
「せいぜい市場まで進みましたがいいところじゃない。」
「いえてる。」
「そういえばお土産忘れたけどどうしよう・・・・・・・・・」
「ここは民草の一人もいないですからねぇ・・・・・・皆、公爵様方が連れて行きましたから。」
「途中で買っていけばいいじゃない。大きな町のひとつや二つあるだろうし。」
「そうだね。」

馬車はごとごとゆれていく・・・・・・・・・
子爵城館は私達が去ったと同時に閉じられて開くことはなく・・・・・・・・・

主の帰りを待つのだった。

モガもがもが・・・・・・・・・・《私を放せ！ｂｙ青麦子爵（笑）

≫

戦始末と強力兄弟（後書き）

今は酒が切れたのでこれまで。
４号瓶だと足りないな・・・・・・・・・・

強力兄弟と旅の空（前書き）

あらすじ　孤児弟は査察を完了した。

強力兄弟と旅の空

旅路に出ている我等一同は順調すぎる旅路を楽しんでいる。
強力兄弟の御母堂は何処からこんなごついのが生まれたのかと疑問に思えるくらい小柄な老婆だったのだが、息子達を身の丈よりも大きな棍棒で叩きながら我等の旅路を快適に安全にあるように取り計らってくれる。

私一人ならば別に多少の不便があっても良いのだが、女性陣がいる旅路においてその女性特有の不便さを案じて快適にしてくれる彼女の存在は特に有用である。
寧ろ強力兄弟が・・・・・・・・・

「王室顧問の旦那・・・・・・・・・婆の添え物なんて言わないでくだせぇ・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・旦那、俺達お払い箱ですか？」

別にお払い箱にするつもりはないけど、性愛神殿の女性たちに対して前歴から差別する事もなく紳士的に扱う男性というのはそれだけで十分・・・・・・・・・

それ以前に

「強力のおじちゃん抱っこ！」
「強力兄貴、先日の手の傷は申し訳ありませんでした・・・・・・・・・」
幼女兄妹が懐いているのに無碍には出来まい。

ちゃんと君達がいるお陰で要らぬ騒動が防げている部分があるから気にすることはない・・・・・・・・・・

「すまないねぇ・・・・・・・・・・王室顧問の旦那、うちの馬鹿息子共が無駄飯食いで・・・・・・・・・力仕事でも何でもこき使ってやんな！」

婆様は最強であった・・・・・・・・・・って、強力兄弟を片手でのしている姿を見たら我が目を疑うぞ。
強力兄弟が手が出せないというのも在るだろうが、膂力だけで言えばこの一行の中で三番目くらいだろう・・・・・・・・・・

それ以前に重宝なのが私の肩の怪我の手当てとか世話に関する部分である。
孤児姉が自力で全てこなそうとするのだが、一人では手に余る部分とかもあるとしっても自分を損なってまでも私の世話をしようとする。それは愛しいと思うのだが私の本意ではない。
そこを婆様は酌んでくれて孤児姉に体を休める時間を用意してくれるわけだ。

特に手間のかかる世話という部分はないのだが、従者というか女として世話したい・・・・・・・・・他の誰にも取られたくないという嫉妬心があるのだろう。
其処が孤児姉らしく愛いなと思うのだが、無理をして貰っても困るし私一人に囚われて先を狭めてもらうのは不本意だ。

かといって、孤児娘や性愛神殿の面々だと嫉妬を煽るらしく問題だから婆様が適任だったりする。

流石に私も婆相手に欲情したりしないから。
「そういえば旦那がだれそれ構わずという噂を・・・・・・・・・・・」
「孤児弟、立ったらお前が無事な理由を・・・・・・・・・・・・」
「だんなの趣味に合わなかったとか、育てて・・・・・・・・・・・・
」
世間はひどいことを言う・・・・・・・・・・
「王室顧問、私は判っていますから・・・・・・・・・」
女神官・・・・・・・・・・
「むぅ・・・・・・・・」
孤児姉が膨れている。小さくとも女ということか、嫉妬に胸を焦がすということは・・・・・・・・
「孤児姉、お前は飛び立つ身。私如きにつかまる事もあるまい。」
「いえ、私は臨んで御主人様の元にあります。」
いつもの如く他愛もないやり取り・・・・・・・・・・・・
これを楽しみにしている私も居るということは悟られてはならない。
「この旦那は孤児姉に捕まりそうだねぇ・・・・・」
「かーちゃん、いくらなんでも小さい子に捕まるほど旦那は生易しくないだろう・・・・・・」
「俺もそう思う。この娘たちを大事にしているからこそ、世界相手に喧嘩を売る悪辣な御仁なのに・・・・・・・」
「いいや、これはあたしの女の感だよ。って、言うかお前等も嫁子こさえて孫の顔を見せておくれ！」
強力兄弟も大変だ・・・・・・・・
「だんな、誰か紹介してくださいよ。」

「好みで言えば・・・・・・・・・・」
いい年した男が口説けなくてどうする！
もっとも強力兄弟は性愛神殿の女性達に飼いならされているのだが・・・・・・・・・
力仕事を厭わないし、彼女達の名誉に関わる事には本気で立ち向かう。

あるときなんか街道沿いに出た盗賊が
「使用済みの古道具なんて・・・・・・・・・」
といった途端に盗賊達の中に飛び込んでいって女性に失礼な発言をした盗賊の顎を砕いていたのは笑い話である。

気は優しくて力持ち・・・・・・・・・・後は稼ぐ甲斐性か・・・・・・・
「だんな、それは言わないで・・・・・・・」
強力弟、泣くな・・・・・・・・・・ちゃんと金になる仕事紹介してやるから。
「本当ですかい！ちゃんとした仕事があれば晴れて彼女を口説いて・・・・・・・・・・」

取らぬ狸の何とやら
異界のことわざにあったなぁ・・・・・・

まぁ、婆様の気遣いとか見ればその息子達というのもちゃんとしているのが分かる。
稼げるならば優良物件だろうな。
見た目は悪いが一本気の通った堅い男だ。
でなければ、幼女兄の苦難を知って、味方を叩きのめすことなんてしないだろう。

「このなよなよした子供のことを知って放置したらその根性を叩きのめしたさ。」
婆様は最強である。

一行の女衆は婆様婆様と慕っている。
苦界に落ちた女衆を娘のように慈しんでくれる婆様は得がたい人材だ。
孤児娘達も孤児弟も見たこともない祖母という者を彼女に重ね合わせているのだろう・・・・・・・・・

「おやおや、まいったね。いきなりたくさんの娘や孫に囲まれた気分だよ。」
からからと笑い飛ばす彼女には白旗を揚げるしかない。
気風がよく豪快な婆様に私も白旗を揚げるのであった。

旅路でのある宿、私達一行は宿で食事をとっていたのだがそこは幼女兄が一夜の安息を願う代わりに男達の欲望のはけ口になった場所でもあった。

「ははははは!あん時のガキが今度は貴族様に尻向けて、楽しませてくださいといってやがるぜ!」
「ょぅょぅ、貴族様ょぅ、そんなに囲って大丈夫なんかい?腎虚になる前に俺達に少し回してくれないか?」
「どうせ貴族様は椎の実だろう。俺達のところに来いよ!」

男たちはあくまでも下品であった。
私は下品を否定するつもりはない、私自身下品だと自覚しているからだ・・・・・・・・・・
しかし、これは酷い・・・・・・・・・・
下品さというのは誰もが楽しめる気安さと自らに対する諧謔があってこその嗜みと・・・・・・・・・・・・

そんな中下品な男達に殴りつけたのが婆様である。

殴られた男は壁にたたきつけられて気絶している。
仲間らしい男達は
「この婆！」だの「後悔させてやる！」
等と定型文を発しながら襲い掛かってくる。
そこに立ちはだかる強力兄弟！
下品な事を発した男達をちぎっては投げ！投げてはちぎって・・・・・・・
宿に穴を開ける。

「ぼ、僕に逆らったら・・・・・・・・・僕の父は・・・・・・・・・・」
等とほざいている馬鹿には丁寧に応対してくれた。

丁寧にとは両手両足の骨を細かく砕いているのである・・・・・・・・・

婆様は止めて諌める振りをして的確に再起不能になる場所の指示を出す・・・・・・・・・・
えげつねぇ・・・・・・

そうして、馬鹿な男達を全て叩きのめした強力兄弟は、幼女兄の頭をなでて大丈夫だという。
婆様も幼女兄を抱きしめて大変だったねぇ・・・・・・馬鹿なことを言う男達は全てこの婆が砕いてやるよ！
と落ち着かせる・・・・・・・・・

実際砕いたのは強力兄弟だろ！

しかし、婆様は丁寧にも下品な男達から骨の一つを土産代わりに潰すのであった・・・・・・・・・・・・

その後、宿の主人から出て行けと追い出されたりしたのだが、皆して出て行ったら宿の主人があわてて追いかけてきたが・・・・・・・・
勿論迷惑料として金を払った後である。

皆して進む夜道はとても楽しいものであった。
幼女たちも眠たいのを我慢して
「おじちゃんすごい！」と騒いでいるし、
強力兄弟の活躍ぶりに性愛神殿の女たちはきゅんと来た、みたいだし
強力兄弟も女達がなにかあれば言って来いと本気で誓いを立てる・・・・・・・・・・

実はこの兄弟脳みそまで筋肉か？
「もう少し考えるように育てたほうが良かったか？」

婆様の後悔する声は笑い話である。

そうして次の街に突いた頃には夜が明けていて、その日一日は休養

に当てられるのであった。

「腹減ったぞ！」

「このままだと空腹で眠れない！」

強力兄弟と旅の空（後書き）

強力兄弟は気が優しくて力持ちです。
女子供には紳士的であれと実践しています。

ちなみにこの宿は王室顧問経由で干されてしまうのです。

強力兄弟と温泉町（前書き）

あらすじ、旅の空　婆は最強だった。

今回も下品成分大目で行きます。
この作者に下品でないものがあるのかといわれたらそれまでなんですが・・・・・・・・

御嫌いな方は回れ右して毛皮を着たビーナスでもよまれるが宜しかろう。

強力兄弟と温泉町

我等の帰路はゆるゆると進む・・・・・・・・・・・・
軍団に追いつこうと思ったのだが、極北戦士の股間の傷が酷く急ぐ事もできない・・・・・・・・・・・・
かといって、侯爵領においといても満足に治療が出来ないだろうし医療神殿の併設している温泉町まで向かうのである。
ついでに私の矢傷も診て貰うのも宜しかろう。

「御主人様、傷口を拭います。」
「すまないねぇ・・・・孤児姉。」
「いえ、好きでやっていることですから・・・・・・・・・・・・」

「ところで俺は放置か・・・・・・・・・」
「ある意味自業自得ですから・・・・・・・・・・それにあんな酷い怪我は見たくないですわ。男の象徴がぐちゃぐちゃに潰れているところなんて・・・・・・・・・・」
「女神官様？」
「だって、だって、象徴がなければお楽しみが出来ないのですのよ！そんなことって許されると思うのですか？」
「女神官様、後ろの穴でも楽しめますしブツだけにこだわらなくても・・・・・・・・・・・・・・（汗」
「ああ、そうでしたわね。男娼、よく気がつきました。」
「そういう事で極北戦士様お慰めいたします。」
「あーーっ！」

まてまてまてまて、馬車の中でそんなことをするんじゃない！
子供達の教育に悪い！

「旦那方、馬車の中は連れ込み宿じゃないんだから控えてもらえませんかね？」
御者をしている強力兄の窘めが来るまで馬車の中は乱痴気騒ぎであった・・・・・・・・・・・

何台かある馬車、簀巻きにされた子爵様（笑）を乗せた馬車には幼女と幼女兄が質問をしていた。
「ししゃくさま、どうしてむらのみんなをみすてたの？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「子爵様、何故領地に目を下さらなかったのでしょうか？飢えて死んだもの、春を売って体を損ねた者、子供を喰らって生き延びた母親、その身を削って子供を養った父親・・・・・・・・・・彼等に対して何かありますか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「どうしてしなければならなかったの？」
「・・・・・・・・・・・・・」
兄妹の質問に答えることが出来ない子爵様（笑）
「何で、答えないのですか？」
「おしえてほしいだけなのに・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・すまない。」
「どうしてあやまるの？どうしてやったのかをしりたいだけなんだ

けど・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

休憩地に着いたときには子爵様（笑）は壊れてしまっている。
まだ壊してもらっちゃ困るんだが・・・・・・・・・私の分も残
しておいて貰わないと（邪笑
「ごめんなさいけんじゃさま。」
「いいんだよ、幼女。お前の答えは見つかったか？」
「ううん、謝るばかりで答えくれなかった。」
「これが原因なんだがなぁ・・・・・」

「で、だんな、子爵様をどうするんですかい？」
「そこらに置いておけば狼か何かが処理してくれるんじゃないの？」
「幼女兄、一応法にのっとって処分しないと・・・・・・・・・・・
それにこんなゴミを放置したら美観を損ねるだろう。」
「賢者様そっちですか！！」

幼女兄も以外とツッコミ気質だな・・・・・・・・・貴族様に対し
てそんな口の利き方で良いのかな？
さっと、青ざめる幼女兄・・・・・　別に子供の言う事なんてどう
こうするつもりはないけどね。
「はいはい、旦那！子供をからかわない！」

婆様の窘めが入る。お見通しというわけですか、敵わないな（苦笑）

で、どうするかねぇ・・・・
「御主人様、ここには性愛神殿の面々がいらっしゃるはずですが？」
「そうか、その手があったか・・・・・・・・・・・・　皆さんよ
ろしくお願いします！」

「「「「はいっ☆」」」」

「【精神安定】」
「【正気覚醒】」
「【現実帰還】」
「【混乱防御】」
「「「「【追憶・回想】」」」」

えっと、皆さん色々重ねがけしてますが・・・・・・・・・・・・・・・
「そりゃ、ちゃんと過去を見てもらわないと」
「それで壊れて貰ってもダメですしねぇ・・・・・・」
「壊れたら又掛け直せばいいし。」
「幼女ちゃんの質問に答えてもらわないと・・・・・・・・・・・・」
「私達も憤っているんですから！」

これは嘗ての自分の姿、そしていつかの誰かの姿・・・・・・・・・
誰かに苦難を負わせるなんてと本気で怒っているな・・・・・・・・・
・

まぁ、程々にな・・・・・・・・・

ゆるゆると進む馬車の群れ、我等一行が温泉町に着いたのはそれから夕暮れになったときであった。
遠くに見える湯煙、風に乗ってくる硫黄臭・・・・・・・・・・・・
旅人達や療養者が軽装でふらつく町並み・・・・・・・・・・・・・・

石造りの家が多い王国にあって木造の家がちらほらと見える・・・・
・・・・・
温泉の効能を伝えたとされる異世界人（同人誌を伝えたのとは別人

である。）が自宅を木造で靴を脱ぐ造りにしていたことに倣っているとのことだ・・・・・・・・・・・・

木と紙だけの家なんて無用心にも程があるな、鍵もなかったという話だが盗人対策とかはどうしているのだろうか？

「それを言ったら荒野の民の天幕も布というか皮というかそれ一枚じゃないか。彼等なんかも客人といってだれそれ構わずもてなしているよ？」

「この異世界人の世界もそれに通じるものがあるのだろうな・・・・・・・・・平和なのかそれとも馬鹿なのか・・・・・・・」

「不思議な匂いですね。」

「街の外にいても匂うのは不思議。」

「早く街に行こうよ！」

「ここの湯は美容にもいいと聞きましたわね。」「旅の垢を落としたいですわ！」

「ふやけるほど入りますか・・・・・・・・・・」

興味津々の孤児娘達に美容に効能があると聞いて温泉を心待ちにしている性愛神殿の方々・・・・・・ある意味対照的である。

「強力兄さん、一緒に入ります？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」

性愛神殿の人、あまり強力兄をからかうなよ（苦笑）

「そこで、乗っかるくらいの甲斐性があればねぇ・・・・・・嫁とか孫の顔が見れるのに・・・・・・・・・・」

「婆様、そっちですか・・・・・・」

「其処の女衆、いっちょ押し倒して世帯持ってくれないか？」

生々しいな・・・・・・・・・・
「そうでもしないとあたしが生きてるうちに見れないじゃないか！いい年したのが本当に・・・・・・・」
「かぁちゃん・・・・・・・・・」
「お前もだよ弟！さっさと嫁を見つけて安心させてくれ！」

強力兄弟が泣きを見る前に町に行きますか・・・・・・・・・・・・・・・
我等一行は関所にて入町税を支払い、鑑札を受け取ってから街に行くのであった。

この温泉町は旅行者と療養者からの入町税と温泉産業から収入を得ているだけあって、町並みは綺麗に整備され各種の店が賑わいを見せている。
治安もいいのか皆軽装でゆるゆると歩いている。

しかし、軽食の店は湯気が立っているものが多い。
「そりゃ旦那、どこを掘っても温泉が出てきそうなんでその湯気を利用した料理が多いんでさぁ・・・・・・・　蒸した肉に蒸した魚、うちの蒸し麺麭でも一つどうだい？」
「ふむ、貰おうか・・・・・・・・・・人数分おくれ。但し、宿に入るから小さいので頼むぞ。」
「まいど！」

蒸し麺麭屋に群がる我等一行。三十人近い女子供衆が群がる様は壮観である。

蒸し麺麭は黒砂糖と胡桃で味付けされた素朴な味である。主食というよりも軽食としてつまむ程度の大きさである。

他にも干し果実を練りこんだものとか味のない蒸し麺麭に肉だの酪だのを挟んだ物もある。

孤児弟や強力兄弟はお代わりを要求している・・・・・・・・・・・・

「これは結構いけるな。」

「むぐむぐ・・・・・　小腹が空いたときには便利だな。」

「胡桃の風味がなんとも・・・・・・・・・・・・・・・」

色気より食い気か・・・・・・・・・・・・・・・孤児弟は兎も角、強力兄弟が嫁を捕まえないわけがわかった気がする。

「・・・・・・・・・・・・なるほど、胃袋から攻めるのですね。」

「ストマッククロー！」

「それは違うから・・・・・・・・・・・・」

強力兄弟を狙う女性達に攻略の手助けをしてしまったかな？

「良いのではないでしょうか？別に害はないですし・・・・・・・」

「まぁな。」

「一息つきましたら宿を探しましょう・・・・・・・・・・・・・・大人数ですし、早くお湯に浸かりたいですわ。」

女神官のせっつきに我等一同、宿を探す・・・・・・・・・・・・って、孤児弟がいない！

「ああ、だんな！蒸し麺麭屋の知り合いに宿があると聞いて、部屋を押さえておきました。」

「何時の間に・・・・・・・・・」

「若い貴族の旦那。ありがとう御座います。弟も喜んでいるでしょうしね。」

満面の笑みの蒸し麺麭屋、孤児弟に今宵の宿をどうするか聞いて紹介をしていたらしい。
二人とも抜け目ないな（苦笑

おまけだといって蒸し麺麭を渡された孤児弟の先導で宿に向かうのであった。
しかし結構な量をおまけしてもらったなぁ・・・・

「まぁ、食べる人間はいますしね・・・・・」
蒸し麺麭は強力兄弟とか極北戦士とか孤児娘達の胃袋に消えていった・・・・・・・・・・

さて、ゆるりとするかねぇ・・・・・・・
旅の垢を落としたい・・・・・・・・・

強力兄弟と温泉町（後書き）

入浴シーンは予定しておりません。温泉卵は出すかも。

強力兄弟と行き倒れ（前書き）

あらすじ　王室顧問一行は温泉めぐり。　入浴シーンはありません。
あしからず。

強力兄弟と行き倒れ

温泉宿についてゆるりとする一行。馬車は町が経営する共用馬車管理場にあずける。
そこで荷台から子爵様が転がり落ちたのは笑い話である。ついでに衛士が呼ばれたりしたのも仕方がないことだ。
まぁ、私は貴族、地位を盾にごり押ししたけどね。

「だんな、さすがに簀巻きにされたものを見たら怪しみますって。」
「気をつけよう。」

「本来ならばつかまると思うのですが」
「そこは賢者様の権力というか貴族社会を生き抜いてきた人脈というか・・・・・・」
「まっとうな手段じゃないと・・・・・・・・・・・・」

人聞き悪いな、ネタをばらせば子爵様が犯罪者であることを示して護送中といっただけなんだが・・・・・・・・・・・・
ただ、壊れているしな。医療神殿には送り付けないと・・・・・・・・・・

そして我等も医療神殿に向かうとしよう。

温泉町の風情も何とやら、怪我人ともども医療神殿に向かうのである。

向かったのは私と孤児姉弟、極北戦士と強力兄弟である。
まぁ、極北戦士を運ぶ人手として強力兄弟を呼んだのだが、温泉町をきょろきょろとおのぼりさん状態となっている。
気持ちはわかるけどな。

一息ついたら町を巡ればよいさ、暫くはいるから。
王都への報告？　仕事？

王弟殿下がいるからそれに任せればよろしかろう。
結局仕事してないし、全てこっちでこなしたんだからそれくらいしやがれ！
はげが！

おっと、すさんでしまったな。

医療神殿は町のはずれにあるから少々移動に手間取ったが、何とかつく。
これならば馬車で移動すればよかったかな？

診断してもらう。
私は貴族様だ！貧民どもを押しのけて真っ先に診てもらおう・・・・・・

「王室顧問の旦那、さすがにそれは・・・・・・・・・」
「順番をとはいわねぇがくたばりかけているのがいるからそっち優先しねぇと・・・・・・」

見かけによらぬ良識派どもめ！
まぁ、無体をするつもりはないが・・・・・・

待つこと暫し、むしろ神殿側が私を待たせる重圧に耐え切れなかっ

たようだ。
軟弱物め！

私の矢傷は傷口がふさがっていて、多少筋肉がこわばっているけど時間が解決するものだと診断された。
剣を持つには苦労するけど日常には支障がないと・・・・・・・・・・・・

剣がもてなければ引退だなと言うとそれならば引退なさればよろしいでしょうと答えてくれる。

後はこの診断を書面にしたためてもらって・・・・・・・・・・・・・・・

神殿の医療従事者君、いい仕事しているね。
思わず、治療費のほかに金貨を渡してしまったよ。
これは賄賂じゃないよ。純粋に貧しいものたちにも治療をしてくれる神殿の皆様へカンパをしているだけだからね。
「ご主人様、無駄遣いは・・・・・・」
「だんな、まるっきり賄賂だって。」

「子供の前で恥ずかしくないんですかねぇ・・・・・・」
強力兄弟まで・・・・・・

まぁ、問題は極北戦士。
股間を完全に潰されているものだから完全再生までに時間がかかると・・・・・・
そもそも再生できるだけでもすごい・・・・・・・・・

「よっしゃ！俺様の世界樹が！！」
世界樹だったんかい！
「ご主人様、言うだけは自由ですので・・・・・・・・・」

「そうだな、夢くらい語らせてやろうか・・・・・・」

「酷い・・・・・・・・・・・・」

再生するまで一月くらい・・・・・・・・・・ここで治療しないとだめらしい。

でもすごい！完全に潰された（ぴーぴーずきゅーん）が復活できるなんて。

もしかして傷跡なんかも治療できるのか？

「勿論、半月ほどかかりますが・・・・・・・・・・」

「傷跡娘に受けさせたいな。」

「ですね、時間を作って傷跡娘を連れてきましょう。」

「そうだな、後で傷跡の治療にかかる金子の見積もりだしてもらえるか？」

「その分の金銭、補佐見習いが稼ぐと意気込みそうだね。」

「それも奴の器量というものだろう。意地っ張りだから・・・・」

子爵様はというと・・・・・・・・・・

「どうすればここまで心を壊すことが・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・生きる屍だな。」

「えっと・・・・・・・・・・・・赫々云々で・・・・・・・・・」

「直せますかね？」「無理でしょう・・・・・・・・・・」

「神術で無理やり正気づかせて更に追い込むなんて・・・・・・・・・・人ですか！」

「ご主人様尻尾が・・・・・・・・・」

「やっぱ人の皮をかぶった悪魔か・・・・・・・」

「失礼だな、私はれっきとした人だよ。君たちの目が・・・・・・・・・（以下略」

「だんな、神殿でその手の冗談はまずいって・・・・・・・・・・・・」
「えっ！人だったのか？」

・・・・・・・・・・私凹んでいいですか？
「ご主人様は私たちにとって神に等しい存在です。いまさら悪魔だろうと椎の実だろうと・・・・・・・」
孤児姉、それは私にとどめさしているから・・・・

私たちは医療神殿を後にするのである。
うむ、ここが世界最高峰であるというのは本当だったんだな。王都の者よりも治療できるのが多くて素晴らしい。
後は騎馬戦士（モヒカン）とか公爵令嬢（BL好き）の治療ができないかなと・・・・・・・・・・・・・・・

びゅん（匙を投げる音）

どこかで救われない命があったんだな・・・・かわいそうに・・・・・・・

びゅん、びゅん（匙を投げ続ける音）

世界とは無情だな・・・・・・・・　零れ落ちる砂のようだ・・・・・・

匙投げる音で察しろ！お前らんとこの馬鹿につける薬がないんだ！

！（ＢＹ療養神）

びゅんびゅんびゅんびゅん（匙を投げ続ける音）

ああ、神よ・・・・・・・・彼らをお救いください。

無理だ！　できない・・・・・・・・・（ＢＹ神の一柱）

我らとて出来ないことはある・・・・・・・・（ＢＹ通りすがりの神々）

さて、神殿を出たが私はぶらつくけど君達はどうするかね？

「私はご主人様とご一緒いたします。」

「一度宿に戻って、皆にそれを伝えてくる。だんな、夕餉はどうするんだい？」

「ふむ、夕餉までには戻るつもりだが。」

「わかった。」

「で、強力兄弟は？」

「俺は少し散策してくる。護衛はいらないのか？」

「治安もよさそうだし問題なかろう。」

「ならば俺も兄貴とぶらついてくる。旨そうな匂いがして堪らん。」

夕餉までには戻ってくるんだぞ！

兄弟には幾つか足りないものの買い物を頼んで別れる事にする。

温泉町は療養者向けの生活用品とか土産となりそうな物とか色々あるなぁ・・・・・

ここを切り開いた異世界人は故郷を模しているといっていたが、妙なものが色々ある。
何で三角の旗とか妙な文字の書かれた上っ張りとかがあるのだろう？
食べ物なんかも豆のフィリングが入った蒸し饅頭とか不思議なものばかりだ・・・・・・
どちらかといえば極東に近いというけどそれとはまた別な雰囲気が・・・・・・・

ぶらつきながら宿へと散策する・・・・・・・・
道なども馬車用の道と歩行者用の道を分けていたり、歩行者用の道には花が植えられていたり・・・・・・
面白いつくりをしている。王都でこれをしたらどれだけ金がかかるか・・・・・・・・・・・・
一から作り上げている小さな温泉町だから出来たのかもしれない・・・・・・・・・

途中で茶を喫しながら、水路に浮かぶ花びらを眺めたり、他愛のない話をしたりする。
孤児姉も満足そうである。

しかし酒の類がないなぁ・・・・・
「当たり前でしょうに貴族の旦那。酒は宿でゆっくりと飲んでおくれ。ここは療養者のための町なんだから・・・・・・」
茶店の給仕に叱られた。

そして表通りを一歩外れて裏通り、ここも綺麗に清掃されている。
裏店を見てみると市民生活に必要な食品とか雑貨品がおいてある。
療養者も自炊のために買い物しているらしく、軽装の女性が食べ物とかを買っているのが見える。
そういえば私たちが宿泊する宿も自炊用の竈があったな。

「後で何か作って見ますね・・・・・・・」
「楽しみにしているよ。」

そして、広場があって何日か置きに市場が出るのだそうだ・・・・・・・
生鮮品とかはその日に買い込むものが多いという話を聞いたりする。
衛士も小奇麗に整えられており、旅行者たちの道案内や宿の紹介などをしている。
なんか治安維持というよりも旅行者への案内が主立っているような・・・・・・
「貴族様、そりゃ我が町は治安がいいですし盗賊は定期的に駆除してますから・・・・・・・・・それに治安のよさが更に客を呼びますからねぇ・・・・・・」
「孤児や行き倒れなんかもほとんどないんだろう。」
「月に数件程度でしょうか、それなんかも見立たぬように保護するのが町の美観を保つコツというか・・・・・・・・・おっと、内緒にしてくださいよ。ばらしたとあっちゃこっちが叱られる。」

面白い衛士もいたものだ。

性愛神殿の皆にも小遣いを渡して、羽を伸ばしてもらうか・・・・・・
世話になったしな・・・・・・・・・

衛士に両替商の場所を聞くと私は孤児姉をつれて向かうのであった。

なんだかんだで宿に着く、女衆は婆様の下で夕餉の準備に取り掛かっている。
宿に食事を頼めばよいのに・・・・・・・・・
「だらけることになれちゃ駄目でしょうに。ただでさえ、食費に諸々出してもらっているんだから締めるところは締めないと・・・・・・」
「別にかまわないよ、十分力になってもらっているのだから。」
「女衆は好きでやっているんだ、やらせておあげ・・・・・・・・・・」
婆様にはかなわんな。

孤児姉も一緒になって夕餉の支度を整える。
って、言うか働いていないの私だけ?
まぁ、いいか。私貴族だし・・・・・・・・・

夕餉の支度が整って、席に着く。
宿は自炊も出来るし、仕出しの料理も出来るのだが自炊が大半だ・・・・・・・・・・

おかげで清掃と洗濯くらいで雇い人も多くない。
宿の主人が私が貴族であるから態々挨拶してくれる。
酒の用意をお願いできるかな?

「ご主人様傷に触りますよ。」
「そこの娘の言う通りだね!」

くぅ!飲みたかったのに・・・・・・・・　後で隠れてのみに行こう。

酒場の一軒くらいあるだろう・・・・・・・

そんな私の些細な野望を隠して、食事が始まる。

旅の空で携帯食とか簡単な料理ばかりだったから、出来立てで手の込んだものは旨いな。

宿の食事も単調だったし・・・・・・・・・

後は風呂でも入って・・・・・・・・・・見るかね。

外風呂と内風呂があるというけど、外に風呂を作るなんて異世界人は不思議な文化を持っているものだ・・・・・・・・・

湯に浸かりながら酒というのは宜しいらしいが、試してみるか。

「孤児弟後で酒を買って来い。」

「だんな、婆様に叱られますよ。」

「大丈夫ばれなければ問題ない！」

ここにも婆様に勝てないものが・・・・・・・・・・・・

ゆるりと夕餉が終わるころ。強力兄弟が戻ってきた。

「王室顧問の旦那！報酬の前借できないですかい？」

「おまえらは！戻ってきていきなり何を言うんだい！」

不躾な強力兄弟を叱る婆様。

兄弟の両手には頼まれた荷物がありその肩には小汚い餓鬼が・・・・・・・・・・

「まぁ、婆様。強力兄弟の話を聞いてみようではないか。」

行き倒れって珍しいものじゃなかったんかねぇ？

強力兄弟と行き倒れ（後書き）

温泉に来て入浴シーンを描かないとは作者は不能なのか？
それとも文才がないのか？

そこまで言われたら書くとするか入浴シーン。

湯煙立ち込める大浴場、白濁した湯に浸かる人影が見える。
人影は立ち上がると湯は肌を滑るように流れ落ち、引き締まった体を顕にする。

「ふぃー」

緊張感のかけらもない声が上がると体をほぐすかのように大きく伸びをすると大またで歩き出す・・・・・・・・・・

「温泉というものはいいものだ！王室顧問の旦那に連れてきて貰った甲斐はあるもんだ。」
そう鍛え抜かれた身体の強力兄は傍らに合った水桶から水を飲むのである。

だから！男の裸なんか描写してどうする！

で、王室顧問お前は孤児姉とか孤児娘たちの裸が描写されてどこの誰とも知れない読者の目に移されるのは許せるか？

否、それは許せないな。

わかったろう、作者である我輩が入浴シーンを描かぬわけを。

よくわかった。

強力兄弟と療養院（前書き）

あらすじ　王室顧問一行は観光客にクラスチェンジした。

強力兄弟と療養院

ふぅー！

温泉というのは良いものだな。
貴族家でも湯を張った風呂というのは余程のものじゃないと作れないし、お湯を張った桶で体を洗うか水浴びか・・・・・・・・・街だと公衆浴場があるから、それを利用するのが普通だな。

色町の風呂を毎晩利用していた馬鹿もいたが、それは又別の話。

広い風呂を独り占めにするのは王侯貴族でも中々出来るものじゃない。
お湯を沸かすのが手間だからな・・・・・・・・・・・・・

月と星の天蓋に風が流すは虫の詩　ああ天土全てが我が庭で　出会う者皆我が家族
いつぞやの詩人神が歌った昔語りの一節が出てくる。
後は酒があれば言う事なしなのだが・・・・・・・・・・・・・

怪我人には酒はダメだと・・・・・・・・・・・・女性陣の厳しい事厳しい事。
殆ど傷もふさがっているのだがなぁ・・・・・・
体を伸ばして暖かさに身をゆだねて・・・・・・・・・・・・

隣の女湯からは

「ほら幼女ちゃん、ちゃんと体洗いなさい！」
「あらったもん！」

「良い湯ですわねぇ・・・・・」「本当・・・・・・・・」
「私達だけこんなにいい思いして良いのかしら・・・・・・・・・・・・・・」

「ふぃー、のぼせた・・・・・・・・」
「水飲んで孤児娘ちゃん！」
「ごくごく・・・・・・・・・・・ぶはぁ！」

賑やかなもんだ・・・・・・・・・・

「うーん、温泉で月見て一杯。最高だわ！」
「冷えた酒も悪くないですわねぇ・・・・・」
「後はつまみが欲しいわね。」

「ふぅ、老骨にも染み入るようじゃ。」
「またまた、婆様元気有り余っているのに。」
「そう言ってもな、旅なんて始めてじゃから緊張するぞ。」
「王都についたらどうするんで？」
「何も考えておらんというか、都見物をして遊んだら帰るだろう。あの馬鹿息子達次第だな。」
「強力兄弟も何も考えていないようですしね。」
「まいったもんじゃ・・・・・・」

女湯は芋洗い状態だな。見て見たいけど後が大変だ・・・・・・・・・色々な意味で。

さて、強力兄弟が拾った子供はどうなったかな？
私は風呂から上がり強力兄弟のところに向かうとする。

しかし、私に酒を与えないで自分達だけで酒を飲むとは・・・・・・・・・許しがたし！

強力兄弟の元に行ってみると薄汚れたガキは綺麗に洗われて見れる程度になった。
しかし子供の行き倒れとは珍しいな。親はどうしたんだ？

「王室顧問の旦那、この子は孤児で妹が一人いるらしいんでさぁ。妹が目を患ったんで治療のために金をためてこの療養神殿に向かったまでは良いんですが路銀が思ったよりかさんで・・・・・・・・・・・・　まぁ、後はお約束というかなんというか・・・・・・・・・腹をへらかせて兄妹ともどもへたり込んでいたんですよ。」
「まぁ、よくある話だな。で、妹のほうは？」
「目のほうはどうか判りませんが、衰弱していたんで神殿に投げ込んできましたぜ。」
「で、神殿に治療費として渡してお前等は一文無しと・・・・・・・・・・・・」
「「面目ない・・・・・・・・・・・・」」
「馬鹿だろう、お前等！一応ここにいる面々は誰だと思っているんだ？」
「性愛神殿の・・・・・・・・・・・・あっ！」

「そう言う事だ。目の病は兎も角、応急処置も栄養失調も手当てできるじゃないか！」

「「・・・・・・・・・・・・・すんません。」」

「まぁ、良いさ。お前等が立て替えといた分払ってやるよ。」

「助かります・・・・・・・・・」「旦那、いいんですかい？」

「これが色町ですったとか、飲み代が嵩んでというんだったら見捨てるが人助けだろう・・・・・・・・・仕方ないさ。ほれっ！」

私は孤児弟に命じて金を持ってこさせて、療養神殿に払ったと思われる分を渡す。

「旦那、こんなにいいんですかい？」「明らかに貰いすぎですぜ？」

銀貨１０枚程度でそんなに言うとは・・・・・・・・・遠慮深い奴等だ。

「強力兄弟、いくら払ったんだい？」

「銀貨３枚ですが・・・・・・・・・」

「今までの分として結構支払ったと思うんだけど・・・・・・・・・・・」

孤児弟が笑顔のままで聞いている。

「いやぁ、この街の飯が思ったよりも旨くって・・・・・・・・・・・」

「観光地価格というんですかねぇ・・・・・」

訂正、遠慮深いのではなくて・・・・・・・・・計算の出来ない馬鹿だ！

兵舎で居れば飯には困らないからついついあるだけ使いたくなるのだろう・・・・・・・・・

早くこいつ等に嫁でも何でも見つけて財布の紐を握らせないと・・・

・・・

「だんな、兄弟の俸給は婆様に渡しときますか？」
「半分くらいは本人に渡してやれ・・・・・・・・・いくらなんでも不憫だ。　でも、これは婆様に直接預かってもらえ！」
「そんなぁ・・・・・・」「無体な・・・・・・・・・」
崩れ落ちる強力兄弟、男がへたばっても可愛くないぞ。

「あ、あのぅ・・・・・・・・・・・・・・・　ありがとう御座いました！」
「良いって事よ！」「ガキが気にするな！」
「このお金は働いて必ず返しますんで・・・・・・・・・・・・」
「ガキが細かい事気にするんじゃねぇの！」
すごむ強力弟・・・・・・・・・　おいおい、子供相手に何しているんだい！
「おめぇのような細っこい奴じゃ、何時までたっても返せないだろう！ここは大人しく大人の面子を立てやがれってんだ！」
強力兄も言葉選べ！
「それでも、それでも・・・・・・・・・」
「ほらほら少年、この強力兄弟（ばかども）が良いって言っているんだから甘えておきなさい。」
「貴族様にもご迷惑掛けてしまって・・・・・・・・・」
「迷惑のうちにならんよ。私は貴族だ！そのくらい簡単だよ。」
「まぁ、だんな。少年を雇ったら如何です？細かい事をするのが足りないですし、どうせ金の事をなしにしても明日からのつなぎがないんだろうし・・・・・・・・・」
「ふむ、孤児弟お前の従者として使え。」
「ちょ、だんな！おいらはだんなの従者ですよ！従者が従者を使うなんて・・・・・・・・・」

「あのなぁ、お前も最下級とは言え貴族なんだから人の使い方を覚えないとな・・・・・・・・・・どうせ、騎馬公か開放公あたりがお前の事を狙っているからこの少年で練習しけ。少年、お前も文句あるか?ないよな!一文無しで拾われた身だ、ここで放り出されても行き倒れる事間違いなしだろうし拒否権はない!」

「・・・・・・・・・・・・すいません、お世話になります。」

「・・・・・・・・・・・・おいらに配下?待ってくださいよ!」

実直そうだし、面構えも悪くない・・・・・・・・・・・・孤児弟と組ませたら公爵令嬢あたりが鼻血たらたら喜びそうだが、気にしたら負けだ。

「本当にありがとうございます・・・・・・・・・・・・」

少年は深々と頭を下げる、親御さんの仕込が良かったのだろう・・・・・・

「強力の兄さん方もご迷惑おかけしてしまって・・・・・・・・・・」

「いいってことよ!」「困ったときはお互い様だ!がははははっ!」

「このお金はちゃんと返しますんで。」

「要らないといっても返す積りだろ、充てにしないで待ってるから無理せず返しな。」「兄貴の言うとおりだ。」

「ところで少年、腕が伸びきっていないようだが・・・・・・・・・・・・」

「ああ、これですか前にやったときに医者にかかれなくて・・・・・・・・」

「骨が曲がってやがるな。」

少年の腕を掴んで強力弟が唸ると、

「一度、折って繋ぎなおしたほうがよいかな?旦那、神官様は骨接ぎの神術とか使えるんですかい?」

「如何だろうかね?そろそろ風呂から上がるだろうから聞いたらど

うだい？」
「わかりやした。」
「って、折るんですか！嫌ですよ！」

涙目の少年・・・・・・・・益々公爵令嬢対策が必要になりそうだ。
そりゃ骨を折るといわれれば怯えもするよな・・・・・・・・・・・・
まぁ、急ぐわけでもないから余裕が出来てからやればよいさ。若い
から回復も早いだろう・・・・・・・・・・・・

「しかし、遅いですなぁ・・・・・・」「女は長風呂だからじゃない
んですかい？」
「急ぐわけでもないんですが、待つのは手持ち無沙汰ですね。」
「治療は別にしていただかなくても・・・・・・・・・・」
「いかんぞ少年、骨が曲がったままつながると・・・・・・・・・・・
（説明略」
強力弟が丁寧に説明している・・・・・・・・其処、骨折の痛みまで
丁寧に描写するな！

結局のところ、我等男性陣は待ち飽きて先に床に着いた。
ちなみに女神官が風呂から上がったのは夜半も過ぎた頃だったと宿
の人から聞いた。
何してやがるんだ！

酒盛りか・・・・・・・・・・・・混ぜて欲しかったなぁ・・・・・
どういー（ｂｙ酒精神）

強力兄弟と療養院（後書き）

今宵は酒が切れたのでこれまで・・・・・・・・

健康診断受けないと・・・・・・・・医者に飲みすぎといわれるんだろうな・・・・・・・・

メクラ娘と強力兄弟（前書き）

はい、差別表現でました。
作者はメクラは目が暗いという意味で捉えてそのものの状態を表しているという考えでいます。

メクラ娘と強力兄弟

療養神殿に向かう。
結局のところ、女神官は二日酔いで使い物にならず性愛神殿の面々も其処まで出来る者がいないということで・・・・・・・・・・・・

「貴族様、私はいいですから・・・・・・・・」
「実は折られるのが怖いのだろう。」
「はい！」

実に正直な少年だ。王宮には向かないだろうな・・・・・・・・
どこかで徒弟として働かせたほうが宜しかろう・・・・・・・・・

「だんな、おいらが図太いみたいな言い方じゃないか！」
「国王の面前で主に向かって銀扇の一撃をかましたのを繊細とは言わない！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

へこんだ孤児弟は放置して神殿に向かおう・・・・・・・・・・・・
少年の妹の様子が心配だ・・・・・・・・・
主に馬鹿兄弟が案じているぞ・・・・・・・・

「馬鹿兄弟言わないでくださいよ。」「旦那酷いですぜ！」
貰った給金すぐに食いつぶすのを馬鹿といわずして何というのだ？
「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

強力兄弟沈黙。

「御主人様、往来の邪魔になるので強力兄弟を潰さないでください。」
うむ、気をつけよう・・・・・・・・・・・・

そして神殿。
少年の妹という目病少女を見てみると、一晩休んで心身ともに落ち着いたのか血色が良い。
ただの栄養失調というか空腹で倒れかけただけなんだろう・・・・・・
神殿の女衆に身支度を整えさせられた少女は銀灰色をした髪を持つ大人しめな少女であった。

我等の来訪を知ると、兄である少年の無事を喜び我等に礼を言う。
何れ何か出来る事があれば礼をしますといった律儀な発言に親御さんの躾が宜しいのだなと感心する。
まぁ、実社会では損をするのであろうが、我が庇護下にある間に教えておこう・・・・・・・

神殿の担当に聞いてみると
「・・・・・・・・・・・・今まで体力が落ちていたのが痛いですね。今のところ回復するのは難しいでしょう・・・・・・・・・・・」
という。
他に治療法がないのかと聞けば
「誰かの目玉を移すとか・・・・・・・・・・・・・・それは誰かの生きた目玉を必要としますし・・・・・・・・・目玉くりぬくとなれば激痛で常人は耐えられないですよ・・・・・・・・・・・・・・・・」
そんな方法があるのか・・・・・・・・・・・・・・確かに非実用的だな・・

・・・・・・・
他にはないのか？

「取敢えずは洗眼薬を用意しましたので、朝晩この薬で目を洗ってください。後は滋養に富んだものを食べて体力をつけていけば、これ以上目が悪くなることは防げるでしょう・・・・・・・・・・・・」

我等は担当に礼を言うと、少女を連れて宿に戻るのであった。
少女は目が不自由だからなのか足元が歩くに不自由している・・・・・・・・・
成程な、これで歩みが遅れて路銀が足りなくなったのか・・・・・・・・・・・

あまりにもおぼつかない事に痺れを切らした強力兄が少女を肩に乗せて進むのであった。
でかい男に小さな少女・・・・・・・・親子というには似てないし、恋人というには年が・・・・・・・

絵的にも対照的過ぎる両者が普通に居るから目立つ目立つ！

少女のほうも、いきなり足元がすくわれたと思ったら高いところで腰掛ける羽目となりびっくりしている。
すぐに慣れて強力兄の頭に体を摺り寄せて、わずかに映る光を楽しんでいるようだ。

今までの旅路も先に進むことだけが大事で周りを見ることができなかったのだろう。
灰髪の少女は失いかけた光を必死にかき集めて町並みを心に刻み込もうとしている。

路上に漂う湯気に其処から流れてくる食べ物の香り
街路樹の緑は柔らかくて金と銀とを散りばめたよう・・・・・・・
空は青色絵の具をぶちまけたようで雲は灰色とか白とかで其処だけ
錦を放り投げたよう
路傍の花は小さくても生きている色がして
石畳の隙間という世界は色鮮やか・・・・・・・・・・・・・・・

灰髪の少女は泣いていた。
自分は何時か盲してしまうのだろう。
でも、今日という景色とその優しさを刻み込む事ができて嬉しいと・
・・・・・・・・・・・・・

少年は何もいえなくてそばをとぼとぼ歩き、孤児姉弟は黙って主で
ある私を見ている。
ふむ、私とて万能ではないから神殿の療養担当の言うとおりに薬を
与え安静にさせるくらいしかできない。

人というのは無力だな・・・・・・・・・・・・・

そんな仲でも強力兄は少女に幸いな記憶を与え続けようと、少女が
耳で聞いて鼻で嗅いで気が向いた方向にかだらを向けてこういうも
のだよとか色々話しかけている・・・・・・・・・

「貴族様、私は妹に対して無理強いしていたのでしょうか?」
うなだれた少年の一言。

「いや、お前がここまで連れてきたからこそ今楽しめているから問
題ない。」

「それでも、故郷の町とか実に焼き付けさせておけば・・・・・・・・・・・」
「まだ、完全に盲しいてしまうと決まったわけではあるまい。帰り道にでもよればよかろう・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・すいません貴族様。なにからなにまで・・・・・・・・・・」
「急ぐ旅ではないからな。」

とはいえ、暫くは私の怪我の療養だな。
少女のほうは身の振り方をどうするかな？
身を立てることを第一に考えないと・・・・・・・・・・・

宿に帰ってから考えて見ますか・・・・・・・・・・
犬猫ではないのだから子供を拾ってくるんじゃないよ。

「「面目ない・・・・・・・」」
「御主人様、この兄弟にそれを求めても・・・・・・・・・・」

「そういえば、だんな・・・・・・・・・・・魔具で視力を補助する者とかないんですかい？」
「ふむ、視力を与える魔具といえば・・・・・・・・・初代庭園公が鉄丈の従者に下の世話をされるのを嫌って目隠し布に魔方陣を縫いつけたのがあるが・・・・・・・・あれは、形とかを見る程度で使い勝手良くないと手記に記されていたなぁ・・・・・・・」
「だんな、手に入りますかい？」
「それならば聖域守護辺境伯魔術師団で手品用の冗談玩具として作っていたのが・・・・・・・・・・・」
「それだよ、だんな！色とか感動することは出来ないけど日常生活に役立つじゃないか！」

ふむ、違った視線から見ることができるとは面白いな孤児弟は・・・・・・・・・・・

ものは試しだ！取り寄せて上手くいくかどうかみてみよう・・・・・・・

手紙を書き書き、路銀も請求。ついでに子爵様（笑）を回収する人手とか・・・・・・・・・・・・

上手くいけば儲けの種だな・・・・・・・・・・・よく気が利くな孤児弟よ。

あっ！そういえば少年の腕を癒すの忘れていた・・・・・・・・・・・・・・・

「忘れていて欲しかった。」

メクラ娘と灰髪少年（前書き）

とある王国王宮内官僚（たこべや）執務室

どうしてたこ部屋と俗称されるのか？
それはこの官僚の執務風景を見たとき逃げようにも近衛兵が巡回して制裁処置を頻繁に行っていたのが異世界人の目に留まったとき、たこ部屋とつぶやいたのが始まりとされている。
その異世界人にたこ部屋とはどのようなところだと聞いてみたら・・・・・・・・労働者を騙して監禁状態で働かせるところと答えたらしい・・・・・・・・

その当時の官僚達は自身の労働環境にぶちきれて、国王に怒りの鉄拳を食らわそうとしたら王族が逃げ出してしまい苦労したと史書に記されている。
官僚達の首謀がどこの貴族家だかは言わずもかな・・・・・・・・・・

現在も監禁こそされないが日々増え続ける書類と仕事に追われ続けている官僚達の居場所は貴族達の危険地域として認識されている。

曰く、近づいたら仕事を押し付けられる。
曰く、目が合ったら自身が官僚になってしまう。
曰く、適当な書類を作ったら軍を送りつけられる。
曰く、王族が泣いて逃げ出したらしい・・・・・・・

他にも噂があるのだが、ほぼ事実なだけにたちが悪い・・・・・・・・・

貴族たちは護衛もなしに近づくことはしてはいけないと共通認識されている。
最も護衛がいても無駄なのだが・・・・・・・・（合掌
必要なのは酒とお菓子・・・・・・・・ちなみに現金は厳禁である。

賄賂は別に構わないのだが、そこで余計な仕事が発生したらそれこそ官僚達がぶちきれるからである！

そんな王城の危険地帯、官僚部屋に一人の少年が書類と格闘していた。
彼の名は法務副長付法務補佐官見習。
父親の顔は知らず母親は彼を育てるために体を損ねた。
その母親を誇り、同じ境遇の者を作らないようにとこの場にいるのである。
その彼は今悩んでいる。

傷跡娘。
彼女も両親は既に亡く、その名残が顔につけられた惨たらしい傷跡である。
その傷跡でさえも、親が可愛い顔をしていると心無い者に無体されるから最後の力を振り絞って、誰もそういうものとして見向きしないようにつけたのだと言う。

この傷跡は方々手を尽くしたのだけど癒す術が見つからないと言われて諦めていたのだが、偶然か幸運か王室顧問が旅先で傷跡を消す術があると手紙に認めていた・・・・・

今王室顧問は温泉地に居るらしい、其処の療養神殿で傷跡を消す術があるらしい。

ただ問題は消すのに金貨6枚かかると言う事だ。
確かに補佐見習も傷跡娘も同年代の者に比べれば・・・・・・いや、一般市民から比べると数倍の収入を得ているのだが金貨6枚は大金である。
何年か働いてやっとこさ貯めて・・・・・・・・・・そんなことしたら傷を消す頃にはいい年したとなってしまう。消すならば今から消して彼女には楽しい青春を送って欲しいものだ。
とはいえ、金策をする相手も知らないし、金策をしたらそれをネタに色々面倒事があるだろう・・・・・・・・・・・・
生き馬の目を抜く程ではないが身辺の清廉さを求められる職場に宜しくない。
師父であり後見である王室顧問に頼めば気楽に出してくれるだろうが、これまでにも恩義があり世話になっているのにこれ以上手間をかけさせるわけいかないだろう。それ以前に傷跡娘に対して自分の力だけでどうにかしたいと見栄にも似た男心もある。

とりあえず、金がなければどうしようもないなと考えるのを放棄して目の前の仕事に没頭するのである。

金を出してもらうのは良いとしても少しずつ返していくしかないのだろうなとか思いながら・・・・・・・・
そして、今でも素晴らしい笑みを浮かべる傷跡娘から傷が消えたとき彼女の笑顔がどれだけ素晴らしくなるだろうなと思いにやけてしまう。

そして、今積みあがった白い山を前に補佐見習は筆を手に崩しにかかるのだった。

メクラ娘と灰髪少年

視力補助機能付目隠し布形魔具と共に聖域守護辺境伯魔術師団の四席が届けられた！
「俺は荷物じゃない！」

彼の手には過去色々作られた試作品の資料が握られている。
「王室顧問様、召喚に応じ参りました。」
「では、早速彼女に対して目隠し布の説明を願いたい。」

灰髪のメクラ少女を見て四席はこれが盲目状態に効果的に作用するかどうかは確定できませんがと前置きをしたうえで目隠し布と結びつける。

少女は少し戸惑った様子を見せたが、慣れてくると物を避けながらそこらにいる普通の子供みたいに動き回る。
今までの周りを探りながらの動きと違う。
「あははははっ！見える見える！みえるのぉぉぉぉぉぉ！！」

少女は笑いながら泣き、泣きながら笑い兄である灰髪の少年を抱きしめ、行き倒れたところを助けてもらった強力兄弟の手を握ってありがとうありがとうと言い続けるのである。

成功でよかった。
「王室顧問様、色が見えないとか魔力を定期的に補充しないといけないとか色々問題点があるけどよろしいので？」
「それはおいおい片付けていけばよいだろう。」
「まぁ、私が呼ばれたのはこれが商売として成り立つかどうかなんですけどね・・・・・・」

「で、これはどれくらいで作れるのだ？」

「一つ銀貨一枚程度でしょうか、目隠し布自体はそこらにあるものを使えるので元手は然程でもないのですが・・・・・・・・・・・魔具に使われる魔法陣を作るのに手間も材料もかかりますからね・・・・・・・・・・」

銀貨一枚か・・・・・・・・・商売とするとなれば銀貨数枚程度。

一般市民の数日程度の稼ぎか・・・・・・・見えないことの不便さを考えれば出せなくもない値段だな・・・・・・・

もう少し安くならないかな？

「まぁ、材料の質を落として魔力の補充頻度を上げるとかすれば銀貨半分くらいまで落とせるでしょうが・・・・・・・・・・」

「使用者の魔力を吸い取る形にしたら如何だ？」

「それでしたら銀貨半分でもおつりが出る程度になるかと・・・・・・・・・作ってみないとわかりませんが・・・・・・・・」

ちなみに初代庭園公が使った目隠し布は定期的に魔力を補充する型だったのだが、自分の有り余る魔力で定期的に自力補充していたらしい。今少女が恩恵を受けている目隠し布は初代庭園公と同型の魔法陣を利用している。

不便だったと言っていたからこれは失敗だと研究もされなかったらしい。

せいぜい、手品師や大道芸人が目隠しして何かする芸の仕込みとして利用する程度だった・・・・・・・

勿論、彼等は飯の種をばらされたくないから隠匿するだろうし、製作者にしても其処まで無粋でないからおおっぴらにしなかっただけなんだろうが・・・・・・・

少女は色々な動作をしてみる。
階段を上ってみたり踊ってみたり・・・・・・・・・女衆に混じって家事をしたり・・・・・・・
最初はおっかなびっくりだったのだが馴染んでくると手際も危なげなくなっている。

「灰髪少女、使ってみてどうかね？」
「そうですね、今まで見えなかったことから比べると色こそないけど普段使いには不便がないですね。色がないと言っても濃淡で結構判別できますし・・・・・・・」
「ふむ・・・・・・・・・・・・・」

これは少なくとも盲目（めくら）にとって朗報になるだろうな。
暫く少女を観察対象として雇うとして・・・・・・・・・
商売として使えるように問題点を浮かびだしてみるとするか・・・・・・・・・

目隠し布は何枚かあるけど誰か着けて見る？

孤児娘達と女衆の何人かが立候補してくれた。
男としての意見も聞きたいから強力兄弟、お前等も実験材料だ！

「旦那、実験材料はないでしょう！」
「酷い・・・・・・・・・」

「四席、魔法陣の改良について色をつけることと、自動吸収式にすることにはどれくらい時間がかかる？」
「自動吸収式にするのは数日、１０日もあれば形作る事ができると思いますが、色については・・・・・・・・・どれくらいかかるか・・・・・・・・・・・・まぁ、魔力の補充についても【灯火】とか【

種火】位の初歩的な魔法が使える程度の魔力があれば大丈夫だから大半の人が問題ないはずですよ・・・・・・・・・・・・」
「ここに居る人間でどれだけ補充できるんです？」
「孤児弟、おおざっぱに見てみると、強力兄弟と女衆の何人か除けば自力で補充できるよ。」
「成程、二種類の商品が必要になるのか・・・・・・・・・」
「そういう見方があるのですね、魔力のある人用とない人用と・・・・・・・・・・」

とりあえず、進めてみて頂戴。

数日が過ぎた。

治療を受けた灰髪の少年が涙目になりながら腕の痛みに耐えているのを公爵令嬢がこれはいいものを見たとむふーむふーと鼻息を強くしていたり、温泉に毎日浸かり続けて性愛神殿の女衆が艶々テカテカになっていたり。
婆様が行き倒れ兄妹を気に入って町を連れまわして遊んでいたり・・・・・・・・・・
私の矢傷も傷跡を残すまでとなった。左肩に違和感が残るけど、日常生活には問題なし。剣は握れなくなったが、戦うのは柄ではないし隠居生活送るから問題なかろう。
「御主人様、多分仕事押し付けられそうですが・・・・・・・・」
孤児姉、それは言わないでくれ・・・・・・・・・・・・　本当になったらへこむから。

目隠し布をつけている人の群れと言うのは思いのほか目立っていた。
観光客はこの地方の名産品なのかとかそれとも大道芸の一座の顔見世なのかと聞かれまくったのは笑い話である。
最初のうちは誰か付き添いを用意して町を巡って見たのだが、そのうちに一人で回っても目立ってしまう事を除けば問題ないことがわかった。
目隠し布って、目立つんだなぁ・・・・・
其処は上手い解決法がないな。

眼帯にして片目だけ覆うとかしてみたらどうだろうか？
「それは片方だけしか見えない状態だった・・・・・・・・・・・・」

他にも細々とした問題点があった。
「替えが欲しい・・・・・・・・」
「垢染みて不潔になった・・・・・・・・・」
「洗濯できるの？」

まず出てきたのが、衛生面。今使用しているのが女性ばかりだし、汗臭くなったのはつけたくないよね。
洗濯は大丈夫だがその間の替えが確かに欲しいところだ・・・・・・・・
それに布に刺繍しているから擦り切れたりもする。

「四席さん、魔法陣を布の間に包み込んで使うとか出来ませんの？」
女衆の一人の発言に四席は験しにと魔法陣を描いた札（霊木製）を目隠し布ではさんだ物を作ってみる。

「これは普通に使えますね・・・・・・・・・」

「後、お風呂入ると布だからぐっちょりと濡れるけどこれならば新しい布に変えれば良いから楽だわ・・・・・・・・・」
「それに、色々な目隠し布を用意して楽しめますわね。」
目隠し布を道具として考えないで衣装として考えるのか・・・・・・・・・
女性らしい視線だな。
「御主人様でしたら、どんな柄にします？」
「・・・・・・・・・・・ふむ、白か黒地に幾可学紋様(アラベスク)をあしらって見るとか、葡萄唐草も捨てがたいな。」
「単純に黒地に銀糸の縁取りなども似合いそうですね。」
「一つ作ってみるかな。私自らがつけていればとっつきやすかろう。」
そんな会話をしながら何日か過ごして居るうちに、色とりどりな目隠し布が出来上がる。
魔法陣を布ではさんで覆うだけでも効果があるとわかったら。
刺繍で色々な紋様を縫い付けたり、布自体も厚手の無粋な布から薄手の染め抜いた布を使ったりレースを使用したりするのもいる。って、言うか何時の間に作ったの？
「いやぁ、目隠し布でどこまで出来るか鉤編み針のレースを手慰みで作ってたものですから。」
「これで一つ手に職がついていると言うんじゃないのかね？」
「婆様言いすぎですよ。」
「いやいや、女衆のその技があれば十分食っていけるって！寧ろ俺がヒモになって・・・・・・・・・いてっ！」
ろくでもない発言をした強力弟は婆様の鉄拳制裁(あいのむち)にあった。
「あたしゃ、口説き落として嫁を作れとは言ったが、女にぶら下がるヒモになれといった覚えはないよ！」

「いたいいたいいたいいたい！」

まぁ、馬鹿はほっとこう。

レース編みの目隠し布は灰髪少女のお気に入りになったらしく。好んでつけている。

レースだけだと強度の面と肌への刺激から表面はレースを飾りつけ、裏面は柔らかい布で顔を保護する・・・・・・・・・

少女も女衆や婆様に教わりながら自分で作っているのだった。

皆してキャッキャウフフしながら手仕事をしている姿と言うのは絵になるねぇ・・・・・・・

「だんな、平和でいい光景ですねぇ・・・・・」

「そうだな。」

この目隠し布にはまだ問題があったのだが、それがわかったのはその夜。

温泉に浸かってゆるりとしていた孤児娘の一人が自分の顔を鏡で見た途端・・・・・・・・・・・

「いやぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

と悲鳴を上げる。

何事かと駆け寄ると女湯の前で孤児姉が我等の侵入を拒んで大事無い事を告げる。

そして暫し、宿の共用部分で待っていると落ち着いたらしい孤児娘と女たちが現れた。

どうしたのかと聞くと

「布の部分だけ日焼けしなかったから・・・・・・・・・・・・みっともなくなってしまいました・・・・・・・・」

孤児娘の顔を見ると、確かに・・・・・・・・・・黒白くっきりと分けられている・・・・・・・・・・・・・・・・・・これは確かに悲惨だ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

うぷぷ・・・・・

女の子にとって悲劇だろなぁ・・・・・・・・・・・・

ぷぷぷ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

笑っちゃいかんだろう！

「賢者様酷い！」

「悪い悪い！後で日焼け止め処方してもらうから。」

「絶対だよ！」

「それよりも化粧で誤魔化せますわよ。」

「その手があったか・・・・・・・・・・・・」

女衆も見てみると程度の差はあれ日焼けの跡が・・・・・・・・・・・・・・・ここのところ晴れ間続きだったしなぁ・・・・・・

「其処までは面倒見切れないです。」

四席も困ったような顔をしている。

そういえば庭園公はフードつきのローブを纏っていたけど、そういう理由があったのかも・・・・・・・・

思わず伝説の格好に込められた女心を突き止めてしまった気分である。

暫く表に出れないかな？

メクラ娘と灰髪少年（後書き）

さて、今宵も酒が切れたのでこれまで。日焼けはスキー焼けとかをイメージしてもらえれば・・・・・・・・・・

メクラ娘と黒髪孤児（前書き）

法務副長は最新の部下である補佐見習に向かい合っている。
「補佐見習、君には暫く南方国境辺境伯の経理部門に出向してもらう！」
「何でそんな遠くに？」
「とはいっても、王都にある伯の館兼南方国境辺境伯が所有する商会事務所になるのだがな。」
「又なんで・・・・・・・・・」
「いやぁ、それが・・・・・・・」
法務副長の口調は歯切れが悪い・・・・・・・・・

「出向の意味合いがわからないのですけど・・・・・・」
「実は、あそこの商会は我が国の産物を輸出するんだが、どうも計算が合わないと経理部門から言われてな・・・・・・・・・監査を兼ねて書類整理をすることになったんだ。単純に前の担当者が逃げてしまってな、書類が溜まったところでやっつけ仕事をしたのが原因なんだが・・・・・・・・・このままでは我が国の産業にも影響が出るからと泣付かれてしまったんだ。悪いが暫く行ってくれんか？」
「そりゃ、まぁ・・・・・・・・勝手が違うから役に立つかどうか判らないけど、それでよければ・・・・・・・・・」
「いやぁ、助かったよ！うちの奥が伯の姉に当たるんだが義弟に泣きつかれて困っていたんだ。多分１０日程で済むし、伯の所から案内人が来ている。悪いがすぐに向かってくれ。」
「副長、俺一人でいいのか？」
「傷跡娘君はこっちでも手が足りてないところの補助に当たってもらう。夫婦別作業で寂しいだろうが我慢してくれ！」
「夫婦じゃねぇ・・・・・・・！！」

「そう言っているけど傷跡娘どうなの？」
「・・・・・・・・・・・・／／／」
「まだ恋人気分でというところか。」「いや、補佐見習の甲斐性のなさから言えば手を繋ぐのが手一杯とか・・・・・・」
「それなのに大好きだからねぇ・・・・・・」「離れたら心配になるわけだよ。」
「・・・・・で、傷跡娘は離れてしまう事に心配じゃないのかな？」
「・・・・・・・・・・・・・・大丈夫。彼は私を捨てるだけの度量がない。」
「こりゃ参ったね。」「おじさん達は暑くてかなわんよ・・・・・・・・」
「勿論、傷跡娘を捨てるような事があったら死ぬほど痛めつけるけど・・・・・・・・・・・・」

「五月蝿い！！って、外堀から埋めていくな！」
「・・・・・・・・・・・あたしが嫌なの？」
「そうじゃなくって！・・・・・・・・・・・・・えっと・・・・・・・・・・・／／／」

「ほらほら言っちまえよ！」「其処だキスしろ！」
「このバカップルが！後は本人同士の告白合戦だけだから、さっさと済ませて楽になれ！」
「しかし暑いねぇ・・・・・・其処の犬耳の侍従官、これって食える？」
「こんなにあてられたら食えませんよ。ちなみに白眉心系です。」
「判るか！」

「うおっほん！」
法務副長の咳払いが場を静かにする。
「「・・・・・・・・・・・・・・・／／／／」」
若い二人は固まったままだ。
書類の山に埋もれた恋物語を掘り起こすものはなく、補佐見習は連行されてしまい傷跡娘は仕事に戻る。
「しかし、副長・・・・・よく貸し出しの話を受けましたねぇ・・・・」
「そりゃぁな、色々見せるのも必要だし補佐見習（あいつ）にも人脈が必要だろう・・・・・・・・・」
「それ以前に官僚部屋（たこべや）の実情的に・・・・・・・・・」
「まぁ、宰相閣下から伯からの報酬で酒手の補填をしろと厳命されてな・・・・・・・・・お前等呑み過ぎ！」
「「うっ！！」」
「補佐見習が売られたのは官僚さん達が飲みすぎたから？」
傷跡娘の視線にたじろく官僚達・・・・・・・・・
「彼には他にも東南香料子爵と北方針葉樹林帯伯、東方士爵連合領にも派遣される。王室顧問の弟子というのは即戦力らしいからな・・・・・・・」
「で、どれくらいで戻ってくるので？」
「半月から一月くらいでかな？お前等、補佐見習が尻拭いしているんだから、ちゃんと仕事して酒を慎めよ！」
「前半は了解！」
「「「「後半部分は鋭意努力します！」」」」

官僚達の酒は控えられたかは言うまでもなかろう。

おさけはたのしくてきりょうにー（ｂｙ酒精神）

メクラ娘と黒髪孤児

温泉町についてから一月程・・・・・・・・
宰相閣下と法務副長に頼んだ依頼で補佐見習は忙しい思いをしていることだろう。
どうせ意地っ張りで自力で金を貯めようとするが何時になるか判ったもんじゃない！

少しでも金を稼がせる手助けをして貰いたいと一筆認めたのだが返事はすぐに戻ってくれ！
孤児娘達を引き連れているのが痛いのだろう・・・・・・・・
後釜君達とか色々いるのに何故足りないのだろうか？

「正確には酒精と潤いが足りないと財務官様から手紙がありましたが・・・・・・・・・」
「城付の侍女とか居るだろう！」
「侍女さんや下働きのおねーちゃん達は危険地帯だから一人で行っちゃだめだとか、護衛付じゃないと来たくないと・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何やってやがるんだあいつ等？」

温泉町での目隠し布姿は住民達の間で馴染んで、気にもされなくなっている。
灰髪の盲目少女の為に行った実験は中々、悪くない結果を出してい

る。

療養神殿からも問い合わせがあったり、目病持ちの盲目達からも販売して欲しいという声がちらほら・・・・・・・近隣から態々、馬車とかを乗り継いできている盲目達を無碍に出来ないので魔法陣を銀貨一枚で販売している。

原価じゃないかといわれるが、まだ商売じゃないし・・・・・・・・目隠し布で利益を取ればよいだろう。

実際、色とりどりの目隠し布は本来の用途のほかにも髪留めのスカーフ代わりとかにも重宝されている。

今居る宿は期間限定のメクラ商会とでも言うべきか・・・・・・・後で商業組合に挨拶行かないと・・・・・・・・

「だんな、何か大掛かりになってきてますね。」

「一人だけ恩恵を受けさせるのは簡単だが灰髪少女がそのせいでいらん思いするのは良くないだろう・・・・・・・・だったら、商売にして沢山の者に恩恵が与れるようにするのが一つの手だ。」

「如何して身の回りだけ助けないんだい?だんなの財力だったら、十分に出来るだろう。」

「馬鹿言っちゃいけないよ。助けることは出来る、でも全部は助けられないだろう。そして助けられる事に慣れすぎてはいけないだろう・・・・・・・・・・」

「なぜでしょうか?御主人様。」

「お前等姉弟の様な根のしっかりとした者ならば助けられた事をきっかけに世に飛び立つことが出来よう。でも、助けられて当然とか考えて怠ける者が出たら困るだろう。怠け者が多いと私が怠ける事ができないじゃないか!判るか?世の中働き者が多くして私を養ってもらわないと困るんだ!」

「だんな、最後のネタ振りは良いから・・・・・・・・・・・・・・・」

ネタ振りではないんだがなぁ・・・・

本気で安楽な生活を送るには社会に余力が必要だ。そのためには盲目（メクラ）と言えども社会で役割を担ってもらわないと困る。

少なくとも盲目（メクラ）が表を歩き回れば彼等だって何かしらの働き口があるはずだ。

そうすれば、労働人口が増えて税収が増える。回りまわって貴族年金の支給が増えて・・・・・　収入が増えた市民達の購買能力も増えてくれれば私の投資しているところからの配当も増える・・・・・・・・・

左団扇でウハウハだな・・・・・・・・・・

取らぬ狸の何とやらと言う格言が異世界にはあってな・・・・・・・・・（ｂｙ商業神）

それ以前に、守護辺境伯一族から仕事が途切れる事なんてないだろう。（ｂｙ某王国地方担当地方神）

金運はいいだろうけど仕事運がなぁ・・・・・・（ｂｙ運命神）

おいこら神々！不吉な事を言うんじゃねぇ！

「王室顧問、神々に対して不敬ですよ！」

女神官に怒られた・・・・・・・・・・・・・・

まぁ、事業として成り立ちそうだな・・・・・・・・・・・・

この事業は孤児弟の発案だから彼に任せてしまうか。

「だんな、おいらに押し付けようとしてないか？」

「まさか、ちゃんと後見するよ。但し、お前が中心となるんだ！」

「なんで、おいらが・・・・・・・・」

「何時までも私の下で燻っている訳には行かないだろう。そうでなくても引き抜きの手が多いのだ！ならば力をつけて価値をあげておけ！」

「なんか、そうしたら仕事の山に追われる日々を過ごしそうでいやなんだけど・・・・・・」

「孤児弟、御主人様の隠遁癖がうつりましたか？」

「ねーちゃん、それはないよ！」

「兎に角、黒髪孤児準爵原案の目隠し布販売はお前が仕切るんだぞ！お前の働きで盲目（メクラ）共にも外を歩く楽しみが出来るんだ。悪くない話だろう。」

「そうなんだけど、おいらの子供時代ってどこ？」

「そんなのは知らん！」

孤児弟は青春の悩みを抱えながてしまったようだ・・・・・・・・・・

「おにいちゃん、よしよし・・・・・・・・・」

幼女にまで慰められるとは、まだまだだな・・・・・・

まぁ、一月もいると温泉客の中に既知が居たり人脈が出来たりもする。

療養神殿経由で温泉町の領主である温泉伯爵とかと語らう事があったり、近隣の領主からも目隠し布を産業として成り立たせたいと言う問い合わせがあったり・・・・・・・

この近辺の領主は以外と産業を起こしたがっているなぁ・・・・

「貴族様、この近辺は農業をやるには温泉の影響か良くないらしく

て・・・・・・・・・・・・自給自足に毛の生えた程度の生活ですからねぇ・・・・・・こういう特産品が在れば、領民の生活にも潤いが出てくると考えているのでしょう。」

灰髪の少年が地元の地の利を知っているからか答えてくれる。

「ふむ、温泉町のお土産とか療養器具としての需要があるだろうからな。ある意味温泉町を中心とした経済圏でおこぼれをあずかりたいと・・・・・・・・・・・・で、どうする？孤児弟。」

うーん　と暫し唸ってから。

「おいらは儲けようとは思っていないですから、広めて良いんじゃないかと思うけどな。どうせおいら一人の手では足りないだろうし温泉町近辺は信頼の置ける誰かに任せて早く恩恵が得られるようにしたらどうかな？」

お人好しだな孤児弟は・・・・・・・・・

但し、利益は少なくとも取らないとダメだぞ！

「おいらは食っていければ良いからね。それより働く皆がちゃんとご飯食べれるようにしないと・・・・・・・・・・」

「若旦那、儲けるだけ儲ければよいじゃない？」「慈善事業じゃないのよ。」

「ある意味慈善じゃない。」「それでも商売でしょう？」

周りが喧喧轟々・・・・・・・・・お前等の金じゃないだろう！

「単純な話、だんながおいら達に満足に飯を食わせて身奇麗にさせて教育までさせるのって貴族の嗜みだろ？」

「まぁ、そうだが・・・・・・・」

「だったら、おいらもそれに従って働いてくれる者達に十分食えるように行き渡らせないと嗜みにかけてしまうだろ。」

「ぷっ！　くくくっ！」

一本取られたな。あの年で私を超えていこうとするとは・・・・・・・

主人として師匠として悔しいやら誇らしいやら・・・・・・・・・・

「勿論利益は考えるけど、貧しい人だろうと出来るだけ多くの人に使えるようにすれば宣伝にもなるし売れる数は増えるだろ?はくりたばい?だっけ?商会公の教えでもあったろ・・・・・・・」

「ねぇ、孤児弟うちに来ない?未来の公爵とか狙えるわよ!」

「公爵令嬢、さらっと勧誘しないように。」

孤児弟は引く手数多だ・・・・・・・・・・

私の最高傑作だからな。

「孤児弟、これを持っておけ!」

「だんな!金貨じゃ!」

「勿論、呉れてやる訳じゃない!お前に出資(きたい)するんだ!大人達に舐められんように気を引き締めていけよ!」

「はいっ!」

金貨２０枚は多かったかな?

我が従者の門出の祝いには丁度良いか・・・・・・・・・・

「王室顧問、守護辺境伯爵家で商売する形になるんですか?」

「多分、それの一部門という形だな。それが孤児弟が舐められたりしないですむだろう。私達が後見するのだろうしな・・・・・・・・・・

「王室顧問の旦那、黒髪の若旦那が商売始めたら灰髪の兄妹を雇ったら如何です?兄は計算出来るから店番に持って来いだし、妹は看

板娘と言う事で・・・・・・・・・・・・」

「強力弟、なんか看板娘の意味取り違えている気がしないでもないが悪くないな・・・・・・・・・・」

「俺達兄弟と違って外見も誠実(まとも)そうだし頭も悪くない、妹も手先が器用だから自分で目隠し布を作って飾り立てればいいじゃん。」

「くっくっくっ！お前等兄弟では、店に立ったら客が逃げてしまうだろうからな。」

「旦那！それは酷いですぜ！」「男は顔じゃない！筋肉だ！」

強力兄弟の情けない苦情に周りの衆は笑い声を上げるのであった。

メクラ娘と黒髪孤児（後書き）

タタミイワシの香り漂う宰相府。
時々海苔の香りも漂うのだが、ここは海鮮居酒屋(のみや)ではない。
れっきとした王国政治の中枢を担う者達が日夜、書類と格闘する場所である。
そこで悪巧みをする三人の中年親父。

「宰相閣下、補佐見習を南方国境辺境伯家に派遣いたしました。」
「うむ、王室顧問も回りくどい事をする。経理の査察にかこつけて、補佐見習の人脈広げとは・・・・・・・・・財務長、君のところの査察部隊でも良かったのでは？」
「もっとも、王室顧問としては補佐見習に小遣い稼ぎをさせるのが主目的みたいですが・・・・・・」
「ふむ、なにかあったのか？法務副長。」
「いや、なに・・・・・・・・傷跡娘の傷跡を消すのに治療費がかかるらしくて、それを自力で稼ぎたいと言う事を察したのでしょう。王室顧問はひねくれ者ですから回りくどい事をしているのでしょう。」
「ああ、あの傷跡が残念な可愛い娘か、補佐見習が躍起になるのも判る。実際の話として、依頼した各貴族家は王室顧問を嫌っているところもあるぞ。それは大丈夫なのか？」
「それは大丈夫でしょう。補佐見習の力量は経理実務者としては有能ですからね。若手としてはと言う但し書きはありますが・・・・・・・・・それ以前に彼も王室顧問にしごかれた恨みがありますから・・・・・・・・・」
「恨み言を言い合って仲良くさせようってか・・・・・・・・・王室顧問は悪役が好きだと見える。まぁ、危険がなければ問題ない。

一応、ワシの方からも手の者をつけておくけどな・・・・・・・・・」
「おやおや、宰相閣下も甘いことで・・・・・・・・・・」
「あれは、失うに惜しい人材だからな。寧ろ今からでも引き抜きたい！」
「引き抜かないでください！ワシが死にます！」
「無論冗談じゃ！」
「目が本気ですよ！二人とも！そして財務長、其処で財務官として引き抜くための予算作成しないで！」
「ちっ！」

「おやおや、何をたくらんでいるんだい？」
「面白そうな話ね・・・・・・」

其処に訪れたのは国王夫妻。多分、仕事で来たのだが三人の悪巧みに耳を傾けて面白そうだと首を突っ込んだんだろう。

「これはこれは陛下に妃殿下・・・・・・・・・・」
「大した話ではないのですが・・・・・・・・・・」「悪巧みと言うほどの事でも・・・・・・・・・」

「話を聞かせてもらえるか？」
「はい、赫々云々・・・・・・・・・・」

宰相閣下が補佐見習の派遣と傷跡娘の傷の治療費の話をしたら・・・・・・・
王妃がニヤニヤと顔を歪める。
「これは若さ溢れるかっこつけだこと。」
「補佐見習も意地っ張りだな。一言周りに相談すれば予算くらいつけるのに・・・・・・・・」
「陛下、一応国庫なので贔屓は宜しくないかと。」

「堅い事言うな財務長。あの子達は功臣だぞ。それに報いなくてどうする（ニヤニヤ」

「そうでしょうとも・・・・・・・・・・　でも、男の甲斐性と言うのを見せたいと言う補佐見習の維持を尊重してあげるのも（ニマニマ」

「で、法務副長は派遣と言う形で金を稼がせようとしたわけですよ陛下。」

「まぁ、補佐見習の人脈を広げて将来につなげるのが一つと、あわよくば貴族家のあらを探して弱みを握れればと言うのもありますが・・・・・・・・・・」

「おぬし等も悪よのぅ・・・・・・・・・・・（ニマニマ」

「いえいえ、王室顧問の悪辣さに比べれば（ニタニタ」

「そんで、稼いだ金で傷跡娘の治療をするところを見て冷やかすのですな、あの王室顧問は・・・・・・・・・・（ニマニマ」

「この男達ときたら子供の純情を話の種にするのね・・・・・・・・・酷いわ・・・・・・・・・」

「そういう王妃様は一口乗らないんで？」

「勿論、女性陣達とのお茶会で話題にするわよ。こんな可愛らしい話皆食いつくわ・・・・・・・・（ニヤニヤ」

「王妃様も人が悪いですな（ニタニタ」

「そろそろ補佐見習だっけ、あの子の働きには一目置いているから褒賞とか渡したらどうかしら？」

「王妃よ、それは良い考えだな。王室顧問一門が居ない間官僚部屋を支え続けたのだからその功は褒め称えるのにふさわしいな。」

「この分だと治療費以上に稼いでしまいそうですな。」

「いや、何・・・・・・・旅路の費えも入用でしょうし、問題な

いでしょう。」
「若い二人の婚前旅行ですかな・・・・・・・・（ニヤニヤ」
「そのまま帰ってきたときにはお腹に子供とか・・・・・・・・・・・・（ニタニタ」
「好きあっている二人だから問題ないですしな・・・・・・・・・・・・（ニマニマ」
「その時は式を盛大に挙げませんとね（ニヤニヤ」

「こらこら、お前達人相が悪くなっているぞ。」
「陛下こそ・・・・・・・・・」
「我は可愛い配下の為に心砕いているだけであって・・・・・・・・・・・・・」
「語るに落ちてますわね。」
「「まったくです。」」

補佐見習が知らない間に傷跡娘の治療費が集まりそうな宰相府であった。
勿論、依頼した貴族家達からも礼金と言う形で補佐見習の所に来るのだが、これも宰相や法務副長が手を回しているのは言うまでもない・・・・・・・・・

補佐見習のためと称して、貴族家に恩を売ったりあらを探したり・・・・・・・・・・官僚達の大酒に釘を刺す。あくどい中年親父達であった。

王都帰還と泣きつき貴族（前書き）

あらすじ　王室顧問は温泉地でのんびりとしたかったんだがメクラ少女の為に商売を始める。

週間ユニークを見て６６７がとても残念と思った作者である。どうせ底辺書き手なんだから６６６と合わせてくれても良いのにと・・・・・・

ウケを狙ってお気に入りも６６６とかならんかな？

王都帰還と泣きつき貴族

目隠し布に関しては温泉伯爵とその近辺の領主達との間で話し合いが持たれる。
別に孤児弟は儲けすぎる事を目的としていないので、気前よく条件をつめるのである。

・魔法陣を孤児弟から買い取る事。
・目隠し布を作る職人さんたちには十分な賃金を支払いむやみやたらなピンはねとかしないこと
・出来るだけ安価に仕上げる事（勿論、目隠し布の芸術性を高めて高価にするのは認めるけど貧しいもの向けに安い者を用意しろと）

ここで、商売として考えられる利点としては3点目。金持ち相手にはどんどんボッタくれと暗に示しているのである。
その分貧しいもの向けにはちゃんと優しくしてやれとも言っているのだが。
これでごねる様だったら温泉地の街道の領地を奪い取って、関税を使ってこの近辺をメてあげればよいだけなんだが（邪笑

「だんな、その前に街道沿いに飛び地あったじゃないか！」
「そうだねぇ・・・・・　それをやると他まで影響あるから・・・・・・・・貴族連合で温泉地を（以下略」

それを聞いた貴族達は青ざめて条件を飲んでくれた。
ちゃんと儲けが出るように知恵を貸してやるから心配するな。
それに貴族連合なんて冗談だ。
せいぜい孤児娘達の査察・・・・・・・・・・・・・・・

「いやぁぁぁっぁぁぁ！・・・・・・・・・・」「ごめんなさいごめんなさいごめんんさいごめんんさい・・・・・・・・・・・・」

えっと、孤児娘達何やったの？

その後、温泉地方特産の目隠し布は下流から中流までの家庭に生まれた盲目（めくら）達に流行して末永く愛用されるのだが別の話だ。

話し合いに参加した領主達も自分の領地の盲目（めしい）の為に身銭を切って購入してくれたのだから馬鹿ではあっても欲深ではない。其処は孤児弟も判っているらしく、利益が出る話をして領主達《一部代理あり》の関心を得て居たのは笑い話だ。

まさか娘の婿とか孫の婚約者とか・・・・・・・・・・言われるなんて・・・・・・・・・・

「この近辺の小領主は荘園に毛の生えた程度とか村ぐるみ領主家の縁続きみたいな者が多いですから・・・・・・・・・・」

と説明してくれたのは灰髪の少年。

この近辺の状況に詳しいし、礼儀も正しく教育も受けている・・・・・・・・・・

そこそこいいところの子供だったんだな。

この子供は拾い物だ！商売を仕込んだら目隠し布のこの近辺の責任

者みたいな者にしてもいいかな？
もっとも、妹と家族と慎ましく暮らせればいいと思っているから受けないかもしれないが。

どうして、世間は孤児と言うだけでこんな原石を放置するのだろうかな？
「それは御主人様が拾ってくれるのを待っているからですわ。」

孤児姉それは買いかぶりだ！

「いえ、私達兄弟は御主人様に見出されなければそこ等の路傍で朽ちていましたわ。」
其処まで評価するに及ばない。
私は私欲と道楽でお前等を拾ったに過ぎないのだから・・・・・・・・・・

目隠し布は温泉地帯のおみやげ物になった。
療養魔具としては神殿が管理する事なり、神殿が魔法陣を安く提供する事で貧しいものでも恩恵にあずかれるようにしている。

神殿を管理する側にお願いしたのは実は視力付与の魔法陣が暗視と言うかそれに近い力を秘めていて、暗いところでも見通せることに気がついたからである。
今まで、色々使用条件とか探っていたのに暗いところでの使用に考えが及ばなかったのはわれらが普通に見えるからであった。盲目（めくら）は普段から見えてないから暗くなったからとは言え明かりを燈さない。

暗いところで平然と作業をしている灰髪の少女を見て、その話を聞いてからこれはヤバイと考えたためである。

少し考えてみよう、暗いところでも見えるならば泥棒にとって明かりをつけずに進めると言う事だ。盗賊にとっても夜襲をかけて襲い放題だからな・・・・・・・・・・・・

進歩とは犯罪と表裏一体なのか？

魔法陣は管理販売される事となったが、利益は少しだが上がっている。

孤児弟の懐はこれで潤う。私が居なくても配当だけで慎ましくは暮らせるはずだ。

この馬鹿は元街娼達を手つきにして全部幸せにすると言い切ったからな。

師父としての手助けはこれまでだ。

さて、温泉に浸かるか・・・・・・・・・・・・

矢傷もいえた私は酒も解禁となる・・・・・・・・・・・・

温泉に酒を持ち込んでゆるりと舐めながらこの町を眺める。

いい月だ、いい街だ。

丁寧に丹念に慈しまれたのがわかる街だ。

私は酌婦として孤児姉を呼び、ゆるりと酒を楽しむのであった。

次の日の朝、伯爵から王都に戻ってくれと拝み倒された。
何々・・・・・・・・・・・・・王都に戻ってください・・・・・・・・・・・
・・・と国王からの依頼状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
そりゃ断れないな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

近隣の領主たちにも配られているらしく彼等もないているそうな。

仕方ない、いくとするか。
いざ王都へ！

王都帰還と泣きつき貴族（後書き）

今宵は酒が切れたのでこれまで。

王都帰還と六大公爵（前書き）

あらすじ　作者の文章の大半は誤字と偏見とシモネタで満ち満ちております、お見かけの方は罵詈雑言と共に感想を書かれると・・・・・って、あら探しじゃねぇか！

王室顧問一行は人数を増やしながら王都に向かう。

王都帰還と六大公爵

王都へ向かうとしても準備は要るし面倒なんだよねぇ・・・・・・・

「はい、王室顧問様。護衛隊に旅に必要な物を揃えた物資運搬隊を用意いたしました。」

ここで遣り残した事が・・・・・・・・

「ご心配なく、商会公より黒髪準爵殿が起こした事業を恙無く行える人材を借り受けました。人材の借り賃は王国持ちですのでご心配なく・・・・・・・」

私が王都に向かう必要は・・・・・・

「それでしたら宰相閣下と官僚の皆様方が仕事を・・・・・・・・・・・・・」

「それはやつらのわがままだろぉぉぉぉぉ!!」

ばちこーん!

思わず王都からの使者殿を星空のたびにご招待と洒落込んでしまった。

まぁ、神秘緋金属張扇(オリハリセン)だから怪我一つもないだろうが。

王弟殿下だったら毛が一つもない・・・・・・・・になるのだろうが、くっくっくっ・・・・・・・

仕方がない、王弟殿下(はげ)が仕事していないだろうから穴埋めに行くか・・・・・・・・・・

「だんな、普通に報告を待っているんじゃないですか？」
「そうだろうけど、王弟が先に行っているから恙無く処理しているのではないか？」

「いえ、そう言う訳ではなくて・・・・・・・・・・・・」
使者殿が言いにくそうに
「出立のとき派手にやらかしましたよねぇ・・・・・・　それで市民達が浮き足立ってしまいまして、今まで王室顧問一行が帰ってこないのは王族が貴族と結託して王室顧問達を潰したからだと言い張る者がいまして・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・そういえば情報操作していたよなぁ・・・
それで制御利かなくて、暴動寸前と言うわけで・・・・・・・・・・・・

「なにやっているんだか・・・・・」
「それを言われると答えを返せないです。」
「御主人様、公式には王弟殿下が責任者と言う事で編成されたはずですが・・・・・・・・・・・・・・」
「そうだよなぁ・・・・・・・お目付け役といっても若年の孤児弟では年経た貴族の相手はまずかろうと言う事で出陣されたはずだが・・・・・・・・・・」
「だんな、もしかして王弟殿下の存在が・・・・・・・・・・・・」
「皆まで言わないでください！事実その通りなんで、頭痛いんですよ！噂では、全裸賢者が死亡したとか・・・・・・・・・・・・・・・査察部隊を見捨てて帰ったとか・・・・・・・・・・・・・・・　色々言われて、市民たちは義勇兵を募って奪還しに行くだの自由民の意義を見せるだの大変なんですから・・・・・・・・・・・・・・」

使者殿の広くなった額を見ながら、この人も王族（へんじん）に迷惑受けている

んだなと同情してしまう。
「だんなに苦労かけられているんじゃない？」
「黒髪孤児準爵殿、どうか貴方様からも力添えを・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・そんなに寄らないでくださいよ！頃合を見て帰るつもりだったし。」
「そう言わずに一刻も早く・・・・・・・・・・」

頃合だし帰るか・・・・・・・・・・・・
って、どこまで緊迫しているんだ！
「市民義勇軍３００が出立するところですが・・・・・・・・現況で聖域守護辺境伯私兵団が止めにかかっているところですが・・・・」

「えっ！あの聖域守護辺境伯私兵団が！」
「守護と名ばかりの突撃兵団が？」「王族を守る側になるなんて・・・・・・」
「「世も末だ！」」

ちょっと待て！同席の貴族達！
貴殿等の認識は間違っている！聖域守護辺境伯私兵団は世の不平に嘆く者たちの聖域（アジール）となるべく誓いを立てた無私の兵団だよ。決して王族に楯突くためではなくて・・・・・・・・・・
「王族が愚かしいですから結果的に楯突く羽目になると・・・・・・・」
「一度王を追い落とした前歴があるからねぇ・・・・・」
「私兵団じゃないけど経理部隊（孤児娘達）が王だろうと関係なしにかましてますから・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・行きますか、市民

義勇兵の出番を取るようで悪いのだが・・・・・・・」
「それで良いんですよ。戦いは貴族の仕事、行いを正す事を民に委ねるとするならば貴族は無駄飯食いですから。」

言うねぇ・・・・・・・この使者殿も
「本当に王室顧問様、如何して誘ってくれなかったんですか！戦いのときは今か今かと斧鑓を用意していたのに・・・・・・・・・」

こいつはただの戦闘中毒者か！
独逸もこいつも王都にはまともな者は居ないのか？

「類は友をと言うし・・・・・・・」「俺達田舎貴族は関わりたくないし・・・・・・・」
「やはり王都は危険地帯だったんだ・・・・・・・・・」「我等は大地に根を下ろして静かに暮らそうぞ」
「だな、だな・・・・・・・・・」
「王室顧問と同等の者ばかりだと・・・・・・・怖すぎる・・・・・」

「・・・・・・・・・この貴族共が・・・・・・・一緒に王都に着やがれ！私はそんなに酷くない事を証明してやる！」

「無理だな。」「御主人様、それはいくらなんでも・・・・・・・・・」
「旦那・・・・・・・・・そんな冗談言っても信じてくれないって。」「王室顧問は・・・・・・・・げふんげふん」
「賢者様は王族にも負けないと思う。」「なんたって世界相手に喧嘩売る人だし・・・・・・・」

まさか身内から・・・・・・・・・

皆して王都にいくがよい、私は傷ついた心が癒えるまで温泉で過ごすから・・・・・・・・・・・・

「はいはい、行きますよ！王室顧問様！」

ずりずりずり・・・・・・・・・・功臣に対する扱いじゃないよな・・・・・・・・・・・・・・・

王都までの道は平穏だった。

護衛部隊付となれば、ちょっかい出す馬鹿も居ないだろうしすぐに着くのは仕方ないか・・・・・・・・・

お土産忘れた！

まぁ、孤児娘達が買っているだろ。

そして王都そばまでつく。

「我々はここまでです、皆様が無事に旅路を終えられる事を・・・・・・・・・・・・・・・・・」

王都につく

其処には王弟殿下と六大公、辺境伯私兵団の儀仗兵部隊とか諸々が大群揃えて待っていた。

王都帰還と六大公爵（後書き）

酒が切れたので今宵はこれまで・・・・・・・・・・・・

酔っているときの誤字脱字率は半端ない。

素面のときに読み返してみたら・・・・・・・・・・あわてて訂正してしまう。

王都帰還と義勇兵（前書き）

全裸賢者様が弟子の叫びに応じて王都を発たれて三月ほど、その時の戦支度は万全で煌く鎧に人馬の群れが是でもかとばかりにひしめいていた。

王都の民達は誰もが思った。

賢者様の激に応じて多くのものが立ち上がり、御伽噺の再来とばかりに世界に喧嘩を売るのだろう。そして、悪い貴族様を懲らしめて目出度し目出度しと・・・・・

そうしているうちにも月日は経つ、半月がたち、一月がたち・・・・・・・・・・・

季節が変わって、実りの時期が過ぎて眠りの季節がくる。

王城には報告が届いているから心配する声がないのだが、王都にその情報が届かない・・・・・・・・・・・・・・・・・

伝手があれば状況がわかるのだろうが、判っている者は心配してないからほとんど情報を流さない・・・・・・・・・・・・・・・聞かれれば答える程度なんだろうがそんなものである。

そうして何時しか一つの噂が流れた。

賢者様と弟子達が帰ってこないのは戦場で怪我をして動けないからではないか？

全裸賢者が怪我をして療養中なのは事実だが、戦になったと言う話と保護された人々のあまりにみすぼらしい姿に真実味が増す。

生粋の王都の民は小さな頃から御伽噺を聞いている。其処に出てくる六公爵の先祖達の活躍や関わる人々の命がけの献身、始まりの子

供の叫びを刻み込まれていて育っている。
最古からの王都民はその伝説の一端を担ってきた者が先祖である事を誇っているし、おれっちの先祖は御伽噺で公爵様に水を捧げたんだ!とか、鉄丈の従者の弟の子孫だとかと言う家系がそこらじゅうに居たりする。多分誇張とか自称もあるのだろうが御伽噺の事、皆大らかに受け入れているし子孫を自称する者達も先祖に恥じじないよう身を処している者たちが大半である。

要は、王都の民は大馬鹿者のお人よしなのである。
でなければ、スリを働いた孤児弟を庇う衛士などいないだろう。

兵の大半が帰ってきたあるとき、賢者様の一行が見当たらない事に不審を抱いたある市民が兵に聞いてみると。
「賢者様は後から来る。矢傷を負われた中、不正がないか無理をしたらしくて少々行軍についてこれなかったからな。」

賢者様負傷・・・・・・・・・・

人々は保護されて王都で養生しているし、最初にたどり着いた子供たちは孤児院で保護されている。そこで感動の再会とかがあったり、子供達だけで行かせた事に反省して涙する親の姿とかも・・・・・・・・・

如何して賢者様が戻ってこないのだろう?
市場で酒を飲む姿がないことはとても寂しいし売り上げにも響く。
つられて来る貴族や他国の戦士たちの姿がないのもとても寂しい・・・・・・・・・

早く戻ってきて欲しい・・・・・・・・・・
ならば迎えに行けばいいじゃないか?

王弟を自称する禿げた親父の言う事は信じられるか？
それならば弟子達の一人を連れてきて説明させるだろう！
手助けに行った異国の戦士達は傷ついているし、兵の数も足りない・・・・・・

最悪の状況とか戦場を覚悟して準備しないと・・・・・・・・・
せいぜい、数人が馬車と護衛を仕立てて様子見にいけばよいかと思っていたのだが賢者様を守るための人数が必要だなと言う話になって我も我もと押し寄せてくるのであった。

その情報を聞いた衛士は吃驚してとりあえず王城のほうに問い合わせるから落ち着けと言うが収まりが聞かないのである。
そこで賢者様のご実家である聖域守護辺境伯家の当主が私兵団を率いて押さえに来るのだが、どうせ実家の頭首争いとかで云々と聞いてくれない。

温厚な人柄で知られる辺境伯様も末弟を見捨てただの殺したただのといわれてカチンと来たらしくお前等は暫く待っておれと囲む始末。
まぁ、辺境伯様は優しいお人柄。態々末弟のためにと集まってくれた義勇兵の為に酒やら食べ物やらは差し入れたのだが・・・・・・・・・

其処で意気揚々となった酔っ払い義勇兵達。

酔わして騒がしておけば暫くは大丈夫だろうと早馬で状況を知らせたり迎える準備をしたりするのであった。

この（自称）義勇兵たちは無意味に騒いだだけだったのだが、王族も辺境伯家も咎めだてする事はないのだった。勿論、彼等は手弁当で数日もいたから素寒貧になって細君やら母親から反省しろと折檻

を受けた者が多いという（合掌）

王都の古老がその当時の事を語る。

王都帰還と義勇兵

何で王都の城門に六大公と王弟殿下(はげ)が？

「おれのルビにはげと振るな！それに市民達がお前の事を心配しているんだ派手に元気な姿を見せて安心させてやれ！」

「温泉でのんびりするんだったら、手紙くらい寄越せ！」

「いいですわねぇ・・・・温泉。お勧めの宿を教えてくださるかしら・・・・・・・・」

「庭園公、それは後にでも・・・・・・・・・・」

「でも羨ましいのぅ、綺麗所従えて物見遊山。ワシもやりたいよ。」

「奥方連れて行けばよいじゃないですか！」

「あの古女房をか・・・・・・・・・・・若い子と入りたい。」

「また、奥方様に折檻されますよ。」

「それは兎も角、進もうではないか！城門がふさがって邪魔だと言われそうだ。」

「「「「「「御意！」」」」」」

我等は城門へと入る。

先触れの旗手は鉄色の騎兵鎧を纏い王国旗をたなびかせる。

それに従うように六本の旗を風にはためかせる歩兵。

古びた腰布の東方開放建国公旗

一輪の花に女性の姿を重ね合わせた西方庭園建国公旗

古びた金貨袋を束ねただけの商会建国公旗

様々な種族の髪を織り込んだ無地の人外建国公旗

海老茶に双葉の刺繍を施した農園建国公旗

黒地に金糸で馬の刺繍を施し、各部族の名前を銀糸で刺繍している騎馬建国公旗

その後ろから白銀の軽鎧に白の戦外套(サーコート)其処に刺繍されているのは【幼子の叫びを聞いて汝何をする】と古き言葉。まるで世界に対する嫌がらせを我等はするのだとばかりに白銀の盾を構え、我が両腕(アジール)は聖域也を奏でながら行進する守護聖域辺境伯儀仗兵団（自称）

見事な方形陣でその内側から楽隊が演奏している。王族が一番怯える曲の一つであろう。

「何をやったんですか御主人様？」

「件の王族追放のとき王都全域でこの曲を流して囲んだらしい。」

「それは・・・・・・・・・（汗」

「でも、逃亡奴隷とか言われなき罪で息を顰めていたものたちはこの曲を頼りに保護を願い出たらしいから歌うなともいえなくなってね・・・・　時折、嫌がらせ代わりに辺境伯家では奏でるのだよ。」

「嫌がらせですか・・・・・・・・・らしいですね。」

その後に王弟を頭に錐形陣を組む六大建国公。

皆、其々の乗騎に騎乗している。

って、言うか人外公は竜に乗っているし、農園公は荒ぶる毛長牛、庭園公は黒虎かよ！

後に続くのは孤児弟が乗る黒馬。

それに従うように美形の女戦士である公爵令嬢、荒野の民の騎馬戦士(ソン)が来る。

その上空を【飛行】の腕輪で飛んでいる孤児娘達。勿論風の神の加護でスカートの中は覗けない！

うむ、我が加護は完璧だ！（ｂｙ風の神）

極北戦士団に囲まれるように強力兄弟がそれぞれ大剣と鉄棍を片手に幼女とその兄を肩で座らせている。
見た目厳つい戦士達は其々の得物を手に子供を守るとばかりに雄叫びを上げている。

こうやって見るとどっちがどっちだか判らないな。

「御主人様、婆様に頭が上がらないのが強力兄弟で、大使夫人に頭が上がらないのが極北戦士では・・・・・・・・・・」
「その区別の仕方はあまり意味がないぞ。」
「・・・・・・・・・・・・・・」

そして、それに続くのが私と孤児姉が乗った馬車である。
王都の前で今まで乗っていた馬車を幌無しの馬車に乗り換えて民草に顔を見えるようにしている。
私は孤児姉に酌をさせながら杯を掲げて飲み干すのである。

「御主人様如何して酒を？」
「そりゃ、私が元気であるのを示すのは酒を嗜んでいる姿が一番だからだよ。」
「こういうときにまで・・・・・・・・・呑まなくても・・・・・・・」
「ほら、膨れていないで・・・・・・・・」
私が孤児姉の頭をなでると孤児姉は仕方ないなとばかりに杯を満たすのである。

そして性愛神殿の面々が傷だらけの旗手を頭として馬車で進む。
それを守るかのように騎馬戦士達と奴隷戦士達が始まりの御伽噺を
謡いながら進むのである。

世界の子供を集めたる　我等王国(はざまのくに)の民草よ
今より語るは建国の　大地に眠る父母の痛みに満ちた叫びの話

遠く昔の大地には　諸々の民がそこにあり　交わり知らず過ごしてた
神々の加護厳しくも　大地のゆりかご優しくて
生まれて死ねる幸せと　子供に繋ぐ喜びに満ちた世界はそこにあり

異形の民は旅をして、人の子増えて街広げ
互いに出会うは運命か

互いに違う形(なり)だから互いに異形と争わぬ。
争い満ちて世界は揺るぎ、人の子は自ら聖王と
異形の子等はまとまりて、魔王を立てて旗印
互いに憎しみ争いて、攻めては引いての浪のよう

違う形(なり)でも思いが通う　語れば判り　杯交わす
幸いの型見出した　小さな小さな異形の子
父は異形で　母は人の子
互いに出会い　認め合い　生まれ落ちたは混血児(あいのこ)よ
愛の子なるか　哀の子なるか

それは彼しかわからない・・・・・・・・・・

戦場（はざま）の地にて古くより風と大地を奉る　馬の一族其処にあり
彼らは戦を好まずに　全ての民を友とする。
疑心暗鬼の世界の中で何たる愚かな行いか
男は焼かれ焔の舞よ　女は大地に捧げられ
一族の血は絶えんとす　彼等が願うは荒野の平穏
如何して互いに争うか　優しき彼等に知る術もなく

戦の耐えぬ両者ゆえ　戦奴隷は山となる。
その地を耕す農夫は言った　耕すそばから赤い水
石かと思えば誰かの骨と・・・・・・・・・・
戦い続ける時代は続き　奴隷は戦の中でしか生きられないと思い込む
そして魔王の軍勢が押し寄せて　我が身の最後にふさわしき
戦いなるかと勇み出る
無情なる哉人の子は　奴隷の群れを盾として
下がり酒宴を行いて　篝火を見て笑いあい　焼ける煙を馬鹿にする

大地が産んだ癒しの子　異形の者を癒しつつ
戦で悲しむ我が母を　癒し命を与えんと
削るは命の塊で　失う光　傷は癒えずに・・・・・・・・・・
異形の民は馬鹿にする　愚かな娘役立たず
盲目（めしい）の娘は故郷を　出されて流浪の旅をする
手にした無骨な鉄の杖　導きの手は声なき男
いつかは大地を癒さんと　男は娘の杖となる

戦の費えはどこに来る？　名もなき民を搾り取れ！
この一戦は人族の興亡かかるものなれば
妻子も売って金にしろ！　無情な王の一言に
全てを失う商人の　嘆きの叫びは如何許り！

失う全てを取り戻す　無力な男の戦いは
黄金の壁を築くまで　妻子と幸い戻るまで

耕すそばから灰になる　農夫の嘆きは大地の嘆き
実りの詩を分かち合え　互いに幸い称え合う
千の剣で万を滅ぼし　万の実りで億を満たして
其処の腕で剣を振るう　其処の腕で鍬振るう
どちらが幸いなのだろう　農夫の問いは世界に消える

叫びあげるは最初の子
その問い答えるものはなく
戦火絶えぬ廃墟の町で
飢えて朽ち逝く無力な子
人も異形も関係無しに子供は集い
異形も人も関係無しに子供は集い
互いを兄弟姉妹とし
互いを友と認め合う
叫びあげるは最初の子
その地の王に拾われる

人の防人たらんとす　古き血筋の盾の王
叫びの子供を拾い上げ
集いし子供を鍛え上げ
故郷荒らす人と魔を　殴り世界に雄叫び上げる！
荒れた故郷前にして涙を流す盾の王
集いし六つの剣を前に
子供に王位を授けたる

神をも殴り　叱りつけ

和平の道に導かん！
始まりの子の叫びは響く
千すら越える悪意の中を　万すら越える殺意の中を
人が押すなら壁になり　異形が押すなら盾となる
そうして荒れた故郷を　整え国の型をなす

戦に飽きた人の子と　殺しに飽いた異形の子
手に手をとって流れ着く

世界を殴った始まりの子供は国の王となる
人の子からは裏切り者で　異形の子からは愚か者
世界を分けたこの国は人と異形の盾になる
世界は戦に飽いている　大地は鮮血呑み飽きた

今は大地の傷癒し　今は心の傷癒す
今は世界の傷癒し　今は戦の火を絶やす

我等狭間の王国に生まれ幸い求める民よ
形（なり）の違いはなんのその
語れば友となりうるものよ

さぁ、杯を高く掲げて　幸いの詩を紡ごう

今より遠く　古に互いに杯交わしたる
古き建国の英傑達のように
古き建国のお人よし達のように

乾杯！

騎馬戦士と奴隷戦士が謡い合う建国の昔話を王都中に響かせながら市民たちは戦始末を見ようと駆け寄る。
そこで六大建国公に囲まれた孤児弟は一つの物語となるのだろう・・・・・・・・・

「しかし、御主人様荒野の天幕で聞いたのと違う気がしますけど・・・・・・・・・・」
「大筋では変わらないさ、でも其々の主観があるからね。」
「そうですか・・・・・・・御主人様顔が赤いですが大丈夫ですか？」
「どうも、建国の語りを聞くと恥ずかしく思えてくる。先祖の歯の浮いたよう発言が嫌なのだろう。」
「くすくすっ・・・・・・・・・・」

先触れの旗手が叫びをあげる！
「さぁ、王都の自由民からなる義勇兵諸氏よ！幸いをつなげんと叫びをあげた黒髪孤児準爵とその精兵達に礼を持って迎えよ！」
王都中から集った義勇兵達はそれぞれの得物を高く掲げ我等を迎え入れる！

それに応じるように孤児弟は神秘緋金属張扇（オリハリセン）を高く掲げる。
日の光に乱反射する赤銀の張扇は世界に対して突っ込みを入れるとばかりに力を湛えている。

うむ、我が神器は世界の理不尽に対しても突っ込みを入れるようになったか・・・・・・・・・・

笑みを求める者の為ならば我が力を授けたかいがある（ｂｙ演芸神）

あっ！なんか演芸神の分際でまともな事を言っていやがる・・・・・・・天変地異の前触れか？

失礼な！（ｂｙ演芸神）

でもねぇ・・・・・・・・・・演芸神だし（ｂｙ文芸神）

王都帰還と義勇兵（後書き）

因みに、この場所には強力の婆様と灰髪の兄妹は居ませんが、先に宿を取って休んでます。行進に付き合う理由はないですからねぇ・・・・彼等には

さて、酒を買って来ます。

王都帰還と幼女の問い（前書き）

あらすじ　凱旋パレードだ！
酒はワインをあけたが味がいまいちだな

王都帰還と幼女の問い

王城の城門前に至る。
義勇兵達は建国の御伽噺を謡う奴隷戦士達と騎馬戦士達に感涙してついてくるし、我が（アジール）両腕は聖域也につられたのか奴隷商人から逃れた女性が保護されたり（これはその場に居た兵隊全てがアジールと叫んで保護のための動きを行った。）お陰で凱旋行進がボロボロになったのだが、彼女を見捨てて行進を優先させるようならば私が直々に保護に乗り出すため必要な手段を講じる。

「御主人様の手段というのは世界を滅ぼすも入っているのですか？」
「まさか、世界すべてを敵にまわすは入っているけど。」
「勿論私のためにもですか？」
「それならば世界に加えて神々も滅ぼして問い詰める覚悟だが？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」
「可愛い私の子供達の為に親として出来る事をするしかないだろう。」

「うわぁ、ひどい。」
「ある意味残酷」
「最低だな王室顧問」

如何してそうなる？

まぁ、王城に着く・・・・・・・・・・・・・
兵隊達は先に保護した女性の為に奴隷商人を追い掛け回している。

彼らは運動不足だから丁度良かろう。

ついでに奴隷商人の首に賞金でもかけるか・・・・・・・・・・
王都の民も職人系が多いから運動不足解消に宜しかろう（邪笑

私は気前がよい貴族だ。こういう支払いを惜しんだら貴族に商売を持ちかける商人達が居なくなるだろう・・・・・・・・・
剣の時代が終わり金の時代となる。そのとき金に目が眩み過ぎて忘れてしまう者たちが出るだろう・・・・・・・・・
貴族たるもの民に範を示さねばならない。例え貧しくとも示す者がいなければ世界は美しくなくなる。
貧しくとも範を示そうとする者がいてもよいだろう。それは美しい生き方だ。
でも、金持ちたちは目もくれないだろう・・・・・・・・・・・・
ならば金持ちが範を示す事をしないと・・・・・・・・・・・・・

王城にて
我等は王の謁見を受ける。
其処に集うは文武百官、貴族達も子爵位以上はほぼ集まっている。
それだけ我等の扱いに困っているのだろう・・・・・・・・・・・

王国の功臣にして石頭。
下手に扱えば国すら滅ぼしてまで筋を通そうとする変人集団。

そんな評価を受けたところで痛くも痒くもないのだが・・・・・・・・・
鬱陶しい。

「黒髪孤児準爵、先の査察大儀であった。」
「はっ！」
「民草の為に心身ともに削る心意気、見事である。よって、汝に男爵位を授ける。是を受けよ！」
「ありがとうございます。」

「他にも欲しい物があるか？我が力の及ぶ限りかなえて見せようぞ。」
「では一つだけ。」
「なんだ？」
「おい・・・・私が貴人聖域（アジール）法で保護している幼女がいるのですが彼女の問いに答えてください。」

うわぁ、そこでそれを問うか！色々な意味でえげつない・・・・・・・

国王陛下も是に否と答えるわけに行かないだろう。国政に対する要望でなし、金銭的に問題がるわけでなし・・・・・・・・・・・・たかが子供の質問だ。答えられないというのはないだろう・・・・・・・・・

見物だな（邪笑

其処に幼女が連れてこられて、国王に問う。
「どうしてむらのみんながしななければならなかったの？どうして、むらのみんながひどいめにあっているのにだれもたすけてくれなかったの？どうして？どうして？どうして？」

この問いに答える事は色々な意味で辛いだろうな。
寧ろ答えることが出来たら凄い・・・・・・・・・・・・・・

陛下も苦慮しているな。答えることが自らの失政を告白するような者だし、それが出来ないならば孤児弟の願いに背く事になり力不足を示す。
どっちをとっても王族だけでなく貴族緒家の力量に関わるから慎重に答えないといけない問題だろうし・・・・・・・・・・・・

「黒髪孤児男爵！貴殿は下賤な平民をこの場に連れて恥かしくないのか？」
「この子を守りきれず、この子の先を質問に答えないことにより歪める事の方が恥かしいです。」
「その質問はこの国を揺るがすがそれでも答えろと言うのか？」
「勿論です！」
「子供の質問だ適当に答えればよいだろう！」
「では適当な答えをください。私も子供ですのでそれによっては私自身も考え直します。」
「民は貴族に従えが良いのだ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・貴族のたしなみとして従う民を養い富ませる事と教えられたのですが。」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

「さぁ！さぁ！さぁ！陛下、返答は如何に！」
孤児弟キレテイルなぁ・・・・・・

返答に困る国王陛下・・・・・・・・・・
孤児弟にかかる貴族達の侮蔑と敵対の視線。
物理的攻撃に出たら手助けするが、言葉の応酬では孤児弟が自らにけりをつけなければならない場所であるため見守るしかない。

沈黙は続き・・・・・・・・・・・・陛下も答えに困っている。
そんな時

「そは嘗てのわれらが姿。」
「そして今いる誰かの姿」
「我等剣の身分であれど」「救えるものは一握り」
「救いの網を広げるとも」「網目から零れ落ちる誰かある」
「われは細かい網でありたい」「我は救う桶でありたい」

六大公爵たちである。
彼等の全身は奴隷だったり虐げられる民族種族だったり・・・・・・・

その手の質問に対して敏感だ・・・・・・・・・
ましてや家族当然と気に入っている孤児弟の質問に対して
答えが気に入らなければ王族に弓引く事すら平然とするだろう。
彼等が従っているのは、利益になるからと古の誓いにより王が王たりえている間だけなのだから・・・・・・・・・

奴隷公が幼女のひざまずく。
「私にも答えは知らない。でも、次からそれを無くそうとする力にはなろう。」
騎馬公が剣を掲げて叫ぶ。
「孤児弟の誓いにより我等荒野の民は幼女にかかる苦難を振り払う剣となろう。」
農園公がゆるりと近づく
「飢えると言う事は辛いよねぇ・・・・・・・・・・・・これから君の居た村を実りあるものとしよう。」
人外公が壁となる。
「君の世代で答えを得られずとも我が一族が答えを求め続けよう。」
商会公が頭をなでる
「良い質問というのはそれが答えだ。幼女よ、良い質問をした。君は如何したいのかな?」

庭園公が抱きしめる。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
言葉はない、でも愛おしいと思う気持ちは満ち満ちている。

そして六人の公爵達は其々に
「貴人聖域法(アジール)！」
と叫ぶ・・・・・・・・・・
「この子の問いはいつかの我等。」
「さぁ、王よ！答えは如何に？」
「我千年の問いを思い起こし・・・・・・・・・・」
「我が祖は千年の答えを求める。」
「癒されざる大地に我がいまだに疑問を抱き」
「涙乾かぬこの地を憂う」

「さぁ、答えは如何に！」

国王は答える・・・・・・・・・・
「我に答えるすべはなく。ただ失政を詫びるだけ。もし教えてくれるならばその芽を潰そう。」
「こたえになってないよ、わからないよぉ・・・・・・・・・・」

幼女は泣きじゃくっている。

「どうしてどうしてどうして・・・・・・・・・・・・・・・」
幼女の涙は響き渡るのであった。

私にも答えられないな・・・・・・・・・・・・・・・

誰か答えてくれないだろうか？

王都帰還と幼女の問い（後書き）

ワインがあまりに美味しくないので欝っぽくなってしまった。

この手の質問って答えがあるのかな？

王都帰還と補佐見習（前書き）

あらすじ　幼女の問いに答えられるものは居ない

王都帰還と補佐見習

幼女の問いに答えるものはなくて幼女は泣きながら下がる。
幼女に害する者が居ないように護衛をお願いしたのだが心配だ・・・
・・・・・・・

「その心配はないぞ！」
奴隷公
「我が手の者がついているし娘もついている。是に手を出すと言うのならば・・・・・・・・・・ふっふっふっ・・・・・・・」
「ワシだって憤っているんだ。ところであの子を当家に引き取っていいか？」
「農園公、奥さんの土産代わりに幼女を持ち帰るのはやめてくれませんか？」
「心配するなワシが猫かわいがりしてやる！」
「息子や孫が男ばかりだからって・・・・・・・・・・」
「多分お持ち帰りしても息子達や奥方にとられるのがオチとか・・・・・・・」
「如何して貴公らは・・・・・・・・・・・・人の家庭事情に詳しいのだ？」

それは、一門がそこらじゅうにいるから情報が駄々漏れなんだよ・・・・・・・・・・

それはさて置いて更に何があるのあろうか？

国王陛下は声を発する。
「補佐見習準爵是へ」

陛下の面前に向かう補佐見習・・・・・・・・・・

「補佐見習、君はここの王室顧問一門が居ない間我が国を支えてくれた功臣だ。その功に報いるべく金貨１０枚を下賜する。」

「・・・・・・・・・・・・・・えっ！当たり前のことをしていただけですよ陛下！」

「遠慮するな！更に爵位もおまけしようか？」

「いえ、爵位は要りませんがありがたくお受けいたします。」

「遠慮深いな、何ならば末王女もつけようか？」

「それは本当にいりません！」

うわぁ、王族相手にそれ扱いだよ・・・・・・・・

末王女自体は孤児弟狙いだからどうでも良いだろうけど、女の矜持が・・・・・・・・

「父上も補佐見習も酷い・・・・・・・・・・・・・・・」

「まぁまぁ陛下、補佐見習には傷跡娘が・・・・・・・・・・・・・・」

「そうであったな許せ！」

ニマニマニマニマ・・・・・・・・・

そういう狙いだったか・・・・・・

ここで完全に補佐見習の進路を確定させようと・・・・・・・・・・

それは良いけど、私の楽しみが・・・・・・・・・・

「御主人様笑みが酷いですわ。」

「おっと・・・・・・」

「だんな、いくらなんでも補佐見習が可愛そうですよ・・・・・・・・」

「こういうことは公共で弄る者じゃないからな。」

ニマニマニマ・・・・・・・・

周りの貴族達も微笑ましい者を見る目で見ている。

絶対補佐見習の男の純情を知っている目だな。

ひどい事をするのもいるものだ・・・・・・・・・・そういうのは知っていても知らない振りをするのが礼儀だろうに・・・・・・

陛下と王妃の顔を見ると視線をそむけている。

宰相閣下に法務副長まで・・・・・・

補佐見習君の味方はここにはいない・・・・・・・・・諦めて傷跡娘の下に婿入りだ・・・・・・・・

母君だって喜んでくれるはずだから・・・・・・

「で、補佐見習は傷跡娘とどこまで行ったのかな?」

「えっと、二人で市場まで・・・・・・・・・・」

ざわざわざわ・・・・・・・・

「なんというベタな答えを!」「凄いスルー!」

「まさかこの耳で実際に聞けるとは・・・・・・・・」

貴族共五月蝿い!

「・・・・・・・・・・えっと、二人の仲はどこまで伸展したか聞いたのだが。」

流石に国王陛下もこんなベタな切り返しで来るとは思っていなかったのか多少冷や汗をかいている。

実はこの国の人々暇人でしょう!

私に仕事押し付けないで仕事しろ!

「えっと、どこまでとかと言うほどの仲ではないのですが・・・・

・・・・・・」
補佐見習は顔が真っ赤だ・・・・・・・・・・・・・・
そばで聞いている傷跡娘は不満そうだ
「・・・・・・・・・・・・・・・・むぅ」
傷跡娘は膨れているぞ。

「あれは酷いよねぇ・・・・・」「惚れているのは丸判りなのに」
「あの少年は不器用ねぇ・・・・・」「さぁ、其処で告白だ!」
観衆（主に女性陣）が口々に期待を込めた目で見ている。

「でも、その金貨は傷跡娘のために使うのだろう?」
「はいっ!」
「其処まで気をかける程よいのか?」
「・・・・・・・・・・・・・・・・あれには幸せになって欲しいと思いますから。」
「傷跡娘は幸せ物だな。是ほどまでに思われるなんて・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・はい。」
「絶対手放すんじゃないぞ!」
「はい、私のほうが離れたくないですから・・・・・・・・・・・・」

「女性に言わせるなんて・・・・・・」「どこまで不器用なんだ。」
「しかし暑いなぁ・・・・・・」
「宮廷魔術師はまだか?」「氷の魔法を・・・」

「いい加減観念すればいいのに」
「孤児弟、奴は意地っ張りだから・・・・・・・・・・・・・・」
「そうなんだけどもどかしいと言うか・・・・・・・・・・・・・・」

「誰もがお前みたいにホイホイやってしまうのと違うからな。」
「だんな酷いなぁ・・・・」

「そうだ！このまま式を挙げてしまえば良いのよ！」
この王妃は又思いつきで・・・・・・・・・・

「それは良い考えですわ王妃様。」「補佐見習は煮え切らないから強引に決めてあげたほうが・・・・・・」
「でも強引過ぎませんか？」「好きあっているから問題なし・・・・・・」

赤い顔を伏せて隠していた補佐見習は
「それには及びません！」
堂々と発言する。

「あら？貴族の馬鹿息子に喧嘩売る程度には好いているのでしょう・・・・・・・なのに何故？」
「お気持ちは判りますが、傷跡娘の花嫁姿は傷跡を治療してから最高の笑顔で迎えさせてあげたいので・・・・・・・」
「その隣にいるのは貴方じゃないかもしれないわよ？」
「構いません！おれが望むのは彼女の幸せですから・・・・・・・・・・・」

「うわぁ・・・・・・・・・・不器用もここまで来ると罪だね。」
「ある意味彼らしい告白ですけど・・・・・・・・・」
「どこまで救いようがないのだ？」「この馬鹿につける薬はあるのか？」

びゅん！（匙投げる音）

「其処まで酷かったのか・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・あたしの幸せは補佐見習のそばにいることなのに・・・・・・・・・／／／」

「馬鹿な事言うな。今から決め付けて如何する！」

「傷跡を見ても、あたしだと受け止めてくれたのは補佐見習だけ・・・・・・・・・　見る目のない男なんてお断り。」

「・・・・・・・・・・・馬鹿な事言うなよ。他にも見ている奴は多いだろ・・・・・・・・・」

「薬つけるまでもないか・・・・・・・・・」

「結局はラブラブだったと・・・・・・・・・」「暑いねぇ・・・・・・・」

「其処の犬耳の男爵、是って食えるか？」「食えるわけないだろう！それに我は麝香猫系だ！」

「そんなのわかるか！」

うおっほん！

陛下の咳払いに一同静まり返る。

「まぁ、好きあっているのはわかったから、二人で傷を癒しにいくがよい。王室顧問達も戻ったことだし、仕事は気にせず二月ほど行って来るがよかろう。」

「陛下ありがとう御座います。」

「・・・・・・・・・・・・・・ありがとう御座います。」

ニマニマニマニマ・・・・・・・・　ニヤニヤニヤニヤ・・・・・・・・・

貴族共は生暖かい者を見る目で見ている。ところで敵対しているところも生暖かい者を見る目をしているけど・・・・・・・

「そりゃぁ、ねぇ・・・・・・・　こんな初々しい者見るの久方ぶりだし・・・・・・・・・」

「王室顧問は気に食わないが、この少年は引き抜きたいくらいには有能だし・・・・・・・」

「聞けば王室顧問が無体して鍛えたそうじゃないか！こんな幼い者に酷いと思わないか？」

「それはいえる。」「人でなし！」「人ではないですけどあの教育はむごいと思う。」

「王都に青麦卿の子息が送られてきたけど、どこを如何すればあそこまで・・・・・・・・・・・・」

「なんでも自分の後釜用にと教育して失敗したとか・・・・・・・・・・・・」「うわぁ・・・・・・・・・」

えっと、どうして私に飛び火するのでしょうか？

「世界中のものが全て御主人様の事を非道と称しましても私は御主人様のやさしさを感じていますから・・・・・・・・・」

えっと、私が鬼畜外道である事前提？

「実際、目的のためには手段選ばないだろう！」

「この件だって一人で楽しもうとしていたろう・・・・・・・・・」

赤くなって固まっている傷跡娘夫妻

補佐見習がいち早く気がついて周りを見てみると

ニマニマニマニマ　ニヤニヤニヤニヤ・・・・・・・・・・・・

生暖かい視線の群れに囲まれているのに気がつく。

「孤児弟あれを貸してくれ。」

「気持ちは判るけど程ほどにして置けよ。」

補佐見習は孤児弟から神秘緋金属張扇（オリハリセン）を借り受けると一人貴族王族関係無しにどつきまわす！

「おまえらぁぁっぁぁっぁぁぁ！！」

どこ！ばこっ！めきょ！どかばこっ！

弾き飛ばされる貴族達、

「可愛いねぇ・・・・・照れ隠しに暴れているよ。」

「恥かしがって・・・・・・・・」「若さゆえの暴走かな・・・・・・」

ニヤニヤ

生暖かい視線を送り続ける貴族王族。殴られても気にもしてないし・・・・・・・・

ダメだこいつ等何とかしないと・・・・・・・・・・・・・・

つける薬はないのだろうか？

びゅん！（匙を投げる音）

そして向かってくる銀扇を持った少年！襲い来る打撃！

私も高く打ち上げられるのであった！

「こんのぉぉぉぉ腐れ賢者ぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「王室顧問は弟子に反乱される趣味でもあるのだろうか？」「おおっ！見事な打ち上げだ！」

「天井のシミとは斬新な！」「数えているうちに終わるよ！」

「「それは違うから！」」

補佐見習の張扇無双はそれはそれは見事な者であったと言う・・・・・・・・

流石にここの貴族はからかいすぎだよ（ｂｙ演芸神）

演芸神にたしなめられてはダメだろう（ｂｙ某王国担当地域神）

あらあら、若いって素晴らしいわね（ｂｙ恋愛神）

王都帰還と補佐見習（後書き）

今宵は酒が切れたから是までと・・・・・・・・・

因みに補佐見習の張扇無双は王国の中ではなかったことにされてます。

流石にからかいすぎたと自覚はあるのでしょう・・・・・・・・・・

次の話し考えていないや・・・・・・・・・・

平穏無事と幼女の問い（前書き）

陛下の御許から引き下がった幼女は泣きながら与えられた部屋に放り込まれる。
幼女の身を案じてか公爵令嬢と裸鎖がついている。
泣きじゃくる幼女を裸鎖は優しく抱きしめる。

「嬢ちゃん、陛下では判らなかったのか？」
「ぐすん・・・・・・・・・うん。」
「そうか、誰も答えられないのだろうな・・・・・・・・・・・・」
「どうして？」
「うーん、なんと言ったら判らんが聞いてくれ。石を投げたらたまたま其処に人がいて怪我をした。石を投げた奴が悪いけど、人にあてようと思って投げたわけではないからどうして自分に当たったのかと言う質問には其処にいたからだとしか答えられないだろ。」
「う、うん。」
「幼女の親だって、不作だった土地に居たから飢えて死んだ。それだけとしか言えないんだ。勿論幼女たちを食わせるために自分の飯を抜いたとかあるけど結局はたまたま・・・・・・・・・・・・運が悪かったと・・・・・・・・・・」
「どうして運が悪かったの？」
「知らん。俺はこれから如何するかを考えるしかないと思っている。」
「鷲鼻で太鼓腹のおじちゃんが如何したいといっていたけどそれと一緒？」
「鷲鼻で太鼓腹って・・・・・・・・・・・・鳴呼、商会公か・・・・・・・・・幼女も遠慮ないねぇ・・・・・・あの人は王様の次くらいに偉い貴族様だぞ。まぁ、良いけど・・・・・・・・　現実主義のあの御仁の事だ。どうしてという質問の後にどうすれば防げるかと考える

のだろうな。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・よくわからない。」
「幼女が何か失敗した後で次はこうしようと考えた事あるか？」
「ある！」
「太鼓腹の・・・・・・・・・・・・商会公は次は如何したら同じ事を防げるのか考えているのだろう。だから幼女の如何したいのかと聞いたのだ。」
「へんなの、でも、同じ思いする人はいないほうがいい。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・。その悔しさを忘れるなよ。」
「どうして？」
「同じ思いをさせないように！」
「どうしてあたちが悔しい思いして人にさせてはいけないの？」
「悔しい思いを食い止めるためだよ。」
「わかんない・・・・・・・・・・・・」
「そのうちに判るさ・・・・・・・・・・・」
「ふーん・・・・・・・・・・・・」

訳が判らない顔をしている幼女の頭をなでながら、菓子をつまむ裸鎖。
裸鎖の菓子を取ろうとする幼女に菓子を分け与えながら・・・・・・
「皆が戻ってくるまで時間がかかるから、なんか話しでもするか？それとも寝てるか？」
「うーんと・・・・・・・・・お話！」
「どんなお話にするの？」
公爵令嬢が聞いてくる。
「うーんと、どうして全裸けんじゃさまはふくをきているの？」
「ぶっ！」
「裸鎖のおじちゃん汚い！」

あまりの質問に裸鎖は口の中のものを噴出してしまったようだ。

「ごめん、答えられない。それは本人に聞いてみな。」
「賢者様答えてくれなかった。おねーちゃんわかる?」
「え、えっと・・・・・・　こんな話を聞いた事あるけど・・・・・・・・・」

公爵令嬢は法務官全裸出奔事変の話をする・・・・・・・・・
「家で着替えて服を返せばいいじゃない。どうしてその場で脱いだのだろう?」

その場にいる誰もが答えられなかった・・・・・・・・・・・・・・・

平穏無事と幼女の問い

国王との謁見から数日、補佐見習と傷跡娘は治療のための旅に出る。陛下から貰った金貨の他にも諸侯から書類整理の礼金とか、餞別だと渡された金もあるから数年は遊んで暮らせるはずだ。

馬鹿な補佐見習は治療と路銀くらいしか持たずに出発している。残された金は全部、孤児院やら元街娼が独り立ちするためにと寄付してしまっている。傷跡娘もそのことに文句を言わず。自分の治療費すら寄付してといっていたが流石にそれは周りが止めた。

「傷跡娘もなぁ・・・・・・・・補佐見習だけいれば良いみたいな所あるからな。」

「補佐見習も傷跡娘のことを気にかけているからなぁ・・・・・」

「似合いの二人だと思いますよ。」

「でも、見ていてもどかしいのよねぇ・・・・」

「ほんと、早くくっつけと。」「中々くっつきそうにないけど・・・・・・・・」

「仕方ないよ、補佐見習がヘタレだから・・・・・・・・」

「それは否定しませんが・・・・・・・・」

「皆、宰相府から書類の贈り物だぞ！」

どさっ！

補佐見習達が居ない分、書類を孤児娘達と手伝っている・・・・・・・・

孤児弟は男爵位を貰ってから公爵令嬢やら末王女に捕まって其れなりの格好をしろと針子の群れに放り込まれている。

なんか針子と一緒に画板と木炭を持った女性たちが・・・・・・・・・・
居るようだが・・・・・・・・・・

見なかったことにしよう。どうせ孤児弟で肌色の多い絵を描こうと
もくろんでいる腐った面々だろうし・・・・・・・・・・・・

「ちょ、だんな！助けて・・・・・・・・・・・」
知るか！お前は私とは同じ男爵位、自力で何とかするのだ！

「うわぁぁぁぁ・・・・・・・・」
「黒髪孤児男爵、髪の色に合わせて黒色の上着なぞ・・・・・・・・・・
・」
「それよりも藍色にして、銀で縁取りしてみるとか・・・・・・・・・」
「そこで胸元を叩けて・・・・・・・・・・」
「それじゃ衣装合わせにならないでしょう！」

「孤児弟、何を着ても似合うな。私と並んでも私が引き立つ！」
「末王女様、私の弟分をとらないでもらえますか？彼は私のそばで
控えてもらうのが絵になりますから。」
「公爵令嬢、いくらなんでも孤児弟に無理やりはいけないぞ」
「あらあら、そんなことはしていませんよ。お気に入りのお兄ちゃ
んを取られたからって焼餅焼かないでくださいな。」

其処を偲び足で逃げようとする孤児弟、しかし無情にも捕食者は彼
女達だけではなかった。
「いやぁ、孤児弟君。君が面白い事業を興そうとしていることを聞
いたのでねぇ・・・・・一口かませてもらおうかと！」

鷲鼻の太鼓腹の商会公である。

商会公は孤児弟の肩をしっかりと掴み顔を近づけて・・・・・・・・・・

「しょ、商会公・・・・・・・・・・・・顔が近いです・・・・・・・・・」

「是は失礼！しかし、目隠し布とは面白い商売だ。我が商会でも取り扱いしてみたいから融通してもらえぬかね？」

「それは、いいですけど・・・・・・・・・・・・・自分のところで作られたほうが・・・・・・・」

「それはおいおい考えるが、商業組合では独占認可を受けているのが孤児弟だろう。君に断りを入れるのは筋というものだ・・・・・・・・・・・・まぁ、ゆっくりと話そうではないか！部屋には君の好きな菓子を用意してあるから・・・・・・・・・・」

「ちょ、ちょっと・・・・・・・・・・」

半ば引きずられるように連れ去られる孤児弟。

それを呆然と眺める末王女と公爵令嬢。

「まさか商会公様に連れて行かれるとは・・・・・・・・・・」

「横から攫われたような気分・・・・・・・・・・」

まわりは、商会公孤児弟とは異質なかっぷりんぐねぇ・・・・だの、はらだいこぷれい？だのろくでもないことを言っていたのは気にしてはいけない。きにしたくもない！

だれだ、異世界男色文学を持ち込んだ馬鹿は！

孤児弟は中々忙しいようなので、こっちで仕事を進めておこう。

奴も独り立ちしなくてはならないから商会公に揉まれて行くと良かろう。

けつの毛まで抜かれんようにな・・・・・・・・・・

「わしは男のケツの毛なんか抜かないよ！」（ｂｙ商会公）

生き馬の目は抜きそうだが・・・・・・・・・

それはさておき

「そういえば王室顧問、こんな話が流れているぞ。」

「どういう話だ？民部官。」

「先の謁見で陛下に問いかけた幼女がいたろう。あの子が『どうしてぜんらけんじゃなのにふくをきているの？』と質問したそうだ・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・あのガキ・・・・・・・・・・・」

「それを聞いた貴族連中が腹を抱えて大笑い。老街道筋男爵が笑いすぎて腰を痛めているし・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「おれも聞いたぞ、貴族連中がその答えを面白おかしく考えようとお茶会を開くとか・・・・・・・・・・」

「そういえば幼女を呼んで判定させようとかなんだとか・・・・・・・・・・」

「お前のところに話しいってなかったんか？」

「全然聞いてないなぁ・・・・日時と場所がわかったら教えてくれ。」

「押しかける積りか?」
「否、幼女の後見の一人として随伴するのが正しいあり方だろ。」
「ほどほどにな・・・・・・・・・・・・」

「旦那方、又仕事が届きましたぜ!」
「小間物屋、其処に置いといてくれ。」
「かしこまりまし・・・・・・・・・・・・(ばたん」

「うわぁ!小間物屋!」
「又か・・・・・・・・・・・・」「今月何度目かよ・・・・・・・・・・・」
「精力剤箱買いして常備しているだろうに・・・・・・・・・・・」
「それ小間物屋以外にもお前等飲んでるだろう。」「勿論、徹夜明けに便利だぞ。」

倒れた小間物屋には誰も見向きもしていなかった。
そのうちに近衛が来て、又かと回収していった。
夜頑張りすぎだ!小間物屋!

「一晩中ではなぁ・・・・・屋敷の下働き連中が嘆いていたよ。元気すぎるのは結構ですけど五月蝿くて眠れないって・・・・・・・・・・」
「どこまで馬鹿なんだ・・・・・・・・・・一度子供作れば大人しくなるのでは?」
「かもな・・・・・・・・」
どこかげんなりした顔の民部官であった。
一度ここで缶詰にしていたほうが腎虚対策に良いのでは?

気働きが出来るし、便利重宝に使い勝手がいいのに・・・・・・・・・・・・

自重しないからなぁ・・・・・・・

なにはともあれ　自重しろ！

平穏無事と幼女の問い（後書き）

幼女が呼ばれてお茶会が開かれる。
幼女もこんな場所があるなんて聞いたことはあるけどまさか自分が来るなんて・・・・・・・・・・

おっかなびっくりである。付き添いとして公爵令嬢がいるので、緊張はしても不安がっていない。
貴族達も幼女は余興として呼んでいるから礼法の間違いとかは咎めだてをしない。
一応黒髪孤児男爵の後見を得ている孤児という事になっているが、六大公爵の庇護下にいるのは明白なので馬鹿なことはしないだろう。

馬鹿な集まりには呼ぶのだが・・・・・・・・・・
本当この貴族共は暇人だな。王室顧問や官僚達が見たら近衛の一群引き連れて連行して仕事させようとするだろう。

お茶会は始まり会話と共に笑い声が響いている。
そして、幼女が打ち合わせどおりに
「どうしてぜんらけんじゃはふくをきているの？」
と声を上げる。

貴族共は考えながら・・・・・・・・・・
嫌がらせだろうとか、一時的な錯乱状態だろうとか色々言い合う。
一頻り意見が出た後、王兄殿下が
「裸になると風が当たって気持ちいいだろ。王室顧問もそれを狙ったんだろう。」
「かぜがあたるときもちいいの？」
「そうだとも、験しに幼女も脱いで見・・・・・・・・・・・・・・・

ぐはっ！」

下品なあまりに最低な物言いに王兄殿下の言葉の最中で殴り飛ばしてしまった公爵令嬢。

はっ！と気がつくと周りからの視線。
あたふたと慌てる公爵令嬢。
傍若無人な公爵令嬢とは言え、相手は王族・・・・・・
下手すれば一家断絶とかなりそうだし、やばいやばいやばい・・・・・・

そんな公爵令嬢を助けるかのように
「よくやってくれました公爵令嬢。我が兄とは言え・・・・・・・・・・・・ここまで病気（ロリコン）をこじらせていたとは・・・・・・・・・・・・恥ずかしい・・・・・・・・・」
王弟殿下が王兄殿下を蹴り飛ばしていると

「うちの娘に色目使いやがって！いくら可愛いからって・・・・・・・・・」
「我が孫にも付きまとっていたぞ。孫は一番可愛いからなぁ・・・・・・」
「子供の敵が・・・・・・・・・・」

げしげし、どかどか、ばこばこ、ずかずか・・・・・・・・・・・・

参加した貴族共が皆して王兄殿下を蹴り飛ばしている。
「うちの子が可愛いからって色目使いやがって！」
「我が孫のほうが可愛いから常日頃から付きまとうのだろう・・・・・・・が許さん！」

「聞き捨てなりませんな・・・・・・・・・・・」
「客観的な事実だ！」
「・・・・・・・・・・・・」

更には親馬鹿と爺馬鹿の争いが起こるし・・・・・・・・・・・・
何がなんだか・・・・・・・・・・・・

是を見ていた幼女
「貴族ってばかばっかりなの？」
と質問して場を更に混沌とさせたのは笑い話である。

幼女が関わった貴族って・・・・・・・・・・一癖も二癖もあるものばかりだったからなぁ・・・・・

ごめんよと謝りたい気分だ。（ｂｙ記録を記した某貴族）

平穏無事と異世界人（前書き）

あらすじ　そんなものはない・・・・・・・・・・・・

平穏無事と異世界人

いつの間にか幼女の質問茶会は終わったようだった。
派閥を超えた馬鹿な集いでよかった・・・・・・・・・

是が派閥の色々どろどろとしたところだと子供の精神衛生上に悪い。
どれだけ悪いかと言えば、王妹殿下の本を読みながら国王陛下の服を着せられるくらいに悪い。

そういえばその後王兄殿下を見かけていないが如何したのだろう？
「王兄殿下でしたらそのお茶会で幼女の裸にと迫った挙句に公爵令嬢に殴られて、今頃封印されているんじゃないでしょうか？」

ありがとう、狐耳の小姓君。
そういえば封印って・・・・・・・・・・
「王弟殿下が宮廷魔術師団総員借り出して対主神級の封印を施しているはずですが・・・・・・・・・・」

どこまで念を入れているんだあの禿は・・・・・・・・・・・・

「なんでも、あの兄弟といると私のキャラが食われるとか言って・・・・・・・・・・髪の毛振り乱して・・・・・・・・・・・・・・執り行っているそうですが・・・・・・・・・・・・」
どこに振り乱す髪の毛が・・・・・・・・・・・・・・

「御主人様、それを言ったら酷すぎるかと・・・・・・・・・・」
そこで酷いとか感想を言う時点で同罪だからね孤児姉。
別に王弟だし問題ないけど・・・・・・・

後問題は・・・・・・・・・・・・・・・

「ねぇねぇ、王室顧問。孤児弟はどこ？うちの姪っ子が気に入っているから挨拶に着たんだけど・・・・・・・・・」

湧いて出やがったな王妹殿下！

「ここには孤児弟はいませんが、多分商会公か騎馬公のところかと・・・・・・・・・・」

「そっか、やっぱ商会公と腹太鼓プレー・・・・・・・・・・・・・・・ぐえっ！」

ばちこーん！

きらっ☆

つい、腐った発言で神秘緋金属張扇（オリハリセン）で殴り飛ばしてしまったよ。

演芸神、突っ込みで異世界に飛ばすって出来る？

できるよぉ！今、飛ばしたのがそう！

凄いねぇ・・・・・突っ込みだけで世界の壁を越えるとは・・・・・・・さすが王室顧問（ｂｙ演芸神）

そうか、世界の壁を越えて飛ばしたのか・・・・・・・・・・・・・・

二度と戻ってくるなよ！王妹（くされ）殿下

そんな私の些細な願いは無駄に終わる・・・・・・・・・・・・・・・・・とても最悪な形で・・・・・・・・・・・・・

数時間後
官僚部屋で仕事している私に王妹殿下がの声が聞こえてくる。
「ただいまー！王室顧問良い世界に飛ばしてくれてありがどー！」
よく見ると両手には薄い書籍が詰め込まれている紙袋を持って、更には箱が沢山積み上げられている・・・・・・・・・・・・
「いやぁ、飛ばされた異世界があの異世界人の生まれ故郷だとは思わなくて・・・・・・・・・・聖地に行って色々聖典を買いあさってきたわ。あそこはまさに聖なる土地、偉大なる文芸神のお導きに感謝しないと・・・・・・・・・・・・」
私はあまりの事態に如何反応して良いのか判らない！
とりあえず突っ込んできた。
「普通異世界トリップするとなったら言葉とかお金とか生活習慣とか帰り道とかいろいろあるでしょう！どうしてそんなのほほんと・・・・・・・・・・・・・非常識だ！定型文を書かざるを得ない苦労をしている異世界トリップ物の作者に謝れ！」
「そりゃ、王室顧問。異世界人に聖地で通じる言葉を教わるのは貴腐人としてのたしなみでしょう。おかねだって、身につけている装飾品を売れば結構良い金になるし、うえーの？おかーちまちだっけ？其処にその手の店が沢山あるから。生活習慣といってもあそこは異世界でも有数の多民族が集まるところ、しかも非常識系が一杯いるらしくって車で人をひき殺してから包丁でオレサマつえーとやっているのが英雄視されるところだよ。私くらいならば埋もれてしまうよ。帰り道？そういえばこんな紙をもらったから帰れたんだけど。」

見せてもらうと・・・・・・・・・・・・・

某王国担当地域神へ

お宅の腐れ女をお届けします。
二度と寄越さないでください。
どうして、異世界から空気と水で掛け算できる人材が出るのですか？
恐ろしすぎます。

某聖域守護神。

ああ、神にまで嫌がられるのか・・・・・・・・・・・・・・・・・・
あの世界で何をしたんだか・・・・・・・・・・・・・

「あーきばで色々見て回ってから、流れ侍女と意気投合してぶくーろと呼ばれる地にて聖典を買いあさって、じょーじで御神体を受け取って、じゅくで酒飲んでたのしくすごしただけだよ。掛け算の話したらあの世界の女性はすぐに食いつくね。お陰でつれて帰ってくる人を選ぶのに苦労したよ。」
わけのわからぬ材質の人形を振り回す王妹殿下の後ろから丈の短い侍女服を着た少し年食った女が現れる。

「うわぁ、リアル貴族様にゃん☆　御主人様と読んで良いかにゃ☆」

うわぁ、うざい・・・・・・・・問答無用で切り殺してよいかな？

「ダメですよ御主人様。ここで殺したら護衛官と同じで部屋を汚したと怒られますから。」

「そっちか孤児姉！」

「うわぁ、リアル侍従少女にゃん☆　シャメシャメ（ぱしゃり」

「王妹殿下どうしてこの者を連れてきたので？」

「のり！」

「適当に異世界人を連れ帰ってくるなぁぁっぁぁっぁぁぁぁぁぁ！！」

ばちこーん☆

王妹殿下は星となった。

「たーまやーだにゃん☆」

しかし、そばに置いときたくないな。この異世界人。

かの異世界人と同じにおいがしてそうだし・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「それって腐臭かにゃん☆」

自覚あるのかよ・・・・・・・・・

騒ぎを聞きつけたのか宰相閣下とか国王陛下が・・・・・・・・・・・・・・・

来ちゃダメです精神汚染が・・・・・・・・・・・・・・・

「どうしたのかね？王室顧問・・・・・・・・・・・・・・・」

赫々云々・・・・・・・・・・・・・

説明する事暫し、陛下も閣下も理解してくれました。

しかも是が最悪な部類の異世界人であることを・・・・・・・・・・・・・

「即送り返せ！」「人目に触れさせるな！」

「間違っても他国の腐女子どもに・・・・・・・・・・・・・」

「あれ？猫語尾侍女じゃない！」「そういうあんたは行方不明になっていた同人作家大先生じゃないですか。」

うわぁ、かの忌々しき異世界人が現れたよ。

そこで繰り広げられた再開の挨拶と雑談は私の精神衛生上割愛させてもらいます。

それがいい（ＢＹ作者）

つづるに及ばぬ（ｂｙ荒野神）

うざい語尾の異世界人はその後宮廷魔術師団総員で送り返されました。

忌々しき異世界人は・・・・・・・・・・・・・送り返せませんでした。

糞！

助力したのに・・・・・・・・・・（ｂｙ魔王国魔王族魔神担当神官）

人の子とはこんなにも無力だったのか・・・・・・・・・・（ｂｙ聖徒王国某王国担当大使　聖騎士）

無念・・・・・・・・・・・・・・（宮廷魔術師団某）

って、敵対国通しで協力だと！！

「そりゃ、食い止めないとダメだし。」

「おれ、そんな世界見たくないから・・・・・・・・・・」

是が元で異世界人帰還魔術門が作成するきっかけとなる。

嫌な歴史だ（ｂｙ記録神）

平穏無事と異世界人（後書き）

酒によっているのでこの話は大丈夫なはず。

では、酒が切れたから今宵は是まで。

平穏無事と商会公（前書き）

あらすじ　異世界人が来た。お帰りいただいた。

平穏無事と商会公

私は今商会公の部屋に来ている。
あいも変わらず孤児弟は商会公に連行されている。そのまま商売を乗っ取る積りなのだろうか？
それとも・・・・・・・・・・・・・・はらだいこぷれーを・・・・・・・・・・・・

「せんせん！王室顧問そんな恐ろしい事をいうな！浮気なんてばれたら家に入れてもらえなくなる。」
「家って・・・・・・・・・・・・何軒もあるでしょうが・・・・・・・・・・・・」
「そもそも孤児弟を相手にそんな事をしない！家に帰ってするから・・・・・・・・・」
「だんな、旦那まで王妹殿下に毒されて如何するんですか！」

「ぎゅはっ！（吐血」
わ、私としたことが・・・・・・・・・・・・王妹殿下（ショタコン）に毒されるなんて・・・・・・・・・・・・
精神的打撃が・・・・・・・・・・
しかし商会公が家で腹太鼓ぷれーとかって・・・・・・・・・・・・

「うわぁ！血を吐くなんて、掃除の侍女達の迷惑になるだろうが！」
「そっちかい！」

人が折角吐血したのに・・・・・・・・・・・・
「御主人様？折角とかで吐血できるんですか？」
「ふむ、ある種の生き物は吐瀉物で敵を威嚇したり攻撃をすることが知られているが、我等人族も訓練によりそれを可能としたいるのだ。因みに宰相閣下は胃痛を利用して吐血を持って威嚇するんだぞ

！」

「王室顧問、もっともらしい嘘をつくでない。貴様の嘘は作りこんでいるから真と区別がつきにくい。そしてその【特殊効果の指輪】を態々用意してからに・・・・・・・」

「軽い冗談じゃないですか、商会公。まぁ、この吐血は【特殊効果の指輪】（銀貨2枚）による特殊効果だよ。実際に血がついていないだろ。」

「だんな、態々どうしてこんなのを・・・・・・・・・・・・・・」

「そりゃ、面白いから・・・・・・・・・」

「王妃様が年齢の話をしたとき出てくる黒いもやとかもそれなんかい？」

「ば、ばか！孤児弟、命知らずな事を言うんじゃない！」

「そ、そうだぞ！あれは、王妃自体の噴出魔力だ！」

「自然体でそんなことが出来るなんて王妃様って人なの？」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「ちょ、ちょっと！だんな！黙ってないで怖くなるから・・・・・・・・・」

「まぁ、その話は置いといて・・・・・・・商会公！」

「おいとかないで！本当に大丈夫なんだよね・・・・・・・・・・」

「なんだね？王室顧問。商売の話ならば大歓迎だが。」

「商会公様も・・・・・・・・・・・ねぇ・・・・・・・・・」

孤児弟がなんか必死に話を元に戻そうとしているが、我等二人はしらばくれる。

そんな怖いことを・・・・・・・・・・・・

私はぬるくなった茶で喉を湿らしてから、

「最近孤児弟とつるんでいるようだけど、目隠し布の販売が目処ついたんですか？」

「その件か、王都と温泉町で試験販売してみて売れ筋を見てから拡

大しようかと思っているのだが・・・・・・・・まぁ、魔具だから大売れとまではいかないけど療養神殿関連からの口コミで客は来ているぞ。」

「もう少し宣伝が必要ですかねぇ？」

「うむ、目隠布の利用人口が増えれば使いやすいのだがなぁ・・・・」

「まずは其処の取っ掛かりからですか・・・・・・・・・」

「はぐはぐ・・・・だったら、旦那とかが皆して目隠し布して酒盛りデモすれば噂になるんじゃない？」

食べながらしゃべるな孤児弟、行儀が悪いぞ。

「もっと食べるか？孤児弟。王宮料理人を引き抜いて作らせている焼き菓子だぞ！」

「王宮の使用人もひきぬくんですか！」

驚いた声で叫ぶ孤児弟。今更の事に驚かなくても・・・・・・・・・・・・

「私は才能あるものを集める趣味があるからねぇ・・・・・・王宮で味は二の次で飯のまずくなる話ばかりしている貴族のためよりも食べる事を愛する者たちのために腕を振るったほうが料理人冥利に尽きるだろ。金には糸目つけないし・・・・・・・・・・」

うわぁ、さらっと言ったよ。このおっさん。自分金持ちですんでと・・・・・・・・・・・・

「それを言うならば御主人様だって・・・・・・・・・・・・・・貴族ですから発言は結構ありますけど。」

ふっ！私は良いのさ。

「菓子は手付けさ・・・・・・・・　孤児弟君、ワシの元に来ないかね？給金は弾むぞ！」

更に引抜ですか！

目を白黒させる孤児弟・・・・・・・・・・・多分、こやつは『えっ！この菓子手付けだったの?食っちまったよ!』とでも言うところだろうか（苦笑
商会公も人が悪い・・・・・・・・・・・・・

「くっくっくっ！商会公も人が悪いですな。一枚が銀貨一枚もする菓子を平然と置いといて、さぁ食べろと是が手付けだと言っているんですから・・・・・・・・・・・」
「ふっふっふっ！正確には銀貨二枚なんだがな・・・・・・・・・・・・・・是くらいで落とせるとは思っていないよ。菓子くらいで言わないさ、ワシは吝嗇ではないんでな。」
「孤児弟はまだ商会公の元で鍛えるには若いんじゃないですかな?」
「いや、胆力とかあるから、今から唾付けとかないと・・・・・・・・・・・・どこから攫われるかわかったものではないからな。」
「確かに・・・・・・・・・・今でも、養子の話とか娘の婿になんて話が出ているからねぇ・・・・・・・・・」
「ワシの方でも孫の婿に迎えたくてね・・・・・・・・・・丁度１５で少々元気すぎるのが玉に瑕だが可愛い子だぞ。」
「姉さん女房になりますが彼女のほうは良いのですか?名も知れぬ孤児となんていわないです?」
「それは大丈夫だろう。孤児であるのは仕方がないとは言え、黒髪の美少年で自力で爵位を勝ち取った優良株だぞ。其処を考えれば、一言で嫌とは言うまい。会うだけでもあわせてみたいものだがな。」
「血縁だと安く使えるとか考えていないでしょうね?」
「うぐっ！・・・・・・・・・・そんなことはない。可愛い孫娘のひとりの婿となるんだ。親族というコネは使わせてもらうが儲けはちゃんと分けるぞ。本当は補佐見習も孫娘の婿に欲しかったがアレには先約がいるからなぁ・・・・・・」
「それはどうだがわからんけど・・・・・・・・・・・・・・・・（ジト目」

あれ？孤児弟の反応がない・・・・・・・・・・・・
「御主人様、孤児弟でしたら菓子を喉に詰まらせて呻いていますが・・・・・・・・・・・」
「おい！大丈夫か！」「衛生兵衛生兵を呼べ！」
「ほら、吐き出せ！」

どたばたどたばた！げほっげほっ！

菓子の値段と手付けだということで気が動転して焼き菓子を喉に詰まらせてしまった孤児弟だが、そばにいた侍従に逆さづりにされて背中を叩いてもらったところ菓子が出てきた。
でも、それって赤子の異物誤飲の手当てではなかったっけ？それ以前によく小柄とは言え孤児弟を持ち上げられたなぁ・・・・・・・・・・・・

「鍛えておりますので。」
そう言って侍従は服の下に隠されている筋肉を動かしている。侍従の皮をかぶった護衛か？
「いえ、私は正真正銘の商会公の侍従に御座います。」

うちの大貴族達は色物だから付き従う者達も異色の人材が多いのは否定しないけどね・・・・・・・・・・・
「御主人様も十分色物かと・・・・・・・・・・・・」
「それに従う孤児姉もね。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

孤児姉が懊悩している。
「大丈夫です、御主人様に仕える事が出来るのでしたら変わり者扱

いは・・・・・・・・・・しかたありません。」
迷いながら言い切ったよ。

孤児弟が気が動転して使い物にならないから商会公の元から辞しますか。
私は孤児弟を背負うと官僚部屋（たこべや）で仕事しているであろう孤児娘達を回収に向かうのであった。
なんか、私子持ちの父親になった気分だが・・・・・・・・・・・・・・
未婚なのに。

「その分、子作り（擬似的な意味で）は沢山なさっているから釣り合いは取れているかと・・・・・・・・・」
孤児姉はなんかきついねぇ・・・・・・・・・先日色町で遊び歩いた事が気に食わないのかな？
それとも、一昨日性愛神殿で楽しんだことが（略

「げほっ、たまにはねーちゃんと構ってやりなよ。げほっ！」
「孤児弟！・・・・・・・・・・・・・・／／／」

そう言う事か・・・・・・・・・・忙しかったからなぁ・・・・・・・
よいよい、可愛い従者の我侭くらいかなえてやるとするか・・・・・・・

行きたいところはないか？
いきなりで答えられないか・・・・・・・・・・・・・・・
市場も終わりだし、色町はさすがに連れて行けないし・・・・・・・・・
・・・・・・夜の庭園でも連れて行くか・・・・・・・・・・・・
今の時期だと何かしら花があるかな？
その前に孤児弟（にもつ）をどこかに置いといて・・・・・・・・・・・・

「おいらは荷物かい・・・・・・・・・」
「動けるなら自力でかえれ。」
「言われなくてもそうするけど・・・・・・・・・・・・ごゆっくり・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・／／／」
口だけは減らないガキだ。

庭園をぶらりと歩く。花が満開の時期には口説こうとする男女が多いし、暖かい時期だとここが逢引場所と化して色々問題のある行為をするものが出てくるのだが、実りの季節が終わり種の眠りのじきともなると、花もそんなに多くない。

花はなくても実りの季節、色々な色の木の実とかがある。
薔薇の実はぽつんと赤い実をつけているし、水木の実は灯火のよう。
熊葛は紫の実をぽつぽつとつけている。白い実をつけているのもあれば、果実なんかも鳥に齧られた跡があり寂しさを見せているのである。

昼間の庭園は王妃などに連行された事があるから見たことはあるのだろうが夕刻の庭園は初めてなのだろう。
誰も人がなく、花もない庭園は女の子を連れ歩くのに不適切だったかな？
それでも、孤児姉は構ってもらえる事が嬉しいらしく体を摺り寄せてくるのだった。

そして、長椅子に座って適当な話をする。
一息ついたらどこか皆で遊びに行こうかとか他愛もない話をする。
希望などを聞いても市場だの近くの花園くらいしか言わないのが遠慮深い孤児姉らしく微笑んでしまう。
愛い奴と頭を撫でると体を摺り寄せて甘えてくるのだった。

本当に私のような中年手前ではなくて若くてしっかりとした若者を捕まえればよいものを・・・・・・・・・・・・
本当に難儀な者だな。かといって、離れるとなれば寂しいなと思う自分があったり・・・・・・・・・・・・
補佐見習と傷跡娘は自分の歩く道を見つけているし、孤児弟も飛び立っていくのだろう・・・・・・・・・・・・
孤児娘達も孤児姉もあがいてはいるけど二本の足があり、世界を回るだけの力がある。
いつかは旅立つのだろうけど今くらいは甘えさせて悦に入るくらい許してくれよう・・・・・・・・・・
我侭だな私も・・・・・・・・・・

見回りの近衛兵が風邪引きますよと声をかけてくるまで我等主従はゆるりとするのであった。
無粋な奴め・・・・・・・・・・・・・・・

平穏無事と商会公（後書き）

酒が切れた　酒が切れた

平穏無事と選択肢（前書き）

あらすじ　商会公と太鼓腹プレー　するわけがない

平穏無事と選択肢

久方ぶりに孤児院にいる。
王都に帰ってきた日にも一度は寄っているのだが、忙しかった上に後始末が残っていたからゆっくり出来なかった。

あいも変わらず色々な種類の戦士達が屯している。
お前等、子供等の前だから控えろよ！
騎馬戦士、奴隷戦士、人外戦士、極北戦士・・・・・・・・・・・・って、魔国随行員（魔神族）とか聖騎士までどうして・・・・・・・・

「ふむ、あの黒髪孤児をかつての叫び(初代国王)の子供と重ねてみるのがいてな、危険視していたのだが・・・・・・・・・・まぁ、後ろめたい所がなければ問題ないと報告しているところだ。」
「あの王室顧問の教育に耐えた人物に興味を持った魔国の上層部が調べて来いと・・・・・・・・・・・って、いうかこの孤児院の教育がおかしすぎる！何で、小さな子供に軍事訓練から神学、伝承学、経理に薬学・・・・・・・・・・その他諸々教え込んでいるんだ！下手な貴族並みの教養を詰め込んでいるし、それを遊びで使っている孤児達の存在とか・・・・・・・・・・子供達だけで奴隷商人を生け捕りにして玩具にするって・・・・・・・・・・・・」

まだやっていたのか、奴隷狩られ・・・・・・・・・・

そうそう、魔国の・・・・・・・・・・お前さん所と思われる種族の子供達いるし、引き取る？
「そうですねぇ・・・・・・本国に問い合わせて親戚がいればあわせてやりたいですねぇ・・・・・　って、そのむちゃくちゃすぎる

教育は控えて欲しいですが！」
「子供達は平等に扱わないと・・・・・・・・・・其々に才能があれば伸ばしてやるのが大人の役目だろう。」
「だからって・・・・・・・・・そこで子供達と遊んでいるのは極北戦士！あんな教育上悪いのと一緒にするなんて・・・・・・」

確かに極北戦士は子供の教育に悪いねぇ・・・・
戦争を酒盛りに変えるとか裸で空を飛ぶとか・・・・・・・・・・・
極北神様どうして回収してくださらないのですか・・・・・・・・

忘れていた（Ｂｙ極北神）
後で大使夫人を遣わすわ（ｂｙ極光神）

孤児院の修繕費が・・・・・・・・・・・増えそうな気がする・・・・・・・

聖騎士殿は何を見ているのかな？
「王室顧問、これは私の目の錯覚だと思いたいのだが・・・・・・・・・あれって・・・・・・・・・」
「ああ、暗黒神だろう。実害はない。」

黒っぽいもやもやとした人影が子供達と遊んでいる。
人影は影を伸ばしたり、闇で子供達を包み込んだりしている。
子供達も人影に飛び掛ったり包まれてキャーキャーキャー歓声を上げて喜んでいる。

「どうして、神々が・・・・・・って、邪神じゃないのか？」
「ごろは悪いが暗黒神様は闇の帳で人々の安息とかを司る神だよ・・・・・・・・・・・・・邪神と言うならば・・・・・・・」

文芸神だな。（ｂｙ剣神）
芸術神もだろ。（ｂｙ氷神）
なんと言っても奴らが世界を腐らせる。（ｂｙ発酵神）
発酵神に言われたくないわね（ｂｙ文芸神）

出たな邪神！！
二度とこの世界に出て世界を腐らせるな！！

ばちこーん☆

きらっ！

思わず、神秘緋金属張扇（オリハリセン）で文芸神をぶちのめしてしまった。
ただいまの飛距離、文芸神は異世界に飛んでいきました。（ｂｙ演芸神）

「失礼した、聖騎士殿。アレが邪神文芸神という者だ。アレがかの忌々しき異世界人をこの世界に連れ込んで・・・・・・・・・・・ううっ・・・・・済まない・・・・・・・・アレを元の世界に送り返せなかった・・・・・・・・・・」
「成程、あれが邪神・・・・・・・国許に報告いたします・・・・・・・・・・って、普通の神々が一柱でしょうに！」
「でもなぁ、聖騎士・・・・・・・・・あれが齎した災禍を考えてみると・・・・・・・・・魔国も・・・・・・・・雷竜の姫君とか・・・・・・・・・・はぁ、国に帰るのが苦痛だ・・・・・・・」
「魔国随行員・・・・・・・・・・・・貴殿の苦労もわかる。うちの国も・・・・・・・・・・・それを考えたらあれが邪神だというの

が・・・・・・・」

人魔協調がここで更に深まるのだが事を知った歴史家は孤児達の幸いを見て両国が涙ながらに感動して心入れ替えたと捏造するのだが別の話だ・・・・・・・・・

「って、言うか我が国の財務卿がアレは地獄だったと泣きながら語っていた教育を子供達は平然とコナシテイルノカガ謎だ。」
「それは言える。魔国諸族管理官が未だに悪夢に魘されると言っているが・・・・・・・・」
「あの子供達は優秀だからねぇ・・・・・　多少は手加減しているけど、それに財務卿とか諸族管理官は私は出来るからと促成教育を選んだしねぇ・・・・・」
「成程、無茶振りしたんですねぇ・・・・」「納得。」
「あの子達我が国にも分けてもらえませんか？」
「国力が減るからやだ！」
「我が国の子弟を受け入れて教育してもらうのは？」
「良いけど、壊れても知らないよ。」

そこで流れる授業風景。
「貴族の馬鹿には抵抗する事を・・・・・・・・・・・・云々」
それを聞いた魔国随行員と聖騎士の顔には冷や汗が・・・・・・・・・・・・・貴族制を否定する教育とか・・・・・・・・

まぁ、それは笑い話として
先の青麦領の騒ぎで保護した子供とか・・・・・・・・・・・・・灰髪の兄妹とかも孤児院に放り込まれている。

大人達は王都で一度体を休めてから、資材と共に青麦領建て直しのために戻って行った。
青麦領の子供達は大人達が生活を立て直してから戻す予定だ。

それでも少なからず、孤児が出ている。
孤児弟が保護した幼女とか、燕麦卿のところの孤児とか・・・・・・・・・・
そういえば燕麦卿のところの孤児はどの子だろう？

教えられて逢ってみるとごくごく普通の村の子供といった風情の子供達だった。
君達は村に帰りたい？
「うん！おばさんたち心配しているだろうし・・・・・・・・・」
「口減らしなんてとんでもないと怒ってくれたし」
「王都で学ぶのも楽しいけど・・・・・・・・・おじさん心配してないかな・・・・・・・・・」
燕麦卿の言っていた事は真であったか。彼等は次の隊商で村に返すか・・・・・・・・・・

「ほんとう？」
それまでここで勉強していきな。手紙くらいかけるなら出しても良いし・・・・・・・・・
「うん！」「でもおじさん達字を読めないよ。」
「なぁに、燕麦卿にでも読ませればよい。」
「貴族様をそんな風にこき使うなんて・・・・・・・・・」「おじさん凄い傲慢だよ」

おじさん・・・・・・・・・私も貴族なんだがなぁ・・・・・・
「御主人様、相手は小さな子で彼等の父親と同じくらいの年ですから仕方ないかと・・・・・・・・・」

そうだよな。

こっちも手紙を書き書き・・・・・・・・・

燕麦卿　子供は預かった。返して欲しくば・・・・・・・・・

「王室顧問様、それでは脅迫状です。」

院長、いたの？

「本当に・・・・・・・・・・・・これが孤児たちの守り手だとは・・・・・・・・・・・・・・」

買いかぶりすぎだ。

燕麦卿、子供達は王都にて保護されている。安心されるよう領民達に説明されたし。

暫し後に隊商に便乗して送り返す予定。詫び代わりに読み書き等々教えておく。

「子供達、隊商が結成されるまで時間があるからそれまで勉強しておこうな。」

「「「はいっ！」」」

そして、幼女か・・・・・・・・・・・・

おまえはどうしたい？

「けんじゃさまもたいこばらのおじちゃんとおなじといをするんだね？」

「太鼓腹って商会公か・・・・・・・・・・・・まぁ、いいや。孤児院にいても金持ちなんだけど・・・・・・・・・・・・あの方は世界有数の大良いし、すぐにはとは言えないが村の大人達と共に帰っても良いし・・・・・・・・・・・・それとも、どこか子供のいない家に養子に行くならばあてもあるけど・・・・・・・・・・・・」

「わたしはしりたい！どうして、むらがひどいことになるまですくいのてがなかったのか？どうすればわたしのようなこどもがでないですむのか・・・・・・・・・しりたい！そしてちからがほしい！」

小さな子供にしては凄い決意だ。

「孤児院で学ぶか？」

「もう、まなんでいる。いかついおじいちゃんせんせいにいろいろおそわっている。」

「でも、答えのない問いだぞ。それでも進むのか？」

「うん！今までみつからなかったからってこたえがないわけじゃないのでしょ？」

「面白い考え方だ。子供のうちは孤児院で学んでおけ！それを力にして道を見つけるのも良かろう。でも良いのか？村に戻りたいとか子供らしい時代を送れなくなっても・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・しかたないとはいわない。でもあたしがえらんだみちだから。」

難儀な子供だ。幼女の頭をなでると気持ちよさそうに目を細めている。

親が死んでこの子も自分で道を選ばざる得なくなったのか・・・・・・・その覚悟の眼差しは大人達の都合で潰すわけには行かないな。

さて、どんな道を選ぶのか楽しみだな・・・・・・・・・・・・・

平穏無事と選択肢（後書き）

酒が切れたので是まで

平穏無事と貴族子息（前書き）

馬車はガタゴトと進んでいる・・・・・・・・・・・・・
俺達は商会公の隊商に便乗して温泉町に進んでいる。

本当はかーちゃんも連れて行きたかったのだが
「二人の邪魔するなんて・・・・・・・・・野暮なことは言わないわ。でもね、判っているわよね。まだ、私がおばーちゃんと呼ばれるには早いんだから、そんな羽目になったらどうなるか・・・・・・・・」
俺達は子供なのに何を言っているのやら・・・・・・・・・・・・・・・

「あたし、子供産めるよ・・・・・・・・・・・・・・・　そして生みたい・・・・・・・」

「ぶっ！」
「補佐見習君、汚い！唾を飛ばすな！」
「あっ！ごめんなさい。って、傷跡娘。いきなり何を言うんだ！」
「だって、王妃様が補佐見習みたいな子を繋ぎとめるには子供作るのが一番といっていたから・・・・・・・・・・・・」
「あの婆・・・・・・・・・（ぞくっ！」

なんだ？今悪寒がしたぞ。そう言えばあの腐れ賢者が忠告していたな。王妃の年齢ネタは命を縮めると・・・・・・・・・・・これがそうなのか・・・・・・おそろしや・・・・・・って、傷跡娘。人前でろくでもない事言うな！

「いやぁ、こんな可愛い子に其処まで言わせるなんて隅に置けないねぇ・・・・・・」

「会計女史、からかわないでくださいよ！こいつが俺のために視野を狭めるのが困るんだけど・・・・・・・それに毎晩二人きりの部屋割りをするのは何の悪意なんですか！」
「善意の積りなんだけどねぇ・・・・それとも私と寝る？」
「・・・・・・・・・・・・・・・むぅ」
「あらあら、取らないわよ。補佐見習は傷跡娘ちゃんのものだとこの女衆は認識しているから。」
「俺の意見は？」
「ない！そして、痴話喧嘩する暇があったら手を動かす！旅費をただにしているんだからそれくらい良いでしょう。」
「旅費出すといったんだけど・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・補佐見習、いいじゃない。旅費のほかにも小遣いももらえるから。」
「・・・・・・・・・・・・・・・小遣いって、銀貨３０枚を普通小遣いといわない！」
「いやぁ、助かるわ。二人がいるだけで取引で把握できる品物が１０倍に増えるから管理が楽できるわ。さすが王室顧問の秘蔵っ子、経理と法文の専門家。王室が領地と爵位で引き抜こうとしているのが判るわ。商会公様（おおだんなさま）も引き抜いたら金貨１００枚の賞与を出すなんて太っ腹・・・・・・・体型のことじゃないわよ・・・・・・・・・な事を言う意味がわかるわ。本当うちに来る？傷跡娘ちゃんも大歓迎よ。夫婦で着たらもっと賞与来るかな？」
「話し聞けって、俺たちがいるだけでどれだけ利益が上がるか怖いから聞かないけど・・・・・・・・俺達休暇のつもりなんだが・・・・・・・・・・」

がたごとがたごと・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・町ごとにお小遣い貰って、二人で出歩けるのが楽しいから休暇。」

「ほら、傷跡娘ちゃんもそう言っているし・・・・・・・・・悪い話ではないでしょう・・・・」

「って、各町の支店ごとの会計処理も行うのはどうかと思うが・・・・・・・・お前等のところの見習を一度あの腐れ賢者の教育受けさせればよいじゃないか！」

「それがね・・・・・・・・・・・王室顧問様の教育を受けて無事なのは孤児院の子供達と補佐見習、君だけなのよ・・・・・・・・・・・しかも、経理とか文官としての能力で言えば一番の出来らしいし・・・・・・・・・経験さえ積めば大国の財務卿（大臣クラス）とかこなせるし、今でも小さな国くらいなら普通にまわせる力があるといわれているのよ。そういうことで私の賞与のためにうちに着て！」

「来るかぁぁぁっぁぁぁぁ！！」

俺の叫びは隊商全体に響くのであった。

そういえば、腐れ賢者が紹介状を色々書いていたが中身確認したほうが良いだろうな。

隊商宛の紹介状でさえ是だから・・・・・・・・・・・・・・行く先々で仕事させられる羽目になりそうだ・・・・・・・・・・

がたごとがたごと・・・・・・・・・・

「平和ですねぇ・・・・・」

犬耳の御者は誰ともなしにつぶやいた。

平穏無事と貴族子息

なんか補佐見習の悲鳴が聞こえたような。
大方隊商で会計の仕事押し付けられているだけだろう。

「御主人様、そんな見てきたようなことを・・・・・・」
「孤児姉よ、補佐見習と傷跡娘のために隊商を用意してくれた商会公が只で物事を運ぶと思うか？」
「利益を上げようとしますよね。でも、彼等の働きだけで利益が・・・・・・」
「それは大丈夫だ、経理のアラと無駄を見つければ金貨数百枚は軽く浮くからな。」
「王国の経理と同じくらいですけど商会公様の金銭の扱う量って・・・・・・・・・」
「数十万から数百万枚程度と嘯いているが実際もっと多いだろうな・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

金貨数百万単位って途方もない金額に孤児姉が驚いているのか呆れているのか？
この国だけじゃなくて世界を相手にしているからなあの御仁は・・・・・・

邪神文芸神を異世界に叩き送った後、ふと考えた。
あの忌々しき異世界人をこの神秘緋金属張扇（オリハリセン）で追放できないだろうか？

むりだね、君の突っ込み力が満ちない限り（ｂｙ演芸神）

そのためにはあの忌々しき異世界人と四六始終いないといけない・・・・・・・・・

そんなことをしたら噂になってしまうじゃないか・・・・・・・・・

只でさえ、孤児姉と孤児娘達を囲っていると言われているのに・・・・・・・

「囲われてマース☆」「甲斐性のある男の人って少ないから。」「もてない男の僻みね。」

孤児娘達容赦ないね・・・・・・・・・・

「私も誘われたときに御主人様に身も心も捧げておりますからといった覚えありますが・・・・・・・」

「うわぁ、孤児姉ちゃんおもたーい☆」「賢者様どうしてものにしないの？」「わたしたちものにしてー・・・・・・・いたっ！」

最後の発言は孤児姉に叩かれたらしい。

我等主従は今王宮内で暇を潰している。仕事もひと段落して後釜君達で賄える程度だし、久方ぶりに町に繰り出すか・・・・・・・・

お前等も爵位を貰っているから正装の一つも用意せねばなるまい。

「ああ、それでしたら御主人様の母上様から・・・・・・・・・・・・・１０着ほど・・・・・・・・」

「私達も貰ったねぇ・・・・・・・・」「女の子なんだから綺麗にしないと・・・・・・・・・・・・・・・きるのが怖くなるくらいのが・・・・・・・・・・」

王妃からも色々貰っていたな・・・・・・・・・・・

この娘達は・・・・・・・・・・・・

「それに、息子の嫁に来ないかって宝石とか貰ったときあるけど流石に返したわ。」

「それはある。」「本人が領地経営を手伝って欲しいって金貨の詰まった袋押し付けられそうになったときあった。」

えっと、貴族共ドンだけ人手不足なんだい！

「御主人様、孤児院で育った経理能力を持った子供を紹介して欲しいと数家ほどから依頼がありましたが・・・・・」

ふむふむ、娘たちに粉かけるとは不埒な貴族共が・・・・・・・・・・・・

経理の押し売りをしてやるか（邪笑

「娘達、貴族たちを虐めに行こうか！」

「賢者様ひどーい☆」「楽しそう！」「今日はどんなアラガ見られるかな？」

「御主人様、程ほどに・・・・・・・・・」

「孤児姉、お前は残るか？」「いえ、ご一緒します。」

依頼された家は兎も角、息子の嫁とか言ってきたのは一度きっちり見定めないと・・・・・・・・・・・・

「どもー経理の押し売りに来ました！」

「うわぁ！王室顧問と孤児娘経理部隊だ！」「誰で呼び込んだのは！」

「誰だ、会計の鬼姫を呼びつけた馬鹿は！」「当主様らしいぞ！」

「何余計な事しやがるんだあの馬鹿貴族！」「お前首な。」
「うわぁ、当主様！うちにはかかあが二人と１４を頭に１２人の子供が・・・・・・・・・・・」
「数合わないぞ」「そりゃ、かかあのほかにも女を３人ほどこさえてまして・・・・・・・・」
「「自重しろ！」」「もげろ！」
「会計殿を落ち延びさせろ！」「当主様はどこに！」

えっと、その蜂の巣をつついた騒ぎは・・・・・・・・・・・・・
それよりも艶聞家の部下の話を聞いてみたい気がするが・・・・・・・・・・・・
「けんじゃさま、私達ってそんなに酷いの？」
この騒ぎで孤児娘達が落ち込んでしまったじゃないか・・・・・・・・・・・・

その騒ぎに当主自ら現れる。
「いやぁ、当主殿。久方ぶりでありますな。私の娘を気に入ってくれてありがたい。一度、娘を託すに相応しいかどうか貴家を見定めたいと想いましてな・・・・・・・・・・・・・・・・」

「王室顧問卿、態々のご足労痛み入る。一度我が愚息と面通しして見ますかね？」
「それだけでは貴家にご迷惑でしょうから経理書類のお手伝いもいたそうかと・・・・・・・・・・」
「助かります。では、こちらに・・・・・・・・・・・・・・・」

うわぁ、当主様自ら死亡旗をとか・・・・・・・・・・・次の雇い主探さないととか言う声が聞こえるが気にしない。
其処まで酷い事しない積もりだし・・・・・・・・・・・・・・

であった子息殿は貴族らしいと言うか脳筋であった。
見た目は人並みだが性根は鷹揚で下の者には心配りをしようと不器用ながら行動できる好青年だ。
成程、しっかり者の嫁をつけてあげたいという気持ちはよくわかる。

「王室顧問卿、貴公の娘を我が家に迎え入れる事をお許しいただけますでしょうか？私のような粗忽者では家を傾かせて領民、家臣に難儀を強いる羽目になってしまうので・・・・・・・・・・」

子息は自分の弱みを補う者が欲しかったのだな。でも、孤児娘を部下としてではなくて妻として迎えるならば其れなりの誠意を見せてもらわねば・・・・・・・・・・

「勿論、孤児娘さんたちは皆魅力的ですよ。脳味噌に甘味料の詰まった令嬢達よりも楽しい会話が出来ますし・・・・・・・・・・孤児だとか奴隷上がりなんて些細な事です。愛情というのは私にはまだ理解できませんが、妻にするならば貴女の様な者を求めたいですね。もし妻となることを拒んでも、領民達の為に領地を治めてもらえますか？力不足な私ですから部下になるのも厭いません。」

「えっと、このお人好しの馬鹿は・・・・・・・・・・」

「馬鹿といって欲しくないのですが我が愚息です。なんか如何間違ったのか、自分に領地を治める器量がないから相応しい女性を妻にするか力量のある誰かに領地と爵位を譲って平民になりたいと・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・まぁ、婚約とかは兎も角、領地経営を見てみますか・・・・・・・・・・子息殿一緒に来るかね？」

「はい！ご指導願います。」

確かに苦労するだろうな。当主殿は・・・・・・・・・
どれどれ、経理状況を見てみますか・・・・・・・・・・・・・
ふむふむ
「普通ね。」「ちゃんと領民を慈しんでいるのが判りますわ。」「これが実際に支払われていれば領民が飢えずにいますし」
「もう少し、整備費に回したいですわね。」「ああ、この橋の修繕に対する嘆願書ね。」「こっちの小作たちに対する地料の額を何とかしたいかな・・・・・・・・・」
「ところで、この部分・・・・・・・・・」「微妙ですけど計算違いありますわね。」「会計さんは？」

会計が蒼い顔している。
問い詰めると浮気相手に貢ぐために・・・・・・・・・・・・・
小額だったので、弁済と奥さんに報告だけで済ませるが・・・・・・・・

「うわぁ。会計殿・・・・・・・・・・」「恐妻家だったからなぁ。」「入り婿だっけ？」
「明日からここに来れるかなぁ・・・・・」「医師の手配を頼む。」
「「「当主様！」」」
「葬儀屋のほうか？」「待ってください当主様、普通は止めるほうでしょう！」「むりだ！」

えっと、会計殿の細君は・・・・・・・・・
「昔、王家の護衛を受け持った女性騎士らしくってな・・・・・・・・・・・・・戦闘能力が・・・素手で熊を・・・・・・・・・

・・」

ご愁傷様です。

って、素手で熊をしとめるのが女性のたしなみなのか？

なんか周りに熊殺しが多いぞ！

そして会計監査は終わった。会計殿とかその他数名の家庭生活に対する多大な打撃を残して健全だった。

当主殿も浮気ではないが奥方にばれたら怒られる趣味の世界への無駄遣いが・・・・・・・・・・・・・・

「ううっ、見逃してくれても良かったのに・・・・・・・・・・・・・・」

「私自身は見逃しても良かったのですが、娘達はその辺潔癖ですのでねぇ・・・・・・」

「たかだか、好みの花を買うだけのことに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

当主殿は園芸趣味があっただけなんだが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

むごい・・・・・・・・・・・・・・

孤児娘達手加減しなさい。

「いえ、賢者様。花を買うならば奥様に送りなさいといいたいですわ！」「奥様の好みに合わせて花を用意するならば兎も角・・・・・・・・」

後にここの奥方に気に入られて、息子の嫁にという活動が活発になるのだがそれは別の話。

「領地のものに気にかけるのは良いけど、そのために娶るというのは気に食わないわね。」「引抜ならばまだ判るけど、妻にしてなん

て私を見てないから気に食わない。」「賢者様が最低ライン。」

娘たちにぼろくそに盛大に振られた子息殿は奥方に更に怒られてしまうのは笑い話。

子息殿自体は敬意に値するものなんだけどねぇ・・・・・人としては・・・・・・・・・・・・

貴族としてならばダメダメだけど・・・・・・・・・

「王室顧問、私を弟子に・・・・・・・・・・・・・・・孤児娘殿たちに失礼を働いたのは重々理解しました。ならば、自身で領民達に誇れるような領主となるべく修行したいと思います。どうかどうか・・・・・・・・・・・・・・」

うわぁ、馬鹿がここにいるよ。

「御主人様、民のためにあろうとする貴族の子息ならば教え込むのも悪くないのでは？」

なんか面倒ごとを背負い込みそうだが・・・・・・・・・・・・・・

「王室顧問卿、私からも伏してお願い申し上げます。愚息の教育を・・・・・・・・・・・・・・」

仕方ない雰囲気が・・・・・・・・・・・・・・

「暫く私が引き回すけど文句を言うなよ！」

「はい！師よ。」

子息は弟子になった・・・・・・・・・・・・・・

あれ？

「姉弟子様方、如何か良しなに願います。」

「えっと、よろしく・・・・・・・・・・」「うん。」「・・・・・・・・・・」

孤児娘達が押されている。って、いうか平民と言うか孤児と言うか奴隷崩れに頭普通に下げられるの？

「勿論です。平民だろうと奴隷だろうと下げるべき器量がある方に頭を下げる事を厭うのは馬鹿ですから、それに名もなき民の苦難のために幼い身で戦場に立つ気概。十分、敬うに相応しい方々であります。自ら前線に立ち、進もうとするなんて伝説の戦乙女もかくやの活躍と聞いております。そのような女性を姉弟子として出来るならば年の差とか身分の差なんて・・・・・・・・・・・・・・・弟子として誇りに思います！」

馬鹿がいた・・・・・・・・・・

「では、王都にいる奴隷商人を捕まえて、王室顧問様の弟子として認められるよう行動いたしましょう。」

子息は私兵を率いて王都を駆け回る。家毎の力関係とか関係無しに奴隷商人とか麻薬の売人を捕まえまくる。

えっと、是の後始末私が背負うの？

「師よ、貴方の御伽噺を無碍にする無粋な輩を捕まえておきました。何で幸いをかなえようとする民を食い物にする馬鹿が多いのでしょうか？」

滂沱の涙を流しながら、国内外の貴族王族を捕らえて貴族子息は叫びを挙げる！

「貴人保護法（アジール）　人が人を所有する。その理不尽を・・・・・・・・・・・・・・私は許せない！　我が剣の届く範囲は我が聖域（アジール）！許されよ、隷属の身分に落とされし方々よ・・・・・・・・・・我が力のなさを・・・・・・・・・・・・・」

うおおおおおおおおおおおおお！

と王都中に響く涙と叫びを挙げながら、貴族子息は剣を掲げる。

奴隷達をみて、本気で悔恨の涙を流す貴族子息を見て誰かこいつにつける薬と願うのだが

びゅん（匙を投げる音）
医療神様速すぎます。

むりだ（医療神。）

平穏無事と貴族子息（後書き）

あれ、どうしてこうなった？

平穏無事と元奴隷（前書き）

あらすじ　馬鹿が弟子になった。

平穏無事と元奴隷

解放奴隷の群れ群れ群れ・・・・・・・・貴族子息よどれだけ頑張ったんだ？

「師よ、東の果てから西の果て北の果てから南の果てまで奴隷商人の情報を得た順番に潰してきました。私の力不足は情けないです。未だに他国では隷属の苦難を味わっているものがいると思うと・・・・・・・・・・」

さめさめとなく貴族子息・・・・・・・・・・・・お前はどこまで馬鹿なんだ。

捕まえた奴隷商人の中には他国の重鎮がいるけどこれは私が処理しないとだめかなぁ・・・・・

はぁ・・・・・・・・仕事が・・・・・・・・・・・・

某国国王様へ
貴国の貴族が我が国で禁制の奴隷売買に手を染めてましたので捕まえました。
法に則って処理しますので遺体の引取りをお願いします。
説明が必要ならば私が直々に向かいますので必要ならば連絡願います。

某国国王様へ
貴国の王族が我が国で禁制とされている奴隷売買に手を染めて麻薬を売りさばいていたので、わが国の法に則って処理させていただき

ます。遺体等々引取り希望の場合は連絡くださいますよう・・・・・・

説明が必要ならば私が伺いますので、必要であれば連絡願います。

以下同文・・・・・・・・・・・・

私が説明行脚に伺うしかないか・・・・・・・・・・・・

どの順番でいくかねぇ・・・・・・・・

ところで解放された人達の処置は？

「そのまま自由解散で・・・・・・・・・・・・」

「馬鹿もんが！それでは生活苦から奴隷暮らしに戻るじゃないか！」

「では、我が領地で生活の世話を・・・・・・・・」

「如何するつもりだ？」

「三食昼寝付で・・・・・・・・・・・・・・」

「その金は？」

「税で・・・・・・・・・・・・・・・」

「このばっかもーーーん！！」

ばちこーん☆

思わず神秘緋金属張扇（オリハリセン）で突っ込んでしまったよ。

馬鹿だ馬鹿だと思ったらとんでもない馬鹿だったよ。

孤児弟や補佐見習も馬鹿だと思ったけどまだ筋を通す馬鹿だったけど、この馬鹿は何にも考えてない！

誰か、私に救いを・・・・・・・・・・・・・・・

ごめんつける薬ない（ｂｙ療養神）
見ている分には面白いけどね・・・・・・・・・・・（ｂｙ海洋神）
まるで某王国の祖王を見ているようだな（ｂｙ某王国地方管理神）

私は説明した・・・・・・・・・・・・無一文で投げ出された者がどんな末路を送るかを・・・・・・・・・・安楽にする金はどこかで出るかを・・・・・・・・・・・更にはその格差に領民の不満が出るだろう事を・・・・・・・・・・・・・・・

一時ほど語ったら理解したようだ。

「では、働き口を探しましょう。子供達は申し訳ないですけど師よ孤児院でお願いしたいのですが・・・・・・・・・・」

子供は仕方ないが大人はお前が探せよ。

「師よ、我が名と名誉に賭けましても・・・・・・・・・・・・」

お手並み拝見・・・・・・・・・・・・・・・

「御主人様、貴族子息様は迂闊すぎる気がしますけど・・・・・・・・・・・・・・・」

「本人は善意のつもりだから性質が悪い・・・・・・・・・・・・・・・悪意に対する対処を覚えさせないと・・・・・・・・・・・・・・・」

「出来ますか？」

「うぐっ！」

痛いところをつく・・・・・・・・・・側近を育てたほうが・・・・・・・・安全装置というか・・・・・・・

「それは御主人様に対する私のような存在ですか？」

「どういう意味だ？」

子息の側近となるものを選んでもらって・・・・・・・・・・

「いやだぁ！俺には３人の妻と１４を頭に１８人の子供が・・・・・・・・・・」

いつぞやのクビ宣言された彼か・・・・・・・・・・なんか増えているけど・・・・・・・

「いやぁ、私に黙って産んでくれた女達がいて・・・・・・・子供達の養育費のために頑張ります。」

うん、がんばってくれたまえ。ついでに自重しような。

これ以上子供がいても育てきれないだろ。

「そこは男の甲斐性と言う物でさぁ！」

きらっ☆

無駄に美男子的笑顔で言われても・・・・・・・・・・・・・・

って、いうか解放奴隷の中で女性を口説かない！

「彼女たちはすがる者が必要なんですよ。それに応じているだけで・・・・・・・・」

「彼は有能なんですけど・・・・・・・・・・・・・・女性に優しすぎると言うか・・・・・・・・・・」

言いたい事はわかるよ。

で、彼等をどうする？

「一応、彼が聞き取りを終えてまして技術のあるものはその職を斡旋してますし、我が領土でも足りない人材がいますのでそれは優先的に雇用してます。女性たちに関しては私兵団の賄い婦として雇用してます。まぁ、私兵達は独身が多いので妻になってくれればと・・・・・・・・」

「男性陣は良いとして、女性陣は彼の餌食になるぞ・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・仕方ないなぁ・・・・・・・・・・・・馬鹿弟子よ！彼女たちは私の目掛けに・・・・・・・・・・・・ごふっ！」

「御主人様下品な冗談は・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・孤児姉目が怖いよ。」

「師よ、孤児姉の姉弟子様に対して謝ったほうが・・・・・・・・・・・・・・・」

「なんか、女と聞いたら子猫でも嫉妬しそうな目だな・・・・・・・・・・・・」

「御主人様の場合可愛い子猫ちゃんとか言いながら愛でそうですので・・・・・・・・・・・・・・」

「否定しないよ・・・・・・・・・・・・・・・」

最終的には女たちは貴族子息の領地で小働きとか私兵団の賄いをすることとなった。

幸いであればよいな・・・・・・・・・・・・

「精神的な面はわかりませんが飢えさせる事はさせません！」

「あたりまえだ！ついでに是を処理しろ！」

貴族子息の前に白い山脈を作り上げた。

ほら、大好きな書類仕事だよ。

助けるからにはここまでやりきらないとね・・・・・・・・・・・・・・・

子息は崩れ落ちた・・・・・・・・・・・・・

艶聞家の部下は・・・・・・・・・・・・・・力尽きた・・・・・・・・・・・・・・・・・・

この領地のものはどこまで書類仕事に耐性がないんだ！

彼等は私兵団を巻き込んで数日がかりで仕事を終えたことを別記しておく。

「遅い！」「書類は鮮度が命！」「遅らせてる間にも困る人がいるのよ！」

「もっと手を動かす！」

孤児娘達がダメ出ししているから子息とか私兵団が泣き見ている・・・・・・・・・・

この後私兵団が待遇改善を求めて抗議するのは笑い話としておこう。

そしてこの私兵団は孤児娘達に扱かれて会計査察私兵団として名を馳せるのは・・・・・・・・・・・・・

「いやだぁ・・・・・」「白い白い波が襲い掛かってくる・・・・・・・・・・」

「動け我が腕よ・・・・・・・・・・・・・・うごけうごけうごけ・・・・・・・・・・・・・・」

どれだけ魘されているんだろう？
普通の量なのに
「ねぇ・・・・・・・・」「ほんと・・・・・・・・・・・・」「やわじゃない？」
「王室顧問の弟子たちは化け物だ！」
酷い言われようだな・・・・・・・・・・
この私兵団もっと扱くか！
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・・・・・・・・・・・・
馬鹿弟子よ、お前は如何なんだ？
あれ？反応がない・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・書類に対する拒絶反応？
誰か気付けを！
貴族子息は・・・・・・・・・・・・・・・泣きながら書類を片付けたそうな。
「ほらっ！次！」
「ひぃぃぃぃ！」

ダメだこりゃ！

平穏無事と元奴隷（後書き）

かの領地の私兵団は本当に書類仕事を仕込まれ続けて・・・・・・・・・世界有数の文官集団になりましたとさ・・・・・・・・・・・

「かんべんしてくだせぇ・・・・・・・・・・・・・・」

「紙を見るのが嫌だ・・・・・・・・・・・・・・」

「神はどこにいるのだ？」

ここに（ｂｙ某王国地方担当地方神）

「クソッ！神に見捨てられたか・・・・・・・・・・・・」

文芸神と大荷物（前書き）

あらすじ　とある貴族の馬鹿子息は書類仕事で泣いているぞ。
でも、泣きたいのは部下である私兵団だろう・・・・・・・・・・

文芸神と大荷物

私は説教を喰らっている。
一応邪神とは言え世界の理を司る文芸神を異世界に殴り飛ばすとは
と・・・・・・・・・・

抗議しているのは文芸神殿の祭司長・・・・・・・・・・

「そもそも神々とは・・・・・・・・・・・・・・（略）・・・・・・
・・・・・・・・・いくら文芸神が糞虫みたいで下品な書物を好ん
でいる救いがたい変態だとしても神なのですよ！・・・・・・・・・
・・・・（略」

えっと、祭司長様？なんか文芸神に含むところは・・・・・・・・・
・・・・

「ないですよ！その生涯を文芸神様に捧げる誓いを立てるくらい・・
・・・・・・・・・・・・・くっ！・・・・・・・・・・・・・どうして・・
・・・・・・・・」

ああ、彼も被害者なんだな・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「言わないでください・・・・・・・・・・・・・・同情が辛いのです・・・
・・・・・・・・・」

そんな折、邪神が降臨しやがった！
「たっだいま！　王室顧問！良い世界に送り届けてくれて感謝する
わ！飛ばされた世界は・・・・・・・・・・・・・異世界人たちのふ

るさとで・・・・・・・・・・・・大収穫があったわよ。前に王妹が飛ばされたとき羨ましいなと思ったけど、自分が飛ばされるなんて感激だったわ！そこで同志を見つけて、その地の女神達と受け攻め論争を楽しんで楽しかったわ。」

そうして私に一つの包みを渡す。

「ああ、これお土産ね。」

「ア、ありがとう御座います・・・・・・・・・・・・・・」

なんか菓子が入っているのだが包み紙が・・・・・・・・・・・とても痛い・・・・・・・・・・・・

「それと祭司長。これの翻訳お願いね。我が信徒達に配布したいから・・・・・・・・・・・・・・・」

廃腐の間違いでは・・・・・・・・・・・・・・・祭司長の嘆きの顔が・・・・・・・・・・・・・・・・

「王室顧問恨みます・・・・・・・・・・・・・・なんて世界に飛ばしたんですか・・・・・・・・・・」

確かに嫌になるよなぁ・・・・・・・・・・・・・

男なのに男色文学の翻訳なんて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

うげぇ・・・・・・・・・・・・・

そんな腐の匂いを嗅ぎつける王妹殿下と忌々しき異世界人。

「うわぁ、新刊だ！」「この続き見たかったのよねぇ・・・・」

（以下腐臭塗れた会話なので割愛）

私はこんな酷い会話は記録したくない・・・・・・・・・・・・・・・・・・

思わず神秘緋金属張扇（オリハリセン）で殴っても仕方ないよね。

ばっかーん☆

彼女たちは星となった。

でも、気をつけろ！我等人類が世界を統べる日は遠く、彼女達が戻ってこないという結論は出てこない。

彼女達以外にも第二第三の腐女子共が・・・・・・・・・・・・・・・・・・こないとも限らない・・・・・・・・・・

男達よ気をつけねば・・・・・・・・・・・・何時犠牲になるか判った者ではない！

彼女たちは数日後何事もなかったかのように戻ってきて・・・・・・・・・・

腐臭に塗れた会話をするのだった。

文芸神と大荷物（後書き）

いつの間にか１０万ｐｖ突破とは

読者様様ですな・・・・・・・・・・・・

さぁ、酒を飲もう

文芸神と異世界人（前書き）

あらすじ　異世界人というものは恩恵も齎すが災いも齎す表裏一体の者である。

少し考えてみるが良い、異世界人の英雄談を謡う世界が多いのだが其処影に脇役と追いやられる現地人の涙を。
成功する影に地道に努力をして信頼を得たのに異世界の知識だけというだけで彼等の生活が脅かされる・・・・・・・・・・・・・・・
それが本当に正しいのだろうか？

力こそ正義、結果こそがすべてというのであればそれは仕方がないのだろうが・・・・・・・・・
その世界を歪めて自身の利益を求める異世界人たちに正義という言葉は似合わないのかもしれない・・・・・・・・・・・・・・・・

文芸神と異世界人

忌々しき異世界人は異世界追放の突っ込み技を喰らっても平然と帰ってくる。
って、言うか追放先は生まれ故郷だろうが！
どうして戻ってくる！

「あっ！そうだった！あっちが私の生まれ故郷だった！」
「まてぇーーーーー！」
「普通家族に挨拶とかあるだろう！」
「忘れてた！　てへっ☆」
「年増にそれをする権利はないぃぃぃぃぃ！」

口々に突っ込みを入れる男性陣。
「あらあら、こんなに突っ込まれたら私の体が持つかしら・・・・・・・・・・・・・・・」
「お前の体なんてどうでも良いわぁぁぁぁぁぁ！」

それはどうかと思うが近衛士官君。いくら婚約者が腐化してしまったからといって・・・・・・・・・・・
うわぁ、最悪だ・・・・・・・・・・・・・
哀れな・・・・・・・・・・・　そういえば近衛士官、胃薬の世話に・・・・・・・・
婚約破棄しようとしたら先方からどうしてもどうしてもと泣きつかれてしまって・・・・・・・・・・・・
親御さんも不憫な・・・・・・・・・・

そういえば、負の感情を吸い取って浄化する木が存在するのだけど・・・・・・・・・・・・

早速取り寄せだ・・・・・・・・・・

予算は・・・・・・・・・某が出す！

某伯爵・・・・・・・・・・・・・あんた男だ！　俺も助力させてくれ！・・・・・・・・・・

なんか知らないうちに浄化する木を取り寄せられ王都中に植えられる・・・・・・・・・・・・

効果がない・・・・・・・・・・・・

そりゃ、そうだろう。負の感情には効果があるが、腐の感情には・・・・・・・・・・・・・（ｂｙ森林神）

「くそっ！」「あの耳っ子ラバーな森林神の性根を叩きなおせない時点で察するべきだった・・・・・・・・・・・・」

「神は変態しかいないのか？」「風の神は羽っ子ラバーだし・・・・・・・・・」

「海神、水神、漁労神は鱗娘ハァハァ・・・・・・・・・・・・だしなぁ・・・・・・・・・・」

「暗黒神、疫病神等はまともだったのか・・・・・・・・・」

ここで神学論争が始まるのだが割愛する。

どう考えても神々の醜聞をさらしまくっているだけだし・・・・・・・・

ところでそこでおろおろしている神々、反論は・・・・・・・・・・

なさそうだ・・・・・・・・・・・・・・・

如何考えても否定できないだろうからなぁ・・・・・・・・・・・・・・・

どうして神々は馬鹿しかいないのだろう？

王室顧問、それは間違っている。少なくとも私は馬鹿ではない・・・・・・・・・・そして君が信じている神も（ｂｙ荒野神）

演芸神がまともに見えるかもしれないが・・・・・・・・・・それは間違いではない。文芸神の狂気に比べれば（ｂｙ療養神）

療養神様・・・・・・・・・・この神々につける薬を

びゅん！（匙を投げる音）

どうしてこうなったのだろう？

「そりゃ、君達が私という触媒に踊らされて世界が変革されているからだよ・・・・・・・・・・・・それをことのほか喜んでいるのは・・・・・・・・・・・・」

「ごちゃごちゃうるさぁぁぁＩ！！」

バチコーン☆

がたがたほざく忌々しき異世界人を神秘緋金属張扇（オリハリセン）で叩き飛ばしてしまった・

どびゅ！

世界の壁を越える音がすると忌々しき異世界人の姿が消えた。

ああ、これで世界が救われた・・・・・・・・・・と思った瞬間。

どごっ！

という音がして忌々しき異世界人は顔面から着地していた・・・・・・・・・・・・

どうして・・・・・・・・・戻って来るんだ！

忌々しき異世界人は　ごきゃ！　と首の骨を鳴らしてからだを　ごげっ！ぐしゃっ！等と音を立てながら整える。

奴は不死身か?それともこれが噂に聞く異世界チートというべき者か・・・・・・・・・・

「いやぁ・・・・・・・・・・世界の壁を越えたと思ったら打ち返されて戻ってきた。」

くそぉ!異世界の神め!!

我だって選ぶ権利がある（ｂｙ異世界の神）

ごもっとも・・・・・・・・・・・・・・

で、これまだおいとくのですか?流石に・・・・・・・・・・・・・・・・・・

文芸神と異世界人（後書き）

酒が切れたのでこれまで

酒盛酒場と氷売り（前書き）

温泉町に着いた。
何で道中馬車の中で書類整理をさせられていたのだろうか？
補佐見習は諦めと共に問いかける。

「うん、使えるものは親でも使えっていうじゃない！」
「旅費払うといったじゃないか！どうして普通に監禁して書類整理させるんだ！」
「だって・・・・・・・・・・・私一人じゃ面倒だったんだもん☆てへっっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・痛い。」
「うん、確かに。てへぺろっ☆が許されるのは（ぴー）才までだよな。」
「五月蝿い！ちゃんと報酬払っているじゃないの！」
「俺たちは休暇中だ！」

会計女史は糠に釘だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・諦めて報酬を上乗せしてもらったほうが良いのかも・・・・・・・・・」
「商会公宛に抗議文書くか・・・・・・・・・・・会計女史に無理やり仕事させられてしまいました・・・・・・・・・・しかも年も考えない【てへ、ぺろっ☆】が痛々しくて見ていられなかったです。・・・・・・・・と綴ってやる。」
「うぐっ！」
「年を考えろおばさん！」
「おばさんいうな！補佐見習君の母親くらいの年じゃない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・お義母さんは二十代。」
「ぐはっ！（吐血」

「・・・・・・・・・・・・・・・以外と傷跡娘容赦なかったな・・・・・・（汗」
「・・・・・・・・・・・・・・・さてと、街に行こう。」
「そだな。」

崩れ落ちて灰となっている会計女史を放置して二人は温泉町に向かうのであった。

「お二人さんのたっしゃでぇ～。」
犬耳の御者の別れの挨拶を背に町へと進むのであった。

「傷跡娘、腐れ賢者の紹介状見せないほうが良いのかなぁ？」
「利点はあるけど、もれなく仕事付と言う落ちがつきそうなんだけど・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・だよなぁ・・・・・・・・・・・・・・。」

紹介状は見せなかった。でも、連絡は先に届いていて二人に対して領主と療養神殿からの招待状が二人が泊まる宿宛に来たのは次の日のことであった。

「あの腐れ賢者ぁぁぁぁ！！」

酒盛酒場と氷売り

「また補佐見習の叫びが聞こえるようですわ。」
「今頃、温泉町についた頃であろうな。伯爵と療養神殿長が歓待してくれているだろう・・・・・・・・・・・・」
「白い山脈を用意してですか？」
「まさか、美味珍味を取り揃えてだよ。流石に子供だから酒は用意していないだろうがな。」

我等主従は・・・・・・・・って、私と孤児姉だけになったのだが市場にいる。
久しく市場にも寄っていないしな既知の者にも不義理しているだろう・・・・・・・・・・・・

あいも変わらず賑やかでいろいろ雑多な雰囲気だな。
アリウム一つでも長いの玉の小玉が幾つも連なっているもの・・・・・・・・・青い葉っぱを茂らせているもの・・・・・・・・・・・・
粉末になっているのもあるなぁ・・・・・

どれがどれだか・・・・・・・・・・・・
「ご主人様は私に任せていただければ宜しいですわ。」
「うむ、期待しているぞ・・・・・・・・・・」
孤児姉は嬉しそうに頷く。愛い奴だ。

市場の衆も我等の顔を見ると嬉しそうに席を用意してくれたり、色々試してみてくれよと持ち寄ってくれる。
「王室顧問の旦那、こいつを試してみてくれ！今年の新物よ！」

「貴族様、うちの塩蔵肉はどうだい？」
「久方ぶりじゃないの！うち等のような下賤の者はお見限りだと思っていたがな・・・・・・・・・」
「ははははっ！この娘と温泉でしっぽり楽しんでいたのさ！」
「・・・・・・・・・・・・・・／／／」
「隅に置けないねぇ・・・・　だんな！」
「でも、手出してないだろ？」「勿論だとも、可愛い従者を無碍にする趣味はない。」
「そういえば黒髪の小僧っ子は？」
「孤児弟か、男爵位を貰って色々忙しいみたいだぞ。」
「ああ、あの時の凱旋行軍をみたみた。」「ちっこい嬢ちゃん、はどうなったんだい？」
「孤児院で見たぞ。」

わいわいがやがや・・・・・・・・・・・・・

そういえば、あそこの一角は何故開けているんだ？
「あれですかい？よく旦那方が酒盛するもんだからその場所を巡って問題があったんでな。だったら、酒盛する場所を作ってしまえって・・・・・・・・・・・旦那のお付にいたろう、小売婦人の息子で活きの良すぎるのが・・・・・・・・・・彼が一区画を押さえて酒盛専用区分としたんだよ。」

ふむ、補佐見習も中々やるようではないか・・・・・・・・・・・・
「おかげで、酒盛するといって場所を取られる店主もいなくて済むし、酒盛してくれる貴族達が一箇所にいるから宣伝に困らないのさ・・・・・・・・・・気に入ってくれると買いだめしてくれるし・・・・・・」

酒盛区画には身分の上下の差がなく酒盛を楽しんでいる・・・・・

・・・・
ところでいつぞやの絨毯職人の一団、昼間から良いのかな？
「ははははっ！王室顧問様じゃねぇかい！かかあが怖くて酒が飲めるかってんだ！」
「そりゃ構わないが、後ろを確認したほうが・・・・・・・・・・・・・」
「うしろ？後ろに何があるって言うんですか？　うおっ！かあちゃん！」
「中々、面白い事を言ってくれるねぇ・・・・・・・　お前さん」
「え、えっと・・・・・・・・・・・・・・」

絨毯職人の親方の後ろにはおかみさんが・・・・・・・・・・・・・

「親方終わったな・・・・・・・・・・」
「懲りてないよなぁ・・・・・・・・」

若衆たちは平然と親方夫婦のやり取りを肴に飲んでいるけど・・・・・・君達の後ろにも・・・・・・・・・・・・・
「仕事もせずに昼間っから・・・・・・・・・・・・・・・」
「良い度胸ですわねぇ・・・・・・・・・・・・・・・・」
絨毯職人のところの女衆か・・・・・・・・・・・・・・・・普通に皆を誘って呑めば良いものを・・・・・・・・・・・・・・

広場中に響き渡る悲鳴、市場の衆は笑っている。
いつもの光景なのだろう・・・・・・・・・・・・・

「おらっ！其処だ！一撃が軽いぞ！」「耐えろ！耐えるんだ！衛士が来るまで！」
「良いの喰らったなぁ・・・・・・・　この分だとおいらの銀貨が・・・・・・・・・・・・・」

えっと、何しているんです？
「勿論賭けですが。」

そうこうしているうちに衛士が来て、絨毯職人（ぼろきれ）の男衆を回収する。
女衆もその頃には落ち着いて受け答えしている・・・・・・・・・・・・・・・
これって夫婦喧嘩で処理されるの？
「それが一番角が立たないでしょう。」
「そもそも、そんなのに関わりたくない・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「働きたくない・・・・・・・・・・・」

こんな時、どこからともなく現れる氷売りが・・・・・・・・・・・・・・・・
・いない・・・・・・・・・・
「御主人様、そんな定番みたいに言わないで・・・・・・・・・・・・・・・
って、あそこにいるみたいですねぇ・・・・・・・」

「あーん。」
「あーん。むぐむぐ・・・・・・・・・・・美味しいねぇ・・・・・・・・
君がいるからかな？」
「恥ずかしい事いうわねぇ・・・・・・　もう一つどうだい？」
「貰おうか・・・・・・・・・・・・・お前も喰っていないじゃない
か・・・・・・・・・・ほら、あーんして・・・・・・・・・」
「あーん☆」
「ほら、其処に食べかすが・・・・・・（ぺろ」
「人前で恥ずかしい事しないの（こつっ」

狼頭の氷売りは極光神に紹介された狼娘さんと仲良く仕事している？

仕事なのか？遊んでいるようにしか見えないぞ・・・・・・・・・・

「氷売り、一つくれ！」
「あいよっ！　って、溶けてやがる！」
「大丈夫だよ、【氷結呪】！」

かきーん！

ガシガシガシガシ！

狼娘が作った氷塊を氷売りが砕いて・・・・・・・・・・・・・・手頃な大きさにしている・・・・・・・・見事な連携だ！
でもなんで溶けていたの？

「そりゃ、あいつ。嫁さん貰ってから暑苦しいくらいにべたべたしてさ、それで溶けたんじゃないのか？」
「暑い、暑いねぇ・・・・・・・・・・・・誰か氷くれないか？」
「あいよっ！」
「よりにもよってお前が売りつけるのか！」

氷売りは今日も繁盛している。
「あっしをネタに使うなって・・・・・・・・　あっしらの愛が極北の氷をも溶かすくらいだから仕方ないか・・・・・・・・・・」
「恥ずかしい事言わないの！」

狼娘に軽く小突かれて、氷売りが照れ笑いをしている。

ふむ、相性はよさそうだな。（ｂｙ極北神）
わらわの見立ては間違いなかろう。あの二人には子宝にまぐまれる祝福を与えるとするかの（ｂｙ極光神）
そんなことせんでも、普通に沢山生まれそうだが・・・・・・（ｂｙ極北神）

まぁ、仲良きことは美しきかな・・・・・・・・・・

さて、我等もどこか席を取ろうかね？
「はい、御主人様。」

私達も席に着き、市場の衆が持ち寄ってくれる酒肴を楽しむのであった。

あっ！酒を忘れた・・・・・・・・・・
「たまには素面でいるのも宜しいのでは御主人様。」
「そんなに呑んでいるかね私は？」

酒盛酒場と氷売り（後書き）

酒が切れたので今日はこれまで。

酒盛市場と小売婦人（前書き）

温泉町に来て暫し、俺たちに招待状が届く。
領主と療養神殿連名である。
俺達二人は其処まで素晴らしい働きをした覚えはない、寧ろ普通の官僚と同等かそれ以下の働きしてしていない・・・・・・・・・・・

腐れ賢者の差し金か？

招かれていかないのは非礼だから招待を受ける。
せいぜい、仕事の手伝いをと言われる程度だろう・・・・・・・・・
それならば断っても何とかしてくれるはずだ・・・・・・・・・・
紹介状に王都における事務仕事の守護神等というふざけた一文を書き込んだ我が師父にして王都の危険人物である王室顧問が・・・・・・・・・

領主館に招かれて、通された部屋は一地方貴族としては過ぎたる豪華な物であった。
そして、俺たちの待遇も・・・・・・・・・・奴隷崩れとか雌犬の息子と呼ばれた俺たちには過ぎたる者である。

「よくきたねぇ・・・・・・・・法務副長補佐見習君に傷跡娘嬢。話に聞いているよ。王室顧問が国内外をほっつき歩いている間に王都の仕事を取りまとめて国内外に支障がないようにまわしていたことを・・・・・・・・君達のような本当に年若い者が、裏方に回ってなんて普通は嫌がるのだろうに率先して行うなんて敬

意に値するよ。」
「いえ、滞って困っている者が出たのを身をもって知っていただけですから。」
「それでも師父の呼びかけに逆らってまで立ち上がったのは法務副長補佐見習君だけだろう。王都のものは見る目が無い。私が直々に引き抜きたいくらいだ・・・・・・・・・」
「能力的には手伝いに毛の生えた程度ですよ温泉伯。」
「能力は伸ばせば良い、気概と気風は伸ばせないからな・・・・・・・聞いて居るぞ、其処の傷跡娘嬢を馬鹿にした貴族に対して単身挑んだと言う事を・・・・・・・・・・更には王室顧問達がいない間に弱者保護を上奏した時却下しようとした国王に胸倉掴んで直談判したなんて若さとは言え私は君を買っているよ。」
「いえ、あれは本当に怒りに流されただけで・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・あの時補佐見習は泣いていた・・・・・・・・・・・・・・・路上で朽ちた子供に対して悔し涙を流していた・・・・・・・・・・・・・・・あの時取り成しがなかったら、私もついていくつもりだった。」
「傷跡娘嬢の言うとおりだ。我が地において朽ちる者がいないのが自慢だ！路上で朽ちる子供に対して涙を流せない者を怒りを持たない者を私は認めない。」

温泉伯は茶をすすり、俺達に本気の目で相対してくれている。
子供だからって侮らず、一人前の貴族として認めてくれている目だ。
この目で相対してくれているのは少ない。
官僚達、宰相、国王陛下・・・・・・・・そして我が師父である腐れ賢者くらいだ。

俺は青臭い言葉を発しているだけなのだが・・・・・・・・・
「俺は・・・・・・・・・・・・路上で朽ちた子供になっていたかも

しれない。そして、俺を育てるために体を損ねた母を誇りたい・・・・・・・・・・傷だらけになっても誰かの幸いの為に生きる傷跡娘を認める世界を造りたい・・・・・・・・・・・・俺は馬鹿だから何も出来ない・・・・・・・・・・だから出来る奴に力を貸して幸いなる世の中を作る手助けをしたい！」

俺はなんて青臭く馬鹿な叫びをしたのだろう・・・・・・・・・・でも温泉伯はそれを笑って受け入れてくれた・・・・・・・・・

「ふむ、補佐見習卿の見事な宣誓よ。小さな温泉町でさえ苦労するのに世界を相手にとは・・・・・・・・・・大それた大馬鹿者よ、人生の先達として助力せねばなるまい・・・・・・真、王室顧問卿の言うとおり愛すべき大馬鹿者だというのは良く判った。何かあったら助力いたそう。そして、この地にいる間は我が眷属としているが良い。もしよければ我が養子でもよいぞ。」

どうも買いかぶられているようだ。

酒盛市場と小売婦人

市場に常設された酒場にいる・・・・・・・・・
孤児姉と二人、ゆるりとした時間を過ごすのも悪くないな。
可愛い従者にして、可愛い義娘・・・・・・・
彼女にしてみれば他の見方もあるのだろうが・・・・・・・・
・・

「おや、賢者様・・・・・・・」

補佐見習のご母堂が其処にいた。
「久方ぶりであるな。ご婦人、補佐見習は温泉町に言っているのにどうして残られたので？」
「あの子たちの旅立ちに親がついていく必要はないでしょう・・・・・・・・・ついていくのは野暮と言う者ですよ。」
「くくくっ！帰りには傷跡娘の腹が膨らんでいるかもしれないぞ。」
「それはそれで仕方ないですわね・・・・・・・・・そうだったら、あのこを折檻しないといけないですけど。」
「お手柔らかに・・・・・・・・・って、ご婦人は何故ここに？」
「ええ、息子に頼まれてここの世話役の一人に・・・・・・・・・なんでも酒盛する貴族たちがいるから押さえの効く誰かが欲しいと・・・・・・・・・・最悪息子の名前出せばたいていのものは・・・・・・・・・って、あの子何やっているのかしら？」

ふむ、如何考えても会計で泣かしまくっているだけだろうというの

は眼に見えて判っている。
どこの貴族家を泣かしているかは気にしない方向で・・・・・・・・・・・・

「この酒場自体の予算も法務副長様が、息子の仕事だといってつけてくださいましたし・・・・・・・・・・市場の役付の方々と一緒にやらさせてもらってますわ。」

公私混同だなとおもうけど、婦人ならばうまくやれるだろう。
そして些少なれど公役についていれば旨みがあるから婦人一人の身を立てるために役に立つだろう・・・・・・・・・・・
以外と旨い汁のすすり方を知っているようだ。
そのくらい生活力がないとやっていけないからな。

婦人の差配は中々で適度に問題を起こしては対応と称して改善をしている。
一歩引いて考えさせる立場でいるけど、うまいことやっているようだ。

そうなれば、こっちとしても何人か身内を入れたいな・・・・・・・・・・・・・・・・・・
婦人とは身内みたいな者だし・・・・・・・・・・・・・・・・・

「何たくらんでいるのですか王室顧問様?」
ばれているようだ

酒盛市場と魔法使い氏（前書き）

あらすじ、市場でのんびり。

作者のパソコンデスクのいすが壊れてしまった。座っているときにバキバキって・・・・・・・二枚おろし・・・・・・・・・・・

前話が短かったのは察してください・・・・・・・・・・・・・

今も空気いすで・・・・・・・・・・・・

って、できるか！

酒盛市場と魔法使い氏

企んでいるなんて婦人、人聞きの悪いことを・・・・・・・・・・
「旦那、尻尾が出ているけど悪魔の流れ汲んでいたんかい？」
たまたまいた氷売り（狼系獣人）の突っ込みに

「おっと、本性が・・・・・・・・・」
「本性って・・・・・・・・・賢者様。」

やっぱり、だの　血も涙もないと思ったら・・・・・・・・　だの　酒盛りしている貴族連中（自他国共に）が口々に言いやがる。後で覚えていろ・・・・・・・・・・

「そりゃぁ、旦那の日頃の行いを聞いていると・・・・・・・・・」
人聞きの悪いことをいう氷売りに少々いらっときた私は狼娘を呼び寄せて。

「狼娘、いい事教えてやろうか。この自称狼系獣人の氷売り、たまたま痴話喧嘩の場面に出くわすことが多いので王宮にて【犬も食わない】ネタ要員として雇わないかという話があったんだ。そのときの待遇がすごいぞ。男爵待遇にて、俸給が・・・・・・ごにょごにょ・・・・・・」
「あんた！すぐ行こう！貴族様だよ！って、その流れだと私も【犬も食わない】ネタ要員じゃないか！！」

市場に響く狼娘の雄叫び（女性だから雌叫び？）は遠く王宮まで響いて、城勤めの狼系獣人たちの失笑と同情を得たそうな。

あおーん！

この狼娘も中々面白い人材だ。

「ご主人様、その案件は官僚の皆様方の手でそれっぽく作り上げたのは良いのですけど悪乗りした地主、城持ち貴族の皆様方が更に犬系、狼系の方々を大量雇用しようとして宰相閣下に止められたそうですけど・・・・・・・・・・」

「どうやって止めたのかは敢えて聞かないけど・・・・・・・・・・何やっているんだろう？」

「悪乗りしたのは孤児娘達もなんですけど・・・・・・・・・・・・彼女達の従者として犬耳系を使おうかなんて・・・・・・・・・」

「こう言うのは偶々通りかかった者が餌食になるから面白いのであって、態々常駐させるのは趣にかける・・・・・・・・・・・・あとでそれは教えておかないと・・・・・・」

「ああっ！餌食言ったよこの貴族様！」「趣って何だよ趣って！いつもいつもあっしが居る所を狙ったかのように事を起こしているのに！」「この人種差別主義者（種族ジョーク愛好家）！」

「そのためだけのあっしを用意するな作者！」「あたしらの存在意義って何なのさ！」

「しかし、この狼どもは私が貴族様ということを忘れているみたいだな。」

「でも仕方ないでしょう賢者様。もう、この突っ込みは定番となってますし市場の名物ですわよ。」

「名物か、ならば仕方ない。【氷売りの犬も食わないネタ】は彼の風貌（狼頭）と相まってわざといるところでいちゃラブして突っ込まれると幸せになると風聞も出ていますからねぇ・・・・」

「小売婦人！だれだ！そんな噂流した奴は！」

「でも、実際恋人達があなたに突っ込まれてから子宝に恵まれたとか、周りが優しくなったとか色々良いことがあったって言っているわよ。」
「それは周りに認知されたとか！自覚してラブラブしすぎているだけだろう！」
「あんた・・・・・・・・なんか不憫ね・・・・・・・・・・・」
「それを言うなよ狼娘。世界は理不尽だ・・・・・・・・・・・」

「でもなぁ・・・・・・・・」
「そうですわね、ご主人様。氷売りは運命神様から痴話喧嘩のネタになる運命を背負っているといわれた伝説の方ですから・・・・・・・」

「伝説って！」「あんた、そんなにすごい人だったんかい？」
「馬鹿いうな！考えても見ろ！ただの中てられ要員だ！」
「そういえばそうね、あんまりたいした運命じゃないし・・・・・・・・・」
「それもお前と出会うための前振りだったんだよ・・・・・・・・・・愛しき北の野風。」
「あんた・・・・・・・こっぱずかしい事言わないで！」
いちゃいちゃらぶらぶ・・・・・・・・・・

「おーい！もどってこーい！」

氷売り夫妻の氷がまた溶けている・・・・・・・・・・

そこに偶々通りかかる若き魔法使い氏（食料品とかの買出し中）。
口々に市場の衆が声をかける。

「魔法使いの旦那、冷気魔法を頼む！」「こっちにも涼しい風を！」
「氷ひとつくれないか！」

「おまえらっ！人が通るたびに魔法をせびるな！」

ぶちきれた魔法使い氏が広範囲冷気魔法（微弱威力）をぶちかます。
市場中に吹き荒れる冷風！一心地ついたと思った市場の衆なのだが
だんだん寒くなる風にがたがた震えだす。

ちなみに氷売りの狼夫妻は毛皮のせいか、ラブラブのせいか気にもしていない。
「風が強くなってきたな。」「極北ほどじゃないさ。」
「でも風に当たるのは良くない。あっしは君を包む外套だよ。」「・・・・・・・・・・・・／／／／」

ぜんぜん効いてない・・・・・・・・
寒くなった私は孤児姉を行火代わりに懐に抱き込んで暖を取る。
温い。
「・・・・・・・・・・・・・・・ご、ご主人様・・・・・・・・・・・・／／／／」

ふむ、子供の体温は高いから良いねぇ・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「賢者様、孤児姉ちゃんも女の子なんですから安易に抱きすくめたりするのはよろしくないかと・・・・・・・」
「おっと、失礼。」
それは確かに・・・・・・・・・一応年頃の娘だものなぁ・・・・・・
私が孤児姉を離すと名残惜しそうに私を見る。
この子は私を神格視（美化フィルターon）しているからな。
もっと、年の近い良い男を捜せばよいものを・・・・・・・・・・

こんな道楽貴族ではなくて。

そんなこんなしていると、衛士が来て魔法使い氏を連行する。

罪状は【攻撃魔法の不正使用】・・・・・・・・・まぁ、原因は市場の衆だし説教くらいで・・・・・・・・

「いえ、前科がありますのできっちりと反省してもらいます。」

「何度やったんだい？」

「5、6回ほど・・・・・・・・・原因はラブラブカップルを見て冷やしてくれと散々言われたので切れたらしいですけど・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・まぁ、魔法使い氏。強く生きろよ・・・・・・・・・・」

「はい、賢者様。温かいお言葉心に染み渡ります・・・・・・・・・」

そうして魔法使い氏は衛士と共に市場を退場するのだった。

後で、彼に降りかかる宿命について衛士隊に連絡しておくとするか・・・・・・・・・

それで彼の罪が晴れる訳ではないのだがあまりにも哀れだ。

「ご主人様。魔法使い氏の罰はどれくらいになるのでしょうか？」

「まぁ、傷つける意味合いではないから精精罰金か奉仕作業で済まされるだろう。市場の衆も嘆願書出すだろうし・・・・・・・・・」

出すよな！と私がにらみつけると、市場の衆はがくがくと頭を上下させる！

ああ、一人身とか家庭生活のうまくいっていない者達の嫉妬と羨望がこんな悲しい犯罪を起こす遠因となり人の人生を惑わせる。なんと悲しいことなのだろうか・・・・・・・・・・・・

そして、氷売り夫婦を見ていると・・・・・・・・・・・・
いまだにイチャイチャしていた・・・・・・・・・・・・・・

酒盛市場と魔法使い氏（後書き）

あれ？話の流れが・・・・・・・・・・

やはり、ビールのケースで座っているとだめなのかな？

酒盛市場と目隠し布（前書き）

あらすじ　魔法使い氏は連行された・・・・・・　かなしきは一人身たちの嫉妬心。醜くも悲しい彼らの行動は幸せになりたいという叫びなのかもしれない。

酒盛市場と目隠し布

話が脱線した。たぶん作者の脳みそが酒精に浸っているせいだろう。
あれほど酒は控えろと・・・・・・・・・・・・・

「それはご主人様もですわ。さすがに一晩で一瓶開けるとなれば体に毒ですわよ。」
おやおや、私にもとばっちりが・・・・・・・・・・・・・・・・・
良いではないか孤児姉、今度一緒に飲むかね？
「後の介抱をしていただけるのでしたら・・・・・・・・・・・・・・」

で、話を戻そう。
市場は寒いのである。魔法使い氏が放った冷気魔法の影響で・・・・・・・・・・・一時もすれば戻るのだが・・・・・・・暖かいものがほしいな。
温かい汁物とか手に入るかな？

少し離れたところに温かい汁物を扱っている露店がある。
そこで、汁物と雑穀の湯掻いたのを買い、孤児娘と小売婦人の三人で体を温める。
他にもつまみがあるから、普通に食事しているようなものだろう。

他の市場の衆や飲んでいた連中も夫々に温かい食べ物を扱っている露店を見つけて、暖を取っているようだ。強者となると火鉢と土鍋を買って酒を燗しているのがいる。これは良いなぁ・・・・・
この後この市場で◎型の鍋が流行るのだが別の話。丸の中心部で酒を燗して、周辺部は鍋とかをするのだ・・・・・・・・・・・・
寒くなる季節にはもってこいだな・・・・・・・・・・・・・・・

この一件で今日の氷売りの売り上げはあまり良くなかった・・・・・・・

「そんな日もありますって、寒くなるから温かいものでも扱いますかね。」

季節商売だったのか・・・・・・・・・・・・・・

驚いたが別にそんなもんかとも納得。

「で、話は戻しますけど賢者様。何を企んでいたので?」

「ああ、小売婦人。たいしたことじゃないんだ。うちの子供たちのうち何人かをこの酒場で働かせようと思ってね。」

「なるほど、身内で固めて呑み易くするのね。でも、そうなると孤児姉ちゃんとかに話が届いて逆に呑めなくなるのでは?」

「それは、またおいといて・・・・・・・・・・・王宮で使うには資質が足りなくても良い子はたくさんいるからな。」

「王宮で働く資質って何かは聞きたいような聞きたくないような・・・・・・・・・・・・」

「なに、腹黒な大人と馬鹿な大人に潰されない程度の図太さが・・・・・・・・・・・」

「なるほどね・・・・・・・・・・・・近衛の小隊を率いてうちの馬鹿息子を迎えに来るような連中に押されたらだめですものね。」

そんな事をしていたのか、馬鹿官僚ども!

「あれは、宰相閣下と法務副長様の差し金だと・・・・・・・・・・・・・・・一応息子の賃金として銀貨をもらいましたが・・・・・・・・・・」(汗)

上からそんなことをしていたのか・・・・・・・・・・・・・・

後で釘を刺しておかないと・・・・・・・・・・・・・・・孤児娘達も時

間になったら迎えにいかないとまずいかな・・・・・・・・・・・・
一応荒野の民にお願いして遅くなるようなら回収してくれと頼んでいるが・・・・・・・・・・・・

それは兎も角として小売婦人と打ち合わせをしてその日は帰ることにする。
灰髪の兄妹を市場で働かせることによって、目隠し布の存在を認知させるのが目的なのだが兄妹も稼げるところを作って自活してもらわないと・・・・・・・・・・・・・・・

「ご主人様、どうして孤児弟の従者にしないので？」
「うーん、灰髪少年と孤児弟を並べているところを見た貴腐人達がどんな反応するかな・・・・・・・・」
「それは灰髪少年に辛過ぎる事でしょう。」
「だろう、孤児弟が家でも持っていれば下働きの口があるのだろうけど寮生活で必要もなかろう。ついで言えば孤児弟に従者付けるならば世慣れた者が相応しいしな。」
「それを言うならばご主人様だって・・・・・・・・・・・・・・・」
「まぁ、成り行きということで・・・・・・・・・・・・・・・・実際仕事の手伝いとかは助けになったから従者と言うより官僚の見習いを育てた気もしないでもないが・・・・・・・・・・・・・・・」
「なんか、流れと違っていたようですわね。ご主人様。」
「違いない・・・・・・・・・・」

ままならない流れの激しさに苦笑するわれら主従であった。

数日後、孤児弟から兄妹を貰い請け私の配下とする。
とはいえ、それまでは孤児院で色々経理とか学んでいただけなんだ

が・・・・・・・・・・・・

灰髪少女、目隠し布の実験を兼ねて市場で働いてもらうけど大丈夫かね？

「はい、王室顧問様。私のために骨折っていただきありがとうございます。」

「まぁ、目隠し布が売れてくれれば投資した私の懐も潤うからね。気にすることではないよ。」

「で、王室顧問様。私達は何をすればよいので？」

「市場で酒と肴の売り子でもしてもらおうとおもってね。深く考えなくても良いさ、いつも市場にいられない近隣の農家とかから品物を買って、お前らが売りさばく。農家は生産に集中してたくさん作れるし、お前らは売り上げから自活に必要な費えを得る。後は、目隠し布の存在を広めるためにお前らが看板代わりになるんだよ。」

「ご主人様、最後のが一番の目的では・・・・・・・・・」

「そうだがな、一応後見として市場の顔役の小売婦人と世話役の方々にお願いしているから何かあったら相談すればよい。」

「「はい！王室顧問様！」」

良い返事だ。時機を見て、目隠し布の店（露店）を兄妹に願うのも悪くない。

こっちはあくまで民草のために安価で提供する店にして、金持ちや貴族連中にはもっと高級感を出したものを用意すればよいか。目隠し布の陣自体は療養神殿か専門の治療院にお願いするとして・・・・・・

そして、兄妹が露店で働くのであった。

初めは売れ行き自体はそれほどでもないのだが、段々に客もついて

くる。
小さい兄妹が一生懸命に働いている姿は微笑ましいのだろう・・・・・・・・・

「小僧っ子、こっちに酒をもってこい！」
「はいっ！旦那！今日はこの酒がうまいですよ。」
「ぷはぁー！」

「目隠しちゃん、おじちゃんに酌して！」
「はい、ありがとうございます。」
「かわいい子の酌は酒がうまくなる。」

まぁ、ついでに婆様にも一緒についてもらって睨みをきかせてもらおう。
「なんじゃ、この婆にも一肌脱げと？」
「脱がなくても良いですから、婆の裸は見たくないですし・・・・・・・・・ごふっ！」

いい一撃だ！
「これはご主人様が悪いと思いますけど・・・・・・・・・婆様、この兄妹が店を離れたときの店番をお願いしたいのですよ。」
「孤児姉ちゃんやわかったよ。で、何でこの老骨にまで目隠し布を付けさせるのかね？」
「店の売りだとご主人様が申しておりましたわ。」
「ふむ、この食えない貴族様はワシらを出汁に目隠し布の認知を図ろうというのだな。」
「そんなところでしょうか、暫くしたらご主人様も目隠し布を付けて酒盛すると思いますのでそのときは目隠し布のことを宣伝お願いいたします。」
「わかった。」

「で、王室顧問様。目隠し布自体は売らないので？」
「売っても良いよ。ただ、陣自体は悪用される恐れがあるから指定の場所で買ってくれと説明してほしいが・・・・・・・・・」
「なるほど・・・・・・・・・・・暗がりでも見えますからね。」
「そういう事だ、詳しく説明する必要はない。陣は個人用に調整がいるのでと説明すれば納得してくれるだろ。」
「犯罪に使えることを教えて実行されないための手ですね。」
「灰髪少女、よくわかっているじゃないか。」
灰髪少女の頭をなでるとうれしそうに微笑む。

そばで孤児姉がやさしげに微笑んでいる。

そうして、目隠し布自体の販売も始めるのである。
その頃には酒盛市場で働く目隠し少女として市場の看板娘みたいなものになっている。
灰髪少女も働き者でかわいいから同業者からも客からも可愛がられる。
引き抜きにかかる店とか、代わりに売ってくれといってくる農家の衆もいるのは笑い話だ。
中には真似をして村一番の娘っ子たちを売り子にして張り合うのもいたり・・・・・・
市場は華やかになる。

あまりに灰髪少女が呼び止められて注文が裁ききれないから、強力兄弟を棒手振りさせて灰髪少女の後ろから付いてこさせる。灰髪少女が注文を受けて棒手振りの強力兄弟が持つ商品を渡すのである。
力だけは有り余っている兄弟だから多少色々持ってもびくともしない。

「目隠しちゃん。こっちに白を一単位。」
「はい、ただいま！一緒につまみはいかがですか？酒だけだと体に悪いですよ。」
「なら、こっちの肴を貰おうか・・・・・・・・・・・」
「ありがとうございます。」

「こっちは火酒の果実割で・・・・・・・」
「はいはーい！強力兄さん果実お願いします。」
「はいよ！」

強力兄弟が素手で絞る果実は中々見栄えがするらしく、市場の客もやんややんやと面白がって注文する。これはさすがに真似できないらしい・・・・・・・・・・・・
棒手振りで売り歩くのは真似されているが、これはこれで面白いからよしとしよう。色々頼めるし。

って、言うか強力弟その棒手振り用の棒は・・・・・・・・・・・・・

「ああ、旦那、これですかい？勿論鉄の六尺棒ですが・・・・・・・・・・・」
「それは武器だろう！」
「勿論、灰髪少女に不埒なことをする輩をこれでぶちのめす為に持ち歩いているんでさぁ・・・・・・・・・」
「えっと、それを使うのは色々飛び散るから素手にしなさい。」
「理由はそっちですかい！」

でも、強力兄弟の稼ぎ出るかな？
「大丈夫じゃよ、結構売り上げもあるし市場の用心棒的な意味合いで給金も出ているしな。」

「あれ？婆様いつの間に・・・・・・・・・・」
「そこの小売婦人が、市場の顔役達と話し合って決めたそうじゃ・・・・・・・・・」
「まぁ、あの兄弟の風貌を前にして悪いことはできないよな。」

酒に肴～
なんて、声を上げる娘さん達と酔っ払い達が楽しげにしているのは良いことだ。
私等は余り儲け過ぎないように気をつけて、彼らの取り分を残しておかないと・・・・・・・・・・

「ほらっ、竜のおじ様もう一杯いかがですか？」
「うむ、貰おうか・・・・・・・・・・」
「流石お強いのですね・・・・・・・・・・」
「ぐわはははははっ！我ら竜の一族は酒が好きで樽で開けてこそ一人前と・・・・・・・・・・」
「ねーちゃん、こっちにも頂戴な。」
「鬼のおにーさんも流石ですわ・・・・・・・・・・」
「先の国対抗の酒合戦で先陣を任されたのは俺だからな！」
「それを言うならば抜け駆けして一気飲みしただけだろ！呑みたかったのに・・・・・・・・・」
「ひげのおじ様も一杯いかが？」
「うむ、頂こう。王国の酒は色々あって良いのぅ・・・・・・・・・・・・・・のぅ、霜降の？」
「ですなぁ・・・・・魔国の。」
「ぷはー！染みるねぇ・・・・・」「もぐもぐ、野外で食べる焼き立ての肉というのも野趣あってよろしい。」
「わが国でも取り入れましょう姫大使様。」「ごきゅごきゅ・・・・

・・灰髪の妾にも一献頼む。」
「はい、姫様。」
「ふむ、美少年の酌と言うのも悪くない。国許では貴族の親父ばかりで潤いがない。」
「姫大使様、言いたいことはわかりますが付き合いですから・・・・・・・・・・・」

えっと、そこの皆様方は各国の大使の皆様方ではないですが・・・・・・・・・

「おおっ!王室顧問じゃないか!こっちに来い!一緒にやろうではないか・・・・・・・・・・」
「この灰髪のはお主の配下か?妾に呉れぬか?」
「王室顧問殿、この酒盛市場の運営について教えてくれぬかな?我が国でも取り入れたい。」

混沌としているなぁ・・・・・

「旦那、売り上げが上がるのは良いんですが・・・・・・・・・・・・・・・・
市民達があきれてますぜ。」
大人数でしかもでかいのやら大酒喰らう連中やら・・・・・・・・・・・・・・
いかにも貴族様ですといった雰囲気に遠巻きにしている他の酔客たち。

流石に売り子娘達は自ら棒手振りして売り込んだり、呼び止められて酌をしたり・・・・・・・・・・
中には飯屋に行ってできたて熱々の料理を供する者も・・・・・・・・・・・
強力兄弟の果実絞りに誘われたのか鬼族や岩妖精が自らも試して目

に果汁を浴びて転げまわっている。

「目がぁぁぁ・・・・・・・・・・・目がぁっぁぁあぁぁっ！」

馬鹿だこいつら・・・・・・・・・・

つける薬は

びゅん！（匙を投げる音）

「はいはい、皆様方余り棒手振り娘さん達を独り占めしないでくださいね。そんで娘さん達も他の顧客様をかまってあげるようにね。ここに入り浸りだとあそこのおじちゃんたちがいじけているから・・・・・・・・・・」

「はぁい！賢者様。あそこのかまってチャンをいじってきまーす☆」

「その前に酒を樽で置いといてくれ！」

「雷竜公、呑みすぎですよ・・・・・・・・」

「何、樽でないと呑んだ気がせぬわ！」

「そこの目隠し娘。ワシにも一献呉れぬか？」

「はい、おひげの貴族様。」

「おひげのか・・・・・・・・・・そのような呼ばれ方は初めてだな　ぶわはははははっ！」

「目隠ししていて良く見えるのぅ」

「いえ、これは王室顧問様が下さった魔具で私のように盲いた者に視力を与えるものだそうで・・・・・・・・・おかげで市場で働けるようになりました。」

「面白いものがあるものだな。」

「おいっ！王室顧問、これの話を聞かせてくれ・・・・・・」

ぐいぐいと大使達に方を捕まれて連れ込まれてしまう。
そうして、私も酒宴に参加させられるのであった。

酒盛市場と目隠し布（後書き）

何で酒盛の話になるのだろう？
そうか、酒が足りないのか・・・・・・・・・・・・
椅子を買う金を酒に回せば・・・・・・・・・・・・・（マテ

酒盛市場と馬鹿大使共（前書き）

椅子を買ってみたが、この金があればどれだけ酒が飲めたのだろうか？
そんな作者の叫びをよそに
あらすじ　大使達が酒盛していた。

酒盛市場と馬鹿大使共

酒盛は楽しいが孤児娘たちはお冠だった。
「賢者様孤児姉だけにずるい！」「あそびたーい！」
「しごといやぁ！」

そう言えば最近仕事しっぱなしだったな・・・・・・・・・・・・・・・
官僚たちはその辺気にかければよいものを・・・・・・・・・
「すっかり忘れていた。」「休みって何だっけ？」
「どこぞの馬鹿が貴人聖域法発動してむちゃくちゃしたから後始末で大変なんだよ。ねぇ、師匠・・・・・・・・・・・・」
「えっと、なんかすまん・・・・・・・・・・・・」
「詫びはいいんだ詫びは！働け！王室顧問！あの馬鹿がやらかしたことの書類仕事片付けやがれ！」
「ついでに補佐見習が陛下の胸倉掴んで上奏した案件もだ！」
「貴殿の分もあるぞ！外国に遊びいくと言い放って大使達が泣いて止めに入っているから安心させやがれ！」

えっと、補佐見習何やらかしているの？
連行された腹いせに陛下相手にぶちきれたの？？

まぁ、いいや。
王族にはいい薬だろう！
そんな私の嘲笑いをよそに宰相閣下が突っ込みを入れる。

「あのなぁ、王室顧問。補佐見習いに加減というものを教えろ！保護した者たちを大事にするのは構わないが証拠隠滅と潰しに掛かった貴族の眷属を返り討ちにして晒し者にした挙句、その貴族を追い詰めるためだけに国内資産封鎖法案とか貴族位剥奪法案を制定して

可決させるとか無茶苦茶にも程がある。更には止めに入った陛下の胸倉掴んで殴りかかるし・・・・・・・・・・・・・・流石のわしでもかばいきれん。」

「で、結局どうなったんで？」

「貴族当主本人は引退蟄居。領地は王家直轄領にして代官を派遣している。家自体は無地貴族としてそ存続しているがそのうちに没落するぞ・・・・・・・・・親族とか多いから補佐見習が仕返しされないよう気にかねなくてはならんし・・・・・・・・・・・困ったもんだ。」

「それは、こっちでも注意しておきますよ。幸いにも閣下が派遣した事で方々に人脈ができているようですし何とかなるんじゃないですか？」

「補佐見習いは青い部分があるから、そこに触れなければ実に有能なんだがなぁ・・・・・・」

「とりあえず、それを徹底させておきましょう。孤児弟もそういう部分がありますからねぇ・・・・・・」

「そこはそれとなく周知させよう。」

「お願いします・・・・・・・・・・・・」

宰相閣下に突っ込みを入れられたし、少し自重しますかね・・・・・・

そうは言っても騒動なんて飛び込んでくるものだしねぇ・・・・・・

「孤児娘たち、今日は遊んでおいで・・・・・・・・・・・市場に行けば灰髪兄妹がいるから様子でも見ておいで。」

「「「はーい☆」」」

孤児娘達は私から硬貨の入った袋を貰って市場に駆け出していった。

服とか買うのだろう・・・・・・・・・・・・

「孤児姉も行くか？」

「いえ、私も楽しんできてましたから今日はご主人様と仕事してます。」
「そうか・・・・・・・・・・・・」
私達主従は黙々と書類仕事に勤しむ・・・・・・・・・・・・・・
孤児娘達と仕事をしていると賑やかなのだが孤児姉とだけになると沈黙が場を支配する。
筆を走らせる音、紙をめくる音・・・・・・・・・・・・・・
動作の一つ一つが音として現れる。傍から見ると単調なものだろう。
それも悪くない。

って、官僚共はどこに行きやがった!
「ご主人様官僚達も逃げて酒盛市場に向かったようです。」
「そうか・・・・・・・・・・・・って、あそこには大使共が連日酒盛しているはずだ!鉢合わせたら・・・・・・・・・・・・また、酒合戦の再来だ!近衛兵!誰かいるか?」

「はっ!」
「君は一隊を率いて酒盛市場で酒盛をしているであろう馬鹿官僚共を捕獲してくるのだ!!仕事に別条がなければ多少手荒に扱っても構わん!」
「かしこまりました!」

「孤児姉!我等も行くぞ!」
「ご主人様、酒合戦位よろしいのでは?」
「馬鹿を言っちゃいけない。前回は遺恨はなかったが今回はそれがないとは限らん。下手に遺恨なんか残してみろ百年はそれに追われるぞ・・・・・・・・・・・・」
「それは放置しておけば・・・・・・・・・・・・」

「たぶん私に出番が来るに違いない。特定の役職についていないから便利に遣おうとすること間違いない！仕事が増えるのはいやだぁぁぁぁ！」
「ご主人様諦めた方が楽なのでは？」

諦めたらそこで隠居終了です。

せんせい、お酒が飲みたいです・・・・・・・・・・・

誰がせんせいなのかというのは置いといて・・・・・・・・・・・
私らが出ようとすると
「待て、王室顧問！職場放棄とは許さんぞ！」
「宰相閣下、官僚共が脱走して向かった先に大使達がいるらしく鉢合わせたら過日の酒合戦の再来になる恐れが！」
「それをネタに交流を図ればよいではないか・・・・・・・・・・・・・」
「私以外が担当するのであれば良いですよ。」
「もちろん君以外に担当できるものはおらんだろう！官僚達では利益誘導が激しすぎるし、何より自ら飲みすぎる。そうなると大使達の被害がどれだけ出るか・・・・・・・・・・・・・」
「私は嫌ですよ。拒否権使いますよ！」
「官僚の次は王室顧問君を標的に酒合戦を始めるだろう！それでも良いのか？」
「ほどほどに飲んで負けますから良いですよ。」
「そんな負け方は許さん！君が良くても向こうが認めないだろう。延々と酒合戦が続くぞ。」
「それは構いませんが・・・・・・・・・・・」
「それをしたら、ただでさえ国庫を圧迫している酒代が・・・・・・

・・・・」

えっと、国庫を圧迫している酒代って・・・・・・・・・・・

「官僚達の酒消費量が倍できかないし・・・・・・・・・酒合戦に触発されたのか各私兵団同士とか直属部隊の間でも決闘代わりに酒合戦が・・・・・・・・・・・・・壊した備品とか二日酔いの薬とか・・・・・・・・・清掃費用が・・・・・・・・・・」

「一つ言って良いですか？」

「なんだ？」

「この国には馬鹿しかいないのですかぁぁぁぁぁぁぁ！！」

私の叫びは王城に響いたそうな。

「おまえもなー！」

という答えが木霊していたのは気のせいだと信じたい。無論気のせいだとも。

ちなみに酒盛市場でも大使と官僚達が共倒れになっていましたとさ・・・・・・・・

それを運んでいる近衛兵達がこの馬鹿共を何とかしてくださいと上奏していたのは別の話。

大使達の本国に市場で酔いつぶれるのを何とかしてくださいと苦情申し立てするのもまた別の話。

重たいのだよねぇ・・・・・・酔いつぶれた竜とか・・・・・・・・・・・・・鬼とか・・・・・・鎧兜つけたままの聖騎士とか・・・・・・・・・・・・・極北戦士とか・・・・・・・・

持ち上げようとして腰を痛めた近衛兵が労災申請している。

はいはい、認可！

治療費は雷竜公に請求しておくからね・・・・・・・・・・・・・・
重たいんだから酔いつぶれるな！
今度潰れたら毟るぞ！（鱗とか髭とか・・・・・・・・・・・・・）

ところで市場にいた孤児娘達何していたの？
「お酌して回ってました。竜のおじ様を潰してみました。」
「撃墜表をつけてました。一番撃墜していたのは魔国の鬼族随行員でした。」
「どこかの大使が奥様に隠れて呑みに来ていたのを連絡しておきました。」

最後のは可愛そうだろう・・・・・・・・・
霜降の・・・・・・・・・最後の楽園（飲み屋）も失ったか・・・・・・・・・
酒飲みにそれはひどすぎる・・・・・・・・・・・・・

「だって、奥様から頼まれてましてて・・・・・・・・・・これ以上呑んだら命にかかわるからと・・・・・・・・・・」
「いいよ、いいよ。後で霜降の大使を慰めておくから・・・・・・・・・・・」
「賢者様、酒はだめですからね。」
釘を刺されてしまった。霜降の・・・・・・・・・・・・すまん。
力になれないようだ・・・・・・・・・・

酒盛市場と馬鹿大使共（後書き）

霜降の大使は禁酒令を出されました。本国の国主からも釘を刺されていますので隠れて呑むしか・・・・・・・・・・・・・・・

それも、ままならないでしょうが・・・・・・・・・・・・・・・・

今宵はこれから呑むのでここまで。

椅子代で浮いた金で飲むぞ！

酒盛市場と末王女（前書き）

お気に入り人数の増減が面白いと思ってしまう作者です。

あらすじ　酒盛をして皆戸板送り・・・・・・・・・・・
お酒は楽しく適量を戸板送りはお持ち帰りされる可能性が高いから
気をつけようね。

酒盛市場と末王女

久方ぶりに孤児弟が私について市場に行く。

「いやぁ、だんな・・・・・・・・　商会公様についていくのは大変だよ。売り上げが上がってホクホクだと思ったら、次の町に進める計画でしょう・・・・・・・・・・・・・・魔具職人達の手配とか療養神殿との折衝・・・・・・・・・・・・・・まさか神殿ががめついと知っていたけどあそこまでとは・・・・・・・・・・・・・・思わず土地土地の商会公の支店に丸投げしようかと思ったよ。」

「それが一番楽だと思うけど、ぼられるぞ。」

「でも、あの手間を考えると理解できる気がする・・・・・・・・・・・・・・神殿の取り分を押さえないと行き渡らないし・・・・・・・・・・・・・・よく考えたら神殿通さなくても良いんだよね。」

「そりゃ、そうだ。魔具職人の組合で融通したって良いからな。話したからには分け前寄越せとうるさいだろうけどその分人員管理しっかりとして貰って、いざと言うときにぼろくそに貶して置けば宜しかろう。神殿の方々の見識を期待して託したのにと・・・・・・・・これならば云々と言えば大抵黙るぞ。」

「・・・・・・・・・・・・・・成程、神殿側が認めた客に対する保障と考えるわけだね。それを盛り込んでおこう。」

「判ってきたじゃないか・・・・・・・・・・・・・・」

「孤児弟、暫く見ない間に賢者様がうつってきてる。」「社会の波にもまれると人格が歪むと言うけど・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・あの頃の純真だった孤児弟はどこ?」

「孤児娘達!人聞き悪い事言わないでよ!おいらが旦那ほど悪辣な

事出来るわけないじゃないか！」
「ほほう・・・・・・・・・・・私のどこが悪辣だって？」
「そりゃ、国政ネタに国相手に喧嘩売るとか・・・・・・・・・・・
喧嘩売ってきた貴族に地位を与えて潰すとか・・・・・・・・・・・
少なくとも商談した相手に【あの】王室顧問卿の弟子ですか・・・・
・・・・・・・なんて言われるのは泣けてきたよ。」
「商談相手の名前教えてもらえるかな？後でじっくりと話し合おう
と思う。あと、神殿側の担当者の名前教えてもらえるかな？一時期
流行った【王室顧問避け護符】の件でもじっくりと話を聞きたいか
らね。」

「神殿って何でも商売にするんだね。」
「孤児娘。それは彼等も金儲けくらいしか楽しみがないからだよ。
道楽に走っている神職が多いけど、彼等も食っていかないといけな
いからね。」
「ふーん、今度神殿の帳簿嵐に行ってみようか？」
「面白そうだな、色々覗いてみると世界が見えてくるぞ・・・・・・
・・・・（にやり」
「そうだね、まともに働いてくれている性愛神殿が貧乏なのに、森
林神神殿とか厨房神神殿とか・・・・・・・・・・・見てみるのも面
白そうね・・・・・・・・・・・・・王室からの寄付金もあるわけだし・
・・・・・・・・・査察がたのしみだね。」
「腕が鳴るわぁ！」「前、異世界帰りの王妹殿下から貰った計算道
具が火を噴くわ。」

お手柔らかにお願いします。（ｂｙ厨房神）
あのぅ、うち寄付金だけだとかつかつなので・・・・・・・・・・・
（ｂｙ海洋神）

うちは寄付金に頼らなくても大丈夫ですわ。（ｂｙ文芸神）
神殿がない・・・・・・・・・よっけ査察も受ける必要はない。（ｂｙ暗黒神）
求む信者！（ｂｙ発酵神）
酒さえあれば問題なしー。寄付金も何もかも酒に化けてますよー（ｂｙ酒精神）
寧ろ査察と言う名の会計業務手伝いよろしく☆（ｂｙ療養神）

なんか孤児娘達ノリノリだな・・・・・・・・・
そんなきらきらした目で見られると頑張って査察を取らないといけないじゃないか！
可愛い娘たちのためだ！おとーさんがんばるぞ！

「王室顧問は少々自重したほうが良いと思う。」
「おや？末王女様いたのですか？」
「いちゃ悪いのか？折角ここに孤児弟がいると聞いて抜け出してきたのに・・・・・・・・・・」
「末王女様？後ろにいる侍従官が青筋立ててますが・・・・・・・・・・」
ひょっこりと顔を見せる末王女に慌てて追いかけてきたらしい侍従官。

「末王女様！倫理教育の時間を抜け出して何をしているのですか！」
「わたしはひんこうほうせいだから問題ない。寧ろ王室顧問達にその倫理教育を行うべきだと思うの。」
「彼等は手遅れです。末王女様がああならない為にもしっかりと学んでもらわないと・・・・・・・」

この主従は失礼な輩だな。一度じっくりと話し合う必要があるのか

もしれない。

とは言え、倫理教育の講師は私の三従伯父(みいとこおじ)なんだが・・・・・・・・・あの爺様にはずいぶん可愛がってもらったなぁ・・・・・色町の良い店紹介してもらったり、酒の飲み方も教わったりしたし・・・・・・・・私の人格の一部分はあの御仁の手によるものだな。あの爺様の教えならば末王女も私のように立派な人格者になれるはずだ。うんうん・・・・・・・・・・

そんなこんなで市場の酒場部分につく。私は席を借り受け、場所を取って注文をとりに来る棒手振り娘達を相手に酒とつまみを注文する。孤児弟も私に倣って飲み物と軽食を頼んでいる。まだ、酒は飲まないのか？

「だんな、おいらにはまだ酒は早いよ。苦いだけで美味しいと思えないし・・・・・・」

「まだまだお子様だな・・・・・・・・・・・・・・・・くくくっ」

「皆して一人前扱いするけどおいらまだ１３の小僧だよ。」

「そうだったな、忘れていたよ。」

「酷いなぁ・・・・・・・・・だんな。」

酒の入った壷と干し肉、煮凝・・・・・・・・・　孤児弟のところには果汁の入った壷に固焼の麺麭の上に諸々の具財を乗っけた物が用意される。

立食形式の宴席には見られるが、酒場で出すとは・・・・・・・肉に酢漬けの甘藍だの小魚の塩漬けだの乳酪に煮詰めた果物を乗せた物、色々種類があって面白い。

娘さんや工夫したね。

「はいっ！貴族様の宴席を手伝ったときの料理を真似してみました。」
「うむ、美味。貴族の宴席でもこれだけのものは中々見ないぞ！」
「ありがとう御座います賢者様！」
「だんな、それおいらの・・・・・・・・」
「まだいっぱいあるじゃないか！どうせ私のつまみも取る気満々だろ。けちけちするな！」
「そうだぞ孤児弟、男というものは鷹揚でないと・・・・・・もぐもぐ」
「末王女様まで・・・・・・・・」
「良いではないか！孤児弟は美味を見つけるのが上手いな。・・・・・・・・もぐもぐ」

よくよく見てみると、末王女に食い荒らされている。
哀れ孤児弟・・・・・・・・・・　諦めて、もう一人前注文している。
娘さんは苦笑しつつ、大盛にしてくれるのだった・・・・・・・・・・

孤児姉と孤児娘達は例によって端切れ屋とか小物屋を巡っている。
色々買い込んで其々の部屋は個性豊かになっている。末王女も着いて行けば良かったのに・・・・・・・・・・
「市場巡りも捨てがたいが、孤児弟と共にいる時間が持ちたいからいるのだ。もう少ししたら連れまわすから問題ない。」

うわぁ、連れまわすって・・・・・・・・・奢らせる気満々だよ！
そういえば末王女も個人的なお小遣い持っていたはずだが・・・・・・・・
「そんなもの、とうにお母様に没収された・・・・・・・・」

うなだれる末王女、お小遣いとして貰える手はずだったのでは？
「だって、王宮内では買い物する事がないから必要ないと・・・・・・・」
確かに、王妃（年齢不詳）の言うとおりだな。孤児弟も金貨貰っているから諦めろ・・・・・・・・・・・・
諦めたのか麺麭をモグモグやりながら孤児弟は市場を見回す。
「暫く見ない間に様変わりしましたよねぇ・・・・・なんていうか飲食空間を作ってみたら其処が露天の飲食店みたいになっているし・・・・・・・・・・・・」
「ふむ、補佐見習が官僚達が酒盛するのを見て場所を作っておいたほうが問題が其処に押し込まれて良いと設置したらしいぞ。」
「町方暮らしの知恵かな。補佐見習らしい解決策だな。　むぐむぐぎょきゅ・・・・・・・」
末王女は人が注文したのを適当につまんでいる。遠慮というものを知らないのか？
「子供が遠慮していたら何も当たらないではないか・・・・・・・・・・もぐもぐ、ぎょきゅ！　ああ、其処の娘。その卵焼き一つ貰おうか。」
さらには棒手振り娘の一人を呼びとめ、勝手に注文する始末。
支払いは・・・・・・・・・・・・孤児弟である。
「済まない孤児弟、後で王妃様に伝えておく。」
流石に済まなそうにする侍従官。奢った分が戻ってくることは多分ないだろう・・・・・・・・・・前もって金貨で渡されているし・・・・・・
「まぁ、金貨一枚分飲み食いするとなれば相当やらないとダメなんだろうけどね。」

末王女が注文した卵焼きを奪い取りながら孤児弟。こうやって見ると仲の良い兄妹が食べ物を奪い合っている図だな。

私は酒を煽っていると・・・・・・・・・・つまみは・・・・・・・・全部食われてる・・・・・・・・・・・・・・この欠食児童共が・・・・・・・・・・・・・・

私も諦めて強力兄弟を見つけて呼びつけると酒とつまみを追加するのであった。
それも戻ってきた孤児娘達に食い荒らされるのは言うまでもないことである。

酒盛市場と末王女（後書き）

城に戻った末王女。倫理教育の講師に市場での事を言うと
「爺も行きたかったですぞ。辺境伯家の末坊主・・・・・・・じゃなくて王室顧問と久方ぶりに語らいたかったが・・・・・・・・・・・・・あの三従叔甥孫は爺が育てたようなもんじゃしな・・・・・・・・・・・・・かっかっかっ！」

「えっ！講師殿、王室顧問卿とお知り合いで？」
「あれはワシの甥っ子で教え子みたいなものだ。小さい頃から可愛がっていたが、最近トンとあってないなぁ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

その後、この講師が末王女の教育を受け持っているのかどうかは不明である。
問題人物を育てた者が王女の教育になんてという無駄な議論が・・・・・・・・・・・・・・・続いたとか続かないとか・・・・・・・・・・・・

酒盛市場と大商人（前書き）

あらすじ　末王女と市場に行くと喰われて泣く羽目になるぞ。彼女にとってデートとは奢って貰うと同義であるから。

１００００ユニーク突破。皆々様に顔射・・・・・・・・・・もとい、感謝。
でも、覗いたときに９９９８ユニーク・・・・数分後覗いたら１００２ユニーク・・・・・・・・・・切り番を見たかった。

酒盛市場と大商人

「孤児弟よ、実際目隠し布を使用している少女とあって話を聞いてみたいのだが。」

唐突に商会公の頼みが来る。

この御仁は儲けとなれば猪突猛進であるのはいつもの事なのだが、それでもちゃんと顧客の満足を大事にしているのはらしくないと思えるのだが・・・・・・・・・・・・・・・

「王室顧問よ、商売はお互いの信頼の上に成り立っている。見ず知らずの者が持ち込んだものを即信じて買うなんてしたくないだろう？我等全うな商人は地道に良い物を適切な価格で提供する事で信を得ているのだ。剣を突きつけてオレサマに従えと言う政のやり方の通じない世界だ。」

「おいらは良い物を安く売れば良いもんだとばかり思っていたよ。」

「孤児弟、それは間違いではないが安く売るということは自分達だけでなくてそれを作ってくれる農家の衆や職方の衆、その他諸々の関わってくれる者達の価値を低く見せる行為だ！ちゃんとした物には関わる衆の生活を成り立たせる価格を与えるのが商人としての正道だ。勿論安く売るための努力は必要だが、必要な部分を削ってまで安く売ってはいけない。関わる衆の生活を削ると同等だし、安かろう悪かろうでは客がそんなもんだと思い込んで良いものが売れなくなってしまう。」

「わかるようなわからないような・・・・・・・・・・・・」

「なに、削っちゃいけないのが品質と作り手たちの生活に関わる部分。そして客を調教してこれは価値があるものだと覚えてもらう事だな。価値がわからないのにこれは高いだの言う客がいては宜しくないからな・・・・・・・・・・・・」

「実際のところ、我が商会の名前で売るからにはしっかりとした物

を売りたいからな。」

商会公は自慢の太鼓腹を叩いて見得を切る。

ぽん！

意外と良い音だった。

「はっはっはっ！この腹には金貨を何枚も使っているからな！」

「それって、どんだけ食べ歩いたんですか？」

「はて？王室顧問は自分が食べた麺麭の数を覚えているのかな？それが答えだ！」

なんかわけがわからないやり取りがあった気がするが、取り扱う商品が実際に使われているところを見たいというのは理解できる。灰髪少女は可愛らしいから引き抜いて看板娘に使用なんて考えていないだろうな？

「まさか、そこまではしないさ。もっと良い素材がいるわけだしな。」

「商会公、また意味深な・・・・・・・・・・」

「何処かの綺麗所でも揃えるんですかい？商会公様。」

「綺麗所か・・・・・目の付け所は悪くないが、まだ甘いな孤児弟。」

数日後に共に行こうという話をしてその場は別れた。

数日後、我等主従と孤児弟（孤児弟は男爵位を得たので従者からは

ずしている。私と同輩として扱うことにしている。）孤児娘達・・・・・・・・・・・・・そして、商会公は建国公達を引き連れて市場にいる。

「えっと、公爵様方。普通に市場に来て宜しいので？」

思わず突っ込みいれた孤児弟を誰も責める事は出来ないだろう。普通お付の者とか護衛がつくだろう？

「うむ、王都は誰でも安全にすごせるところであるのだから問題ない。」

「たまには羽を伸ばしたいものだよ。」

「そこの殿方がいれば大抵の不埒者は排除できますしね。」

よくよく考えてみれば、開放公、騎馬公、人外公の三者がいれば一個小隊位は軽く蹴散らせるけど・・・・・・・・・

「ふふふっ、ワシを忘れてもらっては困るな。」

農園公？

「ワシとて公爵位を得る前は西部地方軍に所属していたんだからな。」

「おおっ！」「知られざる過去ですね。」

「でも、兵站経理部隊で辣腕を振るっていたという話しか聞こえませんでしたが・・・・・・・・・」

「庭園公、それは黙ってほしかったが・・・・・・」

農園公が婿養子だったのは知っていたが、軍にいたとは初耳だったな。

「わしとて別に隠すつもりはないが広めるつもりはないしな・・・・・・・・・・・・・」

まぁ、市場自体は治安も良いし不埒な事をするものは出ないだろう。
下心があるものは出るかもしれないが・・・・・・・・
「下心くらい対処できなくて公爵位は戴かんよ。」
ごもっとも・・・・・・・・・・・・・・・

なんだかんだと市場につく
まとまって席を取り、棒手振り娘達から酒と肴を注文する。
其々が適当に好みの物を頼み、杯を片手に市場の喧騒を楽しむ。

しかし、聖騎士と竜族の長が乾杯をしていたり、人外戦士と裸鎖と騎馬戦士(モヒカン)が孤児院の子供達を放牧していたり・・・・・・・・・・・・・・・

「あいつ、仕事サボりやがって・・・・・・・・・・・・・」
青筋を立てていたのは騎馬公か・・・・・・・・・・・・・
「我を誘わず楽しんでいるとは。・・・・・・・・・・・・」
角から電気を発しているのは人外公か・・・・・・・
「ここのところ姿を見せていないと思ったらそこで何をしているのやら・・・・・・・・・・・」
冷静に査察帳簿を取り出しているのは開放公。

そういえば彼らは公爵領でも高級士官に分類される者たちであったな・・・・・・・・・・・・・
後で白い海を存分で泳ぐ羽目になるのは笑い話にしておこう。
仕事はちゃんとしないとな。

「とりあえず、おいらは灰髪兄妹を呼んでくるから・・・・・・・・・・」
孤児弟が駆け出して暫し、灰髪兄妹が強力兄弟を引き連れて登場す

る。
思わぬ高位貴族の登場に驚く灰髪兄妹。
平民も平民・・・・・・・・しかも一介の孤児の兄妹の下に伝説の六大公がいるのだから・・・・・・・・・・
驚いて萎縮するのは無理もないことであろう。

でもな、お前等が接客している竜は魔国大使にして雷竜族の長だし、聖騎士とか各国の大臣級大使が沢山居たのだが・・・・・・・・・知らないって凄いよね。

「ご主人様極北戦士団は？」
「ああ、あれも本国の族長の類縁とか王族扱いするのもごろごろいるぞ。因みに股間潰されたのも連合の議長の末息子だ・・・・・・・・・・・・・・信じたくないが・・・・・・・・・・・・だからこそ治療費を出せたとか普通だったら放置だぞ。」

そして、灰髪兄妹を囲んでの市場美食めぐりが始まるのだった。

酒盛市場と大商人（後書き）

すいません、睡魔に教われました・・・・・・・・・・・・・・・今宵はこれまで。

酒盛市場と目隠公爵（前書き）

あらすじ　前話の最後美食巡りだと申し上げたことには目的が逸れている事に突込みがありませんでした。

どうして路上で食べる軽食は美味しいのだろうなぁ・・・・・・
酒も進む進む・・・・・・・・大して上等なものをおいていないし、まがい物が多いのに・・・・・・・

酒盛市場と目隠公爵

灰髪少女による市場美食めぐり・・・・・・・・・・これはこれで魅力的だが、まずは目隠し布の話を進めましょうよ・・・・・・・・・・

「うむ、わかっているぞ王室顧問。早く済ませて孤児姉といちゃラブしたいということを・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・／／／／」

「いえ、そんなことではなくて・・・・・・・・・灰髪少女を足止めするということは彼女の商売を邪魔していることですから・・・・・・」

「案ずるな。そこの目隠し少女、お前の商品を全部追いておけ！」

「はいっ！ありがとうございます・・・・・・・・・・って、食べきれるのですか？」

「気にするな。食べ切れなさそうならば、そこに放牧している孤児（チビ）達（ども）がいるだろう。彼らの助力を頼む。」

「ついでだからそこのデカイのあそこの三人を呼んでくれないか？」

強力兄弟を使い走りにしてチビどもを放牧している公爵私兵（裸鎖・モヒカン・人外）組の三人を呼びつける。彼らのその後を見たものは・・・・・・・・・・書類の山を崩す所しか思い浮かばない・・・・・・・・・・別によいけど・・・・・・・・・・

「もぐもぐ・・・・・・・・これは旨いな。我が農園でも作ってみるか。棒手振りの娘さんや作り方を教えてくれんかね？」

「え、えっと・・・・・・・・固焼きの麺麭の上に適当にうちで作った乳酪とか塩蔵肉とか野菜とか乗せただけですけど・・・・・・・・・・」

「それだけではこれほどの味は出ないだろう・・・・・・・・」

「隠し味に柑橘の皮を摩り下ろしたのを・・・・・・・・・・農園公様の親類筋に当たる甘蕗男爵の宴席で出された物を真似ただけですが・・・・・・・・・」
「おやおや、わしの正体を見抜いたとは・・・・・・・・・・」
「農園公様は何度か甘蕗男爵様のところでお見かけしてますから・・・・・・・・・」
「ふむ、そんなことがあったかねぇ？」
「下働きとして遠めでお見掛けしただけですし・・・・・・・・・」
「男爵のところには良い領民が育っているんだな。羨ましいものだ。」
「いえいえ、それほどでは・・・・・・・・・・」
「うちに来ないかね？待遇は相談にのるぞ。」

農園公が棒手振りの娘さんを口説いている。奥方に通達しないと・・・・・・・・
「それには及ばぬだろう・・・・・・・・・・もぐもぐ」
意味深なことを言う商会公と
「実際、これは美味ですわね。」
そっと、手を伸ばす鉄杖の従者の手を叩きながら庭園公はもぐもぐやっている。

灰髪の少女のつまみも
「王都では珍しいな、ヤギの乳酪だよ。」
「癖がありますな。ちと匂いが・・・・・・・・・・」
「少々素材のままだから単調な気がするが物が良いから助けられている気がするのか・・・・・・・・・」
「って、石蕗男爵のところの限定、塩蔵燻製肉ではないか！無駄に良品を・・・・・・・」

こちらもこちらでもぎゅもぎゅやっている。

その横では孤児院に入り浸って仕事していなかった私兵団の三人組は冷や汗を流しながら主達の反応をうかがっている・・・・・・・・・

灰髪少女も酌婦として皆の周りをめぐろうとしているのだが、庭園公に呼び止められて目隠し布の説明をさせられる。
女公爵と相対しておっかなびっくりな灰髪少女、孤児弟が助け舟を出す。
「灰髪少女、こちらは庭園公。女の子は取って食わないから心配しなくていい。君の目隠し布の恩恵を一番受けたい人だから使い勝手とかを説明してあげて・・・・・・・」
「孤児弟、なんか私が男の子は取って食うみたいな言い方じゃない！」
「実際、おいらと補佐見習が受けた仕打ちを見れば・・・・・・・・・・」

私が鉄杖の従者を見ると彼は肩を竦めただけだった。主人を諌めなくてどうする！
「諌めてどうにかなる主人でしたら従者さんもどうにかしてますよ。」
「この公爵様達はわが道を行く方々ですから。」
孤児姉弟は思うところがあるのか口々にいってくる。私は彼等のように酷い主人ではないからやりやすかろう・・・・・・・

「１３の子供に爵位を得る程度の教育とか経験をつませて仕事漬けにするのが優しい主人かよ。」
「ふむ、よくよく考えてみたら王室顧問ほど無茶はしていないな。」
「彼女達があまりに優秀だから忘れていたが子供だったんだよなぁ・・・」
「遊びたい盛りではあるけど、町方でもまだ見習とか下働きをして

いる年頃ですものねぇ・・・・・」
「十分遊ばしているじゃないか甘やかしているし！」
「女の子限定でな。」
「勿論、孤児弟にしろ補佐見習にしろ自分で決めて歩き始めたんだ。必要以上の手助けは彼等に対する侮辱だ。」
「厳しいのぅ。孤児弟、疲れた我が家の門をたたきなさい。受け入れてあげるから。」
「こらこら人外の孤児弟はわしの商売相手だ。横取りしないで貰いたい。」
「商会公、我が一族の子をもっていくな。」
「公爵様方持ってかないでもらえます？私が育てたんですよ。」
「でも歩む道を選ばして見守ることを選択したのは王室顧問だろう。彼がどの道を歩むにしても彼の選択として尊重せねばなるまい。」

うわぁ、開放公。　人の揚げ足とっているよ。もってかれたら母上に何を言われるか・・・・・・・・・・
「賢者様、大丈夫。私たちがいるから。」
「孤児弟だって、辺境伯屋敷に遊びに行くくらいはするでしょう。」
「そうそう、今のうちに人脈増やして地力増やしておかないと。」
つまみをもぐもぐやりながら・・・・・・・・・・孤児娘たちが私に抱きついてくる。

「王室顧問はモテモテじゃな。わしも若い子にもててみたい物だよ。」
農園公、それは死亡フラグ（異世界語）
先の棒手振り娘と言い、死に急いでどうするのだろう？

「あら、あなた・・・・・・・・・・楽しそうですわねぇ・・・・・・」
農園公夫人が現れた。

「え、えっと・・・・・・・・・どうしてここに？」
「いえねぇ、市場に美味しいものを集めた軽食広場ができたと聞きましてね、女衆と見物に来たんですよ。うちで取れた作物の売れ行きとかも見るのも必要でしょう・・・・・・・・・・」
「建前は市場調査で本音は遊びに来たと・・・・・・・・・」
「あら、王室顧問に公爵の皆様方いつも主人が世話になっております。」
「いえいえ、婦人。こっちもいつも美味な野菜で世話になってますよ。」
「久方ぶりであるな夫人。」「たまには遊びに来ないのか？」
挨拶を交わす夫人と一同。貴族様とため口をきく農家のおばちゃん。
いろいろすごい光景だな。

後ろには農家の女達が市場をめぐっていろいろ楽しんでいる。
一応農園公も仕事で来ているのだから、軽口くらい見逃してあげようよ・・・・・・・・・
「あなた、今日はどうしてここに？」
「うむ、商会公の誘いで市場にそこの灰髪少女の目隠し布を検分しにきたのだよ。」
「あらあら、かわいらしいお嬢さんね。はじめまして、私はそこのスケベ親父の妻をしている農園公夫人ですわ。」
「・・・・・・・・・・・・・す、スケベ親父・・・・・・・・・・・・（がくっ」
「は、はじめまして。灰髪少女と申します奥方様・・・・・・・・・・・・（びくびく」

「怯えなくても大丈夫ですわよ。元をたどれば農家のおばちゃんなんだから・・・・・・・・・・気楽に接して頂戴。」
「は、はい・・・・・・・・・・」
「それにしてもよく出来ているわねぇ・・・・」

「結構、可愛らしい刺繍が入っているんですね。」
「髪留めに欲しいかな・・・・・・・・・」

農園公のところの女衆は髪留めか何かと勘違いしているのだろう。
それでも良いか・・・・・・・・・
そして、女衆と目隠し布談義に混じる庭園公。灰髪少女から目隠し布を借りて自分でも使ってみる。

「これって初代が使ったものかしら?」
「そうですよ庭園公。一応、布の部分を替えて清潔に使えるようにしてますからその日の気分で布を変えても面白いですよ。」
「どんな布があるのかしら?」
食いついてくる庭園公。そりゃ伝統的衣装として目隠しが半ば義務づけられているからな。
あれでも女性だし、お洒落位したいだろう・・・・・・・・・
それについて説明をする孤児弟。目隠し布の着せ替え人形と化した灰髪少女。
女衆も自ら目隠し布をつけてみて、きゃっきゃっ言いながら選んでいる。

「女衆達、目隠し布を主人が買ってくれるってよ。あなた良いでしょ?」
「言い出してから了解を得るのはやめてくれ。」

懐から硬貨袋を取り出す農園公。えっと、ドサクサ紛れに自分の分を払わせようとするな庭園公!
「いいじゃない!農園公のおじ様☆」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はいはい、自分の分は自分で買おうな庭園公。」
「けちっ!」

「まぁまぁ、庭園公にはわしから贈るとしよう。これなんかどうだ？」
「あら嬉しいわね商会公、何か裏があるの？」
「裏というほどものではないさ、君がそれを身につけてくれたところを見たいだけだよ。」
「商会公は太っ腹ですわね。どこぞの農家の親父と違って・・・・・・・」

ぽんっ！

たぶん下心満載だぞ商会公は・・・・・・・
この場合、庭園公も使用したという実績を利用して大々的に宣伝するつもりだと思うが・・・・・・
問題ないか・・・・実害ないし。

「なるほど、庭園公を使うのか・・・・・・・・さすが商会公。おいらの斜め上を行く！」
「はははっ！孤児弟、君とは年季が違うのだよ。年季が！」

農園公の女衆が目隠し布を買って、庭園公まで使用しているとなれば・・・・・・・周りの市民もありがたいものなんだなとか思ってくれている。
大々的な宣伝とは恐れ入った・・・・・・

「でも、この柄とか良いわね・・・・・・」
次々に目隠し布を合わせてみる庭園公。鉄杖の従者は意見を求められるが似合ってますよくらいしか言えない。そりゃそうだろう・・・・・・
無骨な彼に求めるのは酷というものだ。

見かねた孤児姉とか孤児娘達がわいわいやりながらあーでもないこーでもないといいあっている。
珍しい庭園公が着せ替え人形状態だよ。いつもと逆だし・・・・・・・・

「珍しい光景だな。」「うむ。」
「いつもは庭園公のほうがいじるよな。」「王妃のほうが主にいじっているけど・・・・・・・・・・もぐもぐ」
「あの方も女性を飾らせるのが好きだからなぁ・・・・・・」
「そして、その後は殿方がはがすのだな・・・・・・・・・・」
「下品なことを言わないの！」
「おっと、失礼・・・・・・・・・・」

酒はともかくつまみは・・・・・・・・・・・・・・
食われるよな、うちの欠食児童どもと戦闘系の公爵達の手にかかれば・・・・・・・・

「欠食児童ってひどい！」「私たち育ち盛りなの！」
「いやぁ、市場のってなんか旨いんだよなぁ・・・・・」
「うむ、露天で食べる飯というものは気持ちが良い。」

農園公夫人と女衆の卓を見てみると・・・・・・・・・・
山盛りの食べ物と五月蝿い位にお喋りしながら消費する女衆の姿があった。
その傍らには空になった硬貨袋を手にうなだれる農園公と食べ物を山盛りに盛られて四苦八苦している灰髪兄妹の姿があった。

「ほらっ！もっとお食べ！そんな細っこい体じゃ、世の中渡っていけないわよ！」
「がりがりじゃないのさ！男の子は食べないと！」

あのぅ、肉体労働者と一緒にされても困るのですが・・・・・・・・・・

肥育鵞鳥肝（フォアグラ）作っているのと違うのだし。
なんかまぎれて孤児達もいるし・・・・・・・・・・

「あらっ！良いのよ。この子達は私が呼んだのだから。おちびちゃん達、もっと食べな！」
「ありがとう！おばちゃん。」「いただきまーす！」
こっちは気持ちが良いほどの食欲である。夕飯が入らなくなるぞ（苦笑

そう言えば、私兵三人組は？
「ああ、彼等ならば一足先に帰ったよ。」
「しばらく孤児院には来れないだろうがよろしく言っといてくれ。」
「孤児達は我等が送り届けるから安心するが良い。」

その後彼らの姿は久しく見ることが無かった・・・・・・・・・・

酒盛市場と目隠公爵（後書き）

ああ、書いていて酒がのみたくなった。そろそろ秋鮭の腹にも筋子が入っているから自家製のいくらでもいくらか作ってみるかな。

夜会と茶菓子（前書き）

あらすじ　公爵達は市場で酒盛り。その後彼らは市場巡りにはまるのであった。

夜会と茶菓子

官僚共の手伝いをしている最中、いきなり庭園公に呼び出される。
私は菓子を土産代わりにむかうのであった。
「王室顧問、我らの食料を・・・・・・・・・・」
「普通に食堂に行け！」
「ご主人様、私はどうしますか？」
「孤児姉、今日は大丈夫だから孤児娘達を手伝ってあげてくれ。」
「かしこまりました。」

王宮のはずれ、庭園公の領地である小さな庭園で彼女と鉄杖の従者と向き合う。

「王室顧問、あの灰髪の兄妹を貸してくださらない？」
庭園公の一言は唐突だった？

「貸し出すのは問題ないですが何かあったんですか？」
「いえね、庭園で夜会を行うことになってちょっとした趣向を凝らしたいのよ。金をかけないで意表をつかせるには給仕を皆目隠し状態にしてみたらどうかと思ってね。」
「ふむ、となると目隠し布の魔方陣も必要になりますな。」
「そうね、それは手はずは整えているのだけど人手がねぇ・・・・・給仕をしてくれる雇い人がいないから何処からか用意しなくてはいけないのだけど適当な人材が・・・・・・・・・・」

従者の用意してくれた茶を喫しながら庭園公はのたまう。

庭園公は貧乏だからなぁ・・・・・・

「貧乏言わないで！慎ましく暮らすには十分な蓄えはありますし、贅沢は趣味じゃありませんから！」

どうして庭園公関係者は貧乏なんだろうか？

確か王国からもそこそこの年金は支払われているはずなんだが・・・・・・・・・・・・・・・・・・

このお人よしのことだから右から左へと自称困っている人に貸しているのだろう。無利子無期限で・・・・・・・・・・・・・・・・・・

私も茶を喫しながら、考えてみる。美味い茶だ、従者は良い嫁になれるな。

ぽっ！

顔赤くするな！恥らうな！お前男だろう！しかも妻子もち！

「って、王室顧問卿。照れても恥らってもいないでしょうが！」

「うむ、そんなことしていたら従者の間合いには近づかないさ。むしろ逃げる。まぁ、この生活無能力者の面倒見ているうちについた技能ということは理解できるが・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ちょ！生活無能力者って・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「家事全て従者一家に任せていて、従者の息子に『あのおねーちゃんはどうして家のことをしないの？』と従者の奥方に質問していたのは聞いたことがあるぞ。」

「公の部屋は家内が入ったとき、あまりの惨状に戸を閉めたくなったとぼやいてましたなぁ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・そういう王室顧問はどうなのよ？」

「私？野戦食位ならば作れるし、従者はつい最近までいないからあ

る程度のことは自分でこなしますが何か？　ああ、従者。これは私が作った焼き菓子だが皆で食べてくれ。」

「王室顧問卿ありがたく頂戴しよう。子供達も卿の菓子を気に入っていてな・・・・・・・・・・・・・顔を真っ赤にして欲しがるのだよ。」

「それは酒精が強すぎたから酔ってしまったのでは？」

ぷわぁん

酒精の香りがあたりに漂う。

庭園の花の香りと交じり合いなんともいえない雰囲気になる。

じぃぃっと私等男衆のやり取りを見ていた庭園公は徐に焼き菓子の入った籠を奪い取り菓子を齧る。

「どうせ私は料理ひとつできない女ですわよ！っていうか孤児姉あたりが作ったんじゃないの？」

「残念ながら私が作ったものだよ。最近、孤児姉と孤児娘達が菓子作りにはまってね、つき合わされるのだよ。彼女達に任せると甘いものばかりになるから私は酒精と苦味をきかせて自分好みに作ったのだが中々面白くてな・・・・・・・・・仕事の合間に官僚共にも食わせているんだが奴等だと酒のつまみとか酒の代用品くらいしか思ってないから持ってきたのだが・・・・・・・・・・・・・・・」

「悔しい・・・・・・・・・・・・・でもおいしい・・・・・・・・・・・！」

霊薬とか薬品関係は作っているから、練習すればすぐできるようになるのだろうけどね庭園公の場合、教えるつもりはないが。

従者も一つ手に取り、ぱりっ！と齧る。

「少々、酒精を強調している節もあるが悪くない。息子には酒精の入っていないのを用意してくれないか？小さいうちから酒精にさらすのはよろしくない。」

「そう言いながら、息子と酒を酌み交わすのを楽しみにしているくせに。」

「それとこれとは別の話だ！」

お人よしで生活能力ゼロ、よく生きてこれたなぁ・・・・・この一族。

「一族というよりも当代の庭園公が駄目なだけであって・・・・・・・・・・先代様の料理はそれはそれは・・・・・・美味でした。今思い出しても・・・・・・・・・・・・・」

遠い目をする従者。

菓子を食べて落ち着いたのか、酒精で開き直ったのか庭園公は本題に戻す。

「貴方達のやり取りがひどすぎるのはあきらめたけど、灰髪の兄妹を一度寄越してくれます？私の分の目隠し布も用意したいですから。」

「わかった、灰髪少年には目隠し布を何種か用意しておくよう伝えておこう。で、いつ行われるのかな？」

「まぁ、半月後だから数日中に一度来て貰いたいですわ。衣装との兼ね合いもありますし。」

私は諾と答えて、庭園を後にするのだった。

二日後、私は灰髪の兄妹と強力兄妹を伴い庭園公の下に向かう。
「あら、灰髪兄妹も王宮にお披露目？」
「なんか目隠し布の商売だそうで・・・・・・・・・・・」
「気をつけたほうがいいよ、兄のほうは貴腐人受けしそうだから・・・・・・・」
「きふじんってなんです？普通に貴婦人の方でしたら問題ないと思いますが？」
「いや、知らないほうが良い。それがお前のためだ。」
「だんなの言うとおりだよ！今日はだんながいるから大丈夫だと思うが一人で行っちゃ駄目だよ！」
「黒髪孤児の若様・・・・・・・・・そんな怖いところで？」
「ああ、あそこは魔窟だ・・・・・・・・・・・・・・・」
孤児弟、よほど怖い目にあったんだなぁ・・・・・
「怖いというよりもひどい目だけど・・・・・・・・・・・・・・だんな、駆除できないの？」
「無理だ。」
白浜の砂の真砂が尽きるとも世に腐れ女（くされめ）の種は尽きまじ・・・・・・・・・・（ｂｙ文芸神）
関係なくしゃしゃり出てくるなぁぁぁぁぁぁ！！（どばこーん
キラッ！
邪神は遠く空の彼方に消え去っていった・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ふぅ、いい仕事をした。
「あの、王室顧問様？あれって・・・・・・・・・・・・」

「ただの邪神だ！」
「えっと・・・・・・・・・・・・神様ですよねぇ・・・・・・」
「邪神だ！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

押しが弱いなぁ・・・・・灰髪少年は。これでは世の中無事に渡っていけるか心配だ。
「ご主人様、さすがに神をたたき飛ばすのを日常にするのは少年に酷だと思いますが？」
「そうか？孤児院で神々と触れ合っているから慣れているのかと思っていたが・・・・・・・・・」
「あそこにいる神々はまともですから普通に敬われていますけど。」
「そうだな！」

どつきまわすのは王室顧問とか黒髪孤児とか補佐見習位だものねぇ・・・・・（ｂｙ暗黒神）
神々に対する礼儀とか敬意とか考えて欲しいものだ。（ｂｙ光明神）

そんなこんなで庭園公の下につく
すでに打ち合わせの準備ができているのか、従者とその奥方、針子達が待ち構えていた。
まぁ、着せ替え人形にさせられるのは今日の仕事だ。
たまには違う世界を見てみるのも悪くなかろう・・・・・・・・・・

「あら、この色だとちょっと合わないわね。」「だったらこっちのはどうかしら？」
「やはり兄弟だから色とか作りとか合わせて一対にしてみるのは面白いんじゃない？」

「いいね、それ！まずは採寸ね！」
「うわぁぁぁぁ・・・・・・・・・・くすぐったいですよ！ってなにしているんですか？」
「体の寸法を隅々まで計るのよ！仕立てるんだから！」
「服をわざわざ仕立てるって・・・・・・・・・・そんなもったいない！」
「何いっているの！貴族の夜会なんだからそれくらい当たり前でしょう！」
「あのぅ、目隠し布がないと見えないのですけど・・・・・・・・・・」
「あらあら、ごめんなさいね。うーん、庭園公様がこの色だからそれの影となるようにやや地味目に・・・・・・・・この目隠し布の刺繍は面白いわね。地味に見えて手が込んでいるわ。この柄を主題にしてみようかしら？」「だったら、少年のは対にした主題で目隠し布を作ってみようかしら？」
「いいねぇ・・・・・・・」
「庭園公様はよろしいですか？」
「いいですわよ。そこのでかいのも戦士装束でそろえてさらに後ろではべらせるのも面白そうね。」
「ちょ！な、何を・・・・・・・・・俺等は付き添いだし・・・・・・・」
「夜会なんて出れるほど・・・・・・・・・」
「いいのよ、飾りだからいかめしそうに控えていればいいわ！」
「ま、まて！脱がせようとするな！」
「良いカラダネェ・・・・・・」「指を滑らせるな！」

なんかやり取りを聞いていると強力兄弟も巻き込まれているようだな。
まぁいいか！

「待って、旦那！俺たち夜会なんか出るほどの身分じゃないでしょう！」

「給仕か傍仕えのつもりでいればよいさ。それとも固まっていれば問題なかろう。」

こうして、針子達の餌食となった二組の兄弟であった。

「ところで庭園公の衣装の主題は？」

「えっと、癒しの聖女とその御付といったところでしょうか？」

「ところで従者は？」

「前に作った衣装で十分です。目隠し布を選ぶくらいで終わりますが。」

変装酒宴かよ！

「目隠し布は正装よ！」

ごもっとも・・・・・・・・・・・・・・・・

夜会と茶菓子（後書き）

適当に適当に・・・・・・・・・・・・酒を買いに行かないと。

夜会と目隠し布（前書き）

あらすじ　庭園公は（検閲削除）だった。

作者は新物の酒が不作なのでふてくされているぞ。

あまりの不作ぶりに悪酔いして九月二日現在書き直しております。
まずい酒はわけのわからぬ言葉の羅列しか生み出さないものですなぁ・・・・・・・

九月一日に読まれた方は読み返すが宜しいかと・・・・・・・・・・・・・・・
駄文ですが。

夜会と目隠し布

ふむ、私にも招待状が届いている。
丁度子供達のお披露目も兼ねて参加するとしよう。

私達も目隠し布で参加するか・・・・・・・・・・・・・・

向こうが白を基調としているならば我等は黒かな?
主題は何にするかな?
奇をてらわずに【非道貴族とそのお付】としておくか。
「賢者様、賢者様は非道じゃないでしょう。」
「御主人様自身を貶めるようなことは・・・・・・・・・・・・」
「なに、ほんのお遊びさ。其処まで気にすることはない。」

さて、子供達衣装合わせでもするかね・・・・・・・・・・・・
私と子供達は職人の元に向かうのであった。

当日、私と子供達は庭園公の招きに応じて夜会の場所に向かう。
篝火の焚かれた庭園は昼間の賑わいとは別に夜の静寂と花の香りで包まれている。
そこで奏でられる遠い昔に忘れ去られた詩。
庭園公が依頼するときくらいしか奏でられる事のない時代遅れの詩。
初代庭園公が故郷を懐かしんで口ずさんでいた童歌が元らしいのだが・・・・・・・・・・・・・・
楽士達の手にかかると壮大な物語になってしまうのはお笑いだ。

今宵ばかりは庭園をねぐらにしている鳥や獣達には申し訳ないが賑やかになりそうだ。

「旦那が鳥や獣に申し訳ないと思う気持ちがあるなんて意外だな。」
「そりゃ、必要以上の欲を持って動くものと違って、必要なだけを得るだけでも大変なモノに無体を強いるのだ申し訳ないと思うのは当然であろう。」
「変なところで律儀なんだな。」
孤児弟に言われたくないな。

子供達は黒を基調とした貴族服（男物）を纏い目隠し布を身につける。
「むねがきつーい！」
「嫌味？」「さらし必要なかった・・・・・・・・・・・・」
それは時間が解決するし、大きさだけで全てが決まるわけではないぞ。
「本当？」「小さくてもいいの賢者様？」
「大きいのは罪？」
賑やかな娘達だ・・・・・・・・・・・・・・・おまえ達はそのままで魅力的なのに・・・・・・・・・・・・・・
「ご主人様はたらしなのですね・・・・・・・・・・・・」
孤児姉、何を・・・・・・・・・・・・・・・

「まぁ、だんなが誑しなのは今更だけど・・・・・・・・・・」「庇護下にいる眷族には甘いから・・・・・」
そかそか、妬いているのか可愛らしいものだ。
ここで何か言ってもとってつけたようなものなので無言でいるけど。

愛い奴よ・・・・・・・・・
そっと髪の毛を撫でると気持ちよさげに擦り寄ってくる。
甘ったれが・・・・・・・・・

そうしているうちに先触れの者が我等主従の登場を伝える声をあげたので庭園へと歩みを進める。

庭園は種々のものが焔に映し出された影のように揺らめいている。
子供達も始めて参加する夜会に緊張の色を隠せないようだ。
しかたあるまい、つい最近まで食うや食わずの生活をしていた子供達だ。
こんな華やかなところに身をおくなんて思ってもいなかったろう。

そんなに口をあけたまま見ていると間抜けに見えるぞ
「御主人様、流石に気後れしますけど・・・・・・・・・・」
「孤児姉、君は我が眷属にして準爵位を得ているのだ。気後れすることはない。私のほうでもこういう場における立ち振る舞いを教えていないのは悔やまれるが、臆することなく宴を楽しむが良い。」
「御主人様・・・・・・・・・・」
「なんだ?孤児姉。いきなりの実習と思えばよかろうにそれとも私が誘導しようか?」
「お願いします。」

私は孤児姉の手を取り導くように先に進む。その後に孤児娘や孤児弟が続くのである。
この光景を見た他の貴族達は面白がるような表情で我等を見る。

夜会はやがて酒盛となり、私等も退散する事とする。
庭園公も礼を言い辞することとなるのだが・・・・・・・・・・

その後庭園は朝まで酔いどれたちがいる羽目となったのである。

我等主従と庭園公一派がつけていた目隠し布は市場で貴族達に好評であった。

「賢者様陣が売れてないのですが・・・・・・・・・・・・」

「いらっしゃいませ。」

「少年よ、例のものは・・・・・・・・・・・・・・・」「こちらになります。」

「うむ、この手触り、香り・・・・・・・・・・・・・・一級品だな。買おう！」

「まいどあり！」

その後灰髪少年の露店は繁盛するのだった。

「王室顧問様、流石に・・・・・・目隠し布だけというのは本末転倒では？」

如何したものか？

そんなことはさて置いて・・・・・・・・・・・・

灰髪少年のはうなだれている・・・・・・・・・・・・

「いやぁ、古女房に目隠しつけたら・・・・・・・・・・・・」「いやぁ、目隠しされての夜というのは中々刺激的で」

「性愛神殿ですけど二十ほど融通してもらえませんか？目隠しです

るのが人気で・・・・・・・」

その後、この夜会で目隠しのエロさに気がついたのか、貴族達はそれ目的で買い込むのであった。

そして、それを知った臣民達もこぞって買いに来る・・・・・・・

「だから！盲目達の為に私は売っているんだ！どうして、そんな不純な目的の為に・・・・・・」

「少年、これが大人になると言う事だ！」

「いやだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁつぁぁっぁあぁぁっぁあっぁあぁっぁぁぁぁあぁっぁぁ！！」

少年は一つ大人になった。

夜会と目隠し布（後書き）

今宵はこれまでで・・・・・・・・・・・・・

と言いたかったのですが書き直しました。

酔っ払った勢いでの直接綴りは自殺行為ですな。

誰もツッコミがないのが更に寂しさを増す。

王都各所とこうぎ色々（前書き）

人類は其々の場所で酒を作り続けている。これは一つの文明の証である。
その酒を受け入れて神聖なものとして利用する文化、邪な者として排除する文化・・・・・
どちらも酒がなくては成り立たないのである。

一献の酒には歴史がある。
それを飲み干しながら徒然に語りましょうか・・・・・・・・・・・・・・・

王都各所とこうぎ色々

最近私の名が売れていることが原因なのか、国立の学園で講義をして欲しいと依頼が来る。
官僚が自分の専門分野で講義をして聴講生の中から後継を見つけるというのはよくある話なのだが、別に私は後継はそこそこいるし、これ以上増やしても学閥とか出来て面倒なので断りたいのだが・・・・・・・・
度々、依頼が来るので仕方無しに受ける事にする・・・・・・・・・・・・

「賢者様、仕方無しという割には色々準備しているのですね。」
「そりゃ、そうだろう。請けたからにはまじめにやらないと。」
「って、いうか・・・・・・・・・・・・資料の量が山なんですけど・・・・・・・・・・・・」

大した量ではないだろう。書物の２０や３０くらい・・・・・・・・・・
一つの言葉を紡ぐためには一生を費やす者もいるくらいだ、寧ろ一時の講義に一冊も資料を使わずにこなす事が難しかろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・
私は聖賢みたいに言葉を降ろす事なんてできないし、色々見て聞いてそれを自分で継接ぎして作り上げるしか出来ないのだよ・・・・・・・・・・・・

「その割には御主人様の知識の深さは・・・・・・・・・・」
「賢者様の場合業の深さというべきかも。」「確かに興味のある部分とか、誰かをおちょくるための労力に力入れているから。」
「おいおい、孤児娘達。君達が敬愛する私がそんなことをすると思

っているのかね？」
「「「勿論！」」」
即答かよ・・・・・・・・・・・
打たれ弱い者だったら二度と立ち上がれないぞ。
「大丈夫です。御主人様でしたら神々が立ち直れないような事でも平然と受け入れて立ち上がり前に進みますから。」
それは買いかぶりすぎだ。
仕事の合間に資料をまとめて講義の日を迎える。
学園の講義室は八割がた埋まっている。
５０弱か・・・・・・・・・
王都在住の貴族の子弟が主なのだが、地方から遊学している有力貴族の子弟などもちらほら・・・・・・・・・・
では講義を始めよう・・・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・・報復的処置についてほぼ認められているから、抗命権を用いるときはその点を念頭に入れて対策を立てるなり受け入れて覚悟を決めるなりするのが望ましい。ここまでで質問はあるかな？」
「はい！王室顧問様。」
「うむ、問うが良い。」
「あきらめるのは論外ですが、対策とはどのような事を指すのでしょうか？」
「手の内を明かすものがどこに居る・・・・・・・・・・・・そこは工夫するものだと言いたいが、さわりだけ答えるとしようか。例

えば権力、例えば技能、例えば人脈、例えば情報・・・・・・・・・これらのものは扱いを間違えると自らにも災いが降りかかるのである・・・・・・・・・・・・・・」

「出来れば具体例を・・・・・・・・・・」

「そうだねぇ・・・・・王妃の年齢を・・・・・・・・・・・・ぐほっ！」

私の意識が遠くなる。

気がつくと聴講生達の席がまばらで代わりにぬいぐるみが置かれていた・・・・・・・・・・・・・・

さて、講義の続きをしようか・・・・・・・・・・・・・・

「講師、質問です！」

「はい、何でしょう・・・・・・・・・・・・・・・」

「王妃様の話をしたときに王室顧問先生はどうして倒れてしまったのですか？そして所々にあるぬいぐるみは・・・・・・・・・・何なのでしょうか？」

「良い質問だね。では答えろと・・・・・・・・・・・・・うわぁぁぁっぁあぁぁぁー！」

私は暗がりに引き込まれる。

そして気がついたと。講義室の中は空っぽになるのだった・・・・・・・・・・・

「勘弁してください。王室顧問卿・・・・・・・・・・・・・・生徒が全滅じゃないですか！」

学園から抗議が来るのであった。

王都各所とこうぎ色々（後書き）

ついかっとなって（ｒｙ

王都各所と竜の宝物（前書き）

竜族と言う者は多少の差はあれ収集癖を持ち合わせている。
彼等の収集癖に対抗できるのは今は数少なくなった蒐集妖精（ヘムル）か人族の偏執的収集家くらいな者だろう。

あるものは金銀財宝を求め、またある者は武具を集める。
知識を集める者があれば同好の士でないと理解できないような者を集めている者もいる。
又聞きで悪いのだがある竜族の収集品は贋作の美術品ばかりだったなんて理解に苦しむものもあった。
勿論竜族を貶める事をするつもりはないのだが、どこに琴線に触れるものがあったのかが疑問である。

実際に竜族の収集品には金銭的価値のある物が多く、下手すれば天文学的価値になったり世界に一品だけの貴重品だったり欲望を掻き立てるのである。
そのためか勇者・魔王時代においては人間族のみならず、魔王連合下の諸異族からも狙われて大変だったとの記録も残されている。（人族連合の歴史書には竜族の秘宝は元々神からの下され物で竜が独占していたのを勇者達が世界のためにと譲り受けたなどという記述も見られる。）

勿論竜族の収集物を得るとなれば並大抵の力量では難しく、軍等を派遣しても内部犯による横領、収奪物の分配における内紛、保管、運搬の為の知識を持つ者の確保等々、確保してからの管理が大変であったと推測される。
少数精鋭で向かうと言う手もあるが、竜族は下位種族であっても軍の一隊と互角に立ち向かえる力量を持ち生半可な者では命を粗末に

するだけであったという。
勇者魔王時代の竜族の収集物は戦火にさらされ、簒奪者により奪われ、無知な者がガラクタ当然に扱って失われたものが多い。何とも嘆かわしい事である。

史書を紐解いても竜族が魔王連合に属したのは比較的後期の事で、理由は地理的な問題と人族連合よりもまともだったからと言う程度の事でしかない。実際、戦闘に際しては防衛戦のみ参加し（補給等々の問題もあったとされる）、地理的条件により盾の王率いる某王国（狭間の国、裏切りの園等とも称される。）に帰属した竜族も少なからずいる。

現在の竜族も自身の本能とも言うべき収集癖から様々な分野の収集を手がけている。彼等の収集物はその分野での世界の英知が詰まっておる物も多く、学者や研究者等から研究させてくれと言う声も出ている。

高名な収拾物について幾つか例を挙げると極北連合の僻地に居を構える氷竜族には氷像を収集するものがいて、【永続化】【不変】等の術法を用いて保護しているのだが暖地に持ち込もうにも物が氷なだけに溶けてしまうから持ち出せないというおまけ付である。それでも芸術を志す者や好事家にとっては垂涎の物らしく一目見ようと極北の地に赴く者も多い。（氷竜族側も日を決めて一般公開している。観光旅団も結成されているので極北に赴いた際には見てみると良かろう。）

某王国の聖域守護辺境伯領傍にある土竜族自治区では宝石と言うかその原石や各種鉱石の収集をしている者がいて、ここの金銭的価値は大したことはないのだが学術的価値や世界中の岩石を分類しているといっても過言ではない数の収集物は地属性の魔法使いや学者達

が集って議論を戦わせていたりもする。（同じ地において、蘚苔類の収集をしている竜族がいるがこちらは薬師や植物学者が来ているらしい。）

金銭的価値というと魔王領奥地にある火山地帯に居を構える火竜族の長老であろうか？彼の収集物は鋼玉（コランダム）に限定しているのだが質量共に世界一の価値があるといえよう。（一般には公開されておらず、筆者も長老が訪れた事がない南方奥地の鋼玉を土産に特別に閲覧したのである。）中でも護符を封じ込めた人造鋼玉は今では事実上失われた製法で火竜族の秘宝と言っても過言ではないだろうか。

もし君が竜族と縁を結び彼等の宝物を見せてもらえるとなったら光栄に思えるだろう。それは君を信頼に値すると認めたからである。但し、その収集物に過度の期待をしないほうがいいだろう。一般人の理解を超えるものを収集している竜族もまた多いのだから。

【竜族に関する観察記　性癖・収集物編】より抜粋。

王都各所と竜の宝物

最近市場で酔いつぶれている雷竜公を運ぶうちに腰を痛めるものが続出である。

魔王異族連合大使館で二日酔いの雷竜公を放置して鬼族随行員と茶を喫している。
勿論目的は腰を痛めた者への見舞金をせしめる為であるのだが、どちらかというと雷竜公に自重を求めるためである。

人であっても重たいのに【人化】しているとは言え竜である。実は見た目よりも重たいのである。（それでも軽量化の魔具を使用しているらしい。）

ましてや、正体（竜になって）を露にして酔いつぶれている時はそのまま放置してやろうかとも思ったと、とある衛士はぼやいていた。随行の者達は別に風邪を引くくらいだからほっとけというが、邪魔なのである。はっきり言って邪魔なのである！如何やって運んだら良いというのだ！

「そりゃ、コロと荷車で・・・・・・・・・・体に縄をかけて引きずるんですよ・・・・・・・」

しみじみと呟く鬼族随行員。だからって、船着場から船に載せる振りをして水路に落とすのは止めて・・・・・・・・・・
水路が詰まって邪魔だから・・・・・・・・・

「面目ない・・・・・・・・・・ワザとじゃないんですけど・・・・・・・・・落として流れていったらどれだけ楽かなぁ・・・・

と思ったのは否定しません。酔いつぶれなければ酔い方なんですが・・・・・・・・・・・」

たしかに・・・・・・・・・・　竜族の中には強者としての自信からか威圧的になりがちなのだが（彼等には悪意はない、ただ見栄を張りたがる性質があるだけだ。）落ち着いた物腰で他者に威圧感を与えないように振舞っている。

外交の交渉としても長い年月を生きてきた知識や見識は生半可な者を退けるには十分であるし、竜族という見栄えは魔王領の地力を示すのにもってこいである。でも、酔っ払いなんだよなぁ・・・・・・

「前任の古妖精（アールブ）卿ならば運ぶのに楽だったんだが・・・・・・・・・・」

「古妖精卿でしたら、婚約者に浮気がばれて本国にご機嫌取りに・・・・・・・・・なんでも貴国の官僚の一人が関わっているとか。」

「多分財務官だろう。遠い親戚だといっていたし。」

「あの時は大変でしたよ・・・・・・・・・・国家機密が漏れたのかと思ったら浮気で痴話喧嘩だなんて魔王様も呆れてましたよ。」

「なんと言うかすまんとしか言いようがないな・・・・・・・・・・」

「いえ、王室顧問卿が謝ることではなくて、あの助兵衛妖精が巨乳娘あつめてウハウハしていたのが悪いんですから・・・・・・・」

「まぁ、私の愛人を奪い取ったんだからざま見ろと言いたいが・・・・・・　風聞で婚約者に愛想つかされたと聞いたが？」

「それは本当ですね、只その前に婚約者に上位精霊術による制裁を受けて全治3ヶ月の重傷を・・・・・・・・・」

「おいおい、魔王領にも治癒術士とか療養神殿の神職とかいるだろ！」

「それが・・・・・・・・・匙が飛んできて・・・・・・・・・・」

「ああ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

流石にあんな馬鹿につける薬はない！（ｂｙ療養神）

私は茶で口を湿らし気持ちを落ち着かせる。つまり古妖精卿は最低限の薬のみで自然治癒に任せたと・・・・・・・・・・・・・

あわれな・・・・・・・・・

「で、王室顧問卿。この酔いどれ竜を如何しますかねぇ・・・・・」

「別に、当方としては酔いつぶれても魔王連合側で介抱してくれるのならば問題ないのですが・・・・・・・・」

「・・・・・・・判りました巨人族か竜族を介添えとして用意しますか・・・・・・・・・・」

「あまりでかすぎるのは設備の用意がないぞ。」

「わかってます・・・・・・・・・・・・」

数日後、市場から連絡が来た。

「賢者様、雷竜公様とお付の方々が・・・・・・・・・・・・・・・酔いつぶれて・・・・・・・・・・・・」

「小売婦人、介添えとして来ている者がいたはずだが？」

「それが・・・・・・・・・・・・・」

市場についてみると・・・・・・・・・・・・・・・

潰れていた。竜3、巨人2、鬼4、岩妖精6、牛頭1、人馬2、その他分類不明6・・・・・・・・・・

確かに力自慢だよなぁ・・・・・　どうして全部潰れているのだろうか？

「賢者の旦那。このデカブツ共は竜の爺様と何人かで飲んでたんだが・・・・・・・・・・・・竜の爺様に飲まされて、嫌いじゃなかったのか樽ごと・・・・・・・・・・・・・・・がぶ飲みしまして・・・・・

・・・ごらんのありさまで・・・・・・・・・・・・巨人のデカブツが潰れたときにうちの露店を・・・・・・・・・・・・」

そういう近隣の農家の売り物を見てみると・・・・・・・・・見事潰れている。農家の親父は涙目である。

これは泣いても仕方がない・・・・・・・・・哀れに思ったわたしは農家の親父に迷惑料と手間賃として銀貨を数枚握らせて酔っ払い共を運ばせる。農家の親父は側にいる男達に声をかけて酔っ払い達を荷車に乗せている。

「旦那、運べるのは積み込んだんですが、でかいのは如何します？」

「ばらしてよければ、ばらしますが・・・・・・・」

「おいおい！食えないし血で汚れるだろうが！」

「竜って旨いという話を聞いた事が・・・・・・・・・・・」

竜って、食えるのか・・・・・・・・今度試してみるか・・・・・・・・・・・・

「まてまてまてまて！王室顧問卿！その物騒な考えはどこかに捨ててくれ！」

一眠りして酔いが覚めかけたのか介添えの竜族が慌てて声を上げる！介添えが潰れてどうするんだ！

「申し訳ない。ほらっ！闇妖精族の魔道師殿。おきて、酔い覚ましの術法を・・・・・・・・・・」

竜族の介添えは正体不明の黒ローブを揺さぶって起こすと術を強請る。

寝ぼけ眼の黒ローブ、ごにょごにょいって・・・・・・・・・・・・・術法を・・・・・・・・・・・・暴発させた。

その場にいた全ての者の酔いを醒ましたのは良かったのだが・・・・・・・・・・・・範囲が広すぎた。
他の酔客の酔いを醒まし、市場中の酒から酒精分を抜いたのだった・・・・・・・・・・・

「ああっ！うちの酒が！」「これ１０年物だったんだぞ！」
「てめぇ！この黒ずくめ！俺の酒を返せ！」「魔王国の！これは聖徒王国に対する嫌がらせですか？」
「王室顧問！酷いじゃないか！やっと宰相閣下から逃げて酒盛していたのに・・・・・・・・・・」
「私のせいじゃない！って、言うかお前等仕事サボって酒盛するな！孤児娘達に仕事押し付けているんじゃないだろうな？」「えっと・・・・・・・・・・・・それは・・・・・・・・・・・」「たまには若手に任せるのも・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・君達、孤児娘達に仕事丸投げして昼間から酒盛とは良い身分であるな！」
「げっ！宰相閣下！」「この馬鹿者をひっとらえろ！」「はっ！」
「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。なんで私まで！」「ついでに次期宰相候補の君も手伝ってくれるよね！！」
「誰が次期宰相候補だ！断る！」「そんなことを言わなくても良いぞ。栄達は男子の本懐ではないか！」「自分が楽したいだけだろう！」「そうだが。」「うわぁ、最低だこの宰相閣下は！」

酔いを醒まされて怒り狂う各国の大使達、宰相閣下率いる近衛中隊を前に逃げ惑う官僚（さぼり）達、ついでとばかりに連行される私・・・・・・・・・・・・私は騒動の鎮静化を勤めていたのに・・・・・・・・・・・・・・・仕事中だよ。
そして、酒精を抜かれて消滅しかけている酒精神！
「うわぁ！酒精神様！」「誰か酒を酒をもってこい！」

あははっ・・・・・・・・　まさかわたしがやられるなんてねぇー
　色々酒を楽しめたし悪くない神生だったよー（ｂｙ酒精神）

「うわぁぁぁ！だれだ！酔い覚ましを暴発させた馬鹿は！」「早く早く酒を！」
「畜生！主成分が抜けきってやがる！」「こっちは酢になってる。」
「もってきたぜ！」「早く酒精神様に！」
「おっと転んだ！」「馬鹿野郎！酒樽が・・・・・・・・・・・・・」

ごつっ！

どくどくどくどく・・・・・・・・・・

酒はかける物じゃないよー　呑む物だよー（ｂｙ酒精神）

樽をぶつけられ、壊れた樽から流れ出た酒を浴びて何とか一息つけたようだ・・・・・・・・・・
良かった良かった、酒精神さまが消滅したら世界中の酒が・・・・・・・

それは健康的ですわね（ｂｙ街路神）
たまには宜しいのでは？（ｂｙ花の神）

ひどいよー（ｂｙ酒精神）

危なかった・・・・・・・・・
「もしかして我々は恐ろしい事を・・・・・・・・・・・」
「もしかしなくても世界の崩壊の瀬戸際だったぞ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

肝が冷えたのか介添えの竜族は鱗だらけの顔からでも判るほど血の気を失っていた。
周りの魔王国の連中も・・・・・・・・事の成り行きに驚きを隠せていない。
そんな中でも黒ローブは一人酔っ払ってふらついていた・・・・・・・・・・・・・・

翌日、市場の損害をまとめてくれた小売婦人をはじめとする顔役と共に魔王連合大使館に向かう。
「雷竜公、流石に今回の件は洒落になりませんよ。」
「済まない・・・・・・・・・・・・・・」

術法の暴発の影響なのか痛む頭に顔をしかめつつ積みあがった白い山（多分始末書）を片そうと呻いている雷竜公とその一派。後ろからは昨日酒盛に参加していなかった大使館員やその配下達がにらみをきかせている。

「王室顧問様、この件はきっちりと魔王様に伝えておきますので真に申し訳御座いませんでした・・・・・・・・・・・・
この老いぼれの酔いどれドラゴンが！とっとと手を動かして詫び状を綴りなさい！」

狼牙棒を片手に雷竜公に仕事を遂行させている長耳の老大使補佐官に損害の明細書を渡すと私達一行は大使館を辞するのであった。

数日後、魔王直筆の詫び状と損害補填は雷竜公から取り立ててよいと差し押さえ許可状を受け取った。
そういえば竜の収集物って価値があることが多いけど雷竜公は何を持っているのかな？

商会公から差し押さえの専門家を借りてきて、雷竜公の私邸に向かう。
なぜか極北戦士達や聖騎士達・・・・・・・・・・・・各国の大使達がついてきているのですか？
「そりゃぁ、我々も酔いを醒まされた挙句に飲んでた酒もダメにされたのでな。魔王から差し押さえ認可状を貰ったし・・・・・・・・・」
分配でもめそうだな・・・・・・・・・・・（汗

「どうもー、酒盛市場の管理組合です。先日の損害の取立てに来ました。金貨２０枚です。」
「各国大使から先日の酒代。併せて金貨１２枚です。」
「酒精神殿です。酒精新様の治療代金貨８枚になります。」

「「「さぁ、耳を揃えて払ってくださいね！」」」

にじり寄る被害者達・・・・・・・・・・・・・・後ずさる雷竜公・・・・・・・・・・

「ま、まてまてまてまて・・・・・・・・・・払うから・・・・・・・・・・金貨は・・・・・・・・・・・・えっと、３５枚しかない・・・・・・・・・・・・まからんかのぅ・・・・・・・・・・・・・・・」

「「「「「ダメです！」」」」」

「さて、楽しい差し押さえですわね！野郎共！雷竜公の宝物庫に行きますわよ！」

「「「「おおっ！」」」」

なんか楽しそうだな・・・・・・・・・・

雷竜公の差し出す金貨にも目をくれず、乱入する被害者達。なんで、小売婦人が号令かけていたんだろう？

「そりゃ、酔っ払い大使の担当が小売婦人でしたから・・・・・・・・・・」

えっと、なんかすまん・・・・・・・・・・

調度品も美術品も目もくれず宝物庫に向かう一同。金貨と美術品くらいで損害分は払えないか？

なんか目的と手段を取り違えているけど・・・・・・・・・・

急ぎ足で進んでいるが調度品とか壊してないしほっとこう。

そしてたどり着く宝物庫。扉を開けた途端、流れ出る冷気と微かに漂う酒精・・・・・・・・・・・・・・・・・・

こ、これは・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「酒蔵か！」

「ごくっ！長年商いの道に携わっておりますがこの酒の質と量は・・・・・・・・・・・・・・・」

「おおっ！これは霜降国の３０年もの！」「こっちには極東の古酒が・・・・・・・・・」
「この樽は廃業した、野葡萄酒造の・・・・・・・・・・・・・・最後の作品。」
「私はこれを・・・・・・・・・・」「それは俺が目に付けていたのに！」
「・・・・・・・・美味！」「何抜け駆けしてやがるんだ！」「俺にも寄越せ！」
「うわぁぁぁぁ！やめてやめてくれぇぇぇぇぇ！」「酒の恨み！思い知れ！」
「それは、二度と手に入らない・・・・・・・・・・そっちは、金貨２０枚もしたんだ！」
うん、びみだねー、こっちはおみやにー（ｂｙ酒精神）

ごきゅごきゅごきゅ・・・・・・・・・・
雷竜公の宝物庫から収集物が呑まれていく・・・・・・・・・・
飲んでいるのは市場関係者以外の大使達とか極北戦士達なんだが・・・・・・・・・・

「雷竜公様、私達は金貨で宜しいですわ。」
「とほほ・・・・・・・・・・・・」

こうして雷竜公の宝物庫は現在の蛮族に荒らされるのであった。

「はいはい、飲んだ酒差し押さえた酒は正直に報告願いますよ。不正に申告したら本国に請求書回しますからね。」
差し押さえ担当もえげつないなぁ・・・・・

「飲まれた酒の方が高くついたぞ！その分は請求しても問題ないだ

ろうな。」

「我が国では関知致しませんので・・・・・・・・・・」

雷竜公の飲まれた酒　３４本金貨４０枚相当・・・・・・・・・・・・
更に不明な酒２５本金貨１０枚相当・・・・・・・・・・
その差額を元に一騒動と本国からの始末書の山が大使達を襲うことになるのだが別の話である。

酒精神が飲んだ分は？

われにたいするささげものたしかにうけとったよー（ｂｙ酒精神）

神様特権かよ！

王都各所と竜の宝物（後書き）

因みに雷竜公の姪に当たる雷竜姫の収集物は【ヤオイ同人誌】だったりします。

世界一腐った竜の収集物。作者も書くのは嫌過ぎる。

王都各所と聖騎士（前書き）

あらすじ　雷竜公は宝物庫（さかぐら）を荒らされた。大使達の金貨２０枚はぼりすぎだと思う。（一般家庭の数年分くらいの収入）どれだけ高い酒を飲んでいたのだろうか？

因みに酒精神殿からの請求は世界各地で同時多発宴会が繰り広げられたからである。それにより雷竜公の名は広まったのだが本人は知らない。

王都各所と聖騎士

「そういえば賢者様、雷竜のおじ様の差し押さえ計算したんですけど・・・・・・・・・」
「如何した孤児娘？」
「市場のは休業した衛士や近衛の皆さんの休業補償やダメにされた露店の補填部分でやや多いかな程度なんですけど・・・・・・・・・大使達の請求が・・・・・・・・・・・・・・・・・・明らかに・・・・・・・・・」
「それは見なかったことにしなさい。多分懲罰的請求も入っているだろうから。」
「はぁい！」

あの後雷竜公のところに各国の大使達が外交と称して訪れているのだが、どう見ても酒をたかっているとしか思えない。
其々の本国に問い合わせてみるか・・・・・・・・・・

魔王国との交渉で我が国への鉱石類の割り当てとか香料の輸入量が順調なので特に問題視しません。（西岸騎士団領　渉外担当）
土産代わりに我が国の果実酒を送ります。（東南交易都市国　交易担当）
えっと、うちの大使は禁酒令出ているはずなんだが・・・・・・・・・・・・（霜降国　外務卿）
あの野郎・・・・・・・・・・・・なんて羨ましい・・・・・・もとい、けしからん事をしているんだ！大使を私と交代するので宜しく。（

西部平原国　主席外交官）
後で余が接収するので飲みつくさないように釘を指してもらえると助かる。（魔王異族連合　魔王）
十分に酒手を用意したはずなんですが・・・・・・・・・・（極北連合　族長議会議長）

各国色々な反応で・・・・・・・・・・って、霜降国の大使！命削ってまで何呑んでいるんですか！
「ふっ！王室顧問、男には命を削ったとしてもあえて殉じる生き様と守らねばならない評判があるのさ。」
「はいはい、大使。戻って仕事しますよ・・・・・・・・・・」
「わしは引退して酒びたりの生活を送りたいんだぁぁぁぁ！」
「はいはい、寝言は置いといてこれから酒国大使と茶会がありますから行きますよ！」
「くそぉ！何で酒国なのに酒盛じゃないんだ！」

それは激しく同意。
「御主人様、いくら酒国の方々とは言え交渉事で酔いつぶれるのは拙いでしょう。」
「それに姫大使は脱ぎ癖があるからなぁ・・・・・・・眼福だが。」
「・・・・・・・・・・・・・御主人様・・・・・・・・・・」
孤児姉に冷たい目で見られてしまった。まぁ、姫大使の素肌を見ることはまずないのだけどね。

さて、聖徒王国からは・・・・・・
竜の秘宝を本国に送らないとはけしからん！（聖徒王国　宰相）

えっと、酒だよ。言っとくけど酒だよ！
竜の秘宝といったとしても少々高級で貴重なだけの酒だよ！
特殊効果とかついてないよ・・・・・・・・・・

「王室顧問、頼みがある。」
「如何した聖騎士殿？」
「うちの宰相補佐を知っているか？第三公爵家の党首の弟に当たる人物なのだが・・・・・・・・・・」
「ああ、吸血鬼みたいな青白い痩せ男だろ。」
「人の生き血を啜っていそうなのは否定しないが人の国の官吏を其処までこき下ろすな！」
「それがどうした？」
「それがな、竜の秘宝が酒な訳がないと我を嘘つき呼ばわりしているのだ！」
「事実なのに・・・・・・・・・」
「如何したものかと悩んでいるんで相談に来たのだが・・・・・・・・・」
「今更魔王勇者戦役を繰り返すつもりなのだろうか？」

はて、困ったものだ。
竜族の収集物なんて個人個人の趣味の範囲だからなぁ・・・・・・・・
人外公の所に所属している竜族なんて女性の髪の毛を集めていたしなぁ・・・・・
そんなに竜の秘宝がほしいなら自身で取りにいってもらうか・・・・・・

「聖騎士殿こういうのは如何だろうか？」
「ふむふむ・・・・・・・・・・・・・・・・自身の目で確かめてもらうわけですな・・・・・・・・・・でも、本国から戦力を連れて行

くと言いそうですな・・・・・・・」
「それはそれで・・・・・・・・・・・・・・・我が国式の決闘で対決してもらえば・・・・・・・・・・・・・・」
「酒合戦ですな（にやり」

聖騎士殿が連絡をして半月ほど経って聖徒王国の宰相殿補佐は王都に到着したのだった。
馬車から降りるなり
「何だこの雑多な場所は、獣が街を歩いて居るぞ！これでは蛮族の地ではないか！」

ほうほう、来るなり人種差別発言ですか・・・・・・・・・・・・・聞くものが聞いたら外交問題だよ。
「王室顧問押さえて抑えて・・・・・・・・・・・・・」
「そのほうが悪名高い王室顧問か？」
「どの悪名かは聞きませんが王室顧問は私です。本日は遠方から御出で戴き歓迎いたします。」
「うむ、早速だが竜の秘宝とやらを見に行きたいのだが。」
「丁度其処に魔王国の雷竜公がいますので打ち倒して手に入れてみたら宜しいでしょう。」

「やいやい、其処の薄汚い竜族め！人族にこの人ありといわれた聖徒王国の宰相補佐だ。大人しく秘宝を渡しやがれ！」
「小童が。舐めた口を我に勝てるならばくれてやろう。ただし、この国の流儀でな・・・・・・・・・・・・・」
「ふむ、ここで殺し合いは宜しくないらしいからな。で、何をする？」
「これだ！」

雷竜公は酒樽を二つ用意すると宰相補佐と飲み比べをする。

ぐびぐびぐび・・・・・・・・・・・・・・どくどくどく・・・・・・・・・・・・

「なぁ、どっちが勝つと思う？」「雷竜公だろう！」「確かに」
「これでは賭けにならないな。」「流石に無茶だと思うが。」
ところで各国の大使たち何を？

「「「暇つぶしの見物だ」」」

うわぁ、言い切ったよ・・・・・・・・・・・・・・最低だこの大使達。
前もって雷竜公に話を通しておいたのだけどね・・・・・・・・・・・・・・
・それが漏れたのだろう。

「如何した小童！我を倒すのではなかったのか？」
「まだまだぁ！・・・・・・・・・・・・（ばたん」

そうこうしているうちに雷竜公に負けた宰相補佐が戸板に乗せられてはこばれていく。
これで一件落着というべきか・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「本国に対する説明とか報告とかがあるのですが・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・雷竜公、本日はどうも助かりました。」
「まぁ、聖騎士殿も大変であるな。」
「本当勘弁願いたいものであるが・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「がはははははっ！」

人魔共闘はこの日より始まった。如何でも良いか。
これにて一件落着。後日宰相補佐は謹慎処分を受けたそうな。
めでたしめでたし。

暫くして・・・・・・・・・・・・・

「王室顧問手助け願います！」

「どうした？」

「うちの聖女様（属性：聖・腐）が魔族領土にある雷竜姫（同人女）の宝物（ホモ本）を奪い取って来いと・・・・・・・・・・・・・命令された。」

「それは聖女様が普通に魔王領に行けばよかろう。間違ってもうちの王宮で交換会とか開くなよ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

はっきり言って関わりたくないです。

何だそのろくでもない収集物は！

王都各所と聖騎士（後書き）

今日は禁酒して書いてます。眠い。

王都各所と暗黒神（前書き）

あらすじ　聖騎士様は中間管理職。

王都各所と暗黒神

いつも不思議に思えるのだがこの暗黒神孤児院に馴染みすぎだろう。

「あんこくしんさま、しょくしゅしょくしゅ！」

「あたちのあんこくとびこみがさきだよぉ！」

「えー！ぼくにあんこくしんせいじゅつをおしえるのがさきだよぉ。」

こらこら子供達仲良くしなさい。どっちもいっぺんに出来るから（ｂｙ暗黒神）

闇の塊のような暗黒神様に飛び込んだり、影の触手でタカイタカイされて喜んでいる孤児達。

何人もの子供が飛び掛っているのだが全てをさばき切るのは流石に神だなと思う。

暗黒神術！失われた暗黒神の信徒達が秘儀じゃないか！

「賢者様、私の中の正気ががりがり削られているんですけど・・・・・・・」

「心配するな私もだ。」

「不思議に思うんですけど何で孤児院に神々が屯しているんですか？」

いやぁー　酒があるしね（ｂｙ酒精神）

荒野の語り部がここの子供達に気をかけてくれと言われたのでな。

我ながら甘いものだ。（ｂｙ風の神）

私は下界を彷徨っているから、王都における宿代わりかな。（ｂｙ詩人神）

はいはい、おまえら。下界と神界の境を越えまくるな！仕事が増えるだろう！（ｂｙ境界神）

「そういえば境界神様、あの忌々しき異世界人をどうしてこの世界から追放できないので？」

ああ、あの痛い女か・・・・・・・・・・　元の世界の人間共の認識では行方不明の失踪扱いだが、実は元の世界で死亡していて転生越界扱いなんだ。追い出そうにも存在が世界の構成要素と化しているから・・・・・・・・・・・・・・・それ以前に・・・・・・・・・追い出した先で・・・・・・・・・・・・・・・何で吾が苦情受けねばならないんだ！（ｂｙ境界神）

何をしたんだろう・・・・・・・・・・・・・・・聞かないほうが精神衛生上よさそうだが。

聞かぬほうが良い。（ｂｙ風の神）

世界一つ腐らせるなんて、早々出来ることじゃないぞ！（ｂｙ戦神）

まさか、追い出した先の創造神（女性人格）を腐教するなんて・・・・・・・・・・・・・・・下位神達が泣いていたぞ・・・・・・・・・・（ｂｙ演芸神）

うわぁ・・・・・・・・・・なにその恐ろしい世界！

「御主人様、その世界に王妹殿下を初めとする方々を移住させたら如何でしょうか？」

「それは良い。犠牲になるのは境界神の胃壁くらいだし・・・・・・・・・」

そもそも神に胃袋とかあるのだろうか？

君達が考えるような身体構造はしていないが、嫌味を延々聞かされると泣けてくるから勘弁願いたい。（ｂｙ境界神）

「それは残念。世界一つ作って追放とか出来ないのかな？神話で旅立った神々とかという話を聞いたが・・・・・・・」

狭い範囲の異界を作るくらいならば出来るが出来ても村一つ分くらいだからなぁ・・・・・・（ｂｙ水神）

宴会場が限界だよー（ｂｙ酒精神）

専門分野ではないしな。（ｂｙ戦神）

世界一つとなると光明神か暗黒神くらいしか作れないだろう。（ｂｙ剣神）

しかし神々と雑談なんてこの孤児院の環境は人外魔境だな・・・・・・・・・・・・

「賢者様が着てから混沌とした気がするけど・・・・・・・・」

「公爵私兵団の人見たとき最初は怖かったなぁ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「最近、馴染んでしまった私が怖い・・・・・・・・・・」

孤児娘達も肝が据わってきたなぁ・・・・・・

「御主人様の回りは混沌を発生させているみたいですし、これが日常と認識してしまう自分の正気を疑ってしまいますが。」

孤児姉・・・・・・・・・・・・・・

神々も孤児院の女衆が淹れてくれた茶を喫しながら（数柱茶以外のものを呑んでいるのがいるけど）子供達と暗黒神の戯れを見ている。

暗黒神も子供と遊ぶのが嬉しいのか影の中に子供達を出し入れしている。

これ神殿関係者が見たら泣くぞ・・・・・・・・・・・・・・・

「我等の祈りには応じないのに・・・・・・・・・・・・・・どうしてこんなに沢山・・・・・・・・・・ここは聖地ですか？」

うんうん、判るよ。子供達に神学を教えに来ている神職殿。だから心折れて項垂れるのは止めてくれ。

「御主人様、それは無理かと・・・・・・・・・・・・・」

「孤児姉、止めを刺さないように。」

「失礼致しました。」

なんか子供達から黒い波動が見えるのだが・・・・・・・・・・・・・

「おおっ！既に使い手たちが途絶えたと思われていた暗黒神様の神術！【影繰り】をこの目で見ることが出来るとは・・・・・・・・・・・・」

神職殿、神職殿・・・・・・・・・・・・・もどってきてー！

うんうん、子供達。この影を使えば高いところにあるおやつとか簡単にとれるよ。（ｂｙ暗黒神）

「うん！」「でも取ると女衆にお尻叩かれる。」「・・・・・・・・・・・・・神様女衆対策はないの？」

あっても、だめ。世話になっている者を騙したり傷つけるのはよくないことだよ。（ｂｙ暗黒神）

「はーい。」

うにょうにょ　うごうご・・・・・・・・・・

子供達の影がいろいろな形に変わって小石や小枝を持ち上げてみたりしている。

ある子供なんかは自分の影で体を持ち上げようとしているけど持ち上がらなくて四苦八苦している。

「何しているのかな？」

「けんじゃさま、こう、影で体を持ち上げたら空飛べるかなと思ったんだけど・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・えっと、屋根かなんかに影を繋いでぶら下がるとかなら出来るんじゃないのかな？」

「そっか！」

ぶらーん　ぶらーん

子供達は木の枝に影を引っ掛けてぶらぶらとぶら下がっている・・・・・・・・・

なんていうか・・・・・・・見た目が・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・吊るし首？」

孤児娘、私でさえ言わなかったことだが・・・・・・・・・・・・・

「確かに心臓に悪い光景ですな。」

神職殿、それには同意いたします。

「落ちないように気をつけるんだよ！」

「はーい！」「わかったー」「これおもしろーい！」

ぶらーん　ぶらーん

子供達は【影繰り】でぶら下がったり、屋根の上まで上がって駆け回ったり・・・・・・・・・

影の中にもぐりこんでみたり・・・・・・・・・・・・・神術って遊びに使ってよいものなの？

遊びも大事だよ。人を傷つけるよりも才能の無駄遣いのほうが我は好む。（ｂｙ暗黒神）

そのうちに魔物・村人遊びになって、陰の中に隠れたり【影繰り】で木の中に飛び込んだり・・・・・・・・・・・・

魔物役の子が影を逃走範囲全てに細かい網目状に張り巡らせて効率良く捕まえるのだが、すぐに遊びが終わってしまうので魔物・村人遊びで神術とかは使用禁止となってしまった。

そりゃ、当然だ。

孤児院の子供だけならば良いけど町の子供達とも遊ぶ事があるだろうし、一方的なのは宜しくない。

しょんぼり

神術禁止された子供達はしょんぼりしているけど、すぐに次の遊びを始めるところは子供と言うか・・・・・・・・・・・・

「ごはんよー！」

女衆が昼餉の声を上げる。

「「「「はーい！」」」」

現金なものですぐ元気に返事をする子供達。孤児院の中に駆ける様に飛び込んでいく。

ちゃんと手を洗うんだよ.

「賢者様たちも食べていくでしょ。」
「うむ、ご相伴に与ろう。」
「そういえば孤児院で食事というのも久方ぶりですね。」「そだねー」
我等主従も孤児院の中に入るのだった。

孤児院の中は子供達でごっちゃごっちゃしていて賑やかである。
まぎれて食事しているのもいるけど良いのか？

「今更だしねぇ・・・・　前なんかは私兵団や極北戦士の皆さんも一緒だったし・・・・・・・・・」
「そう謂えば、私兵団の皆さん入れ替わったみたいなんですけど・・・・・・・」
「孤児姉ちゃん、皆さん仕事サボってきていたみたいで・・・・・・・・・・・・今頃は・・・・・・・・・何しているのかしら？」

多分、紙の山脈を崩す作業に追われていると思うが・・・・・・・・・

子供達に混じっている私兵達も食べながら子供達に色々な話をしている。
主に与太話だが・・・・・・・・・・

下界の食事も悪くないな。（ｂｙ戦神）
お供え物だと冷えていたり保存重視だったりするから好きじゃないんだよねぇ（ｂｙ家神）
ごちになってます×複数（ｂｙ雑多な神々）
下界のものと交わるのは久方ぶりだな（ｂｙ暗黒神）

わいわいがやがや・・・・・・・・・・・・もぐもぐ、ごきゅごき

ゆ・・・・・・・・

大人数で食べる食事も悪くない。
貴族である私が食べる食事ではないのだろうが、素朴な美味で悪くない。

暗黒神は子供達にまとわりつかれたり話をねだられたりしながら食事を楽しんでいる。

しかし、漂う酒精の香りは・・・・・・・・・・・・・・・

ぷはー！昼酒は良いねー（ｂｙ酒精神）
「良い呑みっぷりで・・・・・・　ささっ！もう一献！」
うむ、美味である。君に返杯だーよ（ｂｙ酒精神）
「酒精神様ありがとう御座います。」

まぁ、予想通りだな。昼酒って・・・・・・・・・・・・常に飲んでいるでしょうに酒精神様は！

酒は私の主食だよー（ｂｙ酒精神）

そりゃそうか・・・・・・・・・

王都各所と暗黒神（後書き）

更にこの光景を見た神職殿が頭を抱えて信仰の危機に立たされるのは笑い話。

では、酒が切れたので今宵はこれまで。

暗黒神と異世界人（前書き）

あらすじ、暗黒神は子供好き（性的な意味以外で）

お気に入りが６９件今夜はアイナメで一杯やるか。（アイナメとは魚偏に６９と書きます。）

暗黒神と異世界人

そう言えば先日孤児院で世界を作れるのは光明神と暗黒神くらいだと・・・・・・・・・・・

なんともはや、世界を作るのって難しいものだ。

こんな広大な大地にそれを囲む海洋、莫大な数の存在・・・・・・・・・・・全てを統括するとなれば難しいものなのだな。

新しく異世界を作って忌々しき異世界人とその一統と王兄殿下を送り込めば世界はもっと住みやすくなるはずだ・・・・・・・・・・・・

そう言えば王兄殿下は王弟殿下に封印されたはずだが？

「王兄殿下でしたら3日後に封印を自ら破って這い出してきたそうですけど。」

神よ我等を見捨て給うか・・・・・・・・・・

見捨ててないから（ｂｙ幼女守護神）

せめて孤児院の子供達だけはお守りください。

そう言えば暗黒神様はどのように世界を作るのだろう？
孤児院に言って聞いてみるとするか。

「暗黒神様、世界を作れると聞いたのですが、どのように作るのでしょうか？」
うーん、世界を作るというよりも我の中が世界といったほうが正しいのだが。（ｂｙ暗黒神）
「なるほど、暗黒神様がひとつの世界と・・・・・・・・・・出入りは暗黒神様に叩き込めば？」
そうだが、何を企んでおる王室顧問？（ｂｙ暗黒神）
「ただ何名か世界から追い出したいのがいまして・・・・・・・・・・・・・・・」
だからといって我の世界を使うのはやめぬか！（ｂｙ暗黒神）
断られてしまった。暗黒神が駄目ならば光明神様に・・・・・・・・・
断る！（ｂｙ光明神）
即答かよ！
当たり前だ！人として何か大事なものをかけてないか？（ｂｙ光明神）
ひどい言われようだ。
「ご主人様、流石に神々の中にアレを放り込むのが神の存在が壊れてしまいますわ。」
その通りだ娘、お前は良く判っている。（ｂｙ光明神）
お前らのところの聖女だろう何とかしろよ！

すまぬ、神とて力及ばぬことが・・・・・・・・・・・・（ｂｙ光明神）

でも、光明神の使徒として聖女は死後、光明神様の御許に向かうのでは？

ぐはっ！（ｂｙ光明神）

その時世界からは光が消えた・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

哀れ光明神、真実は時に誰かを傷つける。

光明神が呆然としている間に・・・・・・・・・・・・・・王妹殿下とか忌々しき異世界人を連れてきて・・・・・・・・・・・・・・・・

ぽいっ！

光明神に忌々しき異世界人と王妹殿下を放り込んだら・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ぐはっ！　何たる苦痛！世界（われ）が腐っていくようだ・・・・（ｂｙ光明神）

げほっ！

腐れ女達は吐き出された・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

どうせ後に同類受け入れるんだから今から受け入れても良いだろうに・・・・・・・・・・・・・・・

イヤダァァァァァ・・・・・・・・・・・・（ｂｙ光明神）

それは惨い（ｂｙ通りすがりの神）

王室顧問、世界を滅ぼす積もりかね？（ｂｙ暗黒神）

お説教を食らってしまいました。

うん、駄目でもともとだったけど・・・・・・・・・・・・・・・・

暗黒神と異世界人（後書き）

短いけどこれまで・・・・・・・・・・・・
つい、かっとなってやってしまった。

暗黒神と神職達（前書き）

あらすじ　世界は光を失った。

暗黒神と神職達

なぜか私は神職達から苦情を受けている・・・・・・・・・・・

「王室顧問様分かっているのですか？光明神様に何かあったら世界は終わりなんですよ！」

「世界を滅ぼすつもりですか！」「そもそも神々に対する敬意が足りない。」「貴族たちに対する優しさも・・・・・・・」「孤児娘達をください。」「俺は黒髪孤児でも可。」「お前そんな趣味だったんか！」

「脱線しない！いくら会計担当が不足して泣きを見ているからって、自分の好みで入れようとしない！」「・・・・・・・・・・・・・査察でいじめるなんて神をも恐れぬ所業だ！」

「入れるならば暗黒神様にしときなさい。」

色々問題発言が多いが、暗黒神様にしても世界の調律が狂うと思うのだが・・・・・・・・

「そんな事を言ったって、あと数十年もしたら聖女様がお隠れになるし、その時には光明神様の御許に・・・・・・・・・・・・」

「うわぁ！」「大変だ！」「世界の滅びが・・・・・・・・・」

神職達右往左往・・・・・・・・・・・・

まるで鼬を放り込まれた鳥小屋のようである。

しかし、なんだね・・・・・・・・世界滅亡の原因が忌々しき異世界人の持ち込んだ一冊の本だとは・・・・・・・・・・・

世の中不思議なものだね。

「王室顧問、何をのんびりしているのかね？」

「貴様だって滅びるんだぞ！」「孤児娘達を囲いやがってもげろ！むしろおれがもぐ！」

「神に対する敬意が足りないぞ！」「文芸神が異界めぐりに目覚めてしまったじゃないか！」

「お土産の菓子とか食べ物はうれしいけど・・・・・・・・・あれを再現するのに睡眠を忘れてしまったじゃないか！」

「何か滅びを回避する手段は・・・・・・・・・・・・」

「とりあえず、忌々しき異世界人には暗殺者を差し向けろ！」「暗殺者が精神崩壊していたじゃないか！」「勇者を召還したら？」「馬鹿野郎！腐属性の者が召還されたら目も当てられないぞ！」

「それ以前に世界中に腐属性が蔓延した今となっては遅すぎるだろう！」

「神よ、我らを見捨て給うか・・・・・・・・・・」

賑やかな事で・・・・・・・・・関係ない事をまぎれて言っているのもいるし、ドサクサに紛れて私の物がもげろとか・・・・・・・・・酷い事を言うな。

前には私避けの護符？とか売り込んでくれたそうじゃないか・・・・・・・・・

じっくりと話しないと駄目かな？

「腐女狩りをしよう！」「そうだそうだ！腐った女は神が嫌っているのだから！」

「片っ端から冥界の裁きにかけてしまうんだ！」

「血を血を血を・・・・・・・・・・・・」

「手始めに王室顧問からだ！」

「さぁ、神聖なる裁きの御手にゆだねるのです王室顧問！」

「大丈夫、孤児娘たちは私たちがおいしく・・・・・・・・・・」

私を狙うだの孤児娘達を美味しくいただくとか・・・・・・・・・・・・・・・

言いたい放題言ってくれるじゃないか！この駄目神職共が・・・・・・・・・・

ぷちっ！

にじり寄ってくる神職共を思わず神秘緋金属張扇（オリハリセン）でとつきまわしたとしても許されるよな。

「この、馬鹿共がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

飛び散る神職共！

どげしっ！　べちゃ！　ごきゅ！　ぐしゃ！　どすっ！　めきょ！

はぁはぁはぁはぁはぁはぁ・・・・・・・・・

いらん体力を使ってしまった。

いつもながら見事な突っ込みだねぇ・・・・・我が加護を与えた価値はあるよ。（ｂｙ演芸神）

神職共の自業自得だ。これだけですんで幸いと思うが良い。（ｂｙ風の神）

王室顧問のした事は惨たらしい事だがそれで世界崩壊の芽に気がついたんだ、対策も立てられず八つ当たりをするとは美しくない。（ｂｙ岩石神）

そもそも、冥界に送られても困るのだが・・・・・・・・・（ｂｙ

冥界神）

なぜ、傍観者として神々がいるのだろう？

暇だから（ｂｙ水神）

この世界が滅亡してもほかの世界に移るだけだしね。（ｂｙ漁労神）

掛け持ちだし、ひとつくらいなくてもねぇ・・・・・・・・（ｂｙ森林神）

「やはり神は世界を見捨てるのか・・・・・・・・・・・・・・・」

「くそっ！」

「くたばれ耳っこラバーが・・・・・・・・・・・ぐはっ！」

なんか、神々の性癖を暴露して天罰当てられた神職がいたが気にすることではないな。

異世界同人作家とか王妹は我が加護の元にいるのですから故なく損なうのは許しませんわよ。（ｂｙ文芸神）

彼女達の文学は我が琴線に触れる。（ｂｙ芸術神）

そういえば、忌々しき異世界陣連れ込んだのは文芸神だったなぁ・・・・・・

いらんことしやがって。

「王室顧問、神に対する敬意が・・・・・・・・・・・・」

「黙れ！世界滅亡の原因がこの腐れ女神だろうが！」

腐れって酷いですわね・・・・・・・・・・・・ただ、男同士の純愛を見たいだけじゃない。（ｂｙ恋愛神）

純愛って・・・・・・・・・・・・どう見ても爛れた肉欲の宴・・・・・・・・・・・・

王室顧問、我の苦痛がわかるか・・・・・・・・・（ｂｙ光明神）

そう言えば、闇の一族の中にも腐属性の者が・・・・・・・・・・・・我も泣きたい。（ｂｙ暗黒神）

神々よ、心中お察しします。

私も題材（ネタ）にされて孤児弟に襲われるなんて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

さらには宰相とか陛下とか・・・・・・・・・・・・

異性愛者なのに・・・・・・・・・・・・

互いに苦労するなぁ・・・・・・・・（ｂｙ暗黒神）

暗黒神様・・・・・・・・・・・・

「おおっ！暗黒神×王室顧問フラグキター！！」

黙れ！　どげっ！

なんか不快な発言が聞こえたので思わず、神秘緋金属張扇（オリハリセン）で女性神職をどついてしまったけど気にすることはないね。

うむ、以前に風の神と荒野神の絡みを書いた不信心者だから問題ない。（ｂｙ暗黒神）

「ううっ！女性に手を上げるなんて酷い・・・・・・・・・・」
「人を題材にえげつない事をする輩に手加減は不要。そもそも私は男女平等を是としているのだ。」
「王室顧問よくやった！」「我々でもやれないことを平然と行うとは・・・・・・・・・」
「あれでも文学神の加護持ちだったからなぁ・・・・・・」

文句を言ってくる女性神職、口々に私を褒め称える神職達。
そもそもお前ら私を害そうとしていただろう！後でじっくり落とし前をつけてもらうぞ！

「「「「「「うっ！」」」」」」

黙る、神職達を一瞥して・・・・・・・・・・・・
どうしたものかねぇ・・・・・

その日は遅くなったので神職達は解散する。
数十年後に光明神が精神衛生上悪い存在を取り込むだけだろうに・・・・・・・・・・

本気で嫌なんだが・・・・・・・・・・・（ｂｙ光明神）

ちなみに解決法は簡単だった。
暗黒神様の愚痴を聞いていた孤児のチビが
「ぴかぴかの神様が嫌ならば、ほしがる神様にあげればいいじゃん。」

ああ、なるほど　文芸神に押し付ければ・・・・・・・・（ｂｙ暗黒神）
子供よ、助かった！　我が元に来ないか？（ｂｙ光明神）
おい！我が眷属を取るな！（ｂｙ暗黒神）

「ぼく、黒い神様がいい。」
まぁ、良い。我が加護を与えよう。本当に我が元じゃなくて良いのか？（ｂｙ光明神）
だから取るな！主のところには沢山眷属がいるだっろうに！（ｂｙ暗黒神）

暗黒神と神職達（後書き）

とある神殿の説法風景

「貴方達は気をつけなければなりません。腐属性の本を読むと光にも闇にも受け入れられなくなるのです。そうしたら、安らかな眠りが訪れず、延々と物書きをする世界に落とされるのです。そこでは些細なことで言い争い、君の悪くなる本を延々と読み綴らされ、無意味な論争が続くのです・・・・・・・・・・・」

ごくっ！

「その場所は心まで腐りきった女ばかりで、男は誰も居らず。女性の喜びとは無縁の世界・・・・・・・・・・・恋愛も子供も得られず、腐臭漂う世界の中で常に紙と絵筆に向き合う生活を送るのです。これは裁きの煉獄ではありません。ただ、永遠の労役を繰り返す場所なのです。そこにはあらゆる世界から腐った魂のものが集うでしょう。友情はなく、愛情もなく、あるのは劣情だけ。それを満たされることがなく、延々と創作と論評と議論の日々が続くのです。しかもそれがとても無意味なことなのです。さぁ、気をつけなさい。誘いの手は甘美でありますけど、その先にあるのは茨の道を裸足で歩き、夜毎に芥子を塗るよりも辛い道なのです。」

何で異世界男色文学禁止の説法なんべ？

聴衆の半分が男なのに・・・・・・・・・・・・・・・

暗黒神と護符（前書き）

あらすじ　世界の滅亡は一人の孤児によって回避された。って、いうか神々好き嫌い多すぎ。気持ちは判るけど。

暗黒神と護符

そういえば神職共、以前に【王室顧問避け】の護符を売り出したといっていたなぁ・・・・・

インチキ護符だな。（ｂｙ暗黒神）

冗談で作ったにしては中々笑えるものだったな。効果はさて置き。（ｂｙ光明神）

聖女様騒動も一息ついて、私に手を出そうとした神職達を絞りにいきますか。

神殿前、ここの主神は某王国担当地域神。他にも色々な神の祠が集まっている聖域である。

最近は神々も孤児院だとか市場に屯している事が多いから神殿も神職共の執務場所くらいの意味しかないのだが。

酒飲めないしー（ｂｙ酒精神）

はいはい、酒精神様はお酒があればそこが聖地ですからね・・・・・・

神殿前にて声を上げる

「私、王室顧問が参る。私避けの護符を作った者と逢いたい。」

と、門衛に伝えると慌てて奥に駆け込む。

おいおい、門衛が持ち場はなれて如何するのだ？

「御主人様、流石に神殿を襲撃しようとする無謀な者はいないでし

ょう。」

「以前は結構いたぞ、勇者だろう魔王だろう・・・・・・・・其々の軍勢とか・・・・・・・・・・神殿同士でもうちの神様世界一と張り合ってやり合っていた歴史もあるし、信仰している神が同じなのに・・・・・・・・・」

あれは酷かった、森林神の信徒が神が至高と喜ぶのは猫耳なのか犬耳なのか争った馬鹿馬鹿しい騒ぎが・・・・・・・・（ｂｙ某王国担当神）

目玉焼きの焼き方で論争した厨房神の信徒達もあきれ返ったな。（ｂｙ水神）

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「神殿側の黒歴史だ。未だに燻っているぞ。ネコミミ派とイヌミミ派。厨房神のほうは何処かの地方都市で毎年目玉焼き祭りがあって、食べ比べているとかいないとか・・・・・・・・・・」

信徒達は愚かだな、獣耳だからこそ素晴らしいのであって種別で貴賓の差をつけることなんてやってはいけない。（ｂｙ森林神）

「聞きたくなかったですわ。」

耳をふさぐ孤児姉。

さもありなん、神々の性癖を聞かされたんだから・・・・・・・・・

誰も自重してくれない・・・・・・・・・　嗚呼、我はこの世界で一番無力な神だな・・・・・・・・・（ｂｙ節制神）

節制神、主が弱いのではなくて周りのアクが強すぎるだけだ！気にするな。（ｂｙ某王国担当地方神）

だったら、貴様の変人収集癖を何とかしろ！変人ばかりで、節制してないから世界の調整が大変だろう！お陰で休みがない・・・・・・・（ｂｙ節制神）

節制神様御労しや・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

だったら、己の後釜教育癖と隠遁癖をなんとかしてくれ。潰されたものの調整に苦労しているんだ。（ｂｙ節制神）

ああ、それは無理。これは私の本能だから。

「御主人様・・・・・・・・・・・・・・後釜を作らずに引退すればよいではないですか。護符も作られている事ですし、護符を嫌って国外に逃げたとか言って。」

「孤児姉！それは良い考えだ！何処に行ってみるかな？極東かな聖徒王国か・・・・・・・・・・西岸騎士団領、とか西部平原で綺麗な布を見るのも悪くなさそうだな。」

「うーん、見知らぬものを見てみたいですし・・・・・・・・・・・極光を見てみたいですわ。」

誰だ、護符を考えた馬鹿は！（ｂｙ極東神）

こないでこないで・・・・・・・・・・・民が逃げる！（ｂｙ聖徒王国担当地方神）

あらあら、極光が見たいなんて可愛いわね。（ｂｙ極光神）

孤児姉だけならば歓迎だが・・・・・・・・・・王室顧問まで来ると族長連中が泣きを見るからなぁ・・・・・・（ｂｙ極北神）

出来れば着て欲しくないが・・・・・・・・・・って、言うか王室顧問貴様はダメだ！国が乱れる！（ｂｙ西部平原地方担当神）

勘弁して下さい。　また騒動ですか・・・・・・・・　等々（ｂｙ地方神達）

神域としての神殿の許容量を超える神々の神気・・・・・・・・・・・・・・・
実体(力を抑えている)での降臨ではないがそれでも神殿が軋み上げるには十分か・・・・・・・・・・

もっと、節制した降臨をして欲しいのですが・・・・・・・・・・・・・・・・・
・本当に自重しない連中で困る。（ｂｙ節制神）

慌てて、飛び出てくる神職の一人。
「何しているんですか王室顧問！神々の声が次々に降臨しているし。」
「いやぁ、神職殿。いつぞや貴族達に売りつけた【王室顧問避けの護符】の効果で私がこの国に居られなくなったと言っただけなんだが？」
「あの冗談を真に受けているんですか？」
「冗談？実際幾つかの貴族家で見ていると孤児弟が言っていたぞ。彼らは本気にしていたし・・・・・・・・・・」
「うわぁぁぁ・・・・・・・・・神殿長！神殿長！」

神職はあわてて上を呼びに行った。
「なんじゃ！騒々しい！神々の声を止めるので忙しいのじゃ！」
「それが赫々云々で・・・・・・・・・・・・」
「なんじゃって！」

ひげもじゃの神殿長がひげを膨らませるかのように驚く！
「冗談で護符なんて作るからじゃ！って、言うかあれ売りに出したのか？」
「冗談で作ったと説明するように販売担当に言ったんですが・・・・・・・・・」

「馬鹿野郎！冗談でとか含みを持たせてもそういう建前の品物だと思われるだろうが！」
「そんで、当の王室顧問が・・・・・・・・・・・・」

「久方ぶりでありますねぇ・・・・・神殿長。中々面白いものを用意してくださったようで・・・・・・・・・」
「うわぁ！でたぁ！」
「誰だ、護符をつくろうなんて提案した馬鹿は！」「神殿に査察だ！」「神殿財産制限法を施行されるぞ！」
「その前に寄付金を切られるかも・・・・・・・・・」「この神殿も終わりだ！（主に財政的な意味合いで）」

右往左往する神職達。私何かした？
あまり五月蝿いと終わりにするぞ！（神学的な意味合いで）

「御主人様、以前に公開質問状とか出したから、その一件ではないでしょうか？」
「あれって、教義に対する純粋な質問だし・・・・・・・・・・・・運用と違うからといって、理由を聞いているだけなのに勝手に騒ぎ立てただけだろ。」
「嘘つけ！嫌がらせ代わりに騒動起こしやがって！」
「喰らえ！王室顧問避けの護符の力を知るが良い！」

神職が取り出した護符から神気が満ちて光を発する。
でも効かないなぁ・・・・・・・・・・

吾が気に入っている子供達の守護者だからな。この護符くらいならばいくらでも防いでやろう。（ｂｙ暗黒神）
まぁ、護符の力といっても光って目晦ましかごく弱い範囲での人払いなんだけどね・・・・・・・・・（ｂｙ戦神）

「ひぃぃぃ！」「逃げろ！」「去勢光線の餌食にされるぞ！」
「否、男色本朗読の精神攻撃が・・・・・・・・」「うわぁぁぁぁ・・・・・・・・」

ウサギ小屋に狐を放り込んだみたいな騒ぎだ・・・・・・・・・・
ダメだこいつ等、誰かつける薬を・・・・・・・・ないか！

ちょっと！匙を投げる前に話を止めないで！（ｂｙ療養神）

実は匙投げたかった？

少しだけ・・・・・・・・・（ｂｙ療養神）

節制してください！療養神の匙で神域の予算がかさんで・・・・・・・・大変なんですから！（ｂｙ節制神）

怯えた神職達が落ち着くまで待つとする。
ああ、茶が旨い。

うむ、良い茶だ。（ｂｙ暗黒神）
茶請けの焼き菓子も良くあう。（ｂｙ光明神）

あまりに五月蝿かったらしく、近所からの通報で近衛の一隊が神殿

を囲んで神職達を物理的に大人しくさせて言ったのはその後暫くしてからである。

結局、王室顧問避けの護符は回収されたらしい。

購入者の名簿は・・・・・・・・・・・手に入らなかった。　残念。

神殿長、あとで査察しましょうね。

「ひぃぃぃぃぃ！！」

暗黒神と護符（後書き）

どうしてこうなったんだろう？話が迷走している。
酒が切れたのでこれまで。

暗黒神と神殿長（前書き）

あらすじ？

節制神さまは苦労性。って、本筋に関係ない！あの中間管理職は何時も何時も何時もいつも私が匙を投げるたびに勿体無いといっているけど、神々には其々役割があって私は癒す事のほかに告げる事も役割なのよ。其処のところ勘違いしないで欲しい。（ｂｙ療養神）って、本筋の役割ならば良いけど馬鹿につける薬とかの突っ込みに匙を使うな！自腹でやれ！（ｂｙ節制神）

このけち会計！（ｂｙ療養神）

暗黒神と神殿長

あらすじが神々の言い争いだったが気にすることはない。
そう言えば補佐見習と傷跡娘は如何しているだろうな？

あの子達ならば温泉町の療養神殿で歓迎されているわ。傷跡娘の物語自体がある意味伝説になっているし、身売りしそうになった娘さんを説得して保護しているし・・・・・・・・・・
あの子欲しいわね、神殿業務の実務者としてもそうだけど、薬や癒しの神術だけで救えないものを救っているのは貴重だわ。（ｂｙ療養神）

おやおや、あの馬鹿はどこまで言っても馬鹿だな。つける薬はないのだろうか？

王室顧問、あの子につける薬はないけどあの子自体は世界までとは言わないけど誰かに対する癒しの薬なのよ。そんな貴重な存在を損なう薬なんて与えるわけいかないじゃない！（ｂｙ療養神）
確かに。我が庇護者のために本気で怒ってくれて、国や世界相手に喧嘩を売った愛すべき馬鹿者はそのままでいて欲しいわ。（ｂｙ性愛神）

いつの間にか神々のお気に入りになっているとは馬鹿も馬鹿なりに成長しているというわけか・・・・・・
嬉しくもあり寂しくもあるわけだが・・・・・・・・・

それはさておき、この神職達をどうしてくれようかな？
「命ばかりは・・・・・・・・・・」「俺たちは死ぬんだ！いびり殺されるんだ！」
「死ぬことはないと思うけど・・・・・・・・・・・故郷の父母・・・・・・・・・・私は人である事を止めるかもしれません。」

本当に人の事を如何思っているのか一度きっちり聞くとしますか・・・・・・
「おい！お前等！私の事を如何思っているのかきっちり報復覚悟で話すのと王妃の年齢を上げるのと選べ！」
「ひぃぃぃぃぃ！！」「どっちにしても苦しんで死ねと言っている！」
「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・・・・・・・（以下続く」

精神崩壊したようだな。其処の通りすがりの神職殿、こいつ等に精神安定神術を施してくれないかな？
「えっと、壊れたままのほうが彼等の為な気がしますけど・・・・・・」
「では君が自己犠牲してくれるのかな？」
「い、いえ、喜んで施術させていただきます！」

私の説得（？）に通りすがりの神職殿は快く施しをくれた。いい神職となるだろうな。
精神が回復したところで・・・・・・・・・・再び、じっくりと聞く・・・・・・・・・
壊れかけたところで通りすがりの神職を捕まえて・・・・・・・・・・・・・・・（以下何度か繰り返す）

「王室顧問よ、許してもらえぬか？」
「おや、神殿長。私は只聞いているだけですよ。あなた方神殿の勝手な理屈と金儲けに巻き込まれて命を落としかけたのですから理由くらい説明させて貰っても宜しいかと・・・・・・・・・・」
「金貨１００枚で手打ちにしないか？」
「私が金で動く人間に見えるとでも？」
「では破門にするぞ！」
「どうぞ、少なくとも神殿から見放されても神から見放されたわけでもありませんから。その時は私と全面対決となりますかね？」
「後で泣きを見ても遅いぞ！」

神殿長は自慢のひげを膨らませながら出て行った。

さて先手を打つか

まずは市場にて・・・・・・・・・・・・・・・
演芸神の加護のついた神秘緋金属張扇（オリハリセン）を片手に酒を飲む。
「いやぁ、酒精神様。神殿の馬鹿に破門するといわれましたよ。ははははっ！」
王室顧問も面白い事するねぇー、破門されてのんきに酒を飲む人間なんてほとんどいないよー（ｂｙ酒精神）
少し灸を据えた方が良いのでは？（ｂｙ暗黒神）
「よくよく考えたら、この国の神殿だけだから他国に行けば良いだけだしね。」
なるほどな、孤児達も全部引き連れていけよ。八つ当たりの対象にされたら目も当てられん。（ｂｙ暗黒神）

「おや？賢者様が神殿の不正に手をつけたら破門されたそうじゃ・・

・・・・・・」

「なんでも他国に落ち延びるそうで・・・・・・・・・・」「神職共が無理難題を吹っかけたのだろう・・・・・・・・・」

わいわいがやがや・・・・・・・・・・・・

王都の民のうわさは早い。娯楽が少ないからなぁ・・・・・・

そうして問い合わせが続々来る。

こうしてはおれん！（ｂｙ聖徒王国地域担当地方神）

当方にこられても困る。灯台の魔王が泣いて逃げる。（ｂｙ魔国地方担当地方神）

とりあえず神殿経由で問い合わせるか・・・・・・・・・・・・

そうして他国からの問い合わせと苦情が・・・・・・・・・・・・

「ああ、陛下。神殿と事を構えましたので他国に落ち延びます。今までお世話になりました。」

「ま、待て王室顧問！どうしてこうなった？」

「かくかくしかじかで・・・・・・・・・・・・ついでに我が子供達を全部引き上げますので・・・・・・」

「そんな事をしたら王室業務が・・・・・・・・」

「可愛い子供達に危害が及ぶ可能性があるのですから一緒に落ち延びさせませんと・・・・・・・・・・」

官僚、王室、宰相府からの問い合わせが・・・・・・・・・・・・

「王室顧問が破門だってよ！」「よしっ！これを機に神殿財産制限法施行だ！」

「神殿の査察も入れておこう！」「どれだけあらが出るかな？」

「無辜の臣民を守るのが王国の役割だしな（建前）」「神殿資産の差し押さえをすれば・・・・・・・・・・・・予算が楽になるな。」

「ついでに神職共の余罪を洗っておいて貰おう。」
官僚共は神殿の解体をもくろんでいるし・・・・・・・・・・・
仕事増えるぞ。

結果、大混乱。

問い合わせの数に外部の擁護者が逃げているし・・・・・・・・・・
・他国からも苦情が・・・・・・・・・
苦肉の策か私に対して神殿長が
「今から謝れば破門は撤回するぞ！」
等と脅しをかける。

私は答える。
「神殿から破門されても、気にもしません。もし神々が見捨てるのならばこの神秘緋金属張扇（オリハリセン）が元の形に戻るはずです！そうなれば神殿は神の言葉を蔑ろにしているという事になりますねぇ・・・・・・・・・・・」
私は神秘緋金属張扇（オリハリセン）を掲げる。相も変わらず演芸神の加護つきた！
「どうしたのです？神殿長？私は神がついてますよ。まさか演芸神を邪神とか言わないですよねぇ・・・・・？」
「うぐぐっ・・・・・・・・・」

さてと、王都を出ますかね。
子供達行くよ。
「「「はーい！」」」
「御主人様どこに向かいましょうか？」

「そうだねぇ、温泉町で補佐見習達を回収するか？」
「わかりました。」
「だんな！おいらを置いていくなんてないよね。」
「孤児弟、お前は自分の仕事があるだろう！」
「大丈夫、丸投げしてきたから。小額だけど配当がつくし丁度良いかな。」
「まぁ、いい。孤児院に行ってチビ共を回収するぞ。」
「そうだね、護衛とかいらないの？」
「それは実家の私兵団がいるし。」「そっか・・・・・・・・・・・・・・・」
「官僚達も誘わない？」「馬鹿言え、酒代ばかりが嵩むわ！」
「あははははっ！」

「王室顧問、どこに行く？」
「あれぇ？神殿長殿、私を破門するのでしょう。破門されたら日常生活できないから出来るところまで逃げるだけですよ。私はか弱い一臣民ですから。子供達も報復や偏見の目にさらすのは可愛そうですからねぇ・・・・連れて行くだけですけど・・・・・・・・・・・・・・・」
「そんな事をして問題ないと思っているのか？」
「そうですねぇ・・・・・私の名誉の保護を名目に他国からチョッカイガ出されると思いますけど、神々に愛されている神殿であれば問題ないですよねぇ・・・・・行きますから邪魔しないでください。」

私達一行は孤児院へと向かい王都を出る準備をするのであった。

えげつないなぁ・・・・・・（ｂｙ演芸神）

暗黒神と神殿長（後書き）

あれ？方向性が・・・・・・・・・

暗黒神と王妃様（前書き）

「陛下、王室顧問がまたやらかしました。」
「・・・・・・・・・・・今度は何だ？」
「しんでんがうりだした【王室顧問避け護符】の件でぶちきれた王室顧問に神殿側が破門勧告したそうで・・・・・・・・・・・」
「陛下・・・・・・・・・・・各国の神殿から王室顧問の破門に関して質問状が・・・・・・・・・・神々が怯えているそうで・・・・・・・・」

「そりゃ、そうだろう・・・・・・・・・・・神学というか神殿法を利用して神々に質問状を送るとか神官連中を脅しつければなぁ・・・・・・」

「陛下、仲裁したほうが・・・・・・・・・・・このままごたごたしていると王室顧問と孤児娘達を使えないので政府業務に支障が・・・・・・・・」
「宰相よ、宗教勢力と争うのを避けたいとかないのか？」
「避けられるのならば避けたいですが、神々が自ら誅するわけではないので問題ないかと・・・・・・・・」

「陛下！妃殿下が年齢ネタを繰り返す王室顧問と神殿にぶちきれて近衛の一隊を率いて向かってますが・・・・・・・・・・」

「それは自業自得。」
「では、其処に転がっている作者を如何しましょう？」
「・・・・・・・・・・・・・・・」

「厳重に封印しておきなさい。」
「はっ！」

作者は封印されて話が止まるのである。

作者が封印されて話が止まったなんて嘘だ！
せいぜい酔っ払って眠りこけていたのが関の山だろう。

そんなことはさて置き、王都神殿にて神殿長がうなだれてすがり付いてくる・・・・・・・・
「王室顧問、本当に破門にしてしまうぞ。」
「だから構わないと言っているじゃないですか。人を勝手に商売にして逆切れする馬鹿と関わりたくないし。」
「わし等にも不備な点があったのは認めるから・・・・・・・・・・・・」
「だったら、普通に謝罪しておけばよいでしょう。」
「って、言うか。神職達を精神崩壊に追い込んで言う科白か？」
「説明を求めただけですが・・・・・・・・・・・」
「どこが！王妃様の年齢ネタなんて精神的虐待も良いところだろう！」
「別に不敬罪で鞭打ちにされるだけでしょう。そのくらいならば・・・・・・不敬罪というならば、王弟殿下の頭頂部（はげ）とか陛下の下着のセンスとか・・・・・・・・・・」

「うわぁうわぁわうぁわうあぁぁぁぁぁ！！！」

行き成り喚く神職共！ギャーギャー五月蝿いなぁ・・・・
「王室顧問！流石に洒落にならないですから！私達まで不敬罪に巻き込むつもりですか？」
「まさか、この程度ならば官僚達が日常的に・・・・・・・・・・・もっとやばい話だと・・・・・某侯爵家の前当主殿が不能で奥方が色々と交わって・・・・・・・・現当主はどこの馬の骨とも知れない・・・・・・・・・・・」

「待て待て待て待て・・・・・・・・・・・・その情報は拙すぎるだろう！」

「神に仕える皆様でしたら私のもつ秘密の重みをわかって背負ってくださいますよね・・・・・・・・・・・・」

「って、破門される腹いせに機密を知らせるな！こっちの身まで持たないだろう！」

「腹いせだったら、この神殿が借りた金の借用書を・・・・・・・・・・・・」

「ちょ、何をしているんだ！」

「いやぁ、行き成り私を破門しておけば無条件に謝ると思っているでしょうし、謝ったら多分これも反故にされるでしょう。それならば買ってくれる所に安くても売っておいて身動き取れるように・・・・・・・・・金貨３００枚程度だし利子がついても５００枚位か・・・・・・・・・・聖徒王国あたりに売ったら楽しいだろうね。」

「まて、それを盾に無体されてしまうじゃないか。」

「私は破門された身でありますし従う言われもないですからねぇ・・・・・・そもそも我が国は信教の自由は認められていますからねぇ・・・・・・そして、私は性愛神殿の忠実なる常連客僕、王都神殿に所属しているわけでもないからあまり意味がないんですよねぇ・・・・・・」

「回状というものもあるが・・・・・・・・・・」

「各神殿は基本独立した存在だし突っぱねる事もあるだろ。まぁ、神殿の敵となったからには敵らしく酷い事でも使用かな・・・・・・・・・」

ひげもじゃの神殿長がひげを膨らませながら

「この人でなしが！」

「ちょっと待ってください神殿長！人でなしという表現を使うと我等が王室顧問と同類みたいじゃないですか！」

「種族差別表現だ！」「訂正を！」

「我が種族の名誉に賭けて・・・・・・・・・・・・同類扱いは断固講義する！」
雑多な種族の者達が神殿長に詰め寄る！

「す、済まぬ・・・・・・・・・」
「この場合悪魔とか！」「魔神族（デーモン）である吾が講義する！」
「鬼は？」「我が種族は其処までひどくない！」「確かに」
「けだもの・・・・・・・・・・・・というのは獣人族系が怒るよなぁ・・・・・・・・・・・」
「夜はけだものだという話を聞いた事あるが・・・・・・・・・・椎の実の分際で。」
「果たして王室顧問を詰るにはどのような表現が・・・・・・・・・よいのだろう？」
「「「うーむ。」」」

おい！お前等・・・・・・・・・・
「人として間違っているとかは？」「それだ！」
「あとは、酔っ払いとか」「悪徳法曹家」「王国の取り扱い注意の危険物」
「椎の実」「露出卿」「少女の敵とか・・・・・・・・・」「でも、孤児娘達に手を出していないみたいだぞ。」「不能？」
「それはないだろう、先週性愛神殿の女神官から聞いた話だと・・・・・・・・・」
「そ、そんなことまで・・・・・・絶倫だったんか！」「そのせいで帰りがけ腰が引けていたそうだが・・・・・・・」

性愛神殿の信徒辞めようかな・・・・・・・・・・・・

それはやめてー　お布施が減る（ｂｙ性愛神）

って、言うかお前等好き勝手言っているじゃないか！私のことをそう思っていたんだ。
ふむふむ・・・・・・・・・・
あーでもないこーでもない。
私は神秘緋金属張扇（オリハリセン）を振りかぶると
「おまえら好き勝手いっているんじゃねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」
ばちこーん☆
私が振りぬいた張扇は赤銀の残像を持って神職共にぶちかまし空高く飛ばしていく。
きらっ☆
ただいまの突っ込み、神職5名異世界まで飛びました。（ｂｙ演芸神）
世界の境目の修復が間に合わないから勘弁してほしいものだが（ｂｙ境界神）
神の威を借る神職共を成敗した。
後は神殿長か・・・・・・・・・・
銀扇を担いで近づく私に怯える神殿長。ひげが縮こまっている。
ふっふっふっ・・・・・・覚悟するが良い。
手段を選ばない私に怯えの色を隠せない神殿長。

神殿長は飛ばしたら拙いから、振り下ろしでぶちのめすか。

私が銀扇を振りかぶった瞬間、私に襲い掛かる衝撃がある。
吹き飛ばされる私、神殿の壁にぶち当たって息が強制的に吐き出される。

げふっ！

衝撃の元を見ると地面にうずくまっている神殿長と神秘緋金属張扇（オリハリセン）を手に神殿長をしばき倒している王妃の姿があった。

「ああっ！黙っていれば人の年齢をネタに拷問だとか何様のつもり？」
「ひぃー！イタイイタイ！お許しくださいませ妃殿下！」
げしげし！どかどか！

いつの間にか護衛官と近衛の一隊が周囲を囲んでいる。

えっと、護衛官。何故王妃が？
「そりゃ、王室顧問。貴殿が王妃の年齢ネタで拷問なんて行うから・・・・・・・・・・・・」
「でも、王都では一般的な尋問法だが・・・・・・・・・・・・・・・」
「そうだが、お前の場合露骨過ぎた。そして反応する神職たちも酷すぎた・・・・・・・・・・・・それが王妃の怒りを買ったんだな。」
「納得。王妃の年齢の数だけの乾杯とやったお前が言うから説得力が・・・・・・・・・・」

のんきに会話をしている私と護衛官。ふと気がつくと銀扇を振りか

ぶった王妃が・・・・・・・・・・・・

「あんたら！妙齢の女性に対する扱いを改めなさい！！」

どかばきぼこぼこ・・・・・・・・・・・・

ぼろぼろ～～

私と護衛官はぼろきれとなったのである。

ところで妙齢？

「ああっ！」

睨みを利かせる王妃に勝てず節を曲げた私を許してくれ。

「は、はい。王妃様は永遠の１８歳です。」

「何時見ても若々しくお美しい。陛下が羨ましい限りで・・・・・・・・・」

護衛官、お前も大変だなぁ・・・・・・・

その後正座で神殿側も私も説教を受ける羽目となったのである。

「何で某まで・・・・・・・・・・・・・・・・」

護衛官、お前も王妃に対する不敬表現が多いぞ。

「あらあら、私は怒っているわけでは御座いませんのよ。女性の年齢をネタにからかうとかじっくり女性の扱いについて教育を行いませんとね。」

「とんだとばっちりだ。」

すまん護衛官、牢から出たばっかりなのに・・・・・・・・・・・・

って、言うか騒動を治めるんじゃなくて己の私憤かい！

「ああっ！この腐れ椎の実の分際で年齢で女性を差別するなんてそんなことが許されるってか？」

王妃様、柄が悪いです。

暗黒神と王妃様（後書き）

神職達は飛ばされたい世界で王室顧問のことを悪魔だと異世界の住民達に言いまくっているのが目に浮かぶ。
その異世界では王室顧問が子供を脅す怖い化け物となっているそうな。

これは本筋とは関係のない話。

では、今宵は酒が切れたのでこれまで。

暗黒神と神殿始末（前書き）

あらすじ　神殿長と王室顧問はまとめて粛清。女性の年齢ネタをするなんてなんて恐ろしい事を・・・・・・・・・・

暗黒神と神殿始末

その後の混乱振りが大変であった。
銀扇を振り回して肉塊を量産している王妃に止めることができない近衛隊、逃げ惑う神職共。
王妃の年齢自体は機密でもないけどそれを知って思った感想だけで粛清されるというのはどうかと思うのだが・・・・・・・

下手な言い訳をした私は吹き飛ばされ、壁のシミとなりながら思うのであった。

陛下と宰相がおっとり刀をぶら下げて駆けつけたときには嘗て荘厳な建築を誇っていた神殿が神職達の汚いシミでまだらになっていたのだった。

「王室顧問、お前もシミの一つなんだが。」
宰相閣下ごもっともです。

「王妃、少し落ち着け・・・・・・・・・・・・誰も年のことなんて気にしていないか・・・・・・・・・・・・げふっ！」

ごげしっ！

陛下も不用意に近づいて下手な発言するから・・・・・・・・・・・・
ああ、壁に人型の穴を・・・・・・・・・・・・これって、ある意味器用だよなぁ・・・・・王冠の形まで細かく作ってる。

今の状態で復活するのは簡単だが、また壁のシミにされるのは勘弁願いたいので暫く壁のシミに擬態しているとしよう。

一刻後、何とか落ち着いた王妃を連れて陛下と宰相は王城に帰る。

因みに、神職達は平均3回壁のシミになって、神殿長は4回、陛下は2回壁のシミとなっていた。

私は最初の一撃だけでやり過ごした。近衛隊は平均4回どつかれていた。

「王室顧問、何時まで壁のシミに擬態していれば良いのだ？」

「そろそろ良かろう。」

私は護衛官と二人王妃という名の暴虐の嵐が過ぎるのをやり過ごしたのだった。

我等二人が無事やり過ごせたのは日頃の行いがよかったからであろう。

護衛官は知らないが私に関しては絶対そうである。

「王室顧問、我輩だって善良な一貴族だぞ。少なくとも後ろ指刺されるようなことをした覚えはない。」

「はいはい、最近不敬罪（ぶれいうち）で処刑していないからな。」

「そこか！」

「だって、市場で酔っ払いに絡まれた娘さんを助けようとして露店を一つ全壊させたとか、酔っ払いに対して鼻を潰したとか・・・・・・・・向こうに非があるとは言え市民に対する事ではないだろう。」

「・・・・・・・・・・あの時は牢から出てつい開放感と鬱憤が・・・・・・・・・」

「気持ちは判るが、程ほどにしておけよ。あの露店の親父が泣いていたぞ。」

「うむ・・・・・・・その後で勝気な餓鬼がいただろうお前の養い子の・・・・・・・あれの母親に怒られたよ。」
「ふむ、小売婦人も中々やるな、王妃付護衛官(王家専属処刑人)を叱り飛ばすとは・・・・・・・・・」

そんな馬鹿な話を二人でしていると・・・・・・・・・

「我等神に仕えるものを何だと思っているのだ!」
「どうしてわれらまでとばっちりが来るのだ?悪いのは口と性格と根性が捻じ曲がった王室顧問ではないか!」
「この壁のシミをどう修繕すればよいのだ?」「って、いうか陛下の形をした壁の穴をふさぐのが先決だぞ!」
「飛ばされたやつらはまだ戻ってこないのか?」
「あの糞婆が!」
「若作りの分際で・・・・・・・・・」「王家のものは神殿に対する礼儀を知らない!」
「歳位でがたがた言うな、だから言われるのだろうが(何者かの手により発言を消されました。)」

ああ、これはヤバイ。
「退却するぞ王室顧問。」
「それは同意だが、護衛官お前軍人だろ?退却とか良いのか?」
「ふむ、普通退却とかはまずいのだが生き残れる自信あるか?」
「ない。」
「それにこんなくだらないところで我輩も死にたくない。」

成程納得。あたりの空も黒いものが混じってきた。
って、いうか王妃の地獄耳といいこの気配といい人族なんだろうか?
下手な魔族・・・・・・・・・魔王だって纏ってなかったぞこ

の気配。

当代の魔王は魔力ではなくて行政能力を買われて王位についている
からなぁ・・・・・・（ｂｙ魔王領地方担当地方神）

「聞こえましたわよ。」
口々に文句を言っていた神職達の背後から銀扇を構えた王妃がどす
黒い気配を背後から漂わせて存在していたのだった。

哀れ神職。そんな彼等に言葉を送ろう。
【口は災いの元】

「この様子を見ていたら、私から神職達を責めるのは哀れになって
きた。私としては護符をこれ以上売られることが無ければよしとす
るか。名簿は欲しかったが・・・」
「そうだな、神職共（ばか）は放置して久方ぶりに呑むか？」
「悪くないな。でも、今夜は乾杯はしないぞ。」
「当たり前だ！また牢屋に逆送だぞ。」

あはははははっ！

我等二人は町に消えて酒を求めるのだった・・・・・・・・・・・

「何を其処で綺麗にまとめて逃げようとしているのかね？王室顧問。
」
「いやぁ、私は神殿に苦情を申し立てに行っただけですよ。そした
ら破門だの脅されて被害にあった身なんですけど・・・・・・宰
相閣下、重ねて言いますけど私は被害者ですよ。」

「その辺は理解するがどうして王妃様の年齢が出てくるのかね？」
「・・・・・・・・・・・・えっと、慣用表現で。」
「慣用表現で王妃の年齢ネタを出して脅すなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

顎の真芯を捉えた宰相の拳は私の体を吹き飛ばすのであった。

ごげしっ！

「王室顧問は忙しそうだから、我輩は帰るとするか・・・・・・・」

がしっ！

「職務放棄は許されぬぞ。護衛官。」
「近衛隊小隊長！」
「何、壁のシミに擬態してやり過ごしているのかね？我等が苦労して王妃様をなだめているときに・・・・・・・・・」
「あははははっ！我輩が行ったら逆に逆上して大変だろうなと思いまして・・・・・・・」
「そうか、そうか、話は後で詰め所でじっくりと聞こうではないか！飲み物代はお前もちでな！この護衛官を連行しろ！逃がすではないぞ！」
「了解いたしました！ほらっ！行くぞ、護衛官様仕事をサボるとは不届きな！」
「小隊長、一名を街に派遣して物資の調達に向かいたいと思います。」
「否！この護衛官を持っていって、市民達に無用の負担をかからないように物資の調達をするが良い！」
「はっ！小隊長のご配慮、感服いたしました。」
「では、私は一足先に王城に向かおう。君たちは調達に行くがよい・

・・・・・・・・・・・・・」

こうして関係者は皆捕まるのだった。

私は無実だ！

暗黒神と神殿始末（後書き）

眠い

暗黒神と宰相府（前書き）

王城傍の貴人牢、其処では拷問吏が日夜頑張っている。
もっとも、頑張る事がないのが正しいのだが王国の不備が彼の仕事を用意しているのだった。

むきむきマッチョでぴっちりした皮の服、そして黒い三角の覆面。
これは彼の趣味ではなくて拷問吏とはこうあるべきだという数代前の国王が異世界文学を読んであつらえた由緒正しい装束なのだが、拷問吏本人としては白衣に眼鏡が好みなのだが・・・・・・・・・・

それはさて置き、今日も今日とて拷問三昧なのである。
拷問吏にとって被疑者の死亡とかは自らの失態となるのだから肉体的な拷問は控えておきたいものである。ついで言えば綺麗好きな彼が血やら何やらで汚れている部屋を掃除するのは嫌だからというのもあるのだが・・・・・・・・・

「さぁ、神職様貴方様はどんな声で啼いてくれるのかねぇ・・・・・・」

七支鞭をびしりと床に打ち付けて、静かに問いかける。
拷問吏の役割は痛めつける事ではなくて証言を引き出す事にあるのだから別に暴言とか吐く必要はない。寧ろ怯えさせて支離滅裂にするのは百害あって一理無しである。様式美とか言っていた数代前の国王は焼き鏝とか水車とか色々用意していたのだが・・・・・・・・・・・・・・

「さて、神職様の罪を数えてみようか?どれだけあるのかな?王妃様の年の数ほどかな?」

「さ、流石に其処までないと思いますが・・・・・・・・せいぜい、王室顧問避け護符で【侮辱罪】と【詐欺罪】位で・・・・・・・・・・」

「いやいや、他にもあるだろう。詐欺行為とは言え王室顧問様の職務を邪魔して悪事を隠蔽するとか、十分に汚職とか横領の幇助犯とか従犯だであるねぇ・・・・・・」

あくまで紳士的な拷問吏である。

恐れを抱かせても怯えさせもせず。うそを見抜いてじわじわと辛め取る。

「さぁ、何で王室顧問を怒らせるようなことをしたわけだね?」

「えっと、冗談で作ったら名前を明かせませんが某子爵様が王室顧問除けなんてなんて良いものだ!等と持ってかれて・・・・・・・・・・そのまま、その話を聞いた方々が次々と・・・・・・・・冗談だといっても聞かないし、暫く寄り付いていないから効果があるんだと・・・・・・・・・勘違いするし・・・・・・・・・・この護符の効果はせいぜい、目晦ましと人避け位の力しかないのに・・・・・・・・・」

「ふむ、それで本人の了承も得ないでやったから、逆上した王室顧問に怒鳴りこまれたと・・・・・・・・・」

「はい。ついかっとなってやってしまいました。でも、今は反省しています。なんて危険人物に手を出してしまったのかと・・・・・・・・・」

「そうして怒鳴り込まれて説明をしろとじっくりと嫌味を言われて・・・・・・・・・さらには説明するか王妃様の年齢を言ってみろと・・・・・・・・・・あんな恐ろしいことは・・・・・・」

「別に王妃様の年齢くらい問題なかろう、せいぜい女性の年をなんて注意されて平手の一つを食らわされるくらいだろ?」

「いえいえ、拷問吏殿!そんな優しく可愛らしいものじゃないんですよ!とある貴族なんか王妃様の年齢より多くの花を用意して生誕

祝いです年に合わせましたと言ったら・・・・・・・・・・なんで、気配だけで人が白髪になって精神崩壊するんだ!近づくたんびに脂汗たらたらでたどり着くまでに脱水症状になったりとか・・・・・・・どす黒い気配だけで、建物にひびが入るなんて・・・・・・・・・・いやだぁぁぁぁぁ!!私はまだしにたくないいいいい!!」

錯乱した神職をどうどうと落ち着かせると

「別に（検閲削除）才というくらい問題なかろう?確かに俺の曾婆様（存命）よりも年上だけどよ。長寿系の血筋ならばよくあるとは言わないがありうることだろう?あの年でその若さを保っているのは不思議だが・・・・・・・・・・」

「いやいや、それ国家機密だから!」

「機密じゃないしほら一緒に言ってごらん（検閲削除）!」

「いやだぁぁぁぁ・・・・（検閲削除）なんて（王妃自らによる検閲削除）なんていったらころされるんだぁぁぁっぁぁ!」

言っているし・・・・・・・・・・殺されるとか言うから余計に怒りを買うのだと思うのだが・・・・・・・・・拷問吏派錯乱した神職を放置して茶をすする。

元は熱湯を口から注ぎ込むためにあつらえたのだが、彼の手にかかれば日常道具となっている。

「うーん、茶が旨い・・・・茶菓子も欲しいが贅沢かな?」

拷問吏は思う、王妃様の年が（三桁）だからって別に気にする事ではないと思うのだが・・・・・・・・・こう、婆と呼ぶのは問題だし年齢ネタでやらかすのは官僚達だけで十分だ。今でも若々しく美しいのに何で気にするのだろうかね?

「きっと、あの若々しい顔を作るために娘の生き血風呂に使って、化粧品を厚塗りしているんだぁぁぁっぁぁ!」

まだほざいているよ。そういうことを言うから・・・・・・・・・
「ほら、おちつけ！茶でも飲んで・・・・・・・・・」
「か、かたじけない。」

茶を貰って一息ついて落ち着いたのか神職は黙った。
「まぁ、王妃様の年齢を言わなくて良いから。神殿で売り出した護符の購入者の名簿を出してもらおうか？口頭で思い出すだけでも良いぞ。」
「そ、それは・・・・・・・・・さすがに・・・・・・・・・言えないです。口にしたら貴族達から粛清されます。」
「大丈夫だ。先ほど王妃の年齢を大声で言ったから大丈夫だ！吐いて楽になったほうが良いぞ。」
「えっ！えっ！王妃の年齢を大声で？」
「さらには厚塗りだの生き血風呂だの色々言っていたからなぁ・・・・・あの年だと美貌を保つのも大変なのは理解できるがそれを大声で言うものではない。」
「うわぁぁぁぁ！私は死ぬんだ！ころさっれるんだ！神殿が血の海になるんだ！」
「それは大丈夫だと思うのだが、せいぜい壁のシミが幾つか増える程度で・・・・・・・」
「いやだぁぁぁぁ！しにたくないぃぃぃぃ！！」

かつかつかつかつ・・・・・・・・・・・・・・

おや？誰か来る。
歩幅は小さく規則的な音だな・・・・・・・・・・・・・・

そして空気が重苦しくなってきた。

かつかつかつかつ・・・・・・・・・・・・・・・

悲鳴を背後に足音だけが響いている・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

暗黒神と宰相府

おや？貴人牢の方から悲鳴が・・・・・・・・・・・
拷問吏殿ががんばっているのだな。

「あそこは防音がしっかりしているはずなのだが？」
「牢の方向に黒い気配が・・・・・・・・」
「捕らえた神職達の悲鳴ではなくて拷問吏殿の悲鳴が・・・・・・・・・・・」

ひぃぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーー！！

あそこで王妃ネタでもしたのだろう。それを聞きつけた王妃が・・・・・・・・・・・
哀れな・・・・・・・・

「王室顧問、貴様はどうして王妃ネタを使うのかね？」
「勿論王妃様を冗句のネタにするくらい敬愛しているからですよ。閣下。」

「本当に、捕らえた神職達が精神衰弱が酷くて使い物にならないぞ。」
「って、言うか王妃の年齢くらいで精神崩壊するなんて鍛錬が足りない証拠ですよ。」
「お前達官僚の基準で考えるな！兎も角王妃年齢ネタは禁止だ！」
「わかりました。」
「で、お前に下される処分だが・・・・・・・・」

「私は被害者ですよ！」
「神殿を滅茶苦茶にして言う科白ではないだろう！罰金金貨５枚だ！因みにこれは近衛の出動費用は別に金貨３枚請求される。」
「何で近衛の出動費用がそんなに掛かるのですか？小隊規模だから金貨一枚も掛からないでしょうに！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・その後、仕事の後の酒がまいと街に繰り出してな・・・・・・・・酒場で飲み食いしまくって代金が足りなくなって王城に請求書が・・・・・・・・」
「それは近衛に払わせれば良いでしょうが！って、金貨３枚なんてドンだけ飲み食いしたんだ！」
「・・・・・・・・・・近衛が王妃様の年ほど祝福を与えると道行くものに一杯づつ奢ったらしく・・・・・・・・・・・」
「そりゃ納得。って、近衛が王妃ネタをして如何するのですか！！」

みしっ　みしっ！

遠く建物が軋む音を耳で捕らえながら。

「まぁ、その近衛小隊は護衛官ごと・・・・・・・・・・・・・・・城についた途端・・・・・・・・・・・・」
「なんか言わなくてもわかるオチなんですが・・・・・・・・・・・・王妃の銀扇の餌食になったんですか？」
「近衛宿舎にて謹慎処分を受けている。あと、減給処分だ。」
「まともな処分で・・・・・・・・・・」
「正確には奢った後に返杯と称して呑み続けたから二日酔いと下痢で使い物にならないというのが・・・・・・・・・・・真相だ。兎も角罰金と出動費用は王命で判決が下ったんだ！速やかに払えよ！」
「はいはい、金貨が８枚ね。」

ちゃりちゃり・・・・・・・・・・

「王室顧問、何故そんなに持っているのかね？」
「いやぁ、亡命するつもりでしたから旅費をちょいとね。」
「亡命って、国家機密の詰まった自身の身を持ってか？」
「勿論ですとも、ついでに言えば私の育てた孤児達も連れてね。どこの国でも諸手を挙げて歓迎してくれますよ。」
「どっちかというと王室顧問だけ送り返されて孤児たちが大歓迎というのが考えられる事だと思うのですかねぇ・・・・」
「そう思うか宰相付事務官よ。」
「いえてる。」「って、言うかこっちにも孤児達を寄越せ！」「書類仕事がたまって仕方ないんだ！」
「亡命すると聞いた他国が怯えてこっちにとばっちりが来ているんだ！」「酒おごれ！」
「タタミイワシモっていくな！」「孤児姉を嫁にください！」
「仕事の手伝いしろ！」「さっさと宰相になって俺たちを楽させろ！」

今まで黙っていた宰相府の面々が口々に孤児寄越せといってくる。
おまえら、孤児達は官僚候補ではないんだぞ。
しかもろくでもないことを言っているし・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「お前等、孤児とか当てにしないで仕事しろ！」

本当に孤児と書いて文官とか会計とルビを振るんじゃないだろうな？
まだ遊びたい盛りの子供達だぞ。国の勝手な都合で使おうとするんじゃない！

その割には教育内容が官僚育成・・・・・・・・・・（ｂｙ光明神）
我が国にも欲しいところだが、王室顧問抜きで（ｂｙ西部諸地域担

当地方神）
講師が貴族と商人ばかりだから仕方ないといえば仕方ないが・・・・・（ｂｙ某王国地方担当地方神）
お前等には我が可愛い信徒達をやるわけにはいかない！（ｂｙ暗黒神）

「国の都合という割には貴様の教育は下手な文官や会計担当を超えるものだがな。だからさっさと育成したのをこっちに寄越せ！」
「宰相閣下、即戦力になる年齢の者は商会公や農園公の売約済だったりするのですが・・・・・・・・・流石に１０くらいの子供をこき使おうなんて恥ずかしい事しませんよねぇ・・・・・」
「１０でも使えるならば構わん！」

宰相閣下は胃薬（水薬）を飲み干しながら本気で答える。
貴族の子息ならば兎も角、孤児達は自分の進みたい道を進ませてやりたいから無視するけどね。

って、言うか貴族の子息達や学園は如何した？
「貴族の子息たちはやわだからねぇ・・・・」「たった、３日ほど徹夜させたら潰れた。」
「計算すらまともに出来ないし・・・・・・・・・」「計算間違い見ていると実家とかの利益になるようにしているのが小賢しい。」
「見つけ次第仕事追加していったら・・・・・・・・・逃げられた。」
「そういうことで、王室顧問。孤児たちのおかわり宜しく！」
「こっちは孤児たち特盛でよろしく！」

「「「ちょっと、まったぁぁーーー！」」」
隣室（官僚部屋）で作業していた官僚たちが乱入してくる！
「宰相府で孤児達を持ってかれたら、こっちの仕事する人材が居な

いだろうが！！」
「お前等が仕事増やしすぎなんだ！」
「王妃の面倒事をこっちに回すな！」「書類にタタミイワシのかけらを散らばせるな！」
「酒の染み付けた書類は突っ返すぞ！」

喧喧轟々・・・・・・・・・・
なんか馬鹿なやり取りを見ていると疲れてきた・・・・・・・・・・
「閣下、流石に子供の教育上悪いので寄越したくないのですが・・・・・・・・」
「うーむ。」
「その話は後ほどにしてわたしは帰りますね。」
「わかった、明日からは孤児娘達も連れて来い！」
突っ込みも入れたくないやり取りを背に私は孤児院へと向かう。

孤児や女衆達を引き連れて皆で市場で食べまくるのも悪くないな。

みしっ！　みしっ！　みしっ！

王城が軋んでいるけど大丈夫なんだろうか？

ひぃぎゃーあーあーあーあーあーあーあーあーーーーーーー！

暗黒神と宰相府（後書き）

某王国地方神王都神殿始末より

神殿長、罰金１０枚
関わった神職については神殿内部での地位降格及び地方神殿の下級神職として配置。

王室顧問避け護符の販売禁止及び購入者名簿の提出を命ずる。

「ううっ！神殿の清掃費用が・・・・・・・」
「会計、泣くな！って、この穴の修繕費用は如何するよ？」
「そのまま漆喰を塗りこんでおいとくか？」
「それが一番費用が掛からないしな・・・・・」

王都神殿名物【王の穴】が誕生する一幕であった。
「おい！我の後をそんなふうに扱うな！」
「ああ、陛下あの衝撃で無事なのですか？」
「そりゃ、神秘緋金属張扇（オリハリセン）の効果で怪我はせぬしの。」

孤児院と王室顧問（前書き）

あらすじ　神殿は王妃ネタで粛清された。
皆さんも気をつけよう、女性の年齢を色々とやかく言うと刺されるぞ。

孤児院と王室顧問

ふむ、孤児院は居心地良いな。
王族共に仕事を押し付けられないし、安全で快適だ。
気を使う事もないし一部屋押さえておくか。

「王室顧問、ここに居るならば子供達に文字の一つでも教えてやれ！」
麦秋老、居たのか・・・・・・・・・麦秋伯領で双子の孫が生まれたらしいのに。

「うむ、絵姿を見せてもらったが可愛いものだぞ孫は！子供のときはこの糞ガキがと思ったが孫ともなれば多少の粗相も可愛く思えてしまう。早く帰って孫の顔を眺めて可愛がりたいものだ・・・・・・（以下孫自慢が始まる」

あの堅物の麦秋老が爺馬鹿になってしまった。そんなに可愛がりたいならば行って来ればよいのに・・・・・・・
「ふん、孫は可愛いがこの子達を見捨てて置けないだろう。孫達には親とか色々居るがこの子たちにはワシ等しか居ないのだからな。一息つくまではここに居るぞ。」

やはり麦秋老は堅物だった。そうでなければ麦秋老ではないのだがな。

「だんなに麦秋老、女衆が夕餉だから来てくれと。」
「判った。院長殿も呼んだほうが良かろう。あの御仁も根つめているからな。」
「わかった。冷めないうちに来てくれってよ。」

孤児弟にも王宮寮に一室与えられているはずだが・・・・・・・・・古巣に愛着があるのだろう・・・・・・・巣立っていった者の中にはここに容易にこれないものも居るのに甘ったれたものだ。まぁ、弟妹分のことが心配というのもあるのだろう。仕方のないことだ。

さて、夕餉をご馳走になるとしよう。

「御主人様こちらをどうぞ。」

孤児姉や孤児娘達が女衆に混じって食事の世話をしている。

これはお前等が作ったのか？

「そうだよ。」「賢者様美味しい？」「たべてたべて・・・・」

「お口汚しでよければ・・・・・・・・」

「こらこら、一番食わせないといけないのに食わせないで私によこすのはダメだぞ。」

まとわりつく娘たちに苦笑を隠せない私は子供達に食わせるのを優先させるように窘め夕餉を楽しむこととする。

食前の祈りを捧げ、皆で食べる事を楽しむとしよう。

最初のうちは痩せこけていた子供達もちゃんと食べるようになってからは毛艶も良くなり、子供らしい愛らしさが出てくる。孤児弟とか孤児姉なども最初は痩せていたからなぁ・・・・あの状態で抱くとかは、流石に罪悪感を感じる。

今見てみると娘らしい丸みもついてきているし丹精込めた甲斐もあるものだ。

最初の頃は痩せた小娘として見向きもされなかったのだが最近では手を出そうとする馬鹿が多くて困る。

まさか私に一晩いくらだなんて言う輩が出てくるのはある意味仕方あるまい。金を詰まれても売るつもりはないのだが。

もぐもぐ　はぐはぐ・・・・・・・・・・

子供達の食欲は見ていて気持ちよいくらいだ。
綺麗にして躾もしてあるからどこに出しても恥ずかしくもない。
官僚部屋に今からでも出して使える力量の子も居るのだが・・・・・・・・馬鹿な大人を見せるのは教育上悪い。
さて、如何したものか

「王室顧問様、子供達の引き抜きでもあったのですか？」
わかるか院長。

「うむ、宰相だの官僚の馬鹿共が仕事が楽になるから子供達をよこせと五月蝿いのだよ。」
「こちらにも貴族緒家から雇い入れたいという声が・・・・・・・・中には養子の声もあるのですが・・・・・」
「教育に悪そうなところに送りたくないのだけどな。一応私を通して声をかけてくれといっておけばよいさ。それで半分は消えるから。」
「何故消えるのかは聞きたくないのでおいときますけど、王室顧問様を通して置けば子供達の居場所的には問題ないのですね。」
「完全にとは言わないが、信頼の置けるところを用意するさ。」
「そのときにはお願いいたします。」

院長と話している間にも子供たちはわらわらと寄って来て話しかけてくるし、鬱陶しいのだが可愛らしいなともおもったり・・・・・・・・子供が好きなわけではないのだがなぁ・・・・・・（王兄殿下的（ロリコン）な意味合いとは違って純粋な意味で）
それでも擦り寄って高位を示してくるものを無碍にするほど無粋で

はない。

「だんなは親馬鹿の素質があるよ。」

黙れ孤児弟。

まとわりついて話しかけている子供らの話を聞きながら・・・・・・・・・

「賢者様、僕奴隷商人の下っ端を捕まえたんだよ。」「あたちは偽物を売ろうとした詐欺師を見つけたの・・・・・・・」

「馬車から落ちた子供を影で捕まえたの、面白かった。」「極北戦士の真似して壁のシミの振りをマスターした。」

「お店屋さんで計算したら店のおじちゃんに喜ばれた。」

「土木計算できるようになったよ。」「古典神話と根源神話の違いを調べたら神殿のおじちゃん達が泣いてやめてといっていた・・・・・・・・・」「作付頭のおじちゃんに習った魔法で取れた野菜は今日使ったんだよ。」

・・・・・・・・・えっと、この子達何処に向かっているの?

「御主人様、取り寄せた書籍は結構専門性の高いものが多いと思われるのですが・・・・・・・・・それに、講師の方々は一癖も二癖もある方々ですし、神々が屯して加護とまでは行かないけど保護を与えているのですから子供達の成長も特定方向にむかっているのでは?」

「とくてーほうこうってなに?」「ちーと?」

「そういえば、貴族のおじちゃん達が補佐見習のにーちゃんと傷跡のネーちゃんを襲ったのを皆して捕まえたよね。」

「うん。」「弱かったね。」

「奴隷商人のほうがてこづったね。」

「あんまり危ない事をするなよ。」

「「「「はーい」」」」

釘を刺すくらいしかできなかった。
「賢者様は悪くないと思う。」「諸悪の根源だと思ったけど。」「賢者様も無茶しているとおもうけど・・・・・・・」
孤児娘達は好き勝手言う。否定できない自分が悔しい。
この子供達をそのまま王宮に連れて行ったら即採用されてしまう。

しかも色々、使い勝手良いからと引っ張りだこで・・・・・・・・・・良い事なのかな？
「それについては判断に迷いますね。」「確かに厄介事と組になりそうだし」
やはりそう、思うか・・・・・・・・・・後見が居ないと好き勝手されてしまいそうだな・・・・・・・・・

「それ以前にこの能力を持った子供達を雇い始めたら貴族が没落するだろうって・・・・・・・・・」
「麦秋老、それは構わないのですが・・・・・・・・」
「なりふり構わず子供達に攻撃するぞ、やつらは・・・・・・・・・・」
「確かに・・・・・・・・・一度貴族を潰して地ならししてあげるか。」
「貴様が言うと本気でやりそうだから怖いのだが・・・・・・・・・・程々にしておけよ。」
「わかってますって・・・・・・・・・・子供達に手を出さない限り潰しませんから。」

「弟妹共を王宮で働かせるには問題が多そうだな。」
「まずは王族の変態兄妹を何とかいたしませんと・・・・・・・・後は、王妃様とか異世界人とか・・・・・・・・危険が多すぎますわ

ね。」

・・・・・・・・・・・・・・・そっちの心配もしないといけなかったか・・・・・・・・・・・・・・・

如何したものだろうか？

孤児院と王室顧問（後書き）

はい、だらけた話でした。
そういうことで酒も切れたことですし今宵はこれまで。

孤児院と王宮各所（前書き）

あらすじ　孤児たちの進路如何するべかな？

孤児院と王宮各所

我が教育を受けた孤児達を受け入れたいという王国政府やら貴族連中・・・・・・
如何考えても教育に悪そうなのがいっぱい居て困るのだよなぁ・・・・・

「王室顧問何を考えているのかね？」
「宰相閣下、如何考えても王宮に年端も行かない子供達を送る事に私の良心が・・・・・・・・・・・・」
「貴様に良心があるということが信じられんが。確かに教育上悪そうなものが多そうだな。」
「子供達を働かせるには、問題箇所を何とかしたいのですが。王族兄妹とか忌々しき異世界人とか貴腐人達とか・・・・・・・・・寧ろ政争の題材として使う貴族がまともに見えるから不思議ですよねぇ・・・・・・・・・」
「王室顧問と仲が悪い貴族達も孤児娘とかの事務能力は買っているからなぁ・・・・・・」

困ったものだ・・・・・・・・・
宰相室にて侍女の煎れた茶を啜りながら、如何したものかと考える。
商会公とか農園公のところに送ったほうが彼等の為なんだが、来て欲しいというものが多すぎるのはどうかと・・・・・・・
孤児姉弟とか孤児娘達に補佐見習・・・・・・・・・確かに私の弟子の中では優秀な部類だが、他にも貴族の子弟の中にも使えるの居るだろうに・・・・・・・・・

「その使える子弟が自分の部下に欲しがったりしているんだな。家之子郎党の使えなさとか胡坐をかいてのんべんだらりとかが嫌なん

だそうな・・・・・・・・・・」
「眷属系統を鍛えてやるから連れて来い！」
「それが某王宮伯親子が壊れた件で怯えて誰も名乗りを上げないとか・・・・・・・・・・・・・」
「柔過ぎる・・・・・・・・・・・あの程度の教育でくたばるのが問題だ。」
「あのなぁ、孤児達にあの教育を施す事自体問題だ。どうして孤児達が皆してあれを無事に受けているのかが疑問だが？」
「死ぬ物狂いなのと知識が得られるのが嬉しいからでしょう。」
「加えれば、王室顧問に対する忠誠みたいなものがあるのだろうな。」
「間違っても王室や国家には向かいそうもないけどね。見捨てたのは貴方方だし・・・・・・・・・・・・」
「知っていれば・・・・・・・・・・勿体無い事をした。」
くくくっ！　王国の実権は握ったも当然だ！ひざまづいて私に従うが良い。といったところで、実権持っているんだから仕事しろと・・・・・・・・なるのがオチだし。
あまり孤児達を王宮に入れたくないんだよなぁ・・・・・・・孤児達の為にならないしな。

ばたん

「宰相、いるかね？　珍しいな王室顧問、お前がここに居るなんて。」
「珍しいのは否定しませんが只の野暮用です。」
「王室顧問、人事の件を野暮用言うな。」
「で、何を話していたのかね？」
「大したことではないので・・・・・・・・」

「隠すことではなかろう、王室顧問が丹精込めた孤児達を王宮で使わないかという話ですよ。陛下。」
「ふむ、孤児娘の八掛け程度でも使えるのが増えれば王国政府業務が捗るな。我のところにも何名か欲しいが何とかならんかね？」
「って、言うか採用前提ですか！子供達の意思は無視ですか！」
「栄達の道を断る等とは言う馬鹿は何か欠陥を抱えているのだろう？」
「それは私に対するあてつけですか？」
「王室顧問の場合は一族の呪いというべき物だろう。」
「それは言えてる。かの一族は仕事を押し付けすぎると暴挙に出るからな。匙加減が難しい・・・・・・・・・・」

一族の呪い扱いは酷いではないか、仕事嫌いな一族であるのは否定しないが。
憮然とした顔で茶を喫していると侍女が気を利かせてくれて新しい茶を注いでくれる。
憮然とした私の顔に苦笑している陛下が

「で、子供達は何時来るのか？」
「子供達を受け入れるのに少々問題がありまして・・・・・・・・・・」
「何か言い難そうだな宰相よ。」
「はぁ・・・・・・・・・・言い難いのですが、陛下の御兄弟とか忌々しき異世界人とか妃殿下とか・・・・・・・・・・子供達を餌食にしようとするのが多すぎまして・・・・・・・・・・子供達の安全を確立するまで寄越すつもりはないと王室顧問が無理難題を言っているのですよ。」

無理難題って・・・・・・・・・・王族（へんたい）兄妹とか忌々しき世界人（ショタコンの貴腐人達）一派は最低でも対処してもらわないと餌食にされてからでは目も当てら

れん・・・・・・・・・・王妃ならば、子供を着せ替え人形にする程度だから業務の邪魔にならなければ良い程度なんだが・・・・・・・・・・あとは、事務処理能力を目当てに擁おうとする貴族も・・・・・・・・・前例があるからなぁ・・・・・・それに逆上した官僚や宰相が暴走するのが問題だな。

「王室顧問、心に棚を作って居ないか？」

「まさか、私ほど日々平穏な隠遁生活を願っているものは居ませんよ。」

「隠遁生活の前に仕事しろ！」

「断る！」

「寧ろわしが隠遁生活したい！」

「閣下、後継を育ててください！」

「それがお前だろう！」「断る！」

「お前等、仕事しろ！」

「「断る！」」

陛下が頭を抱えている・・・・・・・・・股肱の臣である宰相に王族に臆する事のない私の二人に仕事したくないと断言されたら無理もない。

「宰相閣下、王国を放置して隠遁しますか？」

「それも悪くない！」

「待て待て待て、宰相まで王室顧問が移ったのか？」

「心外ですぞ！わしのは純粋に引退してゆるりと過ごしたいだけだ！こいつみたいに飲んだくれて堕落した生活をしたいというのと一緒にしないで貰いたい。」

「子供達を如何するかは先の話ですが問題箇所を挙げておきますので対処願いますよ陛下。」

「う、うむ・・・・・・・・・・」

勢いに押されたのか陛下が頷いた。

さて、次は問題箇所の洗い出しだ！

孤児院と王宮各所（後書き）

酒が切れたので今宵はこれまで。

孤児院と官僚探訪（前書き）

あらすじ　孤児達を受け入れる前に地均し・・・・・・・・・するのかどうか？
そして作者は酒が切れて手が震えている。

孤児院と官僚探訪

さてと、可愛い可愛い子供達を王宮に向かえる前に掃除しますかね。

「御主人様、まずはどこから？」

「そうだね、子供達が一番入り浸るであろう官僚部屋からかな。」

「そもそも、官僚の皆様からして教育上悪そうな・・・・・・・・・・・・・・・」

「否定できない事が辛いが仕事中は実害ないはず・・・・・・・・・・・・・・・仕事終わってから酒盛して悪乗りする程度だが・・・・・・・・・・・」

官僚部屋

白い壁で区切られている各自の仕事場所。その白い壁は書類の山である。

自己増殖しているのではと思える書類の山は減った分だけ追加され、下手すれば更に増えているようだ・・・・・・・・・・・・・・・

「げへへ・・・・・・・・・・　神殿の帳簿のあらが出てくる出てくる・・・・・・・・・・・・・・」

「おお、金貸法の違反見っけ。そっちはどうだ？」

「うむ、傷病快癒の祈祷をして金を取っているのに対象が悪化しているねぇ・・・・・これは詐欺だろう・・・・・・・・・・・にひひっ」

「そっかそっか、では神殿を詐欺で訴えるとしようか。」

「詐欺告発の書類を作って・・・・・・・・・・・・・・・」

かりかりかりかり・・・・・・・・・・・・・・・

「あはははは・・・・・・・・・・・・・書類を書いたら報告書が帰ってきて、それに対する上申書を書いて・・・・・・・・・・・・・・・終わらないねぇ・・・・・・」

「おや？こんな所に未解決の種類が・・・・・・・えっと、何々・・・・・・・拷問吏の傷病手当？王妃様の年齢を叫んだ神職に巻き込まれたのか・・・・・・・・・・かわいそうに・・・・・・・・・・・」

「その拷問吏の奴ならばこっちに退職願が出ているぞ・・・・・・・・・・・　拷問吏が責められて如何するっていうのだ。」

「寧ろ王妃様に尋問させたほうが・・・・・・・・・・・・・・ぐはっ！」

不敬発言による処罰（つっこみ）が入ったようだな。

「しっかりしろ！街道管理官！高々王妃様の不敬発言による処罰（つっこみ）じゃないか！」

「かいどーかんりかーーーん！！」

うん、こんな仕事環境は子供に教育に悪いな。

官僚達の心を折る様な仕事を子供達にさせるわけにいかない。

それ以前に仕事内容が子供に見せてよいものではないだろう。

「その割には私達には平気に仕事させてましたけど。」

「ははははっ！最初は国家の暗部を見せないように気をつけたではないか。最近のは特にひどいのは否定できないけど・・・・・・・・・・・・」

「暗部は兎も角恥部は・・・・・・・・・・・嫌って程見せられましたけど。」

「少なくともこの部屋には置いとけないな。」

「御主人様、子供達に政府業務手伝わせるのがそもそも問題では・・・・・・・・・」

「それを本気で考えているのが王国の問題点だな。会計書類の検算

や資料整理くらいならば良いけど、如何考えても将来的に企画立案まで出来る人材に仕込もうとする気満々だし・・・・・・・・・・」
「貴族の皆様方が行ってくだされればよいのに。」
「今の貴族にそんな器量があるのかが疑問だがな。」

「あっ！賢者様！手伝いに来たの？」
「孤児娘か、孤児院のチビ共をお前等の後輩として入れる話が出てな・・・・・・・・・・・・如何考えてもこの官僚部屋で働かせるのは拙いのではないかと・・・・・・・・・・・・」
「確かに・・・・・・・・・・・　って、言うか私らの教育にも悪いんだけど・・・・・・・・・・」
「もう少し国政の暗部とか触れないところにいたい・・・・・・・・・・」
「王城内にまともな人を見たことない。」

口々に言う孤児娘に
「酷いじゃないか孤児娘ちゃん達。君達も十分に適応しているよ。」
「ひどーい！」
「そうは言ってもねぇ・・・・・　王族に泣きを見せるまで帳簿の隅まで突き出したのは事実だし、貴族緒家からも書類きちんとするから寄越さないでくれと来ているぞ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・賢者様の半分も出来ていないのに。」「そんなに厳しくしたつもりないんだけど」
「偏見だわ。」

「御主人様・・・・・・・・・」
「言うな孤児姉。彼女達は時代の被害者なのだ・・・・・・・・・・・・
・　無知な貴族共が自身の無能を棚に上げて締め上げられているのを彼女達の凶悪さのせいにしているのだ。」

「けんじゃさまひどーい！」
「そうは言っても楽しんでやっているだろう。」
「そりゃそうだけど・・・・・・・・・いたいげな乙女が凶悪だという評判を張られたら嫁の行き手がなくなるじゃない！」
「・・・・・・・・孤児姉や傷跡娘はいいけどさ、貰ってくれるのがいてさ・・・・・・・」
「最悪、賢者様貰ってよね！」
「ははははっ！そのうちにいい男が見つかるさ。」
「そうそう、俺でよければ貰ってやるよ。」
「やだ！」「論外！」「ごめんなさい！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・くぅっ！」
「その前に徴税管理官、私の可愛い娘達に手を出そうとする前に東花町の鱗娘は如何するのかね？」
「ちょ！王室顧問！それをばらさないでぇ！」
「ばらすもばらさないも・・・・・・・・・・」
「「「・・・・・・・・・・不潔。」」」

崩れ落ちた徴税管理官をよそに官僚（たこべや）部屋を出る。
なぜか孤児娘達もついてくる。
仕事は如何した？

「しごと？私達の分は終わらせたわ。」「後は官僚さん達が趣味で増やした分だから。」
「あたし達はあくまで補助業務だし・・・・・・・」

そういえば、基本補助業務だけだったな。その割には下手な地方官吏真っ青の仕事しているのだが・・・・・・・
俸給交渉してやらないとダメかな？
「それよりも本職を増やして私達の出番なくするくらいにして欲しいわ。」

「言えてる。」「そのままなし崩し的に私達が官僚になってしまいそうで怖い。」

そうして廊下に出ていると

「おおっ！君は学園の講師が優秀だといっていた北方商業都市候の次男坊ではないか！どうだね？栄達の道を歩んでみたくないかね？君の境遇だと実家の冷や飯食いか候の下働きがいいところだろう？だったら、自らの手で国政を操って見ないか？」

「えっ！えっ！えっ！」

「心配ない！官僚府は実力主義だ！君くらいの力量があれば直ぐに官僚となって国政に参加できるぞ！其処の孤児娘達を見てみるが良いさ！路傍の孤児でも数ヶ月で爵位を貰って貴族緒家から一目置かれるようになっているんだぞ！君ならばもっと先にいけるだろう！さぁさぁさぁ！一度話を聞きにおいで・・・・・・・・・・・・・」

「え、えっと・・・・・・・・・・・・・」

「遠慮しなくて良いから！怖いことはないよ！さぁ、我等の仲間入りをしよう！明日からとも後からとも言わず今から君は我等の仲間だ！さぁ、歓迎するよ！」

官僚（たこべや）部屋に引き釣り込まれる貴族の子弟・・・・・・・・・・・・・・・

思考が状況に追いついたらしく、自らの危機に気がつくも遅く官僚達に担ぎこまれてしまう・・・・・・・・・・・・・

「うわぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・・・・・・・」

彼に幸あれ。

「御主人様・・・・・・・・・・・・・・・」

「其処まで人手不足だったとは・・・・・・・・・・・・・・・」

「どっちかというと後釜探しとかいけにえとか・・・・・・・・・・」
「彼も可愛そうに・・・・・・もって3日？」
「無事に帰れるといいんだけど・・・・・・・・・・」
「こうやって官僚部屋に近づくと官僚にされるという噂が実証されるのですね。」

部屋の中からは悲鳴が聞こえてくるが、働け、手を動かせ、泣いている暇はないんだ等という罵声が返ってくる。
酷い・・・・・・・・・・
でも、こんなところを護衛も抜きにのこのこと歩いているのが悪いのだろう。
死ぬ事はないだろうから頑張ってもらおう、もしかすると未来の宰相になれるかもしれないし・・・・・・・・

次は宰相府にでも行って見るかな。直ぐ隣だし。

孤児院と官僚探訪（後書き）

如何考えても官僚が教育上悪いという結論が・・・・・・・・・・・・・・・

孤児院と宰相府探訪（前書き）

あらすじ　官僚達は教育上悪い存在だった。

そもそもこの作者の世界が子供にとって良い世界かと言われたら疑問が残る。

孤児院と宰相府探訪

どこぞの貴族子弟の悲鳴が建物の中に響き渡っている。
別に問題ない。

宰相府に向かう。官僚部屋の隣なのだが・・・・・・・・・・・・
そこは官僚部屋と違って落ち着いている。官僚という緩衝材があるからだろうか？
とは言え、まだ幼い孤児達を使って自らが楽しようとする根性は見苦しく、可愛い子供達を預けるに値しない。

「王室顧問来るなり酷評とはいただけないな。」
「宰相閣下、路傍で朽ち逝く子供を国政の道具としてみる根性が気に食わないだけですよ。気にする必要はないですよ。」
「王室顧問、そんな事言わずに・・・・・・・・・・・・・・道具ということは否定しないが、それでも助かるものいるならば助けたい。」
「御高説立派ですが敢えて道具であろうとするものならば敬意と共に助力しようが、道具としようとするものがいるならばそれは全力で潰す！その対象が我が丹精の傑作である孤児達であるならば国ごと潰すよ。」
「王室顧問、宰相府で反逆宣言は止めろ！」

かりかりと筆を滑らせる音がする中で私達の声が響く・・・・・・・・・

「身捨つるほどの国は在るか？見捨てるほどの国なら在るが・・・・・・・・我一度の問いかけをする。路傍の子供にそれを強いるか？朽ちたる誰かにそれを強いるか？満ちたる君がそれを強いるか？

満たせぬ誰かにその道強いるか?我一度の問いかけをする。身捨てるほどの国であるのか?見捨てるほどの国であるのか?」

「どうしても自重しないのですね王室顧問。」

「勿論、我が一族は叫びに応じて王位を譲ったのだ。幸いの道を作れない国ならば本気で見捨てるよ。」

「ご主人様は誰か一人でもそのために尽力しているのならば、見捨てはしないでしょうけど・・・・・・・・・・」

「今現在だと補佐見習?」「あの子は傷跡娘と母親のためだけに立ち上がっているんだけどね。」

「それでも世界に自分だけでも聖域であろうと踏ん張っている馬鹿を見捨てるほど薄情じゃないしね。」

ふんっ!馬鹿弟子の手前、意地を張らないで如何する。

あの愛すべき馬鹿が身捨つる覚悟で道を切り開いているんだ。それを見捨てるならば相応の報復をするだけだ。

「王国の禄を食んでいるならば国に忠誠を誓え。」

「だから禄は要らないと常日頃から言っているじゃないですか。忠誠誓うに値しないと言っているのに・・・・・・」

「どこが気に食わないんだ。」

「まずは私に仕事だの厄介事を押し付けること。周りの貴族共が私程度の処理能力を持たないくせに権利ばかり主張する事。王族の変態さ。陛下の服のセンス。王弟の髪の毛。王妃の若作りが他者に対して自身が常に若いといい続けている事。他にもあるけど続けます?」

「・・・・・・・・・・・・・って、いうか王族に対して恨みが在るのか?」

「仕事しないくせに私に仕事をさせる時点で恨みを持ってますよ。」

「ああ、それは判る。特に変態兄妹！やつらは良識の敵だ。」
「判るか宰相府事務官。後王妃も年齢ネタで官僚候補をどれだけ潰されたか・・・・・・・・・年齢くらいで再起不能に陥らせるなんて・・・・・・・・・非人道的だ。それ以前に片っ端から新入りを潰すな。私の分だけでも１０人は潰れたぞ・・・・・・・・・そのせいで引退できないじゃないか！」
「引退云々は兎も角、潰すなとはそれとなく言っておこう・・・・・・」

それは無駄だと理解しつつ、次の場所に行く。
宰相府も教育上悪いな

孤児院と魔術師団探訪（前書き）

あらすじ　行政部門は教育上悪い。それは人というものが持つ業によるものなのだろうか？欲望がぶつかり合う場所に子供を送る事自体が問題である。

孤児院と魔術師団探訪

政府機能部分は教育上悪い事が判った。
「賢者様、其処で働いている子供達の声って聞かないの？」
「次の犠牲者を送り込む必要があるのか？」
「うわぁ、犠牲者言った！」「やっぱり私達は賢者様の身代わりだったのね！」「酷い・・・・・・・・・・」
「では、今から別の場所に行くか？商会公か農園公あたりだったら諸手を挙げて歓迎してくれるぞ。」

そこで考え込む孤児娘達・・・・・・・・
「絶対、ぎっちぎちに働かせるよね。商会公様だと。」「農園公様だと若い衆の嫁候補だよねぇ・・・・」
「でも、給金はよさそうかも・・・・・・・・・・」

確かに商会公だと給金や待遇は良いだろうな。
今でも孤児娘達を引き抜きに掛かって工作しているくらいだから・・・・・・・

「まて！王室顧問！孤児娘達を引き上げるな！そして孤児娘達も抜けないでくれ！」
「おや、宰相閣下如何しましたか？」
「廊下で不穏当な会話をしているから咎めに来たのだ。」
「暇なの？」「私達程度を引止めに来るなんて・・・・・・・・」
「次の契約のときに話しましょう。」
「まぁ、私はこの娘達の後見なので娘達のためになる場所を第一に考えてますよ。」
「御主人様、建前は兎も角本音は？」
「嫌がらせ。」

「孤児娘達、あなた方も悪乗りしないように。」
「えー！」「私達もこんなダメな大人達とじゃなくて賢者様といたーい。」「孤児姉ずるーい！」

口々に愚痴を言う孤児娘達。一時的なものだと思っていたがほぼ永続勤務と化しているから私も予想外だった。
しかし、どれだけ人手不足なんだこの国は・・・・・・・・・・

そのうちに近衛を率いて孤児院に略奪に行きかねないぞ。
「その手があったか！」

財務官、わざとらしく顔を出して発言しない。
そして、民部官孤児院に行く振りして逃げ出さない！
ところで近衛文官。その書類と近衛伝令兵は何だね？

「いやだなぁ、王室顧問。軍は優秀な人材を常に求めているんだよ。鍛え甲斐があって優秀な子供となれば早急に確保しないと・・・・・・・・・軍部の後方事務を一人でこなすのが辛くなってきた。」
「将軍府の連中は如何した！」
「あの脳筋どもは3桁以上の計算が出来ないんだ。俺だって現場業務に付きたいのに・・・・・・・・・・・腰痛持ちの自分が辛い。」

そう言えば近衛文官は腰痛で退官となるところを計算が出来るからと配置転換されたんだっけな。
「軍も人手不足なんですか？」
「事務方が不足しているのは否定しない。近衛となれば読み書きできるのが任官条件となるのだが性格的に事務仕事に向いていないし、一般兵から下手すれば下士官連中は文字が読めないのが殆どだ。元々、農家とかの食い詰めた若者達が多いからな。」

「そっちを教育したら如何でしょうか？」
「読み書き覚えたとたんに脱走して商売とか始める奴等に？」
「教育して士官待遇にするといったら退官する者が多かったんだよ。民草の識字率向上には役立ったけど軍の事務官が育たない育たない・・・・・・・・・傷病で現場に立てない士官連中を主に使うしかないのだ。まぁ、近衛文官の場合は腰痛が治っても便利だからと転属願いを握りつぶされてるのだけどな。主に近衛軍団長に。」
「本当、現場に行きたいのだが・・・・・・・・・」
「近衛文官、護衛官がいるだろう。彼は王妃付から逃れたそうにしているし、近衛将官を目指しているから文官の経験を積ませるのもよいのでは？」
「そうか！良い事を聞いた。王室顧問礼を言うぞ。」
「なに、私も友の苦境を知っているからな。手助けをしてやりたかっただけだ。」
「王室顧問。で、君の友である護衛官は性格的に事務方に向かないと記憶しているのだが・・・・・・・・・」
「いえ、上を目指しているのならば事務方にも慣れて貰わないと・・・・・・・・・私としては友の不遇に力になりたいと思っているだけですが・・・・・・・・・って、いうか！近衛文官孤児院向けの命令書撤回しろ！」
「それとこれとは別だよ王室顧問。奴隷商人を手玉にとっている孤児達は良い兵士になれると思うよ。」
「多分、命令を聞く立場には向かないと思うけど・・・・・・・・・」
「士官候補生として使いたいね。今でも歴戦のツワモノだし。山賊退治とかには重宝しそうだ。」

孤児達の能力をお思い浮かべてみる。
建国公私兵団の軍事教育を受けて、暗黒神の神術を使えて、商会公仕込の会計術に諸々の講師陣からの教育を受けている・・・・・・・・・

集団行動としては使い辛いが小数での撹乱行動とか遊撃には最適だな。子供の形をしているから相手も油断しているし・・・・・・・事務方としても・・・・・・・・・・

「近衛文官、子供を戦場に出そうというのはよろしくないな。」
「そういう宰相閣下だって年端も行かない子供を国政の暗部に触れさせようとしているじゃないですか！」

喧喧轟々・・・・・・・・・・
軍部と政府の醜い争いだ。お前等自前で人材育てろ。

本気で孤児娘達も引き上げていいですか？

「賢者様、伝令兵の命令書撤回させなくて良いの？」
「あの孤児院は私の保護下にあるんだ、下手な手出しは出来ないさ。力づくとなれば駐在している私兵団と戦闘になるし・・・・・・・・・・・それでも手を出す馬鹿はいないだろう。手を出したら、青田刈りしている商会公や農園公が補給物資を止めてしまうだろうし・・・・・・・徴兵するにも今は戦時下ではないし陛下の許可が下りないさ。陛下自身が自分のところに欲しがっているから。」
「そういう意味では手付かずの人材の宝庫なのね孤児院って。」
「お前達も含めて優秀な人材だしな。」

「近衛文官、将軍閣下から孤児院襲撃作戦は却下されました。」
「近衛伝令兵！本当か！　なになに、『戦いは我々の楽しみであり子供に取られるわけにいかない。』・・・・・・・・・あの脳筋どもが！事務処理をやってから言いやがれ！」

ぶつくさ言う近衛文官に
「近衛文官よ、宰相府には軍事面での専門家がいないのだが来ないかね？」

宰相閣下が勧誘している。官僚部屋に入り浸って仕事しているから違和感がないのだろうが・・・・・・・・・・・・
それは軍部が黙ってないぞ。

近衛文官が乗り気ではないが心動かされている・・・・・・・・・・・・・・・
馬鹿共は置いといて巡ってみるかね・・・・・・・・・・・・・
「御主人様、次はどちらに？」
「魔術師団のところでも寄ってみるかね？」
「そう言えば行った事がないなぁ・・・・・・・・」「私等の魔具も一部あそこで作られたんだよねぇ・・・・」
「魔術師って変人の集団らしいけど大丈夫なのかなぁ？」
「まぁ、変人なのは否定しないけど官僚達よりはまともだから問題ない。」

てくてく・・・・・・・・

王城の外周部、庭園公がいる庭園傍に魔術師団の建物がある。
やや、焼け焦げていたり補修の跡が見受けられるが、彼等自身の魔術実験の結果なのである。
今現在は魔術実験は郊外にある演習場とか実権施設で行われることが多く、殆ど書庫と倉庫と詰め所代わりになっている。

きぃぃぃ・・・・・・・・・

魔術師団棟を訪ねると扉がひとりでに開く、裏を見ると魔道人形（ゴーレム）が扉の開閉をしている。

「ちょっと可愛いかも。」「わざわざ扉の開閉のために魔道人形（ゴーレム）とは・・・・・・・・・魔力の無駄遣い。」「でも、魔道人形（ゴーレム）の細部の作りこみといい、着せている服といい、術者の愛を感じられるわね。」

人に模して作りこんでいる扉開閉用魔道人形（ゴーレム）。少年型と少女型、この造形は中々芸術的素養がないと作れないかな・・・・・・・・・・・・・・

奥から聞こえてくる魔術師達の声

「ふふふっ、ぼくの造形は王国一さ。見てみな、この鎖骨のライン。これに満足するのに１０日は掛かった。」

「ふむ、鎖骨は見事だな。でも甘いぞ！この頸骨の曲線、君に出せるかな？」

「くっ！悔しいが認めざるを得ない・・・・・・・・・・・・でも、鎖骨だけは鎖骨だけは譲れない！」

「お二方、我が指先のしなやかさを忘れてもらっては困りますぞ。」

「さすが指先の魔術師。君の作る指の美しさには感服するよ。」

「本人は無骨な指なのにどうしてこんな美しいものを作れるのかが疑問だ。」

「我の外見は関係ないだろう！」

「でも、我等が揃えば世界一美しい魔道人形（ゴーレム）の完成は近い！」

また、別の部屋からは・・・・・・・・・

「また官僚部屋から精力剤の依頼だ！」「ドンだけ飲用しているんだ？飲みすぎは毒なのに・・・・・・・・・」

「また、小間物屋か？」「新婚の手伝いなんて・・・・・・・・・」

「俺達独身なのに・・・・・・・・・」

「次の納品時に新作を混ぜておこうか？」「あれを出すのか？人としてどうかと思うぞ・・・・・・・・・・」
「一つ一つ違う味わいの精力剤というのは斬新だろう？」
「だからって、激辛とか激甘とか・・・・・・・・・・・・あまつさえ、特性傷薬味（痛覚倍増風味）って・・・・・・・・・」
「仕事はまじめに作品に遊び心を・・・・・・・・・・・・」
「そう言えばお前守護聖域辺境伯からの移籍組か・・・・・・・・・・・・・・・納得した。」

ちょっとまて！それで納得するな！
我が故郷をそういう認識でされると・・・・・・・・・
「御主人様、どう考えても無駄だと思いますが・・・・・・・・」
孤児姉のツッコミを受けながら部屋からは・・・・・・・・・

「まぁ、特性傷薬味（痛覚倍増風味）は人道的に非道だから封印ね。」
「な、なんだと・・・・・・・・・・・・・・あの味わいを作るのに一月かけたのに・・・・・・・・・・・・・効果も他の精力剤の１．００３倍の効力なのに・・・・・・・・・・」

効果の実感はなさそうだが、それ・・・・・・・・・・・・・
「官僚の皆に伝える？」「黙っとこうよ。面白そうだし。」
「賢者様、十分濃いんですけど・・・・・・・・・・・・・・」
「私もここまでとは思わなかった・・・・・・・・・・・・・」
「回れ右しません？」「賛成！」

見なかったことにしよう・・・・・・・・・・・・・・・主に私の精神衛生上のために

孤児院と魔術師団探訪（後書き）

今宵も酒が切れたからここまで。

孤児院と魔術研究所探訪（前書き）

あらすじ　宮廷魔術師達はこだわりを持つ人たちだった。

今回も下品成分差別用語が出ています。

苦手な方は回れ右して日本書紀でもよみませう。

孤児院と魔術研究所探訪

うん、回れ右をしよう。
官僚達とは別の意味で教育に悪い。

「おや、王室顧問様ではないですか。」
「だんな！どうしたので？」

回れ右をして帰ろうとした我等主従の前に守護聖域辺境伯魔術師団の四席と孤児弟がいた。

「お前等こそ何をしているのだ？」
「黒髪孤児男爵の発案で目隠し布の陣の改良をしているのだが、実際の話材料とか資料とかここで研究したほうが楽なんで一室借りて行っているんですよ。」
「だんなこそ何をしているんで？」
「お前の弟妹分を王宮で雇う話があっただろう。その下調べだ。お前等だけならば分別もあるし、私の目も届くのだが王宮には危険な場所とかあるだろう。官僚部屋とか王妹談話室とか王兄談話室とか・・・・・・・・・・・・ここも危険そうだが・・・・・・」
「大丈夫ですってだんな。少々、変わった者は多いですけど実害はないですから・・・・・・・・・」

どう考えても危険人物が多い気がするが・・・・・・・・・・・・・・
別の部屋からは会話がもれてくる。

「そう言えば宰相府から腐女子避けの結界が頼まれていたはずだが・・・・・・・・・」

「それが・・・・・・・・・・王族とか竜族とか聖女とか・・・・・・・魔力とかその辺が強いものばかりなんでそれに合わせたら一般人が近づいただけで悪影響が出るし、かといって一般人に合わせたらそれらの問題人物共に効き目がなくて・・・・・・」

「それは難しいな。神々の助力を願い出ようにも神殿は目下再建中だし・・・・・・・・・」

「ああ、王室顧問様が王妃様召喚術で神殿を荒らしまわったあの件ですか・・・・・・・・・」

「まいったもんだ。宰相府には無理ですとだけ答えるか・・・・・・・」

「それが無難か・・・・・・・・・・　まさか高が簡単な結界がこんなに困難だったとは・・・・・・・・・」

そこっ！そこは諦めたらダメだろう！

閣下が涙目だぞ。

「・・・・・・・・・・実際、危険なものが多そうな気がするが？」

「危険物や扱いに注意が必要なものが多いですけど、特定の場所だけですんで王宮に比べれば安全ですよ。」

「そこっ！魔力を込めすぎだ！」

ちゅどーん！

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・御主人様。」

「・・・・・・・・・・・言うな孤児姉。」

「まぁ、たまには事故もあるということで。」
「賢者様弟妹分はここに行かせないようにしましょう。」
「そうだな、流石に怪我でもされたら問題だ。」

爆発の起こった部屋からは扉が開き、すすけた魔術師が数名零れ落ちる。
汚れているけど命には別状ないようだ。無駄に丈夫だな魔術師というものは・・・・・・・・・
極北戦士並に耐久力があるのではないか？

「いやぁ、久々に爆発しましたねぇ・・・・・」
「って、言うかお前魔力込めすぎ！」「材料だって只じゃないんだぞ！」
「そういうお前だって一昨日爆発させたじゃないか！」
「・・・・・・・・これで納期が遅れる。」「いいんじゃない！王妹殿下が使う媚薬なんてろくでもない目的なんだから。」
「それ以前に王弟殿下の毛生え薬も駄目になっているぞ！」
「あれも、どうせ効き目がないから労力の無駄。無視しとけ！適当に水でも色つけて渡しておけ・・・・・・・・・・」

職業倫理って・・・・・・・・・
って、言うか王弟殿下（はげおやじ）まだ諦めていなかったんか！
「だんな、それはいくらなんでも酷いというか・・・・・・・・・・」
「王弟殿下の毛根がひどいのは理解してますが・・・・・・・・・・」
「ねーちゃん、それ止めさしてる。」
「孤児姉ちゃん、そこは抑えておこうよ。いくら王弟殿下（再生不能）だからって希望くらい持つのは自由じゃない。」
「えっと、皆さん。そのくらいにしてあげてください。」
四席王弟殿下（ハゲ）を不憫に思ったのかたしなめる。

「そう言えば弟妹分を王宮で雇うんだったらここも良いんじゃない？多分書類仕事だと飽きて逃げるし・・・・・・」
「成程素質のある子だったら、技術を教えるのも一つの手か・・・・・・」
「魔術を技術って・・・・・・・・・」
「大した違いはないだろう！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・となると私らは職人ですか。」
「そうだ、手を使うか魔力を使うかの違いでしかない。」
「そうなんですけど・・・・・・・・・・そうなんですけど・・・・・・・・・魔術師ってかっこつけたいじゃないですか！」
「そっちか！」
「こう、浪漫に欠ける言い方しないでください！確かにここでは、王宮で使う薬剤や魔具の製作くらいしかしていませんが、本気を出せば！凄いといわせるものを・・・・・・・・・」

「四席殿、其処の貴族様は魔術の浪漫を理解されておられない様子。僭越なれどこの宮廷魔術師一の奇才と言われる私が魔術の真髄を見せてご覧に入れましょう！貴族様、お時間がありますならば我が研究室へ・・・・・・・・・・」
「奇才殿、この方は”あの”王室顧問様ですよ・・・・・・・・・」
「まぁ、良いではないか四席。ところで”あの”とはどういう意味かじっくり聞かせてもらおうか？」
「え、えっと・・・・・・・・・」

なんか通りすがりの宮廷魔術師の一人が私の発言を耳にしたらしく、魔術の浪漫を魅せてくれると私達一行を自らの研究室に案内する。
少し歩いて彼の研究室に連れてこられた私達は雑多とした部屋に唖然とする。
その様子を魔具の群に感動していると勘違いらしい魔術師は手に一

つの布切れを持っている。

「何ですか？この襤褸切れは？」

「襤褸切れとは心外ですなお嬢さん。一見只の襤褸切れに思えるけどこれを着けると布部分を透視して隠し武器とかを見つけ出すことが出来るんです！どうです、これさえあれば暗殺者を見つけて対策が取れる。」

そう言って、襤褸切れを身につける魔術師。孤児娘とか孤児姉が身を隠すように私の後ろに隠れたり部屋の外から出る。

どうしたのだろう？

「賢者様、魔術師さんのつけいている魔具は人の裸を見るものですよ。」

「すけべ！」「変態！」

女性陣が口々に魔術師を罵る。

「ふむ、お嬢さん達の裸には興味がありませんから御安心を。寧ろそっちの黒髪の・・・・・・・・・」

そっちかい！慌てて逃げ出す孤児弟！

確かに助平男の浪漫溢れる魔具だが・・・・・・・・・そう言うのは女性にばれないように男同士で融通するのが嗜みと言うもので・・・・・・・後で私にも作ってくれ。

「御主人様・・・・・・・」

私の考えを見通したのか孤児姉が冷たい視線を刺してくる。

ふむ、気を取り直して・・・・・・・・・

「魔術師殿、娘達が恥ずかしがるから外してくれないか？」

「失礼した。そのような積りはなかったから誤解のないように言うと。私は女性ですし・・・・・・・・・」
「「「えっ！」」」

これには驚いた。頭からすっぽり被るフード付きの外套を纏っているから性別不祥だし、声も低かったし、背も私よりやや低いくらいだったから男だと思っていた。

「その驚きは心外ですな。特に四席殿は結構長い付き合いだったはずですが。」
目隠しとフードを外した魔術師は確かに女性の顔だった。顔に傷薬を貼り付けているからそれを隠すためだったのだろう。
確かに孤児娘達の裸には興味ないな。あったら逆に怖い・・・・・・・
そんな事は置いといて私は代表して魔術師に謝罪する。って、言うか四席！お前まで驚くな。

「それは失礼致した魔術師殿。でも、魔術の浪漫とは少々違う気がしますが？」
「まぁ、この透視布はまだ序の口。色つきで見せる布とかの試作品ではあるのだがな！」

「ちょっ！その色つき布を見せてくれませんか！」
「おいら達の目指していたものがあったなんて・・・・・・・・・・・」
四席と孤児弟が口々に魔術師に詰め寄る！

「えっ！な、なにを・・・・・・・・・ちょっちょっと待て！出すから出すから・・・・・・・・・・・あなた方も好きだねぇ・・・・・」

がさごそがさごそ・・・・・・・・・・・・

「これだ！」

魔術師が取り出した襤褸切れ・・・・・・・・・どうして襤褸切れなんだろうな・・・・・・・・・もう少し綺麗な布で作ればよいのに・・・・・・・・・・

「襤褸切れだからよいのではないか。どう見ても何の役にも立ちそうもないものが実は！という局面に憧れたりしないか？私が性能の他に求めるのはそう言う一見アレだが実はという一品なのだよ。そして、この色つきで見れる目隠し布・・・・・・・・・・・・・・・」

語り始めたよ。ちょいと試させてもらうか・・・・・・・・・・・・・・・

其処に置かれた色つきで見れる目隠し布を身につけてみる。なんか臭うな・・・・・・・・・・・・・・・

ふむ、見れるな。しかし何故肌色が多いのだろう？

「貴族様、それは正式名称【色つきで見れる透視布】と言われる物なので多分皆の裸が見えてしまう・・・・・・・・・・・・・って、言うか私の裸を見られるのは恥ずかしいので外して貰えますかね。」

「御主人様！」「・・・・・・・・・・賢者様」

「見たいのだったら二人きりのときにじっくり見せ・・・・・・・いたっ！」

「だんな・・・・・・・・・・」

子供達の視線がとても痛かった。

って、言うか！先に身につけた透視布って

「先のほうは【白黒で見れる透視布】ですが何か？」

子供達の視線が痛い・・・・・・・・・・・・・・・これは不可抗力だ・・・・・・・・・

「ろくでもない代物ですねこれは。でも、これを応用すれば目隠し布にも色を見せる機能が・・・・・・・・・」

「ですね、早く完成させて盲目(メクラ)達に見ることが出来る喜びを・・・・・・・・・魔術師殿協力してもらえますか？」

四席と孤児弟は透視布を手に魔術師につめよっている。

「ちょっとまって、ねぇ・・・・・・・・・・・四席殿・・・・・・・・・一体何を？」

「魔術師殿！」

「黒髪の少年もそんなに迫られたら・・・・・・・・・・・・・・・」

「御主人様、其処まで飢えてらしたのですか？」

「飢えてはいないはずだが一昨日も性愛神殿に礼拝に向かったし・・・・・・・・・・」

「賢者様・・・・・・・・・・・・・・・」

「助平・・・・・・・・・・・・・・・（ボソッ」

赤面しながら詰め寄る娘達に私は謝るしかなかった・・・・・・・・・・・・

「すまんすまん・・・・・・・・・」

「で、どうでしたの私達の体は？御主人様。」

「綺麗な体だったよ。」

「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・／／／」」」」

「勝手に見てしまったのは不可抗力とは言え申し訳ない・・・・・・・・・・・決して疚しい気持ちではなくて・・・・・・・・・・・・チラッとしか見ていないから！」

「「「「・・・・・・・・・・／／／」」」」

これ、どう収拾つければよいのだろうか？

孤児院と魔術研究所探訪（後書き）

あれ？どうしてこうなったんだろう？
魔術の浪漫を語る話にするつもりが・・・・・・・・・・・・

透視して裸を見るのも浪漫なんだけど・・・・・・・・・・

そうか、さっき寄った酒屋で試飲させてもらった酒が不味かったから悪酔いしているんだ！いつも純米酒なのに麦焼酎入りの安酒を飲まされたから・・・・・・・・・・
口直しに銀盤を飲もう。

孤児院と軍部探訪（前書き）

あらすじ　魔術師達は変人だった。

孤児院と軍部探訪

てくてくてく
我等主従は魔術師詰め所を後にする。

ところで何故魔術師殿とか付いてくるのかね？
「王室顧問様の後を付いていけば面白い事がありそうなんで。」
「弟妹分が苦労する部分を取り除きたいんで・・・・・・・・・・・・・・」
「二方が動くならば私も出番がないので・・・・・・・・・・・・・・」
「で、賢者様。どこに向かうので？」
「次は軍部でも覗いてみるかね。」
「そう言えば王都では近衛兵しか見たことないのですが？」
「確かに・・・・・・・・・」

「それについては私から説明しましょうか。この王国は幾つかの軍管区に分かれて其々の地方軍が防備を受け持っているのですよ。この近辺は王都軍管区とでも言うのでしょうか、【王都】は近衛兵団軍管区と軍事上分類されているのですよ。他の軍管区はその地方の貴族の私兵団を中心に王都から派遣された軍監が纏め上げているんですが、王都の場合王家直属の近衛兵団が守備についているのです。数自体は少ないのですが、王都の城壁内だけを守備範囲としているので寧ろ人員は過剰といえるでしょう。実際、他の軍管区では村の青年団も兵役の一環として徴兵して訓練しているのですよ。ここ数十年国境付近での不法越境者と犯罪組織くらいしか見張る対象がないので問題がないといえばそれまでなのですが・・・・・・・・・・寧ろ王国から他国に行くときが大変ですね。」
「それって、うちのだんなが他国に行こうとするときに問題になる

ようにかい？」
「それは違うと思う。王室顧問様の場合は単純に他国に対して脅威となる人物だからだろう。」
酷い言われようだ。そうしているうちに軍部の詰所につく。
王城の城壁全部が軍部の建物となるのだが、今回は軍部の管理棟に向かうのである。
「賢者様どうして城壁が軍部の建物なんですか？」
「孤児娘、それは城壁自体が元々王城につめる兵舎を壁代わりにしていたのが始まりだ。外側の壁を厚めにして、それを支えるようにと言うか囲んでいたんだな。どうしてかと言われれば、人族連合からも魔王国からも敵対しされていたから周りすべてが敵の国という時代があったからどの方角からでも対応できるように兵舎を分散させていたんだな。そのうちに外に王都の城壁が出来て地方軍が生まれて近衛の役割が王都内の治安維持くらいになっていったんだ。とはいっても王国の最後の守護壁だったりするから、色々入隊には基準があるのだがね。」
私の説明に子供達は判った様な判っていないような・・・・・・・・・・顔をしている。
まぁ、城壁が近衛の管轄で近衛入隊には資格がいるとだけわかればよかろう。
どうせこの子達に近衛に入る気がないのだろうから・・・・・・・・・・・・
城壁傍で訓練をする近衛達、どっかで見た女性がいるのだが・・・・・・・・・・・
「その程度では私に剣は届きませんわよ。」

「この腐れアマ、強すぎる。」

まぁ、腐っているのはご明察だが彼女におくれをとるのはどうかと思うぞ近衛兵その一。

我々に気がついた腐った女・・・・・もとい公爵令嬢が駆け寄ってくる。アレだけ動いて軽やかにこっちに来るとは彼女の体力は化け物か？

「あら、王室顧問に孤児弟じゃないの。」

「御姉様久方ぶりです。」

「本当、所詮は義理だから忘れてしまったの？」

「いえ、そんなわけでは・・・・・・・・ここのところ目隠し布の改良に掛かりきりで魔術師団の詰所に篭っていたんですよ。」

「そう、居場所がわかれば後で遊びに行けるわね。暫くいるのでしょう？」

「多分暫くいると思いますよ。商会公とか庭園公に捕まらなければ。」

「本当に忙しいのね。」

「ふむ、公爵令嬢が御執心なのは黒髪の少年なのですか・・・・・・・」

「奇才殿、他にも末王女とかも狙っているな。」

「少年も大変な女性に目をつけられたもんだ。」

「変な虫が付かないのは良いのだが、彼女等に付きまとわれるのと変な虫の心配するのとどっちが良いのか疑問に思えてくる。」

「それは難問だな。世界に喧嘩売れても女性関係は涙するなどといった賢者がいたけど・・・・・・・・」

「その辺は同意だな。」

「しかし珍しいですねぇ・・・・・王室顧問様がこちらまで来るなんて。」
「近衛兵その1君、そりゃ、孤児院の子供達を王宮で働かせるに当たって問題部分を調べているところなのだが。」
「訓練中の我々に近づくのはよろしくないでしょうな。流れ弾とかとは言わないけど抜け飛んだ武具とかはあたると痛いから。あとは、王都西部地域軍団長の所とか・・・・・・・・・・・・あの方は鍛え甲斐のありそうな若者とかを攫って仕込むのが好きですから。」
「攫ってとか・・・・・・・・・・・穏やかでないな。」
「最近では補佐見習準爵が根性ありそうだとうずうずしていたけど、傷跡娘嬢の付き添いで旅路に出ているから彼にとっては難を逃れたようですけど・・・・・・・・・・・・」

補佐見習は誰か一人のためだけに世界に戦いを挑む馬鹿者だから、熱血系の将軍だと気に入るんだろうな。

「さっき来ていた近衛文官の孤児院からの人材獲得作戦に乗り気だったのが西部地域軍団長だったりするんですけど。近衛軍団長とかが抑えるのに苦労していたようですね。ほら、管理等の窓が一部壊れているでしょう・・・・・・・・・」
「会議と喧嘩は同一語なんだろうか?」

奇才殿、貴方の作品もガラクタと伝説の紙一重なんですけど・・・・・・
それは兎も角、軍部の修繕費が特に高い理由が理解できた・・・・・・・・・今回の窓は自前でな。次回から会議で壊したものに関してはきっちり自前で直して貰うか。

「窓とか机とかだから軍団長級だったらはした金だろう。」

「軍部削る前に官僚の酒手だろう！」
「あれ？実は自前だぞ。」
「「「「な、なんだって！！」」」」

その場にいた近衛兵、公爵令嬢が一様に驚いている。そんなに不思議なのだろうか？

失礼な輩だ。
そんな雑談をしている間に意気が整ったのか近衛兵達は訓練に戻っていった。
響く剣戟の音。子供たちが見たら喜びそうだな。

「ははははっ！軍部は優秀な子供達を歓迎するぞ。」
どさくさにまぎれて勧誘か・・・・・・・・抜け目ないな。

でも、あそこで小隊規模を率いている士官は？
「あれは、王都東部地域軍団長・・・・・・・・・市場に酒盛でも行くのかな？」

酒盛か・・・・・・・・・・・・・・呑みたいなぁ。
「ご主人様は呑みすぎですから控えてください。」
「健康なのにか？」
「はい、酒の御主人様を取られるのが口惜しいですから・・・・・・・・」

愛い奴だ。酒に嫉妬してもしかたあるまい。
孤児姉を近くに抱き寄せて頭をなでる。孤児姉は眼を細めて気持ちよさげにしている。
しかしこの髪の毛の感触は癖になるな。

「王室顧問、主従の仲がよいのは構わないのですが、管理等に向かいませんか？」
「うむ、奇才魔術師。ついでだから中に入ってみるか。」
私は孤児姉の頭から手を離し管理等へと進む。

名残惜しそうな孤児姉に苦笑しつつ、着いてくる一同。
しかし大人数だな。

孤児院と軍部探訪（後書き）

酒が切れたのでこれまで。さてと、明日で今の現場は最後だ。

孤児院と近衛探訪（前書き）

あらすじ　軍部は比較的まともだった。

作者は朝から酒びたり。仕事がないって嬉しいね。

どこか地方の酒でも飲みに旅に出るかな。

孤児院と近衛探訪

軍部の管理棟にでも向かいますかね。兵舎と執務室が一緒くたになった建物だが・・・・・・・・・

兵舎は・・・・・・・・・・・・

うん！汗臭い！

男世帯で訓練に明け暮れているから、汗やら何やら男の臭いが・・・・・

「乞食の垢染みて臭さと違うね・・・・・・・・・・」

「くらくらする。」「窓開けよう、窓！」

「清掃する方はいないのでしょうか？」

この臭いは孤児娘達には不評のようだ。

一応彼等の名誉のために記しておくと、清掃はしてある。

只、彼等自身の牡の臭いがそこらじゅうに染み付いているのである。

この建物で出汁をとったら、凄い事になりそうである。

「王室顧問、流石にそんな出汁誰も飲みたがらないと思うが・・・・・・」

「いや、王妹殿下あたりだったら喜んで飲みそうだが。」

流石に其処まで王妹（変態）殿下が酷くないと信じたい・・・・・・・・・・

私が仕える王族が其処まで変態だった日には・・・・・・・・・・・・・

・・・もう一度反逆の狼煙を上げたくなるではないか。

「王室顧問、気持ちは判るが近衛兵舎で物騒な思想を撒き散らさないように。」

「おや？近衛団長ではないですか。どうしてここに？」
「先日神殿で馬鹿をした馬鹿共を検分しに・・・・・・・・・・」

近衛団長は頭を抱えそうな表情をしている。
まぁ、馬鹿が部下というのは頭が痛いことだ。
その点、私は配下眷属といえるのは実に優秀だからそんな悩みとも無縁であるのだがな。
今いる孤児姉弟に孤児娘達、今は居ないが補佐見習夫妻・・・・・・・・・・
あっ！頭が痛くなる馬鹿がいたか・・・・・・・・・貴族子弟・・・・・・・・ちゃんと仕事しているんだろうか？
でも、アレを私の弟子として売りに出せば私の弟子の質はあんなものかと孤児達への圧力をそらす役には立つか。

「御主人様、流石にそれは酷いと思いますが。」
「思いつきと情熱だけで突っ走る馬鹿としては十分だと思うが・・・・・それとも、鍛えたがりの軍団長に売りつけるかな。」
「それはそれで二人がはまって恐ろしい事に・・・・・・・・・・」

ちょっと想像してみた。脳筋師弟が
『師匠、修行の成果として（国名削除）の奴隷商と市場を壊滅しに行って来ます。』
『弟子よ、ワシも共に逝こう。お前にはまだまだ教えたりないところがある。』
『師匠！』

うわぁ、暑苦しい・・・・・・・・・
「だんな、それ以前に戦争になりますって・・・・・・・・・・・・・・・」
「別に戦争くらいは良いのだが、暑苦しい連中が暑苦しいやり取り

をすると思うと・・・・・・・・・逃げたくなる。」
「まぁ、無駄に暑苦しくて避けたくなる気持ちは理解できるけど・・・・・・」

馬鹿なやり取りはさて置き、謹慎中の近衛某小隊の面々を見物に行こうか。
近衛医務棟。軍部の傷病者を扱うところだ。王宮の下女やら裏方も運び込まれるのだが・・・・・・・
主に訓練中の事故で傷を負った近衛が過半数を占める。
因みに白衣の美女はいないので期待しないように。

「王室顧問様？だれに？」
「神々が降りたのだろう。」

うそだ！（ｂｙ戦神）
単純に妙齢の女性を置くと下心満載の若者がワザと怪我するというお約束をするからなんだろうけどね（ｂｙ棍棒神）
別に言うほどでもないのだが。（ｂｙ戦鎖神）
そもそも、作者あたりの入れ知恵だろう。あの酔い倒れは仕事が切れたからと飲みながらこの物語を綴っているし、次の仕事探しやがれってんだ！（ｂｙ戦斧神）

どうも神々が五月蝿い。しかし武具の神々が降臨とは流石に兵舎。

てくてくてく・・・・・・

ここが近衛小隊と護衛艦が治療中の謹慎室だな。
「謹慎室ではなくて処置室なのだが・・・・・・・・・・」
「おやおや、医師の先生ではないですか。彼等の容態は如何なんで

しょうか？」
「はっきり言って医者の私が匙を投げるほどの馬鹿っぷりだ。王室顧問、彼等を使い潰してかまわないから引き取ってくれないかね？」
「お断りします、そういうことは近衛団長にでも・・・・・・・・」
「それが・・・・・・丁度良いからとこの部屋で謹慎しろと部屋に押し込めやがって・・・・・・・・患者が色々居るというのに。」

医師は白髪頭をガサガサやりながらぼやく。
「賢者様、近衛の文官室に放り込んで仕事させたら如何でしょうか？」
「そういえば、官僚部屋で護衛官を文官に転向させようとかという話があったな。ついでに小隊規模でやっても・・・・・・・・ふむふむ。」
「そちらの可愛らしいお嬢ちゃんの案は面白そうだ。団長に言って引き取ってもらうか。」
「先生もなんか思うところがあるので？」
「勿論だとも、二日酔い程度でここに来るな！そして酒は飲んでも飲まれるな！第一王妃の年齢ほどの乾杯交わしたら体を壊すのは道理だ！何びゃ・・・・・・・・げふっ！」

崩れ落ちる医師・・・・・・・・・・・・
「先生！先生！」
「衛生兵！衛生兵はまだか！」「誰か医師を・・・・・・・・」「医師ならば其処で倒れているだろう！」
「すいません急患です！小間物屋がまた腎虚で。」「それはほっとけ！」
「何で先生が・・・・・・・・・・　王妃様の年齢？　そんな年いっていないだろう？」
「実は王妃様って・・・・・・・・・・うわぁぁっぁぁあああぁ！

！」

「せいぜい４０いくかいかないか位なのになに慌てているのだろう？」

「知らないって幸せだな・・・・・・・・・・」「ところで患者がいるのにどうするんだよ！」

「命にかかわるのは庭園公のところに運び込め！患者の貞操（美少年、美青年限定）は諦めて貰って・・・・・・・後は街医者か王宮の医務室にでも回せばよかろう・・・・・・・・・・半分以上は打撲と二日酔いだ！」

恐るべし王妃の呪い・・・・・・・・・・

王妃の年齢を詮索するものは災いが降り注ぐというが・・・・・・・・・国家業務が滞るのは問題だと思うぞ。

「ところで賢者様、どうして賢者様は大丈夫なの？」

「孤児娘、それはね・・・・・・・【年齢詮索遂行の護符】（銀貨５枚）を身につけているから、王妃の年齢を詮索したりばらしてもその呪いが降りかかることがないのだよ。」

「へぇ、そんなものどこで手に入れたの？」「わざわざ特注とか？」

「ははは！神殿で作ってもらったのさ。彼等も量産して身につけていれば何事もなかったのに・・・・・・」

「王室顧問！どうしてそのような便利な護符があるのを黙っていたんだ！」「そうだ！そうだ！」

「あの若作りのば・・・・・・・ぴちゅん」

「うわぁ、近衛第二分隊長！」「衛生兵衛生兵はまだか！」

混沌としている。

ああ、ここも子供の教育上悪いな・・・・・・・・・・・・

って、言うか王族がいる限り王宮に平和が訪れないのでは？

孤児院と近衛探訪（後書き）

王妃ネタだと筆ののりが良い・・・・・・・・・・・婆とかおばさんとか・・・・・・・・・・

その呪いはどこま・・・・・・・・・・・（作者は粛清されました）

孤児院と後宮探訪（前書き）

あらすじ　作者は王妃様ネタをして粛清されました。よって話が続きません・・・・・・

折角、仕事を終わらせて自由の身となったのに哀れな作者、彼の魂に幸いアレ。

おお、さくしゃよおまえはまだしぬべきではない・・・・・・・・
（ｂｙ冥界神）

って、いうのは置いといて近衛は大混乱だった。

孤児院と後宮探訪

どこもかしこも子供達の教育上宜しくないなぁ・・・・・・
一応断りを入れにいくか・・・・・・・・・

ぞろぞろぞろ・・・・・・

王室執務室及び私室・・・・・・・・執務室は宰相府の近くなのだが私室は別の離宮が宛がわれている。
奥にあるから奥宮だの後宮だの言われているが、別に今の国王は側室だの愛人だの持っていないから部屋が余っているんだよなぁ・・・・・

大半は王族がらみの客を泊める部屋だったりする。適当にうろついていたら何やらおぞましい本が山積みになっていた部屋とか過去の王族の美容器具が所狭しと置かれていたりする部屋とか・・・・・・・・先王陛下の知行録がほこり被っていたのを見たときには涙が出てきた。勿論埃でという意味ではなく、貴重な資料が朽ちるままにされていることに・・・・・・・

先王陛下、貴方の子供達は無駄に元気です。但し、王族としてよりも人として問題が多いのですが・・・・・・・・陛下はどのような教育を行ったのか詳しく聞きたいです。勿論反面教師として。だから、王都郊外の隠遁所から出てきて子供達（王族）の教育をやり直してください・・・・・・・・

無論、断る（ｂｙ先王陛下）

後宮でも行って見るかね。子供達は王妃あたりに連行されて着せ替

え人形にされている場所である。
「御主人様、後宮というと女性同士のどろどろとしたものを連想しますけど。」
「でも陛下は王妃様しか娶っていないからその心配もない。昔はあったらしいけど、王妃以外の女性を欲したら性愛神殿に通うことの方が多いらしいぞ。」
「今の陛下も？」
「それは答えないのが花だね。ご成婚前は多少通ったことはあるとだけ答えよう。」
「ふーん、男って好きだ好きだ言いながら、下半身は他に向かうんだね。」
「君だけよといいながら・・・・・・次の日にはごにょごにょごにょ・・・・・・しているし。」

思い当たる節があるのか胸を押さえる四席に近衛の団長と王都西部地域軍団長・・・・・・・・
ところでどうして軍部の重鎮のお二方がいるんで？
ついでに公爵令嬢、貴女も付いてくるんじゃない。

「アラ、いいじゃない王室顧問。孤児弟達といるのも久しぶりだし。」
「自分の執務が終わったから暇つぶしだ。」「面白そうだしな。」
「ついで言えば事務官の補充を願おうかと思ってな。王室顧問の所の子供達が最適なのだが・・・・・・・・」
「団長さん、うちの弟妹分商会公様と農園公様が粗方攫っていっているよ・・・・・・・・・・」
「なんだと！」「少しくらい融通してくれんかな？」

そんな、野菜や麺麭じゃあるまいし融通できるものではないだろう。
それ以前に王妃年齢保護呪法で被害にあっている近衛だが放置して

よいのか？
医師が潰れているぞ・・・・・・・・

「ところで王室顧問、例の護符融通してくれぬか？」「ワシのほうも頼む。」
「ダメですよ、これを持っているのをばれたら私の首も危ない。」
「うーむ、ダメか・・・・・・・・」「神殿に問い合わせるか・・・・・・」
「だんな、それ以前にその呪文をどうにかしてもらった方が良いんじゃないの？」
「黒髪の少年、それは難しいのだ。単純に王妃様の放出魔力が感情に連動しているから、王妃様自体を封印できるならば兎も角、それが出来ない現状では禁句として自重するくらいしか対策がないのだよ。まぁ、年寄りが若さに嫉妬するのは・・・・・・・・・・ぐはっ！」

「奇才魔術師さーん！」

無茶しやがって・・・・・・いくら、自分が王妃より若いからってそれを自慢するような事を言うと・・・・・・・・・・
しかし、最近威力が増えているなぁ・・・・前は面前で年齢に触れたとき悪寒がする程度だったのに？

「王室顧問様、神秘緋金属張扇（オリハリセン）の効果と魔術師団は推測しております。かの神具は演芸神の加護を受けやすく、突っ込みの為には色々物理法則とか無視した事が出来ますから。距離を無視してのツッコミをかましているということが考えられます。最近の記録では麦秋伯領近くで王妃の年齢ネタで盛り上がっていた地方貴族たちが集団で・・・・・・・・・・・・」

あいつら、無茶しやがって・・・・・・・・・・
って、いうか一種の思想統制だろう。どこまで無駄に問題起こすのだ。
王妃の前に子供達を連れて行けないな。無邪気な質問に反応して、血の雨が降った日には目を当てられん。

「ところでだんな、王妃様って本当に人間なの？」
「「「「・・・・・・・・・・・・・・っ！」」」」

孤児弟、今更そんな質問を蒸し返すな！私のみならず軍団長達や魔術師達も怯えを見せているじゃないか！
「黒髪孤児男爵、まだ若い身空を無駄に散らすような真似はよくないぞ。」
「そんなに自殺したいんだったら剣を貸してやるから・・・・・・」
「・・・・・・・・・なんて恐ろしい事を・・・・・・・」
「ちょ、皆さんなんでおいらの事を哀れな犠牲者を見る目で・・・・・・」
「孤児弟、短い付き合いだったな。」
「だんなまで！」

「魔力量は通常の人間種族の数十倍から数百倍あるといわれているけど王妃様の種族は・・・・・・・・誰も知らないんだよ。」
「別に我が国では王族の元に嫁ぐのに種族とかその他関係ないんだけどね。子を成せるかと国に損害を与えないかどうかだけだから・・・・・・・」
魔術師達の説明は冷静だが答えは出していない。

「ちょっとまってよ！おいらなんか悪い事したの？」
「いや、お前は悪くない・・・・・・・・・・ただ、質問と場所が悪かったのだ。」

「だんなぁぁぁぁぁ！！」

其処に近づく黒い影。王妃とお付達である。

「人聞きの悪い事を言わないで下さる。私の種族なんて大っぴらにして欲しくないだけで隠すほどのものではないでしょう。」

「王妃様その割には公爵様達もだんなもそこの将軍達も答えてくれないで犠牲者を見る目で・・・・・・・・・・」

「酷いですわね。高々長命系の流れを汲んでいるだけなのに、そこまで秘密主義を徹底することはないでしょう。」

「ああ、だから・・・・・・・・・・ひぃぃ！！」

自力で答えにたどり着いた孤児弟に王妃の眼力が飛ぶ。怯える孤児弟。

世の中には知らなくてもよいことが沢山あるのだ。

大人達と孤児弟のやり取りを呆れた顔で見る娘達。

「王妃様は何時までも若々しいんだからいいじゃない。」「綺麗だし。」

「年齢ネタに走りすぎな賢者様たちが馬鹿なだけでしょ。」

孤児娘達どっちの味方だ？

「御主人様、流石に不敬とか以前に嗜みにかけるかと・・・・・・・・・」

孤児姉まで・・・・・・・・・

冷や汗を流す、男達一同。確かにふざけすぎの部分は多いけど被害も大きいぞ。

前には人死にが・・・・・・・・・

年齢詮索妨害呪法（ばばあというな）を何とかしてください。

いやぁ、時空を超えたツッコミって浪漫じゃない！（ｂｙ演芸神）

おまえかぁぁぁぁ！！

ばちこーん☆

元凶かどうかは判らないけど演芸神を神秘緋金属張扇（オリハリセン）で叩きのめすと少し気が晴れた。

どたばたどたばた！

「演芸神様の神託が！」「また神をぶちのめす馬鹿が！」

「王妃様か？」「いや、王室顧問様だ！」

青褪めた顔をした神職達が私に詰め寄る。

「毎度毎度、神をぶちのめすのは勘弁して下さい！」「枕元で泣き付かれて鬱陶しいんです！」

「非常識ですよ！」「神々に対する経緯がないんですか！」

口々に苦情を言ってくる神職達。そういえばどうしてここに？

「あら、ちょっと私とＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩ☆していただけですわよね。」

「はい、王妃様。」「我々は招待されて・・・・・・・」

感づいた男達

「なぁ、あれって・・・・・・・・・・」「知らない振りをしろ。」

「神職達も哀れな・・・・・・・・・」「先の事を根に持っている

んだな。」

「王室顧問もか弱い女性の年齢をネタに笑い話をするとかしないですわよね。」

「勿論ですとも王妃様。ただ王妃様ってか弱い女性だったんですか？」

ぷちっ！

「王室顧問！潰す！」

王妃は神秘緋金属張扇（オリハリセン）を振りかぶると私に叩きつける。

反応する間もなく私は壁のシミとなる。

「アレはだんなが悪いな。」「ほんとほんと。」「か弱くないでしょうが年齢ネタにされて不快にならない女性はいないわ。」「しかし、神秘緋金属張扇（オリハリセン）一度研究してみたいものだ。」

「王室顧問のも王妃様の物も演芸神の加護付ですから解析が難しそうですよ。」

軽口を叩き合う子供達と魔術師達。

ぺりっ！

打撃から復活した私は

「どこがか弱いんですか！どこが！」

「どこから見てもか弱いじゃないですか！」

「侍女殿、王妃様ってか弱い？」

「王室顧問様、職を失いたくないので質問に答えられません。」

じろっ！
侍女は後ずさる。悪い事したなぁ・・・・流石に侍従官とか女官に聞くのも・・・・・・・・・・
「「あたりまえです！」」

・・・・・・・・・

とりあえず、定番のネタは置いといて。
「定番のネタ扱いですか！！」
「だからそれはおいといて、陛下は何処に？」
「じっくりと聞きたいことがありますけど、陛下でしたら執務室じゃないですか。侍従官情報ある？」
「はい、王妃様。陛下でしたら今の時間執務の予定となっております。執務室か宰相室に居られるものと推測されます。」
「ありがとう御座います。では、そちらに向かいましょう。」

ぞろぞろぞろぞろ・・・・・・・・・
どうして神職達や王妃まで付いてくるのかね？
「いやぁ、一度陛下の下に王室顧問様や王妃様の乱行を報告しませんと。」
「子供達関連でしょ。私の所にも気働きの出来る子が欲しいわ。」

ぞろぞろぞろぞろ・・・・・・・・・・・・・

しかしこの集団、暇人しかいないのだろうか？

孤児院と後宮探訪（後書き）

あれ？なんか王妃との絡みだけで終わってしまった。

孤児院と王宮探訪（前書き）

あらすじ　孤児院の子供達を受け入れるために王宮各所を巡っているのだが、奇人変人ばかりで・・・・・・・・・・うぎゃーーーー！（作者は粛清されました）

最近お気に入り登録やポイントを入れてくださる方がいるのですが、大感謝です。
思わず酒が進みます。（本日3合目）
ついでですから感想も・・・・・・・・・・女性からでしたら罵詈雑言も大歓迎です興奮します。

等と書いたら、引かれるかな？

しかし、週間ユニーク６６７って・・・・・・・・・どうして６６６にならないんだ！

はい、今回も下品ですよ。

孤児院と王宮探訪

ぞろぞろてくてく・・・・・・・・・・
しかし大人数だな。面子を記してみると・・・・・・・・

王室顧問
孤児姉
孤児娘×3
孤児弟
聖域守護辺境伯魔術師団四席魔術師
宮廷魔術師団奇才魔術師
開放公令嬢
近衛団長
王都西部地域軍団長
王妃殿下
王妃付女官
王妃付侍従官
王妃付侍女

すべてが一応身分持ちなんだよなぁ・・・・・
そのうちに何処かの領主貴族が

「おや、なんかぞろぞろと珍しい一行ですな。」
「珍しいですわね魔王領近接地域辺境伯ではないですか。」
「王妃様も御健勝の様子、臣と致しましても喜びを隠せません。」
「王室顧問、これが正しい王妃に対する応対ですわよ。」
「はいはい、私が浅慮でありました（棒読み）」

「賢者様ってこんなときでも王室に対する不敬を忘れないのは流石

と言うか・・・・・・・・」
「御主人様ですし・・・・・・・・」「実際、仕事押し付けられている恨みが・・・・・・」
「私等も酷い目にあったしね・・・・・・・・・・・・・・・」「あの時の王妃様が忘れた仕事の処理は・・・・・・・・・・・・・・・辛かったわ。」
子供達は好き勝手言っている。
勿論そのように育てたからな。

「王室顧問卿、流石に卿だけならばよいが、子供達にもそれを当然とするのはどうかと思うのだが・・・・・・・・」
「将軍の言うとおりだぞ。いくら王族が（作者による削除）だとしても・・・・・・・・」
「不敬発言で即処刑する王族なんだから・・・・・・・・・・・・子供達まで巻き込むな！」
「子供たちが不憫ですわ・・・・・・・・」
えっと、そこの辺境伯に将軍達に侍女まで・・・・・・・・私が悪者ですか？

「御主人様、大丈夫ですわ。王家に弓引くときは私もご一緒しますから。」
孤児姉、私が反逆する前提で発言しないように。

「ねーちゃんはだんな一筋だからなぁ・・・・」
「それはそれで不憫ですわね。」
「義姉様もそうおもう？」
「男なぞ数多いるのに如何して王室顧問をと言うのは疑問に思うが。」
「そうですわね、孤児姉でしたら数多の誘いがあるのに・・・・・・・・」
「こんな魅力的で有能な娘ならばワシの・・・・・・・・冗談じゃ

！そんな怖い目でにらむな！」

最後の発言をした魔王領近接辺境伯は慌てて発言を訂正する。
配下ならば許すが、奥方に側室もいる身で私の可愛い娘達に手を出そうとするならば如何してくれようかね？

「それはそうと、この一行の面々は面白い組み合わせなのですがどうしたので？」

「辺境伯、私の可愛い孤児達を引き抜きたいという話が王宮各所でありまして下見をしていたところなんですよ。それについてくるのがぞろぞろと・・・・・・仕事をしろと強く言いたいですな。」

「それはそれは大変だな。ところで当方にもよこしてくれないのかな？」

「孤児達の数が足りなさ過ぎますよ。宰相閣下なぞは１０くらいの子供でもいいからなんて酷いこと言いますし。」

「確かにそんな子供を寄越したらどんな目にあうか・・・・・・・・・」

きな臭い方向に向かった会話を強引に変える辺境伯に乗る私。
普通に子供を寄越すことに対する危険性を察して心配してくれるなんて・・・・・・良い人だ。

「だからうちに寄越した方が安全かつ将来的にも良いぞ。」

前言撤回。やはり伯も孤児が欲しかったのか

「私等が派手に働きすぎた？」「でも、貴族の若様連中がやわすぎるでしょ。」「配下達も処理能力お粗末過ぎ！」

「孤児娘達、貴族達はおいら達と違ってだんなの教育を受けていないんだからしょうがないよ。」

「ふむ、この子達は鍛え甲斐がありそうだな。」
「西部軍団長、この子達は私が目をつけているんだから駄目ですわよ！」
「妃殿下、それは人材の無駄遣いで御座います。魔術師団に寄越してくだされば、黒髪の少年は特に魔具に対して良い発想をしていますし・・・・・・・・・研究材料として・・・・・」
「当家に迎え入れたいですな。ゆくゆくは領地の経営なぞ任せて・・・・・・・・・・」

こいつ等、子供をあてにしていやがる・・・・・・・・・・自重しろ！
「皆様方、この子達に対する勝手は許しませんよ。」

しかし辺境伯とそのお付まで何故付いてくるのだ？
「ワシも陛下にお目にかかろうとしているところだし、ついでだ。それに面白そうだしな。」
伯も暇人か・・・・・・・・・・・・・・・

てくてくぞろぞろ・・・・・・・・・・皆してぞろぞろ

途中、下女と小姓が逢引していている所をばったりみたり・・・・・・
侍女と近衛兵が事に及んでいるところを見てしまい女性陣が赤面していながらもじっくり見物していたり・・・・・・・
侍女が王妃の存在に吃驚して膣痙攣起こしたり・・・・・・・・・・
それの処置を私がする羽目になったり・・・・・・・・・

如何して国王執務室に向かうだけで何かしら色々あるのだろうか？

下女と小姓はやんわりと注意すればよいとして、侍女と近衛はどうするので？
どっちもそこそこ良い所の子女でしょ？

「流石にあのようなことがあったからには王宮には置いておくわけには行かないですわね。二人を夫婦にしたうえでどこか地方に栄転させますか・・・・・・・・・・・・二人とも気に入っていたんですけどねぇ・・・・」
「王妃様、あの者達の親を呼んで話をしましょう。あの近衛の両親も・・・・・・・・・・・・ごにょごにょ」

カエルの子はカエル

その後も調理場で味見と称して食べまくっている下働きの娘さんたちとか若い衆とか・・・・・・・・・
王宮ではチャンと食べさせているのか？
「・・・・・・・・・・・・・後で調べておくわ。」
実際のところ若いし肉体労働だからいつも腹を減らしているんだろうな。
調理場も別口で用意しているところ見ると食事の一環だったり・・・・・・・・・・

ところで賄いの飯が旨そうなんだが・・・・・・・・・・・・・寄越せ！

はぐはぐはぐ・・・・もぐもぐもぐ・・・・・・・・・・・・・・

「王妃様に貴族の方々まで・・・・・・・・・・・尊いお方が食べるものじゃ御座いませんよ！」
「あっしの昼飯が・・・・・」「うわぁ、食べ盛りの子までいる。」
「・・・・・・・・・・・・むごい」「王室顧問様にはちゃんと食事

があるでしょうに！」

すまん調理場の・・・・・・・・・後でこれで何か買ってくれ（ちゃりーん

銀貨を渡したのはせめてもの良心だ。

「結構いけますわね。明日出してくれる？」

「ふむ、ざっけないものだが美味である。後で調理法をうちのものに教えるが良い。」

お偉方は酷いものだ・・・・・・・・・・

「ううっ！昼飯が・・・・・・・・・・（泣）」「好物だったのに・・・・・・」

「残ってない・・・・・・・・・・」

調理場の嘆きを後に進むのである。

「王室顧問様がくれた銀貨は皆で分けるとしてまた作り直すぞ！」

「うぇーい！」

その日の食堂の飯は手抜きだったそうな。

王妃様反省をば・・・・・・

「そんな日もありますわ。」

食い物の恨みは恐ろしいのに・・・・・・・

後ほど寮に戻ったら料理人に恨み言言われたのは別な話。

そんなこんなで国王執務室に着く。

しかし大人数だこと。

孤児院と王宮探訪（後書き）

酒が切れたので買い出しに・・・・・・・・・・・・・・・

話が脱線しているなぁ・・・・

国王陛下と王室顧問（前書き）

あらすじ　王宮は子供に相応しいところではなかった。

国王陛下と王室顧問

何でこんな大人数になったのだろう？
ここには暇人が多いということで子供達を寄越さなくても大丈夫ということだろうか？

とりあえず、執務室に・・・・・・・・・
執務室には陛下の他にも宰相や官僚共が屯している。

「陛下いますか？」
「おお、王室顧問か・・・・・・・・・・・・王宮の問題点はわかったのかね？」
「問題点は・・・・・・・・・・・・・・多すぎて子供達を送るには不適当で・・・・・・・・」
「子供達に栄達の道を用意していてもか？」
「はい、流石に・・・・・・・・・・・・・変人と問題人物の巣窟に送り込むのは私の良心が痛みます。」

「王室顧問に良心が会ったのか・・・・・・・・」「両親ならば健在と聞いて居るが。」
「そもそもかの一族は王家に対する敬意がない一族だから・・・・・・・・」
好き勝手言っているな、一部事実だが。

「だんな、とりあえず陛下にどこが問題なのか申し上げてみたら？弟妹共が無事に過ごせる足しにはなるかも。」
ふむ、孤児弟は前向きだな無駄に・・・・・・・・・

「黒髪孤児男爵の言うとおりだな。申してみろ。」
「では苦言をば・・・・・・・・・・陛下のお召し物の美意識とか王妃様の年齢詮索妨害とか官僚や宰相府の仕事に対する鬼畜振りとか魔術師団の変体ぶりに書類に挟まれたタタミイワシ、陛下のご兄弟の変態ぶりだの近衛の脳筋だとか下働きが部屋部屋で盛っていたりとか庭園公がショタコンの王妹殿下の同類だったりだとか・・・・・・貴族共が人育てないで我が孤児達を欲しがったりだとか、人に仕事押し付けるとか色々ありますが・・・・・・・・・・・・本当に問題人物ばかりで存在自体が教育上悪いので入れたくないです。」

「で、孤児院自体に問題はないのか？」
「屯している公爵家私兵団とかは、昼間から酒を飲んでたり悪役口調で子供の保護するから誤解されて大変だったりとか孤児達を欲しがる貴族だの官僚だのが寄ってきたり、夜になると王兄だの王妹だのが夜這いに来る程度でしょうか。それは何とかし欲しいけど」
「そこは何とかしよう、何時寄越すのかね？」
「だから危なくて寄越せないですって」

「その割には私達に遠慮せずに放り込んだよね」「犠牲者言ってたし。」「酷いよね」

「王命でもか？」「そりゃ子供等に合わせたくない人物百選に選ばれる程度だし
「誰が集計したか気になるが・・・・・・・・・・・・・・王室顧問も選ばれているだろう？」
「残念、私こそ人格者だから」

「うそだ」「冗談は存在だけに」「あの教育は酷いと思うが」

etc・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なんか問題人物が好き勝手言っている。こんな醜いの子供等に見せられないな。
帰るか

「「「「「「「一番の問題人物が無害宣言出すな!」」」」」」」

そう突っ込みか・・・・・・・・・・・・酷い

国王陛下と王室顧問（後書き）

はい、突っ込まれる場面かきたかっただけです。

飲みすぎて辛いのでこれまで

宮仕えと灰髪少年（前書き）

市場で何時もの様に働いているある日、世話になっている王室顧問様から声がかかる。
「灰髪少年、王宮で働いてみないか？」
「はぁ？」

一介の孤児で何の取り柄もない私に何を言っているのだ？
生活するだけならば市場の売り子と目隠し布だけで十分なのに・・・・・・・

「お前は読み書き計算ができるだろう。王国政府の経理部分の手伝いをしてほしいのだ。」
「王宮勤めなんて兄さん出世じゃない！」
「少年、わし等に構う事はないから好きな道を進んでいいのだよ。」
妹に婆様・・・・・・・・・・・・・・・

どう考えても嫌な予感しか・・・・・・・・・・・・・
「なに、心配することはない。何ならば短期の一時雇いにして後腐れないようにしておくから・・・・・・・・・・・・・・」
「しかし、王宮には黒髪孤児男爵とか孤児娘準爵の皆様方が要るではないですか？」
「人が足りない足りないとうるさくてねぇ・・・・・・孤児院の小さな子まで毒牙にかけて呼び込もうとしているのだよ。一月でいいから来てくれないか？お前の能力は買っているんだ。」
「行ってくればいいじゃない。話の種になるわよ。」

気軽に言うなよ妹よ。幾ら私等が庭園公様のお気に入りとなっているからといっても国政業務なんて気楽にできるものじゃない。

「大丈夫じゃろうて、この貴族様は子供相手に無茶はしないだろうし・・・・・・・市場のほうもワシ等だけで十分賄える。嫌ならば無理強いはしないが見てみるだけ見てみてもよいのでは？」

ふーむ、悩む・・・・・・・・・・

「すぐに答えを出せとは言わんよ。孤児院の子供達とかも仕込まないといけないし・・・・・・・・・・」

言いたい事だけ言うと王室顧問様はお付の娘達を連れて飯屋へと進むのだった。

さて、どうしたものだろうか？

宮仕えと灰髪少年

あの後、わいわいがやがやとアホ臭いやり取りが続き、王命で押し切られてしまった。
拒否権って何？

「ご主人様が拒否しても孤児たちに個別に誘いの手が来るだけですので、条件面でごねたほうが得策かと・・・・・・・・・」
孤児姉の言うことは尤もだ。しかし、子供たちの意思を無視して将来を決めるのはどうかと思う。

これが貴族階級だったら、最初から国の禄を食んでいるので拒否できるわけないのだが国から見捨てられて朽ち果てる寸前まで追い込まれた挙句に国の道具となれというのは酷である。
「賢者様、深く考えないで誘ってみたらどうなの？」「一月とか期限区切ってお試しでとか・・・・・・・」
「一月ならば我慢できるんじゃないの？小遣い稼ぎしたいという子もいるし。」
「小遣い稼ぎならば市場で売り子とかすればよいのに・・・・・・・・・・何ならば職人とかの働き口を紹介するのに・・・・・・・・・・・・」
「孤児娘達の活躍が目立っていますからね。王室からだけでもなく貴族緒家からも問い合わせがきていますし一度弟妹分の質を見てもらって高く買ってもらうのも一つの手かと・・・・・・・」

「あきらめなよ、だんな。王族貴族連中も一度問題起こせば懲りるだろう。」
「仕方ないか・・・・・・・・・・・・お前ら、子供たちの面倒をしっかり見ろよ。」

「「「「はいっ！」」」」

では、孤児院に行きますか・・・・・・・・・・
チビ共に土産でも買っていくかね。

ぞろぞろぞろぞろ・・・・・・・・・・

市場にて灰髪の少年にあったのでついでに誘ってみるが乗り気ではなさそうだ。
「そりゃ、そうでしょう。庭園公の所で色々弄ばれたんだから。」
「それ以前にアクの強い大使達を見ているから苦労すると思っているんじゃない？」
「私たちの次の犠牲者。」

まだ根に持っていたんか・・・・・・・・
「あれには傷ついたから食事奢って！」「美味しい物じゃないと駄目！」
「お腹空いた！」

食事くらいで機嫌治して貰えるならば安いものだ。どこで食べるかね？
ついでだから婆様達も一緒にどうだい？
「灰髪の兄妹を連れて行くがよかろう。わし等親子はもう一稼ぎしてるよ。」
ただ飯と聞いて目を輝かせている強力弟を殴りながら婆様は答える。

「まぁ、良いさ。ほら灰髪兄妹、食事にしよう。」
「「はいっ！」」

そうして私達一行は近場の飯屋に入るのだった。

皿の数が増えて、卓上が賑やかになっている中、もう一度灰髪の少年を誘ってみる。
「王室顧問様、私でも大丈夫なんでしょうか？」
「大丈夫だって、私らでもできるんだし。」「権力の味は甘いわよ。」
「そこそこ王宮内も知っているから大丈夫だって。」
「灰髪少女ちゃんも一緒に来れば？」「えっ！私も来てもいいの？」
「読み書き計算くらいはできるんでしょ？」「できるけど・・・・・・」
「大丈夫、官僚の皆は良い人だから。」

官僚が良い人か？その辺の疑問は置いといて・・・・・・
灰髪少女のほうは不安がっているが乗り気のようだ。成程、妹から攻めて埋めていくのかうまいことやっているな孤児娘達は・・・・・・
それほど犠牲者仲間がほしいのか・・・・・・・・・・・・
「ご主人様犠牲者とはひどいと思いますよ。」

自重しよう。

水菓子やら何やらまで鱈腹に食べた我等は灰髪兄妹と別れ、孤児院へと向かう。

孤児院にて、院長と麦秋老に宮仕えに耐えうる子供達はいるか聞いてみるとほぼ全ての子供達が大丈夫だと太鼓判を押されてしまった。どんだけ仕込んだんだ！

「王室顧問様が面白がって色々仕込んだんじゃないですか。」

「並みの貴族の子息以上の出来栄えだな。礼法とかはこれから仕込まないとまずいが。」

「読み書き計算と各地の産物に法学に神学くらいしか教えていないのに。」

「って、言うか私兵団の中でも教官とかいるからそっち経由で色々教えられているし、神職とか作付け頭とかが興味のある子供たち相手に専門的なこと教えているし・・・・・・・・・どこに進むんだろう？弟妹達は・・・・・・・・・」

孤児弟は案じているが、お前も結構どこに進みたいのかわからないぞ。

私の言いたいことを察したのか孤児弟は無言で悩み始めた。

悩め悩め・・・・・・・・・・

後見から外れたといっても柵が少ないうちに進む道を選んでおくが良い。そのための翼はお前にはあるんだ。

「賢者様、私達で誘って良い？」

「良いけど、好き嫌いだけで選ぶなよ。」

「大丈夫、任せて！」「気をつける。」「私達の使い勝手で選ぶから。」

「誰を犠牲にしようかな・・・・・・・・・・・・」

なんか不穏当な発言が・・・・・・・・・

「ほら、ご主人様孤児娘達に悪影響が・・・・・・・」
「王室顧問、宮仕えするものを犠牲者とか・・・・・・・・・どんな扱いするんだ?」
「王室顧問様・・・・・・・・・・・可愛い子供達が不憫な思いするのは見過ごせませんよ!」

ははははっ・・・・・・・そんな酷い扱いはしていないのだけどね。

宮仕えと灰髪少年（後書き）

結局、王室顧問様に口説き落とされて（孤児娘さん達や妹の勢いに負けたとも言う。）王宮に召しだされることとなった。

読み書き計算はできるがこの位だったら市場の商人達はほとんどできる。農家の露店には出来ない人がいるけどそれでも誤魔化しとかは殆どない。

一度誤魔化しをしたらその店に顔を出せないしそれを見ていた店からも締め出しを食らってしまうのだから。

それはさて置き、王城の門衛さんを始めとして結構市場の常連さんがいたのは驚いた。近衛の兵隊さん達は妹を見て困ったことがあったら声をかけてというし、下働きのおじさんやおばさん達も何度も市場で見かけた顔だった。

官僚の皆さんも市場で入り浸っていた酔っ払いだったと知り、安心する。

ぜんぜん見知らぬ人の中で働くというのもちょっと気後れするから。

仕事自体も帳簿付けの延長だったんで確かに私達を呼ぶ意味がわかった気がする。

ふむふむ、しかし間違いが多い・・・・・・・・・・

これを一つ一つ確認するとなれば人海戦術で行わなければならないのは理解した。

そこで縁故のない孤児達を使うというのも理にかなっているかな。

これが何処かの貴族の子弟だったら色々義理とかあってやり辛いだろうし・・・・・・・・・

まぁ、一月の間付き合うとするか・・・・・・・・・・・・支払いもよさそうだし。

意外と貴族の方々も市場で見かけた顔があって吃驚である。
向こうにしても私達兄妹が居ることに驚いているのだが、王室顧問様の紹介でと説明すると納得してくれる。

なんか、可哀想な者を見る目で居るのは気のせいだろうか？
市場で顔馴染みとなった子爵様に聞いてみると

「知らずにきたのか・・・・・・・・・・・・・・これは言って良い物かどうか、官僚部屋は出世の窓口なのだが激務のあまり倒れるのが多くて貴族の子弟とかが良く逃げ出すんだ・・・・・・・・・・・・ほらっ！あそこを見てみるが良い。」

子爵様に示された方向を見ると・・・・・・・・・・・・
身形の良い若者が近衛の兵隊さんにつかまっている姿が見える。
なんか、書類は嫌だとかこの私を誰だと思っているんだとか、幾らで買収できると言っているけど聞く耳持たずに官僚部屋に連れ込もうとしている。

成程、世の中書類仕事に向かないものがたくさん居るからなぁ・・・・・

「もし、何かあったら相談に乗るから。乗るだけしか出来ないけど・・・・・・強く生きるんだよ。灰髪少年！」
と肩を強くたたかれてしまった。どんな場所だここは？

それでも仕事量は多いけど死ぬほどでもないし適度の休憩をとれば問題ない。

その辺の配分が出来ないのだろう。貴族の見栄とかも大変だな。

数日働けば仕事の配分もわかってくるし、時折庭をぶらつく余裕も出てくる。

あまり遠くに行くと良くないといわれているので近場限定だが・・・・・・

王族の場所とかいくと不審者扱いされたりするんだろう。

「そんな生易しいものじゃなくて・・・・・・・・・・男色家の貴族とかそれを見物する令嬢達とか・・・・・・・・男の子達は気をつけるんだよ。気をつけても駄目なときは駄目なんだが・・・・・・・・・・某なんて・・・・・・・令嬢達の妄想がうわさになって・・・・・・・・・・・はぁ・・・・」

うわぁ、聞くんじゃなかった。

しかし、この場所は顔なじみの客が多い。

「おや、灰髪の少年ではないか？先日買った目隠し布、あれの具合は良かったぞ！また販売してくれ！」

「卿もか？あれを娼館で試したら燃える燃える。久方ぶりに腰にくるまで楽しんだよ。」

「あれは良いな。自分で使ったら中々新鮮だったし・・・・・・・・・・・・」

どうして、ここまで来てこんな話を聞くんだろう？

あの目隠し布は盲目（めくら）の為の道具なのに・・・・・・・・・・

貴族様、ここまで来て聞きたくなかったです。そして公の場でおおっぴらに話さないでください。

挙句の果てには財務長と外務長が目隠し布の上得意だったりするんだ。

市場で色々詳しく聞かされてうんざりしているのにここでも聞かされる羽目になるとは・・・・・・・・・・・・・・・

流石にほかの孤児達や妹には言っていないようだが、私も聞きたくないんだ！

本当にどんな顔して仕事すればよいのだろう？

勘弁してください・・・・・・・・・・・・・・・

宮仕えと灰髪少女（前書き）

王室顧問様と孤児娘さん達の誘いで王宮に働くこととなった。
前に庭園公様の臨時侍女を勤めた事があるからその流れだろう。

えっ？経理部分の手伝い？
私は目が・・・・・・・・そっか、目隠し布があるから見えるか。
兄さんは渋っていたが、多分貧乏くじを引く羽目になると嫌がっているのだろう。
兄さんは巡り会わせが悪いから・・・・・・・・

市場にいても酒国の姫大使様のお世話で面倒事に巻き込まれていたし・・・・・・・・
あの方も脱ぎ癖がなければ良いのだけれど・・・・・・・・・・

少なくともここにいればそんな事を気にかけなくても大丈夫。

あら、姫大使様・・・・・・・・・

兄さん、ごめん私には助けることが出来ない・・・・・・・・・・

「判っていたさ妹よ。大使だから王宮に来ることもあるだろうし面倒事は私が受け持つことになるのだろうってことを・・・・・・・・・・
・・　はぁ・・・・・・」

兄さん・・・・・・・・・

本当に運が悪かったんだね・・・・・・・・・・

「言わないでくれ、へこむから・・・・・・・」

宮仕えと灰髪少女

下準備をして孤児院の子供達を寄越す日が来た。
お前等孤児娘達や孤児姉弟の言う事を聞くんだぞ！
本気で心身の危険があるんだからな。

はーい！

と口々に言っているが心配だ。国王も宰相も心身の保障はしているが何かあったときにどうするとはいっていないし・・・・・・・・信用出来ん。
「御主人様、何かありましたら潰して差し上げれば宜しいだけですわ。」
「そうそう、皆して引き上げればいいだけでしょう。」「最悪どこかに亡命すれば良いだけだし。」
「色々、官僚の皆さんが護身用の魔法具を・・・・・・・・・」

一番それが問題なのだが・・・・・・
年端も行かない子供に体の内側から焼く火炎魔法とか指先から腐る魔法とかえげつない魔法具を用意する馬鹿は！
「財務官さんが四席と奇才さんに頼んだらしいよ。だんな。なんでも安上がりに効果的な魔具をと・・・・・・・・」

確かに安上がりだろうさ、実用実験も兼ねた魔具だし・・・・・・・・・
もう少しおとなしい物はなかったんだろうか？あれを使った日には子供達は夜魘される事間違いなしだぞ。
「流石にこれを喰らう気にならないと思うけど・・・・・・・・・・」
「願わくば王妹殿下あたりが犠牲になってくれれば大歓迎だが。」

「賢者様えげつなーい！」

そんなこんなで初日となる。
孤児院に迎えの馬車が来て子供達を連れ去っていく。
勿論私も付き添いということで一緒に乗り込む。
「賢者様楽しいね。」「がんばるぞー」
「王宮って、どんなところ？」
子供達は口々に私に語りかけてくる。私はそれに答えながら、大丈夫かなと心配になる。

知識面では下手な文官くらいの力量を持っているが子どもである。
小さいうちから汚いものを見せて人格が歪んでしまわないか心配である。
「大丈夫だって、だんな。そういうものを見て生き残ってきたんだ。おいらの弟妹共はそんな柔じゃない！」

ははははっ、私は心配しすぎか。
では、子供達よ存分に暴れまわれ！
王宮は狭いかもしれないが多少の事では壊れないから安心してよいぞ。

そうして我等一行は王宮に行くのであった。孤児達は１０人程、後は灰髪の兄妹がいるのである。

わらわらわら・・・・・・・・・
子供達の群れに違和感を感じている者がいるが、私も同じ気持ちだ。
出来ればもう少し育ててからにしたかったが、仕方がない・・・・・・

って、言うか貴族の子弟はどうした？
「王室顧問、お前が潰しまわっているだろうが！」
「宰相閣下、人聞きの悪い事言わないでください。国の要たる貴族に相応しい能力を要求しただけで悪いことしてませんよ。せいぜい、ここにいる孤児達程度の能力なのに・・・・・・・・・・・・」
「その無駄に専門的且つ高度な教育を施しておいてこの子達をどうする積もりかね？」
「普通に市井の生活で幸せになってもらいたいだけですけど？」
「目的はわからんでもないが・・・・・・・・・本当にワシの傍に欲しいぞ。」
「引退するのにいらないでしょう。」
「・・・・・・・・・・・でも、何時引退できるかわからんからな。王室顧問のせいで。」
「人のせいにしないでください！」

「って、言うかこんな小さい子で大丈夫なのか？」
「王宮子爵卿、貴方だって自らの配下に欲しがっていたでしょう。」
「そうなんだが思ったより幼かったからな・・・・・・・・・それに小さい子は遊んで学ばないと。」
「だからこの王宮全部を遊び場にしろと（ニヤリ」
「王室顧問、危険発言をしないように。」
「陛下、この子達が私の自慢の教え子達ですよ。本気で暴れまわりますんで覚悟願います。」
「・・・・・・・・加減という言葉は・・・・そうか、お前にはなかったな。宰相、ある程度は抑えるよう気をつけておけ。」
「はっ！」

なんか、孤児達を災害か何かのように・・・・・・・
「いや、王室顧問お前が人災なんだ。」

酷い言われようだ・・・・・・・・・・
「御主人様ですから仕方ないですわ。」
「賢者様という嵐の後で風通しが良くなって若いのが育ったりしているから、災害も悪い事ばかりじゃないでしょう。」
「そうね、変化がないとダメだし」「対応できないのが悪い。」
「そもそもだんなの実家程度御せない王族というのは・・・・・・・・・」
「孤児弟、末王女と王位与えるけどやってみるか？」
「陛下、おいら如きではあの一族は御せませんので・・・・・・・・・・・陛下に一任いたします。後、末王女様は要りませんので・・・・・・・・・」
「だろう、だろう・・・・・・」
「陛下、流石に大人気ないかと・・・・・・・・・・」
「判っておる。判っておるがそれだけは言われたくなかった・・・・・」
「陛下すいません・・・・・・・・・おいらもあのだんなの外付け良心回路などと言われて・・・・・・・」
「苦労しているな孤児弟。」「わかってくれますか陛下・・・・・」
えっと、この二人一度〆た方が良いかな？
「王室顧問、後で国をちゃんと管理出来るならば陛下を〆て良いぞ。」
「うわぁ、宰相閣下ぶっちゃけてる。」「ふむ、普通に〆る事が出来るか・・・・・・・・・ついでだから・・・・・・・・・」
「賢者様目がマジだよ。」「御主人様仕事が増えますよ。」
はっ！あぶないあぶない！
こんな（削除）でも私が仕事しないための盾だったんだ。自らの手で壊すところだった。

「王室顧問、王家に対する忠誠とか言うのは諦めたつもりだがワシの扱いが酷くないかね？」
「酷くないでしょう。ねぇ、王宮子爵卿に魔王領近接辺境伯卿」
「ワシ等に振るな。」「どっちに答えても問題発言にしかならない質問するな。」
「おやおや、お二方。問題発言って何ですか？」

うおっほん！
宰相の咳払いに一同雑談を止める。

「陛下の能力がどうとか下らない話は追い解いて子供達を仕事場に連れて行くぞ。」

陛下の能力というのは国にとって重要な話だと思うんですけど・・・・・
「わし、飾りでいいならそれでも良いんだけど。」
「陛下は私以上の能力を持って国政に相対してもらわないと。」
「それは無茶振りが過ぎると思うけど。」「かといって王室顧問に国を任せたら世界が混乱する。」

酷い言われようだ。
子供達、本気で暴れて良いよ。

はーい！

宮仕えと灰髪少女（後書き）

私は事務仕事の合間に魔術師団で目隠し布の試作品の使い勝手を報告している。
今日渡されたのは一部色つきの試作品。

赤と緑だけ見えるって・・・・・・・・・なんか気持ち悪い。
悪いけど白黒の世界のほうが馴染みあるかな。

他にもいろんな試作品を持ってくるんだけど一度なんか裸しか見えない者を着けてしまったときは・・・・・・・・・・・・・・・

この話は置いときましょう。
色付きなんだけど肌色が多くて・・・・・・・・・・・・・・・

黒髪孤児男爵様が一番立派だったという事だけ・・・・・・・・・
乙女の口からなにを言わせるのです。

ほかにも、奇才魔術師さんの作品は・・・・・・・・・・・・・
異世界のメガネという道具を模した視力付与魔具をつけたら。
メガネから光が放たれたりとか・・・・・・・・・・・・ろくでもないものが・・・・・・・・・・・・・・

これってメクラたちに必要なんですか？
「いや、私個人の浪漫だ。」

でも、この惨状は・・・・・・・・・・・・・・・

（焼け焦げた芝生、折れた大木、ひび入った城壁を見て、呆然とす

る灰髪少女であった。）

宮仕えと農村孤児（前書き）

おらは王都近郊の小さな村の出身だ。実際に村の名前も覚えているし孤児院に来たのも数年前だ。

父ちゃんも母ちゃんもその村の地主領主の元で小作人をしてた。
村全部が親戚みたいなもので地主様も良い人だった。
村中が豊かとは言えねえがそれなりに暮らしていた。

父ちゃんは金を貯めて何時か自分の土地を持つんだと言ってた。
家族皆もそれは良い事だと一生懸命働いていた。

汗だくになって働いて、夜に一杯の酒と家族の食卓。これがあるべき姿だと思ってた。そして、こんな生活が何時までも続いていくのだと。

そんなある時、村に流行病と洪水が起こった。
順番で言えば洪水があってその片づけをしているうちに弔いの済んでいない村の皆とか打ち上げられた魚やら獣が腐って疫痢が流行ったんだ。

小さいのから先に倒れて、村の人達もバタバタ・・・・・ガックリおらは何故か丈夫だったのか罹っても軽く済んでいた。
村に駆けつけていた医者の話では稀に病気に強いものがいてその者は罹っても直ぐに治ってしまうのだと言ってた。
その医者も疫痢を恐れて直ぐに町に戻ったんだが。

地主さんも私財を投じて何とかしようとしていたんだが、上手くいかなくて村は廃村となり地主さんも町に出る事となった。

村の皆は散り散りになり、おらは孤児院に預けられることとなった。
地主さんはおらを孤児院に送るとき、申し訳ないと謝ってくれていた。
地主さんはどうするのかと聞いたら、爵位を返して町で商人をしている次男さんの所に身を寄せるのだという。本当はおらやら他の子供達も何とか出来たら良かったんだがと頭を掻いていたが、地主さんが半数くらいの子供の引き取り手を捜すだけで精一杯だったらしい・・・・・・・・・

その時おらは泣いていたんだと思う。地主さんも奥さんもおら達子供衆を抱きしめてごめんねごめんねと謝っていた。

孤児院の生活は・・・・・・・・・王室顧問様が手出しするまでは大変だった。
村から来た子供衆はおらの他にも何人かいたんだが、最初の一年で半分が病気やら何やらで死んで、次の年には栄養失調になったりして更に半分が死んで・・・・・
結局のこったんがおらと後二人ほどだった。

あの当時は本当に大変だった。お腹がすいているのが辛いんだが、それでも食べ物を得ようと野菜屑を植えて育てたり・・・・・・・・・摘める野草を用意したり・・・・・・・・・
このときほど父ちゃんが仕込んでくれた技に感謝した。そして、思い出と技しかつながりがないのに悔しさを感じた。
院長先生も金策に走っていて、だんだん痩せていった。
それでも孤児院で耕してもおら達全部食わせるには狭いし・・・・・・弱い子達からくたばっていく。悲しかった。悔しかった。何も出来ない事と誰も助けてくれない事を・・・・・・・

そうやって何年か過ごす、孤児弟の馬鹿が貴族様の財布を狙って捕まったと聞いたとき・・・・・・・・・血の気が引く思いがした。
貴族ってもんはおら達のことをゴミか何かと勘違いしているから皆殺しとかひどい事をするんじゃないかと覚悟を決めた。いや、覚悟を決めるしかなかった。
せめてチビ共はおらが盾となって逃がす時間くらいは・・・・・・・・・なんて柄にもない事を考えてしまったのは内緒だ。

王室顧問様、その時は法務官様と言うべきだろうか？
あのお方が来たとき。孤児姉さんも弟も綺麗な服を着て法務官様の後から付いてくる。太ったおばちゃんがおら達に菓子を沢山振舞ってくれる。

甘いなぁ・・・・美味しいなぁ・・・・・・　腹いっぱいだなぁ・・・・
甘い菓子なんて初めて食った。寝床で動けないでいる子にも食わせてやりてぇ、と一掴みとって動けないチビに食わせてやった。
美味しいね、幸せだねといって喜んでいた。

次の日、力尽きていたが・・・・・・・・・・・・・・・

その日から飢えていたり病気で死んだ子供はいない・・・・・・・・・・・・・・・人攫いにあってなぶり物にされた子はいたんだが・・・・・・・・・・・・

その日からもおらは変わらずに孤児院を耕して、野菜を作る。
そんなことをしなくても飢える事はないんだよと院長先生は言うし、子供達も食べ物一杯あるのにと言ってくる。それでもおらは畑を作る。

確かに法務官様はいい人だ。
おら達一人ひとりに気をかけてくれる。そして読み書き計算も教えてくれる。
何時だったか公爵様の配下にいた作付頭のおじさんがおらに畑仕事を教えてくれた。そして、良かったら公爵様の小作として働かないかと誘ってくれた。おらの他にも色々あって孤児院で保護されている女性とか働き口を用意するからと親身になってくれた。公爵様の奥方と言うふくよかなおばちゃんがくれた野菜は本当に旨かった。
おらが育てていたモノは雑草だったんか・・・・・・・・・
悔しい！　何時かアレよりうまい野菜を育ててやる。

そして、お金を貯めて生まれた村に父ちゃんや母ちゃんが眠る地に自分の畑を持って父ちゃん達の夢をかなえるんだ！

宮仕えと農村孤児

結果だけ言えば、杞憂だった。
多少の騒動や問題はあったが、子供達は元気に暴れまわっている。

「多少で済ますのか王室顧問？」
「財務官、国政が回って子供達は健やかに仕事をしている何か問題でも？」
「問題大有りだろう！財務官ではないが、帳簿の違いを洗いなおしてくれるのは良いのだが過去１００年間の帳簿を全て洗いなおして貴族緒家の横領を金貨一万枚単位で見つけ出すとか、それに付随する領民に対する不当な扱いとか・・・・・・・・・・・お陰で、宰相府は対応でてんてこ舞いだぞ。」
「宰相府付の事務官。実際それが狙いだったんだろう？」
「それはそうなんだが・・・・・・・・・・・桁が多すぎて処理能力が足りない。」

見つけた帳簿のアラ・・・・・・・・約金貨一万二千枚。
犠牲になった臣民の保護・・・・・・・近接数年分しか出来ないが・・・・・・・国軍だの近衛だのがてんてこ舞いだ。
名誉回復の必要があるもの数百人・・・・・・・・・・これでも最少数での数値である。

貴族緒家は先代、先々代それ以前の問題点に泣きを見て、孤児達を害そうとするのだが・・・・・・・・・

よくよく考えたら、奴隷商人を単独で拘束する程度の暗黒神術だの戦闘能力持っていたっけ・・・・・・・・・・
しかも、孤児院に入り浸っている神々（ひまじん）共が加護与えまくっているか

ら・・・・・・・・・

うん、返り討ち決定と言うか・・・・・・・・・・・・・・・子供だから加減知らないし・・・・・・・・・・

大人しくごめんなさいした方が楽という結果に・・・・・・・・・

はい、後処理とかで仕事量増加するのは子供達が有能ですから・・・・・・・・・・

「王室顧問、子供達に自重という言葉は？」

「手加減する気はないのか？」

「だから、子供たちを送るの躊躇っていたんですよ。王命だの貴族絡家の要求だの自分で首を絞めているんだから私に何も出来ないですよ。しかも、子供達を害そうとするなんて当家の面子を潰す行為ですから私個人としても本気で対策取らせてもらいますよ。」

「って、言うか襲撃者が性的不能（インポテンツ）になったり、延々と王妹殿下の著作を聞かされるなんて人道的じゃないだろう。」

「いい見せしめですね。」

ふむ、子供たちに自重か・・・・・・・・・・・・

って、言うか官僚達が子供達の結果を面白がって追求した結果なんだが・・・・・・・・・・

寧ろ官僚共一緒になって暴走するな！

「いやぁ、あの家は当家の隣の領土で境界線争いが・・・・・・・・・・・・」「以前土地無しと嫌味言われたから。」

「我が妻に懸想して鬱陶しかったから。」「あの体臭が気に食わない。」「俺の彼女を取った。」

等など・・・・・・・・・・・・・・・

お前等私怨だったんかい！

思わず神秘緋金属張扇（オリハリセン）でとつきまわしたが私は悪くない。うん、私憤で国政を混乱させた官僚（ばか）共に対する正当な制裁（しゅくせい）だ。

なんか敵ばかり増えている気が・・・・・・・・・・

「御主人様、この案件が終わったら子供達を引き上げて引き篭もりますか？」

「それも良いかもな・・・・・・・・・・」

庭園で茶を喫しながらゆるりと時を過ごす。

そのうちに休憩時間を迎えたらしい子供達がわらわらと寄ってくる。

可愛い子達よ・・・・・・・・・

ドンだけ暴れたんだね？

「えー、帳簿のアラを倉庫一杯を皆で見つけただけだよ。」「あしたはもういちどかくにんするんだぁ」

「如何して貴族って計算できないの？」「一応過去１０年分の物価表も作ってあります。」

「時々じゃれ付いてくる兵隊さんいたけどアレは遊んでいいんだよねぇ？」

「貴族様が泣いていたけど・・・・・・・・・・」「僕にはうちにおいでと御菓子くれた。」

・・・・・・・・・・貴族緒家なんかごめん・・・・・・・・・・

・

そんな中でも項垂れているのもいる。

灰髪兄妹どうした？

「姫大使様のお世話役を拝命してしまいまして・・・・・・・・・・・・ああ、あの酔っ払いが・・・・・・・・・ここまで来るとは・・・・・・・・」

「奇才魔術資産の試作品で・・・・・・・・・・・肌色ばっかり、椎の実怖いマツタケ怖い・・・・・・・そして壊したのどうしよう・・・・・・・・・・」

なんか、この兄妹連れてくるの間違いだったかな・・・・・・・・・・・・

って、言うか・・・・・・・・・・・壊した？

「ああ、だんな。奇才魔術師さんが作った眼鏡型視力付与魔具に怪光線機能をつけていたらしくって・・・・・・・・・・」

「灰髪少女、大丈夫だ。それは魔術師団で何とかさせるから・・・・・・・・・って椎の実とかは？」

「それは・・・・・・・・・・・あの肌色型透視布（のぞきぬの）でモロニ・・・・・・・・・見てしまったらしく・・・・・・・・・・・」

「ああ、それは災難だったな・・・・・・・・・」

潰れている灰髪少女を撫でて慰めるのであった。

「王室顧問様私のほうは？」

「流石にお前を逃がしたら国交問題だ。一月は我慢しろ。」

「ううっ・・・・・・・・・・・・」

「あとで、それとなく話し通しておくから。」

「お願いします・・・・・・・・・」

しかし姫大使の世話役なんて何が会ったのだろう？

「御主人様、灰髪の少年は姫大使様の脱ぐところを外套でうまく隠して同席していた大使達や貴族の若い者から恨みを買ったそうで・・

・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・うん、それは恨みを買うな。」
「御主人様！」
「むくれるな！男ならば綺麗な女性の裸を見たいと思うものだぞ。」
「・・・・・・・・・・・・・・むぅ！」

膨れている孤児姉を撫でて宥める・・・・・・・・・・・・・可愛い嫉妬心だ。
機嫌は治りそうにないな。

他の子供達は大丈夫かね？

口々に　はーい　だの　だいじょうぶ　だの　もんだいない　と答えが返ってくる。
頼もしい事だ。

宮仕えと農村孤児（後書き）

何故か王宮で働いている。
おらは農園で働きたかったのに・・・・・・・・・・・・
王室顧問様が教えてくださった帳簿術・・・・・・・・・
それを使えば簡単だが単調で・・・・・・・眠くなる。

小遣い稼ぎと思ってやればいいといっていたが働くからにはちゃんとしないと・・・・・・・・・

なんか働いているうちに官僚さんたちに気に入られて専属でこないとか誘われているんだがおらは畑仕事がしたいと断る。

官僚さんたちは引き下がってくれたが貴族さんたちがしつこかった。
おらが断っているんだが、貴族さんたちは畑仕事より金になるとか君の力が必要だとか言ってくる。

挙句の果てに
「畑仕事なんてものは・・・・・・」

ぷちっ！

思わず殴りそうになってしまった。
おらの体は同年代の子供達に比べて大きく畑仕事で鍛えられているのか力も強い。

そんなおらの殴りを片手で止めたのがたまたま通りすがりの護衛官様だ。

「卿らは少し落ち着け。少年よ君の痛みはわからないがだからといって人を殴っていいもんではない。君が人を殴るということは孤児院の皆や王室顧問に累が及ぶ事もあるのだぞ。」
おらは現実を築かされて驚いた。

「両者共に頭を冷やしておけ。この場は某が預かる。」
とおらの首根っこを掴んで引きずっていく。

おらが仲裁の礼を言うと・・・・・・・
「君はこの場所に向いていないな。王室顧問に声をかけておこう。」
と言ってずりずりとおらを引きずっていく。
片手でおらを持っていくとはどんな膂力だ?

おら王室顧問様に怒られるんだろうな・・・・・・・・
ちょいと怖くなっている。仕方ない正直に言って怒られよう。
悪いようにはしてくれないだろう。

宮仕えと孤児弟（前書き）

すいません、一度間違って消してしまいました。
改めて・・・・・・・直接書きだから一々打つのが面倒くさい。

如何して仕事が増えているのだろう？
孤児院の弟妹共を食堂に連れて行きながら思った。
食堂にて旺盛な食欲を見せている弟妹共を見て食堂の調理人とか賄い婦のおばちゃんたちはおいらに対してちゃんと食わせているのかと怒っているし・・・・・・

その担当はおいらじゃなくてだんなか国だろうに・・・・・・・・・

「馬鹿言っちゃいけないよ。あんたは孤児達を守るために立っているんだろう。王室顧問様や国に対して働きかけないとダメだろう。あの人たちと言うか上と言うのは細々としたところをわかっていないんだから・・・・・・・・」
「でも、おいらは十分食えていたし、弟妹達も黴の生えた麺麭とか雑草で嵩増しした粥じゃないものを食えているから十分満足しているよ。」

ぴきぴきっ！
どうも、比較対象を間違えたようだ。
「孤児弟、君は底辺の暮らししか知らないからそれで満足しているのか・・・・・・・・・・・俺が間違っていた・・・・・・・・・・・・・・・ちゃんと飢えないで喰えているだけで十分なんて・・・・・・・

・・・欲がないと言えば欲がないが、人の暮らしと言うものを思えなくてはならんな。」
「料理人さん、なんか目が怖いんですけど・・・・・・・・・・・・」
「孤児院では何を食わせているんだ?」
「羊の丸焼きに野菜の焼いたの・・・・・・・・・・・」
「ふむ、荒野の民の料理らしいけど・・・・・・・・・・・・旅装料理だな。ちゃんと料理したものを食べているのかが疑問だ。」
「料理人、お前孤児院に行って料理の何たるかを教えて来い!これでは子供達があまりにも哀れだ!」
「はいっ!料理長。少し抜けますが宜しいでしょうか?」
「嗚呼、構わん。羊の丸焼きだけで料理だとか満足だと言っているガキに真の料理と言うものを教えてやれ!」

あれ?如何してこうなったの?
周りの兵士や下働きのおばちゃん達も・・・・・・・・・・
貴族様は気が利かないんだからとか後で上奏しないととか言う声がちらほら・・・・・・

宮仕えと孤児弟

子供達関連の問題点とかちらほら・・・・・・・・・・・・・・・
苦情内容はいつも一緒。

一番はやりすぎということだろう。
「御主人様宰相府から仕事が増えていると苦情が・・・・・・・・・・・・」
「それはほっておけ、一時的現象だ。なんせ数十年分の帳簿の洗い直しをしているから其れなりの量の不備な点が出てきているんだから。それよりもそれを突き詰められた貴族たちからの反撃とか嫌がらせのほうが問題だ。子供達の身辺は大丈夫か？」
「それだったら、弟妹共は個人戦闘力はそれなりにあるから返り討ちにしているよ。」
「孤児弟返り討ちって？」
「孤児娘達が先頭になって、支給された魔具を試しているとか・・・・・・・・・・・・・・・２０人くらい捕まえているけど誰も正気に戻っていないのが問題かな。」
「人死には出ていないようだが手加減しろとかいえないだろうな。手加減できる力量じゃないし・・・・・・・・・・・・」

今いる場所は庭園、茶を喫しながら孤児姉弟と問題点の洗い出しをしている。

しかし、むちゃくちゃだな。
「だんな、主に官僚方が恨みのある貴族に対して色々しているから余計にこじれているんじゃ・・・・・・・・・・・」

嗚呼、そっちか・・・・・・・・・・・

婚約者を取られたとか、学園時代に成績で負けたとか・・・・・・・・・
土地なし貴族とからかわれたとか色々確執あるからなぁ・・・・・・・・
最近だと街道管理官が街道の不備を指摘したら、色々嫌味言われたと愚痴っていたから仕返しが・・・・・・・・・
奴等に孤児達はいろんな意味で良い玩具だったんだな。後で宰相閣下か陛下経由で釘刺してもらわないと。

そうしているうちに孤児達がやってきた。

「賢者様！今日は某伯爵家の帳簿を片付けたよ。如何して計算できないんだろうね？」
「こっちは王弟殿下の帳簿を・・・・・・・・毛生え薬の支出が・・・・・・・・酷かった。」
「王宮男爵の帳簿は・・・・・・・・・・逃げられた婚約者への贈り物が・・・・・・・・・・かわいそうだね。」

色々貴族家の機密が・・・・・・・・・・でも、最後のはそっとしておいてやれ。

そこで項垂れているのは三匹ほど・・・・・・・・・・
どうした？

「王室顧問様、如何して王宮に着てまで姫大使様のお世話する羽目になるんですかねぇ・・・・・・」
これは灰髪少年。いつもの愚痴だ
「諦めろ、貴族相手ならば多少無茶できるけど他国の王族相手だとなんともできん。後でそれとなく外務官あたりに働きかけて配置転換できるように働きかけてやるから暫く我慢しろ。」

「はい・・・・・・・・・・・・・」

市場でも大使達の面倒見る羽目になっていたから、その流れなんだろうな。可愛そうに・・・・・・・・・・・

灰髪少女は？

「奇才魔術師様の試作品の付き合いをしていましたら・・・・・・・・・いやぁ！目隠し布かと思ったら・・・・・・・・・・」

「だんな、灰髪少女は目隠し布の試作品と間違えて、また透視布をつけてしまって・・・・・・・・」

「それは災難だったな・・・・・・・」

「椎の実長茄子うらなりきゅうり・・・・・・・・・・見たくなかった・・・・・・・・・・ぶつぶつ」

可愛そうに、汚いものを見てしまったんだね。これが大人となることだ・・・・・・・・・・

「御主人様綺麗にまとめようとしましても・・・・・・・・・・」

灰髪少女を撫でながら孤児姉。

目隠し布の実地試験は別の場所で行ったほうが良いのか？

それとも、別の部署で働かせるか？

「おらは貴族様と喧嘩になりそうになって・・・・・・・・・護衛官様に仲裁してもらったんですが・・・・・・・・・・」

「喧嘩の経緯は？」

「おらを誘ってくれていたんですがおらが農家をやりたいからと断ったら『畑を耕すなんて能無しのやることだ・・・・』と言われてついカッとなって・・・・・・・」

「ふむ、すぐに謝りにいかねばならんな。孤児弟と農民孤児付いて来い。」

その貴族の所に詫びに行く。
詫びというのは自分が悪いと思ったら直ぐに行くものだ。後からだと行きづらくなる。

「楡林卿、うちの子供が申し訳ないことをした。」
「いや、王室顧問卿。こっちもこの子のことを馬鹿にした言い草をしたわけだしお互い様と言う事で・・・・・・・それに護衛官卿が仲裁してくれたから大事ではないのだし・・・・・・・・・」
「いえいえ、仮にも平民が貴族に楯突いたのは問題でありましょう。」
「まぁ、子供のしたこと大事にすることもないでしょう。しかし、子供を使うなんて王室も何を考えているのやら・・・・・・・・・・・・・」
「それについては私も同意ですね。いくら、便利重宝に使えるからって・・・・・・・・・・農民孤児お前も謝れ。」
「申し訳御座いませんでした。楡林男爵様。」
「いや、気にすることはない。でも次は怒る前に一呼吸置け。」
「はい、本当に申し訳ありませんでした。」

謝罪についてはまぁ無事に終わった。後はこの農民孤児の処分だ。
一応は大事に至らなかったとは言え喧嘩騒ぎだ。処分なしだと示しが付かない。

どうするかな?

そうだな・・・・・・・・・・・・
「農民孤児お前は王宮で騒ぎを起こした。ついで言えばお前には王宮勤めは無理だろう。罰として私の所有する土地の開墾を命ずる。お前は私の許しを得るまでその場で小作人をするんだ。判ったか!」
「はいっ!」

項垂れる農民孤児。お前が耕してくれていたお陰で生きている命があったんだ。お前はその道が良いだろう。

こうして王宮勤務脱落者第一号が出た。

別に脱落者が出る事自体は想定内だ。

宮仕えと孤児弟（後書き）

ガタゴトと馬車は揺れる・・・・・・・・・・
王都郊外の廃村。

「農民孤児、お前はここを耕してだんなの小作人になるんだ。」
「ここは？」
「だんなが格安で手に入れた廃村なんだが、誰も手がいなくて今まで放置していたんだそうな。」

嘘である。農民孤児のふるさとを知っただんなは伝手を頼って手に入れた。
実際に廃村だから安かったと言っているけど、其れなりの金額は流れているだろう。

ふらふらと彷徨うように歩く農民孤児。朽ちかけた木切れの並んでいる前に立ちすくむ・・・・・・・・・・

「父ちゃん・・・・・・・・母ちゃん・・・・・・・・・弟達・・・・・・・・」
その前でうずくまる農民孤児。流している涙はどうしてなんだろうな？
そしてちょっと羨ましいと思ったのは内緒だ。

死んでいるとは言え父母がいた思い出があって、滅んでいるとは言え故郷がある・・・・・・・・・その思い出すらないおいらは・・・・・・何にすがればよいんだろうな？

一頻り泣いた農園孤児は

「王室顧問様に礼を言ってくれ。」
「別に礼を言われる筋合いはない。だんなは罰としてこの地の開墾を命じたんだ。罰を受けて礼を言われる筋合いはない。」

つい意地の悪いことを言ってしまった。同じ孤児院で育った兄弟分なのだがどうして違うんだろうな・・・・・・・・・・・・羨ましい。

「たまたまお前の故郷だっただけだろう。早く開墾して生活できるようになれ。小作料代わりに孤児院に野菜を届けろとだんなの命令だ。」
「わかった。孤児弟・・・・・・・・・嫌な役回りすまないな。」

わかってない。おいらは只お前が羨ましいだけだ。
嫌な気分を抱いて、おいらは王都へと戻っていく。

まぁ、たまには遊びに行っても良いかな?
チビ共を連れて農作業の手伝いとかも面白いかも・・・・・・・・・・

それまで、ちゃんと形にしろよ。

宮仕えと孤児娘（前書き）

孤児達を仕事にいれたら楽になるかなと思ったんだけど思い違いだったわ。
私達に一歩劣るくらいの実力で経験次第では伸びるとは聞いていたけど・・・・・・・
ここまで化けるとは・・・・・・・・・・・・・

我が弟妹分なれど末恐ろしいわ。
まさか、書類庫一杯の経理書類を数日で終わらせるなんて・・・・・・・
なんて、人海戦術・・・・・・・・・・

そこから見つけた不備をより分けて・・・・・・・・・・官僚さん達に渡して・・・・・・・・

官僚さん達悪乗りしている？
召喚状とか連発しているし・・・・・・・・・
その説明書類とかの不備探しとか・・・・・・・・・・

いやぁ！
賢者様が孤児達のために仕事を造るとか言っていたけど、こっちの仕事まで作らないでよ！
補佐見習に孤児娘・・・・・・・・・早く帰ってきて。

私達は適当にこなすくらいで良いんだから！

宮仕えと孤児娘

「御主人様、流石に今の状況は無茶が過ぎる気がしますけど・・・・・・」

「孤児姉、私もそう思う。どう考えても通常業務を超えているだろう・・・・・・・・・・」

官僚部屋に積まれた白い山の数々、貴族緒家のあら捜しをしていたら面白くなって次々と暴き立てているのだがこの数の暴力に飽きている官僚達。

これでも半数くらいしか処理していないらしい・・・・・・・・・孤児娘達だけでは直近数年が良いところだったから適度なお遊び程度だったのだが、それが手数だけで数倍になっているのだから処理能力を超えたとしてもおかしくない。

一度この書類の山に火をつけたくなってくるぞ。

「多分それが一番簡単な処理方法じゃない？書類がなくても生きてはいけるから・・・・・・・・・・」

「経理はひとまず置いといて、通常業務をこなしていこう・・・・・・」

「酒を・・・・・・・・・　酒が飲みたい・・・・・・・・・・」

「近衛文官が酒精の禁断症状を起こしたぞ！」

「ほらっ！酒だ！」

「ありがてぇ・・・・・・・・・・　一息ついたぜ、さてもう一踏ん張りだ！」

「俺にも一口呉れ！」

「こっちに樽をすえておいたぞ。」

「やるじゃないか民部官。」「小間物屋が市場にひとっ走りして仕

入れてきたんだ。」
「旦那方、陣中見舞いです。」
「助かったぞ小間物屋！」「こっちにも頼む！」

子供達、おじちゃん達は疲れているから少し私達も休もうか？
市場に行って、気晴らしでもしようかね。

ぞろぞろぞろ・・・・・・・・・

「おい、王室顧問どこに行く！」
「閣下、官僚共が使い物にならなくなったんで子供達連れて市場にでも行ってます。ろくに休ませていないようですし・・・・・・」
「そうか、今日の所は十分休憩を取っておくがよい。」
「って、言うか官僚達の手綱取ったほうが良いですよ。直近数年分くらいの経理精査ならば良いですけど、どう考えても数十年分の処理してますから・・・・・・・・・仕事量が増えまくるのも当然でしょう。」
「お陰で金貨数百枚は軽くこの数日で浮いたのだが・・・・・・・・・・・わしも疲れた・・・・・・・・・」
「暫くは別な部門に振り分けておきますか？」
「そうするか・・・・・・宰相府もがたがただ・・・・・・・・・」

酒が切れて手が震えている官僚達を放置して、私は市場に向かう。
途中軍部の管理等からは護衛官と近衛小隊の悲鳴が聞こえた気がするけど気のせいだろう。
彼らは軍部の書類を暫く処理する分担になっているはず。それで悲鳴を上げるなんて鍛錬がたらん。

違うと思うんだけど（ｂｙ軍神）
体を鍛えても頭を鍛え忘れた典型的な例だな。（ｂｙ決闘神）

頭にも計算筋と言うものがあってだな、頭を使うごとに鍛えられるんだ・・・・・・（ｂｙ肉体神）
もっともらしい嘘は止めて欲しい物だな。（ｂｙ知識神）

城門から出るまでに襲撃もあったんだが、孤児達が暗黒神術だの支給された魔具だのを好き勝手に振るって・・・・・・・・・
人型の荷物を量産している。

「王室顧問様、これどうするんですか？」
「近衛兵よ、場内の不届き者は君達の仕事ではなかったのかね？」
「って、言うかこの量は多すぎですよ。しかも尋問できる状態のがいないし・・・・・・・・・一人くらい残して置いてくださいよ。」
「子供達に言ってくれ。」
「坊主達、手加減できないのか？」
「魔具の出力調整なんて出来るわけないじゃん。」「話を聞く程度にしたいの？」
「だったら、着付けすれば良いか。」
「暗黒神術【気付】！」「【精神回復】」「【束縛】」

「ううっ！・・・・・・・・・酷い目にあった・・・・・・・・・」
「ちょっと話を聞こうか・・・・・・・・・因みに大人しくして置いたほうが良いぞ。子供達が新しい魔具（おもちゃ）を試したくてうずうずしているんだから・・・・・・・・・・・・」
「わかりやした・・・・・・・・・・・・」
「ところでこの襲撃者達どうするんで？　って、私らが受け持つんですね・・・・・・・・・」

ところで子供達何をしているんだね？
「そりゃ、僕達に手を出そうとしているんだからさらし者にしてあ

げないと。」
「いたずら書きの一つくらい良いでしょ。」「身包みはいでお小遣い・・・・・・・・」

たくましく育っているな。
「ここまで来るとどっちが悪者だかわからないわね。」「本当・・・・・・」「弟妹達、一応身包みはぐのはやめなさい。」
「裸にして椎の実と書いた紙を股間に張るのは許可するから。」

そっちのほうが酷いよ・・・・・・・・・・
「賢者様ほめてほめて！」「よくやったでしょ。」「今回はは綺麗に決まらなかった・・・・・・・」
「今日は少なかったね。」「ほら、僕のほうが一体多く倒したから」
「ちっ、判ったよ。今日のおやつだろう！」

子供達にもみくちゃにされながら、どこの手のものかなと考える・・・・・・・
襲撃するにしてももう少しちゃんとすれば良いのに・・・・・・・・・・・・ちゃんと襲撃されて子供達に怪我でもしたら問題か・・・・・・

そんなこんなしているうちに近衛兵の手によって襲撃者が片付けられていく。
「あっ！イタヅラ書きするの忘れてた。」

良かったな襲撃者達。
「旦那、灰髪兄妹も呼ばないと・・・・・・・・・」
そうだな。
「おいらがひとっ走り行ってきます。」
孤児弟は灰髪兄妹を連れ出しに向かった。少女のほうは兎も角、少年の方は無事に連れ出せるかな？

「姫大使様でしたら今日は王宮のほうにはお見えになられていないようですから大丈夫かと。」
「だったらどこに居るんだ?」
「多分、外務官とか女官長とか侍従官のあたりでしょうか?人当たりが良いから、接客に向いてますし。」
「侍女あたりに連れ込まれてなければ良いけど。」
「それはないでしょう。」
「まぁ、侍従とか小姓としての教育を受けているんだろうな。」

「賢者様早く早くー!」

子供達の呼ぶ声に苦笑しつつも市場に向かうのであった。

「いやぁ、姫大使様が居ないだけでこんなにも楽だとは・・・・・・」
ほっとした顔をしているな灰髪少年よ。
「そりゃ、酌をさせられたり、脱ごうとするときに布をかぶせたりしていたり暴れるのを部屋まで連れて行ったり・・・・・・・・・・その後で襲われそうになったり・・・・・・・・・・・・部屋から出たら、どこかに貴族様に『えらい頑張ったじゃないの』だの『太陽が黄色いんじゃないの?』等とからかわれるのはもう勘弁願いたいんですよ。」

こりゃ、色々鬱憤たまっているな・・・・・・・・・・・・
今日はどこに?
「外務長に所で輸出品の統計を取ってましたが・・・・・・・・・落ち着いて仕事が出来るって良いですねぇ・・・・」

こいつも連れてこないほうが良かった?後で酒国に苦情を・・・・・・

無理だと思うよぉー（ｂｙ酒精神）

宮仕えと孤児娘（後書き）

「こんなに仕事作ってどぷするんだろう？」
「しらなーい。」「さすがに手に負えないよね。」
白い山を見た孤児娘達・・・・・・

どこから手をつけるかというよりも今必要なのかが疑問である。
「この山は無視する方向で」「さんせー」
「それよりもこっちの山何とかしないと・・・・・・・・・」

どどーん！

「だれよ！こんなに溜め込んでいるのは？」「貴族虐めに走りすぎじゃない」
「所で兄弟達は？」「向こうで更に山を作ってるわ。」
「こっち手伝わせよう。」「呼んでくる。」

孤児達を通常業務のほうに配置転換して（させて）会計精査の地獄から一息つこうとする孤児娘達であった。
この事で一息つけた宰相府とか貴族緒家からは彼女達に菓子とかが送られるのであった。

全部一気に食べたら吹き出物が出来るぞ。
「うるさいわね！」

宮仕えと王室顧問（前書き）

「宰相閣下、貴族緒家から孤児達について問い合わせが・・・・・・・」
「なんだ？」
「書式は様々ですが『当家で雇い入れたい』という文面です。」
「それは王室顧問か孤児本人に言ってくれと返答しておけ・・・・・・」
「それが・・・・」
「なんじゃ？」
「王室顧問通すと怖いとか条件で難癖つけられると、出来ればと言うか絶対に王室顧問抜きで雇いたいとか。」
「あの子達は王室顧問の教え子達だからムリだろう。」
「ですよねぇ・・・・・後は孤児達を攫って使おうとかしているのが居るんですが、返り討ちにあって・・・・・・・・・申し上げにくいことなんですが。」
「はっきり言わんか！」
「裸に剥かれて城壁の飾りに・・・・・・・・」
「朝晩の冷え込みが辛いだろうに風邪でもひくだろう。」
「それよりも王城管理官から美観を損ねると・・・・・・・後は侍女や女性陣が・・・・・・・性的嫌がらせだとか言ってきているのですが。」
「それは孤児達に釘を刺しておけ。」
「はいっ！　次は何をしでかすのですかね？」
「損なのは王室顧問に丸投げだ。それよりも孤児達が見つけた横領とか会計処理の間違いがたくさんあるのだ。そっちの処理をしろ！」
「畏まりました。って、言うか、この量は尋常じゃないんですけど・・・・・・」

どちゃ！

「一度、孤児娘達が配置換えしているからこの量で済んでいるけど、それでもこの量は酷いな・・・・・・・・・・・・」

「って、言うかある程度古いのは見逃しません？」

「陛下に上奏して期限を区切ってもらうか名乗り出た部分に関しては減免処置とかしてもらいたいのだが・・・・・・・・・・会議で紛糾しててなぁ・・・・・」

「先に槍玉に上がったところにしてみれば不公平だと言いたいでしょうしなぁ・・・・」

「さいしょーさまー　これもおねがいしまーす。」

どすっ！　どすっ！どすっ！

・・・・・・・・・・・孤児が持ち込んだ書類の山に心が折れた宰相閣下であった。

宰相府、機能停止・・・・・・・・・寸前。

宮仕えと王室顧問

半月程が過ぎる。
子供達も慣れて、色々な所に貸し出される。会計精査だけをさせたら貴族諸家が潰れると泣きつかれただけだが・・・・・・・・・・
子供たちは元気に仕事して、市場で大いに飲み食いして、孤児院の弟妹分に沢山の土産を持ち込む。
そして貴族達が涙目になる。

でも、そこまで酷くないだろう。
「賢者様それがね、一家辺り金貨１０枚から１００枚程度の誤差があって、それを払ったら破算なんてところもあるし、何十年も前の事で当時の責任者が誰も居ないのに応対できないと・・・・・・・・ごねているんですよね。」
「気持ちはわかるな。期限を区切るとか時効法は・・・・・・・今現在無いからなぁ・・・・単純に処理できないから未解決扱いにされているだけであって・・・・・・・・・・」
「賢者様からは上奏しないのですか？」
「する気は無いね。異世界人の法学者から時効に対する考え方を学んだことがあるが、罪を償わないで時間で見逃すという思考が嫌いだし。」
「賢者様法学の徒なのにえり好みするんですか？」
「孤児娘よ、えり好みと言うよりも法が受け入れられるかどうかと言う面から考えて居るのだが。」
「確かに人死にが出ている件もありますからね。」
「処理が出来ないならば、近接数年とか人的被害が出ている件を優先して置けばよかろう。多少の計算間違いとか小額の物ははじいておけば良かろう。」

「そうする、これ以上の処理は私達の体が持たないし・・・・・・・」

そういう孤児娘たちの目元には隈が薄っすらと出来ている。
官僚達は兎も角、年頃の娘にこの扱いは無いだろう。

「そういえば孤児達はどうしている？」
「ご主人様、今頃は近衛の訓練場にて目隠し布の実用実験しております。」
「まぁ、部屋の中で縛り付けておいたら不健康だしな。ちょうど良い運動だろう。我等も見物しに行くか。」
「はい、ご一緒します。」
「孤児娘達はどうする？」
「私達は休んでます。」「もう、限界・・・・・・・」「白い山の夢が・・・・・・・」
「ゆるりと休んでおけ。お前らも休日出勤しているのだから・・・・・・・・」
「「「はーい」」」

これが終わったら孤児娘達も何日か休ませないと使い物にならんな。
孤児達の面倒で慣れない気を使っているのだろう。
ふらふらと歩いている娘達を見ながら可哀想になってくる。
近くに居る近衛兵に娘達の護衛を願って、訓練場に行く。

訓練場では奇才魔術師に四席、孤児弟に灰髪少女が目隠し布をつけた子供たちの動きを見ている。
追いかけっこをしたり、ちゃんばら遊びをしたり・・・・・・・・
女の子たちも近衛兵達相手に護身術を習っている。

所で股間抑えて転がっているのが居るけどどうしたのか？

「護身術教えるときにどんな技知っているのと試したら・・・・・・・いきなり金的を・・・・・・・」

「うわぁ、それは災難だな。」

「あれは護身術じゃなくて本気でつぶすつもりでしたよ。」

「まぁ、孤児院の子供というだけで狙われることが多かったからな。ちょっと性愛神殿に教えてもらったことがあったし・・・・・・・・・・」

「私らの訓練いらないじゃないですか！」

「まぁ、遊びだと思って付き合ってよ。」

「金的の防具を用意しておきます。」

「そんなものもあるんですね。」

「私も始めて聞いたぞ。」

「めったに使わないのですが貞操帯の流用ですね。金的の部分を覆って下帯を巻きつけるだけなんですが・・・・・・・・・・・・」

「普段使わないだろうな。」

「そうですね、女性や子供向けの護身術の受け役のときに使う程度で・・・・・・・・・・・・・やつはつけてないで油断しただけの馬鹿なんですが・・・・・・・・・・・・・」

馬鹿というには可哀想だ・・・・・・・・・・・・・まだ転がっている。医師の所に連れて行けば？

等と思っていると、同僚に引きずられて運び出されている。

大丈夫だ、潰れても温泉町に行けば再生してくれるぞ！高いけど・・・・・・・

追いかけっこしている子供達は・・・・・・・・・・・・自重してないなぁ・・・・

暗黒神術で影を伸ばして立体的な移動をしているし、近衛兵達を盾にして逃げていたり・・・・・・・・・・
追いかけるほうも影の中に忍び込んで移動するとか・・・・・・・・・・
・

「王室顧問様、私の中の常識が・・・・・・・・・・」
「心配するな、自覚があるだけ常識は残っているから。」

しかし、よく見えているなぁ。

「子供達、見えているのか？」
「ううん、賢者様。暗黒神様の術で感じているだけだよ・・・・・・・・」
「おーい！実験中止だ。この子達は目隠し布じゃなくて暗黒神様の神術で情報を得ているぞ！」
「なんだって？」「ふむ、近衛隊の諸君に協力願うか。」「まさかそんな方法で把握していたとは・・・・・・・・・・以外だった。」

「私も暗黒神様の術学べば見えるようになるかな？」

我が術法は『見る』のではなくて『感じる』術だからな。眼は光を感じ取る器官であって闇の具現たる我の術とは違うだろうよ。（ＢＹ暗黒神）
我が術に光を与えるのがあるが・・・・・・・・・使い手がな・・・・・・・・・・・居たかな？　嗚呼、あの腐れ聖女か・・・・・・・・・・流石に年端も行かない少女に合わせてよい人物ではないな。それに文学神に譲ったからその術も使えないはず。（ｂｙ光明神）

光明神様、元とは言え自分の信徒筆頭にその表現は・・・・・・・・・・・・
否定はしませんけど。

あれは文学神に譲り渡した。何で光と闇でまぐわう本を作るんだ！
（ｂｙ光明神）
ちょ！それは神の権限で止めろ！（ｂｙ暗黒神）
・・・・・・・・・・・・すまん暗黒神、止める間もなく・・・・・・・・・・・・
・・（ｂｙ光明神）

光明神が・・・・・・・・・・へこんでいる。
気持ちは良くわかる。
子供たちに肩（？）を叩かれて慰められている・・・・・・・・・・・・・・・
いいのか？神がこんなに打たれ弱くて・・・・・・・・・

世界に降り注ぐ光が弱くなっている。
また、神職達が騒ぐぞ。

「所で王室顧問様、神々が降臨しているのは良いのですが、如何して子供達に慰められる程度の打たれ弱さしかないんですか？」
「近衛の小隊長。それはお前も犠牲になったから判るだろうが、光明神様は聖女の腐妄想の餌食になって・・・・・・・・・・・・」
「うわぁ、おいたわしや。」「ひでぇ！」「普通神に対してやるかそれ？」

まぁ、それが普通の反応だよな。
間違っても、神様萌えー　だの　どっちが受け攻めだの言うほうがおかしいのだ。
異世界人は世界すべてをそんな目でしか見れないのだろうか？
ごく一部だから誤解しないでくれ！（ｂｙ異世界の神の一柱）
その割にはこっちにその一部が来る頻度が高いけど・・・・・・・・・
そんな突っ込みはすると作者の脳内環境に話が及ぶからおいといて・・・・・・・
ほっとけ（ｂｙ作者）
今日の所は仕事させないで、子供たちを遊ばせるか・・・・・・・・・
「子供達おいでー！今日は仕事これくらいにして市場に行くぞ！」
はーい！と口々に返事する声は元気があってよろしい。
「ご主人様、仕事のほうはよろしいので？」
「いや、子供達に仕事させると仕事が増える・・・・・・・・・・・・・・・・・流石に精査をさせると政府機能が止まるぞ。他の仕事も粗方済んでいるし・・・・・・・・・・・外務とか資料室とかの分類とか終わっているし・・・・・・・・・・後は財務の会計精査くらいだ。流石に企画立案なんてさせたら恐ろしいことになる。」
「大丈夫でしょう。」
「流石に、『食堂でピーマン使わないで』なんて議題を出されたら

目も当てられない。法務副長が嫌いだから尻馬に乗る。」

「・・・・・・・・・・そこまで大人気ないことはしないと思いますが・・・・・・・・・」

孤児姉の問いに答えられるものは居なかった。

宮仕えと王室顧問（後書き）

官僚部屋。

「今日は子供達は居ないのか？」

「なんでも目隠し布の実験するという事でこっちには来ないらしいぞ。」

「そっか、街道の見積もり計算願うつもりだったんだが・・・・・・・」

「こっちも色々頼もうと思っていたんだが・・・・・・・・」

「しかし、各領地の税収だの請求の間違いがこんなにも多いとは・・・・・・」

「これでも一部なんだよなぁ・・・・・・」

「あまり古いのは見なかったことにするか？」

「人的被害の無い部分は注意文書だけ作るという事で・・・・・・・」

「人的被害のある場合は？」「勿論、被害者と遺族を探して・・・・・・それすら消されているようならば・・・・・・・・・」

「成程、直轄地に組み込むわけだな。」

「そんな婉曲表現しなくとも良いではないか（ニヤリ」

「おい！お前ら！早く通常業務を済ませてこっちにまわせ！滞って苦情が来るぞ！」

「宰相閣下、使える人間を入れてくださいよ！」

「お前らが孤児達を通常業務に使えばよかっただろうに！」

「ああっ！そうか！　孤児娘達のノリで使っていた。」

「おい！」

その後宰相の怒鳴り声が響き渡ってうるさかったと通りすがりの貴

族は日記に記している。

「結局のところ、人がありすぎても仕事の量は変わらないのだろう。ならば当家に迎えれてくれる手はずをとってくれれば良いのに・・・・・・・」（ｂｙ通りすがりの貴族）

宮仕えと補佐見習（前書き）

湯煙の地　温泉町伯爵領

硫黄の臭いが立ちこめ、流れる水は赤褐色やら白黄色に染まる土地。
実はこの町で一番金がかかるのが水代だったなんていう笑い話があるのだがそれはさて置き・・・・・・・・・・・・

この地に逗留していた補佐見習にとって待ちに待った日が来たのである。
彼が大事に思う傷跡娘がその顔の傷跡を消す施術が卿で最後だと言う事。
そして、彼女の本当の素顔が拝めるかと思うと興奮してくるのである。

彼は傷跡娘にほれているのは事実なのであるが決して傷跡に惚れていたのではない。
ここは重要である。

傷跡娘は最後の施術のため前々日から療養神殿につめていて、補佐見習には彼女の施術が成功しているのか判らない。
施術が始まってからも、途中の姿を見せたくないと目隠し布を応用した面覆いで顔を隠している。何でも顔を切り開いて皮を張り替えるとか再生させるとか・・・・・・・聞いているだけで気分が悪くなる話なのだが、それで本当に傷跡が消せるのかどうか彼にはわからない。
ただ彼が確実に理解できるのは彼女がどんな顔であっても愛しいと思うことだけである。本当に馬鹿な男である。

運命の時を迎えるに当たって、彼は心配していた。
本当に傷跡娘の顔が綺麗になっているのだろうか？
いや、傷跡があっても彼女は綺麗だと妄信しているのだが・・・・・・
うろうろと心配している彼の様子は捉えられたばかりの獣のようであり、補佐見習を受け入れている温泉伯屋敷の面々は生暖かい目で見守っている。

そして、療養神殿が開く時間帯・・・・・・・・

彼は大分前から落ち着きなく待ちわびている。
流石にその様子を不憫に思ったのか泊り込みの手伝い女は彼を中に入れて内々の食堂に導いて落ち着けとばかりに薬湯を渡すのであった。

時間となり、愛しの傷跡娘と面会する。
彼女もまた不安に怯えている。
本当に傷跡が消えているのだろうか？傷跡の消えた顔が補佐見習に受け入れられるのだろうか？

だけど、不安がっている補佐見習の顔を見て・・・・・　彼もまた私の事を案じているのだと安心する。

補佐見習も不安がっている傷跡娘を見てそっと抱き寄せて頭をなでてやるのである。
「大丈夫だ、お前だからこそ俺は幸せになって欲しいと思ってここの門を叩いたんだ！顔の形くらいでがたがた言うならば俺はそいつをぶちのめす！」
「・・・・・・・・・・・・ばか。」

癒し手（独身）や施療士達（奥方の尻に敷かれている）のバカップル消えろやとか言う無言の訴えをよそに二人の思いはすれ違いながらも互いに向き合っている。

甘ったるい雰囲気を消すように咳払いをした癒し手に慌てて離れた二人はいよいよ大事な一瞬を迎えるのである。

施療士が傷跡娘の顔をあらわにする。
一月にも及ぶ施術の結果・・・・・・・・・・つややかな肌を外気にさらす傷跡娘の顔がそこにあった。
再生したばかりなのかやや赤みがかった色合いは陶器の様でもあり乳粥の様でもある。

顔の造形は傷跡がなければ餌食にされたと彼女の亡き親が案じていたように魅力的モノであった。

補佐見習は傷跡一つない彼女を見て口を開けて呆けている。
そんな姿を見て不安となった傷跡娘は
「私の顔、そんなに変？」
と泣きそうな顔をして問う。

その一言で慌てて
「そんなことはない、ただ見とれてしまっただけだ。」
等と普段なら言わないようなことを口走ってしまう・・・・・・・・・・

彼女の顔にしわがより涙が流れる・・・・・・・・・
傷跡娘の涙を見て、彼女を傷つけたかと思った補佐見習は・・・・・・・

「えっと、だから・・・・・・・お前の顔は綺麗だよ・・・・・・・・・お前の親が案じて傷をつけるくらいに・・・・・・・・・今本当に理解した・・・・・・・・見た目だけでしか判断しない男が寄ってきそうなのが疎ましいと思うくらいに・・・・・・・・・・・あれ、俺何言いたいんだろう？　だから、お前は綺麗だ。傷跡があっても魅力的だったが・・・・・・・・・せめて泣かないでくれよ・・・・・・・・・・如何して良いかわからないから・・・・・・・・・・」

不器用な、あくまでも不器用な補佐見習の言葉に泣きながら笑い、

「・・・・・・・・・・・・ありがと」

と呟く、そして補佐見習の顔を見てその瞳に写った自分の顔を見て

「こんな顔をしていたんだね。」

「馬鹿だな、鏡を見れば良いじゃないか・・・・・・・・・」

「ううん、補佐見習の瞳に映る姿が一番大事。貴方の目に好ましく映るのが一番心配だったから・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・恥ずかしい事言うなよ・・・・・・・」

照れて真っ赤な顔をする補佐見習。

涙の残る顔で笑みを浮かべる傷跡娘。

そんな二人の姿を見て療養神殿の者は思った。

むずがゆくなるくらい甘ったるい！

窓を開けてこの空気入れ替えろと・・・・・・・・・・・・・・・

宮仕えと補佐見習

なんか前書きが甘ったるいのだが・・・・・・・・・・・・・
「御主人様どうかしましたか？」
「いや、なんでもない。」

「そう言えばだんな、補佐見習達は何時帰ってくるかな？」
「時期的にはそろそろだと思うが・・・・・・・・・・・・折角二人きりなんだからゆっくりさせてやれ。」
「二人がどこまで進んでいるのかが気になりますわね。」
「補佐見習のおばちゃんが折檻するくらいの事は出来ていないだろ。補佐見習だし・・・・・・・・・・・・」
「そうなったらそうなったで祝福してやるさ。」
「しかし、傷跡娘がどんな顔して帰ってくるか楽しみですわ。」
「これから補佐見習は大変だ。悪い虫がたかってくるからな。」
「確かに・・・・・・・・・・・・・」

そんな私達主従に手紙が届く・・・・・・・・・・
『そろそろ戻る。仕事の用意はいらない。　補佐見習』

「なんか向こうでも仕事漬けだったのが偲ばれる文面ですわね。」
「哀れな・・・・・・・・・・・・」
「どう考えても自分で首突っ込んでいるんじゃないかとおいらは思うんだ。」
「違いない・・・・・・・・・・・・」

「おーい、王室顧問仕事手伝ってくれ！」
遠くから官僚の声が聞こえる。私の仕事ではないだろうに・・・・・・・
「貴様の教え子達が作った仕事だろう！責任とって片付けろ！」
凄い言いがかりだな・・・・・・・・・・・

補佐見習のことを伝えたいし付き合うとするか。
「そうやって付き合うから仕事してもらえると思われるんじゃ・・・・・・」
「そうなんだがな、孤児達を少し抑えないといけないから出向くしかないよ・・・・・・・・・・」

しぶしぶと重い腰を上げる私であった。
重い腰といっても溜まっているから重たいわけではないぞ。昨日は花街に言ってきたし・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・・・御主人様。」

孤児姉はどうも私がそのようなことをするのが不満らしい。
恋人でもなのに悋気とは・・・・・・・
仕方ない奴だ。私はどうしても酒と女が欠かせない男なのにそれが判らないと見える。

「だんな、行くならば匂わせないでいけばよいのに・・・・・・・・」
「そういう孤児弟だって一昨日花街に向かって走っていたのは知っているぞ。」
「だ、だんなそれをなぜ！」

昨日花街で噂になっていたし・・・・・・危うく兄弟になるところだったじゃないか・・・・・・・

「御主人様！孤児弟も・・・・・・・・・・不潔です！」

「ねーちゃんがお冠なんだけど、だんな宥めてくれよ。」

「ははは、男衆の些細な楽しみじゃないか。孤児姉、別に私とはそんな仲じゃないだろう。気にすることはないじゃないか・・・・・・・」

「知りません！」

この後孤児姉の機嫌は一日中直らなかった。

「そりゃ、王室顧問が悪いわ。」

「好いてくれる娘なんて貴重なのにその前でおおっぴらに話すなんて配慮が足りないですわね。」

「賢者様だから仕方ないよ・・・・・・・」「気にしていたら付き合ってられないし・・・・・・」

「寧ろ押し倒す？」

「ちょっと、年頃の娘が言うことじゃないですわ。もっと自分を大事にしなさい！」

「えー、でも、そのくらいしないと賢者様手に入れられないし・・・・・・」

「所で何で私の居る所で私に聞こえるように会話するのですか？ご丁寧に茶会の用意までして・・・・・・・・王妃様？」

「それは私だってたまには孤児姉や孤児娘達とお茶位したいわ。本当は色々着せ替えたいんだけど、そこまでしたら仕事の邪魔になるの判っているから自重しているのに・・・・・・・・・・・」

「えっと、理屈に合わないのは置いといて、如何して私をつるし上げているんです？」

「だって、孤児姉がかわいそうじゃない。」「もう少し、孤児姉のことも考えてあげないと・・・・・・」

「裸だって見たんでしょ。」

「それは事故だ！」

「おや、そんな事をしていたのですか王室顧問。孤児娘達その話をしてくださいな。」

「あのねあのね・・・・・・・・・・・・」

どうも私には女難の相があるらしい。この手の話だと女性に勝てる男なんて者は居るんだろうか？

居たとしたらその相手の事をなんとも思っていない者なんだろうな。

その後、孤児姉の機嫌を取ったり、王妃を黙らせるので大変だったとだけ記しておこう。

勿論仕事になんてなりはしない、私の仕事ではないのだが・・・・・・

多分王妃経由とかで私の母に話が伝わったりするんだろうし、面倒なことだ。

宮仕えと補佐見習（後書き）

「御主人様。傷跡娘に顔から傷跡がなくなったらどう呼べば・・・・・・・・・」

「ふむ、作者が登場人物の名前を決めてないからなぁ・・・・」

うむ、この地方は名前で呼ぶ風習がないのだよ。名を記されるのは死者のみで生者は仮名（かりな）と呼ばれるもので呼び合う。まぁ、あだ名とか特長とか役職で呼び合う風習だと思えばよかろう。（ｂｙ説明口調な王国地方担当地方神）

はい、名前考えてなかったです。この設定は後付の思い付きです。地才に正式にせっていするかどうか判りませんｂｙ作者

宮仕えと宰相閣下（前書き）

王室政府雇用報告書

王室顧問配下の孤児達を試験的に王室政府業務に運用する件について

一月に渡り孤児達を試験的に雇用しした結果、以下の問題点が認められる。

・基本集中運用が基本となる為に特定分野において過度の作業量倍増が認められる。
これについては、分散運用をすることによって解消されるものと思えるが孤児達を監督する人材の育成が急務。もしくは、孤児達が独立運用できるよう指導するか。

・倫理、礼法部分における教育の欠如。
これについては指導者である王室顧問男爵の資質の欠如が現れる面があり、補う形での教育を必要とする。

・孤児達への襲撃、拉致に関する警備強化。
これについては孤児達の戦闘能力自体、一人当たり1個小隊相当の戦力であると近衛中隊長が判断しているが、万全でない場合もあるし被害も相当出ているので未然に防げるのであれば防ぐ方策を採られたし。

・孤児の前歴に対する貴族達の侮蔑。
これは貴族緒家に通達を出して自重を求めることをしているが効果のほどは不明。敵対すると認定された場合の仲裁策等支給に用意する必要がある。特に師父である王室顧問が出た場合、当事者同志の

みならず国内外に多大な被害が出る恐れがある。

・王室顧問

対策が見つからない・・・・・・・・・・・

作成者　宰相

宮仕えと宰相閣下

なんか不快な報告書があったな。
後で宰相〆ると言うか・・・・・・・・・孤児達を全部引き上げるか・・・・・・
「孤児達、王宮の他に色々働き口あるけどどっちが良い？」

「しょーかいこーさま？」「のーえんこうさま？」「まおーこく？」「庭園公様のところは絶対貧乏くじだからやだ。」「でも庭園公のおねーちゃんはダメ人間だけど従者のおじちゃん達は美味しい御菓子くれるよ。」「おーてーでんかは人として終わっているよね。」「王妹殿下には近づきちゃダメって陛下が言ってたし・・・・・・・・・」「王弟殿下は頭がかわいそうだし・・・・・・・・・」「近衛中隊長は振られたばっかりで慰めきれないし・・・・・・・」「宰相閣下は・・・・・・？」「仕事押し付けられそー」

色々言ってくれるなぁ・・・・
これぞ好き勝手と言う奴か・・・・・・・・・・
「ぼく、農民孤児と一緒にはたけやる。」「出来ればどれー商人捕まえる仕事ついて、僕達みたいな子供なくしたい。」
「孤児弟のお嫁さんになるの」
「それは許さんぞ！」「おねしょの王女様は引っ込め！」「な、なんだとー！平民の分際で・・・・・・・・・」
「はいはい、末王女様。今日も世界地図描いたんだから強くいえないでしょうに・・・・・・・」
「侍従官。不敬だぞ！」
「末王女様。孤児弟は私がいただきますから・・・・・・・・・」
「くさったおばちゃんもお呼びじゃない！」
「ぷっ！」「な、なんてことを・・・・・・・・・」

公爵令嬢が腐っているのは事実だしなぁ・・・
「でも孤児弟の兄貴は昨日助平屋さんに駆けて行っていたぞ！」「そ、そんなー・・・・・・・・・」
「孤児弟も所詮は・・・・・・・・・」「あら、頼もしいわね・・・・・・・・」

なんか、孤児弟の株が下がっている・・・・・・・・・
「べ、べつに構わないさ・・・・・・・・・おいらは・・・・・・・・・くそっ！自分に正直に生きているだけなのに・・・・・・・・・」

孤児弟・・・・・・正直に生きる道楽貴族が一度は通る道だ。これを乗り越えて道楽貴族と名乗りを上げることが出来るんだ。頑張れ！

「あたしは賢者様のお妾さんが良いな。」「わたしもー」「なんだかんだ言っても可愛がってくれそうだし。」
「孤児娘達・・・・・・・・・」
「大丈夫だって。最初は孤児姉に譲るから。」「でも油断していると取ってしまうぞ。」「みんなで楽しもう・・・・・・」

もしもーし、私の意見は？

「はいはーい、王室顧問の痴話げんかはどっちでも良いから子供達仕事だぞ！」
どさっ！どささっ！どっさささっ！

山積みの書類、どこから生まれてくるんだろうな？

ガサガサガサガサガサ・・・・・・・・・・
カリカリカリカリカリカリ・・・・・・・・・・

子供達は流石だ・・・・・・・・・・・慣れて来ているせいもあるし、出来高で報奨があると前もって言っているから数をこなしてこれでもかとこなしている。
所で進んでないな約二名（害虫）。

「ちょっと、害虫扱いは酷いぞ王室顧問。」「それ以前に私達までなんで仕事させられるの？」
「そりゃ、そこに居るから。侍従官、末王女様の計算問題代わりに帳簿をやらせて良いよねぇ？」
「あとで、算術の教師に伝えておきますよ。計算は数をこなすのが一番ですしねぇ・・・ほら、王女様間違ってますよ。」
「ううっ・・・・・・・・・・・・・・・絶対お前等王室に対する態度が違う・・・・・・・・・・・・特に財務官、ワザとやっているだろう！」
「私が忠義を誓っているのは王国であって王族個人じゃないしね。」
「それ以前に忠義に値すると思っているのか？」「ただの王族と言うだけのガキに。」

「流石にそれは言いすぎかと・・・・・・・・・」「官僚さん達・・・・・・流石にそれは不敬発言の上に子供に対して言う科白では・・・・・・・・・・」
「ほらほらっ！文句があるなら仕事で主張しやがれ！」
「手が止まっているぞ王女様！」「平民よりできないと言うのは恥ずかしいよなぁ・・・・・」

「ううっ・・・・・・・・酷いのだ・・・・・・・・・・・」
「末王女様おいたわしや・・・・・・・・・・・（棒読み）」「侍従官、次の査定には私からも一言添えるぞ。」

「人事権の悪用ですな。転属願いでも出しますか・・・・・・・・・」「侍従官さんカラカイ過ぎですよ。」
「このくらいで折れる王族だったら、国のためになりませんからね（棒読み」
悲劇の王女様だな（棒読み
「あたしの味方は居ないのかぁ！」「かわいそうだから手伝ってあげる。」
「ううっ、優しくないのに身に染みる・・・・・・・・・・・・って、言うか。なんでわたしに某伯爵の浮気の案件を処理させようとするんだ！しかも生々し過ぎるし！」
「おっと、これは子供に見せちゃいけないもんだったな。それにこれをネタに小遣い稼ぎを・・・・・・・・」
「うわぁぁぁ！大人は汚いのだ！」
こうやって酸いも甘いも受け入れて成長するんだな。
「王室顧問！綺麗にまとめようとするな！この官僚達は性格が悪いぞ！」
「末王女様、口調が荒れてますよ。」
「それ以前に官僚達の性根を叩きなおせ！」
酷い言われようだな・・・・・・・・・
末王女の仕事は教師が迎えに来るまで続いた。
「官僚の皆様方！子供になんて仕事させているんですか！」
末王女付の教師が仕事を一枚見て本気で起こったのは笑い話だ・・・・・・・・・

見たのが、某伯爵の浮気（男同士&乱交）と奥方の乱行（ＢＬ本大量購入と小姓を・・・・・・・・・・）
別に普通の横領とその金の行方ではないか・・・・・・・・・

「うがぁぁぁぁぁ！！ここの大人達は！良識と言うものがないのですか？」
「あら、聖典は自力で買えと言う神聖な教えに反しますわね。」
「義姉様それ聖典じゃないから！」

「りょうしき？何だそれ？」「くえるんか？」「酒のつまみにもならんだろう・・・・・・」
「仕事中に磨り減って消えてしまったようだな。」「こんな良識的な私を捕まえて何を言うのだろうか教師殿は？」
「本当本当・・・・・・・・・・子供達に政治の暗部に触れさせない良識持っているのに・・・・・・・・・」

顔を真っ赤にして子供達と官僚達の間に入って守るように威嚇する教師。
「何怒っているんだろうね？」「別にこのくらい良くある事じゃん。」
「賢者様が性愛神殿でしていることのほうが凄いし・・・・・・・・・」「御主人様・・・・・・・・・・子供達の手前自重してください。」「王妹殿下がしようとしていることに比べたらねぇ・・・・」

「王室顧問卿もどんな環境に子供達を置いているんですかぁぁぁぁ！！いくら孤児とは言えもう少し健全な環境で育てるべきでしょうがぁぁぁぁぁぁ！！」

大変だねぇ・・・教師殿。この子達に関してはもう今更と言う気が

しないでもない。
教師殿の怒りは宰相閣下と国王陛下が止めるまで続いたのだった。

宮仕えと宰相閣下（後書き）

この時期の上奏。

孤児院の査察要求　末王女付教師、職員向宮廷料理長男爵及び料理場一同。

孤児の雇用要求　貴族緒家およそ３０家

毛生え薬の予算要求　王弟殿下

ろくなものがねぇ・・・・・

宮仕えと孤児姉（前書き）

孤児姉が王室顧問に仕えるようになってから一年弱。

寝起きの悪さと食道楽には渋々白旗を上げている。
子供達への甘やかしは仕方ないと諦めている。
酒量の多さには閉口しているが分が悪く、性愛神殿通いには不屈の闘志をもってしても止めることはかなわない。

こう考えると彼女が王室顧問を敬愛することは不憫としか思えない。
彼女が抱いているのは師父への敬愛なのか女として惚れているのか？
どちらにしても不憫としか言いようがない。

幸いなことに王室顧問は孤児姉に対しても激甘であるため、彼女の願いは大抵の事はかなえてやるのだろう。
先に挙げた事は除いて・・・・・・・・・

所詮彼は道楽貴族、その業からは逃れられないということか・・・・

孤児姉が呆れて嘆く様が目に浮かぶようである。

王宮雀某の日記より一部抜粋。

宮仕えと孤児姉

最近冒頭がひどいのだが・・・・・・・・・・
「ご主人様の他者からの評価です。自制してください。できれば私を可愛がってくれると・・・・・・・・・」

照れた顔して要求を突きつけてくる孤児姉。
この甘ったれが・・・・・・・・・・甘やかしてくれるのならば沢山いるだろうに・・・・・・・・・・・

そろそろ、孤児達の雇用期限が切れる。
お試しだし孤児達の職業訓練代わりだし・・・・・・・・

「王室顧問、職業訓練に国家機密満載のここを選ぶのはどうかと思うぞ。」
「王宮管理官、子供達を他に引き渡すが・・・・・・・・・」
「すまん、もっと寄越してくれ。出来れば返り討ちにした後裸で吊るすのはやめさせてくれ。裸でいいのは可愛いい女の子だけだ！男の裸なんて王妹殿下一味くらいしか喜ばないだろう。」
「もっともだ、王妹殿下を喜ばすなどあってはならないことだしな。襲撃者に対してどのように吊るせばよいかな？」
「そもそも吊るすな！子供達だけでどうやってあんなことが出来るのかが疑問だが・・・・・・・・・・」

「子供達、返り討ちにするのは良いけど、裸で吊るしたりとかは駄目だからね。汚いものを表に出したらみんなが嫌がるってあそこのおじちゃんが怒っているからね。」
「はーい。」「ごめんなさいおじちゃん。」「きをつけまーす。」
「お、おじちゃんって・・・・・・・・・・・まだ、二十代なの

に・・・・・・・・」

「おーひさまの（国家機密）分の一だね。」

いらん計算だけは速いな。うなだれる王宮管理官、お前は弟に先を越されて来月にはおじさんと呼ばれる身じゃないか今更何を言っているんだね・・・・・・・・・・

「ぐはっ（吐血」

「はいはい、王城管理官。往生する振りはよいから・・・・・・・・・・・その指輪には見覚えあるし。」

特殊効果の指輪型魔具、王都市場外れの魔具専門店で銀貨二枚で販売中。（ｂｙ魔具専門店店主）

って、さらりと宣伝するな！どこから紛れ込んだ！

「どうも、種明かしするときに宣伝機能が働くみたいだ。」

「いらん所に力を注いでいるのだったら価格安くしろ！」

「王室顧問も似たようなものでしょう。」

「財務官人聞き悪いぞ。無駄な部分があるから余力を持って安全に出来ると経験上知っているだけだ、あの店主みたいにぎりぎりまで無駄を詰め込んだりしない。」

「どっちもどっちだな。」

「まてっ！聞き捨てならんぞ。式部官！少なくとも儀礼部分で全身タイツの儀杖兵を仕立て上げたお前には言われたくない。」

「そういえば儀杖兵から苦情があったな。『俺のが小さく見えるからナスを仕込むことを許可してくれ』と」

「そもそも小さい分際で何を言っているのやら・・・・・・・・・・

」

「ご主人様、官僚の皆様方。さすがに子供達の前では・・・・・・・・」

ふむ、自重しよう・・・・・・・・・

「お前らも自重しろ。」

「少なくとも王室顧問には言われたくないね。」

「同意だな。」

口々に言い募る官僚共。少なくともお前らには言われたくない。

「どっちもどっちだと思うのだが、と思うのはまだ僕が官僚に染まりきっていないということなんだろうな。」

「染まったら人として終わりだろう。」「せめて俺らだけでも官僚府の良心であり続けないと・・・・・・・・・・・・」「うわぁ！言うねぇ・・・・・・」

ボソッと小声で呟きを交わす後釜達に無言で詰め寄る官僚共、口は災いの元という諺を知らないのだろうか？

「ほうほう、私等の事をそう思っていたのか。」「誤解を解かないといけないな。」

「相互理解にかけると仕事の運営に差し支えるからしておくか・・・・・」

「い、いえ・・・・・・・・・そこまでしていただかなくても・・・・・・・・」「そういう行動が・・・・・」

「そういう行動が何だって？」「ひぃぃぃっ！」

胆力が足らんな、後釜君たち。少しは子供達を見習ったらどうかね？

「ご主人様、それはそれで問題だと・・・・・・・・・・・・」

そうか？王侯貴族をも肩書きで相手にせず、己で切り開こうとする気概があるだけなんだがな。

「子供達、おじちゃん達は話し合いで忙しそうだから他に行こうか・・・・・・・・」

はーい！

「ご主人様この場の収拾はいかがするつもりで？」

「ほっとけば良かろう。仕事もたまっていないしな・・・・・・・・・・・・」

「それとも二人きりが良かったか？」

「ご主人様！」

顔を真っ赤にしている孤児姉は可愛いものだ。ちょっとからかっただけなんだがな。

さて、何処に行ってみるかな？

子供達をぞろぞろと引き連れて・・・・・・・・・・

「おや、王室顧問子供達を連れて何処まで？」

「王妃様、官僚どもが子供の教育に悪そうなやり取りしているものですから他の部署でも手伝おうかと・・・・・・・」

「それならば子供達を貸してくださらない。社交の場に出るのならば礼法とか教えたほうが良いでしょうし。」

「ふむ、町方で糧を得るから必要ないと思っていたんで精々商家とか貴族家に招かれたときの基本しか教えてないですから願ってもないですな。」
「ならば暫く借りていきますよ。」
「子供達、このおば・・・・・・もとい、王妃様に着いていって礼法を習って行くと良い。王妃様、礼法の講師なんてすぐに来てくれるのですか？」
「それならば末王女のついでにと命ずるだけですから問題ないですわ。」
「なら良いのですが・・・・・・・・　あまり色々吹き込まないよう願いますよ。」
「それは責任もてませんわね。」

嫌な事を言いながら王妃は子供達を連れて行ってしまった・・・・・・

二人きりなんだが如何するかな？
枯野の季節だから花は温室しかないし・・・・・・・・
そういえば冬物の服とかあるのか？

「冬物ですか？外套があるくらいですが・・・・・・・・」
「ふむ、少し服を見繕ったほうが良いな。爵位持ちで可愛い従者が外套一枚の着たきり雀というのは宜しくない。王宮内は暖房が効いているとはいえ、市場とかは寒くなるだろうしな・・・・・・・・」
「では、孤児娘達や孤児弟とかも・・・・・・・・」
「孤児弟は男爵位と自力の収入があるから自分で用意させればよかろう、末王女とか公爵令嬢あたりが貢ぎそうだが・・・・・・・・・・
・・　孤児娘達は今仕事中だし後で用意してやればよかろう。それ

ともお前が選んで渡してやるのでも良いし。」
「孤児院のほうも・・・・・・・」
「そっちは後で古着屋にでも手配を頼もうか、どうせ汚すだろうし質より量だ。仕立て上げていたらきりがない、というか間に合わない。」

まぁ、たまには可愛い従者を着飾らせるのも面白かろう。
その後剥いて・・・・・・・なんてことはするつもりは今のところないのだがな。

「出していただいても良いのに・・・・・・・・・・」

嫁入り前の娘がそんなことを言うものではないよ孤児姉。

宮仕えと孤児姉（後書き）

「宰相閣下、当家に王室顧問卿家の孤児姉を迎え入れたいのですが口添え願えませんでしょうか？」

「北方街道伯、それはどっちの意味合いで？配下としてかな、それとも血族に迎え入れるという意味でかな？」

「後者のほうですな。詳しく言えば我が愚弟が見初めまして・・・・・・・妻に迎え入れたいと。」

「それは止めたほうが良かろう。王室顧問は彼女の事を溺愛しているしお手つきだぞ。（注：現時点ではそんな事実はありませんｂｙ作者）」

「お手つきですか・・・・・・・・・・確かに日夜常に侍っているから、そう言う事もありますな。それでも良いと愚弟は言っていますが、なにとぞ・・・・・・・・」

「悪いが協力は出来ん。」

「何故です？あんな大酒呑みで女好きの性格がねじくれ曲がった道楽貴族の元では彼女が可哀相ではないですか！」

「その評価は否定できないのが辛いが、彼女自身が好んで寄り添っているからな・・・・・・・陛下の誘いすら断りいれているし・・・・・・・」

「あんな、服飾美意識のない中年が振られるのは当然として、何故なんです？」

「それは不敬発言だぞ。どうしてもと言うならば聖域守護辺境伯家に申し入れたらどうだね、一門の党首からならば王室顧問も話くらいは聞くだろう。」

「そうですか、お手間を取らせて申し訳ございませんでした。辺境伯家に申し入れてみます。」

「力になれんで済まぬな。まだ孤児達を配下に入れたいとかならば話を通せるのだが、孤児姉は王室顧問のお気に入りだからワシでも

おいそれと手をだせんのだよ。貴殿の成果を期待せんで見ているぞ。」

その後北方街道伯は辺境伯家でも断られて、弟に諦めるよう言うのであった。

これは何処にでもあるような貴族の縁談の不発。若者の失恋であった。

「宰相閣下、口添え断って宜しかったんで？」

「そりゃ、そうだろう。孤児姉の思慕の目を見れば叶えてやりたいと思うのは当然だし、王室顧問も嫁の一つももらえばおとなしくなるだろう。」

「孤児姉の思いについては当然ですが、あの王室顧問が大人しくなるかと思えないですが・・・・・・・・・・」

「孤児姉がいるから、多少は騒動の被害も防げているのは事実ですが・・・・・・・・・それを説明して諦めさせるとかしないので？」

「王室顧問の良心というのは事実だが、それを公然とさせて役割とするのは酷いだろう・・・・・・・・・・・年端も行かない娘にそれを強要するか？」

「確かに・・・・・・・・・・・・」

王国の良心、宰相府の遣り取り。

今日も某王国はたいした騒動はありません。

傷跡娘と補佐見習（前書き）

これはやさしい物語
貴人聖域法使い自らの腕(かいな)を弱者の盾とする
愚かな愚かな物語
今は昔の盾の王　その血を継し男あり

男は娘をわが子とす　奴隷となりし傷跡娘
親は無力な今際の身
娘に無体の手がなきように
涙ながらに傷つける
鈍き刃の引き攣れと　熱き置き火の焼け爛れ
麗し顔(かんばせ)今はなく
何と無残な傷跡よ　何と悲しき親の愛

嗚呼　非情なるこの世界
せめて小さきこの娘　幸いなれと願う親
些細な願い　今際の願い
誰も叶えるものはなく
娘は傷を気に病んで　見る者なきと涙する

ただ幸(さいわい)は傷を見て　誰も娘に見向きもせずに
無体に花を散らされず　乙女の徴守られる
何時か出会える者あらば　娘の内は美しき
いつかその愛受けるなら　若者誠に羨まし
傷跡だけで捨てる者　傷跡だけ見て見えぬ者
汝に誠に出会う術なし

とある劇作家が記した『傷跡娘の物語より』

傷跡娘と補佐見習

そろそろ補佐見習に傷跡娘は帰ってくるのか。
ついつい王都の門に足を運んでしまう私も愚かしいことだな。

「ご主人様、彼らは何時頃帰ってくるのでしょうか？」
「予定ではこの数日中であるらしいが日時通りに辿り着くのは中々難しいだろう。旅と言うものはままならないものだからな。」
「とは言っても早く来ないものでしょうか？」
「案じているのか？」
「はい、彼等もまた私の弟妹分ですから。」
「弟妹を案じぬ姉はなく、子を案じぬ親はなしってところか我等は……」

少々風が寒いのか外套を着ていても身を寄せる孤児姉に風よけに成らんと風上のほうに身を動かす。
しかし、待つ身と言うものは何時になっても不安に襲われるものだな。
馬鹿弟子と可愛い傷跡娘に限って言えば大抵の苦難なら簡単に乗り越えられるだろうし、帰りも商会公の隊商に便乗しているから危険は少ないはず。
この国で商会公に楯ついたら日干しにされるからな。

ひゅるりらひゅるる・・・・

風も強くなってきた。散策もこれくらいとして戻るとしよう。

ガタガタガタガタ・・・・・・

「おーい、隊商が来たぞー！」
門衛が叫びを挙げる。臨検の者が荷改めをして、通行税を受け取る。基本的に無荷の者は銅貨一枚、商売する荷物を持つものは荷馬車一台に対して銀貨一枚程度（商品にもよる、野菜とか生鮮品の場合は安くなる）の税を納める事となっているのだが、貴族が商売をする場合は通行税が荷馬車一台に対して銅貨数枚程度だったりする。ある程度の規模の商人だと貴族を代表に据えたりすることも多く、貴族も名義貸しで副収入を得ている場合が多い。無論領地持ちの貴族だと自分で自領の産物を売り込むことも多いのだが。

隊商の先頭に掲げられている竿に括り付けられたのは古びた金貨袋。
商会公の隊商か……

私は隊商に近づき、我が馬鹿弟子達が居ないかどうかを尋ねる。
「賢者の旦那！」
「賢者様！」

隊商の中から私の姿を見つけたのか二つの声が響き渡る。
やっと帰ってきたか・・・・・・・・・・
待ち侘びたぞ。
傷跡娘、その顔を見せておくれ。うん、愛らしい顔じゃないか。補佐見習に呉れてやるのが勿体ないくらいだ。補佐見習も旅路を経て一皮むけたようだな。私は門衛と隊商の長に断りを入れ二人を連れ帰る。
「かーちゃんに顔見せて置きたいな。心配しているだろうし・・・・・」
「では、市場に向かいましょうか？」
「・・・・・・・・・・・そうだね。お義母さんに挨拶しないと。」

今の時間帯ならばまだ市場にいるだろう。酔っ払いの大使や官僚達と共に・・・・・・・

「旦那、俺が酒盛り部分作ってから市場が酒場になっていると聞いたのだが。」

「否定はせぬよ。市場の収益も上がって税収もいい感じに増えているから良いではないか・・・・・・・」

「……俺間違えたかな?そんなに大げさにならないで弁当とか食事するくらいできる場所があればよいかなと思っていたんだが・・・・」

「まぁ、結果が良ければ問題ない。悪いのは大使達や官僚達だ。」

「・・・・・・・・・・・何ヶ月振りだろう、長い間旅をしていた気分。それでも半分くらいは傷跡を消す施術で眠りの間にいたから夢の旅路なんだけど。」

「そうだな、俺も書類仕事していたからすぐに月日が去っていた感じなんだが・・・・・・・・」

やっぱりやっていたか……書類仕事。

「王宮でも書類の山を用意しているから覚悟しておけ。」

「うわぁ・・・・・・・・・・・・」

旅の疲れが出たようだな・・・・・・・・

崩れかけた補佐見習と傷跡娘を見て、王都から空荷で帰ろうとする農家らしい荷馬車を見つけると御者をしている親爺に心付けを渡して乗り込むのだった。

「旦那方、市場でよいんかい?」「悪いな、帰りに・・・・・・・・」

「なぁに、全裸賢者様の頼みだ。無碍にはできまいよ。心付けももらったし・・・家にいる餓鬼どもに身土産の一つでも買うとしますよ。」

農家の荷馬車でガタゴトと市場に向かうのであった。

市場の外周部分につきこれ以上は馬車を乗り入れするのは通行の邪魔になるので、農家の親爺と別れて小売婦人を探す。まだ店を開いている面々を訪ねながら探す事暫し、親子の再開となるのである。

「おかえり。ちゃんと無事に帰ってきたね。」「かーちゃんただいま。」

「……唯今戻りました。」

「どれどれ傷跡娘はどうなったのかな？　うん、見立て通り美人さんだね。傷跡があってもちゃんと可愛い子だったのに是だと男たちがほっとかないね？息子よ！ちゃんと捕まえておくんだよ！」

「ちゃんとってなんだよ！　ちゃんとって！」

「お前はどうせ甲斐性無なんだから、こんな可愛い子をモノにする機会なんてまずないだろうし逃がしたら一生独り身だよ。」

「ひでーよ、かーちゃん。久しぶりに戻ってきた息子に対する言いぐさか？」

「……義母さん大丈夫。私が逃がさないから……」

「嬉しい事を言ってくれるね。息子を頼むよ。」

「・・・・・・・・はい。」

親子の久しぶりの会話は補佐見習が一方的にやられているようだ。傷跡娘の方が実の娘みたいな感じだしな……

その光景を眩しそうな眼をしてみている孤児姉。無いもの強請りだと頭では分かっているんだろうが羨ましいのだろうな。そっと抱き寄せて頭をなでてやる。抵抗する事もなく身を寄せてくる。

「良い光景ですわね。」

「そうだな、夫人もつれて寮に行くか？孤児娘達や寮母あたりも案じていただろうから。」
「孤児院の方でも院長先生や弟妹達が心待ちにしていますから明日にでも寄りたいですわね。」
「では、明日は王宮に通っているチビ共も引き連れて孤児院に押し掛けるか。」
「戻って来た事を官僚の皆さん達に内緒にしておかないと明日一番に連行されそうですね。」
「あははははっ、流石に其処まで情報は速くないだろう。」

「よぅ、補佐見習ではないか！その様子だと傷跡娘の件は無事に済んだようだな！」
「そこにいる美人ちゃんは傷跡娘か？補佐見習を捨ておじちゃんところ来ないか？」
「補佐見習、仕事が待っているぞ！」
そうだった、ここは酒盛り市場。官僚もたむろしているんだったな。とりあえず釘を刺しておくか・・・・・・・・・・

「親子水入らずを邪魔するんじゃない、王宮への挨拶は孤児達の雇用期限切れに合わせていくし、二人も旅の疲れをいやす時間がいるだろう？」
「そうだな、王室顧問。閣下と法務副長にはそう伝えておく。」
「悪いな・・・・・・」
「となると明々後日か、多分王妃あたりが煩そうだから覚悟しておけよ。」
「違いない、明後日あたりは私も手伝いに行く。明々後日は仕事に並んだろうからな。」
「助かる。」

私は渋る小売婦人を連れに加えて寮に向うのであった。

遠慮すること無い。息子は爵位持ちだし、その母となれば寮に入る資格は十分ある。
一夜くらい私の客人としたってよいのだ。
親子水入らずを存分に楽しめばよいさ。

寮に戻ると孤児娘達に孤児達も戻って来たところで私等の顔を見るなり駆け寄ってくる。
どうだったとか、奇麗になったねとか・・・・・・・・・・・・
口付位したのとか・・・・・・・・・・それは親の前で答えられないだろ！

もみくちゃにされる二人、それをほほえましそうに見る小売婦人。
寮に入ってからも寮母には強く抱きしめられ二人して目を白黒させたり、戻って来たならば先触れをだしなと私が怒られたり・・・・・・

寮の食堂はにぎやかであった。寮にいる面々も久方ぶりの再会を祝って、王妃の年ほど（慣用表現）の乾杯を繰り返したり・・・・・・
補佐見習が旅路にて書類仕事をしていた話を聞くと何旅に出てまで仕事しているんだとからかわれたり、温泉町の様子に行ってみたいねぇ等と女衆が羨ましがっていたり・・・・・・・・

夜も更け始めて、二人は疲れているんだから休ませてやりなと寮母が釘を刺して来るまでワイワイやっていた。

そして親子三人は一つの部屋で遅くまで語らうのだった。

よたかが　ほーほー

誰かの夜が穏やかでありますように

傷跡娘と補佐見習（後書き）

では、酒が切れたのでこれまで。三崎のエボダイは白身でうまいぞ。お勧めは煮つけだね。味醂を入れず酒と塩だけで仕立てるのが私の好みだ。

傷跡娘と王妃様（前書き）

盾の血を引く男あり　古よりの聖なる血
男は子供を弟子とする　街で朽ちたる娼婦の子
娼婦は男の手当てもあって　息子を抱(いだ)くこと出来る
落ちたるその身は卑しくも　母の思いは偉大なり
その身を誰かに委ねるは　愛し我が子の為なれば
母の思いは誰が為　息子もそれを感じ取る
金銀金剛ちりばめた　街の明かりの片隅で
朽ちたる者を見向きもせぬは　王都の者の情けなし
盾の男の甲斐あって　親子は暮らしの道繋ぐ
王に楯突く古き血の　叫びに祖王も苦笑い
遥か昔に盾の血に　叫ぶ血族今何処

盾の男は少年を男にすべく鍛え上げ　子供は母の愛を知り
千の苦行を成し遂げる
子供の叫びは最果てに朽ちる誰かの代弁か
王なる者の無能なら　救い上げたる手となろう
無知なる子供の愚かな叫び　今は誰もが嘲笑う
今は小さき少年の　叫びは誰もが聞き流す
恐れよ子供をその先を　驚け君よ少年の
決意は種火　いつかは焔

とある酒場で詠われた【傷跡娘の物語】より

傷跡娘と王妃様

ヨタカが寝床に戻りサカサムクドリが飛び立ち始めたとき。
朝が始まる。
夜遅くまで語り続けたのか眠たげな三人を見て私は仕方がないなと苦笑する。

別に孤児院へと向かうのはゆっくりでも構わないのだが、小売婦人も仕事があるだろう。
自分だけの商売ならば休むのもありなのだが、市場の世話役の一人となった責任もあり身支度を整えていた。
馬鹿弟子も眠たげな表情を浮かべつつも身支度を整えていた。
私はそんな親子三人に挨拶をし、共に食堂へ行こうと誘う。

小売婦人は市場へと向かい・・・・・・・・・
その後他の世話役達から態々こんな時位休めば良いのにと窘められたそうだが・・・・・

我等も孤児院に向かうとしよう。
「補佐見習、隊商の方から私物とか荷物が届いてますが・・・・・・・」
長旅だし色々荷物もあるだろう・・・・・・・・・・・土産物もあるのか。
「賢者の旦那、力添えありがとう御座います。これは口に合うかわかりませんが・・・・・・・・・・」
ふむ、温泉地近くで高名な醸造酒の原酒ではないか。心憎い事を・・

・・・・・・・・

「補佐見習よ、別に私は何も成しては居らぬよ。全てはお前が自力で得たもの、礼には及ばぬ！」

酒は嬉しいがな・・・・・・・・・・後でチビチビとやるとするか。

そして、土産の数々を開いて孤児娘や孤児姉には綺麗な鈎編(レエス)みを渡したり、寮の面々には小物だの目隠し布だのを・・・・・・・主に女衆が選ぶので賑やかだったのは笑い話としておこう。

因みに孤児弟には末王女か公爵令嬢にでも送るのによかろうと鈎編(レエ)みに銀糸をあしらった目隠し布(ス)を用意している。多分、温泉伯あたりに目隠し布の宣伝に協力してくれと頼まれたのだろう。

一通り配り終えた所で孤児院へと向かおうとする。

残念ながら孤児娘達や孤児達は仕事が溜まっていると言う事で我等のみで行くこととなったのだが・・・・・・・・・・

さて、行こうか・・・・・・・・・・先に市場で土産でも見繕うかな？

そんな矢先に

「王室顧問様は居られるかな？王妃殿下の命により補佐見習準爵、傷跡娘準爵を伴い王宮へ参られたし！」

王妃め、我慢できないのか・・・・・・・・

王宮からの使者に補佐見習と傷跡娘は苦笑をする。

「・・・・・・・・・・賢者様、孤児院は明日にしますか・・・・・・・・・・」

「行ったら良い話の種にされそうで嫌なんだがなぁ・・・・」

気持ちは判るぞ補佐見習。お前等は噂の恋人達になってしまっているからな。

「御主人様、用意を整えていくしかありませんね。」

「仕方あるまい・・・・・・・・・少しは自重して欲しいものだ。」

「王妃様には暫し再会の時をと申し上げたのですが・・・・・・・・・」

使者殿は悪くない、悪いのは気も利かない大と・・・・・・・げふんげふん

多分、陛下あたりも一枚噛んでいるに違いないが。

「使者殿、貴殿は悪くない。明後日辺りには用意を整えて挨拶に伺う予定ではありましたから・・・・・・・・・」

「そう言っていただくと助かります。」

そう言っている間に用意は整い、王宮へと向かうとしますか・・・・・・・・

王宮にて陛下の執務室そばに設けられた応接室の一つに我等一同が迎え入れられる。

王妃だけだったら後宮部分に迎え入れられるのだろうが・・・・・・・

「長旅で疲れているであろう中良く参った。」

陛下は労うかのように言っているが、好奇心が見え見えなのはバレ

バレである。
「傷跡娘、その顔を見せてくださいな。」
王妃に関しては完全好奇心で呼びつけましたと全身で表してやがる。
「陛下におかれましては旅路への配慮、補佐見習及びに傷跡娘感謝申し上げます。」
「補佐見習よ、温泉伯から聞き及んで居るぞ。あの地方の書類仕事を片付けたことを・・・・・・・・・・」
「いえ、それは手慰みで・・・・・・・・・手を出したまでで、そのお陰で神殿からも・・・・・・」
「向こうから令嬢と今後も度々人を寄越してくれないかと言われた。礼については受け取るが後半部分は・・・・・・・・・・・・で、旅は如何であったかな?」

陛下は補佐見習を相手に旅路や温泉町の風俗を利いてしるし、王妃は傷跡娘の顔を撫で回して・・・・・・・・・・・・・・・
ああでもないこうでもないと思案している。弄り回す気満々ですね。
「良いじゃない、可愛い子を着飾るのは楽しいわよ。王室顧問だって孤児姉を先日色々着飾らして楽しんでいたそうじゃない。本当、孤児娘と傷跡娘私に下さらない?孤児弟でも良いわよ。」
「犬猫の子じゃないのだから気楽に言わないでください。それに傷跡娘は補佐見習の売約済みですよ。そして、王妃に譲ったとばれたら私が母に何をされるか・・・・・・・・・・・・・私兵団率いて取り戻しに着そうで怖いですから・・・・・・・・・」
「残念ねぇ・・・・」
「でしたら、何処かの年若い侍女とかを弄り回せばよいでしょう。本人も親も良い人脈(コネ)が出来たと喜びますよ。」
「それでしたら、もうやり尽くしましたわ。楽しかったですけどあの子達は一通り自分の魅せ方を判っているから面白くなくて・・・・・・・・・・・・やはり一から作り上げてみる楽しみを味わえるのは

貴方の娘達以外に居ないの・・・・・・・・・・・・」
「程々にしてくださいよ・・・・・・・・・・・・・官僚共からの苦情を受けるのは私か宰相閣下なんですから。」
多分聞かないだろうが一応釘を指す。

「それにしても、傷跡娘がこんな可愛い子だとは・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・別にかわいくなくても良い。補佐見習だけ見てくれれば十分だったのに周りの目が面倒です。」
「うわぁ、暑いですわね。」
「それには同意ですな。」

会話に混ざってきた陛下も
「こんな可愛い子に慕われるとは補佐見習も幸せ者だな。如何だね傷跡娘、ワシに乗り換え・・・・・・げふっ！」

王妃様、陛下のわき腹は官僚共や護衛官ほど丈夫じゃないので容赦ない一撃は止めてください。
崩れ落ちる陛下に目もくれず
「貴方達は何時契りを結ぶの？」

「ちっ！ちぎ・・・・・・り？」
「・・・・・・・・・・・・・・・／／／」

「契りの儀式よ。夫婦の誓いを立てるのでしょう？　まさか、もう挙げてきたとか？」
「い、いえ・・・・・・・未だですけど・・・・・・・・・・・・そこまで考えたことはないですし・・・・・・・・・・・・せめて一人前になるまではと思ってましたが・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

口篭る補佐見習に無言になる傷跡娘。どちらも真っ赤だ。
可愛いものだな。
「王妃様、若い二人はまだ恋人気分を味わいたいと思っているのに無粋ですよ。」
「そうでしたわね、私には恋愛期間というのがなかったから羨ましくて・・・・・・・・・・」
はいはい、しおらしくしても可愛くないですから・・・・・・・・・・
それにかかるのは陛下くらいですし・・・・・・
「今ではワシもかからんぞ。何度もやられたらなぁ・・・・・」
王妃様・・・・・・・・・・・・
陛下と私の冷ややかな視線に目を背けて、笑って誤魔化している・・・・・・・・・・・・
陛下もいつもの事にあきれ果てた顔をしたが私に対して本題を告げる。
孤児達の処遇である。
あの子達も王宮にて十二分に活躍してくれている。少々やり過ぎな気もしないでもないが・・・・・・・・・
主に貴族緒家に対する会計処理の間違い探しとか襲撃者に対する情け容赦ない処置とか・・・・・・・・・・
「旦那、何やっていたんだ?」
補佐見習、そんな冷ややかな目で見られても・・・・・・・・・・私の何時もの書類仕事を手伝ってもらったから数倍量の処理が出来ただけだぞ。それが、過去数十年分の殆どを洗い出して現場が大混乱

していいるだけなのに・・・・・・・・・・

「それはやりすぎというもんだろうがぁぁぁぁぁ！！」

補佐見習も平民の常識で考えていると・・・・・・・・・・・・・

「御主人様、貴族の常識でもない気がしますけど・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・官僚の基準で考えると回りが死ぬ。」

「・・・・・・・・・・・・うん、まぁ、少々問題点が出てきているけども、子供達は良くやっているよ。投入箇所を間違えたかなと思っていたりもするけど・・・・・・・」

「それは言えますすね。資料整理とかにも半分くらい回しておけば良かった気がしますが・・・・・・・お陰で官僚達の常識に染まってしまって・・・・・・・後が怖いのですが・・・・・・・・・・・」

「末王女付の教師からも非難の声が・・・・・・・・・・・・子供達に何をさせているんだって・・・・・・・・・・」

「あらあら、私に預けてくだされば元の可愛い子に戻りますわよ。」

「それはそれで王妃様に預けたら、ただの愛玩動物になってしまいそうですし・・・・・・・・・」

「猫可愛がりしているからなぁ・・・・・・・」「子供の教育もまともに出来ていないのに・・・・・・・・・」

「ちょっと、それは酷い言いがかりですわ！」

「では、言いますけどねぇ・・・・・王都によりつこうとしないで旅をしている王太子殿下に剣術にはまって政務をしない次王子、姉王女は降嫁しているけど嫁ぎ先で旦那泣かしているし、末王女は孤児弟にまとわり着く害虫だし・・・・・・・・・・・・苦情はこっちに回ってきているんですから何とかしてください！隠居できないじゃな

いですか！」
「そうは言っても、上三人は否定できないのが辛いですけど最後のは孤児弟にとっても良い話でしょうに！」
「本人が嫌がってなければね。アレにはもう、何人も良い仲のご婦人がいるんだから・・・・・・・・・・」
「それは初耳ね。詳しく聞かせてくださる？」

言い争う私と王妃・・・・・・・・・・・・何時になったら王族と縁を切って隠居暮らしが出来るのか？
しかも、孤児弟の女性関係に興味深深だし・・・・・・・・・・・・・・・
私に実害ないから良いけど。

「結局そっちに落ち着くんだな・・・・・・・・・・・・・・」「賢者様だし・・・・・・・」
「でも、苦情処理とかは結構面倒でしたわ。」
「で、王太子殿下は今どこに？」「三日ほど前は霜降国にお邪魔していたそうですわね。ただ南方の黒獅子を担いでいたから如何やってきたのか不明ですけど・・・・・・・・・・・・」
「それってなんかの呪い？」「・・・・・・・・・・・・・・方向音痴の移動魔術師？」
「傷跡娘の正解ですわ。」

「陛下、王妃様、執務が溜まっているので片付けて欲しいのですけど・・・・・・・・・・」
痺れを切らして応接室に入った事務官の嘆きは誰も聞いていなかった。

哀れ事務官。

傷跡娘と王妃様（後書き）

腹が減ったのでここまで。
昼酒も飲みたいなぁ・・・・・

傷跡娘と王宮雀（前書き）

さて参ろうか子供達　盾の末裔（すえ）なる男の誘い
孤児に奴隷に娼婦の息子　名乗り挙げんと戦の地
剣交わさぬ筆戦　白き山々積みあがる黒き言葉の群れ崩す

政道（まつり）の戦ぞ　呆けるなかれ！
君の一文字民草の　一年かけた重みがあるぞ
ふざけるなかれ　欲張るなかれ
民興亡の一戦に　我等は正しき秤とならん
我等は官僚酒飲む貴族　全てに恨まれ全てを助ける

剣持たずに筆を持ち　国に世界に戦を挑む
大海一つに匙の塩　君は無力と笑うなら
匙は一つでありはせず　匙は幾度も塩投げる
何時しか海は塩辛く　なること君は知るだろう

傷跡娘に娼婦の子　筆を進めて民の為
命削りし親の為　路傍に朽ちし子の為に
腕の痛みを抑えつつ　胸の痛みを抑えつつ
自分の無力を嘆きつつ　男の期待を身に受けて
政道（まつり）の戦に身を投じ　刻んだ決意に身を削る

そこに現る貴族の子　己が非才を棚に上げ
少年少女を馬鹿にする
我は貴族でお前等奴隷　どちらが偉いか判るだろう
無能な子供は外に行け　我の才にて国支え
汚い子供は朽ち果てて　腐った賢者は国を出ろ

無体に怒るは男の子　傷跡詰る貴族の子
親の思いを知らないで　娘が痛み知らないで
更に鞭打つ非道の言葉　拳は何時しか握られて
怒りの叫び抗う力　子供は貴族を打ちのめさんと
力を籠めて立ち向かう

嗚呼空しいは娼婦の子　君は非力で技もなく
拳一つで帰り討ち　無力噛み締め立ち上がる
例え命が尽きるとも　不幸に鞭打つ無体する
屑に屈するわけいかないと・・・・・・・・・・・・

怒り隠せぬ盾の末裔（すえ）
優し娘を詰られて　愛し子供を馬鹿にされ
どこに怒らぬ親のいる　どこに嘆かぬ親がいる
血の繋がりはあらずとも
尊き血筋にあらずとも
不幸を糧に前進む　子供を損なう屑を見て
さぁ　仕事にて示せと言う

白山白山積みあがり
貴族の筆は動けない
一つ崩して二つ増え　二つ崩して十が増え
何時しか貴族の目の前は
部屋をも埋める白い山

それに嘆くは優しき娘　それを憂うは娼婦の子
山の一つに民の汗　山の一つに民の血が
籠められ其処にあることを
骨身に染みて判るから
慈悲にあらずと孤児が言い

情けをかけると子供の言い

嗚呼　愚かなる貴族の子　嗚呼　愚かなる貴族の子
己が無力を身に染みて　己が非才を嘲られ
恥じかきその場を逃げ出した

白山崩して子供達　民に不憫を背負わせじ
一つ遅れて村が消え　そんな悲しみどこにある

どこぞの酔っ払いが聞き覚えでわめいた戯れ詩【傷跡娘の物語】

傷跡娘と王宮雀

その後、流石に痺れを切らした事務官達と宰相閣下が国王夫妻を執務室に連行して・・・・・・・・
王家に対する扱いではないな。

「御主人様には言われる筋合いはないと向こうも思っているでしょうが。」
「否定はせぬけどね」
「其処は形だけでも否定する部分だと思う・・・・・・・・・・」
「仕方ないだろう、旦那は王室に好印象もっていないんだから。」
「・・・・・・・・・・そうなんだけど・・・・・・・・・」

とりあえず孤児院に行こうか・・・・・・・・・・
その前に土産は孤児達の分は・・・・・・・・・・
足りそうにないか・・・・・・・・・・仕方ないな市場に行こうか・・・・・・・

「ああっ！丁度良いところに補佐見習。仕事手伝ってくれ。」

嗚呼、無視無視・・・・・・・・・・・・ここで心を強く持たないと仕事押し付けられるぞ。

王宮の中では補佐見習の顔を見知ったものが多いが傷跡娘に気がつくのは・・・・・・・・・・
然程多くないな、いつも補佐見習にくっついている傷のある娘くらいにしか思われていないのだから、傷跡がない傷跡娘を見たことが

ない・・・・・・・・・・・・って言うか傷跡がなかったら傷跡娘じゃないだろうとか言ってくる傷跡愛好家とかいそうで怖い。どう見ても王宮は変態の巣窟だし・・・・・・・・・・上からして変態となれば下も変態と・・・・・・・・・・・・」

「御主人様王宮から逃げたくなるようなことを言わないでください。」

悪い　自重しよう。

それでも補佐見習が傷跡娘を連れていると新しい子を連れ歩いていると勘違いしているみたいだし・・・・・・・・・」

「補佐見習卿が新しい子を・・・・・・・・・」

「捨てたんか・・・・・・・・・・・・」「酷いわね・・・・・・・・・・・・」

「そういえば傷跡を治すために金貨を・・・・・・・・・・・・」「だとしたら？」

「あの可愛い子は傷跡娘か？」

「なると、戻ってきたのか・・・・・・・・・」「勿体無いことをした・・・・・・」

「今から粉かけようにも・・・・・・・・・・」

「どう見ても補佐見習にべったりだよなぁ・・・・・　」「もげろ」

宮廷すずめは五月蝿く鳴いているな。

ざわざわ・・・・・・・・・・

モテモテだな補佐見習。

「だから俺は静かに過ごしたいんだ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫、皮一枚しか見ないのには

靡かないから。」
「それは嬉しいのだが・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・大丈夫人の噂なんてすぐ消えるから、大事なのは私が補佐見習のことを好きであるという事実。」
「・・・・・・・・・・・・・・・恥ずかしい事言うな。」

誰か、誰か・・・・・・・・・・・・・熱いから空気入れ替えろ！
「そこの小姓、この二人のやり取り食えるか？」
「もげろ！喰えるわけないだろう！それに俺は犬じゃない！山鼬（オコジョ）系だ！」
「さっぱり判らん。」

ほんとうにおうきゅすずめどもはびーちくぱーちくうるさいものだ。
（棒読み

傷跡娘と王宮雀（後書き）

「賢者の旦那、なんか冒頭がむずがゆいのだが・・・・・・・・・・・・」

「補佐見習よ、諦めろ・・・・・・・・・お前達は噂の恋人達なんだから・・・・・・・・・」

「静かに過ごしたかったのに。」

「でも、この一件がなければお前等は引き合わなかったんだ、幸運を獲た代償に思え。」

「そりゃ、傷跡娘が付いてくれるのは嬉しいが・・・・・・・・・・」

「煮え切らない奴だな。」

「・・・・・・・・・・・・賢者様大丈夫。補佐見習は私のモノ。私が彼のモノであるように・・・・・・・・・」

「ぶっ！」

「傷跡云々でがたがた言うならば俺は世界に喧嘩を売るとまで言ってくれた。」

「うわぁ、だいたーん。」「羨ましいね傷跡娘。」「補佐見習もやるじゃない！」

「そ、そんなことは人に言うことじゃないだろう！」

「補佐見習覚悟を決めなさい。傷跡娘が本気なのですから、それに本気で応じなさい！」

「孤児姉厳しいな。賢者の旦那に対してあてつけているのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そ、そんなことはなきにしもあったりなかったりもしないでもなかったりするようなないような・・・・・・・・・・・・・」

「こらこら、お前の一生が決まるからといって私まで巻き込むな！私は常に性愛神と共にあるのだから。」

うんうん、正確には性愛神殿の綺麗所と共にだけどね。（ｂｙ性愛神）

「で、本音としては？」「はっきりしなさいよ補佐見習。」「もう少しこの甘酸っぱい雰囲気を楽しみたいの？」

「周りとしてはおなか一杯なんだけど・・・・・・・・・・・・」

傷跡娘と酒盛市場（前書き）

痛み堪える娼婦の息子　顔より心に痛み持つ
何故にこの子が詰られる　傷跡抜きでも可愛い子
親の無体は悲しき願い　何時か出会えるよき男
涙流して抱きつく娘に　かすり傷だと意地を張る
愛し娘の名誉を守る　不器用者に盾の末裔（すえ）
栄誉を一つ与えんと　秘薬を与え手当てする
娘の掌　柔らかく　そのくせ薬は良く染みる
貴族の屑の痛みより　苦痛が走る傷口に
痛みを堪え強がりを　娘涙目案じつつ
意地張るならば最後まで　千の苦行の時よりも
気楽なものと嘯くも　不意に塗られた傷薬
染みて悔いた身に堪えかね　子供悲鳴を一つあげ

周りその様にこやかに　生暖かき笑み浮かべ
初々しきはその二人　初々しきはその二人
苦情をのべる娼婦の子　誰もまともに取りあわず
絡めとられて娘の手　雁字搦めのその様も
誰も助けるものはなく　誰も助けるものはなく

優し傷跡娘には　よき少年を手に入れる

合掌

場末酒場で詠われた戯れ詩　【傷跡娘の物語】の一節より

傷跡娘と酒盛市場

我等一同は今市場にいる。
流石に枯野の季節とあって風が身に染みる・・・・・・・・
こういうときは誰かのぬくもりが欲しくなるのだろうな。

傷跡娘は補佐見習に抱きついている。
馬鹿弟子の方も無理やりに振り払うことはしないようだ・・・・・・・・
暖を取るだけなのかそれとも・・・・・・・・・・・・

「納まれ俺の・・・・・・・・」

ああ、男としての葛藤中なのか・・・・・・・・
季節に流されると言う事も若いうちには必要なことなのだがな。
そうでないと（人物名削除）や（個人情報保護のため削除）みたいに独身街道まっしぐらだぞ。
好きあっているのに結ばれないとは不幸なことだ・・・・・・・・・・
我慢してじっくり楽しみたいと言うのならば個人の楽しみということで気にもせぬけど。

「そういうご主人様は季節に流されないので？」
「口に出ていたか、私はそういう年でもないだろう。恋愛に胸をときめかせるのは終わったよ。今は性欲だし。」
「・・・・・・・・・・・・むぅ」
本当に私に男女の好意を向けるとは不憫な娘だ。

さてと、孤児院のチビ共の為に土産を見繕うとするか・・・・・・・・・

菓子がよいのか、服でも用意するか・・・・・・・・・・どうする馬鹿弟子。

「一応師匠なのは認めるが、馬鹿馬鹿言うのは止めてもらいたいんだが。」

「ふっ、惚れた女のために平民の身でありながら無策で貴族に楯突いたり、最高の笑顔を見たいからと修羅場に身を投じているのを馬鹿といわずなんと言う！さらには・・・・・・・・・『うわぁぁぁぁぁっぁぁぁぁ！！』」

突然大声を上げる補佐見習。

「たかだか、は『うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』の為に世界に喧嘩『だまれぇぇぇぇぇぇつぇぇぇぇぇぇぇ！！』」

叫び疲れて崩れ落ちる補佐見習。鍛え足りないな。

「御主人様、補佐見習をからかうのは・・・・・・・・・・・・」

「精神鍛錬が足りないな。これからは常にむず痒くなる様な賞賛を得なくてはならないのだ。それに耐えられないと後が大変だ。」

「まぁ、補佐見習が惚れた女のためならば世界に喧嘩を売る馬鹿なのは認めますが、潰しすぎでありましょう。それとも以前に言われた椎の実発言を根に持って・・・・・・・・・・・・・・・」

考えすぎだ・・・・・・・・・・・因みに私は世界樹だから。

さて、脱線したようだ・・・・・・・・・・・
色々見て回るか・・・・・・・・・・・・・・
何だ？傷跡娘？
「だったらお金のほうが自由に使える。私達では何がいるのかわかってない。」
「そうか、ならば茶でも飲んで一息つけるか。」

市場にて茶を飲むか・・・・・・・・・・・・・・・ついでに菓子くらいは買っておけばよかろう。
無駄にはなるまいし・・・・・・・
「そこの衛士君、茶菓子を買ってくるがよい。」
「王室顧問様、何で？」
「私は貴族、お前は平民。それ以前に衛士隊のつけを立て替えてやっただろう・・・・・・・・・・・・」
「公私混同・・・・・・・・・・・」
「で、行くの払うの？」
「喜んで行かさせてもらいます。」

ふっ、王都の民は軟弱者が多い。
「いや、旦那。それは普通逆らえないから・・・・・・・・・・・・・・・」
「御主人様・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・賢者様・・・・・・・・・・・・・・・・むごい。」

普通だと思うのだがな？
「・・・・・・・・・・・・・だってつけを取り立てられたら衛士隊は破産だし・・・・・・・・・・・・・・・」
「どんだけ借りているのやら・・・・・・・・・・・・・・」「賢者様だか

らこの程度で住んでいるのに・・・・・・・・・恥ずかしいわね」

「ちょ、ちょっと！衛士隊が悪者？」

「それ以前にだらしなさに呆れているの・・・・・・・・・・」

「面目ない・・・・・・・・・・・」

その後、衛士隊全体で反省文祭りが開催され、立替分（金貨２枚）は踏み倒されるのであった。

無念

傷跡娘と狼夫婦（前書き）

傷を恥じるは傷跡娘　男の心を知らないで
自虐の殻で身を隠す　悲しき親の愛なれば
一人で生きると口にする　心は誰かを追い求め

不器用者は娼婦の子　娘の心知りつつも
口から出るは照れ隠し　行い全て君が為
求めはしないと言いながら　眼は常に追い続け

暑さに参るは周りの衆　二人のずれを知りつつも
囃すは早くくっつけと　ならねば娘を奪い去る
二人の世界に呆れつつ　氷の呪文で涼もとめ

無粋な魔の手は王妃様　恋する娘が面白く
連れ去り色々教え込み　子供の恋を飛ばし行く
押されて逃げるは娼婦の子　押して逃げるは善き娘

恋愛神殿書庫に保管されている、口承説話【傷跡娘】より

傷跡娘と狼夫婦

寒いのか暑いのかわからん状況だね。
枯野の季節で風は寒いのに補佐見習と傷跡娘の不器用な熱愛振りは暑いし・・・・・・・・・・・

流石にこの季節に氷売りはいないだろうしな。

「貴族の旦那。氷でしたら直ぐ出来ますぜ。」
「狼頭の氷売りかそう言えば氷の呪法ですぐに作れるか・・・・・・・・・」
「そうそう、今の時期でも酔っ払いの旦那方は霰酒とかやっているからねぇ・・・・・・」

こんな寒いのに細かく砕いた氷に酒をかけて嗜むと・・・・・・・・・
馬鹿が、馬鹿が居る・・・・・・・・・

寒い時の冷たい酒はおつなものだよー（ｂｙ酒精神）

まぁ、神様ですからね。

極北では寒いときには酒を温める暇がない。故に齧るようにして飲む。（ｂｙ極北神）

はいはい、焔も凍る北の大地の民草達ですからね。

「飲めば暖まるし。」「かんぱーい！」
「火酒は寒いときの酒だね。」

寒空に野外で酒盛をする馬鹿（某王国民６：大使連中２：極北の民１：魔王国１の割合）を見てこっちが寒くなってきた。
温かい物無いかな？

「あったかな、甘汁団子は如何かな～」
狼娘はなんか温かそうな物を売っているな。
「狼娘、それを人数分くれ。」
「あいよ！」

暖めた数種類の果汁にに白玉と柑橘や果物の煮た物を浮かべてある。
香り付けに果実酒を垂らしてあるのか酒精の香りもしている。
果実酒の熱燗も寒い夜には悪くないが、これも面白いものだな。

「あっちっ！」「ふーふー」
「一気に飲むと口の中火傷するよ。」
「温まりますね・・・・・・・・」

所でもう一つの鍋の中身は何だね？
そこには黒いどろりとした物が・・・・・・・・・・・・
「これは豆を粥のように煮込んだ物だね。好みで甘みをつけたり塩味にして白玉を浮かべる食べ物でさぁ・・・・・・旦那には贔屓にして貰ってるから一つ試してみるかい？」
「氷売り、では一つ貰おうか？」
「あいよ！」

氷売りは豆粥らしき物を器に入れ、その上から白玉を載せる。

「今日は甘いものだけど大丈夫かい？旦那は甘いの苦手そうだが・・・・・・・・」
「心配するな、甘いのもいける口だ。」
「ご主人様は焼き菓子で酒飲んでいたことありますからねぇ・・・・・」
「・・・・・・・・・焼き菓子にも蒸留酒使っていることあるから、悪くない組み合わせかも。」
「飲んだことないから合うのかどうかは判らないや。」
「甘辛両刀と言うらしいですわね。」
両刀と言わない。見境なしみたいで嫌だ。

ふむふむ、豆の煮た物というと塩味の豆粥とか豆汁とかを連想して違和感を感じるのだが・・・・・・・・・・・・
先入観を除けば・・・・・・・・・悪くない。
どっちかというと菓子というよりも食事だな。

はふはふ・・・・・・・・・

私が食べているのを見て子供達も興味を示したのだろう。
「狼のおっさん、俺にも一つ・・・・・・・傷跡娘はどうする？」
「私は食べきれないから補佐見習から一口貰う。」
「・・・・・・・・・・・・そっか。」
「私も一つくださいな。少なめでお願いします。」

「あいよっ！」
狼夫婦は子供達のために甘口の豆粥を用意して白玉を浮かべる。可愛い恋人同士のために白玉の数を偶数個になるようにおまけしているのは愛嬌だ。

「後はこいつを加えると更に味わいが変るよ。」
何かに木の実らしきものを加えていく・・・・・・・・・・
「いいって、お前が食べな。俺は自分で食えるから・・・・・・・・
」
出来上がったものを見て・・・・・・・・
「・・・・・ふぅふぅ、食べる？」
「・・・・・・・・・・そう」
ぱくっ！
「美味しい・・・・・・・・・」
「そっか、俺にもくれ。」
「・・・・・・・・はいっ」
「って、食べさせるのか。」
「うん、食べて・・・・・・・・それとも、私じゃ嫌？」
「そんなわけじゃないって、ただ、恥ずかしいというか照れくさいというか・・・・・・・・・」
「あーん」
「・・・・・・・・・・・あーん。」

「見せ付けられているのも寂しいですわね。」
「子供は成長するものさ。それよりも孤児姉あそこを見てみろ。」
「御主人様、なんですか？あっ！」
「静かに・・・・・・・・・」
私は酒場部分の外れから二人の様子を眺めている小売婦人を手招きする。
婦人も息子の成長振りをニマニマと眺めながら近づいてくる。

「あらあら、この分だとお義母さんと呼ばれる前におばあちゃんと呼ばれそうね。」

二人は気づいていないのか照れくさそうに食べさせあっている。

周りで酒盛している連中も（平民1：貴族8：戦士階級1の割合）

「暑いねぇ・・・」「枯野の季節なのにねぇ・・・・・」

「俺は独り身なのに・・・・・・・」「もげろ！」

「しっかし・・・・・・・・」

「「「「暑いねぇ・・・・・・」」」」

声を態々合わせて呟く事ではないだろうに・・・・・・・・

酒ばっかり飲んでないで男を磨け、そうすれば勝手に女は寄ってくる（嘘です

二人が食べ終わるころには、周りがニマニマして見ていた。

ダメだ、こいつ等何とかしないと。

こいつ等につける薬はないのだろうか？

びゅん！（匙を投げる音）

まぁ、そうだろうと思ったが・・・・・・・・

アラ、つける薬はあるよ。効き目が無いだけで・・・・・・・・・

（ｂｙ療養神）

市場を見渡していると木製の匙を買っている神職が・・・・・・・・・
「本当に療養神様には困ったものだ・・・・・・・・・直ぐに匙がなくなる。お陰で食事のときに・・・・・・・・・（ブツクサ」

なんか世界の秘密に迫った気がする。
「御主人様、最近煽りすぎですから療養神殿に匙を奉納しますか？」
「そうだな・・・・・・・・・」

「ねぇ、息子。母親の前でいちゃつくって結構肝が据わってるよねぇ・・・・・・・・」
「「・・・・・・・・・・・・／／／」」

補佐見習の方は母親に絡まれていた。
親公認なんだろうけど、見ていて恥ずかしいのだろうな。

「私はあんたを人前でいちゃつく子に育てたつもりは無いよ。本当に・・・・・・・・・また周りから孫はまだかねとか式はどうするとか出来ているのかねとか・・・・・・・・・答えに困る質問されたり、冷やかされたりしてこっちが恥ずかしいじゃないの！」

本当にあの二人は連れ込み宿にでも放り込みたいもんだな。
多分、補佐見習（ヘタレ）だから、手を出さないのだろうけど。

固まったままの二人。
これ、どうすれば元に戻るのだろう？

寒さと暑さを味わった市場の衆に狼夫婦の氷だの白玉豆粥が売れた

そうな。

「「まいどありっ！」」

傷跡娘と狼夫婦（後書き）

甘い話は書いてて辛くなりますので、これから酒に逃げます。

しかし話が進まない。

傷跡娘と孤児院（前書き）

月日流れて　黒髪の兄弟弟子が叫び上げ
一つ朽ちたる子が為に　世界全てに喧嘩売る
大馬鹿野郎の黒髪よ　全てを捨てる黒髪よ
盾の男は弟子が為　戦支度を整える

一つ種火を燈したる　黒髪孤児のその叫び
六の剣は従いて　一つの盾は壁となる
世界に見捨てられた子に　聖域なるは君が為
例えば共に滅びるも　馬鹿あることを示すため

娼婦の子供逆らいて　お国が為に立ち上がる
君が思いは受け取るが　君が行い受け入れず
こぼれた網の誰かが為に　我は救いの糸となる
見事に散れと嘯きて　支援のために一人ある

黒髪本懐遂げて尚　救えぬ民の多き哉
零れ落ちたる民草を　拾いて流す涙あり
拾えず朽ちた命見て　王の胸倉捕まえて
何故に救えぬ命ある　何故に見捨てる命ある

遠くは北の最果ての　荒ぶる戦士の涙得る
黒髪血を吐く叫びにて　地を埋め尽くす軍を統べ
人喰らうこの（子の？）悲しみを　何故放置する放置する
その身削って施して　命削って道開く

王都の隅で朽ちる子を　抱いて泣くのは娼婦の子
朽ちた子見捨てる馬鹿殴り　それを認める王なじり

行き着く先は死刑台　それでも恥じることないと
娘に送る笑み一つ　男子の本懐ここにあり

娘は共に付き添うと　食断ち祈りの日々過ごす
乙女の祈りは心ある　誰かの眼に涙雨
千の責め苦の中で尚　過ち無きは娼婦の子
毅然と政（まつり）のしくじりを　声高くして問い続け

王の心を動かすは　千の言葉で足りなくば
臣の心を動かすに　万の言葉で足りなくば
一つ叫ぶは娼婦の子　その身朽ちても悔いなしと
一人死ぬ気で叫び上げ　毀れる血にて綴る文

傷跡娘は崩れおつ　その身は傷の塊で
食を断ったら直ぐ死ねる　それでも大事な男の為に
死ねるようにと祈りあげ　叶うようにと祈りあげ
祈りの乙女に涙雨　王の心も慙愧の念

至誠の罪で牢にある　叫びあげたる娼婦の子
至誠の男に殉じるは　傷跡癒えぬ優しき子
恥じ入れ王よ声上げる　国の要の長老は
娘の願い聞き入れて　娼婦の子供を取り立てる

民は知らない市井の子　民は知らない至誠の子
朽ちたる誰かのために立つ　朽ち逝く誰かを見捨てぬと
祈り捧げる傷ある子　祈り捧げる瑕なき子
誰かのために立つ男　支えるために今あると

反王国連盟が綴りし詩物語　【傷跡娘】より

因みに史実と違う部分もあるらしいが、それを判断するすべがない。

傷跡娘と孤児院

狼夫妻の甘味で満足した我等は市場を後にして孤児院に挨拶に向かう。
本当にこの傷跡娘と補佐見習は幸せ者だ。案じてくれるものが沢山居るのだから。
市場に居たときも、私も名前を知らない愚民共から案じる声と再会を喜ぶ声がしたのは驚きである。

街娼の子で私が教えるまで読み書きすら出来なかった馬鹿弟子が、多くの声に包まれるまでに成長した事を私は嬉しくもあり悲しくもある。
そして、針に従う糸のように馬鹿弟子を慕う傷跡娘という存在も奇跡の様な存在である。
彼女もまた不幸を得ていながら、それに恥じ入る事はあっても前に進むことを忘れていない。
幸運あって得た財を全て誰かのために使おうとするのは誰でも出来ることはないだろう。

この事を知る者は少ないが彼らは気にすることはなく、自分のあり方はそこだとでもいうように淡々と過ごしている。
本当にこの愛するべき馬鹿者達は私にもつける薬が見当たらない。

孤児院へと着く。

・・・・・・・・・・・・・・・えっと、この混沌とした状況はなんだろうか？

寮住まいであった料理人夫妻が孤児院で腕を振るっているし、末王女付の教師が中心とした良識派講師陣が子供達を教えている・・・・・・

おや？所在なさげな騎馬戦士と奴隷戦士が・・・・・・・・・・・・

どうしたのだろう？

「王室顧問様、行き成り奴等が来て『お前等のような者に子供達を任せてられん！』と子供達を奪い取って世話し始めたんで・・・・・・・・」

「御主人様、王宮での色々問題点があった部分で教師様が・・・・・・・・」

「そんなこともあったな。」

孤児院に入ると山盛りの料理を次々に作り上げている料理人夫妻に子供達に教えることに喜びを感じている教師達・・・・・・・・・・・・

「王室顧問様、この子達の食べっぷりは見ていて嬉しくなりますよ。山ほど作っても美味しい美味しいと食べてくれるし・・・・・・・・・・・・確かに外の私兵達が焼いた肉しか与えないわけもわかりましたけど、役立たずですね。」

それは酷いぞ、彼らは助けるために手弁当で頑張ったんだから・・・・・・・・・・・・

そして、子供達に教鞭を振るっている教師達

「嗚呼、王室顧問。この子達は貴族の馬鹿息子や能無し娘と違って覚えたいと言う意欲があっておしえる甲斐がありますよ。ぜひ私に講師をやらせてもらえませんか？」

「・・・・・・・・・・・・か、かんがえとく・・・・・・・・・・」

「絶対ですよ、本当ですね。いやぁ、教えて楽しい生徒というのは

こちらも張り合いありますねぇ・・・・・・・・・・・末王女様もまじめな部類なんでしょうが、（以下王室批判となるため王室顧問による削除）」

「き、教師殿・・・・・・・・・・危険な発言は・・・・・・・・・子供達の前では控えて・・・・・」

「そうか？王室顧問様のことだから洒落にならない部分で不敬発言とか危険思想の教育を・・・・・・・・・・」

「それは普通にしているけど、民主主義とか市民選挙制とか・・・・・・・・・・でも、王族付教師が人前で危険発言はしては問題でしょう。ただでさえ、有能な部類の人材が危険思想もちが多いのに・・・・・・・・・・・」

「王室顧問様に言われたくないですよ。」

「こんな良識派で権勢欲の無い者を捕まえて何を言うのやら・・・・・・・・・」

「「「「「嘘だ！」」」」」

「御主人様。権勢欲が無いのはただの怠け癖ですし、良識派を自称しても手段自体選ばないではないですか・・・・・・・・・・・」

「孤児姉嬢の言うとおりですな。」「寧ろ孤児姉弟が付いているから辛うじて良識派を名乗れているだけなのに・・・・・・・・・」「図々しいですね。」

酷い言われようだ・・・・・・・・・・

私等が王宮からの馬鹿の相手をしている間に

「馬鹿言うな！」「ちゃんと子供達の世話をしてから言え！」「如何して王国の機密事項を普通に教えているんだ！」「知識が偏りす

ぎているぞ！」
なんか酷い言われようだが無視無視・・・・・・・・・・
補佐見習に傷跡娘は院長に金子を渡しているようだ。
この夫婦（予定）は孤児院との接点はあまり無いのに・・・・・・・・・お人よしにも程がある。
寧ろ教師陣はこのお人好しに人並みの欲深さを教えてもらいたいものだ。

「そんな事をしたら勿体無いだろう。」「悪事の手口とか教えて備えさせるならば兎も角、堕落させることを教えるつもりは無い。」
「王室顧問様の分野でしょうに。」
五月蝿い。

そして孤児院の夕餉に誘われる。
食べ歩いていたからそれほどお腹が空いているわけでもないのだが・・・・・

その席でチビ共は五月蝿かった。補佐見習と傷跡娘の傍にまとわり付いて
キスしたのだの、子供は何時？だとか色々質問しているし・・・・・・・
前の傷跡を知っている子供達もいたから傷跡娘の顔を見て驚いていたりしている。

私のほうにも女の子がひざに座り込んでしまって
「お嫁さんにしてくれる？」
等と言うものだから、後ろで孤児姉が・・・・・・・・・・・・にらんでいる。

熱愛しているから子供等もあてられたのだろう。

傷跡娘と孤児院（後書き）

今宵は酒が切れたので今宵はこの辺で。明日も飲めるとよいなぁ・・・

傷跡娘と婚約者（前書き）

金貨六枚あればどれだけの事が出来るのだろう？
街角の食堂で食べても銅貨数枚で腹いっぱい食べることが出来て、泊りのみの安宿に泊まっても銅貨十数枚程度である。
親子４人で喰らうだけならば一月銀貨１０枚あれば事足りるし、少し贅沢した暮らしてもその倍もあれば時々外食して小奇麗な格好をさせることが出来るだろう。

実際、熟練の職人で銀貨２０枚以上貰えるとなればその者は腕が良いと見て構わない。商人でも月に銀貨５０枚売り上げるのが一人前として自活できる目安とされている。
商人の場合は稼いでも経費とか仕入れを除けば銀貨２０枚残るかどうかなのだが・・・・・・・

そういう時代に金貨６枚というのは平民の収入数年分と考えてもらえればよいだろう。因みに領地・役職なしの下級貴族が貰う貴族年金で年に金貨２枚程度。約３年分である。（実際には王宮や地方で官吏として仕えているため役料を得て収入はもっとあるのだが）
これだけの大金を一月あまりで稼ぐとなれば、本人の能力が余程優秀でないと無理であろう。補佐見習準爵は惚れた娘の為に用意しようと奮闘したのが良く判る。

彼が取った方法は有力諸侯に自らの持つ経理技術を売るということであった。
いうなれば経理の傭兵とでも言ったものであろうか？
その費用対効果は高額であったにも拘らず、雇い入れた緒家の財務環境が格段に上がったととある貴族の日記に記されていた。
でも、彼が成したのは経理の矛盾点を探して横領を探したり、明ら

かに市場価格から違っているものを指摘しただけだと言われている。どれだけ横領が横行していたんだと諸賢は思われるかもしれないが、当時は横領も程度をわきまえて業務に支障が出なければ見ぬ振りをするという暗黙の了解があったからである。実際の話、部下の飲み代とか祝い金を用意するために一部溜め込んでいたりするのは上としても黙認していたのである。溜め込んだのを掠め取る上役もいたらしいが・・・・・・・

補佐見習準爵が目に付けたのはその部分である。

正式に部下の福利厚生のために貯めていると認められたもの以外は全て問題部分として提出したのである。目端の利くものは事前に上に申請して正式な権利として認めさせたのだが、丼勘定で日頃の食事代にも使い込んでいたものはたまらない。

まぁ、上の方でも次は無いと釘を刺した程度なのだが・・・・・・・・・

それでも長期的に見て補佐見習準爵の行動は有力領主緒家の利益となるものであり祝い金とかを領主家で用意しておき、折々に下賜する形を取る事で忠誠心を上げる効果もあったと記している貴族もいた。

目端が利いて正当な権利と認めさせた者とそれ以外の者との格差に軋轢があったが、それなんかも其々の諸侯家においてここまでは良しとかと言う基準が決められていくことによって解消されるのであった。

この件が知れ渡るにつれ、諸侯の間から補佐見習準爵に依頼するのが流行となったのは良くある話である。

そうして、金を稼いだ補佐見習準爵は愛しい娘の顔(かんばせ)に最高の笑みを与えるべく温泉町の療養神殿に向かうのであった。そこでも神殿とか当地の貴族緒家の会計上の矛盾点を調べ上げて生活費だの治療費の一部だのを稼いだのは笑い話と言うか彼の仕事中毒ぶりを示す面

白い逸話である。

とある学園で提出された論文【『傷跡娘の物語』の時代での貨幣価値への考察】から一部抜粋。

傷跡娘と婚約者

補佐見習夫妻が帰ってきてから数日。王宮雀が見た傷跡娘は非常に印象的だったらしく、私の元に養女にしたいとか嫁にしたいとか愛人にしたいなどという話が出てきている。

養女とか嫁ならば良いが愛人？　ふざけるな！

これらの話は丁重にお断りさせて貰っている。孤児娘達や孤児姉にも同様の話が出ているのだが、傷跡娘に対する話が頭一つ出ている。

今話題となっている純愛物語の女主人公（ヒロイン）みたいな者だから知名度が上がっているのは否定しないが・・・・・・嫁とか愛人とかは・・・・・・・それは悪役志願か？

流石にそんな社会的自殺の手伝いなんかしたくないぞ。そもそも、そんな事したら娘さんとか嫁さんとか母親にドツキ回されてしまうぞ・・・・・・・・・・

実際、ドツキ回された事例が（一例として某国王陛下とか）幾つかあるだけに私は緒家の家庭平和のために丁重にお断りしている。養女の件だったら、名義だけ貸して欲しいと思っているので考えなくも無いのだが・・・・・・・・・・

本当に可愛い娘をもつ親というのはいらぬ騒動を抱え込むものだな。

「可愛い娘じゃなくて、お手つきにして欲しいんだけど・・・・・・・」「実際養女扱いなんだよねぇ・・・・性奴隷でも良いのだけど。」「賢者様以外の男なんて考えられないし・・・・・・・・・・」

「御主人様、私お手つき扱いなのですが・・・・・・・・・・・・」

孤児娘達は率直だし、孤児姉は・・・・・・・・・・・・うん、悪評は口にするものを全て潰しにかからないと・・・・・・・・

「普通にお手つきだと公言したほうが良いんじゃない？」「そのほうが私達に粉かける馬鹿も減るだろうし・・・・・・」「お手つきにして貰っても嬉しいし・・・・・・・」
「御主人様・・・・・・・・・・・・・」

うん、なんか私が追い詰められていない？
「王室顧問、貴様の実家の方からも孤児姉とは何時くっつくのかと問い合わせが来ているのだが・・・・・・」
宰相閣下・・・・・・・・・私の拒否権は・・・・・・・
「貴様個人の意見など聞いておらん。孤児姉は平民で孤児ながら性根がしっかりとした良き娘だ。わしが養女に迎えてよい男を見繕いたいくらいだ。本当にこんな怠け者を選ぶなんて・・・・・・・・ブツクサ」

私の件は放置して・・・・・・・・・
補佐見習と傷跡娘をどうするかだな・・・・・・・・
爵位を得ているといっても、五月蝿い王宮雀共に可愛い傷跡娘に手を出そうとする糞貴族。
手を出そうとしたのは丁重に説得して・・・・・・・・・ついでに勧誘もして・・・・・・・・・

所で其処の某諸侯家の何で贈り物を？
息子が非礼なことをした？いえいえ、可愛い娘を見てモノにしたいと思うのは当然ですよ。
少々強引で腹が立ったのは否定しませんがね。ご子息本人には少し躾を施すのは年長者としての役割と思っていますが貴家には何も致すつもりは・・・・・・・・・
えっ、本人にはきつく言っておくから解放してくれ？
まさか、傷跡娘争奪戦に立つまでの力量を付けて貰う為に協力して

いるのに？

「御主人様、流石にそれは非道というものでは・・・・・・・・・・」

「いや、棒諸侯家の御子息には恋敵と同等の力量をつけて貰うために助力しているのだが・・・・・」

「だからって補佐見習と同等の教育なんて・・・・・・・・・・・・見ていらレナいのですが。」

「まだ、其処までやっていないよ。」

「なら、如何して御子息様が空ろな目をしているのですか？」

「さぁね、根性が足りないのであろう。」

「悪かった、息子にはきつく言っておくから本当に返してくれ！」

「いえいえ、貴族の嗜みと能力を仕込むだけですから・・・・・・・・・ご心配なく。ちゃんと宰相程度ならば狙える程度に仕込むか、さもなくば・・・・・・・・・・・・・・」

「うわぁぁっぁぁ！！　むすこぉぉぉぉ！！」

その後国王陛下の勅命で返すことになった。

ちっ！　上手くすれば私の代わりに王国を切り回すのが出来るかと思ったのに・・・・・・・・・

「御主人様、無能貴族を当てにするのは・・・・・・・・・・・・」

確かに私の失策だが、一人くらいはまともな貴族が欲しいと思うのだけどね。

「だからって、貴族資質法案を上奏するのは・・・・・・・・・・・・」

「陛下・・・・・・・・・王妃様の折檻から生還したのですね。」

「酷いものだった・・・・・・・・・・・・　何度死ぬかと・・・・・・・・・太陽が黄色いし・・・・・・・・・」

「陛下おいたわしや・・・・・・・・・・」
「王室顧問、ワシを王妃に売るなんて・・・・・・・・・・お陰でもう一人王族が増えそうではないか。」
「それはおめでたい事で・・・・・・・・・・それに王妃様に対して失礼というものでしょう。我が娘達を手に入れようなんて・・・・・・・・養女とするならばまだしも・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・まさか、愛人とするという冗談がここまで酷い目にあうなんて・・・・・・・」
「それは冗談でも私は許しませんけど・・・・・・・・」
「王室顧問目が怖いのだが・・・・・・・・・」
「当たり前でしょう、陛下の有害な冗談で可愛い娘達を辱めたばかりではなく国政を滞らせて私にまで仕事を押し付けたんですから・・・・・・・・・滞った分に執務で陛下の確認が必要な部分がありますからじっくり付き合ってもらいますよ。」
「まて、まてまてまてまて・・・・・・・・・王室顧問！わしが悪かった・・・・」
「聞こえませんなぁ・・・・・・・・・・」

その日陛下の執務室からはすすり泣く声が聞こえて来たという。

宰相閣下酷い事を・・・・・・・・・
「御主人様、流石にそれは・・・・・・・・・・」
「王室顧問、人のせいにするのはよろしくないぞ。」
「賢者様に独占欲発揮するならば囲ってください。」「陛下かわいそう（棒読み」「浮気は良くないよね。浮気は・・・・・・・・・・」

「王室顧問、こっちにも口添えしてくれという声が五月蝿くて何とかしてくれない？」
ある日官僚部屋（たこべや）からそんな声が聞こえてくる。
私と官僚達は仲が良いから仲立ちを頼まれるのであろうな。

本当に傷跡娘は大変だ・・・・・・・・・
当の本人は聖域守護辺境伯家王都屋敷に連れ込まれて、我が母上の着せ替え人形と化しているのだが・・・・・・・・・補佐見習は生活費を稼ぐために官僚部屋にいるが

で、馬鹿弟子よ。うかうかしていると傷跡娘を攫われてしまうぞ・・・・・・・・
「御主人様、公然の事実なのですから、婚約したとでも言い切ったほうが・・・・・・・・」
「その手が一番か・・・・・・・・なると立会人に・・・・・・・・・・法務副長か宰相閣下か・・・・・・・・・民部長や財務長だと・・・・・・・そのまま養子に持っていかれそうだな・・・・・・・・・・」
「王室顧問、私が行いましょうか？」
「王妃様仕事は？」
「そんなもの可愛い子の為に大した事じゃないでしょう・・・・・・・・」

仕事サボりか・・・・・・・・・
「えっと、其処の近衛兵君。王妃様を丁重に執務室（しごとさせて）に御案内してあげて！」

王妃様は国を思う忠義の士に連れて行かれて仕事させられるのであった？

まぁ、二人を婚約させていったほうが楽か・・・・・・・

立会いは兄上に頼むか・・・・・・・・・・・・

兄上に頼んだら二つ返事で手伝ってくれることになった。
って、言うか母上！傷跡娘の為に何針子の群れを用意しているんだ！
そして、王妃！張り合うな！どこから聞きつけた！
「そりゃぁねぇ・・・・そんな面白い事を・・・・・・・」
えっと、聖域守護辺境伯私兵団諸君。この仕事サボっている王妃様
を丁重に王宮までお送りしてください。

「待って、私は純粋に祝いたいのよぉぉぉぉぉ！！仕事なんてイ
ヤァァァァ！！」

「賢者様、王妃様にその扱い大丈夫なの？」
「傷跡娘大丈夫だ。最近仕事サボって困ると陛下に閣下がぼやいて
いたから・・・・・困ったものだ。」
「息子、お前が言う科白ではないと思うのだがね。」
「母上、私は自分押し後とうぁか足しておりますからサボっても文
句言われる筋合いはないですよ。」
「宰相閣下がぼやいてたよ。仕事嫌がるから引退できないって。」
「だから私は暮らす分の仕事しているし文句言われる筋合いはない
ですが、爵位も返還したいのに・・・・・・・・・・・・」
「御主人様、仕事したほうが楽だと思いますが・・・・・・・・・」
「上に立つと身を整えよとか、酒飲み過ぎる名とか五月蝿いし・・・
・・・・性愛神殿に入り浸りたいのに・・・・・・・・・」
「御主人様のいい所を見ていたいのに・・・・・・・・・・」
「ほら傷跡娘（うちのよめ）ちゃんも言っているのだから良い所見せないさい！」

母上、ルビが間違ってます。

十日ほどドタバタした後、補佐見習と傷跡娘の婚約が発表された。
そのときに国王夫妻とか宰相閣下とか官僚共とかが乱入したのは笑い話。
って、いうか貴族諸氏、君達呼んでいないのになぜ来るのだ！

「そりゃ、噂の純愛を見るために。」
「補佐見習と縁を得るために・・・・・・・」「娘の付き合いだ。」
「嫁の付き合いだ。」「母の付き合いだ。」

女性陣の人気が高いな・・・・・・・・・・・（苦笑

傷跡娘と婚約者（後書き）

酒が切れたので買出しに行って来る。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9230s/

貴人聖域法と紳士諸氏の一幕

2011年10月11日13時00分発行